

学問分野別 履修要領

外国語科目／英語

英語科目は、履修者が「高校卒業程度」の英語力を備えていることを想定しています。このレベルの履修者を対象とするのが、以下の説明で〈中級〉に分類される科目です。〈基礎〉とある科目は〈中級〉に至るまでの課程を復習するものとなっています。なお、科目名に付いているⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅶの番号は、科目間の難易度の区別や履修順序などを表しているわけではありません。

次に各教科書のレベルと特徴を示しますので、受講する上での参考とし、実力に合わせた学習計画を立ててください。

「英語Ⅰ」：〈中級〉文法と作文。高校までに修得した文法のまとめを行う。普通。

「英語Ⅱ」：〈基礎〉文法、作文、リスニング、スピーキング。高校ぐらいまでに習得しておくべき英語の基礎知識の復習を行う。やや易しい。

「英語Ⅲ」：〈中級〉新聞記事、文学作品の読解。やや難解。

「英語Ⅶ」：〈中級〉評論の読解。普通。

英語が得意な人は、教科書を手に取り、自由に好きな科目を履修して下さい。英語が苦手な人は、まず「英語Ⅱ」を履修して下さい。英語の基礎的な能力をバランスよく高めることができます。そして、「英語Ⅶ」を履修して下さい。初めは、辞書を使わずに全体に目を通し、話の流れを把握しましょう。その後、注や辞書を利用し、細かいところまで教科書を精読して下さい。英語教職課程履修者は、「英語Ⅰ」を履修し、文法の知識をしっかりと習得することが望ましいと思います。英文学専攻予定者には、文学作品が中心の「英語Ⅲ」の履修を勧めます。

テキスト科目だけではなく、スクーリング（夏期・夜間・週末）と放送授業でも履修できます。主にリーディングとライティングに分かれますが、担当者によっては、リスニングやスピーキングなども含めた総合的な訓練を目指す授業もあります。言葉はコミュニケーションのためのものです。スクーリングでは、クラスメートや教員と積極的にやりとりをする中で、さらなる英語力の向上を目指して下さい。

言葉の学習には、「習う」側面と「慣れる」側面の両方があります。教科書に向かい、思い悩みながら取り組んで、習うことと合わせて、色々な英語に多く触れ、ひたすら慣れることも大切です。習うことだけに捕われるとつまずいてしまうかもしれません。慣れることにも心がけて、焦らずじっくりと時間をかけて取り組んで下さい。

英語の学び方

迫村純男（名誉教授）

●5000ページ読む

どの言語を学ぶ場合も同じでしょうが、目標言語を大量にインプットすることと語彙を増やすことが上達への近道だと思います。名誉教授の佐藤喬先生は、新年度最初の授業で次のように学生にショックを与えていました。君達、英語をすらすら読むことができるようになるにはどうしたらいいか。単純なことである。5000ページ読めばよろしい。ただし、5000ページと言っても（と、ここでおもむろに懐から厚手の洋書を取り出し）、この小さな活字で5000ページだぞ。君達がこれまでに読んだ量をこの活字で換算してみようか。そうだな、中学校の教科書が20ページ、高校の教科書が50ページ、副読本を含めると、まあ、これまでに読んだ量はせいぜい100ページだな。まだこれだけしか読んでいないのに、英語ができない、どうしたらうまくなるでしょうなどと言うのはちゃんちゃらおかしい。まずだまされたと思って5000ページ読むことです。というわけですが、実際には、最初の500ページくらいまでが苦痛だという気がします。それを乗り越えれば語彙も増え、加速度がついてきます。

●苦難の500ページ

やみくもにページをめくるのではなく、正しく意味を理解しながら最初の500ページを読破するには、文法がわかっていること、きちんと辞書を引くことが重要でしょう。まず中学校までの文法事項をきっちり覚えましょう。高等学校1年の教科書の最初の1、2課は中学校の復習、高校への橋渡しの課ですから、このテキストが問題なく読めれば合格です。引っかかるころがあれば、中学英語総復習の練習問題をやってみてください。単語がやさしく短時間ですませられるので、自分の弱点を発見できるでしょう。

中学の文法をマスターしたら、高校の文法にチャレンジです。高校の文法事項では、what、if/whether の節、強調構文、関係代名詞・関係副詞の応用、過去完了形、仮定法、分詞構文、話法などが新出事項で重要ですが、難しい動詞が多くなり、動詞と不定詞、動名詞、前置詞句との関係を個々に覚えることが必要になります。中学校の英文と大きく異なるのは、文章の長さです。主語や目的語の名詞に関係代名詞、不定詞、現在分詞、過去分詞などがついて修飾され文章全体が長くなります。状況説明の副詞表現が増え、接続詞や仮主語の it が多用され、文章が複雑になります。長くなった文の構造を把握して、主語、目的語、補語といった基本的な文法関係を読み取る訓練をしましょう。

●辞書に親しむ

最初の500ページ読破に辞書は欠かせません。文法の説明と例文の豊富な、英和中辞典が多数出ていますから、読みやすく使いやすと思ったものを選んでください。助動詞や前置詞、接続詞といった機能語の説明が詳しいものの方がいいでしょう。機能語や特に易しい単語は別ですが、辞書を引いたら、余白にマークをしておくと、同じ

単語を何度引いたかがわかります。もしも10回以上引いていたら、その単語は自分と相性が悪くてなかなか覚えられない単語なのです。そういう単語はポストイットにでも書いて洗面所に貼っておくと、いつも目にするのですぐに覚えられます。単語帳を作ることに時間をかけるよりも、辞書を何度も引いてマークし、覚えられない単語を拾い出すようにするほうが効率的です。

テキストの意味がうまくとれない場合は、知っている単語でも辞書を引いてみましょう。特殊な意味で使われていたり、イディオムを構成しているかもしれません。テキストを精読しなければならないときは、念のため辞書を引くという態度が要求されます。

「会議」を表す言葉も meeting、talk、convention、rally、conference など色々あります。英和辞典では重要な単語にはこういった類語に関する情報がまとめてあるので読むようにしましょう。また、語源に関する説明が書かれていることもありますから、それも読んでおくと役に立ちます。目的の単語を引いたら、その前後をちらちら眺める癖をつけましょう。接頭辞や接尾辞といった語形成に関する知識が知らないうちについてきます。辞書を何度も引き、辞書に盛り込まれている様々な情報を活用することが語彙を増やすことに直結します。

●精読と速読のコンビネーション

通信の訳読用テキストは別として、精読用のテキストには自分のレベルより少し上のもので興味がもてそうなものを読みましょう。ただし、1 ページに知らない単語が20個以上あるようだとなかなか読み進めないで、途中で投げ出してしまふことになるでしょう。読んでいくうちに辞書を引く回数が少なくなるというテキストが理想的です。精読で始めて速読で終わるというわけです。

速読用のテキストもレベル別に数多く出ていますから、すらすら読み通すという自信をつけるために読んでみてもいいでしょう。高いレベルのものとしては、日本の文学作品を英訳した文庫本もたくさん出版されています。速読の練習をする場合は、単語を一つ一つ追っていくのではなく、パラグラフ単位で読む努力をしましょう。日本語でもたとえば新書を大急ぎで読まなくてはいけないような場合は、見出しやキーワードに目を走らせ、ページもあちこち前後しながら読んでいくでしょう。英語でそういうことができるようになったら最終段階です。

●インプットを増やすためのリスニング

最近では二か国語放送や衛星放送も普及して、生の英語に触れる機会が飛躍的に増えました。耳からのインプットとして大いに活用しましょう。ただし準備が必要です。普段から単語を正しい発音で声に出して言う練習をすることです。正しい音のイメージをもっていないと、知っている単語なのに聴き取ることができません。逆に、発音の練習をしていると、スペリングと発音の関係がわかってくるので、耳で聴いた知らない単語を辞書で見当をつけて引くことができるようになります。

単語がつながった場合の発音としては特に不完全破裂という現象が大切です。p、b、t、d、k、g の破裂音は破裂音や m、n の前では、時間の経過はありますが発音されなくなります。top person をトップパースンではなくトッ・パースンのように発音するようにしていると聴き取りもできるようになります。また強調が置かれな人称代名詞の he、his、her などはいー、イズ、アーのように [h] の音が脱落した弱形で発音されることに注意しましょう。

歌詞を覚えたり、好きな映画のビデオを見ることは楽しみながら勉強できるという点で最適です。特に、ビデオはジェスチャーや風俗習慣の知識も自然に覚えられます。「基礎英語」や初級の英会話などのラジオ講座を利用するのも良い方法です。集中してリスニングの訓練をしたい場合は、テキストの録音テープが多数ありますから、徹底的に反復して聴くといいでしょう。

transcription（書き取り）は文法、語彙、リスニングの総合演習として、とても勉強になります。

●場数を踏んで恥をかくアウトプット

何も無いところから発信することは不可能です。「読む」「聞く」のインプットを増やして、「書く」「話す」のモデルとなる表現をできるだけ多く貯め込む努力をしなければなりません。模倣から始めましょう。500個くらいの基本的な例文を覚えてしまえば応用がきくようになります。自分で言えない単語や表現を発見して意識しておくことも大切です。英作文の練習問題をしなくても、普段の生活で目に入る情景や事物を英語でどう表現するか考えてみると、問題点が簡単に見つかります。それを意識していると、テキストを読んだり英語を聴いたりしたときに、ああこう言えばいいのだと合点がいくでしょう。

積極的に調べたい場合は和英辞典を引くことになります。和英辞典は例文が豊富なものを使いましょう。特に、動詞の表現は和英辞典で調べた候補を英和辞典で引いて、もっともふさわしいものを選ぶという二段構えでいくと確実です。語彙が増えてくれば、表現したい内容にぴたりとあう英語を使うことができるようになりますでしょうが、それまでは別の易しい表現に言い換える、いわゆる和文和訳という工夫をするといいでしょう。特に日本語独特の言い回しは、それにとらわれず内容をストレートに表現してみましょう。

機会があれば実際にネイティブスピーカーと話してみましょう。間違えるのは当たり前ですから恥を感じる必要はありません。訂正されたり、間違いに気づいたことを覚えていくという経験の積み重ねが大切です。

●我慢、我慢

何となく英語ができるようになったという人に会ったことはありません。我慢して地道にインプットを増やす

以外の方法はないと思います。英語は例外が多く、マスターするのに厄介な言葉だとも言われます。冠詞や時制などを間違えることはしょっちゅうですし、書いたものをネイティブスピーカーに訂正されるたびに新発見があります。道は果てしなく遠いですが、途中の峠はたくさんあります。手近の峠を目標にして、到達するたびに自分を褒めてやりましょう。

参考文献

『三色旗』第541号（1993年4月号）「特集・英語の学び方」

（『三色旗』第576号（1996年3月刊）より転用）

英語の学び方—いますぐ始めよう！ メディア活用術—

篠原俊吾（法学部教授）

1 メディアを活用しよう

多くのみなさんは、「英語をもう一度学び直したい」「いつかは、字幕なしで外国映画を理解できるようになりたい」といった外国語学習に対する目標をお持ちだと思います。しかしながら、同時に多くの方が、日々の仕事に追われ、時間がない、お金がない、帰宅すれば疲労困憊で勉強する気になれないなど、さまざまな事情を抱えていらっしゃるのではないのでしょうか。ここでは、日頃お嘆きのみなさんに向けて、お手軽かつ簡単メディア活用術をご紹介します。① 時間をかけない、② お金をかけない、③ 場所を選ばないという三つの選考基準に基づいて、いくつかのメディアが提供する英語番組および市販の教材の中から、主としてインプットに役に立ちそうなコンテンツを以下ご紹介します。

今回は、ニュースを中心にコンテンツを選考しました。理由は簡単です。ニュースは、明瞭な発音であり、言葉の省略が少ないからです。初学者にとって省略や音のくずれは、最大の敵です。とりわけ、家族同士や近しい友人の間で交わされる会話は、お互いが多くの知識を共有しているため、省略も多く、ある程度熟達した人ですら聴き取りに困難を伴います。ニュースはその点では全くと言っていいほど心配する必要はありません。

もしニュースを聴く際に内容を選択することが可能なら、なるべく事情を良く知っている話題を選んだ方が良いでしょう。例えば、国内のニュースの英語版のようにすでに内容をある程度理解していて、映像の付いているコンテンツであれば申し分ないでしょう。私たちは英語が理解できないと、自分に非がある（つまり、リスニング能力が十分でない）と思い、自信をなくしたりしますが、実は、ニュースで取り上げられているトピックに関する文化的背景が理解できていないことが原因であることがしばしばあります。もちろん、単語がすべて理解できていればそれに越したことはないのですが、英語が多少聴き取れなくとも、推測を付けて聴く習慣さえついていれば、文脈から判断して理解する手助けになると思います。やがて英語がフルセンテンスとは言わないまでも、ある程度の固まりになって聴こえてくるようになったり、全部を一字一句漏らさず聴き取ろうとしなくても、どこを注意して聴いたら良いのか、聴き取りのポイントが分かるようになってきます。

ニュース英語に関して強いて問題点を挙げるとすれば、スピードと語彙力です。しかしながら、ニュースになるような事柄は、国際会議、事件、事故等かなり限られていますので、最初の数カ月は多少語彙や表現の理解に困難を伴うかもしれませんが、しばらく我慢すると同じような語彙、同じような表現のパターンが反復されるため、スピードにも慣れてくると相まって、原稿が伝えようとしていることがある程度予測可能になってきます。では、以下、コンテンツの紹介に移しましょう（2019年2月現在の情報です。各番組の放送時間・内容は今後変更の可能性があります）。

2 テレビ・ウェブ連動型

(1) 「ABC ニュースシャワー」(BS【5分】、特設サイトあり)

NHK BS の究極の5分番組。アメリカ ABC News で放送された短い英語のニュースが、英語の字幕付きで一回、日本語の字幕付きで一回、字幕なしで一回、最後にもう一度英語の字幕付きで流れます。さらに、ニュースの中で出てきたキーワード解説も付いています。BS を視聴できない方、見逃してしまった方は、特設ウェブサイトにも最新三ヵ月分のアーカイブス（音声、映像、文字情報）が放送順におかれていきますので、24時間いつでも勉強可能です。

(2) 「CNN Student News」(BS【10分】、特設サイトあり)

アメリカ中高校生向けにやさしくニュースを解説している番組。語彙が難しくないのも、慣れればスクリプトなしでも視聴可能です。CNN ウェブサイト上でも、同じ番組が視聴できます。BS の特徴は、日本語の音声があることです。CNN が設けている CNN 10 というサイトで、最新のニュースとアーカイブス（音声、映像、キャプションによる文字情報）を見ることができます。語学番組ではないので、語彙情報や解説はないですが、英語が比較的やさしいので、毎日新しい生の情報に触れるには最適です。

(3) 「TED」(ウェブサイト、【10分から20分】程度)

アメリカの非営利団体が主催するトークイベントで行われた世界の有名なプレゼンテーションを集めたサイト。現在もアーカイブスは増え続け、一人10分から20分程度のスピーチが、軽く1000以上ずらっと並んでいます。設定によっては英語又は日本語のスクリプトを出しながらの視聴も可能です。マイクロソフト会長ビル・ゲイツ、元米国副大統領アル・ゴア、白熱教室でおなじみのマイケル・サンデルをはじめとして日本でも有名な人がたく

さん出演しています。英語は、スピーチにもよりますが、全体的にややハイレベルです。

3 ラジオ

(1) 高校生から始める「現代英語」(NHK 第二放送【15分】週2回)

ニュース英語入門番組です。下記の(2)や2の(2)で紹介した CNN Student News ではまだついていけない方はここから始められると良いかと思います。

(2) 「世界へ発信！ニュースで英語術」(NHK 第二放送【5分】週5回)

以前 E テレでやっていた「ニュースで英会話」という番組（現在は放送終了）の内容を引き継いだ番組です。「ニュースで英会話」同様、国内外のタイムリーなニュースをいち早く提供してくれるということが最大の特徴です。テキストはありません。この番組のウェブサイトにも英語、日本語、ボキャブラリー、映像資料など必要な情報がすべてアップされます。放送時間が5分という短時間であるという点、ほぼ毎日タイムリーなニュースを解説付きで聴くことができるという点で、ABC News Shower 同様、究極の番組の一つと言えます。これが少し難しいと思う方は、上記の(1)で少しスピードやボキャブラリーに慣れてから、取り組んでみるのもいいかもしれません。内容が把握できたら、音読してみることをお勧めします。

(3) 「入門ビジネス英語」「実践ビジネス英語」(NHK 第二放送【各15分】入門：週2回、実践：週3回)

ビジネスの話題に興味のある方にお勧めです。後者はややハイレベルです。この番組をまとめた CD 付きのテキストがいくつも書店で販売されていますが、これらはどれもお勧めです。後者でちょっと難しいと感じた方は、入門編から始められるのも良いかと思います。

(4) エンジョイ・シンプル・イングリッシュ (NHK 第二放送【5分】週5回)

NHK の語学番組全般、どれを聴いても勉強になるのですが、新しい単語が次々出てきて、そこで挫折という方も多いかと思います。この番組は、極力平易な英語を用いて、気軽に毎日5分間楽しく英語を聴くということを目指しています。語彙力強化の前に、まずは、楽しく、沢山の英語を聴くことに慣れることを目標にしている方にはこの番組は良い出発点になると思います。(1)を継続する自信のない方は、ここから始めてはいかがでしょうか。(2)同様、内容把握できたら音読してみることをお勧めします。

4 お役立ちウェブサイト

(1) 「The Japan Times ST」

Japan Times の学生版、Student Times のウェブサイトです。学生向けにリライトされた平易な短いニュース、単語情報、音声も付いています。一つ一つの記事が短いので時間のない人にお勧めです。アーカイブスも充実しており、24時間、いつでも勉強ができます。

(2) NHK WORLD-JAPAN

3の(2)でご紹介した「世界へ発信！ニュースで英語術」で用いられているニュースのデータ元です。以下の6の日本を紹介でも登場しますが、NHK WORLD-JAPAN とは、NHK が国内の情報を海外に向けて発信している機関です。NHK WORLD-JAPAN にはウェブサイトがあり、「NHK, WORLD, NEWS」で検索すると、このサイトのニュースのトップページが閲覧でき、ここで NHK WORLD が毎日配信している最新のニュースの映像と文字情報を見ることができます。3の(2)の「世界へ発信！ニュースで英語術」のサイトでは、ボキャブラリー、日本語訳が提供され、番組内でも日本語の詳しい解説がありますが、それほど詳しい解説の必要はない方、または、解説なしでトライしてみたいという方にはこちらがお勧めです。これもウェブサイトなので、時間を選ばず、いつでも勉強可能です。

5 ポッドキャスト

通勤通学時にわずかな時間を利用して勉強をするにはこれが一番です。先ほどご紹介した CNN Student News、TED Talk に加え、NHK ワールドが毎日配信している NHK WORLD JAPAN News (日本のニュースの英語版、毎日2回更新) もここにあります。ポッドキャストにある英語教材は、難易度もさまざまです。みなさんで実際にお聴きになられてどの番組なら継続できそうかご確認ください。とにかく気軽に楽しく少しでも英語に触れたいという方には、「バイリンガルニュース」をお勧めします(隔週配信で、日本語と英語両方でニュースが読めます)。アカデミックとは言えない内容も一部含まれますが、英語があまり得意でない方でも飽きずに楽しく英語に触れることができるのではないかと思います。少し調子が出てきたら、ニュース番組ではありませんが、English as a Second Language (ESL)、さらに英語をもう少し本格的にやりたい方は BBC の The English We Speak、同じく BBC の 6 Minute English もお勧めです。これら2つの番組に関しては、スクリプトが以下の BBC のサイトに掲載されていますので確認が可能です。

The English We Speak :

<http://www.bbc.co.uk/learningenglish/features/the-english-we-speak>

6 Minute English :

<http://www.bbc.co.uk/learningenglish/features/6-minute-english>

上記のコンテンツで物足りない方には、例えば、既にご紹介した CNN Student News、NHK WORLD JAPAN News に加えて、Learn English Broadcast-Voice of America (非ネイティブのための英語ニュース。少し英語の原稿を読むスピードが遅いです。)や BBC の Global News などがお勧めです。

6 日本を紹介

ある程度リスニング力が向上してきたら、オリンピックに向けて、日本を紹介する番組に挑戦してみてもいいのではないでしょうか。NHKは海外に向けて国内の情報を発信する番組を放送していますが、その一部が地上波、衛星放送で視聴可能です。現在見られる番組一覧は、以下のWebサイトまたは、「国内で見られる番組 NHKワールドTV」で検索すると確認できます (<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/ja/world/program/>)。ピーター・バラカンさんの「Japanology Plus」やクリス・ペプラーさんの「Tokyo Eye2020」などを含め、日本の最新情報、伝統芸能、旅、ファッション、音楽などさまざまなジャンルが用意されています。大半の番組は、字幕がついていないので中級、上級者向けです。

7 見たことのない英語は書かない、聞いたことのない英語は話さない

今回は、多くのインプット型のコンテンツをご紹介しましたが、ことばの本来の役割がコミュニケーションであるとすれば、大量なインプットを行うだけでは不十分です。プレゼンテーション、エッセイ、メールといった形で、自分の意見をアウトプットすることが重視されるようになった昨今では、自ら表現して伝えていく力を身に付けていくことはますます重要になってくるでしょう。今回インプット系のものを多くご紹介しましたが、私はインプットとアウトプットは補完的なものであるというよりは、アウトプットのためのインプットであるべきだと思っています。

以前、私の尊敬するある先生が英語の論文指導をする際、「見たことのない英語は書かないこと」と学生さんにおっしゃっているというお話をうかがいました。では、「見たことのある英語」とはどんな英語でしょうか。それは、言うまでもなく、私たちが英語を学習し始めた時以来、大量に提供されてきた（比較的）良質な英語です。みなさんは、日頃、どの程度まで注意深く、英語をご覧になっているのでしょうか。学習した内容は、運用できるようにまで繰り返し練習し、身体の一部のようにになっているのでしょうか。

英語に限らず、ものごとの上達のためには、良いお手本の模倣が不可欠です。英語について言えば、カラオケ同様、音源をよく聴いて、まねをすることが何よりも重要です。まずは、できうる限り、見本に忠実に、自分で音を出してみましょう。インプットの際には必ずCDなどの音声をお手本に、繰り返し音読することをお勧めします。中途半端な模倣は、好ましくありません。できうる限り忠実に再現することが上達の近道です。まずは、今回ご紹介したコンテンツを活用して、簡単なフレーズで良いので上手な表現方法をひたすらまねることから始めてみてください（もし、時間に余裕があれば、コンテンツで聴きとった英語を書いてみることをお勧めします）。

英語の難しいところは、単語を文法規則に則って並べただけでは「英語らしさ」がでないところです。インプットしながら表現の型を注意深く観察し、しっかり頭に入れていけば、みなさんの英語は、徐々に、「見たことのある英語」、すなわち、伝わる英語になっていくと思います。

（『三色旗』第787号（2013年10月刊）より転用、2019年4月1日加筆修正）

外国語科目／ドイツ語

ドイツ語未習者は、まず最初に初級前期・初級後期の単位をスクーリングで修得することを目標とするとよいでしょう。ドイツ語のような言語は文法体系の概観ができていると、その後の独習が楽になるからです。また、組み合わせとしては、初級前期または初級後期のみで卒業単位には足りる場合でも、スクーリングの共通テキストについては初級前期・初級後期を通じて学習し、言語構造を概観してから次に進むことが望ましいと思います。

時間的な余裕がある人、または当面スクーリングに出席するのが難しい人は、放送授業により初級前期・初級後期のいずれかを修得することもよいでしょう。

しかしいずれの場合でも、完全な未習者が初級前期よりも先に初級後期を、あるいは初級前期と初級後期を並行して履修することは勧められません。

スクーリング中級、上級の授業には担当者によってさまざまなヴァリエーションがあり、必ずしも配本テキスト第三部あるいは第四部の内容に類似の授業が行われるわけではありません。教室での対話を通じて学習を深めるためにも、講義要綱を熟読した上で、ぜひいろいろな授業を積極的に履修して下さるよう望みます。

ドイツ語ってどんな言葉？—ドイツ語学習のすすめ—

斎藤太郎（文学部教授）

この文章を読んでおられるのは、これから初めてドイツ語を学ぼうとしている方、あるいはどの外国語を学ぼうか迷っておられる方でしょうか。ここでは、そういった方々に、ドイツ語というのはどのような言葉か、ドイツ語を学ぶとどのようなメリットがあるのか、そしてドイツ語を学ぶ上で注意すべき点はなにか、といったことを手短かに説明したいと思います。

そもそも、ドイツ語が使われている国はどこでしょう。考えるまでもなく最初に頭に浮かぶのが、ドイツ（Deutschland）でしょう。正式名称はドイツ連邦共和国（Bundesrepublik Deutschland）です。第二次大

戦後ドイツは長らく西ドイツと東ドイツに分かれていましたが、1990年に統一されて今日の形になったことは皆さんご存じのとおりです。正式名は西ドイツがドイツ連邦共和国、東ドイツはドイツ民主主義共和国（Deutsche Demokratische Republik）ですから、要するにかつての西ドイツが東ドイツを吸収することで統一がなされたと言っていいでしょう。ドイツの人口は約8200万人で、ヨーロッパで最も人口の多い国です。ちなみに第2位のフランスは人口約6300万人、第3位のイギリスは約6200万人です（2015年度統計）。

さて、ドイツに次いでドイツ語母語話者が多いのがオーストリア（Österreich）です。ヨーロッパ中央部に位置するドイツと国境を接して南東に位置するオーストリアは、かつてはハプスブルク王家のもとヨーロッパ有数の版図を誇る大国でした。しかし、20世紀の二度の大戦を経た今日では人口870万人足らずの中堅国家となっています。このオーストリアとドイツは、かつてはともに神聖ローマ帝国を構成する国でしたし、言語的にもともにドイツ語を使う国なので、私たち日本人からすると、なぜ現在別々の国に分かれているのか不思議な感じがします。このあたりの歴史的背景も調べてみると面白いかもしれません。

ドイツ語を話す人々が住んでいる代表的な国の最後が、オーストリアの西隣に位置するスイス（Schweiz）です。ただし、ドイツ、オーストリアでは公用語はドイツ語のみですが、多言語国家スイスの公用語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4種類です。スイスの人口約800万人のうち、一番多いのがドイツ語を話す人の割合で64%、次がフランス語の20%、次がイタリア語で6.5%、一番少ないロマンシュ語はわずかに0.5%です。

以上、ドイツ、オーストリア、スイスの3カ国がドイツ語を話す主な国ですが、この他にもドイツ語を公用語とする国があります。ヨーロッパの地図でオーストリアとスイスの国境あたりをよく見ると、リヒテンシュタインという小国の存在に気がきます。リヒテンシュタインは日本の小豆島と同じくらいの面積で、人口わずか6万人の小さな国ですが、この国の国語もドイツ語です。また、ドイツ・フランス・ベルギーに囲まれた人口49万人の小国ルクセンブルクでは、ルクセンブルク語、フランス語とならんでドイツ語が公用語になっています。さらに、スイスと同じような多言語国家ベルギーにおいてもドイツ語はフラマン語、フランス語とならんで公用語の地位を持っています。その他にも、ドイツ語を話す住民が住む地域として有名なものに、フランスとドイツの国境に位置するアルザス・ロレーヌ地方やオーストリアと国境を接するイタリアの南チロル地方などがあります。

イギリス、フランス、スペインは、かつて広大な植民地を持っていたため、今日でもアフリカや北米や南米には英語、スペイン語、フランス語を話す住民が広く分布しています。これに対し、ドイツ・オーストリアは植民地獲得競争に出遅れたこともあり、ドイツ語母語話者の分布は中欧に限定されていますが、それでもその数は合計すると約1億人近くに上ります。これは世界のさまざまな言語の話者と比べてどの程度に位置するのでしょうか。

ある言語を母語とする人がどのくらいいるかというのは正確には数えられないので、調査によって数字は多少異なります。でも間違いなく世界で一番多くの話し手を持つ言語はというと……さて、何でしょう。英語ではありません。そうです。中国語です。中国には13億近くの人がいるからです。その次が英語（約5億）で、あとはヒンディ語、スペイン語、アラビア語、ベンガル語、ポルトガル語、ロシア語などが続きます。日本語は1億3千万人で9位、ドイツ語は1億人弱の話し手でこれに続く10位となります。あとは、フランス語、イタリア語などが続きます。

単純に数の点だけで言えばドイツ語の位置は世界で10位ということですが、ある言語の重要性はその話し手の数だけでは測れません。日本は明治以降近代化の道を歩みましたが、その日本の大学および高等学校では戦前、英語に次ぐ重要な外国語として、フランス語と並んでドイツ語の教育がおこなわれてきました。そして戦後もその構造は大きく変わってはいません。これはドイツ語が持っていた学問言語、文化言語としての重要性によるものと言えるでしょう。もちろん、ドイツの政治的な地位もドイツ語の重要性を増す上で大きな意味を持ったことは言うまでもありません。

皆さんもご存じのように、戦後のヨーロッパでは経済的・政治的な統合が着々と進んできました。その成果が1992年のマーストリヒト条約によって発効した欧州共同体（EU）ですが、フランスとともにこの欧州統合の牽引車となってきたのがドイツでした。実際、EUはその中心に強力な経済力を有するドイツの存在なくしては成立することができませんでした。それを示すように、欧州中央銀行の本店はドイツ金融の中心地であるフランクフルトに置かれています。こうしたドイツの経済的重要性を反映してか、現在も加盟国を増やしつつあるEU諸国ではドイツ語学習熱が非常に高まっています。

また、ドイツと日本はどちらも軍国主義体制のもと第二次大戦に敗戦し、壊滅的な状態から復興をなしとげた国という共通点があるため、戦後処理の問いに直面するとき、しばしばドイツの対応が参照対象とされます。さらに、近年世界的に焦眉の急となっている環境問題に関しても、ドイツの先進的な取り組みは注目の的になっています。

したがって、ドイツ語を学ぶことによって、ドイツ語で発信される情報にアクセスできるようになれば、こうした今日のテーマに関してさまざまなヒントを手にすることができるようになります。その意味で、ドイツ語学習がもたらす「実利的な」メリットは大きいと言えるでしょう。しかし、それ以上にドイツ語学習を魅力的なものにしてくれるのは、ドイツ語を学ぶことによってアプローチできるようになる、ドイツ語圏の膨大な文化遺産ではないでしょうか。

例えば哲学・思想の分野では、ライプニッツ、カント、シェリング、フィヒテ、ヘーゲル、ショーペンハウアー、ニーチェ、ハイデッガー、マックス・ヴェーバー、フロイト、ベンヤミン、アーレント等々綺羅星のごとき人たちが思い浮かびます。音楽好きの方ならすぐに名前が挙がるのが、バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァ

ルト、ベートーヴェン、シューベルト、メンデルスゾーン、シューマン、ブラームス、ワーグナー、マーラー、ブルックナー、シェーンベルク、ベルク、R. シュトラウス等々でしょう。ドイツ音楽なくしてヨーロッパ近代音楽史はありえないほどです。文学の分野でも、ゲーテ、シラー、クライスト、ノヴァーリス、ヘルダーリン、グリム兄弟、ホフマン、シュトルム、トーマス・マン、ヘッセ、カフカ、ケストナー、ミヒャエル・エンデ、グラスなど私たちになじみ深い名前が無数に挙げられます。ドイツ語を学び続ければ、やがてはこうした人々の肉声にじかに触れられるようになるわけです。そのことをぜひ学習の励みにしていただきたいと思います。

さて、今度はドイツ語の言語学的な位置について見てみましょう。ドイツ語は言語の系統別に分類した場合、インド・ヨーロッパ語族のなかのゲルマン語のひとつに位置付けられます。世界の言語はいくつかの言語グループに分けることができるのですが、そのなかの最大派閥がインド・ヨーロッパ語族です。このインド・ヨーロッパ語族はさらにいくつかのグループに分かれますが、そのうちヨーロッパの言語の一部に限って紹介すれば、まずスラブ語派が挙げられます。これにはロシア語、チェコ語、スロバキア語、ポーランド語など、東ヨーロッパの国々の言葉が含まれます。次がロマンス語派です。フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語などいわゆるラテン系の言語がこのロマンス語派です。最後にゲルマン語派ですが、このゲルマン語派はさらに東ゲルマン語群、北ゲルマン語群、西ゲルマン語群の3つのグループに分かれます。東ゲルマン語群に該当するのは、今ではもう死滅してしまった東ゴート語です。北ゲルマン語群に属するのは、ノルウェー語、スウェーデン語、デンマーク語といった北欧の言語です。そして最後の西ゲルマン語群に属するのが、英語、オランダ語、そしてドイツ語です。整理すると、英語、オランダ語、ドイツ語は、インド・ヨーロッパ語族のうちの同じゲルマン語派、そのゲルマン語派のなかの同じ西ゲルマン語に所属する言語ということになります。

こう考えてみれば分かるように、皆さんがかつて学んだ英語とドイツ語は極めて近い関係にあります。極端な言い方をすれば、英語・ドイツ語・オランダ語は1つの言語の3つの方言のような関係と言ってもいいぐらいです。実際、これからドイツ語の文法や語彙を学んでゆく過程で、英語との類似点には何度も気付かされることになるでしょう。

ひとつ実例を見てみましょう。試しに次のドイツ語の単語を眺めてみてください。

sinken singen finden bringen fallen

ドイツ語に接するのが初めてという方でも、どこか見覚えがあるはずです。-en を取ってみると、sink、sing、find、bring、fall となり、すでに英語で知っている動詞であることが分かるでしょう。同時に、ドイツ語の動詞には-en という語尾が付くことも分かるはずです。さて、次の例はどうでしょう。

sitzen setzen helfen danken lernen

同じように-en を取ってみると sitz、setz、helf、dank、lern となります。この形のままでの英語の動詞はありませんが、子音を少しいじって sitz と setz の tz を t に置き換えれば sit、set が、dank の d を th に変えれば thank が、helf の f を p に変えれば help という形が導きだせます。また、lern の e を ea に変えれば learn というおなじみの単語が姿をあらわします。この、子音を少しいじるとドイツ語の単語と英語の単語が同じになる、というのがミソです。というのは、本来同じ言語であった西ゲルマン語が、英語、オランダ語とドイツ語に枝分かれした際に、ドイツ語だけ子音に変化が生じた、という歴史的な事情があるためです（これを「子音推移」と言います）。その結果、この3つの言語においてはきわめて規則的な子音の対応関係を認めることができます。英語とドイツ語を比較対照してこの対応関係を確認してみます。

- ・英語の v → ドイツ語の b
英 have → 独 haben、英 love → 独 lieben、英 live → 独 leben
- ・英語の th → ドイツ語の d
英 think → 独 denken、英 thing → 独 Ding、英 through → 独 durch
- ・英語の d → ドイツ語の t
英 day → 独 Tag、英 do → 独 tun、英 dance → 独 Tanz
- ・英語の k → ドイツ語の ch
英 book → 独 Buch、英 break → 独 brechen、英 make → 独 machen
- ・英語の y → ドイツ語の g
英 say → 独 sagen、英 day → 独 Tag、英 lay → 独 legen
- ・母音の前では英語の p → ドイツ語の pf
英 apple → 独 Apfel、英 pound → 独 Pfund、英 penny → 独 Pfennig
- ・母音の後では英語の p → ドイツ語の ff
英 ship → 独 Schiff、英 open → 独 offen、英 ape → 独 Affe
- ・母音の後では英語の t → ドイツ語の s、ss、ß
英 water → 独 Wasser、英 street → 独 Straße、英 foot → 独 Fuß
- ・母音の前では英語の t → ドイツ語の z
英 ten → 独 zehn、英 two → 独 zwei、英 tongue → 独 Zunge

こうした対応関係はまだ他にも挙げることができます。英語住民が住むブリテン島が一時フランス語を話すノルマン人に支配されたこともあって、英語にはロマンス語系の語彙が多く流入し、言語的にも独自の発展を遂げるようになりました。ですから、必ずしもドイツ語との厳密な対応関係が完全に保持されているわけではありませんが、衣食住に関わる日常語はほとんどゲルマン系のもので占められています。したがって、ドイツ語初習者

が最初に学ばなければならない基礎語彙はおおむね英語の知識を援用することで楽に習得することができるのです。

「ドイツ語の易しさ」を英語との関連で述べてきましたが、もうひとつ英語と大きく違っていて、しかも日本人の学習者にとって非常に有利に働く点を紹介しましょう。それは発音です。中学・高校で英語を学んできて、発音に苦労した経験のない方は少ないのではないのでしょうか。英語には日本語にはない子音や母音が数多くあるだけでなく、書かれていても発音しない文字などがあるため、綴りを見ただけで正確に発音するのがきわめて難しい言語です。ところがドイツ語の場合、多少の例外はあるものの使われる子音・母音はほぼ日本語のそれと同じであり、しかも綴りと実際の発音が正確に対応しているので、いったん発音のルール（これもさほど難しくありません）を飲み込んでしまえば、初めて目にする単語でもきちんと発音することができるのです。ドイツ語の単語は基本的に綴りの通りローマ字読みをするだけでよく、あとは日本語にはない若干の子音と母音を練習すれば十分ドイツ人が聞いて理解できる発音ができるようになります。少なからぬ初学者用辞書が発音記号の代わりにカタカナで発音表記をしていることから、日本語とドイツ語の発音が持つ近さが分かるでしょう（とはいえ、カナが100%ドイツ語の発音を再現できるわけではないので、カナによる発音表記を過大に信頼するのも考えものですが）。

さて、ここまで「ドイツ語の易しさ」について述べてきましたが、他方で「ドイツ語は難しい」という風説も根強く存在します。そしてそれは根拠のないことではありません。というのも、ためにドイツ語の教科書や参考書をパラパラめくってみれば分かるように、ドイツ語の文法書といえば、変化表に次ぐ変化表という構成になっていて、覚えなければならない文法規則が多数あるからです。英語の学習経験者が一番とまどうところがこの部分でしょう。英語と違ってドイツ語では、動詞や名詞（に付随する冠詞類）・代名詞がその文法的な役割に応じて大きく語形を変化させます。例えば、同じ「学ぶ」という意味の動詞 *lernen* が、「私は学ぶ」なら *ich lerne*、「君は学ぶ」は *du lernst*、「彼は学ぶ」は *er lernt* というように語尾の形を変えます。また、同じ「私の父（*my father*）」を意味する *mein Vater* という語が、「私の父は」なら *mein Vater*、「私の父の」は *meines Vaters*、「私の父に」は *meinem Vater*、「私の父を」であれば *meinen Vater* といった具合に変化するのです。このように、文を構成する語の文法的役割を、語形変化によって表す言語を「屈折語」と呼びます。ドイツ語と同根の言語である英語も本来は屈折語の特徴を色濃く持っていたのですが、その後の歴史的発展のなかで、そうした語形変化（屈折）の要素が次第に失われ、例えば名詞・代名詞の文法的役割は文中での語順によって表現する、という形に変わっていききました（こうした言語を「孤立語」と呼びます）。

その意味では覚えなければならない語形変化が少ない英語は易しく、語形変化が多いドイツ語はたしかに難しい、と言えるかもしれません。しかし、見方を変えれば、ドイツ語のこの「難しさ」は、ドイツ語の「易しさ」を意味しているのです。なぜなら、文法的役割による語形変化が多いということは、それだけ文を構成する個々の語がどのような文法的役割を持っているかを知る手がかりが数多くある、ということだからです。実際、ドイツ語の文は、非常に長大で複雑なものであっても、その構造（主語、定動詞、目的語等々がどれか）を掴むことが非常に容易です。英語の複雑な文の場合、しばしば文の骨組みがどうなっているのかを正確に捉えるのが難しいのとは好対照です。つまり、ドイツ語の学習は、初級段階では覚えなければならない規則が多いために一定の苦労は避けられませんが、いったん基本的な文法を身に付けてしまえば、文法規則の体系が整序されている分だけ、中級以降の学習が非常に楽になると言えるのです。ドイツ語の学習過程を登山に喩えるならば、最初は切り立った斜面にぶつかって難儀をするけれども、その斜面はそれほど長くは続かず（初級段階のみ）、一度これを登り切ってしまえば、あとは楽に歩ける平らかな高原に豊かな森が広がっている——そんなイメージです。

これからドイツ語を学び始める方は、発音は英語より容易ですし、語彙に関しては英語の知識を活かすことができるというメリットを享受することができます。他方、個々の品詞の語形変化のパターンを習得することに少なからずエネルギーを使うという経験もなさるでしょう。しかし、繰り返しになりますが、細かな文法規則を覚えるという作業は初級段階だけのものです。その段階を乗り越えれば、後はドイツ語圏の文化が育んだ豊かな知的資源を存分に堪能できるはずです。辞書を片手にドイツ語の文学作品や哲学書をじっくり味わうご自分の姿を想像しながら、ドイツ語の学習に励んでいただければと心より願っています。

（2016年4月1日執筆）

ドイツ語辞書とのつきあい方—食えない辞書を恋人にするには—

三瓶慎一（法学部教授）

辞書とのつきあい方は人それぞれに違ってなかなか面白い。昔の豪傑は単語を覚えるたびにコンサイスのページを引きちぎっては食っていたという。それが功を奏したという話はおよそ聞かないが、人間の記憶装置が胃や腸にあるわけではないのだから、当然といえば当然だ。むしろ呑み込んだこと自体の安堵感で、単語そのものはきれいさっぱり忘れてしまうのが人情というものだろう。しかし「昔の人」と一括してしまうと、食糧事情が悪かった時代という印象もあってか、語学を学んだ人たちはみんな辞書を主食にして生きていたのだ、などという錯覚を起こさせるから不思議なものである。

学生時代の教室に、机を並べて一緒にドイツ語を学んだ美人の同級生がいた。長身でスマートなその容貌とは裏腹に、うまくできないときには悔しさのあまり（もちろん自宅だけのことらしいが）辞書を壁に投げつけて

は自分にハッパをかけるというとてもない習慣があった。だから彼女の辞書は一度水没して乾燥した電話帳(死語?)のようで、およそ女子学生の持ち物とは思えない様相を呈していた。私はといえば、これも容貌からは想像できない(?)潔癖症で、木村・相良独和辞典(かつてはこれがスタンダードだった)の革装(死語?)を、書き込みなど一切せずに大事に大事に使っていた。ふたりともドイツ語はまあまあできた方だったから、クラスの悪友たちは彼女の辞書を見ては「〇〇さんの辞書はすごい、あれだけボロボロなんだからできるようになるわけだ」と言って驚き、私の辞書を見れば「三瓶の辞書はすごい、できるのに辞書がきれいだ」と言って驚いていた。

外国語が上達したいなら、辞書を食らうべきか、きれいなままに保つべきか、はたまた電話帳にしてしまうべきかは問題ではない。辞書は引きまくるのが良いに決まっている。初歩の段階でどれだけ辞書を引いたかで、中級、上級での伸び具合が決まるといっても良いほどだ。しかしやみくもに引きまくるのではなく、もっと上手につきあえるなら、その辞書の特性を最大限に引き出し、文字通りの伴侶とすることができる。そのためのポイントをお話ししよう。

まず愚問をひとつ。ドイツ語の辞書とはいったい何のためのものだろうか。そりゃ単語の意味を調べるために決まっている、と思われるだろう。ところがこれが案外愚問ではないのだ。「辞書を引く」と一口にいうが、ドイツ語のような語形変化の多い言語では、**文法の習得が不完全だとまず辞書を引くことすらできないのである**。動詞はすべて不定詞(不定形)という形で登録されているし、名詞類は単数1格という形で載っている。つまり知らない単語に出会ったとき、文法を頼りにこの見出し語の形にたどり着けなければ、その単語は調べられないのである。これが語形変化に乏しい英語の辞書と、語形変化の豊富なドイツ語の辞書との最大の違いだ。ドイツ語では**辞書を引きこなせるようになるためにこそ文法を学んでいる**、といっても過言ではない。まともに辞書が引けるようになったら、初級段階はめでたく修了といえるのである。

英語との違いはまだある。ドイツ語には「造語生産力」が強いという特徴がある。これは例えば、複数の単語(groß「大きい」+ Stadt「都市」など)を合成して長い1単語(Großstadt「大都市」など)を作ったり、1つの基礎語「größer「より大きい」< groß「大きい」など)に接頭辞[前綴り]「ver-「～化する」など)や接尾辞[後綴り](-[e]nなど)を付けて、新しい単語「vergrößern「拡大する」など)を創り出したりすることをいう(専門的には前者の手続きを「複合」、後者は「派生」と呼ぶ)。ドイツ語圏の人々は実際にその都度瞬間的に必要な単語を作り、使っては捨てていく、ということをしながら言語生活を送っている(専門的には「瞬間造語」とか「アドホック造語」という)。外国人である我々もこれを使わぬ手はない。

例えば英語なら book「本」の他に dictionary「辞書」や diary「日記」という別の単語を覚えねばならないが、ドイツ語では Wörterbuch「辞書」、Tagebuch「日記」と、どちらも Buch「本」という基礎語から作った造語で済ませることができる。-buch「〇〇本」という単語をたくさん作れるわけだ。だから英語などに比べたら、覚えるべき基本単語がはるかに少なくて済む大変お得な言語なのである。英語は組み合わせとしてのコロケーションを無数に覚えなければならないが、**ドイツ語は長い単語を分解・分析し、パーツ単位で理解する言語**なのである。

こうして考えると、ドイツ語の辞書は、**収録語数が多いほど良いとは必ずしも言えない**ことがわかるだろう。基礎語彙の解説が充実していて、それをもとに造語による語彙も瞬時に理解できるものが本当は良い辞書である。中級までに使う辞書はそのような考え方で十分良いものを選ぶことができる。

では、初級の段階をクリアーして、みごと必要な見出し語にたどり着けるようになった中級の皆さんはどうだろう。今度は見出し語にたどり着いてからが問題だ。独文を読もうとするとき、**辞書の訳語の羅列の中からその場に合いそうなものを選び出し、適当に切り貼りして訳文を作ってはいないだろうか**。ドイツ語を読むという作業は、実はそんな古布パッチワークのようなものではない。ドイツ語の単語の意味が日本語の単語の意味に1対1対応をすることはむしろ珍しいからだ。

例えば Hund が「犬」、Schwein が「豚」という日本語に当たることはあっても、この語に含まれたドイツ語圏でのイメージや、文化的・社会的な背景の意味は辞書ではわからない。Heimat「故郷」とか、Urlaub「休暇」といったような語ではなおさらだ。辞書の訳語通りに日本語に訳せたとしても、お盆や正月休みに列車を満員にする菓子折を抱えた家族連れ、といったイメージがわくだけでは、これらの単語の意味が正しく理解できたことにはならない。Bürger「市民」だったら、これには、東京都民、横浜市民という「住民」の意味だけではなく、中世の都市(≒ Burg「要塞」)の防衛義務を負うと同時に、涙と汗と血を流して権利を獲得してきたというヨーロッパならではの歴史的背景がある。こうした文化的・社会的な意味は「コンテクション」とも呼ばれるが、現在のような形の辞書には載りにくい。長い歴史の中で個々の単語にまつわりついてきた苔や蔦のようなものだが、たかが単語とはいえこれを大切にしないと別の文化圏を理解することはできないのだ。中級の皆さんにはこんなこともあらためて考えていただきたいと思う。

上級になれば、それまでの独和辞典に加え、**ぜひ独独辞典を1冊持ってほしい**。精密に調べようとするなら、いつまでも独和だけでは隔靴搔痒だ。独独辞典が使えてこそ、一人前の辞書の使い手ということになる。最近、ドイツで出版されていても、Deutsch als Fremdsprache(外国語としてのドイツ語)の辞書と銘打った外国人学習者向けの比較的説明の平易なものもある。もちろん古い文学作品や時事的なテキスト、専門文献などを読むこともあるのなら、特殊な専門語辞書が必要になることはいうまでもない。

文明の利器、コンピュータ、スマートフォン、タブレットなどは、今やほとんどの人が所有している。これに『小学館 独和大辞典』や „Duden — Universalwörterbuch“ などを入れておける。数キロにもなる重量級

の辞書を何冊でも手軽に持って歩けるのだから、なんとも便利な時代になったものだ。

ネットワークに繋がれば、役に立つオンライン辞書がいろいろ使える。上述の „Duden – Universalwörterbuch“ (<http://www.duden.de/>) もある。Ulrich Apel 氏の語彙リストに始まり、今では Wiki で多くのユーザーが改善に加わって日々進化する『和独辞典』(<http://www.wadoku.de/>) は見出し語約12万語（もちろん単語リストなので、独和や独独で用法を調べ直してから使う必要がある）。絵からその名称を調べる。„Bildwörterbuch“（図解辞典）も面白い (<http://www.bildwoerterbuch.com/>)。Google 検索を使うのもいい。名称がわかっているとき、それがどんな物なのかを調べることもできる。動物や植物、料理などは、これを使えばたちどころにその正体がわかる。ライプツィヒ大学の „Wortschatz“ (<http://wortschatz.uni-leipzig.de/>) もいちど覗いてみてほしい。ある語にどんな類義語や反義語があるか、ある名詞がどんな形容詞や動詞と一緒に使われることが多いかなどを調べられる。ドイツ語で文章を書く際に重宝する語法データベースだ。他にもいろいろなオンライン辞書があるが、これらはもはやドイツ語学習には不可欠な存在となった。それに無料なのだ。開発者に感謝しつつ使いたい。電機メーカーが出している電子辞書でもいいのだが、コンテンツ更新のフットワークの軽さでは、やはりネット上の辞書に軍配が上がる。

電子データのもう1つの良さは、「後方一致」や「中間一致」機能で、単語の後ろや真ん中の要素を指定して引くこともできるというところだ（例えば、上に挙げた〇〇buch にどんなものがあるかを調べてみよう）。そこで抽出した単語をあらためて Excel ファイルにコピーするなどして整理しておけば、自分用の素晴らしいシソーラスができる。実際に、通訳の仕事をする人たちは、そうやって事前に関係語彙のリストを作成して頭に叩き込み、現場に向かう。電子的辞書が、紙の辞書に対して劣点があるとすれば、それは、そのものに自分の書き込みができないこと、そしてページを破って食えないので腹の足しにはならないことぐらいだろう。

さてアナログの話に戻ろう。最後にまとめとして、どうやったら上手に辞書を利用することができるかということに触れておきたい。そこで1つご紹介したい言葉がある。「原書を引いて辞書を読め」という、ドイツ語学者で自らも古今の多くの言語に通じ、ドイツ語の天才と呼ばれた関口存男（1894-1958）の逆説的な言葉である。これを理解してもらうには、少々説明が必要だ。

前述の通り、単語を調べて適当な訳語に飛びつき、パッチワークで訳文を作っているのなら、それは本来誤りである。そもそも辞書というものは、個別の単語の意味の「エッセンス」を示すものであって、あくまでも代表的・抽象的な訳語を載せているに過ぎない。だから、その単語を含んだ文全体がその時どういう訳になるのかを辞書は保証してくれないのだ。個々の単語は、日本語の単語に1対1対応するとは限らない。また個々の単語は文の中で、さらに文脈や状況の中で生きているナマモノであり、動かぬ化石のようなものではない。ある単語の意味はその文脈や状況の中で初めて決まる。その文全体の最もふさわしい訳は、文中のすべての単語の意味のエッセンスを総合して、読み手が自分で考えるものなのだ。だから、辞書に出ていないような訳語を、その都度自分でひねり出さねばならないこともある。大事なことは「ドイツ語の『単語』を日本語の『単語』で訳すのではない」ということだ。「1つの『単語』を訳すのではなく、それが含まれた1つの『文』を訳す、1つの『文』を訳すのではなく、それが含まれた『状況』全体を訳す」ことが最も大事なのである。

さらに、実際のドイツ語の中で自分が出会った1つの単語が、意味の上でどんな広がりや奥行きを持っているのかを知っておきたい。でないと、次にまた同じ単語に出会ったときには、もう応用が利かなくなってしまうからだ。これは効率的、経済的に辞書を引くということでもある。適当な訳語を見つけてすぐに辞書を閉じてしまうのではなく、上から下まで説明をよく読んでみよう。すると平べったいと思われた単語の意味が、3Dメガネをかけたように立体的に見えてくるだろう。そうしたら今度は「原書を引く」のである。ここでいう「原書」とは、各種のメディアが豊富に揃った現代の学習環境では、書かれ話される生のドイツ語すべてと考えればよい。だから「原書を引く」とは、ドイツ語を読み漁る・聴き漁ることだ。辞書で読んだ単語の意味のエッセンスを「原書」で引いて、なるべく多くの具体例に触れ、効率よく自分の血肉にしてみようというわけである。

こうして「原書を引きながら辞書を読んで」といくと、いつかは必ず、なんでこの訳語が載っていないんだろう、と独和辞典の不備が目につくようになる。そうやってきたらしめたもの。むしろ愛用の辞書にどんどん書き込みをしてしまおう（だから初級・中級では紙の辞書がおすすめだ）。実際に使われるドイツ語の中で具体的な文脈に即して自分が決めた訳語なのだから、自信を持って書き込む。訳語だけではなく、辞書には出ていない成句や表現など、実際にドイツ語を読んだり聴いたりしていると新しい発見が多々あるはずだ。これをすかさず自分の辞書に登録していく。つまりワープロ辞書のカスタマイズと同じ方法で、自分の独和辞典をチューンアップするのである（そのためにはページにもっと余白があると良いのだけれど）。

こうして世界に1冊しかない自分だけの辞書ができあがる。この作業には充実感も伴い、実に楽しい。こうしてできた唯一無二の辞書は、使い手の努力の結晶だから、その持主が限りない愛着を抱くことは当然だろう。丹精こめた盆栽のようなものだ。ちなみに私は書き込み満載のマイ辞書（革装のデイリーコンサイズ独和）を一度なくしたことがある。まるで恋人を失ったようなショックのあまり、しばらく立ち直れなかった。ところが、よくしたもので、書き込んだのは自分の手だから、その内容は結構覚えていて、自分でも驚いたことがある。（失恋の痛手から早く立ち直れたのだった。）

そういうわけだから、少しずつ育ってくる独自の辞書は、目に見えない形で自分の頭の中にも根付いていく。それを一般には「語感」（言語に対する感覚）と呼ぶ。外国語学習の究極の目標は、この「語感」を身につけることなのである。この段階まで来ると、訳語のひねり出しにあたって「ここまではセーフ、ここからはアウト」という境界感覚を持つことができる。誤訳の奈落に転落しないために大切な感覚だ。このレベルまで来た人

は、電子辞書でも、スマホでも、ネット上の辞書でも正しく使いこなせていることだろう。

「原書を引いて辞書を読める」ようになるまで力をつけて、ドイツ語の世界を堪能していただくことができれば、私にとっては望外の幸せだ。言葉を学ぶことは本当に楽しいものである。辞書を引くという一見地味で苦しい作業も、実はこうした楽しみに連なるものだとすることをいつも忘れないでいてほしいと思う。

(『三色旗』第571号(1995年10月刊)より転用、2017年4月1日加筆修正)

外国語科目／フランス語

フランス語未習者は、まず最初に初級前期・初級後期の単位をスクーリングで修得することを目標とするとよいでしょう。スクーリングではフランス語の文法体系の習得と同時に、発音やコミュニケーションの表現を学習でき、その後の独習が楽になるからです。また、組み合わせとしては、初級前期または初級後期のみで卒業単位には足りる場合でも、スクーリングの共通テキストについては初級前期・初級後期を通じて学習し、言語構造を概観してから次に進むことが望ましいと思います。

時間的な余裕がある人、または当面スクーリングに出席するのが難しい人は、放送授業により初級前期・初級後期のいずれかを修得することもよいでしょう。

しかしいずれの場合でも、全くの未習者が初級前期よりも先に初級後期を、あるいは初級前期と初級後期を並行して履修することは勧められません。

スクーリング中級、上級の授業には担当者によってさまざまなヴァリエーションがあり、必ずしも配本テキスト第三部あるいは第四部の内容に類似の授業が行われるわけではありません。教室での対話を通じて学習を深めるためにも、講義要綱を熟読した上で、ぜひいろいろな授業を積極的に履修して下さるよう望みます。

フランス語の学び方—フランス語学習のヒント—

宮下理恵子(元法学部准教授)

外国語を学ぶときにもっとも理想的なことは、近くに native speaker がいてできるだけ頻繁にその人と話す機会をもつことですが、日本の日常生活では、英語、中国語についてはともかく、フランス語、ドイツ語も含めたその他の外国語に接するチャンスはなかなかありません。見聞きすることが少ないと、どうしても興味がもてないものです。

留学や語学研修によって毎日外国語とその文化的背景を日常生活のなかで体験することができないからには、なんとか少ないチャンスを活かして日々の生活のなかでフランス語を体験できる環境をつくってみましょう。もちろん、文学作品—詩や小説、映画また旅行ガイドブックなどを通してことばの背景を知ることは必要なことですが、ここでは日常生活のなかでフランス語そのものに触れられる可能性について考えてみたいと思います。

1 周囲のフランス語を搜してみ—カタカナからフランス語綴りへ

都市生活では、音楽、雑誌、テレビ、広告などを通して日々英語に接する機会が多く、カタカナ表記のことばはすべて英語と思いついでいる人も少なくないのではないのでしょうか。しかし実際にわたしたちの身の回りには人気のブランド商品や化粧品、ファッション、フランス料理、作家、画家、音楽家、歴史上の人物の名前などを通してかなり多くのフランス語が見聞されるのです。

フランス語を志す人は、まず、わたしたちの身近に見られるフランス語をできるだけ多く拾いあげて、そのフランス語の綴りと意味を調べてみることから始めてはどうでしょうか。

《シャネル (Chanel)》《エルメス (Hermès)》《ボジョレ (Baujolais)》《コニャック (Cognac)》《オートクチュール (haute couture)》などごく有名なものから、《クーデタ (coup d'Etat)》《デジャ・ヴュ (déjà vu)》《ローブデコルテ (robe décolletée)》などかなり長い熟語に至るまで、日本語に訳されずにフランス語の音そのままに使われていることばが多くあります。

よく一般にフランス語は発音が難しいという声を聞きますが、フランス語の音自体はそれほど発音しにくいものではありません。ただ、ヘボン式ローマ字と英語の発音の先入観から抜け切れないうきにとくに難しく感じられるものだと思います。

ふだんよく見聞きするフランス語は決して英語を通して日本に導入されたものではありません。わたしたちの先達は、フランス語のアルファベ (alphabet) も含めて、できるだけ原語の発音に近い音声表記をするべく努力してきたのです。昨今英語一辺倒の日本で、例えば《T. G. V.》を、「テ・ジェ・ヴェ」ではなく「ティ・ジ・ヴィ」、《Air France》を「エール・フランス」ではなく「エア・フランス」などと英語読みする風潮が広がっていますが、このようにすべての外来語を英語化する悪癖は、少なくともフランス語を学ぶ人々には捨ててもらいたいと思います。

2 発音練習は耳と口だけでなく、目と手も動かす

発音の勉強は通信教育最大の難点のひとつですが、最近では教科書はもちろんのこと、参考書にも付属 CD

が付いているものが多く、DVD 付きの本も市販されるなど、視聴覚教材が入手しやすくなっています。テレビのフランス語講座等も時間を工夫してできるだけ見ることをお勧めします。スマホの学習サイトも活用できるでしょう。

また衛星放送のフランスのテレビニュースも朝の慌ただしい時間帯ではありますが、耳を慣らせるためには最適な素材でしょう。実際にフランス人と話す機会がなくとも、フランス語のリズムと間合い、とくに明解なフランス語を聞く良い機会だと思います。政治家の演説や著名人とのインタビュー、街頭インタビューなどで様々なフランス語を聞くこともできますし、何よりも人々のもっともアクチュアルな生活がほんの一部ではありますが垣間見られるのが魅力です。

いずれにせよ、今日ではネイティブ・スピーカーのフランス語を聴ける素材と機会は随分多くなっていますので、時間をかけて練習すれば発音もヒアリングも早く確実に上達できるでしょう。

19世紀の詩人ポール・ヴェルレーヌ Paul Verlaine (1844-1896) が言っているように、フランス語では「なによりもまず音楽 (De la musique avant toute chose)」が重要ですから、耳と口を使って必ず音とともに勉強することは最優先課題ですが、同時に、音と文字とを関連づけて勉強することも忘れてはなりません。

フランスでは伝統的に、《ディクテ (Dictée)》と呼ばれる口述筆記の練習が重要視されてきました。一時期小学校でこれを廃止したときにフランス人の筆記能力が著しく落ちたといわれています。日本の漢字書きとりに相応するもので、音—文字—意味を総合的に習得するために不可欠と考えられます。

フランスではこの「ディクテ」と「暗唱・朗読」の二本柱を、いわゆる「読み・書き」教育の土台としてきたわけですが、これは綴字とモデル文の暗記を通して、性数一致、動詞活用、構文などの文法規則を反復練習によって体得させることを目指したものであったのです。

コミュニケーションのための外国語とか、生きた外国語とか言われてきて久しくなります。記録メディアの普及で、聞ける、話せる勉強はかなりやりやすくなりました。それでもやはり、ほんとうに理解するには文字の助けを借りざるを得ないでしょう。とくにわたしたち日本人など、漢字という表意文字に慣れている者にとって、文字なしの学習は不安で記憶しにくく、欲求不満をひき起こします。私は教室でもできるだけ板書するように心がけていて、学生にもノートを提出させたり、黒板に書かせたり、宿題を出させたりして、できるだけ多くフランス語を書く機会を与えようとしていますし、ほとんどの外国語の先生がそうだと思います。つまり、ただ聞いて喋るだけでなく、目と手も動員して全身で総合的に学ぶのが外国語の学習だと思うのです。

3 和訳には頭を使って一分析しながら明晰な思考力を養う

初級レベルでは、動詞活用によらず性数変化によらず、なにしろ反復練習することによってひたすら暗記をするしか学習方法はないのですが、一度初級文法と基本語彙を学習したあとは（決してマスターしたなどとは思わないで下さい。ひとつの外国語を習得するには絶えざる反復練習と、さらに高度な構文の学習が必要なのです）、フランス語の勉強では、実は中級以降のほうが学習者の努力が必要であるといっても過言ではないでしょう。

基礎文法、基本語彙は与えられたものを覚えるだけでよかったのですが、それから後は応用と、本当の意味での演習の段階になります。自分で辞書を引いて調べる作業が重要になってきます。

報告課題の添削や科目試験の採点をしていると、構文がまったく理解できていないと考えられる解答によく出会います。とくにひどいものになると、動詞、形容詞、名詞の区別がはっきりしていないのではないと思われる解答も見られます。文章の前後関係をいっさい無視して、ぱっと辞書を開いて目についた訳を並べただけといった解釈がまれに見られます。

例えば、mort という語をとってみます。辞書の見出し語には、先ず、女性名詞の la mort (死、終焉、死神等) と形容詞または男性名詞の mort (死んだ、枯れた、死にそうな、あるいは、死者、等) の意味が出ていますが、このような説明はこの2つの単語のごく一部に過ぎず、その他の説明がほぼ3分の2ページに渡って書かれています。さてそのすべてを読んだとして、つぎの文章をどう解釈すればよいのでしょうか。《C'était misérable : il était mort de froid.》かれは、果たして「凍死した」のでしょうか、それとも「寒さで死にそうだった」のでしょうか、それは文脈によるのです。もっと長い文章になると、主語と動詞、目的語、またそれらに係る修飾語句などの関係がとらえにくくなってきますが、一読しただけでいい加減な解釈をせず、時間をかけて、自分自身で文章を分析しながら訳していった下さい。フランス語は明晰な言語といわれます。《Ce qui n'est pas clair n'est pas français.》「明晰ならざるものフランス語にあらず」というRivarol (1753-1801) のことばがフランス語の特徴であるかのように考えられていますが、これは一目で簡単に分かるという意味ではなく、むしろ学ぶ側の明晰さと冷静かつ知的な分析力を要求していることばと取るべきでしょう。

フランス語文法で頭を悩ませられる、形容詞の性数一致、動詞の叙法、活用など複雑な諸規則の背景には、自国のことばをできる限り明瞭で合理的にしようとするフランス人の努力の歴史があるのです。ひとつの言語を学ぶことは、同時にものの考え方、発想法、論理の組み方など、思考様式を学ぶことでもあるのです。

フランス語の長文を前にしたときには、とくに全体の構文に注意して、数学の公式を当てはめるようなつもりでじっくりと取り組んで下さい。フランス語の学習によって日本語表現とものの考え方にも明瞭さと合理性が加わるようになれば、フランス語学習のもっとも高い成果があがったと言えるでしょう。

最後に参考書を2冊紹介しておきますが、各自書店で自分に合うものを探してみましょう。

《基礎級、初級向き》

『ケータイ「万能」フランス語文法』(久松健一著、駿河台出版社)

フランス語辞書の使い方

喜田浩平 (文学部教授)

初めてフランス語を学ぶ方を対象に、フランス語の辞書について実際的なアドバイスをしたいと思います。ポイントは大きく分けて二つあります。一つは「フランス語特有の表記」に慣れること。もう一つは「辞書に載っている形」を理解することです。なお、CD-ROM や電子辞書をうまく利用すると様々な問題が簡単に解決する場合もあります。以下の説明は、紙媒体の辞書を自力で使いこなすことを想定しています。

フランス語特有の表記

フランス語の文字は、基本的には英語のアルファベット26文字と同じです。辞書の見出し語の配列も原則として英語のABCと同じ順序です。唯一の例外は「œ」という文字です。辞書の配列ではoとeがあたかも分離されているかのように考えます。従って、œil、œuvreなどはod-よりも後ろ、sœurはsod-よりも後ろを探せば見付かるはずです。

文字に関してはこれで大丈夫ですが、フランス語には固有の綴り字記号があり、その有無によって読み方や意味が異なりますので注意が必要です。

最も重要なのは3種類の「アクセント記号」です。まず「´」すなわち「アクセント・アギュ」(accent aigu)。これはeのみが対象となります。eとéは全く異なる綴り字です。そのため、例えばfatigueとfatiguéは異なる単語です。次に「`」すなわち「アクセント・グラヴ」(accent grave)。これはa、e、uに付くことがあります。laとlà、desとdès、ouとoùは異なる単語です。それから「^」すなわち「アクセント・シルコンフレックス」(accent circonflexe)。これはa、e、i、o、uに付くことがあります。oとuの例だけ挙げると、coteとcôte、surとsûrは異なる単語です。

綴り字記号にはこれ以外に、e、i、uに付くことのある「¨」すなわち「トレマ」(tréma)、cに付くことのある「¸」すなわち「セディユ」(cédille)などがあります。いずれも、付いていないケース(e、i、u、c)と付いているケース(ë、ï、ü、ç)を区別しなければなりません。

「そのままの形」から「辞書に載っている形」へ

フランス語の文章を読んでいて未知の語に出会ったとき、そのままの形で探しても辞書の中に見付けることができない場合があります。これは、フランス語の辞書というものが一般に、現実の様々な表現をすべて網羅するのではなく、文法規則に従ってまとめられた一定の形のみを掲載しているからです。そのため、フランス語の辞書に取り掛かるには一通りの文法事項をすべて学習してからの方が理想的なのです。とはいっても、フランス語を始めたばかりなのに辞書と格闘しながら学習を進めなければならないケースもあることでしょう。以下では、「そのままの形」を手掛かりに「辞書に載っている形」を探し出すために、気を付けなければならない最小限のポイントをまとめてみます。

(i) エリジョン (語尾母音字脱落) → 2つの単語

フランス語の文章では、l'ami、j'aimeなどの表現がよく使われます。ところがこのままの形を辞書で探しても見付かりません。前者はle + ami、後者はje + aimeであることが分かっている必要があります。これは「エリジョン」(élision)と呼ばれる現象です。ある種の語は、母音字または無音のhで始まる語の前で、その語尾母音字a、e、iが脱落し、「´」すなわち「アポストロフ」(apostrophe)で置き換えられることがあります。

エリジョンの対象となる語は決まっていて、初級文法でも早い段階で学習するものばかりですので、しっかり覚えるようにしましょう。主なものとしては、単音節語le、la、je、me、te、se、ce、de、ne、que、si、及びqueの複合語jusque、lorsque、parce que、pour que、puisque、quoiqueなどがあります。

(ii) ある種の女性名詞 → 男性単数形

フランス語の名詞には文法上の「性」(男性、女性)があります。人間や動物を表す名詞は、原則として自然の性と文法上の性が一致します。homme(男)、père(父)は男性名詞であり、femme(女)、mère(母)は女性名詞です。一方、モノやコトを表す名詞は、文法上の約束事として性が決められています。livre(本)、train(電車)は男性名詞、fleur(花)、voiture(自動車)は女性名詞です。さて、人間や動物を表す名詞は、上述のhomme/femmeのように男女を別の語で示すこともあれば、同一後の語尾変化によって示すこともあります。étudiant(男子学生)とétudiante(女子学生)、acteur(俳優)とactrice(女優)などがその例です。このような場合は要注意です。辞書編纂上の慣例では、このようなタイプの女性名詞は独立した見出し語を立てず、男性形と同じ項目にまとめてしまうのが普通です。つまり、étudianteは対応する男性形étudiantの項目に入れられて「étudiant、e」と表記されます。actriceもacteurといっしょになり、「acteur、trice」と表記されます。逆に言うと、étudiante、actriceという語を辞書で調べたい場合、そのままの形で探すので

はなく、それぞれの男性形を予測しながら探することが不可欠となります。(ただし、初学者に配慮した学習用辞典では、actrice を見出し語とし、「acteur を見よ」と指示している場合もあります。)

このような「予測」は慣れないと大変ですが、一定の規則がありますので、それを覚えるようにしましょう。原則は「男性形 + e = 女性形」です (étudiant、étudiante)。以下、それ以外の主な規則を「男性形 → 女性形」の順に示すと、-eur → -euse (voyageur → voyageuse)、-er → -ère (boulangier → boulangère)、-en → -enne (musicien → musicienne) などがあります。

(iii) 名詞 → 単数形

ほとんどすべての名詞には単数形と複数形があります。livre の複数形は livres、fleur の複数形は fleurs、という具合です。そして、辞書の見出し語は必ず単数形になっている点に注意しなければなりません。複数形 livres は辞書のどこを探しても見付かりません。その単数形が livre であると予測して、livre の項目を見る必要があります。

ここでもまた「予測」が必要ですが、やはり一定の規則がありますので、それを覚えるよう努力しましょう。原則は「単数形 + s = 複数形」です。従って、文脈から名詞であると判断できる語の最後に s が付いている場合、それを取り除いた形が単数形である可能性が非常に高いことになります。また s 以外の要素によって複数を示すケースがあります。「単数形 → 複数形」の順に示すと、-eau → -eaux (cadeau → cadeaux)、-au → -aux (tuyau → tuyaux)、-eu → -eux (cheveu → cheveux)、-al → -aux (animal → animaux) などです。(しかし例外もあり、pneu の複数形は pneus ではなく pneus です。)

(iv) 形容詞 → 男性単数形

フランス語では、形容詞が名詞を修飾する場合、前者は後者と性・数において一致するという規則があります。従って、ごくまれなケースを除いて、潜在的にはすべての形容詞が男性単数、男性複数、女性単数、女性複数の4パターンに変化する可能性があるわけです。ところが辞書の見出し語は男性単数を基本として項目が立てられています。ですから、文章の中に男性複数、女性単数、女性複数のいずれかの形で形容詞が使われている場合は、対応する男性単数の形を「予測」する必要があります。

しかしここでも「予測」のための規則がありますので、それをしっかりと学習するよう心掛けましょう。女性形、複数形のいずれも、おおむね名詞の場合とほとんど同じです。女性形の基本は e を付けること。それ以外の不規則なものも、名詞について指摘した規則はそのまま形容詞にも該当します (léger → légère、ancien → ancienne)。それ以外の規則としては、-el → -elle (naturel → naturelle)、-eil → -eille (pareil → pareille)、-et → -ette (net → nette) または → -ête (complet → complète) などが代表的です。一方、複数形の規則も原則は名詞の場合と同様 s を付けることです (joli → jolis)。その他の不規則なパターンも類似しています (beau → beaux、social → sociaux)。

(v) 動詞 → 不定詞

フランス語の動詞は「活用」します。すなわち、人称・数・叙法・時制・態などに応じて形を変えます。しかし辞書では、動詞は必ず不定詞を見出し語として立てます。従って、フランス語の文章を読んでいて未知の語に出会い、それが動詞であるということはなんとなく分かったとすれば、辞書で調べる場合に必要作業はその動詞の不定詞を見付けることです。例えば、il ronflait という表現に出会ったとしましょう。ronflait の意味が分からないので、辞書で調べたいと思います。しかしこのままの形では見出し語にはなっていません。これが動詞であると見当をつけて、その不定詞 ronfler という形でしか探ることができないのです。逆に言えば、不定詞が何であるか分からないと、その動詞の意味を知ることにはできないのです。「知らない動詞だから辞書で調べているのに、その不定詞を知っていなければならない」というのは逆説的で理不尽に感じられますが、仕方ありません。

では、実際問題として、どうしたらよいのでしょうか。ここでも少し「コツ」のようなものがあります。フランス語の動詞の不定詞は、原則として4つのパターンしかありません。その語尾は、-er、-ir、-re、-oir のいずれかになります。ですから、調べたい単語が動詞であると見当を付けば、その活用語尾を取り除き、この4つの語尾を一つずつ当てはめながら不定詞 (らしきもの) を作り、辞書で探してみるわけです。上述の例では、ronflait の語尾 -ait を取り除き、残った ronfl- に一つ目の語尾 -er を付けてみると、運良く正しい不定詞に行き当たります。同様に、nous sentions という言い回しに出会い、sentions の意味を調べるには、語尾の -ions を取り除きます。残った部分 sent- にまず -er を当てはめると senter になりますが、残念ながらこのような動詞は存在しません。次に -ir を当てはめて sentir にすると、うまい具合に正しい不定詞に行き当たります。

このやり方が成功するには、様々な叙法や時制の活用語尾を正しく理解しておく必要があります。直説法現在を除いて、一つの叙法・時制に対してはどのような動詞であっても活用語尾は原則として共通しています。直説法単純未来なら -rai/-ras/-ra/-rons/-rez/-ront、接続法現在なら -e/-es/-e/-ions/-iez/-ent、という具合です。この点をしっかり押さえておくと、全く知らない動詞に出会ったとしても、活用語尾を切り離し、不定詞を再構成するという作業ができるようになります。

ただし、このやり方にも限界があります。活用語尾を取り除いて適当な語尾を付け加えるだけでは不定詞が作れないケースがあるからです。例えば、il voyait という表現では、voyait の語尾 -ait を取り除き、不定詞の4種類の語尾を付けると順に voyer、voyir、voyre、voyoir になりますが、このいずれもフランス語の動詞ではありません。実は正しい不定詞は voir なのです。これは確かに -oir という語尾を持っていますので、結果的には4つのパターンの一つに分類できますが、voyait という活用形からじかに作ることはできないのです。同

様に、je tiens では動詞 tiens の不定詞は tenir、il faudra における faudra の不定詞は falloir、という具合に、不定詞と活用形が形の上でかなりかけ離れたものも少なくありません。

まとめると、動詞に関してはやみくもに辞書を引くのではなく、やはりあらかじめある程度の文法の学習が不可欠になります。まず基本的な動詞は、すべての叙法・時制の活用形を暗記しておくこと。特に、不規則な活用をするもの、不定詞と活用形が似ていないケースには要注意です。「基本的な動詞」とは、初学者向けの教科書に必ず出てくる数十個程度の動詞のことです。上記の voir も tenir も falloir もすべてそのような動詞です。これらについては、文章中にどのような形で登場しても、瞬時に不定詞が頭に浮かぶようにしておきたいものです。それから、あらゆる叙法と時制に関して、それぞれの共通活用語尾をしっかり暗記しておくことも肝要です。(辞書によっては、基本動詞の活用形は見出し語に立て、不定詞を示しているものもあります。また、基本動詞のすべての活用形を一覧形式にまとめた「動詞活用変化形索引」を巻末に収録している辞書もあります。)

(2009年4月1日執筆)

文学部履修要領について

文学部での学習の進め方は、他学部比べて多様です。その分、学生のみなさんひとりひとりが自分で学習の方向を管理しなければなりません。ここには、文学部Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類に属するいくつかの専攻（文学部は17専攻あり、その他に自然科学および諸言語があります）からの学習に関するいろいろな助言が掲載されています。みなさんは、まず、自分の所属する類に該当する専攻（Ⅰ類は哲学、倫理学、美学美術史学、図書館・情報学、社会学、心理学、教育学、人間科学、Ⅱ類は日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学、Ⅲ類は国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学）の助言を参考にしてください。さらに自分の卒業研究の方向性が明らかであるならば、その研究に該当する専攻の助言には特に注意を払って味読してください。もちろん自分の所属する類でなくても、みなさんが履修するテキスト科目を担当する専攻の助言にも注意しなくてはなりません。ただいくつかの科目（「ロシア文学」「ラテン文学」「人文地理学」「地理学Ⅰ」「地理学Ⅱ」など）については、ここには言及がありませんので、科目別履修要領の各科目の項を参照してください。

哲学専攻

哲学専攻で設置されている科目で履修の順序に特に注意が必要なのは、論理学です。現在「論理学」は、総合教育科目と専門教育科目に各々設置されていますが、数学と同様テクニカルな要素を持った論理学では、基礎から順序立てて学習を積み重ねていく必要があります。したがって、まず総合教育科目で学問の概要を学ぶとともに基礎を固め、ついで専門性の高い段階へと学習を進めていくことになります。

他方、総合教育科目に設置された「哲学」と専門教育科目に置かれている「西洋哲学史Ⅰ」、「西洋哲学史Ⅱ」は、いずれも卒業論文作成にあたって問題を絞り込む際に、その前提となる哲学的な思考法ならびに哲学史上の知識を習得するための科目です。したがって、学習にあたって特に順序を気にする必要はありません。意欲と時間の余裕があれば、それぞれを平行して学習していただいてもかまいません。また「科学哲学」は、科学とは何かを哲学的に掘り下げる学問ですので、「哲学特殊」とでもいうべき性格をもっています。したがって、特定の関心と、ある程度の予備的知識が要求されることになります。

また、テキスト科目がその性格上網羅的な傾向にあるのに対して、スクーリングでは各担当者がそれぞれの問題関心にしたがってもっともアクチュアルなテーマで講ずる傾向があります。したがって、スクーリングの履修にあたっては、学習者の関心に応じて適宜選択していただくことが、学習への動機付けという観点からして効果的でしょう。

この分野の主要な参考文献に関しては、三田哲学会編集の『哲学 別冊文献案内』が重要な情報を満載していますので、ぜひ参照してください（<http://web.flet.keio.ac.jp/~bibiken/mita-tetsu/>）。また、哲学専攻の専任スタッフが最近どんな問題関心のもとで、どんな論文を書いているかなどについては、文学部の公式HPで詳しく紹介されています（<http://www.flet.keio.ac.jp/academics/philosophy/index.html>）もしくは<http://www.flet.keio.ac.jp/faculty/philosophy/>）。あるいは、文学部が毎年発行している『文学部専任教員一覧』にも詳しい記載があ

ります。こちらの方は卒論指導登録許可を受けた者に対し、希望により販売しています。

最後に、大学で哲学を学ぶ皆さんにお勧めしたいのは、入門書の類を何冊も読むよりは、これと思った本物の哲学書を邦訳でよいから直に読むこと、何度も繰り返し読むことです。最初はよく分からなくても、何度も繰り返し読むうちに、次第に私たちが思考することの深みへと導いてくれるはずです。そのときすでにあなたは、みずから哲学を始めているのです。

倫理学専攻

本専攻に関わるテキストとしては、次の2書がある。

- ・「倫理学」小泉 仰著
- ・「現代倫理学の諸問題」大谷愛人、池上明哉、小松光彦共著

前書はヘブライ思想など古典的な視点をも包摂して倫理学的観点を教授するものであるのに対し、後書は表題に見られるように近代からの思想の諸潮流を解説しながら現代に課題として残された諸問題を提示して近現代の倫理思想に重きを置いている。そのようにテキストの性格も違い、内容的にもそれぞれ独立したものであるもので、講読の順序は問わない。関心の置き所によって選択すべきである。但し、いずれもその書のみを一冊読めば倫理学がわかるといった標準的教科書的な内容ではないので、書かれている事柄の奥行を理解するためには、テキストに紹介されている参考文献は言うまでもないが、それらに関連するものも積極的に読破した上で理解を進めていく必要がある。

美学美術史学専攻

本専攻は広く「美と芸術」に関わる事象を研究対象としています。本専攻には西洋及び東洋（日本）美術史、音楽学・音楽史、アートマネジメントの専任スタッフがいますが、通信教育科目としては「日本美術史Ⅰ」のみ設置されています。

「日本美術史Ⅰ」テキストは日本美術とは何かを考えるための入門書です。通史としての体裁はとってい

ますが、単なる時代順に配列された作品リストの解説ではなく、代表的な作品を通して、時代背景に対応した様式展開の様相とそこから透けて見える日本美の特質を追求する方針をとっています。芸術史研究は多様な方法が可能ですが、一つの研究視点として参考として下さい。

美あるいは芸術は、本来的にモノあるいは個別的な対象に即して体験として現象していますし、体験はあくまでも個人的なものです。それにもかかわらず普遍性・永遠性という相貌のもとに共有されることを要請しているようです。個々の作品の鑑賞を通してしか芸術の体験はできません。したがって、芸術学・芸術史研究も研究者個人の美的・芸術的経験が前提として要求されます。美学あるいは芸術史の学習は、単に文献や研究書を読解するだけではなく、先ず自身の目や耳を通して感受し、思考するということが肝要です。芸術作品の鑑賞はもちろん、日常生活においても美を発見する機会は無尽です。先ずは「美」に気付くこと、そしてその感動について思いめぐらすこと、そこから思いがけない豊穡な学問世界が開かれてくるかもしれません。

日本史学専攻

日本史関係で設置されている科目は、総合教育科目の「歴史（日本史）」と専門教育科目の「日本史概論」「日本史概説Ⅰ」「日本史特殊Ⅰ—法と政治の日本古代史—」「日本史特殊Ⅱ—キリシタン史—」「日本史特殊Ⅳ」「古文書学」の、あわせて7科目です。

日本史の学習を進めていくにあたって、まず必要なのは日本の歴史全体の流れを一通り押さえておくことです。その意味で、最初に「歴史（日本史）」を履修することで、勉強の基礎を固めた上で、専門科目の勉強に入るのが望ましい順序です。

専門科目の中でも、比較的広い時代にわたる概括的な歴史を扱うのが「日本史概論」と「日本史概説Ⅰ」です。特に日本史の卒業論文を書く予定の方は、是非とも履修してほしい科目ですが、それ以外の方でも、政治・経済・社会・文化など様々な面から歴史を考える視点は、大いに参考になるでしょう。

「古文書学」は、歴史を研究するための材料である史料について学ぶ科目です。日本史で卒業論文を書くための基盤となる科目であり、特に古代・中世史を扱おうとする場合には必ず履修しておいて下さい。

より深く一つのテーマを掘り下げるのが「日本史特殊」という科目です。時代やテーマの対応関係としては、古代史が「日本史特殊Ⅰ」、キリシタン史が「日本史特殊Ⅱ」、近世・近代史が「日本史特殊Ⅳ」ということになります。単に知識を身につけるだけでなく、絞り込んだテーマで史料に基づいて歴史を描き出す手法を学ぶことで、卒論執筆の参考にして下さい。その意味では、必ずしも自分が特に関心のある時代・テーマでなくとも、勉強の役に立つ何かを得られるはずです。

以上の各科目のテキストの学習は、実は日本史の勉強の出発点に過ぎません。それぞれの講義要綱やテキストの中で紹介されている参考文献を初めとして、多

くの概説書・専門書を読んで、歴史に対する理解を深めて下さい。卒業論文のテーマに迷っている方も、そうした積極的な勉強を進めていけば、間違いなく自分の興味・関心の対象が見つかります。

東洋史学専攻

東洋史関係で設置されている科目は、総合教育科目の「歴史（東洋史）」と専門教育科目の「東洋史概説Ⅰ」「東洋史概説Ⅱ」、および「東洋史特殊」のあわせて4科目です。

東洋史の学習を進めていくに当たって、まず必要なのはアジアおよび中東・イスラーム世界に対していろいろな意味で幅広い関心を持つことです。それは歴史だけに留まらず、現代に至るまでの政治・経済・社会・文化全体を指します。その上で、とりわけ強く興味を抱くエリアに地域を絞って深く学習していくことを勧めます。アジアといっても広く、そこに住む人々のあり方は一様でないからです。

「歴史（東洋史）」はアジア全般に関して概括的な知識をつける科目です。専門科目としての「東洋史概説Ⅰ」は中国の古代史を中心として通史的な知識をつけることを目的としています。「東洋史概説Ⅱ—中国史—」は中国近現代史に重点を置きながら、歴史の流れを通して現代の東アジアのあり方を考えることを目的としたもので、専門課程で身につけるべきハンドリングもあわせて指導しています。

慶應義塾大学の東洋史研究のもう一つの核である中東・イスラーム史研究の初歩は「東洋史特殊」で補えます。「特殊」ではありますが、トルコ民族の通史を知ることができます。

以上の各科目のテキストの学習は、東洋史の学習全般の単なる一步に過ぎません。歴史学とは人間が営んできた、さらにいま営んでいる政治・経済・社会・文化および国際関係を総合的に研究する学問であり、その意味では学習に当たって多様な学問領域を包摂するものです。一にも二にも知識欲と好奇心が必要であり、それを具体化するために豊富な読書量と知識を習得しなければなりません。その入り口にあってはまずテキストを熟読することが必要十分条件だといえます。

西洋史学専攻

ここでは、西洋史学専攻が設置している科目について、どの科目をどのような順序で履修すれば効果的な学習をすることができるかという観点から、これらの科目を概観しておきますので、皆さんの学習の一助としてください。特に西洋史学の領域で卒業論文を書くことを予定している学生諸君は、論文にとりかかる前に、これらの科目のすべてを履修しておくことが望ましいのは言うまでもありません。

是非とも最初に履修して頂きたいのは総合教育科目の「歴史（西洋史）」です。この科目は、古代から現代に至るまでの西洋の歴史全体のアウトラインをおさえることを目的としていて、他の科目での学習の基礎となります。これと同時に進行で履修するのが望ましい

のは「史学概論」です。この科目では、高等学校までの歴史とは違って、大学で学ぶ歴史が単なる暗記ではなく、過去と現在の対話のプロセスであることを学びます。これら2科目を終えた上で、「西洋史概説Ⅰ」及び「西洋史概説Ⅱ」を履修してください。総合教育科目の「歴史（西洋史）」で幅広く得た知識をふまえて、「概説Ⅰ」では西洋の古代・中世全般について、「概説Ⅱ」では近・現代全般について、比較的深い知識を身につけることができます。最後に履修するのが望ましいのは「西洋史特殊Ⅱ」と「西洋史特殊Ⅲ」です。前者は近世ヨーロッパにおける政治・社会と宗教の関係を、後者は中世から近代に至るイギリス国制史を扱っています。これらの領域に特に関心を持たない学生諸君も、とりわけ西洋史で卒業論文を書こうとする人たちは、これらの科目の学習を通じて、歴史学の探求の方法を学んでいただきたいと思います。

なお、どの科目についても、教科書そのものは単に骨組みに過ぎないものと理解しておいてください。それぞれの科目分野で実質的な学習を行うためには、それぞれの教科書に挙げてある参考書をはじめとして、できるだけ多くの概説書ならびに専門書を読んで、知識の肉付けをするように心がけてください。

最後に、中学校社会科ならびに高等学校地理歴史科の教員免許状の取得を目指す皆さんは、必修科目である「世界史概論」を履修するようにしてください。

民族学考古学専攻

民族学考古学関係の科目は以下の3つが設置されている。

- ・「考古学」
- ・「西洋史特殊Ⅰ—古代オリエント史—」
- ・「オリエント考古学」

これらのうち「考古学」では取り扱う地域・時代を幅広く設定し、人類学といった周辺領域との関連を含め、理論や方法論を包括的に解説する。一方、「西洋史特殊Ⅰ—古代オリエント史—」と「オリエント考古学」では、文明の起源の地としてのオリエント（西アジア地域）の古代史を取り上げる。「西洋史特殊Ⅰ」では西洋文化の起源として地中海世界を含む西アジア地域の歴史を講じるが、「オリエント考古学」では新石器時代以降の西アジア世界における考古学的研究成果を紹介する。いずれも概説的な内容であり、履修順序に指定や推奨はない。ただし、科目内容と方法論には相互に関連があるので、複数履修することによって考古学への学術的理解は深まるはずである。

スクーリングの「考古学」では担当教員が専門とする地域や時代の内容も盛り込まれる。受講者各人に馴染みのある地域が事例として取り上げられることも多いだろう。さらに、時空を超えた異文化理解として考古学を位置づけると、文化人類学や歴史人類学が重要な関連分野として浮かび上がる。スクーリングの「民族学」ではこの点に着目し、文化の構築性をテーマに歴史研究と文化研究の接合が論じられる。

民族学考古学の世界に関心を持つ受講生には、V. G. チャイルド『考古学とは何か』（岩波書店）や、鈴木公雄『考古学入門』（東京大学出版会）・『考古学

はどんな学問か』（東京大学出版会）、C. クラックホーン『人間のための鏡』（サイマル出版会）、A. マザール『聖書の世界の考古学』（リトン）、R. ワグナー『文化のインベンション』（玉川大学出版部）といった入門書に目を通すとよい。なお、専攻 HP (<http://www.flet.keio.ac.jp/~toru38/ethnoarch/>) も参考になるだろう。

国文学専攻

当専攻に関わるテキスト科目は、総合教育科目の「文学」、専門教育科目の「日本語学」、「国語学」、「国語学各論」、「国文学」、「国文学史」、「近代日本文学」、「国文学古典研究Ⅰ」、「国文学古典研究Ⅱ—Ⅰ」、「国文学古典研究Ⅱ—Ⅱ」、「国文学古典研究Ⅲ」、「国文学古典研究Ⅳ」、「国語国文学古典研究Ⅴ」などである。どの科目から履修しても差し支えない（科目間に学習上の優先順位はない）。ただし、テキスト（教科書）で触れられている作品はできるだけ多く通読してほしい。原典を読解することが何よりもテキストの理解を深めることにつながるからである。近年では古典でも著名な作品ならば手軽に現代語訳や、時としてはマンガで読むこともできるが、それでは大学という場で専門的に学ぶ意味がない。時間を惜しまず、原典をじっくり読んでほしい。なお、基本的な原典テキスト、参考書、辞典類、研究書などは慶應義塾大学藝文学会の編集・刊行している『藝文研究 文献案内』に詳しく記してあるので、そちらを参照されたい。

国文学で卒業論文を書こうとする者は、夏期・夜間のスクーリングにできるだけ出席することが望ましい。それは、テキストからだけでは理解しにくい研究の意義や方法論を直に教員から聴くことのできる絶好の機会だからである。

中国文学専攻

現在、通信教育課程では、中国文学関連の科目として、以下の4科目が設置されている。

「中国文学史」：古代から現代に至るまでの各ジャンルにおける文学通史。

「漢文学Ⅰ」：古典文学概論、および代表的詩文の作品選。

「漢文学Ⅱ」：『論語』注釈。

「漢文学Ⅲ」：『孟子』注釈。

文学に親しむための決まった方法はない。興味のある書物を一つ一つ読み進めればそれでよい。しかしながら、中国文学は三千年におよぶ歴史を持つ世界であり、代表的作品だけでも膨大な数に上る。短期間に効率的な学習をするためには、まず文学史の基礎的知識をしっかりと習得し、各ジャンルの歴史的変遷を把握した上で個々の作品を鑑賞することが望ましい。したがって、「中国文学史」を「漢文学」より先に履修することを推奨する。なお、総合教育科目人文科学分野の「文学」の科目においても、中国文学関係のものが含まれている。

外国文学の学習においては、ぜひ原典に触れてほし

い。文学は言葉の学問であるから、翻訳のみではその作品のエッセンスは伝わってこない。幸い古典文学の場合には、漢文の訓読で原作を読むことができる。現代文学を中心に学ぶ学生は、スクーリングなどを利用して中国語を履修することが望ましい。

参考文献は、各テキストの巻末を参照されたい。古典に関しては、特に角川書店の「鑑賞・中国の古典」シリーズ（全24巻）を入門書として薦めたい。原文・訓読・注釈に加えて、各分野の専門家である編者が詳細な解説を加えているので、作品の背景を知るためのよい道案内になる。

英米文学専攻

- 英文学、米文学、英語学の分野で卒業論文を執筆する学生は第3類の英米文学関連の科目をなるべく多く履修することが望ましい。
- 卒業論文開始後の早い時期に（あるいは、それより以前に）「ACADEMIC WRITING II」（4単位）を履修してもらいたい。
- 英米文学関係の科目数は多く、各々の科目についての文献をここで挙げることは不可能であるが、基本的な参考文献については文学部英米文学専攻のウェブサイト（<http://www.flet.keio.ac.jp/englit/>）または、『藝文研究 別冊』〔2011年度版文献案内〕（藝文学会編）（kcc-channel にログイン⇒「学習サポート」⇒「補助教材」⇒「藝文研究 別冊」）を参照されたい。
- 卒業論文は日本語で執筆してもかまわないが、第一次資料及び重要な第二次資料は必ず英語で読む必要がある。英文を読む機会を与えてくれる科目を少しでも多く履修してもらいたい。

独文学専攻

他の文学においてもそうであるように、ドイツ文学を学ぼうとする人たちに期待されているのは、まず数多くの文学作品に触れてみることです。翻訳でなるべく多くのドイツ文学作品に触れていただき、そこで自分なりの読書体験をしてほしいということが、受講者に期待する第一のことです。もちろん、われわれの設置した講座やテキスト科目などがきっかけとなって、これまでまったくドイツ文学に無縁であった人にドイツ文学への個人的興味をもっていただき、作品に触れてもらうこともまた心から歓迎すべきことです。そしてこういった個人的な読書体験、読書からの感動を基礎にしながら、その体験や感動を文学史や文学理論によって学問的に位置づけていくのがドイツ文学研究の基本的な方法論ではないでしょうか。この目的のためのガイドとなり、助言者となり、あるいは研究方法のモデルとなるのがテキストとスクーリング講義なのです。その場合、いくつかの参考書にあたり、自分の感動を歴史的な流れのなかに置いてみたり、あるいは理論的に構築したりする手続きが必要となるでしょう。

現在われわれのテキスト科目としては「近代ドイツ演劇」「近代ドイツ小説」が設置されています。これ

らはいずれもドイツ文学を学ぶ上での重要な時代をカバーしていますから、ドイツ文学やその歴史について基本的な認識を得る最初のステップとして利用してください。これらの二つのテキストはいずれも入門者のために書かれたものですが、内容的には相当高度なところまで踏み込んでおり、コンパクトにまとまっていますので、いろいろな参考書にあたる前に、まずこれらのテキストを熟読することをお勧めします。参考書はあくまでもテキストを理解するための補助であり、なによりもこれらのテキストを理解することが肝心です。そして、そこで知りえた文学作品にもし日本語訳があり、それに興味をお持ちになったら、ためらうことなく作品に向かってください。さきほども言及しましたように、読書の感動こそが基本中の基本なのですから。二つのテキストのうちどれを先に学ぶべきかといったことは、受講者の関心によって決まります。いずれから学び初めてもかまいません。

スクーリング科目としては、「ドイツ語学文学」「ドイツ文学史」「ドイツ文学研究」などの講座が設置されています。これらの科目はそれぞれ、理論的認識、歴史的認識を深めるためのきっかけとして利用されるべきものです。担当者によって、扱う時代やテーマ、作品、作品を扱う手法などが異なりますが、それもまたテキスト科目ではカバーできない部分を知りうる良い機会であり、個々の担当者の個性ある講義を通じて、さらに認識を深めていただきたいと思います。とくにドイツ文学で卒業論文を書こうとする受講者には教員を個人的に知る絶好の機会ですから、積極的に参加してください。担当者は皆さんのご質問にできるかぎり答えてくれることでしょう。これらの科目もまたテキスト科目と同様にいずれを先に受講すべきかということは問題になりません。テーマに関心があるほうから受講すべきでしょう。

ところで、ドイツ文学というジャンルに特徴的なことは、オーストリアやスイスといったいわゆるドイツ語圏の文学も含んでいることです。したがって、皆さんが受講されるのは、正確に言えば「ドイツ文学」ではなく「ドイツ語圏の文学」ということになるでしょう。これらの国々が優れた文学者や文化の担い手を輩出していることはいうまでもありません。ドイツにのみ視野を限定することなく、自分の関心を広くオーストリア、スイスの文学や文化にも向けてください。

今、「文化」という言葉を使いましたが、われわれが受講者に望んでいるのは、なにも狭い意味での「ドイツ語圏の文学研究」といったものばかりではなく、広やかにドイツ語圏の文化全般（音楽、美術、建築など）に触れてもらうことです。いずれの国の文化もそうであるように、ドイツ、オーストリア、スイス文化は多様な魅力に満ちています。通信教育課程に設置しているドイツ文学講座を、受講者の皆さんが魅力あふれるドイツ（語圏）文化に触れるきっかけの一つとして利用して下さることが、われわれにとってなにより嬉しいことなのです。

参考書や辞典類はあまりに数多くあり、残念ながらここでいちいち触れることは不可能です。詳しくはスクーリングの担当者や卒業論文の指導教授などに聞いてください。また、コンピュータを使用できる方は、慶應義塾大学図書館のOPACシステムや国立情報学

研究所の CiNii、あるいは国会図書館のサイトなどから検索機能を使って、自分の関心のある領域の所蔵データを得ることができます。しかし、基本はあくまでも上記の二冊のテキストとスクーリングにおける講義であるということを念頭においてください。数多くの参考書にあたることも大事ですが、それ以上にテキストを良く読んで、基本を知ることが重要なのです。

仏文学専攻

フランス文学を学ぶためには、まず「文学」（4単位）のテキスト科目で日本、中国、英米、独、仏という東西にわたる広い文学的展望を身につけてから、「フランス文学概説」（3単位）、「フランス文学史Ⅰ」（4単位）、「フランス文学史Ⅱ」（4単位）の各論に進むとよいでしょう*。一方で、個別の作品に積極的に触れることが重要であるのは言うまでもありません。翻訳書で十分ですので、できるだけ多くの作品を読み込んでください。

*2016年度より、従来の「十九世紀のフランス文学Ⅰ」「十九世紀のフランス文学Ⅱ」「二十世紀のフランス文学」が廃止され、同じ時代を一冊のテキストで扱う「フランス文学史Ⅱ」が新設されることになりました。また2017年度には、18世紀以前のフランス文学を対象とした「フランス文学史Ⅰ」も新設されました。

スクーリング科目は、テキストでは十分に扱うことのできない主題を中心に講義を進めます。こちらもおおいに活用してください。

フランス文学を理解するために、フランス語を習得し原書を読みこなすことが望ましいのは言うまでもありませんが、必須ではありません。時間が限られている場合は、むしろ翻訳書を活用して多くの作品に触れることをお勧めします。（もちろん、それと並行して、少なくとも初級レベルのフランス語を身につけることも推奨します。）

フランス文学をテーマにした卒業論文の執筆を希望する場合は、通信教育部事務局から卒業論文指導登録時に配布される『文学部の卒業論文指導に際しての諸注意』の該当箇所を参照してください。注意事項やスタッフ紹介、推薦図書などを記してあります。

なお、仏文学専攻では、卒業論文のテーマとしてフランスの歴史や文化、思想、フランス語学（フランス語を対象とした言語学）、などを選ぶこともできます。これらの分野に特化したテキスト科目とスクーリングは開講されていませんが、論文指導は可能です。

社会学専攻

社会学分野のテキスト科目は、総合教育科目3分野科目の「社会学」、文学部専門教育科目の「社会学史Ⅰ」「社会学史Ⅱ」「社会心理学」「教育社会学」「都市社会学」の6科目から成り立っています。社会学分野で卒業論文を書こうと思う学生のための履修モデルを掲げておくと次の通りです。まず3分野科目の「社会学」を学習して、社会学が対象とする領域の全体につ

いて全般的な知識を身につけたあと、専門教育科目の「社会学史Ⅰ」「社会学史Ⅱ」を履修して、社会学の諸理論について基礎的な知識を修得します（その場合「社会学史Ⅰ」は社会学史の全体を取り扱っており、「社会学史Ⅱ」は各論にあたるので、Ⅰを履修したあとにⅡを履修することが望めます）。そのあと各自の関心にしたがって「社会心理学」「教育社会学」「都市社会学」のうちのいくつかに進むことが望ましいと思います。テキスト科目とスクーリング科目のあいだにはとくに関連づけはありませんが、積極的に社会学分野のスクーリング科目を履修してください。しかし、これはあくまでも履修のためのモデルとして理解していただきたいと思います。社会学は非常に幅の広い学問分野であり、さまざまな入口から入り、さまざまな出口に出ることが可能です。要は各自の問題関心次第です。自分の問題関心にしたがってさまざまな履修パターンを考えることが可能です。また社会学はそれだけで完結した閉ざされた分野ではありません。社会学の分野で研究をするためには、哲学や文学・歴史についての知識も必要となります。積極的に他の分野の科目も履修してほしいと思います。社会学は私たち自身の社会生活についての学問です。書物で学習するだけではなく、日頃から自分の身の回りで起こっていることをよく観察して問題関心を磨いておくことが重要となります。

社会学の辞典・事典を手元に置いて、わからない言葉が出てきたら、すぐに引いて確認をする習慣を身につけてほしいと思います。いくつか代表的な辞典・事典を以下に挙げておきます。

- ・濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編『新版・社会学小辞典』（有斐閣）
- ・森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』（有斐閣）
- ・見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』（弘文堂）
- ・日本社会心理学会編『社会心理学事典』（丸善）

心理学専攻

義塾の心理学研究室では、実験を中心とする実証科学的な方法に基づく、主として基礎的な心理学の研究・教育が行われている。通信教育課程においてもこのような実証科学的な心理学が講じられている。

通信教育課程で受講することのできる科目としては、まず、総合教育科目の「心理学（知覚・認知）」および「心理学（行動・個性）」の2科目が、毎年夏期にスクーリング科目として開講されている。これらの科目は、広く心理学で扱っている問題を紹介し、それらに対するさまざまな科学的アプローチについて論じている。学生諸君にとっては、科学的な心理学で扱っている問題やそれらの研究方法はあまりなじみがないと思われるので、心理学分野の研究を志す諸君はぜひ履修してもらいたい。また、テキスト科目としては、総合教育科目の心理学は設置されていない。

専門教育科目に関しては、テキスト科目2科目が設置され、スクーリングでも毎年2科目が開講されている。テキスト科目の「心理学Ⅰ」は、「行動の科学と

としての心理学」という立場から、知覚、学習、感情の問題を論じている。このテキストを履修することによって、さまざまな専門用語があらわしている概念とそれら概念間の諸関係を理解することが求められる。履修者は、心理学関係の辞典や参考書を利用しながら確実に心理学的概念を習得することが望ましい。

テキスト科目の「心理学Ⅱ」は、「実験・測定・モデル」というサブタイトルが付けられているが、その名のとおり方法論に関する問題が論じられている。その意味で、この科目は心理学分野の研究を志す諸君にぜひ履修してもらいたい。内容的には数式なども多く使われていて非常に手ごわい科目となっている。履修するものは、すべての数式を理解し覚えようなどとは思わずに、その「精神」、すなわち概略的な考え方を読み取る努力をするとよいであろう。

専門のスクーリング科目のテーマは、担当教員の専門に応じて多岐にわたっている。これらの科目は通常、他の専門教育科目（テキスト科目、および他のスクーリング科目）を履修済みであることを前提としていることはない。したがって、履修を希望するものは、好きな順序で好きな科目を何科目でも履修することができる。（ただし、同じ担当者が同じ科目名で開講する科目を除く。）学生諸君は、特に自分の興味に近そうなものは積極的に履修してほしい。

しかし、心理学的な考え方は、慣れない初学者にとっては難解なことが多いので、ぜひ総合教育科目を履修しておくことが望ましい。不可能な場合には、あらかじめ各自概論書などを読み、勉強しておくことが必要であると考えてほしい。

心理学は、学習を進めていく上で積み重ねを必要とする程度が高い領域である。したがって心理学関係で卒業論文を書くことを目指す諸君や、ある程度体系的に心理学の勉強をしたいという諸君は、次のような履修の仕方を目指すといよいであろう。

まず、先に述べたように、総合教育科目の心理学については、スクーリング科目を履修することを目指すほしい。また、心理学の科目ではないが、統計学の科目を最低1科目履修することをお勧めする。総合教育科目の「統計学」であってもかまわないが、心理学の卒業論文に取り組もうと考えている場合には、専門教育科目の「心理・教育統計学」を履修・修得することが必要条件であると考えてほしい。心理学では、統計学的な考え方は非常に多用されているので、実際に卒業論文のためにデータを集めて分析する、という人以外も、統計学を学んでおくと、心理学の理解は大きく助けられるであろう。

専門教育科目は、テキスト科目もスクーリング科目も、興味があるものを、履修できるときに、好きな順序で、できるだけ多く履修するとよいであろう。卒業論文の指導を受けるためには、2科目以上の専門教育科目を修得していることを条件とする。ただし、先に述べたように、テキスト科目の「心理学Ⅱ」は非常に難解であるので、他の科目をいくつか履修した後にチャレンジしたほうがよいかもしれない。また、その他の科目に関しても、心理学関係の科目は比較的難解なものが多いので、専門科目を履修する前に、市販の入門的なテキストに目を通しておくとよいであろう。

心理学の領域は多岐にわたっており、同じ問題に対

しても複数のアプローチが可能な場合も多い。漠然とでも、心理学関係の卒業論文のテーマを考えている人は、なるべく早い時期に、スクーリングや科目試験、あるいは、郵送による質問などの機会を利用して教員に相談してもらいたい。

〈通信教育部における心理学の学習について〉

- ・専門教育科目のスクーリングを受講する場合は、極力、総合教育科目の心理学を修得しておくこと。やむをえない場合は、それに相当する予習が必要である。また、統計学の科目を修得しておくことが望ましい。
- ・心理学の卒業論文の作成を希望する学生は、指導に入るまでに、専門教育科目の心理学を2科目以上、および「心理・教育統計学」（「統計学（A）」も可）を修得しておくこと。

教育学専攻

1. 教育学の学問体系および履修の順序について

文学部の教育学は、①教育哲学、②日本教育史、③教育心理学、④比較教育学の各分野をいわば四本柱としている。これを実際に設置されている専門教育科目と対応させるならば、「教育思想史」が①および④に、「教育史」が②および④に、「教育心理学」および「心理・教育統計学」が③に該当する。ただし、この四分野は、それぞれが全く別個の視座や方法に基づいて、成立しているわけではない。各分野とも、「教育」という視座を共有し、「教育」という営みの追究を目指して展開される学的営為であることにはかわりはない。この「教育」という視座をとりわけて問題とする分野のことを、私たちは教育基礎論と呼び、上記四分野の土台として最も重視する。設置科目としては、「教育学」がこの学に相当する。したがって、教育学関係科目の履修は、まずは「教育学」から開始し、その上で各分野の学習に向かうことが望まれる（各分野の順序は特に考慮するには及ばない）。またスクーリング科目として「教育学特殊」が設置されているので、そこでの特殊テーマに関する講義も勉学や研究の参考となるであろう。さらには、教職課程設置の諸科目も上記のものに関連しているので、履修してみるのも良い。

2. テキスト科目とスクーリング科目との関係について

上記のテキスト科目以外に、毎年二つのスクーリング科目（夏期一科目・夜間一科目）を開設している。スクーリングの二科目は、上記の①または②と③、もしくは①または④と③の組み合わせで開設されており、いずれも上記の四分野の学習を補強することを目指している（ただし、科目名は担当者によって異なる）。したがって、スクーリング科目も、上記「教育学」履修後であれば、どのような順序で履修しても構わない。

3. 求められる学習態度、入門書、参考文献などについて

教育学はそれ自体がすでに学際的かつ総合的傾向をもつ学問分野である。それゆえに、学習者の側に「教育」という視座が確保されていなければ、その学的営みは求心力を失い、拡散されてしまう恐れを常に孕ん

でいる。この意味からも、教育学の学習にとって最も根本的な要件は、「教育とは何か」を絶えず問い続ける姿勢だといえる。村井実『教育学入門(上)(下)』（『村井実著作集』第1巻、小学館、1988年、所収）や、村井実『「善さ」の復興』（東洋館出版、1998年）など

は私たちにその自覚を喚起してくれる書である。なお、これ以外の文献については、三田哲学会 HP 掲載の『哲学 別冊文献案内』（<http://www.flet.keio.ac.jp/~bibiken/mita-tetsu/10/>）を参照されたい。

経済学部専門教育科目

はじめに

経済学部通信教育課程において学ぶ諸君は、専門教育科目を履修して、所定の単位を修得しなければならない。これらの履修科目の中には、6科目の必修専門科目が含まれている。学則にも明示されている通り、それらの必修科目は、「経済原論（ミクロ経済学）」、「経済原論（マクロ経済学）」、「経済政策学」、「経済史」、「財政論」、「金融論」、そして「経営学」の7科目である。これらの必修科目は、経済学の様々な分野について学習を行う上で、最も基本的な基礎知識を与えてくれるものであり、先ず、何よりも先にしっかりとその内容を理解し、その知識や考え方を身につけたものとしなければならない。さらに、専門教育科目は、第Ⅰ類から、第Ⅶ類にいたる、7つの分野から構成されている。この類の構成は、経済学および商学のさまざまな教科目の分野別メニューを表しているとともに、これらの分野の専門科目をバランス良く履修することによって、経済学全体についての理解を深めることが出来るようになるといえる。そこで、以下において、これらの類の分類に沿いながら、スクーリング開講科目を含め、開設科目の履修上の注意点ならびにガイドラインを示してみることとしたい。

「別冊三田学会雑誌 スタディガイド」について

経済学部の通学課程では、基礎的な専門分野の履修について、学生の履修をガイドするために、多くの専門科目について、やさしくどのように学習をしていったらよいかを書きまとめた冊子がある。基礎的な専門科目の履修については、通学課程も通信教育課程も基本的には同じであり、この「スタディガイド」は、通信教育課程の学生諸君にも同じように役立つものと考えられる。

扱われている専門分野とは、経済史、マクロ経済学、ミクロ経済学、マルクス経済学、社会問題、統計学（計量経済学にもふれる）、環境経済学、経済思想の歴史、経済数学の分野である。これから経済学を勉強しようとする人々や、既に経済学の履修をはじめている人には、有効なガイドといえよう。

購入方法は『ニューズレター慶應通信』4月号を参照してください。

Ⅰ 経済理論・計量経済に関係する科目

経済理論・計量経済の分野については、「経済原論（ミクロ経済学）(E)」、「経済原論（マクロ経済学）(E)」、「統計学 (A)」が入門科目にあたり、それらの科目の参考文献が入門書に相当する。

経済理論

経済学は大まかに言って、ミクロ・マクロの体系からなる経済理論、統計的方法を用いる現状分析、および史料による歴史的事実を目指す経済史からなる。その中で経済理論は、ありとあらゆる経済学での応用分野にとっての不可欠な分析用具を提供するものであり、その基本的内容は世界基準として定型化されている。したがって経済学部で学ぶ学生は、まずミクロ・マクロ経済理論の基礎を十分に学習しておくことが望ましい。

ミクロ経済学およびマクロ経済学の基礎理論を扱う科目が「経済原論（ミクロ経済学）」、「経済原論（マクロ経済学）」である。これらは必修科目という位置づけからわかるように、他の多くの経済学の科目に対する予備知識とされるべき科目である。マクロ経済学が国民総生産・失業率・物価水準といった経済全体

の集計量を問題にするのに対し、ミクロ経済学は個々の経済主体（家計・企業など）の経済活動に焦点を当てる。「経済原論（マクロ経済学）」で学んだ知識とともに、より進んだ形で国民所得の決定やその統御を目指すマクロ経済政策について学ぶのが「国民所得論」である。同様に「経済原論（マクロ経済学）」での理論に基づいて、景気循環や経済成長といった国民所得の変動について学ぶのが「経済変動論」である。

経済理論は複雑な現実の経済現象に対して、一貫したものの見方を提供してくれる。そしてどんな応用分野にも適用される理論を学ぶためには、単なる暗記などではなく、しつこく自分の頭で考える姿勢が必要となることに注意してもらいたい。最後に、経済学および経済理論の広範な体系を初学者にとっても学びやすい形で解説している書物として、以下のものを挙げておく。

ポール・クルーグマン、ロビン・ウェルス『クルーグマン ミクロ経済学』『クルーグマン マクロ経済学』大山他訳（東洋経済新報社）

計量経済学

計量経済学は、「経済原論（ミクロ経済学）(E)」、「経済原論（マクロ経済学）(E)」レベルの経済理論を用いて、現実の経済を「統計学 (A)」を基礎としてデータを用いて分析する。

経済理論・計量経済に関する科目は、最初にやさしい理論、手法を学び、徐々に複雑な理論、手法を学んでいく。これは、現実の複雑な経済を分析するにあたって必要なステップであるので、読み飛ばすことなく各章を順番にしっかりと学習していくことが不可欠である。また、単に読んでいただけでは理解しているかどうかの点検ができない。必ず、各章を読み終わるまでにその章についての練習問題に挑戦し、理解の深さについてチェックする必要がある。

この分野の研究を志す学生は、常に現実の経済問題への応用を頭に入れておくことをお勧めする。新聞、各経済雑誌を読みながら現実の経済問題を理論を用いて考える習慣をつけていくことが、問題発見、そして独自の論文を書くための出発点となる。また、政府機関が出版している各種白書、研究所が出版する報告書の多くに理論・計量的な分析が数多くあるので、関心のある経済問題については出来る限り読むようにして欲しい。

なお、これらの科目の履修にあたっての案内を、もっと詳しく知りたい人は、『別冊三田会雑誌 スタディガイド』の、「第2章 マクロ経済学」、「第3章 ミクロ経済学」、そして、「第6章 統計学」の各章を読みたい。

II 経済史・学史・思想史に関係する科目

経済史

経済には歴史的に形成された現象が多々あり、それらのことは必ずしも理論的には理解できず、歴史的に分析してみる必要がある。経済学において経済史が重視されている理由はここにある。なお経済史は、経済学の一分野であるとともに、歴史学の一潮流を構成するものであり、履修にあたっては、経済学の基礎的知識とともに、歴史に生きる人間の社会的・文化的営為についても幅広い知識と洞察力が要求される。履修条件は特にないが、まずは必修科目である「経済史」をよく学習し、その後、西洋経済史および日本経済史の科目別履修要領にしたがって学習すること。経済史の学習においては、結果よりも学習の過程が重要である。

なお、詳しくは、『別冊三田学会雑誌 スタディガイド』の「第1章 経済史」の章を読みたい。

学史・思想史

通信教育課程には、テキスト及びスクーリングにより「経済学史」、「社会思想史」等の科目が設置されている。まず、これらの学問分野について簡単に説明したい。経済学は、堅固な学問体系を誇る科学ではあるが、その進歩が本質的なものであるかどうかは議論のあるところである。もし、過去における経済学のディシプリンが現代のそれよりも劣っているということが自明の理でないとすれば、経済学の過去をふりかえってみることに多様な意義が存することになる。このような立場から経済学の過去を扱うのが経済学史である。さらに、経済学という狭い枠を越えて、社会というものについてのすべての言説を歴史的観点から問題にしようとするのが、社会思想、社会思想史であ

る。ここには、経済についての言説のみならず、法思想史、政治思想史、そして場合によってはその他の知の領域についての歴史的展開も含まれる。したがって、社会思想史のほうが経済学史よりも扱う範囲は広範なものである。

つぎにこれらの分野を学ぶ場合の準備について述べてみよう。まずは、受講者が現代の諸問題についての鋭い問題意識をもっていることが望まれる。問題は、さしあたり経済問題でもよいし、あるいは社会問題であつてもかまわない。さらに、各人がなんらかの意味での歴史的関心を有していることが要求される。現代の問題はすべて過去に通じているからである。現代の問題を正確に理解するための一つの方法が歴史的な接近方法だといってもよいだろう。

最後に、それぞれの科目について前提とされることについてふれたい。上記の科目全般について歴史的素養が必要とされるから、経済史、あるいは歴史学の講義に接しておくことは良い準備となるだろう。これによって歴史的センスがみがかれるからである。さらに、経済学史については、経済理論の入門講義を聴講しておくことがよいだろう。また、社会思想史については、とりわけ社会と自己とのかわりについて自覚的に認識しておくことが必要である。日常茶飯におきている問題を実感としてだけでなく、整理した上で客観的にそして理論的にとらえることが望まれる。こうしたことすべてが、社会思想史研究への良きイントロダクションになる。

III 経済政策に関係する科目

経済政策分野には2つの主要な目的がある。第1は、個別の経済現象の理論的な意味を明らかにすることであり、第2は、そのような理解に基づき、貧困の解消、不公平の是正、物価の安定、経済発展等、具体的問題解決のための処方箋を立案することである。従って、まず、マクロ経済学やミクロ経済学等の基礎理論を十分に理解する必要がある。その一方で、新聞、白書類などを通じて現実経済の問題についての理解を深め、経済政策についての関心を高めておいて欲しい。

テキスト科目としては、「経済政策学」、「財政論」、「金融論」、「社会政策」が用意され、スクーリングでは、それらに加えて、「工業経済論」、「社会福祉論」、「公共経済学」などが開講されている。「経済原論」を深く学習した上でそれらに臨めば、一層充実したものになるであろう。

IV 日本経済・国際経済に関係する科目

この分野の専門科目には、「日本経済論」、「国際貿易論」、「経済発展論」など、経済学における応用の分野や現状分析の分野が含まれている。現実の経済を分析しようとするとき、理論や経済史、さらには政策の基礎が必要だが、それと同時に、具体的な経済現象についての個別的な知識や理論がなくてはならない。特に、現在、世界の経済は、グローバル化の進展の中で、

極めて強い相互依存の体系に移行する過程の中にある。このような現実を理解しようとするとき、国際経済学や経済発展論の知識は欠くことが出来ない。スクーリング科目として「国際経済学」、「国際金融論」、「世界経済論」などが開講されている。

この類の科目の履修にあたっての履修条件は、先ず何よりも、先に述べられた、必修科目の理解を深めることにある。国際経済や経済発展の分野では、マクロとミクロの経済理論の知識を前提にして、さまざまなモデルや理論が展開される。また、具体的な経済を分析しようとするならば、歴史的な背景や、政策や制度の基礎知識はどうしても必要となる。また、現実の経済を対象とするには、さまざまなデータを収集したり分析したりすることになる。そこでは統計学の知識が必要になることは言うまでもない。急がば回れ、先ず、経済学の基礎をしっかりと身につけることが、この分野における研究のためには不可欠となろう。

V 環境・社会に関係する科目

この分野の専門科目には、テキスト科目としては「地理学」、「都市社会学」、またスクーリング科目としては「経済地理」、「社会史」といった、経済現象や経済活動をより深く理解しようとする際に関連してくる隣接諸科学の学問分野が含まれている。途上国の抱える経済問題の中心には、人口や環境、そして都市や地域の問題がある。先進国においても、少子高齢化や女性の社会進出、環境問題や都市問題、地方の過疎化など社会問題はきわめて重要な問題といえる。これらをはじめとした、現代社会において看取される諸問題の現状や課題、背景、歴史的経緯、分析方法を学び、グローバルな視点から学習することが、この分野の共通したテーマである。また、経済活動の担い手である「人」にとりわけ注目し、社会を構成する様々な要素と人との関係を歴史的視点から学ぶことも、この分野の重要な課題の一つである。狭義の経済学だけでなく、人や社会に関わるこれらの科目を習得することが、社会科学を学ぶうえで必要な思考力を高め、視野を広げることにつながるであろう。

VI 商学関係の科目

この分野は、商学系統の学問分野であり、経営学、会計学、商業学の3つの分野から構成される。

【経営学】

経営学は、企業を対象としてその行動や構造を明らかにする学問である。企業は、現代経済の中心主体として価値を創造し、財・サービスの供給や雇用機会の創出に寄与している。その際、もちろん、社会のルールにしたがわなければならない。さらに、情報通信技術の発展や経済のグローバル化といった劇的な環境変化によって、企業の経営にはかなり複雑な問題が

きつけられている。

経営学は、環境変化に直面している企業を「組織」としてとらえ、その仕組みを解明していく。この分野は、企業のどのような特徴に焦点を合わせるかによって分化している。したがって、企業の戦略、経営者の役割、組織の性質やデザイン、組織形態の進化と多様性、企業倫理、企業文化、そして企業間関係などの多様な問題を扱う。経営学は、ミクロ経済学とも深い関係をもっているが、独自の観点を併せもっており、事例研究や計量的手法なども適宜援用しながら、多面的な観点からの企業の理解が模索されている。

【会計学】

会計は、経済主体の活動を主に貨幣額によって記録・測定し、これを利害関係者に伝達する行為であって、利害関係者の意思決定に資することを目的として行われる。会計学は、財務会計論と管理会計論の2つに大別される。財務会計論は、企業の資本および損益を測定し経営成績ならびに財政状態を明らかにして、これを企業の外部利害関係者に報告するための会計を研究領域とする。他方、管理会計論は、経営上の意思決定を行い経営活動の業績を評価する上で有用となる情報を、企業内部の管理者各層に提供するための会計を研究領域とする。これらに加え、会計情報の信頼性を確保するために行われる会計監査も会計分野の重要な研究領域となっている。

【商業学】

商業学は、ミクロ・マーケティング論とマクロ・マーケティング論に大別される。ミクロ・マーケティング論は、個別企業のマーケティング活動（具体的には、製品、価格、チャネル、プロモーション等に関する意思決定と管理）とそれに関連する消費者行動を、また、マクロ・マーケティング論は、それらが集計された概念として、社会的に構造化・制度化されたマーケティング・システム（例えば、日本の流通機構）を、それぞれ対象として扱う。いずれのタイプのマーケティング論であっても、それぞれの対象とそれを取り巻くマーケティング環境との相互作用に着目しながら、様々なマーケティング現象を客観的に記述・説明・予測・統制することを目標としている。

商学関係の専門教育科目としては、必修科目である「経営学」をはじめ9科目ほどがテキスト科目として設置されているほか、スクーリング科目として毎年3～4科目が開講されており、商学関係の科目を幅広く学ぶことができるようになっている。詳しい内容・学習方法については、それぞれの科目の科目別履修要領を熟読してもらいたい。なお、スクーリング科目は毎年同じ科目が開講されるわけではないので履修にあたっては十分注意して欲しい。

VII 法律に関係する科目

法律に関する科目の履修上のガイダンスは、法学部の履修要領を参照されたい。

法律学分野

法律学は、きわめて体系的な学問です。その全体が一つの体系になっているため、その体系に則り、最初は基本的な科目から学び、その基礎知識の上に成立する特別法を後から学ばなければ、本質的な理解には達し得ません。

法と呼ばれるものは、広く考えれば様々な社会の慣習等も含めた、当該社会のルールを意味します。しかし、現在“法律”と呼ばれるものは、憲法をその頂点とし、国会の議決を経て制定された国家の法を意味します。

法学を大別すると、基礎法学と解釈学に分類できます。法が成り立つ基礎に遡ってそのあり方を模索するのが基礎法学ですが、それには歴史的側面から学ぶ「法制史」、思想的側面から学ぶ「法哲学」、あるいは諸外国の法制度から示唆を得る「外国法」が含まれます。これに対し、現行法の解釈・運用のあり方を条文・裁判例を通じて学ぶ分野は、広く法解釈学と呼ばれています。

法解釈学の対象である法律は、その頂点に「憲法」を置きます。法律科目を学ぶ最初は、法を学ぶ意義および法の全体像を知るための「法学（憲法を含む）」と、「憲法」を学ぶことから始めるべきなのです。法律学は伝統的に、私法と公法の二つの系統で考えられてきました。私法領域とは私人間の法律関係（契約、民事責任、親族、相続など）を規定するもの、そして公法領域とは国家対国家・国家の行政主体・そして国家と私人の関係を規定する領域です。各々の領域は、その基本的部分から体系立てて学ぶ方が理解し易く、また早く効率的に習得できます。

私法領域を学ぶには、その全ての基本となる「民法」から学習すべきでしょう。法律は一般法と特別法という関係で捉えられます。全体的かつ基本となる原則を定める一般法に対して、より限定された対象にとって特に必要とされる特則を定めるのが特別法です。例を挙げれば、一般的に全ての私人の関係を規定する民法の中で契約等の概念は定められますが、これに対して商法は、特にその中でも企業の取引等を対象として特別な規定を定めています。基本原則は民法にあり、その構造が理解できていることを前提として、商法の議論はなされるのです。そのため、まず基本構造を理解した後特別法を学ぶ方が、体系的に無理がなくかつ早く理解できます。また知的財産法も、基本的な財産法である民法の応用といつてよいでしょう。

同様に公法もまた体系的に学ぶべきです。ただし公法領域は、国家が私人の罪を律する「刑法」部門、国内の行政主体間及び国家と私人の関係を律する「行政法」部門、あるいは国際間の国家の関係を律する「国際法」部門等に分類されます。各部門は直列的ではなく、むしろ憲法を頂点としてその下に並列して存在しています。従って、どの分野を先に学ばなければならないという順位はありません。強いていうなら、初学者が比較的取り組みやすい領域は、おそらく「刑法」でしょう。窃盗や殺人のように我々の頭で実例が想像し易く、かつそこで求められるのは、被疑者・被告人となった者の人権をどう守るかという問題でもあり、憲法をそのままに体现する部門といえるからです。

上記の二領域に加え、現代社会では第三の領域たる社会法のウェイトも増しています。社会法とは、私法の行き過ぎた形式的平等を是正するため、いわば社会的弱者に対し国家的視点から保護を加えるために形成された領域です。現代社会では、労働者と使用者との間を規律する「労働法」、企業間・国家間の公正競争を担保する「経済法」などがあげられます。この領域は、一方で私人間の契約等を基礎としつつ、他方その総合的コントロールを国家的視点から行うという意味で行政法学であるといえます。従って、社会法は公法と私法の双方にまたがる領域として、上述の体系が理解できた後に取りかかるべきです。

以上のような法の体系をふまえながら、計画的に学習することを、心がけていただきたいと思います。

法哲学部門

●法哲学という分野

基礎法学の中心科目の一つである法哲学は、個別の法分野を扱う実定法学の科目とは異なり、広く「法的なもの」「法一般」を対象としてその性格・本質・機能などについて哲学的・理論的に分析することを主な目的としている。その成果はしばしば、他の法律科目を学修する前提としての導入段階と、それらの履修を終えたのちに「では法とは何であったか」と振り返って考えるための最終段階において扱われてきた。本課程のカリキュラム上は主として後者を念頭に配置されているので、実定法学の科目をある程度履修し、法解釈や法的思考についての経験を得た上で履修することを勧める。

法一般について哲学的・理論的に分析することの主

な意義は、現に存在する「ある法」とは異なる「あるべき法」について考える点にある。たとえば、適切な法解釈を可能にするためには法がどのような性質を備えていなくてはならないか。法の目的は機会の平等に置かれるべきか、結果の平等を目指すべきか。あるいは、道徳的な理念を法によって強制することはどこまで・どのような理由で許されるのか。これらの問いに対しては、現実の法がどのようなになっているかという問題とは別に、どうあるのが正しいかという議論を立てることができる。だが逆に言えば法哲学の議論において実定法を十分な根拠とすることは許されない（それは「現存するが不正な法」かもしれない）、それ以外の論拠によって自説を正当化する必要がある。このため、法哲学を十分に理解し自分でも議論できるようになるためには、むしろ法律学以外の分野（哲学を中心とするがそれに限られない）に対する広い理解が必要になるだろう。履修にあたってはその点に注意し、

政治学・経済学なども含めた幅広い視野を得るように努めてほしい。

●入門書・概説書

テキストについては2018年に全面書換を行なった。参考文献についても新しいテキストで詳細に説明してあるが、たとえば以下のような最近の教科書が参考になるだろう。瀧川・宇佐美・大屋『法哲学』（有斐閣、2014年）、深田・濱編『よくわかる法哲学・法思想〔第2版〕』（ミネルヴァ書房、2015年）。読んで面白いものとして、長尾龍一『法哲学入門』（講談社学術文庫、2007年）も勧める。

●参考文献・資料類

特に個々の思想家の見解については、哲学の文献を参照することが有用である。また、『岩波哲学・思想辞典』（岩波書店、1998年）なども併用するとよい。

憲法部門

憲法とは、国家統治の組織と作用の基本法で、その目的は、全ての国民の個人としての尊厳が確保された国家生活の実現である。そのために、全ての国民が、自由で、平等で、適正に扱われ、正当な待遇を受け、平和裏に、個性的に欲望を充足できる（つまり、「自分らしく生きられる」幸福な）状況を実現するために、権力の在り方を規制するものである。これを換言するならば、全ての国民の個性が解放されていながらも、同時に、全体として秩序が保たれた国家生活の実現である。

このような憲法は、最高法として、他の諸法を違憲審査の対象とするもので、そういう意味で、国家基本六法の中で唯一超然とした、いわば「独立王国」である。

また、どの国でも、憲法は、独立、敗戦、統合などといった大きな歴史的出来事に際して作られるものである。だから、憲法の学習に際しては、いわゆる法学概論に加えて、歴史、哲学等、広く人間に関する知識と洞察が不可欠になる。

1. テキスト（科目試験）とスクーリングの関係

テキストは、参考書を併用して、憲法の全体的かつ体系的な学習を期待するものである。他方、スクーリングは、時間の制約がある反面、学生が担当者に直接出会える機会でもあるので、むしろ、現代的で身近な憲法問題の解説を通していわゆる憲法感覚を伝えることを目的としている。

2. 憲法の学習方法

まず、自分で気に入った（つまり、読み易い）版の新しい参考書を書店で見つけて通読し、加えて、配本テキストで日本国憲法の基本構造を知り、さらに、スクーリングで新しい問題の意味を知れば、憲法の学習は完了する。その際、常に、専門的な単語（用語）の意味（定義）と原理（原則）の意味（条件）を確認しながら学習を進めることがコツである。

行政法部門

1. 「行政法」は、国や地方公共団体が登場するあらゆる法律関係を学習の対象に設定する。そのなかには、行政内部の話も出てくるし、行政と国民（私人）の関係において運転免許やパスポートの取得、公営による上下水道・病院・交通等のサービスの提供、飲食店営業や酒類販売、公益事業（電気・ガス・運輸・通信・放送等）への許認可など、学生諸君にとって身近な話も出てくる。守備範囲が広く、したがって「行政法」に関わる法律は数多くあるが、「行政法」という一般的かつ形式的な法典は存在しない。民事法、刑事法、訴訟手続法、社会法など、他の法分野も当然包含した上で、「行政法」と称するだけの特色を見極めることが「行政法」研究の最終ゴールに設定されている。このように行政法は、身近な存在でありながら、そのフィールドは途方もなく大きいものである。

2. 省庁再編、地方分権、規制緩和、情報公開、政策評価など、行政組織の在り方を含めた行政システム自体は変革し続けている。日々の報道にも、行政法の学習素材は無数に見つけることができる。単に教科書を丸暗記するといった学習ではなく、次々にあらわれる行政現象をどのように解けばよいか、頭の中でシミュレーションしてみるという学習が極めて有効になってくる。

3. 他の法律学科目として、憲法及び民法（総則・物権・債権）の学習がある程度終了していることが望ましい。また、行政法の基礎理論は、しばしば行政事件訴訟法等の訴訟手続法とセットになったものなので、民事訴訟法を学習することも望まれる。

4. 初学者はまず教科書から学習に入ることになるだろうが、既存の教科書は性質上、どうしても抽象的な記述が多くならざるを得ない。そのなかでも、初学者にとって読みやすく、学問的水準も保たれた教科書として、櫻井敬子・橋本博之『行政法』（弘文堂）、大橋洋一『行政法Ⅰ・Ⅱ』（有斐閣）等を勧めたい。また、先述のとおり、できる限り裁判判決や日常的行政現象を念頭に置いて、論点を理解する工夫が望まれる。曾和俊文・金子正史『事例研究行政法』（日本評論社）、大貫裕之・土田伸也『行政法事案解析の作法』（日本評論社）、北村和夫・深澤龍一郎・飯島淳子・磯部哲『事例から行政法を考える』（有斐閣）等の事例問題集の活用を勧めたい。

刑法部門

1. 刑法学とは

刑法学とは、現行刑罰法規（とくに刑法典）を対象とする法解釈学の一部門です。刑法典は、第1編の「総則」と第2編の「罪」という2つの部分によって構成されています。総則とは、あらゆる犯罪に共通するものをまとめて一般的に扱った部分のことをいいます。たとえば、故意は、傷害罪であれ、文書偽造罪であれ、すべての犯罪に共通して問題となります。そこで、刑法は、総則の38条において、故意について一般的に規定しています。個別の犯罪について規定した刑罰法規は、刑法典の第2編「罪」以外にも数多く存在しますが、刑法典の総則は、特別刑法の処罰規定にも適用されるのが原則で

す（刑法8条）。

2. 刑法総論と刑法各論

総論と各則の区別に対応して、刑法学は、総論と各論とに分かれます。この両方を勉強しなければ、刑法をきちんと学んだことにはなりません。各論は個別の犯罪（たとえば、殺人罪、強盗罪、放火罪…）を規定した刑罰法規の解釈論を内容としています。これに対し、総論は、犯罪と刑罰の基礎理論や犯罪一般に共通する成立要件をめぐる議論などを対象とします。各論の勉強は、「障害物競走」のようなもので、個々の論点をじっくり学んでいけばいつかマスターできますが、総論の勉強はまるで「棒高とび」で、総論特有の体系的な思考を身につけないかぎり、「ものにする」ことはできないという難しさがあります。

3. 刑法学の学び方

総論と各論の勉強方法については、どちらから先に学びはじめなければならないという決まりはありません。各論の方が具体的に理解しやすいと感じる人も少なくないでしょうし、総論の議論がわかっていないと各論も理解できないと考える人も多いでしょう。お勧めしたいのは、まずは平易な入門書を読んで、刑法学の全体を概観した後に、総論または各論を詳しく勉強するという学習方法です。たとえば、最初に読むのに適した本として、井田良『基礎から学ぶ刑事法〔第6版〕』（有斐閣、2017年）があります。また、刑法総論・各論の入門書として、それぞれ、井田良『入門刑法学・総論』（有斐閣、第2版、2018年）、同『入門刑法学・各論』（有斐閣、第2版、2018年）があります。これらを通読した上で、指定テキストに取り組むのが良いでしょう。

法律学のどの分野も独学には困難が伴いますが、特に刑法学は概念が複雑でテキストのみによる学習ではなかなか成果が上がらない場合も多いと思います。仲間とゼミを組んで議論することが効果的だと思いますが、スクーリングを活用して教員の言葉に耳を傾け、また難しい論点については勇気を奮って質問に行くことをお勧めします。

刑事訴訟法部門

刑事訴訟法は、実体法である刑法を具体的に実現する手続法です。民法や刑法のような実体法は、抽象的に権利・義務や国家刑罰権を定めていますが、その実現のためには手続法を定めておかねばなりません。そこで、民事について民事訴訟法、刑事について刑事訴訟法があります。

民事訴訟法は、私的紛争を法的に解決するための手続法ですが、刑事訴訟法は、国家刑罰権の実現のための手続法です。

刑事訴訟法では、刑法が実現される過程を学ぶので、刑法の知識を前提とします。

刑事訴訟法を学ぶにあたっては、訴訟手続全体についての考察が必要です。訴訟手続のそれぞれの段階での事象は、相互に密接に関連しています。手続の発展的・有機的関連を全体的に考察することが重要です。

法律を学ぶにあたっては、法律概念を正確に理解し

てください。ことに刑事訴訟法は、個人の権利を大きく制約することがあるので、その概念があいまいでは基本的人権の保障はおぼつかないこととなってしまいます。

刑事訴訟法ではテキスト科目もスクーリング科目も基本的に同じです。

法律を勉強する際には、かならず条文にあたってください。いわゆる「六法」は常に手元に置いておく必要があります。ただ、刑事訴訟法の場合、構成が総則・各則となっていて、実際の手続の流れに沿っていませんから、条文をひくのがややめんどうと感じる人がいるかもしれません。

刑事訴訟法では具体的な事件の解決に関心を払います。したがって、判例集も重要な資料ですから、図書館などで参照してください。なお、いわゆる判例解説は、解説者の視点がはいっていますから、判例集に直接あたって読むことが大切です。

最後に、刑事訴訟法の入門書として、亀井源太郎ほか『プロセス講義刑事訴訟法』（信山社、2016年）をあけておきます。

その他、刑事訴訟法を学ぶ上では、裁判傍聴も欠かせません。近くの裁判所について刑事裁判を傍聴してみてください。

刑事政策学部門

刑事政策学は、犯罪の少ない安全な社会を創るための政策や制度のあり方を研究する学問です。具体的には、犯罪者に対しどのような刑罰や処分を設けるべきかという刑事制裁論と、犯罪者に対する刑罰や処分を執行する過程でどのような処遇や教育を行うべきかという犯罪者処遇論が中心となりますが、どのようにすれば犯罪や非行を未然に防ぐことができるかという犯罪予防論も重要です。犯罪被害を受けた被害者の立ち直りに向けどのように支援するのがよいかを検討する被害者学（被害者支援論）も欠くことのできない分野となっています。

いずれも犯罪（被害）の現状や制度の運用状況を踏まえたうえで政策や制度のあり方を検討する必要があるため、テキストだけでなく、各種の犯罪統計や白書を必ず参照するようにしてください。犯罪白書は、1次統計をわかりやすくまとめ、図表化したもので、これを常に参照しつつ、必要に応じて、元の統計（警察庁平成～年の犯罪、検察統計年報、司法統計年報、矯正統計年報Ⅰ・Ⅱ、保護統計年報など）にも当たってください。犯罪白書は、毎年、特集の部分があり、法務総合研究所が行った調査結果など貴重なデータが得られます。また犯罪白書以外にも、警察白書、青少年白書、高齢社会白書、男女共同参画白書、犯罪被害者白書なども大変参考になります。

また、勉強にあたっては、テキストである安部哲夫＝守山正編著『ビギナーズ刑事政策』（第3版）（成文堂、2017年）をしっかりと読むことから始める必要がありますが、テキストはレポート作成の上での単なる出発点にしか過ぎませんから、テキストを読むだけで終わってははいけません。テキストを読んだ上で、テキストに掲載されている参考文献や論文は勿論、更に

それらの中に示されている参考文献や論文といった具合に、当該問題に関する参考文献や論文を幅広く集め、読み込む必要があります。特に、刑事政策のような政策学は、犯罪情勢の変化や新しい立法などで常に変化していますので、図書館の文献目録やデータベース（CiNii 国立国会図書館蔵書検索など）を利用して、該当分野の新しい論文に必ず触れるようにしてください。関係論文が数多く掲載される雑誌や報告書の一覧（一般の法律雑誌を除く）を下に掲げておきます。

従って、レポートや科目試験は、テキスト以外の資料や文献にきちんと当たっていることが最低条件となります。テキストをまとめてあるだけのレポートは、何回提出されても合格にはなりません。数多くの参考文献に当たり、何が論点かを見極め、それについて洞察を加えることがレポートの課題です。ましてや、インターネットに掲載されている情報をコピーしてペーストして切り貼りしたようなレポートは添削の対象にはなりません。悪質なものは不正行為として処分の対象になりますので、くれぐれも注意してください。学問に近道はありません。時間をかけ、こつこつ地道に取り組んでください。

なお、刑事政策学に属するテーマで卒論を書くことを希望する場合、刑事政策学のレポートとテキスト科目試験の両方に合格していることが条件となりますので、注意してください。

参考雑誌・報告書一覧（法律主要雑誌は除く）

- ・警察 警察学論集、警察公論、警察時報、科学警察研究所研究部報告（防犯少年編）
- ・法務省・検察 罪と罰、研修、法律のひろば、法務省法務総合研究所研究部報告
- ・裁判所 法曹時報、家庭裁判月報（廃刊）、家裁調査官研究紀要（旧・調研紀要）
- ・矯正 刑政
- ・保護 更生保護学研究（「更生保護と犯罪予防」の事実上の後継雑誌）、更生保護
- ・その他 犯罪と非行、刑事法ジャーナル
- ・学会誌 刑法雑誌、犯罪社会学研究、犯罪心理学研究、矯正教育研究、被害者学研究犯罪学雑誌、警察政策、更生保護学研究

民法部門

1) 民法とは、その一 ～実質的民法と形式的民法～

民法とは、私法関係（←→公法関係）を規律する原則的な法（＝一般法）を、意味しています。個人と個人、会社と個人など、私達の私的法律関係を規律する、その法ルール、それが民法なのです。これが実質的にみた場合の民法の定義です。民法は、人が生まれてから死ぬまでの一生の活動にかかわる法律です。

他方、民法を形式的にみた場合には、皆さん方がもっている六法全書（ポケット六法や基本六法と呼ばれる市販の本）に掲載されている「民法典」と称される法典、それが民法に他なりません。それが形式的意義における民法です。

2) 民法とは、その二 ～一般私法～

私達は国家（日本国）という社会形態を組織し、そ

の中で社会生活を営んでいます。としますと、国家と私達との関係、換言すると私達の国民としての生活関係、これを「公法関係」といいますが、これを規律する法ルールが、「公法」と呼ばれるものです。

これに対して、国家とは直接的には関係することなく、私達相互の生活関係、これを「私法関係」といいますが、これを規律する法ルールが「私法」と呼ばれるものです。

私法と公法との区別を前提としますと、民法は私法に属し、その一つであり、その原則的なものです。この点から、民法は私法分野の基本法と呼ばれています。そしてここから、商法、会社法、消費者契約法、など、たくさんの私法の特別法が作られているのです。

3) 日本民法典の編成は ～五つの編～

先に述べてきたように、私達相互の私的法律関係を規律し、六法全書にのっている民法典、これが民法に他なりません。この民法典は、その編成として、次の五編より成っています。①第1編・総則、②第2編・物権、③第3編・債権、④第4編・親族、⑤第5編・相続、の五つです。通信教育課程における民法の学科目やテキストもまた、原則的には、この五つの編に即して、設置され配本されているのです。

4) 各編の内容は ～財産法（前三編）と家族法（後二編）～

民法典は総計1000条を越える大部のものです。各編毎にその内容を把握しておけば、それ程、とりつきにくいものでもありません。

①まず、総則編は、民法（主として財産法）における通則を定めています。ここでの学習が、民法を理解するための、土台であり基盤となります。まず、第1歩の作業です。平野裕之「コア・テキスト 民法Ⅰ 民法総則 第2版」（新世社、2017年）を参照してください。

②次に、物権編は、物を直接的に支配しうる権利として、所有権を中心として、各種の物権（占有権・地上権・永小作権・地役権・入会権）を定めています。その前半部分の「ヤマ場」は物権変動論です。その後半部分の担保物権（留置権・先取特権・質権・抵当権）についての諸規定に関しては、近時、学問的にも実務的にも、極めて大事なものとなってきています。石田・田高・占部ほか『民法Ⅱ物権 リーガルクエスト〔第2版〕』（有斐閣、2017年）を参照してください。

③さらに、債権編には、その内容上二つに分かれ、債権一般に関する総則、そして各個の債権発生原因についての特則、を定めるものです。前者は債権法総論、後者は債権法各論、と呼ばれています。池田真朗『スタートライン債権法〔第5版〕』（日本評論社、2010年）を参照してください。

④また、親族編は、家族関係としての婚姻・親子・後見の扶養について、定めています。

⑤最後に、相続編は、人の死亡をきっかけとして生ずる財産関係、つまり財産の承継たる相続や遺言について、定めています。④⑤については、大伏由子＝石井美智子＝常岡史子＝松尾知子『親族・相続法〔第2版〕』（弘文堂、2016年）を参照してください。

以上、民法は五つの編より成り、前三編は財産法であり、後二編は家族法である、ということができます。

5) 学習の基本姿勢は——読むこと、聞くこと、書くこと、話すこと——

民法の学習に限りませんが、まずテキストを読むことです。また、スクーリングで講義を聞くことも、大事です。耳から聴いて、理解するのです。レポート作成も、そして報告したり、相互に議論することも、肝要です。慶友会の仲間とゼミを組んで、議論しながら勉強するのも大変有益です。さらにひとこと加えれば、民法の学習には、日頃から相手の立場に立って物事を考える習慣をつけることが有益です。

なお、民法は相次いで改正が行われましたが、債権関係については2020年、相続編については2022年施行となっているため、改正法を勉強していなくても不利益に扱いません。

商法部門

商法分野からは、「商法総則・商行為法」、「会社法」、「保険法・海商法」、「手形法」が専門教育科目として設置されている。これらは実質的意義における商法の重要分野である。

商法は、その内容から企業法と言い換えることができ、企業組織法と企業取引法とで構成される。企業組織法の最重要分野が会社法（会社法という名称の単独の法律が編纂されている）である。もともと、会社は数ある企業組織の1つに過ぎず、個人企業が代表する他の企業組織については商法総則（商法典の第1編に該当し、商法分野全体の総論もその範囲に含まれる）が規整している。会社法と商法総則は平成17年に大きく改正されている（会社法は平成26年にも大幅に改正されており、さらに、平成31年の通常国会に次の改正法案が提出される予定である）。企業取引の通則および各種営業について定めるのが商行為法（商法典の第2編に該当する。平成29年に改正されている）である。特殊な営業である保険業の組織と取引を対象とするのが保険法である（保険法、および保険業法という名称の法律が制定されており、平成20年に大改正されている）。海商法は、海上企業組織と海上企業取引についての特別法である（商法第3編、および国際海上物品運送法が中心となる。共に、平成30年に改正されている）。手形法（手形法、および小切手法という名称の法律が制定されている）は、企業の決済手段の1つである。なお、手形法・小切手法についても改正作業が進められている（なお、平成29年改正民法第3編第1章第7節に有価証券の通則が定められている）。

経済社会の仕組みを理解するには商法の勉強が必須だといえよう。特に、会社法は重要である。一方で、商法は、企業組織および企業取引についての法分野であるから、専門性・技術性が強く、保険法、海商法そして手形法についてはその傾向が顕著である。したがって、商法科目を履修するにあたっては、まず会社法および商法総則・商行為法から始めるとよいであろう。そして、この両科目についても同様であるが、保険法・海商法および手形法については、民法総論、債権総論および債権各論を履修した後で勉強を始めること効率的である（左記民法の各分野は、平成29年に改正

されたことに注意）。

商法は企業法であるから、経済社会の進展とともに頻繁に改正される。したがって、最新の実務動向に注意していると、商法の面白さが倍増するであろう。そして、商法分野の勉強には最新の文献・資料を用いなければならない。特に、法改正前の文献・資料に基づいてレポートを作成することがないように気をつけて欲しい。

民事訴訟法学部門

1. 民事訴訟法学の領域

(a) 狭義の民事訴訟と広義の民事訴訟

民事訴訟は民事紛争を法律に従って解決するための制度であり、その方法は、原告の法的な主張（例えば自己が権利者であるとの主張）が正しいか否かを、原告の主張とそれに対する被告の反論を聞き、両者の言い分が食い違っている点は証拠調べを行い、裁判所が判断するというものである。裁判所の判断は判決によってなされるから、民事訴訟は判決手続とも呼ばれる。判決手続以外に民事紛争の解決のための裁判手続としては、強制執行手続、民事保全手続、倒産処理手続などがある。

ところで強制執行手続と民事保全手続は、かつては民事訴訟法典に規定されていた。そこで、これらも民事訴訟といわれることがある（広義の民事訴訟）。また、判決手続に関する特別手続として、督促手続、手形・小切手訴訟、少額訴訟、人事訴訟、行政訴訟などがある。督促手続、手形・小切手訴訟、少額訴訟は民事訴訟法が規定しており、「民事訴訟法」のテキストにおいて説明がなされている。人事訴訟は人事訴訟法、行政訴訟は行政事件訴訟法が規定している。なお民事訴訟法が広義の民事訴訟手続を規定していないことから、一般に民事訴訟というときは狭義の意味で使用されている。

(b) 判決手続以外の紛争解決のための手続

強制執行手続は、債務名義といわれる給付請求権の存在を公証する文書（確定判決が代表的な債務名義）に基づいて、執行機関が請求権の実現を図る手続である。民事執行法が規定している。民事保全手続は、判決手続や強制執行は時間がかかるので、それらを補完するための手続であり、強制執行の実効性を確保するために、暫定的措置（仮差押え、仮処分）を行う手続である。民事保全法が規定している。倒産手続は債務者に対して複数の権利が競合しかつ債務者の財産が不足していて、それらを満足させることができない場合、総債権者が公平な満足を得るための手続である。倒産手続には債務者の財産を清算して各債権者に分配する手続と、債務を棚上げして債務者の更生を考える手続がある。前者は清算型といわれ、破産法、商法の特別清算手続が規定している。後者は再建型といわれ、会社更生法、民事再生法が規定している。

2. 本部門の履修の順序と基本的な学習態度

判決手続（狭義の民事訴訟）の原理や原則は、あらゆる民事の訴訟法や手続法の基礎や根幹に影響を与えているので、判決手続以外の民事訴訟法学（広

義の民事訴訟手続)の領域のいずれを学ぶにしても、まず判決手続を勉強することが必要である。そして、次に、それ以外の紛争解決のための手続や判決手続に関する特別訴訟手続を勉強するのがよい。すなわち、判決手続を規定している民事訴訟法をしっかり勉強して、この部門の特有の原理や基礎理論を修得し、手続的正義や手続保障というものについて具体的に理解することが重要である。

通信教育として開講されている科目名でいえば、まず「民事訴訟法」、次に「破産法」という順番になる。すなわち、テキスト科目としては、判決手続については「民事訴訟法」、倒産手続のうちの破産手続に関しては「破産法」という名称で、開講されている。スクーリングの科目も同様で、例年、この2科目が開講されている。なお強制執行手続と民事保全手続については、現在は開講されていない。

なお、勉強に際しては、法の改正に注意しなければならない。司法制度改革に伴い、民事訴訟法や関連する法律の改正は多い。このような状況であるから、勉強に際しては常に最新の六法を参照しなければならない。また参考書を利用する場合は、できる限り最新の法改正を織り込んでいるものを利用すべきである。もっとも、理論的な問題や法の改正に影響されない問題であれば、改正を記述していない参考書でも利用できるから、法の改正によって従前の参考書が価値がなくなるというものではない。

3. 本部門の参考書

開講されている「民事訴訟法」と「破産法」の勉強方法や参考書については、それぞれの講義要綱やレポート課題集の参考文献欄を参照すること。他の手続の場合は、手続を規定している法律名を表題とする本が参考書になる。すなわち、民事執行法、民事保全法、破産法、会社更生法、民事再生法等を題名にしている本である。ただし倒産手続に関しては、個々の法律名だけでなく、それらを統合した「倒産法」という本も出版されている。

本部門を最初に概観したい場合には、中野貞一郎『民事裁判入門〔第3版補訂版〕』(有斐閣・2012年)、上原敏夫ほか『民事訴訟法〔第7版〕』(有斐閣Sシリーズ) (有斐閣・2017年)などが、手頃な入門書である。「民事訴訟法」をもう少し本格的に学習する場合は、三木浩一ほか『民事訴訟法〔第3版〕』(有斐閣・2018年)を推薦する。

4. その他

民事訴訟法学者は一般に判決手続と関連手続を研究領域(守備範囲)にしている。日本民事訴訟法学会は毎年3月末に「民事訴訟雑誌」を刊行しているが、そこには判決手続(狭義の民事訴訟)に限らず、本部門(広義の民事訴訟)に関する最新の研究が発表されている。

社会法(労働法・経済法)部門

社会法という領域は、それまでの公法・私法という二分法からすれば、その双方の法領域にまたがる、第三の領域である。

社会法は、19世紀という資本主義社会草創期にお

いてその必要が生じ、創造された。19世紀前半の社会理念は、私人の自由と平等を重んじ、その権利の絶対性を尊重するあまり、私人間の契約に係る領域には国家は介入しないことを是とした。私人間の自由意思による契約は絶対であり、独立した私人が自ら決定したことは、そのまま尊重されることがより良い社会の形成につながると考えられたのである。しかし、法的主体間に存する事実上のアンバランスを無視した形式的平等主義は、結果として社会の貧富あるいは強者と弱者の間の不平等をかえって助長する結果となった。

19世紀後半になると、これらの社会的矛盾を是正するためには、私人間の契約に係る領域であっても、場合によっては国家的見地から政府が介入し、社会のバランスを改善する事が求められるようになる。そのためのルールを確定する、一種の政策的法領域が社会法と今日呼ばれている領域である。

この領域には、使用者と労働者という雇用に係る個人間のあるべきバランスを求める「労働法」、あるいは経済主体としての企業間もしくは国家間の取引に係る領域における・自由競争を確保しようとする「経済法」、個人の幸福追求を国家が如何に支援するかを政策的に遂行する「社会保障法」などが、含まれる。

この領域を学ぶには、まずその前提として契約とは何かが理解できていなければならない。労働契約にしても、商取引にしても、その基本は契約である。従って民法の学習は全ての基本であろう。しかし同時に、この領域は前述したとおり、一方で私人間の契約を対象としながら、場合によってはその契約を国家的見地から取り締まり、あるいは国家的見地からの給付に関する法体系である。だからこそ、憲法・行政法に関する知識が不可欠である。

このように、社会法を学ぶには、私法・公法にまたがる双方の理解が必要である。従って、この領域はむしろ基礎的・一般的法律科目を履修した後に学ぶべき、特別法の領域であることを自覚して欲しい。基礎がなければ、それらの修正原理としての「社会法」を学ぶことは困難である。更に、具体的紛争は民事訴訟として生ずることもあれば、事案によっては行政訴訟の形をとって提起される場合もある。将来この分野で卒論を書く者は、卒論指導にはいる前に、それら訴訟法に関する学習も同時にしておくべきであろう。

国際法部門

国際法とは

国際法とは、伝統的概念にしたがえば、国家を構成単位とする国際社会に妥当する法規範のことです。

国際法もまた法規範であるゆえ、憲法をはじめとする国内法諸分野と多くの特徴を共有しています。しかし、両者の間には、それらが妥当し、また逆にそれらを支える社会構造の相違に由来する決定的な相異点が存在しています。それは、立法府、行政府、司法府といった通常の近代的国内社会において法の諸々の作用を担う機関(特に、警察・検察や裁判所といった典型的な法の執行・強制機関)が、国際社会には存在しないという点です。そのため、国際法には、法の本質とも考えられる強制力が欠如しているものとみなされが

ちです。そこからさらに、「国際法は法か」という問いがしばしば発せられることとなります。

国際社会のこのような構造は、その構成単位である各国家が最高・絶対とされる主権を有し、それゆえにすべての国家は平等であり、上位者を認めないという法的擬制によって規定され、国際法理論もそれを前提として提示されてきました。国家と国家の関係ということで公法の一分野であるはずの国際法ですが、平等な法的地位にある諸国家間の関係が私法上の私人間関係に類似したものと観念されたため、近代国際法に関する学説及び実行は古代ローマ法に由来する私法理論に大幅に依拠することによって形成されました。しかし、20世紀（特に、第一次世界大戦後）に明白となる国際社会の構造変化によって、従来の国際法理論では理解され得ない事象が数多く生じています。

国際法の学び方

以上のような基本構造と歴史的背景を有する国際法の学習と理解のためには、法学の基礎理論（法解釈学のみならず、法哲学及び法史学を含む）、私法と公法に関する多面的な知識が必要とされることとなります。そしてそれらの知識をもとに次のように国際法の学習を進めればよいでしょう。

まず、テキスト〔大森他『よくわかる国際法』（ミネルヴァ書房、第2版、2014年）等〕によって国際法学の概要を把握し、次に専門的概説書によって体系的理解の獲得を目指すことをすすめます。さらに興味があれば、特定の分野や事項に関する個別の専門文献（単行書・雑誌論文）へと進めばよいでしょう。なお、教科書や文献の理解を深めるために、それらの中で引用されている条約や判例については資料集（条約集・判例集）〔位田他編『コンサイス条約集』（三省堂、第2版、2015年）等〕を参照することも重要です。

外国法部門

なぜ、外国法を学ぶか

外国法を学ぶ目的は、二つある。一つは、法の本質を問うためであり、もう一つは、現実の国際関係に役立てる為である。後者の目的の理由は明瞭である。友好的で、効率のよい国際関係を築くには、どんなレベルであっても、相手方の制度、機構、文化を理解することは基本的な必要条件であるからだ。この目的の為には、様々の国家の法を知ることが必要になってくる。しかし、法律学の研究において、特に重点が置かれているのは、フランス法及び、ドイツ法、そして英米法である。その理由は、第一の目的と深く関係してくる。

そして、慶應義塾のカリキュラムにおいて、外国法は、基礎法という分野に属するものとして、扱われている。そもそも、基礎法とは、法哲学のように法の本質を考えるための学問であり、また、憲法のように、国家及び、ある国の法制度及び理念の基礎を決定する法分野である。ではなぜ、外国法は基礎法に分類されるのだろうか。外国法を学ぶことによって何が見えてくるのであろうか。

日本の法律は、その後、独自の発展を遂げたとはいえ、近代の初期に、ヨーロッパに成立していた法及び、

法哲学を基礎に、制定された。それゆえ、現代においても、その理念を理解し、それが、新しい時代において、その普遍の理念がどのように生かされるべきかを考える為には、日本法の母法たるドイツ法、フランス法を知ることには大変有意義だと考えられる。これらの国家の法や、その理論を学ぶことにより、直接に日本法に利用し、その内容を充実させることができる。

では、英米法についてはどうであろうか。周知のごとく、英米法は、大陸法とは異なった理念によって、動いている。その特徴は、慣習をもとにした判例法であり、また、陪審制度など、独特の訴訟手続きを持っている。現実的な理由以外、この様に、異なった法制度を研究する理由は、どこにあるのだろうか。それは、法に対する異なったアプローチを学ぶことが、法の理解を深め、充実させるところにある。なぜ、法が存在するか、法の本質は、法はいかにあるべきか、これらの問いは、法を学ぶ者が、それにどっぷり浸かっている体制を学ぶだけでは、見えてこない場合が多い。異なる視点、異なるスタンスから、ものを考えることから、その本質や問題点が見えてくる場合が多いのである。外国法を学ぶということは、この、異なった視点を得ることだと言えよう。

部門共通—判例の読み方

現代の法律学では、より現実の紛争解決に近づくことのできる、リアリティのある学習が求められています。そのために、従来のいわゆる理論的な教科書だけでは足りず、実際の紛争とその解決策を示す「判例」の学習が重要になります。これは、憲法、行政法、刑法、民法、商法、民事訴訟法、刑事訴訟法、社会法等の各部門に共通の要請であるといえます。

判例の検索方法や読み方・学び方、そして法律学における判例の機能などを解説した総合的な判例学習書としては、池田真朗編著『判例学習のAtoZ』（有斐閣、2010年）があります。また、最近の類書として、田高寛貴ほか『リーガル・リサーチ&リポート』（有斐閣、2016年）があります。レポートおよび卒業論文作成のために必要な判例検索のノウハウは、上記書籍で十分に知ることができますが、万が一、不足がある場合には、法学関係の資料の検索方法を網羅的に紹介した、いしかわまりこほか『リーガル・リサーチ』（日本評論社、第5版、2016年）を参照してください。

判例学習の方法は、場面によって分けて考えることが必要です。

まず、普段の学習の際に、テキストで引用されている判例を参照し、理解を深めるための道具としては、市販の判例教材が役立ちます。たとえば、有斐閣の『判例百選』、信山社の『判例プラクティス』、日本評論社の『新・判例ハンドブック』の各シリーズは定評があります。これらは解説のついた教材ですが、事件の事実関係と判示内容の紹介に特化した教材もあります。レポート課題が法制度や判例・学説の批評を内容とする科目の場合、解説付きの教材を用いて論点についての理論的な理解を深めることが有効でしょう。他方、事例問題をレポート課題とする科目の場合、多数の判例を収録し、事実関係と判示内容を詳しく紹介し

ている教材を使用した方が、課題の趣旨の理解の助けになるかもしれません。

これに対し、レポートや卒業論文の作成の際に判例を参照する場合には、判例の出典そのものにあたり、原文を読む必要があります。その理由は、上で紹介したような判例教材における「事案の概要」や「判決要旨／決定要旨」は、執筆者の手により要約されたものであり、誤りが含まれている可能性が否定できないからです。自分の目で原文を読み、内容を確認したうえで、レポート・卒論に引用してください（なお、他人の要約を借用する行為は、「孫引き」として許されない行為とされており、場合によっては不正行為として扱われます）。

判例の原文を読むといっても、複数の当事者が登場する複雑な事件の場合、事実関係を理解するだけでも容易ではありません。特に民事判例にそのような傾向がみられますので、以下では、参考までに、前掲『判例学習のA to Z』の「序説」に沿って、判例の読み方のコツを説明します。

- ① まず、判例（事実、判旨）を読むときには、必ず紙と鉛筆を用意してください。最初にすべき作業は、事実関係の把握・整理です。事実関係を読む際には、

文章を、鉛筆で適宜区切りながら読んでください。最初に判旨を読んではいけません。

- ② 登場人物が多数ある事案、当事者の主張が多岐にわたる事案については、必ず関係図を描いてください。
- ③ さらに、取引関係がいくつか重なっているケースでは、それらを時系列で整理してみる必要があります。時の流れを示す直線の上に、日付を入れた出来事メモを順番に書き込んで行きます。これだけの準備作業を行ったうえで、
- ④ 原告が何を求めてどんな訴えを提起したのか、適用条文は何かを確認してください（この段階では、まだ判旨を読んではいけません）。適用条文は何法の何条なのかを想像し、その条文にあたって、規定内容を確認し、その条文では何が足りないのか、どんなことを足さないとこの紛争が解決しないのかを考えることが重要です。そして最後に、
- ⑤ 判旨を読んでください。

かなり面倒な作業に思えるかもしれませんが、法律学というのは、実社会で日々生起する法的紛争を解決するためのものだという原点を思い出して、粘り強く学習してください。

政治学分野

本塾の政治学教育にかかる科目は、大別して、政治思想論、政治・社会論、日本政治論、地域研究・比較政治論、国際政治論、という5部門に分かれています。ただ、これら5部門は相互に関連しており、バランスよく履修することが、政治学ないしは政治という現象を正しく理解するために必要となります。内容をごく簡潔に要約すれば以下の通りです。政治思想論は古今東西の政治理論ないし政治思想の理解を深めるための科目です。政治・社会論は経験的もしくは科学的と呼ばれる政治理論、および社会学や行政学・法律学・経済学などの視点から政治現象の解明を目指す科目です。日本政治論は日本社会における政治の仕組みや思惟を過去から現代にかけて解明する科目です。地域研究・比較政治論は世界各地における政治制度や政治の動態を北米・南米・ロシア・中東・アフリカ・中国・東南アジアなどの地域ごとに個別に解明したり、比較論的視座から分析したりする科目です。国際政治論は日本を含む諸国家ないし諸機関どうしの相互作用を全体としてとらえ、世界的視野から平和と紛争を考察する科目です。

政治哲学・政治思想史部門

政治哲学も政治思想史も、政治学の基礎概念にかかわる学問分野です。この部門では「政治哲学」、「ヨーロッパ中世政治思想」、「政治思想史」のテキスト科目を用意しています。

ところで今、「政治学」と述べました。言うまでもなく政治学とは「政治」を対象とする学問ですが、では人間の様々な社会活動のうち何が「政治」と言えるのか、こういう問題が当然のことながら出てきます。言い換えますと、経済現象でも社会学的現象でもない、政治現象の確定が求められているわけです。

これは決して簡単な問題ではありません。私たちの目に通常映っているのは、社会的活動の漠然とした束だからです。したがって私たちは無意識のうちに、ある一定の基準を設定し、それを用いて「政治」を社会から抽出していると言えます。そして、ここで言う基準をより厳密に・より体系的に論じようとする試みこそ政治哲学に他なりません。そのため、テキストを通

じて履修者はまず「政治の本質」を改めて考察することになります。

また、人間は生きる意味・目的を求めてやまない動物です。とすれば、そういう人間にとって政治はどのように評価されるべきなのか、こういう問いは全体主義や民族紛争を見聞きた私たちにとって切実なものであるはずですが、「政治の価値」が再検討されなくてはならない所以ですが、「政治哲学」は「政治に関する世界観の学」として、この問題にも立ち向かいます。

さて、政治哲学が基礎政治学の共時的な理解を目指すとするれば、政治思想史はその通時的な理解を目指す学問領域だと言えます。

およそ学問には、過去の学説に照らし合わせて、自らの意義を確認しようとする契機がありますが、政治学において学説史の学習はまことに重要だと言わなければなりません。政治学は他の学問以上に、過去に用いられた術語を批判・検討しながら、私たちの政治生活の理解を深めようとする傾向が強いからです。たとえば「民主政治」ひとつとっても、現代の多くの理論家たちは古代ギリシアを引証基準にして考察を行って

いるのです。

ところで、皆さんが手にするテキストはもっぱら、ヨーロッパの地で展開された政治思想を扱っています。日本政治思想にはほとんど言及がなされません。しかし、近代日本の幕開けとともに先人たちが政治思想を含む西洋文化の吸収に努力してきた結果、ヨーロッパ文明は今日、私たちの「第二の自我」と言うべきものになっています。そのことを疑う人はいないでしょう。ですから、日本政治思想を深く学んでみたいと思っている方も、ヨーロッパ政治思想の「応用問題」として目を日本に転じることは、決して間違いではないはずです。

履修者に求められる視点を少し具体的に述べますと、まず「ヨーロッパ中世政治思想」ですが、上に記したとおり、私たちにとって重大な意味を持つヨーロッパ政治思想の「原型」が形成されたのが、中世と呼ばれる時期であることに注意を払って下さい。では、ここでいう「原型」とはどういうものか。それは皆さんが学習を進める中で明らかになるはずです。と同時に、そういう問題意識をもって中世政治思想を学ばれるならば、ここでの理解がヨーロッパ文明そのものの理解と直結していることに気が付かれることでしょう。

「政治思想史」では、ヨーロッパ政治思想史を飾るビッグネームが打ち立てた理論を学習します。ここで意識してもらいたいのは、彼ら思想家たちの理論それぞれが、近代的な政治観の確立に寄与しているということ、その結果私たちにとっても「どこか親しみが持てる」ものになっていることです。ただし、テキスト執筆者が語っているように、そこで感じられた「親しみ」は、あくまで現代の思想的課題に対する私たちの認識の道筋を整えるための出発点です。私たちが探求すべき政治は、近代政治思想のナイーヴな延長線上にあるのではないからです。その意味では、過去思想家たちに問かけようとする姿勢こそ、学習を通じて最も求められるものだと言えましょう。

政治理論部門

政治理論にかかわる専門教育科目で現在テキストが配布されているのは、島田久吉・多田真鋤著「政治学(J)」です。この他に、「政治学」「政治理論」「政治過程論」「政治学特殊」のスクーリング科目が開講されています。

法学部通信教育課程乙類として開講されている諸科目に共通するのは、それらがすべて政治学の科目であるという点です。したがって、それらの科目の基本からの理解には、政治学とは何かを理解していることが不可欠です。

たとえば、いま、あなたが日本研究者の集まりに参加しているとします。そこには、経済学、社会学、人類学、宗教学、文学、医学等々の研究者が集っているはずです。これらの研究者に囲まれて、あなたが他の研究者とは異なり「政治学として研究を行なう」というのはどういうことか、その説明を求められたらどう答えるのでしょうか。

この問は、政治学の出発点で問われるべき問であり、また到達点として明快な答をもつべき問でもあります。

「政治学(J)」の履修は、この答を探すために必要な第一歩だと考えてください。

日本政治部門

政治を理解するためには、政治思想や政治制度、さらには政治の歴史や実態を学ぶことが必要不可欠です。また、世界各国の政治状況を理解するためには、まずは自国の政治状況を十分に理解し、これを正しく把握しておくことが、何よりも肝要であることもあらためて指摘するまでもありません。法学部ではこのような要請に応えるため、とくに「日本政治」の部門を設置しています。

「日本政治」の部門では、日本政治の歴史や実態を詳しく勉強するため、「日本政治史」、「日本政治史Ⅰ(古代)」、「日本政治史Ⅱ(中世)」、「日本外交史Ⅰ」、「日本外交史Ⅱ」のテキスト科目を用意しているほか、夏期もしくは夜間スクーリングに際しては、上記科目ばかりでなく、現代日本政治の実態の理解を深めてもらうために、「日本政治論」の講座を開講しています。

「日本政治」というと、他国の政治と異なり、私たちにとって身近な存在であり、誰でも簡単に学ぶことができるものと思われがちです。しかし、ジャーナリスト的な興味をこえて、アカデミックな分析手法や研究成果を習得することは、そう簡単なことではありません。「日本政治」の勉強は、対象には接近しやすいのですが、その分だけ、逆に高度なレベルが要求され、なかなか厳しいものがあるからです。履修希望者は、安易な気持ちを捨て、たとえ困難な課題にぶつかったとしても、これを乗り越える努力をして欲しいと思います。そして履修生諸君が、この機会を利用して日本政治の「過去」と「現在」を正しく理解し、その上で、それぞれがこの国の「将来」についても真剣に考えてくれることを期待しています。

履修にあたっては、それぞれの科目担当者が示している指針や履修条件を十分に参照・吟味し、くれぐれも途中で挫折したり、後悔することのないようにして下さい。また、履修科目選択の順序は、とくに指示がない限り、全く自由です。

地域研究部門

「各国別、各地域別の研究で、特定の国あるいは地域の総合的理解と、他の国・地域との比較を重視する」学際的学問が地域研究です。ここでいう「総合」とは、ある地域の近現代または現在が抱える問題に対し、複数の専門領域からアプローチし、その成果を総合して理解するという意味です。その際学際研究のやり方をめぐり、1人の研究者が、すでに確立している社会科学の複数の学問分野をマスターして取り組むのか、それとも1人の研究者は1つの専門分野に特化して研究を進め、その上で他の専門分野の研究者と共同研究を行うのかという疑問が生じます。この方法論上の問題は学会でも決着のついていない問題なので、ここではこれ以上問いません。

いずれにしても地域研究者は第1にその地域の文化

に惹かれ、言語を修得し、現地での生活を体験し、近現代史を概観した上で、地域特性を研究対象にします。その意味では実証的な学問です。しかしそれだけでは不十分で、上述のように社会科学の学問分野を少なくとも1つマスターし、そこで練り上げられた問題の見方や分析手法を地域の研究にできるだけ使う必要があります。

法学部学生が地域研究に取り組む場合、差し当たり政治学関係の諸科目を幅広く学ぶのが近道といえます。整合性、体系性の点で、政治学とは何かという問題が残るでしょう。また多くの場合政治学の理論は欧米地域の近現代を研究対象にして作られているため、その理論を地域研究、特に途上国研究に応用しようとしても途惑うことが多いです。しかしそうであったとしても、地域の実証的な研究と社会科学の理論的研究との関係は相互に交流し、影響を与え合い、時に緊張関係に陥りながら長期的には地域研究からのフィードバックによって社会科学理論自体が作り変えられてゆくものと考えべきです。

従って冒頭に挙げた「他地域との比較」の重視についても、その比較軸は社会科学の理論的イシューです。ある地域の人間の行動様式は特性を持つと同時に、他地域のそれと比較してみれば共通点も見出せます。より広い地域設定の中で問題を理解することが、理論的一般化にとっては必要です。以上に述べた地域研究の学問的特徴、方法論について詳しく知りたい者は、『入門現代地域研究』、『特集：地域研究の海へ』（『地域研究論集』）、『講座現代の地域研究』を読むとよいでしょう。また今日、地域研究は地域や国家間の体系的な比較を通じて政治現象を理論的に説明しようとする比較政治学と密接な関係にありますので、以下に掲げる比較政治学のテキストを読むことも勧めます。

現在テキスト科目では、「現代中国論」「アメリカ政治史」「ロシアの政治」が開講され、スクーリング科目ではそれ以外の諸地域もカバーされています。理論的アプローチは科目毎に少しずつ違いが見られますが、自らの関心に従ってどの地域から学習してもよいです。できれば卒論などに繋げて関心地域を掘り下げて学習してください。

地域の問題を見つける上で、『世界年鑑』（共同通信社、各年）をはじめとする年鑑類を活用するなどして、各地域の現状をフォローするのが役に立つでしょう。また本塾図書館での資料探しの他に、特に途上国研究に取り組む場合、日本貿易振興会アジア経済研究所の図書室を訪ねるとよいでしょう。

- ・粕谷祐子『比較政治学』（ミネルヴァ書房、2014年）
- ・加藤普章編『入門現代地域研究』（昭和堂、1992年）
- ・共同通信社『世界年鑑』（各年）
- ・久保慶一他『比較政治学の考え方』（有斐閣、2016年）
- ・国立民族学博物館地域研究企画交流センター編『地域研究論集』第1巻第1号「特集：地域研究の海へ—その方法と可能性」（平凡社、1997年）
- ・矢野暢編『講座現代の地域研究』第1～4巻、（弘文堂、1993～94年）
- ・『現代用語の基礎知識』特別編集、『国際情勢ページ

ックシリーズ第1～10巻』、世界各地の現代史を概説（自由国民社）

- ・日本貿易振興会アジア経済研究所 <http://www.ide.go.jp>
- ・地域研究コンソーシアム <http://www.jcas.jp>

国際政治部門

国際政治部門では、歴史的な視座からこれまでの国際政治の大きな潮流を展望して頂くと同時に、現代の国際政治の諸問題を理解する基礎を学んで頂くことになります。国際政治では、平和と戦争、内政と外交、地域主義とグローバル化などの多様な問題群を理解することが求められ、そのためには国際政治の基礎概念を正確に理解することが必要となります。

国際政治部門としては、『ヨーロッパ政治史』と『西洋外交史』のテキストがあります。『ヨーロッパ政治史』は1単位で、ロシア革命から1950年代までのヨーロッパ各国の政治と外交を学ぶことになります。『西洋外交史』は2単位の科目で、第一次世界大戦後のパリ講和会議から第二次世界大戦までの時代の欧米を中心とした外交史を学ぶことになります。いずれの科目もテキストがやや古くなり、また戦後の時代をあまり扱っておりませんので、参考書を用いて戦後のヨーロッパ統合の問題や、外交や国際秩序の変容についても同時に学んで頂くことになります。

国際政治部門の総合的な科目としては、夏期スクーリングあるいは夜間スクーリングで「国際政治論」を用意しております。これは国際政治論の概論であり、国際政治の理論と歴史、そして現状を学んで頂くことになります。担当講師の指定したテキストや参考文献を幅広く読んで頂くと同時に、動きつつある現代の国際情勢にも関心を寄せて下さい。

国際政治は日々めまぐるしく動いております。毎年、新しい展開が見られ、重要な外交合意が創られ、深刻な危機が勃発しています。歴史的な視野と同時に、現代を理解する洞察力を養い、世界の動きに関心を寄せて頂ければと思います。

科目別 履修要領

総合教育科目

哲学

4単位

A048-0302

◆講義要綱

哲学の歴史は学問の中では最も古く、多くの人間が解決に悩んだ問題の歴史です。哲学を学ぶには、「問題」の方に力点をおくやり方と、「歴史」の方に力点をおくやり方があります。どちらのやり方にもそれなりの利点がありますが、この講義では、前者のやり方を取り、哲学的問題とはどのような問題なのか、それを解決するためにはどのように考えればよいのかを、実際の問題を扱いながら考えて行きます。その際に強調したいことは、哲学は科学を中心とする現代の理論的営みと無関係なものではないということです。したがって、この講義が目指すのは、現代に生きる私たちがそれぞれの生活の中で生じる哲学的な問題に直面したとき、それを解決する方法や手懸りを提供することです。

◆テキストの読み方

テキストをどのように読み進めるかはきわめて重要です。そこでこのテキストの読み方について説明します。このテキストは論証の部分と、歴史的経緯や状況の説明の部分とからなっています。事件や事実を叙述する場合と、その背後のからくりや原因と結果の関係を推理する場合は大きく違ってきます。叙述の代表は小説や報道記事です。何が何時どのようになったかという報告は、素直に読むだけで事の経緯がわかりますから、考えながら読む必要はありません。映画やテレビドラマが面白いのは筋の展開や心理描写にあり、それらは考えなくてもわかります。一方、論証の代表例は数学の定理の証明です。シャーロック・ホームズの推理も論証の一つです。数学の定理や名探偵の推理はしっかり考えないとわかりません。このテキストはこれら二つの異なる部分、つまり論証部分と叙述部分からなっていることに注意してください。

読んでいる部分が論証なのか、叙述なのかをまず確認してください。いずれの部分かによって読み方が違ってきます。論証部分はかつて数学のテキストを読んだときのことを思い出しながら、その時と同じように読んでみてください。時間をかけてゆっくり読まなければなりません。途中でわからなくなったら先に進むのではなく、前に戻らなければなりません。何度も前のページを見返すことが必要になります。一人で読む場合、このような読み方は一方的に辛抱強さを要求しますから、ついつい加減になったり、読み飛ばしたりしてしまいます。辛抱強く、何度も読み返す、わかる

まで頑張る、といった根気が求められます。これに対して、叙述の部分は日本語さえわかれば大抵苦勞なしに理解できます。正確に理解することを心掛ければまず心配は要りません。用語や人名が不明ならそれを調べる程度で済みます。でも、自分が正しく内容を理解したかどうかの確認は叙述の部分の方が厄介で、誤解しないよういつも注意しなければなりません。論証部分はわからない場合にはわからないという自覚が必ずあり、わからないことがはっきりわかります。

さらに、このテキストのもつ特徴は（問）があちこちにあることです。問は必ず解答してください。テキストの内容が理解できたかどうかの目安になります。テキストが二つの異なる部分をもつことを念頭に置きながら丁寧に読み進め、必ず「わかった」、「理解した」という確信がもてるまで何度も読み直してみてください。

◆関連科目

哲学から個々の学問が生まれていったことを考えれば、すべての科目が哲学に関連していると言っても過言ではありません。テキストの内容に対応する科目は何かを常に意識しながら学ぶと個々の研究を通じて哲学が理解できる筈です。

実際に関連の強い科目は論理学と科学哲学です。論理学は推理推論するために知っておかなければならない事柄ですし、科学哲学は哲学の個々の分野の一つです。

◆参考文献

野矢茂樹『哲学の謎』講談社現代新書、1996年
柴田正良『ロボットの心』講談社現代新書、2001年
戸田山和久『知識の哲学』産業図書、2002年
西脇与作編『入門 科学哲学』慶應義塾大学出版会、2013年

◆レポート作成上の注意点

特に注意してほしいことは、教科書や参考書に書かれている事柄をまとめるだけのレポートにならないようにすることです。もちろん、教科書や参考書で理解したことを前提としなければなりませんが、その上で、あなた自身はどう考えるのかということを中心に書いてください。他方、教科書や参考書から学んだことをすべて無視して、自分の考えだけを書くという、逆の誤りにおちいることも避けてください。また、自分はいこう考えると述べるだけでは、レポートにはなりません。必ず、なぜそう考えるのかという理由や根拠を挙げてください。レポートの書き方については、本書「学習の手順」を参考にしてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆哲学の学び方

西脇与作（名誉教授）

『哲学』は現在の哲学がどのような問題を扱い、どのような解答を出しているかを概説したものである。各章は独立しているというより、順次1章から読み進めるように書かれている。したがって、途中だけを読もうとしても読みづらいだろう。特に後半はテキストの叙述に沿って読み進めてもらいたい。テキストの内容は学部の授業をもとにしているため、少々難しいかもしれない。だが、美辞麗句はないので国語の力はそれほど必要ないだろう。以下に全体の読み方と各章の内容と要点を述べておこう。

1 テキストの読み方

テキストは最初から読み進めてほしいというのが私の最初の希望である。テキストの説明は前のページに書かれている内容を使って後のページの内容が述べられるという、数学のテキストに似た書き方がされている。各章は一見独立しているように見えるが、実はつながっていると考えてほしい。哲学の最も基本的な事柄から次第に複雑な事柄へと説明は進んでいる。素直な気持ちで途中を飛ばさずに学習すれば、そうでない場合よりずっと効果が上がると期待できる。

読み進める際には本文の途中に登場する（問）もしっかり考えて答えを見つけてほしい。（問）にうまく答えられないということはテキストのそれまでの内容がうまく理解できていないことである。だから、内容が十分理解できているかどうかの目安としても（問）を活用してほしい。章末の問題はその章の復習となるので、その章の内容を整理するための問題と考えればよいだろう。

テキストの本文も恐らく読みづらいと思われる。哲学者の経歴や学説の説明、解説を読むようには行かないだろう。少し読み進んでまた前に戻るということを繰り返さないで理解できない部分や、書かれている議論や推論が正しいことを自分で確認しないと内容が全くわからない部分が随所に出てくる。読むだけでなく、その内容を自分の頭で理解し、活用することが必要となるだろう。これはこのテキストが「哲学することは推論することである」という主張をできるだけ具体化しようと書かれたことの当然の結果でもある。テキストはわからなくなるとすぐに読者自身にわかるように意図して書かれているので、「わからない」と感じたら、そこで立ち止まって考えてほしい。したがって、読み方のコツとしては、

読んで考える、考えるのは読むという作業を飽きずに繰り返すことである。

また、本文中に挿入された Box は本文の詳しい説明なので、最初読むときには飛ばしても構わないが、飛ばしたままではきっと何かがわからないままということになるので、読み忘れないでほしい。*のある Box は興味の少ない読者は最後まで無視しても構わない。

2 テキストの内容

まずテキストが何に重点を置いて書かれているか述べておこう。哲学＝推論という考えを実践しようというのが基本であり、その基本が現在哲学の営みの中でどのように実行されているかを説明し、多くの問題に読者自ら挑んでほしいという意図で書かれている。

哲学には標準的な理論があるわけではないので、当然ながら書いた私の考えが他の分野のテキストに比べれば色濃く出てくる。私の専門は科学哲学であり、それはアングロアメリカンの哲学と共通部分を多くもっている。だから、読者が哲学に対してもっているイメージとは随分違っているかもしれない。読者が知っている哲学者の名前はそれほど登場せず、知らない名前ばかりという人がいるかもしれない。また、哲学者個人についての説明もほとんどない。過去の有名な哲学者が何をどんな風に考えたかの説明を期待していた読者は失望するだろう。私の関心は哲学者自身ではなく、その哲学者が扱った問題そのものにある。これは各章の最初に何を扱うかを読んでもらえば実感できるだろう。

テキスト全体は第一部と第二部に分かれている。この区分は、第一部が哲学の基本的な問題を扱い、第二部が基本的な事柄の人間が含まれる場合への応用という区分である。自然な形の知的好奇心がまず自然に向けられ、次第に知識、心、行為や道徳に向かうという道筋に沿った形で章が置かれている。推論の部分だけは別で、この章は以後の議論を理解し、読者自ら考えるための道具を提供している。むしろ、推論そのものも哲学の重要な課題ではあるが、まずは哲学的な思考の道具と思って読んで構わない。そこで考えるコツを会得できればしめたものである。多くの哲学の問題は推論の形式ではなく、内容に関するものである。推論される内容が哲学の問題と言われてきたのである。形式と内容がうまく噛み合うことによって問題の解決が得られるという点をしっかりわかってほしい。記号を使った論理式が登場するが、それに恐れをなす必要は全くない。問題の解決に最も必要なのは論理式ではなく、その内容なのである。論理式を通さなくとも内容の理解はできるのである。

「自然について」が最初に出てくることに戸惑う読者が多いだろう。自然を扱うのは哲学の仕事ではなく、それは自然科学の領分だと教えられてきたためかもしれない。初期のギリシャ哲学者、デカルト、カントらは自然の問題と哲学の問題を区別していただろうか。哲学と自然科学の共通部分こそもっとも伝統的な哲学の問題が散らばっているところである。テキストはそのような問題をすべて扱うことはできないので、ごく限られた問題だけを扱っている。科学の授業では自明のこととして前提されてきた事柄、科学が扱わないとしている「これは何か」という問に対する追求のごく一部が述べられている。この章で扱われている問題は以後の章で応用されるだ

けではなく、最も基本的な問題だということを忘れないでほしい。子供の頃に自然の変化を見て驚いたときの感動がこの章の問題を生み出したのである。

「知識について」の章は伝統的な「知識＝正当化された真なる信念」という図式が成立しないのではないかという問から始まる。まず、知識がどのような基準で認められるのか、それを脅かす様々な懐疑にはどんなものがあるかを理解してほしい。次に、テキストでは知識に関する伝統的なデカルトの考えと現代の代表的な考えが対比される。ここには私の考えが出ていることを白状しておこう。外在主義、可謬主義への加担は私の個人的立場である。さらに、ヒュームの懐疑論とその解決の仕方が述べられている。バイズ主義の説明は少々難しいかもしれない。カントに代表される、いわゆる認識論の話が少ないことに不満をもつ読者もいるだろう。しかし、テキストを丹念に読めばカントの意図は現在も有効に生かされていることが後の章でわかる。

第二部の「心について」は最初に読者に謝っておきたいことがある。それは心の哲学、心の科学が現在急速に研究が進んでおり、将来の見通しがすっきり立たないことから、書かれている内容が十分に確証されたものだけではないことである。嘘や誤りは経験的知識の不可避の特徴であるが、他の章の内容とは違って、この章の内容は極めて流動的である。だから、読み進める際に頭から正しいと思い込まないほうがいいだろう。一定の距離を置くような気持ちで、しかし、これが今哲学者たちが真剣に議論していることだということも認識して読むのがよいだろう。

前置きが長くなったが、この章は私たちの常識となっているデカルトの心身二元論から話が始まっている。人は心と体をもつというのは自明のことではなく、デカルトが考えたことであり、だからこそ、それをデカルトと同じように疑ってみることである。その結果として、20世紀の哲学はデカルトの心身二元論には冷たく、心身に関する一元論的な考えが主流となってきた。中でもコンピュータ科学、認知科学と深く結びついた機能主義が重要である。しかし、この機能主義にも多くの欠点があり、それを克服するために意識や主観性の存在や役割を巡って多くの議論が現在進行している。この辺の経緯をテキストでは基本的な事柄だけに限って説明してある。意識や感覚質といった、私たちが日常生活ではうまく駆使できても、言葉で正確に述べようとするとうまくできないものが主題となっている。「なんだ、こんな簡単なことがわからないのか」と思う人がいるに違いないが、その通りで、簡単なことほどそれを正確に知ろう、わかろうとすると意外に厄介なのである。この事態は、推論を考えた際に、言われなければ正しく推論できるのに、なぜ正しいか尋ねられるとうまく説明できず困惑したのに似ている。

別の主題として自分の理解と他人の理解が比較されながら述べられている。自分のことは本当に自分が一番よく知っているのかどうか議論されている。

次には奇妙な章が挿入されている。これは心と行為がどのように結びつくかを考えるためのもので、私が気になって仕方なかったために付け加えられた章である。哲学で心身の一元論が取り上げられても、私たちの社会では心身の二元論が前提になっている。社会の様々な制度、組織は人間が心と身体をもち、心で考え、感じ、体で反応し、行動すると見なして、それに基づいてつくられ、運用されている。これは社会的な前提である。この現実を前にして、心と行為の関係を確認し、考え直してみるのがこの付属的な章の目的である。

第6章は行為や道徳の章である。私が全く不得意な分野であるので、読みながら不満をもつ読者が多いのではないだろうか。前半は行為の話、後半は倫理・道徳の話からなっている。前半部分は今から思うと反省すべき部分が多い。第一に、自分の考えを書き過ぎた。これはテキストとしては失格である。書き過ぎたのは二面関係論の部分で、随伴現象論の一変形といえばそれまでであるが、テキストのそれまでの記述材料を使って心身の関係をどのように捉えれば、行為の話がうまくできるかを考えたつもりである。このテキストの中では一番わかりにくい部分であろう。読者はこの部分がわからなくとも余りにしないほしい。このように考えることも一応は可能なのかという程度に理解しておけばよいだろう。

後半部分は典型的なテキストになっている。前半部分の反動かもしれない。私自身がしっかり勉強して、サービスとして20世紀の倫理学史までBoxにつけてしまった。この部分で私が強調したかったのは、自然主義的な人間の本性の把握である。人間の本性は祖先から受け継いだものを基本にしており、その時々や思想やイデオロギーに左右されないものを持っている。このような本性は生物学的に説明できるはずだというのが自然主義の考えであり、それを実際にやってみたのがテキストの内容である。利己性や利他性を進化論的に説明することに違和感、嫌悪感をもつ読者はきっと多いことだろう。だが、それらをきちんと説明できる思想やイデオロギーは過去にあったのだろうか。この部分の内容は倫理学のテキストとは随分違っているだろうから、慎重な読者には倫理学のテキストと比較してみることを勧める。

以上がこのテキストの概略である。私の気持ちを書き過ぎたかもしれないが、これを手にした読者を思い浮かべると少々複雑な気持ちである。テキストの立場は現在の日本の哲学をそのまま反映しているどころか、日本では少数派の哲学を代表している。日本の現状を知ろうとしてこのテキストを手に取る読者には申し訳ないが、このテキストは日本の哲学の現状を述べたテキストではない。だが、私には信念がある。それは、このテキストの内容は日本の標準ではないかもしれないが、ギリシャ以来の哲学の伝統をそのまま引き継いでいるという信念である。

(2000年4月1日執筆)

◆講義要綱

論理学の研究はアリストテレス以来長い歴史をもっています。私たちが何かを推理するときに不可欠の規則が論理規則と呼ばれ、それがないと考えることさえ覚束ない基本的な規則と考えられています。それを研究するのが論理学で、19世紀末のフレーゲの研究によって論理学はそれまでにない新たな発展をすることになります。数学的な思考と記号の使い方が論理学に取り入れられ、数学やコンピュータ科学と結びつきながら、様々な分野で応用され、基礎研究には欠かせない役割を演じています。

この講義では論理的な推論や真偽概念について基本的な事柄を学ぶことを目的にしています。それによって自分が論理的に考えることができるようになるだけでなく、他人の考えが正しいかどうかもしっかり判定できるようになれるはずです。

◆テキストの読み方

文学部の他のテキストと違って記号や数式、論理式がたくさん登場します。自然な言語ではなく、記号言語を使って文や命題を論理式に書き直し、推論が正しいかどうか調べるのが主要な内容ですから、それをしっかり肝に命じて読み進めてください。丁寧に説明されていますから、普通に読み進めれば、テキスト以外の参考文献を参照しなくても完全に理解できます。

根気強く読めば、このテキスト一冊だけで論理学の基本は理解できるのです。「論理学の学び方」も参考にしてください。

◆関連科目

論理学が生まれた経緯や歴史から哲学が強い関連をもった科目です。推論することが主要な研究方法である哲学では論理的な推論が大切な道具になっていますから、論理学の知識は哲学の問題を扱う上で必要なのです。また、数学的な形式をもった内容ですから、数学基礎論、計算理論、コンピュータ言語等は論理学と密接に結びついています。さらに、言語学との関連も20世紀後半には強くなり、統語論、意味論等で重要な役割を果たしています。

◆参考文献

論理学のテキストはたくさんありますが、テキストの読み方で書いたようにこのテキスト以外のテキストをまずは忘れてこのテキストだけに集中してみてください。どれも似た内容なら一冊だけ暗記するほどに読むのが一番です。

◆レポート作成上の注意

他の文献を参照する必要はありませんから、テキストの内容だけを十分に使ってレポートを作成してください。文献を検索し、巧みにそれを使うのではなく、テキストの内容を正しく理解し、それだけを使って問題を解くことに専念してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆論理学の学び方

岡田光弘（文学部教授）

1 論理学のテキストの読み方

「不思議の国のアリス」の著者ルイス・キャロルは、又の名をチャールズ・L・ドジソンという、19世紀後半のイギリスの論理学者でもあった。彼は「記号論理学」というテキストの冒頭で、新たに論理学を学ぼうとする読者に対して、いくつかの従うべき規則を提案している。このルイス・キャロルの規則は、今日でも有益なものと思われるので、ここで簡単に彼の規則を紹介し、さらに少し解説を加えておこう。

[規則1] Begin at the beginning. つまり「始めから始めよ」である。

時々、小説を読むのに、どんな話の結末かを確かめてから、読みはじめる、というような人を見かける。「ああ、ハッピーエンドなんだ」とか、「こいつが真犯人なのか」とか前もって確認してから、安心して小説を読み始める、というタイプの人がいる。小説の場合はそれも許されるかもしれないが、科学的な本、特に論理学の本では、そのような読み方は不可能である。一段一段、概念を積み上げていくのが論理的議論の特徴であるので、途中をスキップして読むと意味が理解できなくなる。だから、論理学の本をはじめから読む前に、中身をチラッと見てみようなどと企んで途中のページを開いてみても、結局「何を書いてあるのだから分からない。どうにもこの本は難しすぎて自分の手に負えそうもない。」と悲観的になるのが常である。

[規則2] 「完全にその章が理解できるまで、次の章に進むな。」

どんな大天才でも、途中で分からなくなったまま先に進んでは、論理学や数学等の本は理解することはできないものである。それが論理的議論の特徴である。大天才でもそうなのだから、あなたがもし単なる秀才程度なら、なおさらそうなのである。だが逆に、各ステップを一段一段理解していけば、最初には夢にも思っていなかったような見晴しのよい高い地点まで普通の人間ならだれでも到達できるのも、又論理学の特徴なのだ、ということをお忘れしないでほしい。つまり、一段一段ステップを踏んで理解して行けば、天才や秀才でなくても最高峰までたどり着けるという学問的構造を論理学はそれ自身の中に持っていると言える。

[規則3] 分からない部分に出くわしたら、そこをもう一度読んでみる。それでも分からなかったら、もう一度読み直してみる。もし、三度読んでも分からなかったら、あなたの頭が疲れている可能性が強いから、そこで読むのをやめて、その日はほかのことをした方がよい。そして、ゆっくり休んでから次の日に読み直してみると、「なんだ、簡単なことじゃないか」ということになる可能性が強いのである。

次の規則は私が最も気に入っている規則である。

[規則4] であれば、論理学が得意そうな友達をみつけて、いっしょに読むとよい。そして、難しいところを話

し合いながら読み進めるとよい。話すことは、問題解決の最大の方策である。

ところで、以上のドジソンの4つの規則にもう一つ私を加えるとすると、それは次のような規則であろう。
[規則5] 体を使って練習を充分行うこと。即ち、頭だけを使って論理学を理解しようなどとは思わず、練習問題を実際に紙に書いて解いてみることに。

論理学のような知的な学問分野の習得は、純粋に頭だけを使ってなされるのであり、体を動かす必要はない、等と誤って考えられがちだが、実は論理学のような知的学問の習得は、手を動かして練習問題をくり返し解いていくことにより体で習得していく方が近道なのである。それは、運動選手の練習や、楽器の演奏家の練習や、語学学習者の練習がそうであるのとまったく同様なのである。

以上の5つの規則を守ってテキストを読み進めて頂きたい。

次に、論理学とはどんな学問なのかを簡単に解説してみたい。

2 論理学とはどんな学問か

論理学は、思考の道筋を‘真理 Truth’という概念を用いて説明する学問である。そこでは、真理と真理との関係が問題とされる。その点で論理学は、他の学問とは異なる。この違いは、研究対象の違いである。例えば、物理学は物理についての真理を、数学は数についての真理を探究する。これに対して、論理学は真理そのものを研究対象としている。つまり‘……が真であるならば……は真である’というような真理関係とはいかなるものかを探究するのである。

論理学の探究の一つの方法として‘真理表 Truth Table’が用いられる（これは *Wittgenstein* によって導入された）。論理学では、この方法によって例えば ‘and’ ‘not’ の真理関係が次のように理解される。

<u>A</u>	<u>notA</u>	<u>A</u>	<u>B</u>	<u>A and B</u>
真	偽	真	真	真
偽	真	真	偽	偽
		偽	真	偽
		偽	偽	偽

この表で、‘A が真であるならば not A は偽である’ ‘A と B が共に真であるならば、A and B は真である’等の真理関係が表現されている。

論理学では、and、not、or、if……then……などの真理関係を問題とする。これらの語の意味は、真理表によって与えられる。逆の言い方をすれば、真理表を与えることによって、我々は、and、not、or、if……then……の使い方が理解できるのである。

我々がここで定義したいのは‘記号論理学’である。これは、記号を用いて真偽を表現するものである。そこで用いられる真理関係は、我々の通常の言語とは独立に与えられるのが普通である。これは、我々は、今、人工言語を定義しようとしているからである。それゆえ、混乱を防ぐため、次のような人工言語特有の記号を用いることにする。

∧、¬、∨、→

これらの記号は、左からそれぞれ and、not、or、if……then と呼ばれ、真理表が与えられるまでは意味がない。∧と¬は、我々が上で真理表によって意味を与えた and と not にあたる。（その他の記号については、上ではその真理表が与えられていない。しかし、ここでは、すでにその意味があたえられているものとし、説明を続ける。）記号論理学は、上にあげたような記号の他に、A、B、……のような記号を用いる。ここで A、B は真偽がいえるような文である。そして、複雑な文がこれらの記号によって表現され、その真偽が考えられるのである。

例えば、次のような哲学科の必修科目の表があるとする。

基礎科目	選択科目 I	選択科目 II
論理学入門	現代論理学	特殊講義 V
哲学史 I	科学の哲学	哲学研究会
哲学史 II	歴史の哲学	

ここで、履修方法として‘基礎科目、選択科目 I、選択科目 II のそれぞれから少なくとも一つの授業を履修しなければならない’とする。するとこの履修規則は、次のように表現される。

1. (論理学入門が必要である ∨ 哲学史 I が必要である ∨ 哲学史 II が必要である) ∧ (現代論理学が必要である ∨ 科学の哲学が必要である ∨ 歴史の哲学が必要である) ∧ (特殊講義 V が必要である ∨ 哲学研究会が必要である)

論理学の興味は、真理にある。では、1 の表現の真理はいかなるものであるのか。論理学では、この種の表現の真理は‘偶然的真理’といわれる。というのは、この履修規則は、ある特定の大学(例えば、慶應義塾大学)において、そしてある特定の年度について真とされているからである。同じような例として、(今日晴れている → テニスをする)がある。というのは、ある人は、晴れていたらテニスをするかもしれないが、他の人はピンポンをするかもしれないからである。では、偶然的ではない真理、すなわち‘必然的真理’とはいかなるものだろうか。それは、次のような表現についての真理である。

2. (今日晴れている → テニスをする) → ((¬ (テニスをする)) →

($\neg$ (今日晴れている)))

この表現の一部‘今日晴れている→テニスをする’は、確かに偶然的真理ではあるが、この表現全体としては、常に真である。この様な真を‘論理的真’と言う。また、次の表現は、真かもしれないが、論理的必然性を持たない。よって、論理的真ではない。

3. UFO が存在する

しかし、次の表現は論理的真である。

4. (UFO が存在する) $\vee$ ($\neg$ (UFO が存在する))

ここで留意すべき点は、2、4が‘今日晴れている’‘テニスをする’‘UFO が存在する’等の文の種類のいかんによらず真と言える点である。すなわち、2、4は、それぞれ以下の5、6のような形式を持ち、その形式のみでA、Bの具体的な内容にかかわらず常に真といえる。このような形式的な真理を論理的真というのである。

5. $(A \rightarrow B) \wedge ((\neg B) \rightarrow (\neg A))$

6. $A \vee (\neg A)$

このように記号論理学は、論理的真を探究するというその性格上、文の形式のみを問題とすることから、具体的な文を用いず、それを表すものとして、A、B等の記号を用いるということがしばしばある。記号論理学では、人工的にA、B、……、 $\vee$ 、 $\neg$ 、……等の語とそれらについての文法を導入し、そしてその意味を論理的に与える。というのは、このことにより論理言語は日常言語に比べて曖昧さがなく真偽の構造についての論理的分析ができるからである。

ここで、学生諸君に注意して頂きたいのは、記号などの抽象的な表記法が出てきても、恐れずに、馴れ親しんでいくことが重要だ、ということである。抽象的な理解や記号による表記は、最初は分かりにくいかもしれないが、論理学のような理論的な学問においてはこのことを通して結局はよりよい見通しを得ることができるからである。

3 どんな点に重点を置いて学んでほしいか

最後に、テキストを通して論理学を学ぶに当たって、どんな点に特に重点を置いて学んでほしいか、という点に関して、教える立場からいくつかのアドバイスをしておこう。

論理学には大きく分けて、演繹的方法と帰納および確率・統計的方法との2つがあると考えられる。このうちで現在の論理学の中心になっているのは、演繹的方法である。よって、学生諸君も演繹的方法の手法や考え方に特に重点を置いて学習してほしい。また、帰納・確率・統計的方法に関しての学習においては、特に演繹的方法と比較して、基本的な考え方にどのような違いがあるか、という点を中心にして頂きたい。また、学生諸君にとって、学習上最も重要と考えられる演繹的方法に関して、特に学習しておいてほしいのは次の点である。

- (1) 命題論理の真理表を使って与えられた命題論理言語表現がトートロジー（恒真）かどうかを判断できるようにしておくこと。
- (2) 日常言語で書かれた文を量化理論（述語論理）の論理的言語へ翻訳できること。
- (3) 簡単な定理（命題論理および量化理論（述語論理）の簡単な定理）について、推論規則や公理を使った（構文論的な）証明ができること。

以上の(1)、(2)、(3)のすべてに対して、テキストの該当箇所に十分な数の例が与えられているので、それらを参照しながら自分自身でも練習を積み重ねることが重要である。

(1996年4月1日執筆)

A012-7601、A7610

本科目の学習にあたっては、本項末尾の「文学の学び方」も参考にしてください。

●中国文学関係

◆講義要綱

漢詩は、3000年近くという長い歴史を持つ、中国古典文学の中でもっとも中心的な位置を占め続けてきた文学ジャンルです。本講義を通じて、奥深い漢詩の世界に対する理解を深めてもらいたいと思います。

なお中国の古典文学は、どのジャンルにおいても、いわゆる西欧の文学（literature）の概念とは異なる独自の在り方、発展・変化の過程を有しています。そうした状況を、中国の文化・歴史的な背景や中国語の特徴と関連づけて考え、また他国・他地域の文学と比較してとらえることは、自らの「文学観」を相対化し、中国文学に対して多角的で深い視座を持つために非常に重要であると考えられます。このような視座を持つことは、文学に限らずおよそ人文科学すべての分野において、必須であると思われます。本講義を通じて、そのような視座を養ってもらいたいと希望します。

◆テキストの読み方

テキストに加え、下記参考文献の①～③を読んで、中国文学の特徴を各ジャンルごとに（特に漢詩を中心に）把握すること。さらに、④を読んでそれぞれの特徴や各作品を文学史の観点から整理し、前後の時代の特徴と比較すること。また、特に漢詩については、⑤～⑧を読んで知識・理解を深めること。

加えて、各詩人および作品についてさらに深く考察し、先行研究を調査するために、⑨を利用すること。

◆履修上の注意

まずは参考文献を読んで、中国文学の特徴、とりわけ他の国・地域の文学と比較して顕著な特徴について、特に漢詩のジャンルを中心によく理解すること。

次に、自分が選択した詩人や文学者、作品にそうした特徴がどのように表れているのかについて、他の詩人・文学者との比較を含めて注意深く分析し、先行研究も踏まえつつ論じること。

◆参考文献

- ①吉川幸次郎『中国文学入門』講談社学術文庫、1976年
- ②興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』世界思想社、1991年
- ③前野直彬『中国文学序説』東京大学出版会、1982年
- ④前野直彬編『中国文学史』東京大学出版会、1975年
- ⑤小川環樹『唐詩概説』岩波書店（岩波文庫）、2005年
- ⑥吉川幸次郎『宋詩概説』岩波書店（岩波文庫）、2006年
- ⑦吉川幸次郎『元明詩概説』岩波書店（岩波文庫）、2006年
- ⑧松浦友久『漢詩—美の在りか—』岩波書店（岩波新書）、2002年

⑨『中国古典文学案内』日外アソシエーツ、2004年

◆レポート作成上の注意点

指定の字数内で、はっきりと読みやすく書くよう心がけること。引用文は自分の文章と区別できるようにし、出典と引用箇所を明記すること。また、レポート本文中で参考文献を引用したり使用する場合は、参考文献の書誌情報に加え、必ずその引用ページも明記すること。

●日本文学関係

◆講義要綱

近代は、人口が都市に流入した時期でもあります。文学に携わる人の中にも、生まれた土地を離れ、高校や大学などに進学した人が多くいます。都市に特徴的な、交通網の発達、産業構造や家族の変化、商店やデパートの発達、見知らぬ人同士の出会い、複数の言語などは、文学の形式や内容の変化と大きくかかわっています。故郷や自然が再発見され、憧憬として描き出されていくのも、都市の認識との対照によるものとも言えます。また、日本人が海外を訪れ、風景や文化の違いに思索を深めることもあります。都市は、人に何を考えさせるのか、文学を通して学んでゆきます。

◆テキストの読み方

紹介した参考文献は、複数の作品を横断する形で書かれていますので、その中から作品を選び、必ず自分で目を通した上で、自分ならどのように解釈するかを考えてください。都市の歴史や地理などの事実については、文学に限らず、研究書などを自分で調査していくことも必要です。参考書には、日本文学で扱われた外国都市についての書籍も加えました。

◆参考文献

- 前田愛『都市空間のなかの文学』1992年、ちくま学芸文庫
 東郷克美・吉田司雄『近代小説〈都市〉を読む』1999年、双文社出版
 和田博文ほか『言語都市・上海』1999年、『言語都市・パリ』2002年、『言語都市・ベルリン』2006年、いずれも藤原書店
 金井景子ほか『浅草文芸ハンドブック』2016年、勉誠出版

◆レポート作成上の注意点

必ず、レポートの書き方についての文献を参照してください。参考にした文献については、最後に文献を羅列するのではなく、どこに何を使用したかの対応関係がわかるように、注番号で示してください。また、文献をまとめただけに終わらないように、自分の考察・意見を重視してください。

●フランス文学関係

◆講義要綱

フランス文学は、特に近現代において、小説、詩、演劇、批評、思想といった文学のあらゆるジャンルで、人類の芸術の歴史から見ても突出した創造を達成しました。それは人間の感性、世界観、思想をおおきく広げ、深化させました。皆さんは今回の学習を通して、いくつかの作品を読むことにより、その一端に触れることになります。学習に何よりも大切なのは、まず自分自身の感覚・知性を全開にし、読書をひとつの「経

験」にまで深めることです。そして、もしその作品に興味を持ったら、作者の生涯、時代背景、あるいは文体などについて文献を探索し、さらに作品の理解を広げるようにしてください。

さてフランスの首都パリほど頻繁に文学のテーマとなり、絵や版画に描かれ、映画の舞台となった都市はありません。フランス革命後の民主化と都市化にともなう、パリは劇的に変化し、その結果、パリは文学や芸術において特権的な都市になります。こうしてメルシエ、バルザック、フロベール、ボードレール、ゾラ、ブルトン、アラゴン、ジュリアン・グリーン、モディアーノなど多くの作家がパリを語りました。なぜそれほどまでにパリは表象されたのか、について考えてみてください。

◆テキストの読み方

取り上げた作品をレポートの課題にそくして、ていねいに読んでください。

◆履修上の注意

特になし。

◆関連科目

テキスト『フランス文学概説』、『フランス文学史Ⅰ』、『フランス文学史Ⅱ』の学習も役立ちます。

◆参考文献

- 饗庭孝男(編)『パリ 歴史の風景』、山川出版社、1997年
 エリック・アザン『パリ大全』、以文社、2013年
 石井洋二郎『パリ 都市の記憶を探る』、ちくま新書、1997年
 小倉孝誠『19世紀フランス 夢と創造』、人文書院、1995年
 小倉孝誠『「感情教育」歴史・パリ・恋愛』、みすず書房、2005年
 小倉孝誠『パリとセーヌ川』、中公新書、2008年
 小倉孝誠『ゾラと近代フランス 歴史から物語へ』、白水社、2017年
 イヴァン・コンボー『パリの歴史』、小林茂訳、白水社、2002年
 澤田肇ほか(編)『パリという首都風景の誕生』、上智大学出版、2014年
 アルフレッド・フィエロ『パリ歴史事典』、白水社、2000年
 本城靖久『十八世紀パリの明暗』、新潮社、1985年
 松井道昭『フランス第二帝政下のパリ都市改造』、日本経済評論社、1997年
 宮下志朗『パリ歴史探偵術』、講談社現代新書、2002年

◆レポート作成上の注意点

レポートを作成する際は、参照した文献にあった要素を単にまとめるのではなく、それらの要素をいったん消化したうえで、自分自身であらためて作品についてよく考え、それを記述するよう心がけてください。参考文献からの引用のモザイクにならないよう注意してください。あくまで「自分なり」の視点で論じることが重要です。

●演劇関係・ドイツ文学関係

◆講義要綱

ドイツ語圏の文学は、哲学や音楽、また自然科学と

も複雑に関連し合って、大きな表現の世界を作り上げてきました。また、ヨーロッパの中央部に位置しながら、長らく統一国家が形成されなかったことも、ドイツ語圏の文化をより一層複雑なものとしています。多様性の中の総合性、変転の中の普遍性を見つめる視線をもって、ドイツ語圏の文学に取り組んでみてください。

◆履修上の注意

テキスト『近代ドイツ演劇』や『近代ドイツ小説』も通読しておくことをおすすめします。

◆関連科目

文学研究は、視点の置き方次第で、あらゆる学問領域に関連付けることが可能です。哲学、歴史学、社会学、心理学、自然科学まで、問題意識を大胆に広げてみてください。

◆参考文献

- 手塚富雄・神品芳夫『ドイツ文学案内』岩波文庫、1993年
 柴田翔『はじめて学ぶドイツ文学史』ミネルヴァ書房、2003年
 池内紀『ぼくのドイツ文学講義』岩波新書、1996年
 ハインツ・シュラッファ『ドイツ文学の短い歴史』(和泉雅人+安川晴基訳) 同学社、2008年

◆レポート作成上の注意点

自分の書きたいテーマが何であるのか、どのような「問い」に対して、どういう「答え」を述べようとしているのか、つねに鮮明に意識しつつ、全体の構成を見据えながらレポートを作成してください(実際に、論文・レポートの内容の見取り図を書いてみるとよいでしょう)。書こうとしているにテーマにどのような先行研究があるのかも可能な限り調べて、論述の冒頭において簡潔に言及するようにしてください。参考文献に記されている「見解」と、自分のそれとが混同しないように気をつけて、クリアに多層的な論述を心がけてください。

●英米文学関係

◆講義要綱

文学作品には、それが書かれた時代と社会の姿が否応なく反映される。作者がそれらをいかに理解し自分自身の問題とした上で、作品としてどのように再構成・表現したかに注目して欲しい。必ずレポート課題で指定したテーマを中心に据えること。自分の興味に応じて時代、作品を選ぶことになるが、この段階でよく調べ考え抜くことが良いレポートを書く秘訣である。読んで面白かった作品を選び、その面白さ、自分の興味を喚起した点について論理的に考察すること。それにあたっては、参考文献を渉猟し、作品とその時代、そして作者への理解を深めることも重要である。

◆参考文献

加藤憲市ほか訳『コンプトン英国史・英文学史』大修館書店、1996年(定評ある百科事典から関連項目を訳出したもの。文学史を大づかみに理解する上で役に立つ。)

中村邦生ほか編著『たのしく読めるイギリス文学—作品ガイド150』ミネルヴァ書房、1994年(有名作品のあらすじ、作者、典型的な読み方などを要領よくまとめている。作品選びに便利。)

◆レポート作成上の注意点

1. レポート冒頭で、作家名、作品名、翻訳を用いるなら訳者名、使った版の出版社名、出版年を明記すること。
2. レポートの内容・論旨を端的に示す独自のタイトルを付けること。
3. 末尾には完備した文献一覧をつけること。
4. 作品の「あらすじ」は不要。自分の論を展開する上で不可欠な場合のみ、必要に応じて部分的に導入すること。

5. 自分の考えと参考文献等から得た知識とは明確に区別し、後者を引用する場合はもちろん、咀嚼し要約などして用いる場合でも、それぞれの箇所注を施し、出典を明記すること。
6. その他の点については、『塾生ガイド』掲載の「レポート作成上の注意」に紹介されているような手引き書を参考にすること。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆文学の学び方

小倉孝誠（文学部教授）

文学とは何か、というのはしばしば発せられる問いである。戦後の日本では『文学とは何か』、『文学入門』といったタイトルの本は数多く刊行されてきたし、現在でもいくつか出回っている。哲学とは何か、歴史学とは何か、さらには経済学とは何か、物理学とは何か、という問いももちろん存在するが、文学はとりわけこの問いかけを誘発する営みであるような気がする。

なぜだろうか。

おそらく文学がすぐれて社会の産物であり、時代と社会によって大きく変貌してきたからである。日本に限ってみても、たとえば200年前（つまり江戸時代末期）と現在では、内容も、形式も、流通形態も根本的に異なる。言葉の芸術である文学は、言葉の変遷や「国語」の転換など、各国の歴史におうじて独自の発展を遂げてきた。そのうえ、翻訳されなければ他の国民に読まれる可能性は低いので、同じ芸術でも絵画、音楽、ダンス、映画に比べて国境を越えることがむずかしいのも特徴である。

文学をどう学ぶか

テキスト「文学」は、そのような特徴と困難を意識しつつ、通信教育部の学生のために編まれた文学への入門書である。ただし、入門書といってもすらすら読める安直な本ではないし、これを読めば文学作品がすぐ分かるようになるというハウツー本でもないのだから、学生の皆さんは心して学習してほしい。テキストの執筆者はかつて慶應義塾大学で教鞭を執っていた日本文学、中国文学、イギリス文学、ドイツ文学、そしてフランス文学の専門家5人である。それぞれの国の文学の流れを記述した文章を並列しているのではなく、各国の特殊性を踏まえつつ全体として文学をどのように読み、どのように解釈し、どのように論じるかを有機的に、そして体系的に解説している。

具体的には次のような構成になっている。

第一部「文学とは何か」は、文学が創造されるプロセスに分け入り、事実と想像力、作家と読者、そして作家を取りまく政治、歴史、社会など外部の現実との関わりを論じる。

第二部「文学のジャンル」では、詩、小説、演劇、文学批評、日記、自伝などの諸ジャンルの特徴と、その特徴におうじた読解方法が説明される。

第三部「文学の表現」は、言葉の芸術である文学作品がどのような要素から成り立ち、どのような形式と文体をまとうかを解説する。そして第四部「文学鑑賞」では、各著者が自分の専門分野にそくして、個別の作品を鑑賞し、読み解く方法を例示している。第一部から第三部までの議論を踏まえて、それぞれの著者がひとつの作品を分析してみたセクションである。

音楽、絵画などと同じく、文学は芸術のひとつである。芸術は何であれ、解説を読んだり、その歴史を知ったりするだけでは、ほんとうに理解することはできない。音楽は聴かなければ分からないし、絵は実物を観る必要がある。同じように、文学についてはやはり実際に作品を読むことから始めてほしい。テキストで言及されている作品でなくても構わないし、ジャンルも問わない。詩が好きで小説を愛する人、演劇に興味がある人など、学生の関心は多様だから。政治学や経済学なら、まずは現代の政治や経済の動きを注視し、それがどのように動いているのかそのメカニズムを知りたいという欲求や、そこに問題や矛盾を感じることを勉強の出発点になるだろう。文学の場合、その出発点にあたるのが具体的な作品を読む体験なのである。

「文学」の科目を履修しようとする学生であれば、すでにそれなりの読書体験を有しているはずで、好きな作品、愛読する作家がいるかもしれない。文学に興味はあるが、何から読んでいいか分からないという人には、まず日本文学、外国文学を問わず古典的な作品を1冊手に取ることをお勧めする。昔から評価の高い、あるいは重要とされる古典には、そうなるだけの理由がある。そうした作品を読むことは、そのジャンルに固有の問題や表現形式、さらには広く文学一般に見られるさまざまなテーマ、技法を考えるにあたって役立つからである。

たいせつなのは、まずひとつの作品を熟読すること。たとえば詩なら杜甫、演劇ならシェイクスピア、小説ならカフカ、批評ならサルトル、自伝なら福澤諭吉を読んでみるのがいい。文学の勉強はひとつの作品、一人の作家を読んだという個人的体験から始まる。

テキストの読み方

そのうえでテキストを読み進めていくわけだが、その際自分が読んだ作品や作家をつねに念頭に置きながら読めば、内容を理解しやすいだろう。熟読した作品の内容が脳裏に残っていれば、他の作家やジャンルについて述べられていることを把握するうえでも、それが役立つ。そのとき、漫然と読むよりは、ノートやカードに内容を要約してみたり、パソコンの画面で重要な部分を抜き書きしたりすることが有効である。それがうまくできないときは、テキストにたいする自分の理解力が足りないと考えたほうがいい。人はよく分かっていることを、明晰に文章化できないからである。要約やメモを作っておけば、その後のレポート作成や、科目試験の受験にもおおいに役立つに違いない。

さらに活用してほしいのが、各章の末尾に付されている適切で、含蓄の深い「研究課題」である。各章のテキストを読む前に、まずこの「研究課題」をしっかり頭に入れてほしい。そうすれば要約やメモを作成しやすくなる。たとえば、おもに小説にそくして、作家が作品を創造する動機とプロセスを論じている第一部第二章「文学の創造」の末尾には、次のような研究課題が示されている。

痛切な体験にもとづく事実の記録は、しばしば読者を感動させる。しかし、事実の記録かならずしも文学作品ではない。では、事実の記録と文学作品を分かつものとは何か。

事実の記録（たとえばルポルタージュ）も小説も、同じほどに読者の心を打つことがあるが、感動の質は違う。記録と小説はどちらも散文による物語の形式をとるが、その創造の過程が異なる。その違いについて考えてほしい、という課題である。考えるためのヒントは本文中にきちんと提示されている。じつはこの問いは、テキスト「文学」のひとつの章の課題にとどまらない根本的な問いであり、それについて考察することは文学一般の本質についての考察へとつながっていく。

先に述べたように、本書は専門分野の異なる5人の著者によって書かれた文学への入門を意図した共著であり、日本、中国、イギリス、ドイツ、フランスの個別の文学史を解説するものではない。それぞれの国の文学史について深い知識がなくても、読んで理解できるような内容になっている。ただそうはいっても、それぞれの国には知っておくべき代表的な作家がいるし、どの時代にどのような文学潮流が存在したかも大ざっぱに把握しておくほうがいい。幸いなことに総合教育科目「文学」のほかに、専門教育科目として各国の文学（史）に関するテキスト科目が開講されているので、必要におうじてそれらのテキストを参照していただきたい。

たとえばフランス文学関連としては、歴史をたどったものとして『フランス文学史Ⅰ』（中世～18世紀）、『フランス文学史Ⅱ』（19世紀～現代）、さらにおもなテーマ、諸ジャンル、文学の構成要素、そして文学と制度を解説した『フランス文学概説』がテキスト科目として開講されている。また、毎年スクーリングでも「文学」が開講されているので、しっかり活用してほしい。

レポート作成の心構え

次にレポートについて述べておこう。

「文学」のレポートは各国の文学ごとに、一般的にはかなり大きな課題があたえられるが、どの課題を選ぶにしても、出発点はやはり個別の作品をじっくり、深く読み解くことである。その際、テキストだけでなく、テキストや課題のなかで指示されている参考文献を適宜参照することもたいせつである。読む作品は、課題の趣旨にあったものであれば自由に選んでよい。自分がすでに読んだことのある作品ならば、取り組みやすいだろう。文学作品を読むときは、自分の経験と思考を最大限に活用して向き合ってほしい。作品をどう読み、何を感じ、どのようなメッセージを読み取るかは作品の内容の問題であると同時に、じつは読者の問題でもあるのだ。偉大な文学作品は豊かな世界をはらんでいるが、その世界の肌触りを感じとるためには、読む側にもそれなりの努力と精神の集中が求められるということである。

テキストを学習する場合と同じく、文学作品を読む場合にもメモやノートを取ってほしい。レポートの課題を念頭に置きながら、詩であれば、どのような比喩、そして象徴的表現が用いられているのか、詩人によって繰り返し現れるイメージがないかどうか、を考える。小説や戯曲であれば、どのような時代と社会を背景にして、どのような人物が登場し、何が起こるのか。要するに、物語の筋立てといくつかの重要なテーマを自分なりの言葉でしっかりまとめてみる。重要だと思われる箇所には傍線を施したり、付箋を貼り付けたりするのも学生がよく行なうことである。文学のレポートの場合、自分の主張や議論の根拠を示すために、作品からの引用が不可欠であることは言うまでもない（ただし、引用をつなぎ合わせただけでは困る）。

また、文学についてのレポートだから文章も「文学的」でなければならない、と考える学生もいるようだが、それは誤解である。論じる対象が何であれ、レポートは筋道をしっかり立て、構成を整え、自分の主張を明解に記述することが求められる。

よく言われるように、単なる感想文ではレポートにならない。面白い、感動したという印象はレポートを書く動機づけとしてはたいせつだが、そこからさらに一歩踏み出し、作品にたいする自分なりの解釈を提示してほしい。レポートとは、学生が自分の学習成果を示す場なのだから。

卒業論文に向けての可能性をひらく

皆さんのなかには、文学部Ⅲ類に在学している人がかなりいる。「文学」でレポートを提出した、あるいはこれから書く、そして「文学」の科目試験を受験した、あるいはこれから受験するという人もいるだろう。そのた

めの基本的なアドバイスはこれまで指摘したとおりである。

最後に、テキスト科目としての「文学」の勉強を超えて、さらにその先の可能性について述べておきたい。少し気の早い話かもしれないが、文学部Ⅲ類の学生は最後に、日本文学、中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学のいずれかの分野で卒業論文を執筆することになる。その場合、特定の作家ないしは作品についての論文になるのが通例だろう。「文学」を学習する過程で得た知識や情報、レポートを執筆するために参照した文献、そして何よりレポートを作成した経験そのものが、そのとき有益な助けとなる。研究とは日々の蓄積の成果にほかならない。

領域や指導教員によって多少の差異はあるが、卒業論文はかなりの分量が求められる。皆さんの多くにとって、おそらくこれまで書いたことのないほど長い論考を組み立てなければならない。「ほんとうに自分は書けるのだろうか」と、当初は不安に駆られるに違いない。しかし、あまり心配する必要はない。皆さんはこれまでレポートを数多く執筆してきたし、そのうちのいくつかは文学に関連していた。卒業論文は、いわばレポートの積み重ねだと思えばよい。卒業論文の一章がひとつのレポートだと考えればいいのである。テキスト科目「文学」を学び、レポートを書くことで、皆さんはすでにその準備ができているはずだからである。

レポートも卒論も、そのきっかけになるのはしばしば、1冊の本を読んだときの感動であろう。少し大げさに言えば、その感動が読者の人生観や世界観を変えることもありうるのだ。その感動の理由を解きほぐし、作品の多様な意味と作者の思想に迫るのが文学を学ぶ醍醐味である。その際、作品をていねいに読むだけでなく、作家が生きた時代と社会を背景にした映画やミュージカル、作家と同時代の画家の展覧会を見たり、作家ゆかりの土地に旅することで、卒業論文のテーマがより明解になったり、予期しなかったふくらみが出たりするものである。その意味で、これは他の分野でも同じだが、文学をより深く学び、感じ、理解するために、普段から知性と感性のアンテナを鋭敏に保つよう努めていただきたい。

(『三色旗』第810号(2017年2月刊)より転用)

歴史(日本史)

2 単位

A043-9591

市販書採用科目

◆テキスト

竹内誠・佐藤和彦・君島和彦・木村茂光編『教養の日本史〔第2版〕』東京大学出版会、1995年

〔第1回〕

◆講義要綱

日本古代国家は、七世紀半ば以降、城柵を拠点として古代の新潟県および東北地方への領域拡大策を進めた。その結果、蝦夷の生活領域を脅かすことになり、様々な対立や紛争が生れることとなった。蝦夷政策の歴史的過程についてその時々の政治状況や地域情勢を踏まえながら理解することは、古代国家の特質を考える上でも重要な意味をもっている。

◆テキストの読み方

テキスト『教養の日本史』36～37頁も参照すること。

◆参考文献

熊谷公男編『東北の古代史3 蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館、2015年

鈴木拓也編『東北の古代史4 三十八年戦争と蝦夷政

策の転換』吉川弘文館、2016年
川尻秋生『平安京遷都』〈シリーズ日本の古代史⑤〉岩波新書、2011年
熊谷公男『蝦夷の地と古代国家』〈日本史リブレット11〉山川出版社、2004年

〔第2回〕

◆講義要綱

近年、日本近世史研究者の間でも環境史への関心が高まってきている。環境史の捉え方は一様でないが、ひとまず「自然と人間の関係史」と理解しておきたい。このテーマには幾つもの視角からアプローチできるが、近世史研究においては、災害・資源・動物・自然観などに着目した成果が蓄積されてきている。これらの内、主に災害の問題を取り上げ、考察を加えることを課題としたい。

◆参考文献

倉地克直『江戸の災害史—徳川日本の経験に学ぶ—』中公新書、2016年
北原糸子『日本震災史—復旧から復興への歩み—』ちくま新書、2016年

◆成績評価方法

科目試験による。

◆歴史(日本史)の学び方

田代和生(名誉教授)

歴史(日本史)は、2000年度から新規に市販本の『教養の日本史』(東京大学出版会)をテキストとして導入した。本書は、近年目覚ましい進歩をとげている日本史学の新たな成果を積極的に取り入れ、大学の「日本史概説」用テキストとして編纂されたものである。高度な内容ながらも、一般の方が読んで分かり易い文体でまとめられており、とくに日本史を政治の側からだけでなく、各時代を大きく動かす原動力になった民衆(庶民)の側に注目して書かれている点が特徴といえる。

初めに、テキストの冒頭に書かれている「オリエンテーション」に、目を通していただきたい。ここでは日本史を学ぶための心構えが簡潔に述べられているが、重要なことなのでつぎに少し詳しい解説を加えておく。

まず日本史を学ぼうとする人がよく陥る間違いのなかに、歴史とは暗記の学問であると思い込んでいることがある。年代や起こった事がら、書名や人名など、ただ一方的に頭に詰め込み、それで日本史が理解できた、日本史が得意だなどと錯覚している人が実に多い。これでは勉強は無味乾燥なものになり、せっかくの歴史の醍醐味を実感することはできない。

歴史というのは、人間の生きてきた軌跡であり、個々人の行動の一つ一つの積み重ねから成り立っている。たとえ偉大な業績といえども、それらは決して計画されたものばかりではなく、時には偶然さえも左右している場合がある。その本人は自覚していないが、実は背後で何らかの法則や発展の原理に影響されていることもある。それら歴史上に登場する人々の行動を自分になぞらえ、追体験してみることも重要である。すると、多くの「なぜ?」という疑問が生まれてくる。なぜ女王卑弥呼や古代の王たち、足利将軍までもが中国の金印を得ようとしたのか。なぜヨーロッパ人は遠いアジアへ、それもポルトガル人が日本にやって来て、キリスト教を短期間のうちに布教できたのか。なぜ明治は「維新」であって、「革命」とはいわれないのか。

疑問を解決しようとする、日本国内のことだけでなく、国外の歴史の知識も必要とされていることが分かる。事象をできるだけ科学的に説明しようとする、多くの史実を集めることの重要性に気がつく。つまり歴史の勉強とは、結果を暗記することではなく、「なぜ?」という問題意識を持つことに始まり、さらにその仮説を勇氣をもって提示し、説明し得る資料収集(検索)を行い、歴史的意義(理論化)を考えることに時間を費やすべきなのである。

日本史を学ぶときに忘れてならないことは、古代から現代までの事象に精通しようとするよりも、まず自分自身の歴史への「入口」を探すことである。このことが、先述した問題意識につながってくる。もちろん問題意識を持つためには、日本史にかかわる一応の基礎的知識が必要とされることはいうまでもない。室町時代に源頼朝が登場するような初歩的な誤りこそしないまでも、テレビや小説、漫画、ゲームなどによって潜在的な知識を積み上げてきた方は、テキストを読む機のそばに、できるだけ新しい高校の日本史の教科書や歴史辞典・年表などを備えて置いて欲しい。年表に、歴史地図が挿入されていれば、なおよい。大学における日本史の科目は、すでに高校レベルの基礎知識を修得していることを前提に進められるため、歴史用語など専門的な語句の説明がしばしば省略されてしまっているからである。

テキストの本文は、古代から近現代まで、4部の構成からなっている。つぎにその概要と学習のポイントを簡単に説明しておく。

第1部 古代 この時代は、考古学的発掘や文献史料の解釈の仕方により、新しい研究成果が多く出されていることから、日本史の勉強から遠ざかって久しい方は、そうした新旧の学説の相違点に注意を払いながらテキストを読むことが肝要である。とくに「1 稲の道」では、日頃から新聞やテレビによる遺跡や遺物の発掘成果の報道に注目しておく、古代史のおもしろさを実感することができる。またあとに続く「2 大王から天皇へ」「3 律令と大仏」「4 一〇世紀の社会変革」では、都城・木簡の発掘調査や、中国・日本の文献史料などによって、律令国家の成立とその変遷が述べられている。このあたりから、中央政府のあり方が地方支配や人々にどのような影響があったかを整理しておく、後の時代を理解するのに役に立つ。

第2部 中世 鎌倉・室町時代、さらに安土・桃山時代までを対象としている。かつてこの時代の歴史は、幕府の勢力動向を中心に考えられてきたが、最近の研究成果は都市や農村部における民衆の動きにかかわるものが多く、テキストもここに重点が置かれている。このうち「2『みやこ』と『いなか』」では、都市や農村の生活環境が、商業の発展と非常に深い因果関係にあったことが示唆されている。また「3 悪党」では、単なる無頼の徒という捉え方ではなく、諸国に蜂起した悪党こそ鎌倉中後期の政治史を語る上での「台風の目」であるとされ、後醍醐天皇の討幕行動もこの視点から説明されている。「6 戦国の世」は、応仁の乱後の幕府体制崩壊から豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）までを対象としているが、簡単すぎて理解しにくいところもある。とくに群雄割拠から国民軍編成といった時代の到来に、あるいは新たな宗教キリスト教との触れ合いの時代に、民衆たちがどのようにかわってきたかについては、脚注や巻末にあげられた参考文献で補って勉強して欲しい。

第3部 近世 江戸時代を、近世国家形成の時期ととらえる。まず「1 幕藩制支配の成立」「4 幕政の展開」では、徳川幕府の政治的・経済的基盤と特質を、中世武家政権と比較しながら整理すると理解しやすい。「2 鎖国」では、日本を海外から遮断し、島国根性を育成したと評価されてきたかつての伝統的「鎖国史観」からではなく、新たな研究成果である東アジア国際秩序とのかかわりのなかから記述されている。とくに国際交流は長崎だけでなく、朝鮮や琉球との外交・貿易、北方蝦夷地との関係も含めるとする「四つの窓」の項に注目する必要がある。「3『村方』と『町方』」「5 西鶴と京伝」「6 一揆、打ちこわしの世界」では、躍動的な近世人の考えや生き方がリアルに描かれている。支配者対被支配者という形だけではとらえ切れない、近世社会の真の姿をそこから読みとって欲しい。

第4部 近代・現代 幕末期から現代までの150年間、主に戦後史に力点が置かれている。「1『御一新』」「2 民権と国権」では、新たな中央集権国家の樹立と近代化という命題のもとで、国権が優先され、やがてアジア侵略への道を歩み始めた日本の姿が、平易な文体で描かれている。「3 あゝ君死にたまふことなかれ…」」「6 軍部」「7 戦争と民衆」では、戦争の時代といわれる20世紀社会の現状を、国内の事情ばかりでなく、国際的視野から把握する必要がある。「8 占領下の日本」「9 安保から高度成長へ」「10 核危機の時代」は、戦後史50年にかかわるもので、民衆史の側から歴史をとらえたいとする本テキストの特質が最も顕著に反映されている。同時代に生きる私たち個々の体験とあわせて読むと、歴史的な物の見方が少しずつ分かってくる。

テキストを読む順番は、必ずしも古い時代からでなく、自分が最も知りたいと考えている時代に焦点を合わせて読むのもよい。ともかく通読してみ、理解できた内容や要点を整理してみよう。少しでも興味を抱いた事項があれば、その要因がどこにあるか、前の時代にさかのぼって探してみる。またそれが後の時代へ継続されているのか、いないのかを確認してみることも重要である。テキストに分からない言葉が出てきたら、飛ばさないで、すぐに高校の教科書の索引や辞書を引いて、別の言葉で説明したものを読むと、意外に簡単に解決することが多い。辞典は、事からの流れを時代を越えて把握するためにも便利である。図書館などに備えてある『国史大辞典』全15巻（吉川弘文館）などは、その項目を読んでいるだけで日本史の専門的な知識が得られるので、ぜひ活用して欲しい。このほか巻末にあげてある「各章参考文献」によって、テキストで不足している部分の補充をしておかなければならない。

レポート作成は、テキストや参考文献に書かれている文章をそのまま切り取ってきたようなものではなく、自分自身の言葉で表現しなければいけない。どうしても文章を書くのが苦手という方は、本多勝一『実戦・日本語の作文技術』（朝日文庫）、あるいは中尾堯他編『日本史論文の書きかた』（吉川弘文館）などを参考にしたい。ワープロ原稿ではなく、分からない漢字などはきちんと調べて、正しい文字を書いて提出して欲しい。国語辞典は、一般的な『広辞苑』（岩波書店）のほか、活字の大きめな『新明解国語辞典』（三省堂）が見易く、漢和辞典は『新字源』（角川書店）が至便である。本格的な『日本国語大辞典』全20巻（小学館）や諸橋轍次著『大漢和辞典』全12巻（大修館書店）は、語源を歴史のなかに探る楽しさを味わわせてくれる。

（2000年4月1日執筆）

歴史(東洋史)

2単位

A063-1601

◆講義要綱

中国を中心としたアジア地域および中東・イスラーム世界の歴史について、概論的な知識を習得する。その上で、東洋史研究において特に重要なテーマに関して、課題・参考図書の精読、関連文献の調査・研究によってさらに理解を深めて行くことを目標とする。「歴史(東洋史)の学び方」も参照すること。

◆参考文献

佐藤次高編『西アジア史Ⅰ アラブ』(新版世界各国

史8) 山川出版社、2002年
佐藤次高『イスラーム—知の営み』(イスラームを知る1) 山川出版社、2009年
檀上寛『永楽帝—華夷秩序の完成』講談社学術文庫、2012年

◆レポート作成上の注意点

課題・参考文献の文章を引用、または典拠として利用した場合には、必ずその頁数を註として明記してください。なお、註はレポートの最後にまとめて示すこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆歴史(東洋史)の学び方

藤木健二(文学部准教授)

総合教育科目「歴史(東洋史)」では、アジアと呼ばれる地域とその周辺部からなる非常に広大な地域の歴史を学習します。具体的には、中国や朝鮮を舞台とした東アジア史がひとつの柱としてあり、これに加えてイスラームの影響を強く受けた西アジアや北アフリカの歴史、すなわち中東・イスラーム世界史があります。また、中央アジア史や南アジア史、東南アジア史のほかに、時代やテーマによってはヨーロッパ史やアフリカ史などもその視野に入ってきます。日本と中国の交渉史や華僑・華人の歴史、地中海を挟むヨーロッパ・キリスト教世界と中東・イスラーム世界の交流の歴史といった複数の地域や文化圏をまたぐ移動や交流の歴史も東洋史の範囲に含まれます。この科目では、こうしたさまざまな地域や時代に生きる人々について、政治・社会・経済・文化などのあらゆる側面から歴史的に考えていきます。そのような考察をとおして多様な人々の価値観が存在することを知り、その理解を深めていくことが東洋史を学ぶことの醍醐味といえるでしょう。ここでは、これから「歴史(東洋史)」を学ぶ皆さんに向けて、少しでも学習の指針となるように「テキストの構成と概要」、「テキストの読み方」、「学習のアドバイス」、「レポート作成の注意点」の4点について簡単に解説をしてみたいと思います。

テキストの構成と概要

「歴史(東洋史)」では、2016年度より新しいテキストが使用されています。この新しいテキストは東洋史を初めて学ぼうとする学生に向けて書かれており、「概説」、「研究入門」、「基本文献」の3部で構成されています。第1部の概説は中国を中心とする東アジア史と、中東を中心とするイスラーム世界史のふたつの柱からなっています。前者は黄河や長江流域における中国古代文明の誕生に始まり、鄧小平が改革開放を唱えた20世紀後半にいたるまでの歴史を概観します。後者はイスラームが出現した7世紀初頭を出発点として、近代ヨーロッパに対する劣勢が顕在化する19世紀の初めまでを扱います。冒頭で述べたように東洋史は非常に広大な地域の歴史からなるため、第1部の概説だけでは東洋史のすべてを網羅することはできませんが、東アジア史と中東・イスラーム世界史という重要な地域の歴史をとおして、東洋史の基礎を学習することができるよう。第2部の研究入門は、「中国史入門」、「中国古代史入門」、「近現代東アジア交流史の誘い」、「アラブ社会史入門」、「近世オスマン朝下の都市社会」と題する5章からなっています。各章では、執筆者がそれぞれの専門分野から入門的な問題を取りあげ、東洋史の初学者に伝えたいことを自由に論じています。各章の学習を通じて、あらゆる地域や時代、テーマを扱う東洋史学の多様なあり方に触れてほしいという意図があります。第3部の基本文献では、中国・アラブ・オスマン朝のそれぞれの歴史の学習に役立つ基本的な文献を紹介しています。とくに「工具書」と呼ばれる辞典や事典、年鑑、地図、年表などは、歴史的人物や地名、専門用語などを調べるために必要不可欠な文献ですので、早い段階で確認しておくようにしましょう。

テキストの読み方

東洋史、西洋史、日本史を問わず、歴史学は単に年代や事件、人物、地名を覚えればよいという暗記の学問ではありません。歴史を学ぶうえでより重要なのは、さまざまな地域や時代に生きる人々に目を向け、そこから生じた疑問を考察することです。しかし、そのように歴史を考えていくためには、やはり基本的な事柄を理解し、基礎的な知識を身につけておく必要があります。そこで「歴史(東洋史)」の学習は、テキスト第1部の概説を通読することから始めるとよいでしょう。テキストに収められた概説はかなり簡潔にまとめられていますが、それでも見慣れない人名や専門用語が多く登場するので、この内容を限なく消化することはとても難しいように思います。歴史の学習は、一度にすべての内容を理解しようとする、なかなか上手いきません。最初はわからない箇所が出てきてもあまり立ち止まらず、できるだけ短期間で通読し、全体の大まかな流れを押さえるように努めましょう。一度、通読し終えたら、しばらく時間をおいた後、再び読み直してみることも大切です。二回目以降は、難しい箇所にもじっくりと向き合い、他の概説書や辞典、歴史地図帳などを補助教材として利用しながら理解を深めていくとよいでしょう。補助教材を探すときには、テキスト第3部の文献一覧を参考にして下さい。

中東・イスラーム世界史では、大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』（岩波書店、2002年）、日本イスラム協会ほか監修『新イスラム事典』（平凡社、2002年）の二つの用語辞典がとくに役立つでしょう。またテキストの巻末には、東洋史歴史年表があります。

第1部の概説を通読し、ある程度、東アジア史と中東・イスラーム世界史の概要が頭に入ったら、次に第2部の研究入門を読んでみましょう。すでに述べたように、第2部は5つの章からなり、各章では執筆者が自らの専門分野に関する事柄を自由に解説しています。そのため各章が扱う地域は中国からアラブやトルコに至るまで、時代は古代から近現代に至るまで非常に多岐にわたっています。さらに、第1部の概説では政治や国家・王朝の歴史が中心であったのに対して、ここでのテーマは歴史の学び方、文化交流史、社会史などとなっています。したがって、全体の流れを押さえることを目的とした第1部とは異なり、第2部では各章のつながりをあまり気にせず、皆さんが興味をもった章から自由に読み進めていきましょう。そしてバラエティーに富んだ東洋史学のあり方を実感して欲しいと思います。

ここでは第2部の一例として、私の担当した第5章「近世オスマン朝下の都市社会」（テキスト181～204ページ）の内容を簡単にみていきましょう。14世紀の初め頃、西アジアのアナトリア（小アジア）に小国として成立したオスマン朝は、16世紀までにバルカン半島やアラブ、北アフリカなどを支配する大帝國に発展しました。それに伴ってオスマン朝のもとではイスタンブール（コンスタンティノープル）やエディルネ（アドリアノーブル）、シリアのダマスカスやアレppo、エジプトのカイロなどの都市が繁栄し、地域の政治や経済、文化の中心的な役割を果たしました。この章では、そうしたオスマン朝下の都市の社会について、とくに15世紀後半から18世紀末までの首都イスタンブールの事例を中心に、「都市の成り立ちと開発」、「街区の生活」、「公衆浴場」、「娯楽文化」などの問題をとおして考察することを目的としています。例えば「都市の成り立ちと開発」では、1453年にコンスタンティノープルを征服してビザンツ帝國を滅ぼしたオスマン朝の君主（スルタン）メフメト2世が、この都市をいかに再建したのかという問題を考えます。そして、イスラーム教徒の礼拝の場であるモスクが都市の開発に重要な施設であったこと、人々の生活に必要な宗教施設や公共施設がイスラームの寄進制度（ワクフ）に基づいて建設・運営されたことなどを学習します。このほかにこの章では、都市の居住地区を構成する街区や、人々の情報交換や社交の場でもあった公衆浴場、宗教や歴史に根ざした多彩な娯楽文化など、一般的な概説書では触れられることが少ない社会史的なテーマを意識的に取り上げています。

学習のアドバイス

これまでもテキストの内容を紹介しながら学習のアドバイスをいくつか述べてきましたが、ここではさらに二つの点をアドバイスとして挙げておきたいと思います。一つは文献の選び方と読み方についてです。テキストの学習をとおして、ある程度、東洋史の基礎知識が身についたら、次にテキスト第3部の「基本文献」などを手掛かりに、自身の関心にあった文献を読んでみましょう。文献には入門書から専門書までさまざまな種類があり、最初のうちは、どの文献を選べばよいか難しいかもしれません。そのときは手にとった文献のすべてを無理に通読しようとせず、自身の関心や学習の進捗にあった文献を気長に探していきましょう。もし気に入った文献が見つかったなら、テキストと同じように繰り返し読み、疑問に思った点を歴史事典などで調べてみましょう。こうした「お気に入り」の文献を見つけることは、歴史を楽しく学ぶ上でとても大切です。

もう一つのアドバイスは、レポートや試験を視野に入れた学習方法についてです。レポートや試験の設問に対して適切な解答をつくるためには、東洋史の知識だけでなく、その知識をもとに考える力も必要になります。この考える力は、テキストやその他の文献をただ闇雲に読むのではなく、考えながら読むことを日頃から意識して続けることで少しずつ身につけていきます。最初のうちは、疑問に思う点を見逃さないように注意深く文献を読み、見つけた疑問点について丁寧に調べていくことが、考える力を身につけるための重要な作業となるでしょう。また、東洋史に関する何らかの問題を自分自身で考え、それについて自分自身で調べ、解答するというのも良い練習になるでしょう。その際、問題はあまり難しくせず、身近な文献を調べれば解答することができる程度のシンプルなものにするのがポイントです。例えば「16世紀の中東・イスラーム世界では、どのような国家・王朝が支配していたのか、それらはどのように統治していたのか」という問題を設定したならば「16世紀の中東・イスラーム世界ではオスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝という強大な三つの王朝が並存した。オスマン朝は13世紀末頃にアナトリアの北西部で成立し、バルカン半島やシリア、エジプトなどに領土を拡大させ、16世紀のスレイマン1世の治世に最盛期を迎えた。その支配体制は…」のような解答になります。もし興味があったら、この解答の続きを考えてみて下さい。

レポート作成の注意点

レポートを作成するには、その前にテキストや参考図書のほか、レポートの設問で提示された課題図書をしっかりと熟読し、先に述べた学習を積み重ねておく必要があります。個人的な経験で言えば、提出されたレポートのなかには、ごく稀にですが、不勉強なままテキストや課題図書の内容を「適当」に書き写したと思われるものがあります。当然のことですが、そのようなレポートで合格することは難しいでしょう。合格を得るためには要領良くこなそうとするのではなく、半年や一年、あるいはそれ以上の長いスパンで学習計画を立て、それに基づいて根気強く作業を進めていくことが重要です。

また、レポートはテキストや参考図書、課題図書の内容をそのまま書き写しただけでは成立しません。自身の言葉で、そして設問に最も適したかたちで表現する必要があります。そのためには、やはりある程度の長いスパン

ンで「レポートを書く練習」をしておくといいいでしょう。最初のうちは、テキストに書かれた内容を短い文章にして箇条書きをしながらノートにまとめたり、段落ごとに内容を暗記し、それを自身の言葉でノートに書いてみるとよいかもしれません。こうした練習は、より適切なレポートの書き方が身につくだけでなく、文献を正確に読解する力の向上にもつながってくるでしょう。

最後に、レポートの設問をよく読み、十分に準備をしてからレポートを書き始めるようにしましょう。冒頭にも述べたように、歴史学は暗記の学問ではなく、多様な人々の価値観を発見し、考え、理解を深める学問です。したがって、レポートで重要なことは、どれだけ多くの年代や人名、事件などが書かれているかではなく、設問を受けて考察したことが適切に表現されているかです。ここでは、先の「学習のアドバイス」で述べたような練習が生きてくるでしょう。

以上、簡単ではありますが、総合教育科目「歴史（東洋史）」の学び方について解説してきました。実際に東洋史の学習を始めてみると、ここで紹介した学習方法やアドバイスを実践することは難しいと感じるかもしれません。そういうときは「正しい学習方法」にこだわって立ち止まるよりも、できることや興味のあることから始めてみましょう。東洋史に限らず、何かを学ぶには「慣れること」と「続けること」がとても大切だからです。そして、これまで述べてきたように常に「考える」ことを念頭におきながら粘り強く学習を進めて下さい。

(2017年4月1日執筆)

歴史(西洋史)

2単位

A003-7102

◆講義要綱

この科目は、高等学校「世界史」の西洋史部分と、大学で学ぶ学問的に高度な西洋史との橋渡しをすることを目的としています。従ってテキストは、「世界史」よりは多少詳しく、かつ学問的にも多少高度に書かれています。入学後、他の難解な科目を履修する前に、この科目で歴史の勉強の基礎を作ってください。

◆テキストの読み方

レポート課題に取り組む前に、テキストを一読して西洋史の全体的な枠組みを把握し、同時に西洋史的な感覚をやしなってください。続いて、レポートの課題図書を読みながら、同時に歴史の流れや事実をテキストで確認していくとよいでしょう。その際、自分なりにノートに整理して知識をまとめておくと、科目試験の勉強にも役立つはずですが、科目試験に向けては、細かな事実を暗記するのではなく、歴史の流れとそれに対する歴史家による解釈をきちんと押さえて理解しておくようにしてください。

◆履修上の注意

この科目は、入学後早い段階で履修されることを想定しています。だから、事前ではなく同時に、西洋の文学史、近代思想史、政治学、経済原論などを履修すれば、この科目の理解に役立ちますし、科目間の相乗効果も期待できます。

◆関連科目

「西洋史概説Ⅰ(古代・中世)」「西洋史概説Ⅱ(近代・現代)」「西洋史特殊Ⅰ—古代オリエント史—」「西洋史特殊Ⅱ—近世ヨーロッパの宗教・政治・社会—」「西洋史特殊Ⅲ—近代イギリス国家の成立(中世から近世へ)—」

◆参考文献

西洋史全般については、テキスト巻末の参考文献を参照してください。レポート作成のためにはレポートの課題図書を丁寧に読んだ上で、レポート課題および下記のレポート作成上の注意点にあげる参考文献を、無理のない範囲内で参照してください。複数の参考文献を読んで考えるという勉強方法は、西洋史の勉強にとどまらず、卒論に至る今後の通信課程での学習全般に役立つでしょう。

◆レポート作成上の注意点

- ・課題図書を読む際には、テキストで歴史の事実や流れを押さえつつ、ノートをとって丁寧に読むこと。
- ・レポートの記述において、課題図書および他の参考文献を参照した箇所は、必ず注を付けて出典(著者、書名、出版社、出版年、該当頁)を示すこと。
- ・各国史の概説書(など)としては、ミネルヴァ書房の『大学で学ぶ西洋史』『近代〇〇史』『概説〇〇文化史』(〇〇は国名)などのシリーズや、山川出版社の新版世界各国史シリーズ、世界歴史大系シリーズ、などの中から、各自が公共図書館などで利用可能なものを利用するとよい。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆歴史(西洋史)の学び方—時代錯誤防止のために—

坂口昂吉(名誉教授)

私はかつてあるレポートを読んだことがある。その題目は古代アテナイの民主制に関するものであった。アテナイ市民は全員民会に出席した。彼らは政治において全く平等な権利を行使した。少数エリートから成る評議会、議案提出権のみを持ち、議決権は市民全員から成る民会に握られた。しかもその上に、僭主出現を防止するための貝殻追放という制度まで整っていた。それはまさに古代における民主制の頂点をなすものである。ここまで読んできた時、私はこのレポートにAをつけた。ただし叙述はそれで終わってはいなかった。続いてそれは語る。この古代アテナイの完璧な民主政治と較べると、現代の政治は民主主義などといえるものではない。現在の選挙民で自分が政治の主権者であると感じている人が一人でもあろうか。歴史は進歩するものではない。むしろ退歩するのである。この結論を読んだ時、私は自分の採点をAからBに変更しようかと思った。しかし自分の要求の苛酷さを思い、評価をくつがえすのを止めた。そしてこの結論に対して論評を加えるにとどめたのである。

歴史的にものを見る際、避けなければならぬ視点に、時代錯誤(anachronism)がある。新しい時代のことがらに古い時代の価値観を適用したり、逆に古い時代のことから新しい時代の価値観を適用したりすることによって生ずる間違いである。簡単に言えば時代の差異を無視し、時代による相違を混同することである。さきにあげたレポートの作者は、アテナイの民主政治という事項そのものに対する適切な把握にもかかわらず、それを近・現代の民主主義と強引に比較した結果、まさに時代錯誤に陥ってしまったのである。たしかに古代世界において、アテナイの民主主義は卓越したものであった。アリストテレスの『アテナイ人の国制』を念入りに読んでみれば、それが人類の生みだした国制の頂点をなすが如く感ぜられる。だがそれでもなお時代の制約の下にあるという事実を認めざるをえないのである。それは一都市国家にのみ限定される民主制であった。アテナイ全市民の出席に基づく直接民主制であった。その意味で近代以降の広大な国民国家を支配する間接的な代表制民主主義とはその本質を異にするものであった。しかもそこには基本的な人権という観念が欠如していた。婦人参政権はもちろん、奴隷や居留外人なども排除されていた。それは家父長制と奴隷制の上にあげられた民主政治であったのである。したがってそれを無条件で近・現代の民主政治と比較するのが無理なのである。そこでは両者に共通な価値基準がないから、一方での基準では前者が秀で、他方の価値基準では後者が優れている、とでも言うしかないのである。もちろん私は新旧二つのものに共通する価値基準が全くない、などという無条件の相対主義を唱えようとしているのではない。歴史は時代と共に変わりゆくものを求めると同時に、永遠不変のものをも追求する。しかしこの場合の不変なものとは、永遠不変な人間本性とか、宗教上の絶対的真理とかであって、栄枯

盛衰する政治制度の如きものではないのである。

このように時代による価値観の相違を明瞭に認める時、われわれは歴史的考察の根本において、言葉の意味の相違を発見しなければならない。即ち含意（connotation）の変化を意識すべきなのである。同じ民主主義という言葉でも、古代と近・現代ではその意味を全く異にするのである。そしてこの意味の違いを発見し、それに驚くことこそ、歴史学のもっとも重要な使命なのである。かくしてこそ、歴史学は人間のために未知なるものを見出し、人類に視野の拡大を与えるのである。

このような視野の拡大は、民主主義に限定されるわけではない。資本主義についても、人文主義についても、ルネサンスについても、宗教改革についても、およそ歴史上広く使用されるすべての文化概念についても言うのである。それらの言葉がわれわれと異なった古い時代について用いられる場合に、われわれはその意味内容の相違を発見しなければならないのである。

しかしここに例をあげたような時代錯誤に陥らず、学習を進めるには、どのような方法があるであろうか。それには、言葉を歴史的理解のための単なる手段とか道具と考えず、言葉の意味が時代そのものを、強いて言えば歴史そのものを表示すると考える必要があるのである。だがより具体的な方策としては、教科書を読む際にいきなりある個別的な事項にとり組むより先に、全体を再三通読するのが大事である。というのは、歴史には流れ、即ち言葉の意味の変遷過程があるのであって、この流れに則して読む限り、大きな時代錯誤に陥ることはまずないからである。

また私はある時、次のような答案を読んだことがある。それはグレゴリウス改革に関するものであった。ニコラウス1世以来、グレゴリウス7世を経て、1122年ヴォルムスの政教条約に至る改革の経過をかなりよくまとめて書いてあった。そこまではよかったのである。私は採点をAかBかと迷いつつ読んでいた。ところがその直後、この改革はルターの宗教改革の影響のもとに生じた、という但書が1行ついているのを見て、私は仰天した。11世紀から12世紀にかけてのグレゴリウス改革の原因として、16世紀のルターの宗教改革を挙げるとはどういうことであろうか。しかも全くの無知なら驚くに当たらないであろう。しかしこの答案製作者は、グレゴリウス改革そのものについては、完全とはいえないまでも或程度の知識をもっているのである。結局私はこの人が、教科書のある箇所を抽出して読んでいるのだ、ということに気がついた。そこでは時代も、時間も、またそれらによって構成される歴史の流れも無視されているのである。その結果そこには、前に挙げたレポート作者の時代を超越した事象と事象の対比評価以上に、はるかに甚だしい時代錯誤が生じたのである。私はこの答案にDをつけざるをえなかったのである。

歴史書は、時間に沿い、時代毎に、歴史の流れに従って書かれている。この点が、永遠不変のものだけを追求する哲学と、永遠不変のものを志向しつつも、その陰影を時間の中に求めていく歴史学の相違である。たしかに時空を超越した意味で宗教の改革ということ sought たら、16世紀のルターの宗教改革にも11世紀のグレゴリウス改革と共通な部分はあろう。けれどもその共通部分は、互いに異なる状況、異なる動機、異なる担い手の中にあるのであって、同一などと言えたものではないのである。

それはともかく、この答案に見られるような誤りを防ぐためには、方法は1つしかない。教科書の部分にこだわるより先に、その全体を一応理解することを求めて通読することである。あるものの本質を把握するのは大事であるが、歴史においてそれは事態の流れの中に表現される点に留意する必要がある。歴史の大きな潮流の中に個々の事実を位置づけつつ捉えていくなれば、例に挙げたような突拍子もない時代錯誤に陥ることは決してありえないのである。

実際、各時代に独自の世界を発見し、しかも歴史の流れに沿って眺望を展開していくのは、言うに易く、行うに難いことである。教科書の精読が第一であるとは言うまでもないが、その内容を理解する助けとして、巻末の参考文献を活用してほしい。この文献リストは、2008年度の教科書改訂に際して、全面的に入れ替えたものであり、若干の古典的名著は別として、現在入手しやすい文献を、改訂者一同が知恵を絞って選定した。一般向けの本から専門的な研究書まで網羅してある。教科書以外で西洋史全体の潮流について補足したい場合は、[叢書等]を見て頂きたい。『大学で学ぶ西洋史—古代・中世』と『西洋の歴史—近現代編』[増補版]（いずれもミネルヴァ書房）を組み合わせると、教科書より多少ボリュームのある歴史を学ぶことができる。時間に余裕のある学生は、『世界の歴史』（中央公論新社）や、『ビジュアル版世界の歴史』（講談社）、『興亡の世界史』（講談社）の西洋史部分を通して読むとよい。これらは20巻から30巻にわたる大部の叢書であるが、具体的事象を盛っていて、平明で読みやすい。再度強調するならば、これらの文献を読んで、西洋史の大きな潮流を把握することが何よりも大事である。教科書が扱っている以上の細部には、こだわらないでほしい。ただ、さらにその上で、個別的な事象に興味を持ち、それについて学習したい場合にのみ、参考文献の[叢書等]以外の文献の中から、時代別に書名をたよりに、そのテーマの本を選び出して読むようにするとよい。

皆さんがこのような参考文献によって教科書の理解を深めつつ、レポートを書き、科目試験を突破していくことを、私は願っている。だがそれ以上に望みたいのは、不毛な時代錯誤に陥ることなく、歴史的に豊かな発見と展望に立って物を見ることである。

（『三色旗』第576号（1996年3月刊）より転用。

但し、2009年、大森雄太郎〔文学部教授、当時〕によって、一部修正）

◆講義要綱

皆さんは、「六法」という言葉をご存じだと思います。憲法、民法、刑法、刑事訴訟法、民事訴訟法、商法を6つの基本的な法分野として、明治期の日本で一冊の法令集としたことが始まりです。書店の書棚には様々な出版社からのいろいろな「六法」が並んでいますが、頁をめくると、実際は6つどころではなく、数多くの法令が収録されていることに気づかれましょう。上記の商法も、かつてはその第2編を中心として規定されていた「会社法」の部分が平成18年から独立した法令となり、「六法」にも収録されるようになりました。もちろん基本的で重要な法令であることには変わりありませんが、時代によって法令の内容も数も変化してゆくのであります。

ところで本科目名である「法学(憲法を含む)」(以下、「法学」と記します)は、当然のことながらある具体的な法令の名前ではありません。「法学」は「六法」に代表される数多くの法令間に共通する用語・ものの考え方・概念に着眼して、広く法一般に対する皆さんの関心を拓くことに目的を置いて開講されています。

テキストを開いて頂ければ分かるように、内容は緒論と本論に分かれており、本論はまた総論と各論に分かれています。この本論の総論部分が「法学」での学習範囲となりましょう。まずは難しくとも、その部分を通読するよう心掛けてください。そして入門者である皆さんにおかれては、「法学」とはなぜこのような方法で物事を考えるのか? という疑問ではなく(実はこの疑問はとても大事なのですが)、まずは、法を学ぶとは、あるいは「法学」的思考を持つとは、物事をこのように考えることなのだ、ということを受け入

れてみるよう努力してください。最初のうちは難しくとも、やがて学んだひとつの事項が他の事項に関連付けられることが分かり、次第に奥行きをもった大きな体系思考が自分の中に拡大してゆくことに気づくことでしょう。その時、皆さんは他の法律科目へのより深い誘いを得たことになるのです。

この「法学(憲法を含む)」では、レポートの課題や科目試験を通して、皆さんの基本的な理解力を問う出題をしております。履修者の皆さんには頑張って頂きたいと思います。

◆関連科目

「法学概論」、「法哲学」等

◆参考文献

伊藤正己・加藤一郎編『現代法学入門〔第4版〕』有斐閣双書

笹倉秀夫『法学講義』東京大学出版会

西村健一郎編『判例法学』有斐閣 等

◆レポート作成上の注意点

テキストや参考書の丸写しは皆さんの勉強にはなりません。まずその課題について、テキストの説明文を良く読んでください(本論の各論部分も範囲です)。そこで理解が得られない場合には、図書館等で、上記参考文献なり関連する文献なりを参照して情報を得てください。レポートを作成するについては、レポート本文のどの箇所がそうした参考文献から引用されたものか、あるいはそれらを参考に書いたものなのかを注番号を付して明示してください。そして参考文献については、著者名・書名・出版社名・刊行年・参照頁を、レポートの最後に明記することも忘れないでください。一味深みのあるレポートを作成したいのであれば、出題者はなぜこうした課題を求めたのか、を頭の隅に置いて書いてみることをお勧めします。

◆成績評価方法

科目試験によります。

◆法学(憲法を含む)の学び方—テキストをどのように読むか—

岩谷十郎(法学部教授)

はじめに

現在、日本社会では憲法改正論議が盛んです。選挙権はかつて20歳から認められていたのに今は18歳に引き下げられています。成人年齢の引き下げは民法でも議論されています。また、様々な年金制度の見直しが着手され、社会保障制度の改正がこれから進みそうです。刑事裁判では、裁判員制度が導入され大きな変革を遂げました。さらに、施行後120年を経た民法が昨年、債権法分野を中心に大改正されました。同性婚をめぐる論議も盛んであり、婚姻や家族の在り方についての根本的な問い直しも為されています。あるいは、読者のみなさんの中では思ってもいなかった法律問題に直面して困惑していらっしゃる方もいるかもしれません。一口で「法」を知

る、といっても分野は多岐にわたり、またその必要性も事柄によってずいぶんと異なってくるのです。なるほど、昨今のネット環境はたちどころに解決案を提示してくれるように見えます。キーワードをいくつかパソコンに放り込み検索をかける。すると類似の相談例や事例が見つかり、弁護士などの法律の専門家による分かりやすい解説を入手することが可能な世の中です。それはそれで、その人の法を問う必要性が満たされる場合もありましょう。ただし、それは決して「法」を学んだことにはならないのです。確かに喫緊の法律問題に対して有効な解決を提示することは法律学・法律家の任務とするところですが、そうした個々の解決策を断片的に情報として入手するだけでは「法」を学ぶことにはなりません。法学は、当座の解答を得るためだけではなく、その解答・結論に至る考え方をとても重視する学問です。この総合教育科目「法学(憲法を含む)」を履修される方々には、なによりもそのことを銘記して頂きたいです。

1 「法学」の目次を開いてみよう

そこで、みなさんの手許にある本講義のテキスト、峯村光郎著・田中実補訂・霞信彦ほか改訂『法学(憲法を

含む)』の目次を開いて下さい。そして、全体が「緒論」と「本論」に分けられていることに注目下さい。

① まず「緒論」を読もう

「緒論」は、社会的な存在としての人間が、その共同生活（国家生活も含む）を営む上で「規律」を求めてきたという人類史的な事実に戻り、法はその規律の一つである、と記されています。これをあたりまえじゃないか、と読み飛ばさないようにして下さい。人間の本性と法との関わりがここで問題提起されており、本テキスト全体を貫く重要なメッセージなのです。

② 次に「本論」の〔各論〕に注目しよう

「本論」は第1章から第11章までが〔総論〕とされ、第12章から第22章までが〔各論〕とされています。ここではまず、後者の〔各論〕部分に注目しましょう（以下、数字は該当章を示します）。憲法（12）、民法（14）、刑法（20）、民事訴訟法（19）、刑事訴訟法（20に含む）、商法（15）といったいわゆる「六法」に数えられる法分野と、行政法（13）、経済法（17）、労働法（18）、そして国際法（21）、国際私法（16）といった法分野が扱われています。本テキストではそれらの概観を説明していますが、これらはすべて法律学の基幹的な分野で、それぞれ個々の専門領域を形成しています（例えば、憲法学、民法学、国際法学……等ですが、これらは法解釈学と総称されています。テキストの第11章を参照して下さい）。特に法律を専門的に学びたい方への助言となりましょうが、一般的には前者のグループは、およそ基本的な導入科目と位置づけられ、後者のグループの法領域に学習を進める前に一通り学んでおくことが望ましいとされているものであります。それは、前者が内容的に簡単だからではありません。そこに他の法領域に応用可能な基本的な事項を多く学べるからです。

また、〔各論〕に掲載される各法分野の配列の順序にも注目下さい。憲法と行政法は、国家的制度（行政組織も含む）と個人の法律関係を対象とする「公法」分野、民法や商法は、個人間（私人間、会社組織も含む）の法律関係を対象とする「私法」分野に分類されます。そして、私人間であっても国籍が異なる者同士の法律関係を扱う国際私法が紹介され、さらに経済法や労働法といった市場経済を前提とした経済規制（国家・行政と私企業との関係性）や、雇用者と労働者間の法律関係を扱う「社会法」分野が続きます。そして視点を少し変えて、民事や刑事の訴訟法といった裁判手続き・司法制度に関わる法が紹介され、最後は、国際法、すなわち国家間での法律関係が論じられています。

これでお分かりのように、個々の法分野は、○と×との関係という型を前提に、それぞれの関係性の法的特質を深く論じてゆくのですが（興味を持たれた方は、テキストの第10章「法律関係」を参照下さい）、そこに、「公法」、「私法」、「社会法」、「国際（国内・国外）」の区別が存在し、上述のような一定の説明の順番を構成しているのです。さらに一言するならば、上記の民事訴訟法と刑事訴訟法を「手続法」と分類し、他の法分野を「実体法」と総称することもあるのです（第7章「法の種類」を参照下さい）。なんだ、単なる目次の説明じゃないかと思われるかもしれませんが、実は目次を成り立たせている背景のそうした考え方——これこそが「法学（憲法を含む）」で学ぶことなのです。それは、およそ「法」に関する一般的知識や考え方を、予め鳥瞰図的に見渡すこと、と換言できましょう。

2 「法学」を読み始めよう

③ 「本論」の〔総論〕（前半第5章まで）—「法とは何か」

順番が逆になりましたが、いよいよ「本論」の〔総論〕に入ります。冒頭から、第1章、「法」、第2章、「法と習俗と道徳」という、前述した「緒論」からのテーマが引き継がれます。規律、すなわち他の社会規範と法との異同（2）に触れた後、法の成立と発展について解説されます（3）。法は人類史の長い過程の中で生成し変化してきたのです。ここでは時間や時代の移り変わりの中で法も変遷するのだ、ということをおぼえてください。これに対し第4章の「法存在の基礎」では、法はなぜ、そしてどのような根拠に基づき、我々の活動や生活を拘束できるのか、という根本的な問いに迫ります。その規範が法としての妥当性を持ち得るための哲学的、思想的な根拠が語られます。さらに第5章では、「法の目的」が学ばれます。法が人間によって制定されるものである以上、そこには法制定の目的が必ずあるものですが、個々の法律制定の目的を超えて、およそ法が目指すべき、あるいは法によって実現されるべき目的（理念）とは何か、について解説されます。

法はなぜ存在するのか？ 法が目指す理念・理想とは何か？——こんな問いかけが、「法学」にはあるのです。目を丸くされている読者の顔が浮かびます。これらの疑問は、すべて「法とは何か」という大問題のコロラリーとして位置づけられましょうが、こうした疑問には古来より数多の学説が存在し、直ちに一定の結論が示される問いではありません。ただし、すぐに分からないからといって諦めないで下さい。法学の学習を進めてゆく中で、きっとみなさんの裡に、古来よりこうした問いをずっと手放さずに探求してきた「法学」という学問分野そのものについての深い関心が湧いてくると、私は思っています。

以上、本テキストの第5章までに展開されるテーマは、特に法哲学（法理学）、法社会学、法制史学（法史学）等の、哲学、社会学、歴史学と法学との学際的領域（基礎法学的分野とも総称されます）において専門的に深めてゆくことができます（これらの学問領域については、第11章を参照下さい）。その意味で、次に見る第6章以下に取り上げられる事項のほとんどは、法（学）に固有な問題であると言えます。

④ 「本論」の〔総論〕（後半第6章以下）—「法学固有の領域」に踏み込もう

第6章、「法の淵源」では、特に裁判で依拠される法の種類を解説しています。ここでは「成文法（＝規範の内容が文章化された法）」を中軸とした法の体系の中に、慣習法や判例法、そして条理といった「不文」の法が裁判の基準として用いられる場合の条件などを学びます。その意味では、「法の解釈と適用」を扱う第9章とも

内容的に密接に関わるものと思われます。なぜなら法の解釈や適用が問題となる場面とは、およそ「裁判（司法）」（9の四）の場でありましょうし、第6章は、解釈や適用の「対象」を解説しているのに対し、第9章は、解釈や適用の「方法」を解説しているからです。このように、みなさんにおかれては、各章ごとの学習にとどまらず、各章を相互に関連付けて読み合わせることもぜひお願いしたいと思います。

第7章、「法の種類」では、少し前述しましたが、より正確には、法の「分類」が扱われていると言えます。法を分類する際の基準となる「観点」の学習とも言えるかもしれません。分類が複数成立するということは、それだけ法を見すえる「観点」も複数あるということです。大事なことは、それらの観点を立てる法学的意義は何かということではないでしょうか。ぜひ考えてみて下さい。

第8章では、「法の効力」が扱われています。法が現実的に私たちの社会的経済的活動を規律している状況を、法律家は、「法の効力が（我々に）及んでいる」と認識します。本章後半では法の効力が、時間的、場所的に条件付けられる性質、さらに法の効力が及ぶ対象たる「人」の範囲——自国民のみか、外国人も含むのか——等が解説されています。これに対し本章前半では、「効力ある（＝実効性ある）法とは何か」との問題提起が為されており、この問題は、上述の「法存在の基礎」(4)や「法の目的」(5)の箇所でも学んだ、それぞれ、法の「妥当性」や法の「目的（理念）」とも深く連関する議論となっています。読者におかれては、ぜひ相互に対照しながら読んでみて下さい。

第9章、「法の解釈と適用」については上記第6章との関連で少し述べましたが、前に紹介した、憲法学、民法学等の個々の法分野で進められている法学とは、憲法や民法の条文を解釈する学なのです。「解釈」という作業は、対象が文学作品であっても、あるいは社会科学的な調査データや自然科学的な実験データであったとしても、その意味を「理解」するために必ず求められるものです。特に法は言語によって示され認識されるものである以上、解釈という作業は不可避であり、本章では法を対象とした解釈方法の特徴について学びます。

第10章、「法律関係」に至り、いよいよ個別の法領域へのステップアップが始まります。もはや再言はしませんが、法的に見た場合の国家を構成する要素、あるいは国家の法律的定義、さらに国家を主体とした法律関係（国内に向けては国民との、国外に向けては他国との関係性）や、私人を主体とした法律関係（権利義務関係）が論じられます。ここにきて「法学」のテキストはやや細かい議論を展開してゆきますが、すでに「公法」や「私法」分野の専門的領野に足を踏み入れているのだと自覚して、じっくりと学んで頂けたら幸いです。そして「本論」〔総論〕の最終章、第11章にて、みなさんには個別の法領域へと向かう、更なる扉が開かれることになるのです。

おわりに

以上、「法学（憲法を含む）」のテキストの概要をお話し、法を学ぶみなさんへのオリエンテーションをしました。なお、法学には数多くの入門書があります。テキストの説明では分かりづらいところなど、ぜひともそうした参考図書にあたって確認して頂きたいと思います。みなさんの健闘を祈ります。

（『三色旗』第816号（2018年2月刊）より転用、一部加筆訂正）

A001-6403

◆講義要綱

「選挙」と「政党」は、政治学の基本概念である。その機能をきちんと抑え理解することは大事です。その上で、両者はどのような関係にあるのか、それは色々な視点からの考察が可能です。具体的事例は、自らの関心に基づき時代や国を問わず自由に選んでください。

◆テキストの読み方

「選挙」と「政党」の機能をテキストでしっかり理解する。両者の関連が、テキストの中で明確に書かれ

ているわけではないが、その着眼やヒントは種々見つけることは可能であろう。

◆参考文献

中村勝範編『主要国政治システム概論』（慶應義塾大学出版会、絶版）

◆レポート作成上の注意点

具体的事例については、他の参考文献にも目を通す必要があります。上記に紹介したものは、コンパクトでわかりやすくまとめている点で良書ですが、絶版のため（恐らく公立図書館に所蔵されていることが多い）、それ以外の参考文献を用いても可です。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆政治学の学び方

根岸 毅（名誉教授）

どの分野でも、「学問をする」ということには二つの面があります。一つは研究者個人の問題で、もう一つはその行為の社会にとっての意味です。

研究者にとって、学問をするということは、知的好奇心を満足させてくれる楽しい行為です。すべての学問を進展させる原動力はこの楽しさです。と同時に、学問は社会に支えられてはじめて存在することができます。社会は、分野によっては積極的に要求を出したり、消極的に容認したりします。前者の場合、社会は、学問の成果がなんらかの問題の解決に役立つことを求めます。この種の分野の例は、医学、法律学、建築学などです。後者の場合、社会はこのような要求をあからさまに出すことはしませんが、まわり回ってはそのような役立ちを期待しているといえるでしょう。

では、政治学はこのどちらの場合に当てはまるのでしょうか。これは学問の側（研究者）が決めることではなく、社会（一般の人びと）が決めることです。そして、**社会通念によれば、政治学は問題解決が求められる型の学問だ**といえるでしょう。

人は生きていく上でさまざまな問題に直面します。問題解決型で、そのすべてを一手に引き受けることができる学問は存在しません。そこで、社会の期待に基づいて分業が生まれ、問題解決型の学問それぞれに分担すべき問題が決まっています。医学の分担は人体に発生する問題、建築学は建造物を造ったり、使ったりする際に生まれる問題がそれです。同じく社会の期待にしたがえば、**政治学の分担は「国家をめぐる生じる問題」**ということができるでしょう。**政治とは、国家にかかわる出来事**ということになります。

はじめにこの点を長めに論じたのは、政治学と国家の関係をはっきりさせておきたかったからです。じつは、政治学者の間でこの関係について意見が一致していません。政治学は国家に関係があるなしにかかわらず、すべての権力現象を研究すべきだとする人もいます。このような状況が生まれるのは、政治学者の多くが、政治学に対する社会の期待が問題解決型であることを忘れているからです。しかも、政治学を問題解決型と捉えるか捉えないかで、同じ政治学を学ぶといっても、何について学ぶのか、どのようにして学ぶのかが根本的に違ってきます。以下では、上に示した理由から、政治学を問題解決型の学問だとして話を進めます。（詳しくは、根岸他『国家の解剖学』日本評論社・1994年の私が執筆した第2章を参照してください。）

政治学の分担は国家をめぐる生じる問題です。そこで、はじめに「**国家とは何か**」に答える必要が出てきます。ところが、一時期、政治学から国家概念が意図して排除されたこともあり、十分納得できる答がみつけない状況にあります。たとえば、ヴェーバー『職業としての政治』（岩波文庫・1980年）、ダントレーヴ『国家とは何か』（みすず書房・1972年）を読んでみてください。私の答は、根岸他『国家の解剖学』の第2章にあります。

国家とは何かが分かたら、つぎの問題は「**国家はなぜ必要か**」ということですが。その必要がなければ、そもそも政治学の必要もなくなります。これは、古くから大勢の人たちが考えをめぐらせてきた大問題です。たとえば、プラトン『国家』、ホッブズ『レヴァイアサン』、ルソー『社会契約論』、ロック『市民政府論』（いずれも岩波文庫にあります）や、無政府主義者と呼ばれる人たちの著作を読んでみてください。理由付けの違いはあれ、国家が私たちの生活に不可欠のものであることが理解できるでしょう。

国家は複雑にみえても「人が造ったもの」でしかありません。造ったものであれば、**利便を最大に、不便を最小にするように造り、維持し、使うのが得策**です。この思考は「**国家をデザインする**」ことに外なりません。私たちは一般に何かをデザインする場合、そのものがどのような状態になれば望ましいか（目標）を特定し、それを生成させるメカニズムにしたがってそれを実現する計画を立てます。これは国家の場合も同じです。

その目標状態すなわち「**国家をデザインする際に検討すべき項目**」は、つぎのように整理すると体系的に理解できます。

国家にはいろいろな面がありますが、**政府としての国家は「特定の仕事を実行するために造られた装置」**です。

その仕事とは「一定範囲の人びとを対象としてルールを設定し、維持する」ことです。その使い手は有権者、その仕事の対象は国民、それを構成する部品は公務員と呼ばれます。

第1の検討項目は、**ルールの設定と維持の仕事を通じて、国民の間にどのような状態を実現するか**の問題です。他人から危害を受けないこと、自由と人権、私的所有権・市場機構対計画経済などの問題はここにかかわります。公益の概念は、これらの問題との関連で位置付けられます。政治哲学または政治思想と呼ばれる著作は、このような問題を広く論じてきました。

第2は、装置に以上の仕事を実行させるための準備の問題です。

その1は、**装置をどう造るか、どう維持管理するか**の問題です。単一国家・連邦国家、権力分立、地方分権、直接制・間接制、選挙制度、政党制、公務員制、行政改革、税制などの問題はここにかかわります。たとえば、モンテスキュ『法の精神』は、この項目にかかわる著作として読んでください。

その2は、**装置をどう使うか**の問題です。具体的には、**どの範囲の人びとを使い手と認めるか、その人びとにどのような使い方を認めるか**です。民主主義対独裁、イニシアティヴ・レファレンダム、抵抗権、表現の自由、情報公開制、オンブズマンなどの問題はここにかかわります。

さらに、装置にそのような仕事を実行させ、そのような造りで存続させ、使い手にそのように使わせるためには、**装置の外的環境との関係を都合のよい状態に維持しておく**必要があります。これが第3番目の問題です。外交と国防、国際情報の収集と軍備、災害対策などの問題がここにかかわります。

また、国家の強い強制力を活用すれば、特定の仕事の分野から民間の活動主体を排除して国家が独占したり、民間にやらせるにしても規制を被せたりすることができます。これが4番目の問題です。つまり、**民間にできることにどこまで、どのような形で政府が介入したらいいか、それをよしとする根拠は何か**が問われます。政府の守備範囲、規制緩和、福祉と平等などの問題がここにかかわります。

以上の諸項目をひっくるめて、国家をデザインする際の目標状態の研究が理想国家論と呼ばれ、政治哲学者たちの手によって行われてきました。また、政治制度論と呼ばれる一連の研究も、政治問題の解決に現に役立っている外国の諸制度を紹介するものですから同趣旨です。ただ、後者が**目標の状態を指摘する**だけなのに対し、前者はそれが**なぜ望ましいか**の理由付けを示している点に特徴があります。政治問題の多くは、人びとの間で目標についての意見の一致がみられません。この理由付けは、異なる意見をもつ人を説得する際に役立つものです。

ハミルトン他『ザ・フェデラリスト』（福村出版・1991年）は、アメリカ合衆国建国の過程で以上の諸問題を实际的に論じた著作です。一読を勧めます。

すべて事物は、それを**生成させるメカニズム**に応じてその形を取ります。したがって、国家のデザインを現実のものとするためには、それにかかわるメカニズムを知る必要があります。国家にかかわる出来事にもっとも関連が深いのは、強制のメカニズムでしょう。（参照、根岸他『国家の解剖学』の田中宏による第3章。）また、社会学、社会心理学、文化人類学などには、政治学に必要なメカニズムの知識が蓄積されています。そのようなメカニズムを見出す分析の道具は統計学などから得られます。

政治学の分野はどれも、国家をうまくデザインするために必要な知識と情報の入手に役立ちます。（その役立ち方の違いは当然ありますが。）政治思想史は、デザインの目標についての過去の研究の実態を明らかにします。政治史は、各国の国内政治と国際政治の過去の事例のなかに、デザインの目標とメカニズムを探ろうとします。地域研究と国際政治学は、同じ趣旨の探求を現代の事例を分析することを通して行います。政治の出来事に関しては、それを生成させるメカニズムを明確に特定することは概して困難です。このような場合、ある状態の実現を目指してある条件を整備したらうまくいったとか、目論見が外れたということが分かる事例の分析を蓄積することは、それにかかわるメカニズムのより確実な理解につながります。

以上は、**政治学で学ぶべき事項の体系的見取り図**です。個々の事項について学ぶ際の手引きとなる文献は、上に示したものその他、つぎを手掛かりとしてみつけてください。単行本『日本件名図書目録』、論文『雑誌記事索引』、各種の文献案内、辞典・事典、書誌・文献目録など¹⁾。

1) 今日では、インターネットを利用して、様々な文献を探すことができます。またインターネット上で探している書籍や論文、その他の資料を直接閲覧することも可能な場合があります。例えば CiNii（NII 学術情報ナビゲータ [サイニイ] http://support.nii.ac.jp/ja/cinii/cinii_outline）や J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/#search-tab2>) などがあります。どんどん活用して下さい。ただし、著作権の侵害や盗用と誤解されかねない安易なコピーペーストをしないようくれぐれも注意して下さい。

（『三色旗』第573号（1995年12月刊）より転用、
2015年、河野武司（法学部教授）が加筆）

◆講義要綱

現実の経済を理解し分析するための基礎的な能力を身につけることを目的とする。概要は以下の通りである。

1. 総論：経済の本質、経済循環の構造
2. ミクロ経済学
消費者・生産者行動
市場均衡
経済厚生と国際経済
3. マクロ経済学
国民所得決定のしくみ

財政・金融政策の効果

景気変動と経済成長

◆テキストの読み方

図や式の意味をよく理解するようにしてください。「経済学の学び方」も参考にしてください。

◆履修上の注意

高校レベルの数学は理解しておくことが望ましい。

◆参考文献

塩澤修平『経済学・入門〔第3版〕』有斐閣、2013年
塩澤修平『基礎コース 経済学〔第2版〕』新世社、2011年

◆レポート作成上の注意点

仮定と論理的帰結の区別を明確にすること。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆経済学の学び方

川又邦雄（名誉教授）

1 序

『経済学』の新しいテキスト¹⁾に対する要望は、少なくともここ十数年来、内外から声を大にしてきざげばれてきた。ケインズ経済学や価格理論等における経済学の最近の成果をその基本部分に組み入れたテキストでなければ、もはや教科書としての使命を果しえないほどに現代の経済学は変貌してしまったのである。

今回の『経済学』の執筆は、慶應義塾大学の経済学専任者10名によって行われ、何度かの打ち合わせと読み合わせを経て一つの書物として仕上げられたものである。各章は1人の担当者によって執筆され、それなりのまとまりをもっているから、ある程度独立に読むこともできよう。編集者の（故）大熊一郎および富田重夫の両教授は執筆者の中の長老で、全体の統一の任に当たられた²⁾。

2 本書の内容について

本書はテキストとして書かれ、かなりの内容を含んだものであるから、何よりもていねいに注意深く読まれねばならない。しかし高等学校修了程度の知識と経験があれば、さほどの困難なしに全体を読み通すことができるはずである。そこで扱われた内容は、経済学をさらに進んで学ぼうとする者にとってはもとより、一般の学生諸君にとっても教養としてぜひ理解し記憶してほしいことばかりである。

第1章総論では、過去200余年の経済学の歴史の中でどのような問題が分析され、いかなる政策的提言がなされてきたかを検討することを通じて、経済学の課題と性格について論究されている。最初に細部にとらわれることなく一読し、他の諸章を学んだ後に再びこの章を読みかえされることを担当者とともに望みたい。

第2章は経済循環の構造と題され、生産物や貨幣の流れを通して、家計（消費者）、企業（生産者）および政府の活動の相互依存の鳥瞰図を与えるとともに、国民総生産ないしは国民所得という概念によって経済活動の成果がいかに把握されるかについて論じている。この章の内容は、われわれの生活上の経験と密接に結びついているから、全体を理解することは比較的容易に感じられるであろう。

第3章以下第7章までは、いわゆる微視的（ミクロ）経済理論（ないしは価格理論）の基本的内容を論じたものである。そこでの中心的テーマは、市場経済主体が、生産量や消費量をどのような原理で決定するか、そしてそうした行動の結果として各財の取引量の価格および各人の所得がどのような水準に決定されるかを明らかにすることにある。またそれと並んで市場機構が資源配分上どのような優れた性質を具え、どのような欠陥を内包するかが検討される。これらの諸章のうちくに第3章および第4章は、多少技術的で親みにくい箇所を含んでいるかも知れないが、経済理論を学ぶものが一度は通過しなければならない関門であるから、少々時間をかけても話の筋道を理解してほしいものである。

第8章は失業とインフレーションと題され、第2章の議論を発展させて国民所得の水準がどのように定まるかを解明し、不況やインフレの問題を分析している。これらは第10章の景気変動と経済成長の問題とともに、いわゆる巨視的（マクロ）経済理論の基本的内容を形成するものである。

第9章金融と財政と第11章国際経済の2つの章では、これまでの理論の重要な応用例を示すとともに、混合体制や国際経済における今日の問題についての論究が行われている。この程度の内容を理解することは、すべての教養人にとっての必要な条件であるといって過言でないであろう。

3 本書の読み方

本書のような教科書を読む場合には、まずそれだけを頼りに1つの章を通読するのが良いであろう。そして自分なりに推論を十分に理解しえたか、得られた結論が現実とどのように対峙づけられるか等を検討してほしいと思う。他の読物を読むのはそれから後で十分である。なおいうまでもないことだが、経済理論の学び方としては、

結論だけを鵜呑みにするのではなく、議論の前提と推論の過程を十分に理解し納得しなければならない。本書は意見や思想を押し付けるために書かれたものではない。結論や思想の背景、あるいはそれらの基礎となる素材、事実を与えるためにこそ書かれたものである。古典的学説や現代の経済理論がいかなる歴史的状況の下に生まれ、いかなる仮説的条件の下で主張されるものかを正確に学んでほしい。今日の経済現象を理解するための基本的思考方法は、そうした訓練の積み重ねによってのみ体得しうるものであると信ずる。

4 経済学の役割りについて

経済学は、経済現象について統一の見方を示すとともに、それに依拠して有意義な政策上の提言を行うのに役立つことができる。本書で述べられた内容も、理論面についていえば主としてそうした問題に関するものである。しかしそれを超える理論的役割りを経済学に期待し、本書に要求してはならない。

しばしば引き合いに出されることであるが、ここでも医学の例を考えてみよう。医学の役割りは、人体について研究するとともに疾病の原因を明らかにし、その治療と予防に寄与することにある。しかしたとえば心臓発作の原因がどのように解明され、その治療法が進歩しても、特定の患者がいつ発作を起こすかを予想することは多くの困難をとまなう。発作は個人の体力や精神状態、気象条件や外的ショック等によって微妙に影響を受けるからである。発作の時期を正確に予想するためには、少なくともそうした条件について詳細な検討を加えなければならないが、そのすべてが医学の任務であるとするのはおそらく正しい考えではあるまい。

病理学を知るものは、発作がどのような結果をとまなうかを、少なくともその近い将来についてかなりの正確さで予想することができる。また諸条件をコントロールすることによって発作を抑えることもできよう。さらにデータを検討することによってある発作の原因が何であったかを推測することも可能である。

経済学において価格の変化の効果、失業やインフレーションの原因、景気変動の機構を学ぶことの基本的意義もそうした点に求められるべきである。日本経済の進路について精度の高い予想をしようとするならば、経済理論を学んだ上で、日本をとりまく経済の過去と現在の主要なデータについて検討し、起こりうる政治的变化を予想し、遠国の文化や慣習そして心情を知らなければならない。それらを怠ってすべてを純粋に経済的要因のみで説明しつくそうとするのは所詮無理な試みであり、それに失敗したからといって経済学に失望する理由はまったく存在しないというべきであろう。

5 結びにかえて

本欄をここまで眼をとおされた読者の多くは、おそらくテキストの一部、あるいは大半を読まれた方々であろう。そうした諸君に対しては、できるかぎり早期に全体を通読されることをお勧めしたい。分析上特別に高度の用具はどこにも使用されていないので、その点は安心して、外見上の困難のため途中で挫折してほしくないものである。

テキストをまだ繙かれていない本欄の読者には、まずたまたま編者が担当した最初の2つの章を読んで本書を知ってほしいと思う。レストランに初めて入ったお客に対しては、不慣れなウェ이터がディナーのコースの味について説明をするよりは、だまってシェフの作った前菜を試してもらった方が親切であるかも知れないからである。続いて必ずしもコースの順序にとらわれることなく、何でも口に合いそうな料理から手をつけてみるのも良いであろう。

食事を勧めようとするお客に他の料理店の話をするのは愚かである。参考文献はここではしないにこしたことはない。詳しくそして適切なリストは教科書の章末に掲げられていることでもある³⁾。

- 1) 本稿は『三色旗』第404号の原稿に多少の修正を加えたものである。テキストの解説としては今でもこれで良いと考えている。
- 2) 編者でない筆者がテキストの紹介をするのは筋違いと思われる読者のために多少の説明をさせていただこう。主な理由は、原稿依頼があったとき、編者の1人がたまたま健康が優れなかったことと、筆者がかつて通信教育部の学務委員を務めていたためであって、もう1人の編者が、遠慮がちに筆者の役目を主張されたことなどである。編著者の意見は、テキストのはしがきに簡潔に述べられているので御一読を願いたい。また総論の末尾には、各章の内容のより詳しいそしてよりフォーマルな説明がある。なおいうまでもないことであるが、ここで述べられた意見の責任は、すべて筆者のものである。
- 3) その他本書よりやや進んだテキストとして、福岡正夫著『ゼミナール経済学入門』（日本経済新聞社）を加えておく。いずれも本塾大学における講義をもとにまとめられたものである。

(『三色旗』第404号(1981年11月刊)より転用、一部加筆訂正)

◆テキスト

ギデンズ『社会学〔第5版〕』而立書房、2009年
※テキストは、最新版の使用が望ましいが、第4版（2004年）を用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

テキスト『社会学』第5版（第4版も可）は、全般的に広範囲のテーマに関する社会的な思考を述べてあります。社会学は社会科学の一分野です。社会学の基本的特徴は、経済学、法学、経営学、政治学などの社会科学が、人間社会のさまざまな現象をいわば縦割りにして研究対象としているのに対して、それらの現象の基底において横断的に存在する社会的行為、社会関係、社会集団、組織に関する問題を考察、分析するところにあります。

社会的思考、分析は社会学において使用される概念および概念枠組の操作を通してなされるものですから、社会的思考、分析を身につけるには、社会学の基礎概念をよく理解することが必要となります。テキストに出て来る基礎概念、キーワードに注意してテキストをよく読み、理解し、それらの術語を使って具体的問題を記述、説明できるようになることが大事です。科目試験でも問われるのは、その身につけた視点から、諸々の社会現象を読み解くことです。自分にふさわしい視点をテキストから取り込んでください。

◆テキストの読み方

このテキストには、1～22のセクションがあります。関心のあるところから読んでも構いません。またそれらセクションの最後に、まとめ、考察を深めるための問い、読書案内がつけられています。これらはあ

くまでも理解を助けるための情報です。まとめを読んで済ませることのないようにしてください。必ず本文を読み、まとめ等の情報を適切に利用して、理解を深めてください。また末尾の用語解説も参考にして、注意深く読んでください。その上で、そこに紹介された概念やアイデアを利用して、様々な出来事を「社会的」に見ることができるようになってください。「社会学の学び方」も参考にしてください。

◆履修上の注意

社会的なものを見方を身につけることが大事です。特に各セクションの視点をマスターしてください。レポートでは、論述という形式を習得しているかどうか大事な評価基準になります。特に大事なのは、参考文献リストを作成し、テキストや参考文献を参考や引用した場合、レポート本文でその旨を、注などによって、明記することです。

◆関連科目

社会学史、教育社会学、都市社会学、社会学（専門）

◆参考文献

レポート作成にあたっては、あなたの関心やテーマに応じて文献を探し出すことが重要です。少なくとも5本以上の文献をテキストの他に探すことが、合格の条件になります。

◆レポート作成上の注意点

- ① 参照や引用には注をつけて、出典を明らかにすること。ネットからの情報はホームページ名とダウンロード日時を明らかにすること。
- ② レポートの章立てを行うこと（1、課題設定。2、その課題を選んだ理由。3、本論。4、今後に残された課題。5、参考文献や資料）。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆社会学の学び方

岡原正幸（文学部教授）

社会学の学び方、といっても、他の分野と大きく変わる訳ではありません。まずは、他の学問と同じように学び、同じように考えればいいのです。学び方や考え方、つまりテキストの読み方、参考文献の探し方、レポートや論文の書き方、それらはこの『学習のすすめ』の他の箇所に掲載されている通りです。では、社会学をどうしたら効果的に学べるのでしょうか。この点にフォーカスしながら、思いつくところを述べてみましょう。

法律を対象にする法学、経済現象を対象にする経済学、教育現象を対象にした教育学、と同じように、社会を対象にする、社会現象を対象にするのが社会学、と言えないことはありません。しかし考えてみると、社会ではない、社会現象ではないものとは、何でしょうか？ 法律や法律に関わる人々やその行動も、経済システムも、生産や消費という行動や現象も、政治活動や国家の形成も、学校や教育もまさに社会現象、社会そのものではないのでしょうか。ですから、法学や経済学や政治学や教育学と同じ地平で、社会学を語るのは何か違和感を残すことになります。

法社会学、経済社会学、経営社会学、政治社会学、教育社会学、それどころか、都市社会学、家族社会学、農村社会学、宗教社会学、犯罪社会学、文化社会学、労働社会学、科学社会学、知識社会学、組織社会学、文学社会学、演劇社会学、スポーツ社会学、芸術社会学、福祉社会学、看護や介護の社会学、医療社会学、さらには社会学の社会学、書き連ねていくだけで、この論考の全ページが埋まりそうです。ちなみに私自身の専門分野は、感情社会学であり障害者の社会学、ということになります。

何でもありではないか、そう思われても、社会学はしょうがないでしょうし、実際に、そうなのです。私たちが住まう世界の中に社会に関わらない事象はないのですから、何に対しても、～社会学を言うことはできます。

これほど多くの、～社会学（昔風の言い方をすれば、連辞符社会学）があるのですが、それらが社会学と呼ばれている以上、それらをひとまとめにする共通性があるはずです。それが分かれば社会学の基本の学習は終わったも同然です。

学問という作業には、それぞれの分野に応じた研究対象と研究方法がある、と聞いたことがあるでしょう。そ

れに従っていえば、社会学の対象と方法があつてしかるべきなのですが、実は、社会学にはそれがありません。それが言い過ぎだとしたら、テキストとして標準的に学習すべき「対象と方法」が決められていない、ということです。だから、社会学という間口では、驚くほど多くの教科書が著されています。大きな書店に行けば、何十冊という数が並びます。無駄ではありませんから、数冊は読んでみましょう。しかし、初めて学習する人にとっては不便以外の何者でもありませんね。そこでここでは「社会的」な態度を身につけるにはどうすればいいのか、という問いに代えましょう。

社会的な態度とは、社会的なパースペクティブ、つまり、社会学に特有のものの見方ということになります。さて大事なことは、特有の見方ということですから、何もそれが真実であるとか正しいということとは関係ありません。極端な色付きの眼鏡で世界を見て、その世界が赤色だと言えたとしても、それは赤色眼鏡をつけている限りです。青の眼鏡にすれば世界も青くなります。赤の世界も青の世界も「正しい」のです。このように言うと、眼鏡をはずして見た世界が真実だと言いたくなるでしょうが、その世界もまた眼球というレンズを通して見える世界にすぎません。社会的態度にあつては、正しい世界はひとつではないのです。

社会的にもものを見るとは、そのまなざしの先に「社会的なもの」を見るということです。まなざしが向かう先は、法律の世界でも、経営の世界でも、病院や学校でも、何でも構いません。世界のあらゆる事象をまなざすことができます。感情社会学では、それまで生理的とか心理的な事象とされてきた「感情」を、社会的にまなざした訳です。それは感情という現象の中に「社会的なもの」を見るということになります。ではその、社会的なものを見る、とはどういうことでしょうか。

社会的といっても、そこにいるのは個人個人です。個人個人が絡み合つて社会なるものを作り出しています。それにもかかわらず、個人ではなく社会と呼ぶのはどうしてでしょうか、それは個人個人の振る舞いや考えや嗜好などに還元されない何かがそこにあるからです。たとえば福澤さんと小泉さんという二人の人物が互いに関わるとして、そこに現れる人間関係のすべての様相や行方がこの二人の人物に還元されるはずはないのです。たとえば、三田通りでこの二人がばったり出会います。互いに会釈しながら「こんにちは」と挨拶をします。この挨拶、挨拶の仕方など、どう考えてみても、福澤さんと小泉さんの二人だけの独自のものではなさそうです。それはまさにこの二人の個人を越えた別のものから由来するのです。これが社会です。

ですから、個々人が行動するには、その行動が経済的なものだろうが、法的なものだろうが、どんな生活分野だろうが、必ず、その行動を可能にして、その場に居合わせる人々に分ちもたれている、何かがあるのです。それが社会的なるもの（制度）です。慣習や規範、役割や義務、身体の処方や態度、学習され身につけられた諸々の知識や型、さらには言語、当たり前で当然視された事柄、常識、世間、こういったものが社会的なるものとして、存在する、あるいは人々に共有されているから、個人の行動も組織的な行動も、可能になる訳です。余談ですが、空気を読む読まないがテーマにされるのは、逆に社会的なるものが画一的に成り立ちにくい現代を象徴しているでしょう。誰もが同じ社会的なるものを前提にしていれば、空気は読まれて当然、空気など無いかのように思われて当然なのです。

感情に話を戻せば、普通なら、感情といえばそれは心理的な現象であり、個人的な現象だと思われる訳ですが、そこに社会的なものを感情社会学は見いだします。たとえば感情規則、これは人々が社会的な規則に応じて感情を経験しているということを言います。入学式にふさわしい感情、面接にふさわしい感情、初対面の人に挨拶する時の感情、こういったものが社会的に決められているというのです。あるいは感情管理、これは人々がその場にふさわしい感情を自分で作り上げると言います。感情といえば、コントロールの利かない生理的な出来事だと思われがちですが、実は人々は意図的に感情を自分の中に作れるのです。そして感情労働、これは感情をまさに労働商品として人々がやりとりしていることを言います。このように、感情の社会学では、個人的心理的生理的だとされる感情のあちこちに、社会を発見するのです。

他の社会学でも基本は同じで、それぞれの分野や出来事の中に、まわりに、社会的なるもの、制度を見いだすのです。この態度を身につければ、あなたの好きな事柄を「社会学する」ことができるようになります。

それでは最後に、いくつか、社会学を学ぶ上で頭の片隅に置いて欲しい注意事項を並べてみましょう。

- ① 社会学の初学者のためのテキストや参考書は、最初に述べたように、ちまたにあふれています。ですが、あまりお勧めしません。私は社会学を研究し教えています、社会学のテキストを読んだことはありませんし、社会学の概論のような授業も受けたことはありません。「概論」とか「イントロダクション」として受けた授業はありましたが、実際には、非常に狭い範囲の理論的立場が講じられていただけです。つまり、社会学全体をカバーするようなテキストもなければ参考書もないのです。このことを了解した上で、何冊ものテキストを読めればそれにこしたことはありません。それでも私たちの通信教育課程では、この点を前提にして、なおかつ有益なテキストを選んでいきます。
- ② 社会学辞典／事典は、初学者には向きません。どの項目も何が書かれているのか、むしろ混沌としてしまうかもしれません。すべての事典の類いは中級以上の人向けです。たとえばドイツ語を学ぶためには、ドイツ語辞典が必要ですが、みなさんにとって、それは独和辞典でしょう。社会学の辞典事典は、いわば「独独辞典」です。社会学の概念を、日常的な平易な言語で解説してある項目は、むしろ例外です。もちろん果敢な人には、「社会学／社会学辞典」を手にとって、少しずつ社会学という言語を身につけるのも畢竟かもしれません。
- ③ 社会学は、社会的なるものを説明するのですが、その土台は、社会的なるものを観察したり、リサーチしたりする、いわゆる社会調査です。街に出て人々の動きを観察する。実際に調べたいと思っている人々と同じよ

うに行動したり生活したりする。質問紙を作成してアンケート調査、じっくり話を聞かせてもらう聞き取り調査、などなどです。自分の部屋にこもっているのは実は、社会学はできないのです。もちろん、ネット環境の充実により、自分の部屋から多様な素材や、多様な人々に出会うことが可能になりました。その意味では、自分の部屋で社会学ができるようになったと言えますが、それでも、外の世界や人々を知ろう、出会おうという意志がなければ、社会学という営みは成り立ちません。

- ④ 社会学ををするとして、自分だけで悦に入るのは間違いです。他の人々に向けたアウトプットが必要です。レポート、論文、口頭報告、あるいは書籍など、いろいろな形態でアウトプットが作成されるでしょうが、大事なのは、それが誰かに向けられているということです。つまり、自分とは違う他の人に何かを伝える訴える呼びかける作業だということです。無理矢理レポートを書かされたと感じる人がいるかもしれませんが、それでもなお、誰かに向けて文章は書かれます。ですから、自分以外の誰かに何かを説得しようとする意志をもって書くことが大事です。
- ⑤ 社会学ををするとして、どこに素材があるのか迷うかもしれません。あるいは、何から何まで社会学の研究対象になると聞いてしまうと、何から手をつければいいのか分からなくなるかもしれません。まず自分の得意分野を定めることです。営業経験が豊富な人、モノ作りを仕事にして来た人、経理畑だったり、人事が専門だったり、あるいは、小説好き、育児を終えたり真っ最中だったり、看護や介護の仕事、グルメやファッション、などなど、あなたの得意分野や好きな事柄を見定めることから始めましょう。「これは社会学になるでしょうか」という問いは意味ありません。「これを社会学にする」のです。

テキストの話 最後にしましょう。分厚く価格も高めのテキストですが、著者は数いる現在の社会学者の内、トップスリーに数えられるだろうイギリス人のアンソニー・ギデンズです。その構造化論、再帰的近代化論、あるいは具体的な社会政策への提言（旧ブレア政権のブレンでした）、それらの理論的主張や提言は世界中の社会学者に議論されています。その彼が著した『社会学』では、社会学が世界の多様な問題にどのように関わるのか、その場合の視角（パースペクティヴ）がどのようなものであるのか、が丹念に描かれています。ある意味、壮大な大河ドラマを見せつけられるような印象を持ちます。みなさんに希望するのは、この大河ドラマをすべて端から端まで等しく読むこと、ではありません。

むしろ、まずは全体を横目で流しながら、自分自身にフィットする問題意識や対象への接近方法、使用される概念体系など、それらを探り当ててください。そのように考えると、この分厚いテキストは何本もの鉱脈を内にもった山脈のような趣があります。この山全体をすべて制覇することは難しくても、自分にとって（あくまでも、あなたの生にとって）貴重な鉱脈を探し当てること、それは可能でしょうし、それが大事です。みなさんもこの荘厳な山を前に、うろたえることなく、一步一步、ご自身の宝を掘り出してください。幸い、この山には、たくさんのガイドや道しるべが備えられています（学習のための、細目次、概念整理や質問や参考文献や参考ホームページなど）。ご心配なく。

（2010年4月1日執筆）

統計学(A)

4単位

A055-0902

◆講義要綱

社会科学分野の研究においても、統計的分析が不可欠となっており、社会科学における基礎学問としての「統計学」の重要性が高まっています。統計学では、①統計的記述（実際のデータの特徴をどのように捉えるか）、②統計的推測（標本から母集団の特徴をどのように推定するか）、③統計的検定（理論的主張をどのように検定するか）、④相関・回帰分析（複数の変数の間の相関・因果関係についての分析）について様々な分布を用いながら学ぶことにより統計的分析の基礎を身につけます。

◆テキストの読み方

各章の最初に示されているその章の解説を読み、まずは細かいところは気にせずその章を一通り読むことによって、概要をつかんでください。そして、次に例題を手掛かりにしながらコツコツと読み進めてください。分析によっては計算量が多くなってしまう場合があります。その際にはエクセルを積極的に活用してください。各章末にエクセルの利用に関する解説が示されています。例題を理解していくことによってレポートに取り組む準備が整うことになるでしょう。また、基礎の部分に落ち着いて取り組めるよう、この科目では、テキストに発展項目と示されている節は試験・レポートでは範囲外としています。まずは基礎の部分にしっかり取り組んでください。

そして、章末の練習問題にも取り組むことによって理解を深めてください。それらは、いずれも現実社会のデータに関するものです。現実のデータを用いて統計分析を考えることによって応用力が身につきます。巻末の解答の指針を丸暗記するのではなく、それぞれの問題で確認すべき分析や考え方は何かを意識しながら取り組んでください。試験では、データを用いた計算とそれに関する統計学的考え方の理解が問われますので、練習問題を理解することによって試験に向かう準備が整うことになるでしょう。（発展問題は試験の範囲外になります。また、試験はテキストに登場する式や分布の暗記を求めるものではありません。そのため、試験問題には、解答に必要な主要な式や分布表が提示されます。試験は電卓持ち込み可ですが、必

要な計算機能は $+$ 、 $-$ 、 $\times$ 、 $\div$ 、 $\sqrt{\quad}$ のみです。これ以外の計算機能が必要な場合は、解答に必要な計算の結果が問題用紙に示されます。関数電卓を用いたほうが有利となるような問題は出題されませんし、過度に計算が必要な問題も出題されません。また、解答にあたって微分や積分の計算が必要となる問題は出題されません。）

「統計学の学び方」も参考にしてください。

◆履修上の注意

テキストには、微分・積分が現れますが、本テキストは、微分・積分の知識や習熟については前提としていません。統計的な分析の理解や実践において必要なのはそれらの「考え方」にすぎません。科目試験だけでなく、レポートにおいても微分・積分の計算が要求されることはありません。（確率分布に関して複雑な計算が必要な場合や特殊な計算が必要な場合は、テキスト付録の分布表やエクセルの関数を用います。）

◆関連科目

この科目を履修する前に事前に履修すべき科目はありません。

◆参考文献

テキストの参考文献のページを参照のこと。

◆レポート作成上の注意点

統計学は計算結果や図表も含めてレポートを作成する科目であるため、指定箇所を除き、特に分量に制約を設けません。そして、レポート作成にあたっては、答えを求めるまでの経過もきちんと示してください。（ワークシートを活用して整理して示してください。）経過が示されていない場合、添削・採点の対象となりません。また、考察や説明が求められている場合、その設問も必ず解答してください。計算が出来ただけでは統計学が理解出来たとは言えません。計算途中で必要となるワークシートおよび図についてはエクセルで作成したものを印刷し、それを貼りつけても構いません。また、統計学のレポートではテキストで取り上げられるデータ分析の実践を通じての復習に重点が置かれるため、論述形式のレポートにあるような参考文献の使用は必要ありません。

◆成績評価方法

科目試験による。

当該科目試験における出題範囲は、テキスト全体から発展項目・発展問題を除いた部分とします。

◆統計学の学び方

秋山 裕（経済学部准教授）

1 統計学は敵ではなく頼りになる味方です

大学では、様々な学問分野について学びますが、それを通じて、学問における考え方や理論、現実への応用などを身につけていきます。高校レベルまでの勉強は知識を増やすことばかりに重点が置かれ、何のために勉強しているのかわからないまま、「とにかく暗記をして試験に備えるというのが勉強である」と信じている人が多くいるようですが、大学はその延長線上にはありません。

現在、様々な分野で統計学が幅広く活用されています。自然科学分野のみならず、社会科学分野でもデータを用いての分析が頻繁に登場します。これは、現象を客観的にとらえ、論理的に考えるにあたって統計的分析が非常に便利だからです。もし、統計的分析を理解しないまま、各分野の勉強をしようとすると、データを用いての分析が登場するたびに手ごわい敵に遭遇することになってしまいます。

大学では最終的に卒業論文を作成します。その作成過程では、これまでの研究者による先行研究を読み込まなくてはなりませんが、それらにも統計的分析が数多く登場するでしょう。自らの卒業論文の作成にあたって、統

計的分析が使えるのと使えないのでは大きな差が生じるでしょう。現象を適切にとらえ、それを説明するにあたって自らの考え方が妥当であることを示す時に統計的分析は非常に役立ちます。

統計学では、様々な学問分野の学習において不可欠なデータ分析の「基本的な考え方」を理解するとともに、簡単な「現実への応用」を学びます。それによって、単なる知識としての統計学ではなく、役に立つ統計学を身につけようとしているのです。

2 数字を味方にしよう

統計学では様々な現象を数字でとらえ、数字を用いて考えていきます。そのため、登場する数字にはすべて意味があります。統計学を学んでいるときにわからなくなってしまうというのは、登場する数字の意味づけを誤ってしまう場合がほとんどです。人間は様々な現象をとらえるとき、最初にその概要から入ります。そして情報を集めてその本質を理解しようとし、統計学は、現象を正確に認識し、集めた情報を適切に処理し、その本質を見抜く学問なのです。

試験を受けた時、「出来た」とか「出来なかった」とかを感じてと思いますが、それは印象にすぎません。採点され成績が数字として出てきてその結果初めて正しく認識することができます。しかし、例えばテストの点数が「60点」であった場合、それだけで出来たとか出来なかったとか結論できるでしょうか。例えば、平均点が40点の場合と80点の場合では「60点」に対する評価が全く異なってしまうことは明白です。そのテストの難易度によって同じ60点でもその評価は全く異なるのです。また、平均点が40点の場合でも、60点以上の人がたくさんいる場合と60点以上の人がほとんどいない場合では、「60点」に対する評価が大きく異なってしまいます。

数字が持つ意味を理解できていれば、その数字は力強い味方になりますが、意味が理解できていないとわけのわからない存在のままで、不気味な敵になってしまうのです。

3 分布を味方にしよう

実際に起こる現象を数字でとらえるとき、その数字が持つ意味を理解するにあたっては「分布」が非常に役立ちます。テストの点数を評価するときも、平均が何点で散らばりがどのくらいか、という情報が必要不可欠なのは、これらが分布をとらえる重要な要素だからです。テストの点数が低い人から高い人まで様々に分布しますが、その分布の「中心」がどのくらいで「散らばり」がどのくらいかで個々の数字の持つ意味が変わっていくのです。そして、分布とその分布における個々の数字の関係を正しく理解できないと混乱し、数字がわけのわからない敵になってしまいますが、適切に認識できれば強い味方になってくれます。

例えば、「今日は暑い」とか「今日は寒い」というのはどのように判定するでしょう。おそらく、昨日と比べてとか、平年の同じ時期と比べてとか、比較の対象があれば適切に判定できるでしょう。ところが、「今年は暑い」とか「今年は寒い」とかはどうでしょう。気温を調べてみると、今年の中でも昨年に比べて暑い日もあれば寒い日もあるはずですが、それなのに今年は暑いとか寒いとか判定しているのは、分布の「中心」が変化したかどうか注目しているのです。また、「今年は寒暖の差が大きい」とか「今年は寒暖の差が小さい」というのは、分布の散らばりが大きい小さいかについて考えているのです。

このように、日頃接している現象の多くは分布をしていて、人々は何気なくそれについて感じて評価しているのです。統計学はこの「何気なく感じている」部分について「分布」を用いて的確にとらえ、的確に判断する手助けをしてくれるのです。

4 確率を味方にしよう

実際に起こる現象について何らかの判断を行うとき、「確率」の考え方が不可欠です。例えば、検査薬を用いて、色が変わるかどうかで白黒の判定ができるのなら簡単ですが、世の中、そのような検査薬があることはまれです。勉強した結果について、合格、不合格の判定が試験紙を舐めるだけで行えるのであれば、どんなに簡単でしょう。現実にはそのようなことはなく、試験やレポートから得られる情報に基づいて合格を判定しています。

どのようなテストでも時間をいっぱい使って多くの設問に対して計算を行ったり、多くの語句を記述したりすることが求められます。これは、勉強した結果を判定するにあたって、問題数が少なかったり、記述量が少なかったりでは合格・不合格の判定を誤る可能性があるためです。勉強していないのに運よく合格したり、勉強した人がたまたま不合格になったりする確率を出来る限り下げるために多くの解答を求めているのです。多くの設問について正しい解答を作成できたということは、勉強しなかったとするとこれほど出来る確率はかなり低く、現実にはありえないだろうから、勉強したと判断できるであろう、と考え合格としているのです。試験の問題数が多いのは、勉強をすればするほど合格する確率が確実に大きくなるように設計した結果なのです。

このように、現実の世界では、白黒をはっきりさせることができないものがたくさんあり、そのような場合、確率の考え方をを用いて判断しているのです。統計学では、確率を用いて、情報に基づいて正しく判断する手法を学んでいくのです。

5 テキストを味方にしよう

薄いテキスト、すなわちページ数が少ないテキストのほうが簡単であるという印象を与えるようですが、それには大きな落とし穴があります。現在の学問は、各レベルで学ぶべき項目や深さがある程度確立されています。そのため、テキストが薄いということは、内容が削られているか、説明が削られているかのいずれかになってし

まっているのです。内容を削られているから参考書に頼って勉強する、説明が削られているから塾や予備校に頼って勉強する、というのが現在の日本の高校レベルまでの現状でしょう。そして、薄い内容で薄い理解でそのレベルを終えてしまうから次のレベルで苦しむことになっているのです。

大学レベルの統計学のテキストは総じて分厚いです。様々な学問分野における大学レベルでの勉強に役立つ統計学を身につけるために不可欠な項目や、卒業論文を作成するにあたって取り組む先行研究の読み込みや自らの卒業論文の執筆に役立つ項目を、削ることなく網羅すると項目が多いのは当たり前のことなのです。

薄い参考書を勉強すれば何とかかなと思う人もいるかもしれませんが、薄い参考書はある特定の項目の理解の手助けにはなるかもしれませんが、すべての項目を網羅しているわけではありません。参考書に頼ってすべての項目を理解しようとするとは冊もの参考書を読破しなければなりません。それはテキストで学ぶよりも数倍大変なことです。参考書を味方にテキストを敵として戦うよりもテキストを味方にするほうがはるかに賢明です。

まずは、テキストを読破してください。各章の最初のページにある解説でその章の目的、概要を知ることができます。本文にはわからないところがたくさんあるかもしれませんが、それは気にせず、まずは斜め読みでも構いません。

この科目の位置づけは基礎的な統計的分析を身に付けるところにあります。テキストには、さらなる勉強を視野に入れた【発展項目】という節や項が設けられています。この多くは、その章の範囲には入るけれども理解に必要な数学レベルがやや高い項目です。テキストを読み進めるにあたっては、この【発展項目】は読み飛ばしても次の章に進めるようになっています。また、この【発展項目】はこの科目のレポートや試験の出題範囲には入りません。ただし、この【発展項目】はこれから皆さんがより高度な計量的な分析を勉強するときに助けになるものですので、積極的に勉強してもらいたいと考えています。

6 コンピューターを味方にしてワークシートを活用しよう

そして、次にコツコツと読み進めながら例題に取り組んでください。例題の結果が再現できれば、安心して次に進めるでしょう。計算が大変な場合は積極的にコンピューターを活用してください。各章末に、エクセルでの計算の仕方も説明してあります。

実際のデータ分析では大量のデータを扱うわけですが、テキストでは考え方や構造を理解するための練習として標本の大きさは限定されています。それでも計算量は多くなるので、すべてを式にして計算していたのでは大変です。そのようなときにワークシートを利用します。すべてのデータについて同じ計算を適用する場面では計算過程を表の形でまとめていくのです。そして、これがエクセルのワークシートにぴったりなのです。

7 テキストやコンピューターを味方にしてレポートに取り組もう

例題が解けるようになったら、レポート課題に取り組んでください。統計学のレポートは復習タイプの課題であり、要求される計算は、いずれかの例題が参考になるように作られています。読み飛ばしていない限り、参考となる例題が見つかるはずですよ。レポートでは現実のデータを用いて計算を行い、その結果について考えてもらっています。それによって役に立つ統計学が身に付くことになるでしょう。

統計学のレポートは4回ありますが、これは統計学の体系が積み重ねになっており、順に理解する過程での復習に役立ててもらうためです。また、レポートの作成にあたって、他の科目のようにテキスト以外の他の参考文献をいろいろと読む必要はありません。テキストの勉強だけですべて解けるようになっています。レポートにおいても積極的にエクセルを用いて計算してください。

8 テキストやレポートを味方にして試験に備えよう

各章末には練習問題が載っています。これらのほとんどは過去の試験問題、あるいはそれをアレンジしたものです。役に立つ統計学を身に付けることが目的であるため、問題に登場するデータは実際のデータがほとんどです。試験ではコンピューターを使えませんから問題に出てくるデータはその数が少なかったり、途中までの計算がすでにしてあったりします。計算以外の説明が求められる問題もありますので、練習問題を解くことによってその章での重要事項の確認もできます。

ただし、章末問題は、原則として、その章で学んだことに関する問題しか登場しません。試験は持ち込み不可ですから、問題を見て第何章で学んだことを使えばよいかの判断が必要となります。章末問題に取り組むときも、なぜこの解き方をするのかを常に考えながら取り組んでください。

章末問題には、【発展問題】と付けられている問題があります。これはテキスト本文の【発展項目】に対応した問題ですので科目試験の出題範囲には入りません。ただし、さらなる勉強を踏まえ、これにも挑戦してもらいたいと考えています。

9 統計学を味方にして可能性を広げよう

学問は孤独です。特に通信教育課程ではその孤独感は大きいと思います。様々な科目の勉強過程でわからない箇所が登場したときに何かに頼りたくても自ら解決していかなければなりません。そのわからない箇所の説明にはデータを用いた解説がついている場合が多くあると思います。そのときに統計学が助けてくれます。また、レポートや卒業論文を作成しているとき、自分の考えていることをうまく表現できない場合があるかもしれません。そのようなときもデータを用いた分析で示すことで困難を打開できることもあります。そのようなときも統計学

が助けてくれます。統計学を味方にして、皆さんが持っている人生における大きな夢の実現に向けて、学生生活を有意義なものとしてほしいと思います。

(2010年4月1日執筆、2015年4月1日一部加筆修正)

◆講義要綱

- 第1章 集合（集合、写像）、第2章 数列（数列、数列の極限、級数）、第3章 関数（数の極限と連続、指数関数・対数関数、三角関数）

数学の多くの分野は集合を基礎にしてその理論が構築されている。ここで学ぶ写像の概念は数列、関数へと特殊化されて、社会科学のさまざまなところで応用されている。広く諸科学を専攻するための「基礎の基礎」として、ぜひ学習されるようお勧めしたい。

数列や関数の極限の考え方は、物事の漸近的な様子を記述する上で重要である。「限りなく近づく」（収束）、あるいは「限りなく大きく（小さく）なる」（発散）というイメージに親しむことを目指す。

さらに、特によく用いられるいくつかの重要な関数について学ぶ。それぞれの定義と特徴について学習し、取り扱いに慣れることが大切である。

- 第4章 個数の数え上げ（直積の要素の個数、和集合と共通部分の要素の個数、順列と組合せ）、第5章 確率（標本空間と確率空間、事象と確率、確率の計算と順列・組合せ、条件付き確率、確率変数と期待値）、第6章 事象と認識（順序、束、分割、集合体、可測空間と可測写像、エントロピー）

初めに個数の数え上げの手法を学ぶ。数え上げる対象の代表的なものとして順列と組合せがあるが、ここでは数え落しや、数え過ぎのないよう規則的に数え上げる態度を養う。

次に確率論の初歩を学ぶ。社会現象に不確実性を伴うことはごく普通のことであり、その不確実性は確率

を使い記述される。確率の概念を数学的に表現するためのいくつかの概念を導入し、これらとすでに学習した数え上げ手法に基づき確率の計算も行う。さらに、確率論で最も重要な概念である、確率変数とその期待値について学習する。

最後に、事象とその認識の問題をあつかう。事象を認識するときのその粗さや細かさを数学的に表現する方法を学習する。このときすでに学んでいる集合論の知識がいたるところで使われ、また、確率論とも密接に関係してくる。さらに、エントロピーの概念も紹介される。

◆テキストの読み方

教科書を通読した後、必ず練習問題を解くこと。また、要点をまとめた自分なりのノートを作成するとよい。

「数学（基礎）の学び方」も参考にしてください。

◆参考文献

高等学校の教科書（数学Ⅰ、数学A、数学Ⅱ、数学B、数学Ⅲ）

志賀浩二『集合への30講』朝倉書店、1988年

◆レポート作成上の注意

問題文からどのように着眼し、どのような思考をして結論に至ったのか、添削者が読み取れるように丁寧に記載すること。答えを求めるまでの過程が明示されていない場合、添削、採点の対象となりません。

分数式を記入する場合には $\frac{k+1}{(k^2+3k+1)^2}$ のように分子を上、分母を下に記述すること（分母分子を斜線の前後に書かないこと）。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆数学（基礎）の学び方

須田 宏（名誉教授・故人）、小宮英敏（商学部教授）

1 数学的方法・数学的思考方

現代の数学の歴史はギリシアに始まるといわれる。それはこの時代に数学における方法論——まず用語についてその内容を限定するように定義を与え、次に議論のよりどころとしての公理・公準を述べ、それらをもとにして推論を重ねて定理を証明し、さらにこの定理と公理から新しい定理を証明していく——がプラトン（紀元前427～347）によって確立されたからである。この公理的方法によって当時知られていた数学を集大成したのがユークリッド（紀元前330～275?）の「幾何学原本（ストイケイア）」であった。ここに流れる基本的な考え方——すべての人が了解する前提（今日の数学では理論の出発点の公理は自明の真理でなくてもよい）から正しい推論を経て命題を導き結論に至る——が数学的思考方である。

諸君は学問の場のみならず生活のすべての場で価値観の異なるいろいろな考え方に遭遇するであろう。このような場で数学的な考え方はすべての人を納得させる考え方として重要である。また諸君がこれから取り組む研究対象によっては、仮説を立て（これを公理と考え）推論を行い数学的モデルをつくる（定理を導く）ことによってその対象を解明するということがあるかも知れない。それはともかくとして、少なくとも、一つの学問を志す以上論理的な思考をする力は不可欠である。論理的思考力の養成には数学ないしは数学らしいものに触れるのが最適であろう。

そこで単に総合教育科目の単位を充足するためだけではなく、数学的思考方を身に付けることを目標に広い範囲の数学を学習することを勧めたい。

2 テキストの執筆方針

現行の数学のテキストは、高等学校の科目編成が1982年度高等学校入学者より、数学Ⅰだけ必修で他の数学Ⅱ、代数・幾何、基礎解析、微分・積分、確率・統計が選択科目になったことに対応して、「数学（基礎）」、「数学（微分・積分）」、「数学（線形数学）」の3冊が設定された。

その後の高等学校の科目編成の改定に伴い、本テキストの前半では高等学校の「数学Ⅰ」だけを予備知識とし

て数列および関数について学習し、後半では昨今の科学的手法で重要な役割を担う情報数学を学習することになっている。本テキストは2000年度から配布されている。

今日、大学の初年級で学ぶ数学の内容は多様化しているが、文、経済、法3学部の共通の場で考えるとき、「微分・積分」と「線形数学」が妥当であろう。しかし高等学校の数学Iだけを予備知識として、「微分・積分」を学習するのは困難である。そこでどうしても橋渡しの役割をするテキストが必要である。それが「数学（基礎）」である。

このテキストは

- (1) 公理から出発し正しい推論を行って命題を証明する
- (2) 事象を抽象化して一般性を捉える
- (3) 幾何的感覚で対象を観察する
- (4) 記号で表現し、操作する

といった数学的方法が身に付くよう十分考慮して執筆されている。さらに一部の分野では操作的な処理能力も必要と思われるので、この点にも相当の配慮をしたつもりである。

また、本書が通信教育による学習者用のテキストであるため特に次の諸点に留意した。全体の構成や本文の記述に工夫をして概念を少しでも早く正確に理解できるようにした。たとえば、論理の展開や式の変形は一般の教科書より丁寧に記述し、記号の使い方や使用する文字にも配慮した。次に、職場や家庭で忙しく、まとまった学習時間がとれない諸君も多いことであろうから、各項の中を細かく分けて段落を設け学習の区切りをつけやすいようにした。また、本文の後に「例」と「問」をできるだけ付け、「例」は本文の理解の助けとなるようなものを選び、その類題を「問」としたこと等である。

いろいろな参考書を調べるのも一つの学習方法だが、数学書をナナメに読んだり、途中から読むのは多くの場合容易でない。なるべく他の参考書等をみなくてもすむように学習目標以上のことも書いておいたので、より発展した学習をする際には役立つことと思う。

3 テキストによる数学の学習法

前述のような執筆の意図からこのテキストを学習するには一段落ごとに一行一行よく読み十分理解できたら、まず、「解」をみないで「例」を試みて解答が完成したならば「解」と照合してみよう。そうして納得できたならば1題でも多く「問」に挑戦するとよかろう。これを積み重ねて節末さらに章末まで到達したならば、振り返ってその節がどのように構成され、その章がどのように体系化されているのか考察してみよう。

学習を進めていくうち理解できない部分や疑問点など壁にぶつかったときは、一時その部分を保留して先の部分の学習を進め、ある程度全体像を把握してから再度壁に挑んでみるとよい。このようなことを繰り返すうち結構解決できることが多い。

また、同じテキストを学習する「なかま」をつくるのも有効な学習法である。電話でもEメールでも気軽に連絡し疑問点を語り合い、励まし合うことによって諸君の学習はすばらしい効果をあげることであろう。

4 「数学（基礎）」の背景

第1章は数学のあらゆる分野で陰に陽に現れる集合の概念を主題としている。集合は数学ではものの集まりと抽象的に定義されるが、それらの間にはいくつかの関係や演算が定義され、集合そのものは数とは異なるものであるが、興味深い考察対象となっている。集合の概念はその普遍性のゆえ、社会科学の多くの分野で応用されている。一例をあげれば、経済学では消費者の消費可能集合、生産者の生産可能集合などあらゆる場面で集合が使われている。さらに、集合に付随し写像の概念も紹介されている。写像も集合同様普遍的な概念のため社会科学の多くの分野で使われているが、例えばゲーム論における利得関数、経済学における効用関数、需要関数、生産関数などはすべて写像の一例である。

第2章では数列を扱う。数列は素朴に数の並びと考えることができるが、第1章で学んだ写像の特殊なものであると認識することができる。すなわち、正の整数の集合から実数への写像、あるいは対応規則ととらえることができる。正の整数を日付と、それに対応する実数がある株の株価とみなせば、数列で日々の株価の変化を表現することができることになる。このように、数列は時間につれて変動する指標を表現することに適しているので、社会科学では様々な分野で使用されている。十分長い時間が経過したときに、数列で表現されている指標がどこに落ち着くのかを問題にする場合には、数列の極限が考察対象になる。第2章の多くを極限の議論がしめている。

第3章では関数が主題である。関数は第1章で現れた写像の特殊なもので実数に実数を対応させる規則として定義される。社会科学で現れる様々な概念が数値化されると、それは関数として表現されることになる。例えば、経済学において、ある財の価格はその財が市場に出回る量により決定されるものとする、財の量も価格も実数として表現できるので、その財の量と価格の対応関係は関数としてとらえることができる。この章では基本的な関数である、整関数、分数関数、無理関数、指数関数、対数関数、三角関数の性質、および、関数の連続性、極限などの概念を学ぶ。関数の極限はさらに進んで微分法や積分法を学ぶときの基礎となる。

第4章は第5章の準備にあてられており、個数の数え上げの手法を学ぶ。数え上げる対象の代表的なものとして順列と組合せがあるが、ここでは数え落としや、数え過ぎのないよう規則的に数え上げる態度を養う。

第5章では確率論の初歩を学ぶ。社会現象に不確実性を伴うことはごく普通のことであり、その不確実性は確率を使い記述される。本章では確率の概念を数学的に表現するためのいくつかの概念を導入し、これらと第4章

で学習した数え上げ手法にもとづき確率の計算も行う。さらに、確率論で最も重要な概念である、確率変数とその期待値について学習する。

第6章では、事象とその認識の問題をあつかう。事象を認識するときのその粗さや細かさを数学的に表現する方法を学習する。このとき第1章で学んだ集合論の知識がいたるところで使われる。また、第5章で学んだ確率論とも密接な関係があり、後半ではエントロピーの概念が紹介される。

5 レポート課題と科目試験

テキストの学習が進み学習成果に十分自信がもてるようになったならばレポート課題に取り組もう。問題を先に見てその問題に関係するところだけをテキストから摘み食いしてレポートを書いたのでは数学的思考方は身に付かないし、もちろんよい結果は望めない。

レポートを書くときはまず問題をよく読み、問題の意味を正確に把握しよう。それから解答方針を立て、論理の飛躍がないように注意してワンステップずつ進んで結論へたどり着く。レポートの記載にあたっては自分が問題をどのように理解し、どのような思考を行って結論に到達したのか担当者に伝わるようにする。その際、式だけを羅列したり、計算を過度に省略したりしないようにしたいものである。

解答ができた文章、文字の間違いや計算ミスがないか十分点検しよう。中途半端なレポートを提出し採点者の添削した部分だけそっくり修正したレポートを再提出したのでは数学を学んだことにはならない。

レポート課題をクリアしたならばいよいよ科目試験である。学習がきちんと完了していればどこが要点であるか自然に判明してくるので、そこに重点を置いて復習し試験に臨んでほしい。

答案用紙にはレポートと同様に推論の過程を明示しなければならない。最終的な「答」だけポツンと書いてあるのは「解答」ではない。

(『三色旗』第464号(1986年11月刊)より転用・一部加筆訂正、
2000年小宮英敏(商学部教授)により、一部加筆修正)

◆講義要綱

- 第1章 微分法 (関数の極限、導関数、Taylor の定理、関数の性質、微分法の応用)、第2章 偏微分法 (多変数関数の極限、偏導関数、極値問題、偏微分の応用)

例えば0時から x 時までの車の移動距離を $y=f(x)$ で表すと、 a 時から b 時までの車の平均速度はその間の移動距離 $f(b)-f(a)$ を時間 $b-a$ で割ったものになる。その間車の速度は一定ではなく、絶えず変化していると考えるのが自然であろう。では a 時での車の瞬間の速度はどうなるであろうか。 b が a に近ければ近いほどその間の平均速度は瞬間の速度に近づくと考えられる。そこで b を a に限りなく近づけるといふ極限の概念がでてくる。 b を a に限りなく近づけたときの平均速度の極限 $f'(a)$ が a 時の瞬間速度である。車の移動の様子は速度 $f'(x)$ 加速度 $f''(x)$ によってある程度調べることができる。

1章ではいろいろな関数 $f(x)$ について $f'(x)$ の求め方、 $f'(x)$ と関数 $f(x)$ の増減、 $f''(x)$ と関数 $f(x)$ の凹凸との関係、関数の極値について学ぶ。また、関数を多項式関数で近似し、その誤差を調べる、Taylorの定理を学ぶ。

2変数の関数 $z=f(x,y)$ は空間の曲面を表していると考えることができる。

曲面 $z=f(x,y)$ が山を表していると想像してください。山の様子を知るにはどのような方法があるだろうか。例えば地図は等高線で山の様子を表している。同様にいろいろな高さ c の等高線 $f(x,y)=c$ を考えることにより曲面の様子を調べる。また山を縦方向に切断してその切断面を調べることによって山の様子を知ることができる。 $z=f(x,y)$ は $y=b$ とすると x だけの関数 $z=f(x,b)$ となるし、 $x=a$ とすると y だけの関数 $z=f(a,y)$ となる、1変数の関数は1章により詳しく調べることができるので、これらを利用して $z=f(x,y)$ の様子も調べることができる。

2章では2変数関数 $z=f(x,y)$ について $x=a$ または $y=b$ と固定したときの微分にあたる偏微分を学ぶ。また山の頂上にあたる極大値、山道を歩いたときの峠にあたるある条件のもとでの極大値などを学ぶ。

- 第3章 不定積分 (不定積分、置換積分法・部分積分法、有理関数・無理関数・三角関数の積分)、第4章 定積分 (定積分、定積分の計算、定積分の定義の拡張)、第5章 定積分の応用 (面積・体積、道のり・曲線の長さ)、第6章 重積分 (2重積分、重積分の計算、体積・曲面積)、第7章 微分方程式 (微分方程式とその解、微分方程式の解法)

積分法は微分法の逆の演算で微分法と表裏一体をなすものです。ここでは前半で学んだ微分、偏微分等の知識を踏まえて積分に関する基礎事項を学びます。

◆テキストの読み方

1章ではまずいろいろな関数 $f(x)$ について導関数 $f'(x)$ を求められるようにしてください。合成関数の導関数の公式が使えるようになると、導関数を求めることができる関数がぐっと増えます。次に $f'(x)$ 、 $f''(x)$ を調べることにより $y=f(x)$ のグラフの概形を描けるようになるようにしてください。

2章ではまず偏導関数の計算を練習してください。偏導関数についても合成関数の偏導関数の公式は重要です。次に、2変数関数の極値、条件付き極値問題に進んでください。

「数学(微分・積分)の学び方」も確認してください。

◆レポート作成上の注意点

第1回

答えだけではなく、その結論に至る過程も丁寧に記述してください。

1. は関数のグラフについての問題です。
2. は高次の導関数の問題です。
3. は2変数関数の極値についての問題です。
4. は2変数関数の条件付き極値問題です。

テキストの該当する箇所をよく読んで、理解してからレポートを作成してください。

第2回

最終的な「答」のみを記載したものは不可です。問題文からどのように着想し、どのような思考をして結論に至ったのかわかるように、ていねいに記述してください。

問題2. 4) ではテキストP38の(4. 18)式を、また問題3. 3) では同P39の(4. 24)式をそれぞれ用いて解答してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆数学(微分・積分)の学び方

竹中淑子(名誉教授)

1 学習内容

大学の教養課程での数学は「微分・積分」と「線形代数」を2本の柱とするカリキュラムが組まれています。その一つの柱「微分・積分」の学び方について述べてみます。

微分、積分の理論の基礎となるのは実数の連続性といわれるものです。実数の連続性とは空でない実数の集合が有界ならば上限、下限が存在するというように述べられるものです。これより実数例の収束の概念、関数の極限に関する性質、連続関数の性質などが導き出されます。閉区間で連続な関数については「中間値の定理」、最大最小な点の存在を保証するところの「最大最小の定理」(あるいは「ワイエルシュトラスの定理」ともいう)などが重要です。

これらのことをふまえて微分の理論が展開されます。ここで取り扱う関数は整関数(多項式)、分数関数、無理関数、三角関数、逆三角関数、指数関数、対数関数など初等関数とよばれるものです。

1 変数関数について微分可能性を関数自身を局所的に一次関数で近似できることと定義します。微分可能な関数について「Rolle の定理」、「平均値の定理」、「Taylor の定理」などが導かれます。「Taylor の定理」を使うと n 回連続微分可能な関数は局所的に n 次多項式で近似できることになります。これらの命題を使い関数の増減、凹凸、極大極小、変曲点などを調べることで、関数のグラフの概形がえがけるように学習します。

2 変数（以上）の関数についても平面上の点列の収束、2 変数の連続関数の性質などを経て、偏微分可能性を定義します。その他に 1 変数関数の微分可能性に対応するものとして全微分可能性も導入し 1 変数関数の接線に対応するものとして接平面を考えます。関数の極大、極小であるための必要条件や、十分条件、また条件付きの極値問題（Lagrange の乗数法）の必要条件などが導かれます。

次に学ぶのが微分の逆演算である積分です。ある関数があるとき微分してその関数になるような関数をはじめの関数の不定積分（原始関数）というのですから連続関数は不定積分をもち不定積分の性質は微分の性質から形式的に導かれることになります。不定積分の計算には置換積分法、部分積分法が有効です。不定積分の計算の応用として簡単な微分方程式の解法があります。

定積分は原始関数の値の差として定義しますが、構成的定義、積分可能（リーマンの意味での）の概念もあります。定積分の応用として面積、体積、曲線の長さなどが求められます。

少し定積分の定義を拡張して有界でない関数に対する定積分、無限区間における定積分などの広義積分も考えてみます。

2 変数関数の積分すなわち 2 重積分は累次積分の形で定めるが、構成的定義も考えてみます。

以上が「微分・積分」で学ぶことです。

2 レポート—答案を書くにあたり

数学の問題を考える上でたどるプロセスはおおよそのところ

- (1) 問題の理解
- (2) 試行錯誤
- (3) 解答の実行
- (4) 解答の吟味

となると思われます。

(1) では既知のもの、未知のものは何か、明記されない隠された条件はないかなどを調べます。(2) は最も重要なところですが、解法にたどりつくまでのあてもないこうでもないとの試行錯誤の繰り返しは数学の問題を解く楽しみでもあり、苦しみでもあるでしょう。「ひらめき」というものはこういう試行錯誤の末にでてくるものです。(3) では内容の記述は筋道を立てて論理的に進められるべきです。(4) の吟味では問題が一般化できないかあるいは逆に特殊化できないかを考えます。また何に活用できるのか、他の解法はないのかなども考えておくと後々、役に立つこともあるでしょう。

“問題→パターン認識→解答”

という条件反射的なことにならないようにしたいものです。またそうなるような問題はあまりよい問題とはいえないでしょう。これは教師の方の責任ですが……。たいへんむずかしいことですが、数学とはある決まったやり方でやるものであるという固定観念はすて、創造的、発展的な考え方ができるようになりたいものです。

皆さんのレポート、テストの解答をみると、テキストを最後まで読んでいないとすぐわかるものに出くわします。数学という科目の特徴は、積み重ね的な色彩の強い教科ということでしょう。ある個所でわからなくなるとそれがあとあとまで影響します。しかし、そうかといって最初から 1 行 1 句をおろそかにしないよう意気込んで読みはじめると、悲しいかなすぐギブアップとなりかねません。わからない所はそのままにしておき、しばらくあとで読み直してみると、なるほどと理解できることもあることはよく経験することです。

通学生のように、毎週講義を聞いたり、学生どうして議論できる機会が少ない。したがって書物をたのみに一人で黙々と学ばねばならない通信課程の皆さんに、次の言葉を送り終わりにします。

『真の学問は書物の中にある。書物と実生活からさまざまな知識を獲得しようとする学従自身の独自の努力の中にある』（トルストイ）

3 参考文献

微分・積分を学ぶに際し、簡潔に書かれた標準的な入門書の一冊として、水田義弘『入門 微分積分』（サイエンス社、1996年）が、また同著者による同じ系列の演習書としては、『詳解演習 微分積分』（サイエンス社、1998年）があります。これらを手にとりてみて、かなり難解に感じられる受講者ためには、石村園子『やさしく学べる 微分積分』（共立出版、1999年）が適切かと思います。また、練習帳のように、本に直接自分の計算を書き込みながら微分・積分の学習を進められるよう配慮された参考書の一つとして、藤田岳彦・石村直之『穴埋め式 微分積分 らくらくワークブック』（講談社サイエンティフィク、2003年）をあけておきます。他方、本格的に書かれた微分・積分の教科書・参考書は多数ありますが、このうち比較的最近出版されたものとして、小林昭七『微分積分読本 1 変数』（2000年）・同著『微分積分読本多変数』（2001年）〈いずれも裳華房〉は推奨できる参考書です。

（『三色旗』第575号（1996年2月刊）より転用・一部加筆訂正、2011年厚地淳（理工学部教授）・桂田昌紀（経済学部教授）により一部加筆修正）

◆講義要綱

「線型代数(線形代数とも書く)とは何か、なぜ学ぶか」

線型代数とは何かと聞かれれば、1 次式と 2 次式の数学と答えることができます。数学が考える対象として関数はより一般性をもっていますが、社会科学・心理学などを学ぶときには、様々な量の関係のモデルを、それらの量の 1 次式と 2 次式で構成するのが基本です。しかも、モデルは確率・統計を用いて、現実のデータに適合したものを採用しますが、その最適化のプロセスで線型代数が大いに役に立ちます。中学のときに学んだ連立 1 次方程式をさらに深めた内容を学ぶと聞くと、ばかげていると思うかもしれませんが、しかし、人類が量を記述する最も基本的な方法が線型代数で与えられるのです。

第 1 章 ベクトルとその幾何学

この章では、ベクトルの加法、減法、定数倍などの演算に加えて、内積を用いた幾何学とその応用について学びます。ベクトルの代数的側面と併せて対応する幾何学的イメージを習得できるとよいでしょう。この章を学ぶ前に、高校で学んだベクトルの内積について復習しましょう。

第 2 章 行列

m 個の変数を用いた n 個の 1 次式があるとします。これをまとめて表現するのに、行列を用います。この章では、行列の演算について詳しく学びます。

第 3 章 連立 1 次方程式

この章では、連立 1 次方程式の「掃き出し法」を学びます。ここで計算機アルゴリズムに触れることができます。この章の主眼は、連立 1 次方程式の具体的な

解法にありますが、その背後にある基本行列を用いる理論(「掃き出し法」)が線型代数の基本になります。

第 4 章 行列式

行列式は、 n 個の変数を用いた n 個の 1 次式で表される連立 1 次方程式の解法を与えてくれます。この量が、行列の基本的な性質を記述してくれるのです。ここでも「掃き出し法」は重要な役割を演じます。

第 5 章 線型部分空間

連立 1 次方程式が定める解空間を記述するのに必要な線型部分空間について学びます。ここでは、基底や次元といった根本的な概念の理解が重要です。ここでも再び「掃き出し法」は重要となります。

[注意] 第 1 章、第 2 章、第 3 章が第 1 回レポートの内容で、第 4 章、第 5 章が第 2 回レポートの内容です。

◆テキストの読み方

テキストにはたくさんの演習問題が出題されています。これを地道に解きながらテキストを読みましょう。「数学(線形数学)の学び方」も参考にしてください。

◆履修上の注意

高校 2 年生までの数学を学んだ人が対象です。

◆関連科目

「数学(微分・積分)」

◆参考文献

特になし。

◆レポート作成上の注意点

計算結果のみを記述するのでは、合格になりません。必要十分な情報は何かを考えながら、レポートを作成しましょう。用いた変形は必ず記述しましょう。特に行基本変形(「行に関する掃き出し」)を用いる場合は、使った変形を明記してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆数学(線形数学)の学び方

戸瀬信之(経済学部教授)

1 線形代数の教科書の執筆方針

文科系、社会科学系の大学 1、2 年生にとっての数学はいくつかの目的を果たすことが期待されているでしょう。すなわち、

- ・統計学など即実践的に社会の中で役に立つ科目。
- ・線形代数、微分積分など様々な諸科学の基礎となる科目。
- ・教養的な数学、これは総合教育科目として開講されている場合が多いでしょう。

この中でも線形代数は非常に基礎的な重要性を担っています。その基礎的な重要性から、大学初年級での線形代数の教育は従来、非常に透明度の高い内容、つまり、数学的な論理構成を中心に据えてなされてきました。実際、線形代数は多くの学生にとって、貫徹した一つの理論構成を見る数少ない機会であったと思います。ところが、その反面、なぜ大学生になって「こんなもの(連立 1 次方程式の解法なんて本質的なことは、実は中学生でやっていることだからそう思うのも自然だと思います)やらせるんだよ!」と、線形代数を勉強するにあたって動機付けのものがあまりにも少なかったのではないかと思います。数学者として反省することしきりの今日このごろです。この反省をもとに、教科書では、数学的な概念を導入するに当たって多変量解析などから社会に現れる実例を紹介するなど画期的な試みを行っています。

従来、線形代数を勉強するにあたって余りにも学生サイドで問題意識が少なかったために、経済学部の専門科目で出てきたりするとおっ慌てということが多かったのではないのでしょうか。これは、通学課程、通信教育課程どちらにもあてはまることです。でも、実はどんな分野でもそうで、この私自身、教壇に立つようになってはじめて、線形代数の内容が意外と豊富で、様々な社会科学で基礎的な部分を担っていることを知った次第です。もっと言うと、いろんなことを勉強する時は、基礎からはじめてだらだらと先にいくというのは余り効率のいい勉強とはいえないかもしれませんから、あとで慌てて勉強するのもいいかなと思います。これは、余り教員サイド

が表立っている言葉ではないかもしれませんが。

2 線形代数とはなにか

線形代数はなにかと聞かれたら、1次式の数学ですと答えています。つまり、 n 個の変数 $x_1, \dots, x_n$ があつたとき (n 種類の量があつたとき)、1次式とは

$$a_1x_1 + \dots + a_nx_n + b$$

という式の数学です。ここで、 $a_1, \dots, a_n, b$ は実数 (あるいは、複素数) の定数です。この答えは、非常に卑近すぎて人を食っていると攻撃されるかもしれません。それを説得するのがこの小文の目的です。

最近では環境問題が重要になっていて、二酸化炭素の国ごとの排出量も規制を受けるようになりつつあります。それでは、表1を見て下さい (総務庁統計局編 [世界の統計] (1995年) を参考にしました。そして、人口は同じ資料で1992年のデーターを用いました)。

表1

n	国名	人口(1000人) x_n	二酸化炭素(100万 t) y_n
1	日本	124324	1079
2	アメリカ	255020	5035
3	カナダ	27367	435
4	イギリス	57848	608
5	イタリア	56777	419
6	オーストリア	7884	63
7	オランダ	15178	193
8	スイス	6875	45
9	スペイン	39085	236
10	デンマーク	5170	65
11	ドイツ	80569	957
12	フランス	57372	406
13	ベルギー	9998	130
14	オーストラリア	17529	283
15	ニュージーランド	3414	26

先に進む前に念を押しておきますが、私は環境問題の専門家でも何でもありません。ただこのデーターを前にどんなことが線形代数と関係するかということを述べるつもりです。

この表を見ても何も浮かびませんが、グラフにしてみましょう。昔は、グラフ用紙に点を打っていったのですが、最近では表計算ソフトが発達して (かつ、私がパソコンを使い始めた40年前に比べて非常に安くなっています) いろんなことが簡単にできるようになりました。

図1のグラフを見て下さい。

このグラフを見て自然に考えるのは、直線関係があるのではないかということでしょう。つまり、もちろん誤差はあるとして、人口を x 、二酸化炭素排出量を y とすれば、直線

$$y = ax + b$$

(a, b は定数) という関係があるのではという素朴な疑問が生じるのではないのでしょうか。このように、社会科学、自然科学を問わず、複数の観測値、サンプル値があつたとき、1次式の関係があるのではないかという疑問が生ずるのは自然なことです。したがって、多変数の量の統計的な処理において最も公式的な議論が整備されているのは、1次式の関係で、線形モデルまたは回帰分析とよく呼びます。

さて、表1において、例えばスイスの人口を x_8 、二酸化炭素排出量を y_8 としましょう。このとき、回帰分析において、データーに一番近い直線 (回帰直線という) $y = ax + b$ は、和

$$S(a, b) := (y_1 - ax_1 - b)^2 + (y_2 - ax_2 - b)^2 + \dots + (y_{15} - ax_{15} - b)^2$$

が最も小さくなる a, b の場合です。平均からのずれの度合いを表す分散という量を使うと、実は、理論値 $ax_n + b$ と実測値 y_n の差の分散が最も小さくなるのが、回帰直線の場合です。 a, b をどう求めるかはさておいて、ここで強調したいのは、最も自然なモデルというのは線形モデルであることです。今の場合は、2変数でしたが、もっと多変数の場合は、1次式の数学を高度に組織化した、行列およびベクトルを用いた線形代数が必須となります。

それでは、節を改めてベクトル、行列の紹介をしましょう。

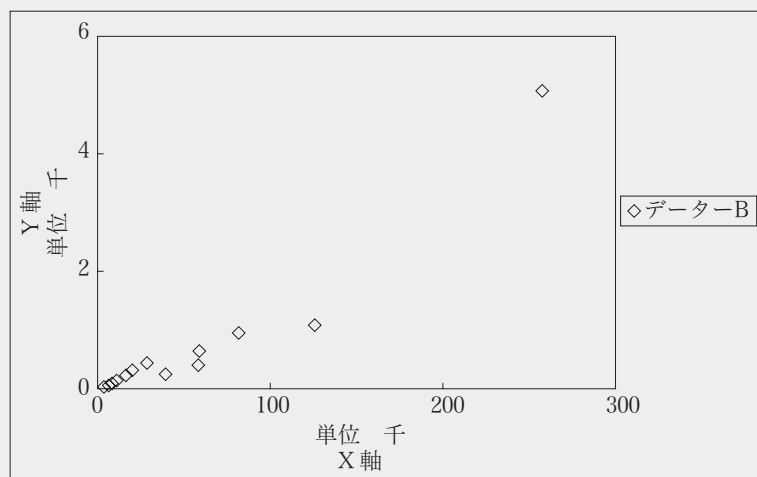


図1 人口と二酸化炭素

3 ベクトル、行列

依然として上の人口、二酸化炭素の表を考えます。この表からすぐに行列が出てきます。

$$A = \begin{pmatrix} 124324 & 1079 \\ 255020 & 5035 \\ 27367 & 435 \\ 57848 & 608 \\ 56777 & 419 \\ 7884 & 63 \\ 15178 & 193 \\ 6875 & 45 \\ 39085 & 236 \\ 5170 & 65 \\ 80569 & 957 \\ 57372 & 406 \\ 9998 & 130 \\ 17529 & 283 \\ 3414 & 26 \end{pmatrix}$$

上の一連の人口の15個のデータの並びを第1列、二酸化炭素のデータの並びを第2列といいます。さらに、横の並びのことを、上から第1行、第2行、…、第15行といいます。普通、線形代数の教科書を見てもいきなり行列が数の並びとして出てきますが、社会科学を学ぶものにとっては、行列といたらこのように、データベース的な量の並びをイメージして欲しいです。

このデータ行列 A の、第 i 行、第 j 列を後のために a_{ij} とおきましょう。

さて、この行列から別の行列が出てきます。

$$B = \begin{pmatrix} b_{11} & b_{12} \\ b_{21} & b_{22} \end{pmatrix}$$

において

$$\begin{aligned} b_{11} &= \left(\sum_{i=1}^{15} (x_i - \bar{x})^2 \right) / 15 \\ b_{22} &= \left(\sum_{i=1}^{15} (y_i - \bar{y})^2 \right) / 15 \\ b_{12} &= b_{21} = \left(\sum_{i=1}^{15} (x_i - \bar{x}) \cdot (y_i - \bar{y}) \right) / 15 \end{aligned}$$

です。但し

$$\bar{x} = (\sum_{i=1}^{15} x_i) / 15, \bar{y} = (\sum_{i=1}^{15} y_i) / 15$$

は平均です。この行列に出てくる数（成分といいます）ですが、 b_{11} は x の分散、 b_{22} は y の分散、そして b_{12} を x, y の共分散と呼びます。そして、この行列 B のことを分散行列と呼びます。

この分散行列は、二つの変数だけではなく、お互い関連しあっていたいくつもの量（正確にいうと相関関係があるいくつもの量）がある場合でも定義されます。環境問題に興味がある人たちはきっと、もっと別の量を含めて（例えば GDP、工業関係の生産量を含めて）分析をしているでしょう。

せっかくですので、相関係数の話もしておきます。二つの量が、1次式の関係にあるかどうかを測る量として

相関係数がありますが、

$$\rho_{12} = \frac{b_{12}}{\sqrt{b_{11}}\sqrt{b_{22}}}$$

よって得られます。

世の中で相関関係があるとかいっても、その本当の意味を知っている人は意外と少ないと思います。相関関係があるというのは、二つの量が相関関係にあるというのは、上の人口と二酸化炭素の場合のように、直線関係に近い関係があることです。その度合いを示す指標が相関係数 ρ_{12} です。相関係数は

$$-1 \leq \rho_{12} \leq 1$$

と絶対値 1 以下です。そして、値が 1 のとき、二つの量は正確に傾きが正の直線上にプロットされます。−1 のときは、傾きが負の直線上にプロットされます。したがって、絶対値が 1 に近ければ近いほど相関関係があるということになります。この事実を理解するには、線形代数で学ぶ、コーシー・シュヴァルツの不等式

$$(x_1y_1 + \cdots + x_Ny_N)^2 \leq (x_1^2 + \cdots + x_N^2)(y_1^2 + \cdots + y_N^2)$$

の理解が必要になります。この不等式は、線形代数の基本的な事柄ですが、私自身、このような形で、統計で使うとは経済学部で教員になるまで夢にも思っていませんでした。社会科学の学生にとっても数学は重要なのです。「数学要るぞ。数学いるぞ。」とマインドコントロールをしているようでいやなのですが、1、2 年生に数学をやる気にさせるにはしょうがないかもしれません。それはさておき、こういう形で数学にとって基本的なものがきちんと応用で出てくるのが、数学の普遍性の現れではないかと考えます。

4 1 次方程式

通学部の学生、特に経済学部で学生たちにとって理解しがたいのは、大学に入って連立 1 次方程式を学ぶということでしょう。中学生に 2 元連立、3 元連立方程式の解法を学んでいるので、なあんだ大学に入ると数学は簡単なのか！と落とし穴に入るようです。連立 1 次方程式を学ぶのは、いくつかの目的があります。

- ・連立 1 次方程式の解法（掃き出し法）が線形代数の理論的な基礎になっているので重要であること。すなわち、基礎的な定理の証明に用いるからです。
- ・連立 1 次方程式の解はどのようなになっているかを学ぶ。
- ・連立 1 次方程式の解法は計算機に乗る、つまり、プログラムを書いて解くことができるということ。これは、アルゴリズムということを学ぶ数少ない機会となっています。

ここでは、再び人口と二酸化炭素の表から話題をとります。具体的には、前節の分散共分散行列です。いくつものお互い相関関係がある量 $A^{(1)}, \dots, A^{(N)}$ があるとき、この多くの量を代表する指標となる量を求めるのが主成分分析と呼ばれるものです。正確にいうと、定数 $a_1, \dots, a_N$ を選んで

$$a_1A^{(1)} + \cdots + a_NA^{(N)}$$

の分散が最大になるようにするのですが（ただし、 $a_1^2 + \cdots + a_N^2 = 1$ の下で）、このことは上の人口と二酸化炭素の場合は連立 1 次方程式

$$\begin{cases} (b_{11} - \lambda)x + b_{12}y = 0 \\ b_{21}x + (b_{22} - \lambda)y = 0 \end{cases}$$

が非自明な解 $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \neq \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ を持つ場合の λ とそのときの解を求めることに対応します（この λ を固有値と呼びます）。さらには、

$$(b_{11} - \lambda)(b_{22} - \lambda) - b_{12}b_{21} = 0$$

という λ に関する方程式を解くことになります。この左辺は行列式と呼ばれるものに当たります。

主成分分析に関しては、経済学部だけでなく、行動科学、心理学などを学ぶときに必要になるかもしれません。主成分分析の実例を見つけるレポートを以前三田キャンパスで出したら、法学部の学生がお相撲さんの体格に関する分析してくれた学生がいました。

5 最後に

本当は、ゲーム理論、証券のポートフォリオ分析、線形計画法などに関して線形代数の基礎的な重要性を説くために触れようと思っていましたが、紙面が切れました。この内容は教科書で触れることにしましょう。ともかく、「数学要るぞ。数学いるぞ。」と言い続けましたが、このマインドコントロールから抜けるには数学を勉強して、さらに専門を勉強しないと無理かもしれません。

(1996年 4 月 1 日執筆、2016年 4 月 1 日一部加筆修正)

◆講義要綱

この科目は、私たちの身の回りの世界である地球と宇宙について、広く深く考察するものです。地球の姿や活動のしくみ、大気や海洋、太陽系や天体の姿とその成り立ちなど、さまざまな分野を含みます。それらは相互に関連し合っており、ある事象を説明するのに別の分野の知見が必要になることもあります。この課題を通して、地球や宇宙について認識を深め、日々の生活に役立ててほしいと思います。

◆テキストの読み方

まず、副読本『新しい高校地学の教科書』（講談社ブルーバックス）をよく読み、課題領域の全体像を理解して下さい。テキスト「地学」には課題に該当する内容が書かれていないこともありますので注意して下さい。各課題につき2000字の要件がありますので、この副読本から抜き取るだけでは不十分です。他の文献にもあたったりして知識を深めるといいでしょう。

地学の領域は近年目覚ましく前進していますので、できるだけ新しい文献にあたるといいでしょう。内容をよく理解したら、全体のバランスを考えながら、レポート作成にとりかかって下さい。「地学の学び方」も参考にしてください。

◆履修上の注意

地学は「理科・自然科学」科目です。地震などの自然災害や地球環境問題など、社会学的な視点から捉えてよさそうなテーマもありますが、ここではそれは求められていません。あくまで自然科学の立場から、課題を捉えてください。

◆関連科目

「化学」「物理学」

◆レポート作成上の注意点

個々の課題に対して、本筋ではない、周辺事項をたくさん記載して、ページを費やす人がときどきいます。何が求められているか、課題を良く読んで理解し、全体のバランスにも留意してうまくまとめて下さい。引用に終始せず、自分の言葉でまとめる技術も大切です。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆地学の学び方

鹿園直建（名誉教授・故人）

1 はじめに

私は地学の主な学習目的には2つあると思っています。1つは地球と人間との関係をよりよく理解することです。それでは、なぜ地球と人間との関係を理解する必要があるのでしょうか。それは、人間が地球からさまざまな影響をうけ、また、逆にさまざまな影響を与えているからです。現在では、これらの影響のことをしらずには生きていけないような状況になってきています。第2の目的は地球そのものを科学的に明らかにすることだと思います。地球には我々にははかりしれない不思議な現象が多くみられ、この現象についてしり、その原因を明らかにしていくことは、大変興味深いことです。人によってももちろんいろいろな目的があると思います。1の目的が強い人、2の目的が強い人、また両方の目的を持つ人などがいると思います。この1、2といった大きな目的ではなく、個々の地学現象（例えば、地震、火山）について興味があり、これについてしりたいという人もいます。はじめは個々の興味から出発する人が多いとは思いますが、そこから発展し、個々の地学現象の関係を明らかにし、1と2について総合的に学習することを期待しています。

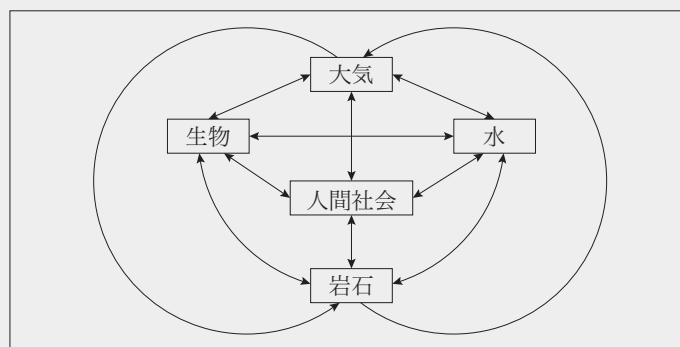


図1 地球システムのサブシステムとサブシステム間の相互作用

2 テキストの内容について

本テキストは地球をシステムとしてとらえるという地球システム科学の立場で書かれています。図1に示すように、地球はいくつかのサブシステムから構成されています。それぞれのサブシステムがどのようなものかを知ることが第一に重要です。各々のサブシステムは独立に存在しているのではなく、お互いに影響を与えているので、この相互作用についてしる必要もあります。

地学という学問は近年（特にこの30年間位）大いに進歩しました。したがって、本テキストではなるべく近年の成果を多く取り入れ、これまでのテキストや他の地学の教科書とはかなり異なった内容を入れました。特に以下の点について比較的くわしくとりあげています。(1) プレートテクトニクス、(2) 自然—人間相互作用、(3) 地球の進化。

表1に、従来の地学の教科書でとりあげられている項目と本テキストであつまっている項目が示されています。

これらを比較すれば、よくわかると思いますが、その内容が異なっていることがわかります。従来の教科書では多くの項目がとりあつかわれています。しかし、本テキストではある程度項目をしぼり、なるべく系統的にあつかうように心がけました。

表 1

今までの教科書の内容	新地学の内容
固体地球 層構造、重力、地磁気、地震、地殻（火成岩、変成岩、堆積岩、鉱物）、プレートテクトニクス 大気と水 地球の熱収支、大気の運動、天気、海水の運動、水循環 地球の歴史 地層、化石、地質図、地質年代、地球の進化、日本列島 宇宙 太陽系、恒星、銀河系	地球の構成要素と相互作用 大気、水、固体地球（地殻、マントル、コア）、プレートテクトニクス、プルームテクトニクス、物質循環（水、炭素など） 自然－人間相互作用 自然災害、資源、地球環境問題 地球の起源と進化 宇宙の起源と進化、太陽系の惑星、地球の進化 自然観、地球観

地球は非常に大きく46億年という長い歴史をもっています。したがって、地球の全てについて記述することは容易ではありません。ところが、近年、科学技術が多いに進歩し、地球に関する膨大なデータが得られるようになってきました。この成果の1つとしてプレートテクトニクスがあげられます。この考え方で多くの地学現象を統一的に説明できるようになりました。この考え方は1970-1976年に構築され、1980年代はじめには完成されました。

その後、1980年代になり、資源の枯渇などの資源問題が大きな問題となり、1990年代になると地球規模の**地球環境問題**がクローズアップされてきました。その他、わが国においては地震や火山災害などの自然災害が大きな社会的問題となっています。以上の自然－人間相互作用の問題は地学の中でもっとも重要なテーマで、テキストの中でもっともくわしく書かれています。

(3) の地球の進化についても近年理解が大いに進みました。例えば、惑星探査によって、金星や火星についての知識がふえ、これらと、地球を比較することにより、地球の初期の状態が推定できるようになりました。

(1) のプレートテクトニクスや (3) の地球の進化について理解することは、「地球」について理解するためには欠かせません。一見、これらの問題と人間の生活とは直接関係しているようには思えません。しかし、地震、火山噴火は、我々の生活と多に関係していて、これらはプレートの運動によって引き起こされた現象なのです。

3 テキストの学習法

2でのべましたように、このテキストは新しい最近の成果をまとめた点で従来の地学の本とは異なっています。そこで、地学の全分野をカバーしていないという問題があります。例えば、高校の地学の教科書で書かれている岩石、鉱物、大気、海水の運動、気象、地球表面でのエネルギー収支、日本列島の地史、天文などについての記述が足りません。これらについては従来の本を参考にするといよいでしょう。しかし、以上の全てとテキストの全ての内容を知識として取り入れ、理解をすることは、とてもむずかしいことです。そこで、はじめから知識として取り入れようとするのではなく、自分の興味のあるところから学んでいくこともよいことと思います。テキストを読むとわかりますが、どの章から学んでいってもよいようにテキストを書いたつもりです。したがって、必ずしも一章から学びはじめなくてもかまいません。しかし、はじめはそうに学習しても、このテキストは一応体系だてた形で書かれてありますので、もう一度ははじめから最後の章まで順番にしたがって学んでいくとさらに理解が深まると思います。

地学は地球を対象にする学問です。地球全体について理解を深めることを目的にしています。しかし、地球全体は膨大で、地球が生まれてから46億年も経過し、その間に多くの地学現象がおきました。現在の地球はこれらの長い年月におこった地学現象をふくんでいます。したがって、空間的及び時間的な地球の変化の全てを理解することはとてもできません。まずはじめのとりかかりとして何から学んでいくかが問題となります。そこで、なるべく身近な問題について自分でしらべてみるとよいでしょう。例えば、地震災害、火山災害、地球温暖化問題、資源の枯渇問題、公害問題などは、自分の生活と密接にむすびついた問題です。これらのうちでどれでもよいのですが、自分が興味をもつテーマについて、自分でしらべて、自分の考えでまとめてみるとよいと思います。まとめる際にはテキストを参考にするのはもちろんですが、この他にいくつかの本を参考にするといよいでしょう。なるべく専門的なものではなくはじめはわかりやすく通俗的なものでもかまいません。この種の本は、今では多くでています。テキストの後ろに推薦書をあげておきましたのでこの中から選ぶとよいでしょう。このようにしていくつかのテーマについて自分なりにまとめレポートを作成して下さい。個々のテーマについてまとめていくうちに全体としての地球についての理解が深まってくると思います。例えば、2であげた「プレートテクトニクス」や「地球の進化」というテーマは比較的大きな課題ではじめからすぐ理解することはむずかしいと思います。しかしながら、1つ1つの自分の興味のある身近な問題を考えるうちに「プレートテクトニクス」や「地球の進化」について理解することなしには、地球全体について理解できないということを認識すると思います。これらの「プレートテクトニクス」や「地球の進化」についても、最近ではわかりやすい本がいくつもでていま

す。これらについてもテキストの後ろに推薦書をあげておきましたので、参考にして下さい。

「自然—人間相互作用」は、「プレートテクトニクス」や「地球の進化」に比べると比較的わかりやすい章だと思います。特に、最近では、地球環境問題や自然災害問題については社会的問題として大きくとりあげられていますので、多くの情報が入ってきます。これらの問題は、「地学」にかぎった問題ではありません。地球環境問題を解決するためには、例えば、二酸化炭素の排出量を削減しないといけません。そのためには、科学技術を進歩させるとともに、経済システムの変革をしたり、国際的な条約を結ぶ必要があります。したがって地球環境問題は、地学や生物学などの自然科学だけの問題だけでなく、経済学、社会学などの社会科学分野の問題でもあります。地球環境問題についてはこれらの科目でも学ぶことと思います。したがって、これらの科目と地学で学ぶ内容とを自分なりに結びつけて学んでいくとよいでしょう。

テキストの最後の章では今までの人間の**自然観**、**地球観**がまとめられています。この章は、個人が自然と地球と人間との関係をいかにとらえるのかという問題を取りあげています。したがって、哲学、倫理学など人文科学の分野と大いに関係しています。哲学や倫理学と地学とは一見関係ないようにみえますが、実は多いに関係しているのです。哲学、倫理学など人文科学を学ぶ際にこの地学との関係についても考えてみるとよいでしょう。

この他、テキストや参考書からは学べない点が「地学」にはあります。実際に野外にでて、岩石、土壌、水、大気などの調査をすることは本からは学べません。このような調査をすることは多くの経験が必要であり、簡単なことではありません。しかし、どんな小さなことでもよいのですが、旅行をしたり、山登りなどをした時に、自然を観察することはたいへん楽しいことです。例えば、山登りをして、地形の起伏をみて、なぜこのような起伏になっているのかを考えてみるとよいでしょう。そうすると、隆起、沈降、海面変動の原因や山を構成する岩石が何かについてわからないといけないことに気がつきます。自然を観察してみるとさまざまな疑問がわいてきます。日本の自然はたいへん変化にとんでいます。自然を観察するだけでも楽しいのですが、それを一つ一つこいで、ある疑問がわいたら、それについて考えてみるとよいと思います。しかし、はじめのうちは疑問はなかなかわいてこないものです。そのつもりになって、自分で問題をつくってみて下さい。問題ができたら、自分で答えを出して見て下さい。答えをだす際には、テキストといくつかの本を参考にするとよいでしょう。答えはまちがっているかもしれません。まちがっていてもかまわないのです。いろいろな仮説を出すことも重要なことなのです。1つの仮説を出すのではなく、いろいろな仮説をだすとよいと思います。これらの仮説を比較し、どのような点が違い、このうちどれが正しいのかについて自分で判断する必要があります。しかし、判断はまちがっているかもしれません。**客観的な判断**をする必要がありますが、そのためには、実験的データや既存の理論をもとにしないといけません。学問としては想像をするだけでなく、実証していくことが重要なのです。しかし、この「地学」ではそこまでは要求していません。「地球とは何か、地球におこっている現象とはどのようなものか」、が自分なりに整理され、理解されればよいと思っています。そして、地球が自分にとって大変身近な存在でいかにすばらしいものであるのかを感じることができればよいと思っています。

(『三色旗』第569号(1995年8月刊)より転用、一部加筆訂正)

◆地学の学び方—「地球人」として生きるために—

杵島正洋（講師・慶應義塾高等学校教諭）

1 「地学」のねらい

2015年度より、「地学」は副読本を追加しました。ここでは地学という科目のあらましや、副読本を追加したねらい、地学を学ぶことの意義などについて、説明したいと思います。

地学という科目は、私たちの身の回りの世界である地球と宇宙について、体系的、総合的に学んでいく科目です。地学という科目の特徴として、地球を構成する岩石・鉱物といったミクロな事象から、太陽系や恒星や宇宙といった広大なスケールのもので、実に多様なものを扱うことが挙げられます。しかも、それぞれの知見は独立しているわけではなく、ある事象を説明するのに、別の事象の知識を必要とすることも大いにあります。たとえば、岩石の風化という現象は、岩石が日射や風雨などを受けて次第に細かく砕けていく現象ですが、これを説明するには、岩石をつくる鉱物の種類、粒径、膨張率、水との反応のしやすさなどに加え、地形、気候、植生など、さまざまな視点から現象を理解する必要があります。太陽系の惑星や衛星について理解しようと思ったら、地球とどこが違うのか、という視点がとても重要になりますが、これは地球のことがわかっていないと説明ができません。天文や気象と地球科学が同じ科目に含められているのは、こうした強い結びつきがあるからと考えることができます。

ところが残念なことに、現在の高等学校の課程で地学を開講しているところは、全国でもごく一部ということです。教科書の販売部数で調べてみると、高校で地学を学んでいるのは全体の1割強（これでも以前より増えました）。地学担当の先生がいない高校も多く、多くの人々が地学をほとんど学ばずに社会に出ていく状況です。皆さんの中にも、学校で地学分野を学ばずに卒業したという人が多数いるのではないのでしょうか。

そこで、テキストをじっくり読む前にお勧めしたいのが、副読本『新しい高校地学の教科書』（講談社ブルーバックス）です。もともと高校生が読んでわかるようにと、仲間と一緒に書いたものですが、一冊で地球内部から気象や宇宙までを網羅した読み物としては、まずまず手ごろなものだと自負しております。まずは副読本を通読し、次に課題テーマが関連しそうなところをじっくりと読んで理解を深めて下さい。その上でテキストを読むと、いきなりテキストから読み始めるよりはずっと理解しやすいだろう、と思います。もっと詳しい知識が知り

たい場合は、関連する他の書籍や文献を探すとよいでしょう。もちろんレポートを書くときは、複数の文献から文章を切り取って書き写すのではなく、自分で理解したことがらを自分の言葉でしっかりと表現して下さい。

2 地学は面白くてタメになる

地学はお天気のような身近な事象も扱えば、宇宙のように壮大なスケールのものも扱う学問です。地震や台風のような激しい現象もあれば、山脈の隆起や気候変動のように気づかないくらいのゆっくりとした変化もあります。観測や分析がより高度に精緻になることで、今まで見えなかったものが見えたり、気づかれなかった事実が判明したりと、今もなお頻繁に内容が書き換わっていく、学問のもっともアクティブなところを覗き見ることができます。こうした修正や変更は、地学がまだ誕生して間もない若々しい学問であること（プレートテクトニクス成立からまだ50年!）、さらに地球が現役で活動する活き活きとした星であることが原因です。身近で壮大で、フレッシュでアクティブ、そんな地学の面白さをぜひ感じてみてください。

地学を学んだことで、生活の中でも考え方や振る舞いに変化があるかもしれません。現象から原因を探る視点、関連やつながりを意識する姿勢、グローバルなスケール感覚、そして日々の生活の中で自然の変化に気を留め、自然や地球を大事に思う気持ち。こうした考え方や感覚は、これから「地球人」として生きる私たちにとって、非常に重要な思考ツールとなるでしょう。この科目を履修することで、「地球人」の意識を持つ人が一人でも多く生まれることを、ひそかに期待しています。

物理学

4 単位

他に実験スクーリングによる 2 単位の修得が必要(計 6 単位)

A059-1101

◆講義要綱

物理学はテキスト学習とスクーリングにおける実験からなる合計 6 単位の科目です。テキストと実験を通じ、現代物理学の基本的な知識と考え方を学びます。単にテキストの内容を理解するだけでなく、興味を持った問題に関し、自分で調べ、考えて理解できる能力を身に付けることを目指しています。このような能力は物理学にとどまらず、あらゆる分野で威力を発揮するでしょう。

テキストは、20 世紀の物理学を中心に、いくつかの分野を深く学ぶ内容となっています。前半では量子力学とミクロの世界について考えます。後半では宇宙の物理と相対性理論について学びます。理論だけではなく、具体的な物理現象の仕組み、そして、理論が正しいと考える根拠を明らかにしていきます。テキストの内容はスクーリングで行う実験の内容とも密接に関連しています。

スクーリングの実験は、1 人か 2 人一組で行います。配布される実験テキストに手順の詳細な説明があるので、誰でも結果を得られます。実験ではその持つ意味を考え、理解することが重要です。実験結果を得て実験レポートを提出する際に、必ず教員と質疑応答を行い、実験内容の理解を確かめます。実験を通じて、物理学テキストでも強調した、自然科学における実証の持つ意味を実感できると思います。また、理論と現実とのつながりも実感できるでしょう。インフォーマルで充実感があり、楽しい経験だと思います。

通信教育課程の物理学は高校での物理学の履修は前提としていません。また、使う数学は中学程度です。ただ、これは簡単という意味ではありません。新しい概念を学ぶのは誰にとっても難しいものだからです。テキストでは、必要な基礎的概念は適宜に導入し、説明しています。テキストを理解することを目指して下さい。科目試験の問題もテキストの内容を理解すれば解けます。

物理学は様々な現象がなぜ起きるかを考える大変面白い学問だと思います。物理学を楽しんで欲しいです。「物理学の学び方」も参考にしてください。

◆参考文献

特に指定しません。テキストを理解するとともに、自分で興味を持った本や記事を読んで考えることを勧めます。

◆レポート作成上の注意点

テキスト学習では 3 回のレポート提出が求められています。レポートは物理学テキストの内容を理解すれば解答できる課題です。解答は内容を消化して、自分の言葉でわかりやすく表現して下さい。

物理学では課題に的確に答えられれば字数は気にする必要はありません。数式や図は必要に応じて使って下さい。計算をする場合には、必ず途中過程を記して下さい。10 の累乗の計算法(テキスト付録参照)の理解は、レポートとスクーリングの実験の両方で必要です。3 回分のレポートをいきなりまとめて提出するのではなく、まず 1 回分を提出し、評価とコメントを見てから残りを提出することを勧めます。

◆成績評価方法

①レポートの評価、②実験スクーリングの評価、③科目試験の評価からの総合評価が最終評価となります。

◆物理学の学び方

青木健一郎(経済学部教授)

1 物理学

物理学は自然科学の一分野です。物理学では自然科学の中でも最も小さなスケールから最も大きなスケールまで扱います。小さなスケールは原子、分子、そしてそれよりさらに微視的な世界、大きなスケールでは文字通り宇宙の果てまでについて考えます。通信教育課程の物理学では、小さなスケールから大きなスケールまでにわたって、現在の物理学における理解とその考え方を学びます。物理学の法則は、自然界のあらゆる現象にあてはまります。物理学で自然界の全てを説明できるわけではありませんが、生物を含めあらゆるものは物理学の法則から逃れられません。

物理学は「なぜ」ということを考える分野です。なぜ様々な自然現象がそのようなふるまいをするのか、というその背後にある仕組みを考えます。それだけではありません。物理学は実証科学です。よって、なぜそのような理解が正しいのか、という根拠の部分も重要です。また、なぜそのように考えるようになったのか、という経緯も理解を助けるものかもしれません。通信教育課程では、これらの様々な側面から物理学を学びます。

通信教育課程の物理学では、現代物理学の常識だけではなく、物理学の考え方を身に付けることを目指しています。物理学の問題や結果に興味を持った際に、自分で調べ、理論的に考えて理解し、自分なりの評価を下すことができるようになるのも目的です。このような能力は物理学だけに役立つものではなく、状況を理解し、理論的に判断を下す際に、あらゆる分野で大きな力となると思います。実際、物理学を専門にしていた人には自然科学の他の分野からコンサルティング、金融工学まで様々な分野で活躍している人がいます。アメリカ合衆国の大統領のサイエンス・アドバイザーも伝統的に多くの場合、物理学者です。

福澤諭吉先生も、勉学においてまずは物理学から学ぶべきだといったことを様々な機会に説いていました。時事新報の社説「物理学之要用」にも「我慶應義塾に於て初学を導くに専ら物理学を以てして、^{あなた}も諸科の予備と為す…」と 1882 年に書いています。これは、他の学問をするにあたっても、まずは実証に基づいた理論的な考え方から学び、科学的思考力を身に付けるべきだ、という考えを説いたのだと思います。福澤諭吉先生の実学の精神は有名ですが、実学に「サイヤンス」とルビをふっていたことにも、実学の精神が科学的思考力と通じる

ものであることが現れています。地球温暖化やエネルギー問題などの、自然科学が中心的な要素である総合的な問題が山積している現代においてこそ、福澤先生のご精神、そして、科学的な考え方の重要性はますます増していると思います。専門に関わらず、誰でもエネルギー問題などについて自分なりの選択をする場面が必ず生じます。その際に、科学的な根拠を理解し、理論的に判断を下すためには、科学的な思考力は必要になってくるでしょう。

2 テキスト

「物理学」のテキストでは、いくつかの重要な分野を中心として、深く掘り下げる方針を採用しています。物理学を「広く浅く」概観はしていません。これには、いくつかの分野を詳しく扱い、様々な側面から考え、深く物理学を理解しようという意図があります。場合によっては、理工系の学生が3、4年で学ぶ内容も含めています。

テキストは前半と後半に大きく分かれます。前半では原子、分子などの微視的な世界の物理学を扱っています。その背後にあるのが量子力学の物理法則で、これを詳しく説明しています。後半では、宇宙物理と相対性理論について学びます。宇宙の理解は20世紀に最も大きく変わった分野とも言えるでしょう。近年も大きく進展していて、その成果も扱います。相対性理論には、特殊相対性理論と一般相対性理論がありますが、この両方について考えます。量子力学と相対性理論は20世紀に誕生した考え方で、それまでの物理学とは大きく異なります。どのように違うのか、そしてなぜそのような考え方が生まれたかについても説明します。物理学は生きた学問で、今でも進歩し続けています。自然科学はどの時代においてもその時代の最善の努力の結果であり、終点はありません。昔の物理学の理論もその検証された範囲では正しかったわけです。現在と過去の物理学には、過去に検証されていなかった領域に違いが現れます。検証されていた領域では、物理事象は基本的に同じふるまいをします。このような物理学の発展を理解することによって、自然科学の持つ限界もわかるでしょう。

物理学は自然現象を扱う実証科学です。テキストでは、抽象的な概念だけではなく、具体的な物理現象にどのように物理法則が反映されているかを学びます。そして、なぜそのような物理学の理解が正しいと考えられているか、という根拠についても重点的に扱っています。物理学では、抽象的な考え方を求められる部分も多く、ややもすると、現実の世界と基本法則の理解が遊離しがちです。具体的な現象を通じて理解することによって、現実の世界が物理法則に従っていることを意識できるでしょう。また、物理学テキストでは様々な物理量をおおざっぱに求めることを重要視しています。簡単に様々な量をおおざっぱに概算することは、物理学の内容のより深い理解につながります。このような概算は物理学においてはよく使います。これは「フェルミ推定」ともよばれ、近年は他の分野でも有用性が認識されています。

このテキストは、高校の物理学を履修している事を前提としていません。必要な基本的な知識や理解は適宜導入しつつ、説明を進めていきます。必要な数学も中学校レベルです。しかし、内容が簡単であるというわけでは必ずしもありません。量子力学や相対性理論は多くの学生にとって未知の概念でしょう。新しい概念を理解することは誰にとっても難しいものです。これは文系、理系に関わらず誰にとってもそうです。これらの分野の考え方は、日常経験の直観が通じないので、初めはおかしく感じると思います。ただ、頭を柔らかくして、それらが実際にもたらす物理現象を考える事によって、誰でも必ず理解できると信じています。

3 実験

通信教育課程の物理学にはスクーリングでの実験が含まれます。物理学の様々な分野の基礎的な実験を行い、物理学の基本的な法則を確かめます。物理学には抽象的な概念が多いので、現象と結びつけるには想像力も要ります。ややもすると、物理学の理論が現実世界で成り立っている事を忘れがちです。実験は、物理法則と現実世界の結びつきを実感する絶好の機会です。授業の大切な一部です。理論と現実の乖離は物理学を専門とする学生ですら起こりがちです。本で1行で書かれている内容でさえも、実験で確かめるのは多くの場合、容易ではありません。しかし、理論と実験の両方を通じて理解すれば、深いレベルで内容を体得することができます。実験の内容はテキストの内容と直接関係ないように思うかも知れませんが、実験テーマはテキストの内容と本質的に関連しているので、実験を通じてテキストの内容をより深く理解できるでしょう。また、テキストの内容を理解すれば、実験の持つ意味もはっきりわかるでしょう。

実験は1組2人以下で行います。実験用のテキストが配布され、それに基づいて実験します。実験の手順等は、実験テキストに詳しく記述されていて、結果を得るのは難しくはありません。実験時間中にレポートを書いて提出し、質疑応答をして実験を終えます。実験で戸惑う学生が多いのが10の累乗（べき乗）の計算です。物理学においては、非常に小さな量から大きな量まで扱うので、10の累乗の計算が必須です。10の累乗を使った方ははるかに計算が楽なのです。10の累乗については物理学テキストの付録に手短な説明があるので、慣れていない方は実験を履修する前に目を通して置いて下さい。実験途中でわからない事がある場合は教員に質問して下さい。ただ、自分で考えて欲しい問題については、教員もすぐには答えを教えない場合があります。不親切に思うかも知れませんが、自分で答えを見つけるのと、他人に教えてもらうのでは理解度に大きな差があるので、自分で考えて理解して欲しい場合があるからです。再度自分で考えてわからない時には、また実験終了時に質疑応答の時間をとっていますので、その場で解決して下さい。

実験において一番難しいと思われるのは、実際にどのような物理現象が起きているのかを理解する事で、これは一番重要な面でもあります。実験テキストの手順の説明がいていいで簡単に実験が行える反面、実験の中身を理解しないでも結果までたどりつけてしまいます。誰にとっても、手を動かしながら頭も同時に働かせるのは難

しいものです。しかし、物理学的な内容を理解する事は重要であるとともに、その理解は実験を円滑に進める大きな助けとなります。事前に実験テキストに目を通し、物理的にどのような現象が背後にあるのかをイメージしておくとお実験を進めやすいと思います。実験では、結果を得て実験レポートを書いた後、教員との質疑応答が必ずあります。そこで、実験で見られた現象はどのような物理学の法則で説明できるかを確かめます。その機会に、実験内容の自分の理解を確かめ、わからない点を解明して下さい。わからない点がある場合は、積極的に教員に質問して下さい。

自然科学では、仮説を立てて実験で確かめる、とよく言われます。再現性が重要であることもよく指摘されます。実験をすれば、その真の意味がわかるでしょう。実験結果は単純に白黒が付くものではありません。値を複数回測定した場合にもびったりと同じ値が出るわけではありません。実験の不確かさ（誤差ともよびます）も考慮しなければなりません。たとえば、実験で値を測定した際にはそれが「正しい」のか気がなるでしょう。それは自然です。しかし、値が文献値とかなり離れていてもそれが実験精度の限界である場合もあります。逆に、値が一見文献値に近くても、実験精度が高いために、実験結果が文献値と矛盾している場合もあります。実験は実証科学の肝心な一部であり、実験を経験する事を経て、自然科学における「真実」の持つ意味を理解できるでしょう。実験の経験がないと、実験の持つ限界を理解できず、自然科学を過信したり、また逆に科学不信にもなりかねません。

堅苦しい事を書いてきましたが、実験は自分で手を動かして参加しなければ何も始まりません。その分、達成感もあり楽しいものです。また、実験は他の学生とも話し合いながら行えるインフォーマルな授業です。スクーリングで物理学実験を経験し、楽しんで欲しいと思います。

4 学習の仕方

物理学の学習の仕方は、人それぞれ自分に合った方法を選んで欲しいと思います。物理学テキストは一回読んでもすぐわかるものではないでしょう。上でも説明したように、主として扱う20世紀の物理学は日常経験に反するものでもあります。新しい考え方に馴染むには時間がかかるものです。完璧に理解しようとせずに、先に進んでもう一度戻って読み直すのも良いでしょう。レポートを提出せずともスクーリングの実験に参加できるので、まずスクーリングの実験に参加してから、テキストに真剣に取り組むのも一つの方法です。

テキストの内容を理解する事を目指して下さい。このテキストは、高校で物理学を履修していなくても理解できるような内容であるように努力しました。どうしてもわからなかったり、おかしいと思う内容がある場合には通信事務局本室を通してご指摘下さい。

参考文献は指定しませんが、普段から自分で興味を持った物理学の問題については色々考えることを勧めます。新聞や雑誌で見た内容について調べてみると良いでしょう。他の物理学の参考書を読んでも良いでしょう。

『日経サイエンス』（Scientific American の日本版）などで、最近の研究結果に関するしっかりとした一般向けの記事を読む事も勧めます。

物理学では3回のレポート課題があります。レポート課題はテキストの内容を理解していれば答えられるものばかりです。科目試験にもテキストを理解していれば解ける問題しか出しません。

物理学には抽象度が高い面もあり、困難に感じることもあるかもしれません。しかし、理解できたと感じた時には大きな充実感があるでしょう。また、物理学の内容は実に面白いものだと思います。哲学的な側面もあり、学問としての深さも実感できると思います。皆さんには是非とも物理学を楽しんで欲しいと真に願っています。

(2011年4月1日執筆)

化学

4 単位

他に実験スクーリングによる 2 単位の修得が必要(計 6 単位)

A060-1301

◆講義要綱

化学という学問は、さまざまな物質の成分や構造などを調べ、反応により別な物へ転換する方法を扱っています。例えば、空気の78%は窒素 N_2 ですが、これを高圧下で水素 H_2 と反応させ、アンモニア NN_3 を合成する方法を、1907年にドイツのハーバーが開発しました(1918年度ノーベル化学賞受賞)。窒素分は植物の肥料として欠かせない成分であり、この発明のおかげで、世界の人口が増加していても、食糧難にならずに済んでいるといえます。その一方で、人口爆発を引き起こしてしまったという指摘や、「化学物質」が環境を破壊する事態も発生しています。これらの問題にどう対処すべきか考える上で、化学結合や反応性を理解しておく必要があります。一般に化合物の構造は、元素記号と結合の線で表します。この講義の到達ゴールは、化学の基本的な考え方(概念)および構造式の意味がわかるようになることです。

◆テキストの読み方

第1章は、高校あるいはそれ以前に習う化学の基礎をまとめています。化学に自信がある人は、第1章の演習問題から取り組んでください。それから各章を読み、演習問題もやってみてください。もし問題の意味

や答えが分からないときは、テキストの関連部分を読み返してください。自分なりに精いっぱい問題を解いてから、巻末の解答例をみて答を確認してください。「化学の学び方」も参考にしてください。

◆参考文献

特に指定しません。

◆レポート作成上の注意点

回答にあたっては、分量を制約しません(2000字に達しなくても、あるいはそれを少し超えても構いません)。説明問題への回答は、テキストでいかによく学習したか、また自らいかに調査をしたかを示す機会ですので、できるだけいねいに書いてください。ただし、自分なりに要点をまとめることが重要です。教科書や参考書などの丸写しはやめてください。計算問題に対しては、結果だけでなくそれを導出するための考え方や、途中の計算式も書いてください。特に、答えを導くにあたっての論理を明確に述べるのが、非常に重要です。

元素記号を書く場合、大文字と小文字は区別し、添え字の位置にも注意してください。たとえば、(正) H_2O や CH_4 を、(誤) h_2o や $CH4$ のように書いてはいけません。構造式を書く場合は、炭素の原子価が4(結合の手が4本)であることに注意してください。

◆成績評価方法

①レポートの評価、②実験スクーリングの評価、③科目試験の評価による総合評価が最終評価。

◆化学の学び方

大場茂(名誉教授)

自然科学とは、自然現象がなぜ、どのように起こるのかを考える学問です。その中の「化学」は、物質の構造と変化、およびその性質を知り、それらを組み合わせることに重点が置かれています。高校の化学の教科書を見ると、物質名や元素記号、そして反応式などが並んでいます。そしてそれを見るだけでは何のおもしろさも感じないかもしれません。しかし、目には見えない小さい原子が物質を構成し、そしてそれらの結合が組み換わることによって、反応が起きているのです。これらの知識を集大成するには、膨大な時間の流れの中で多くの科学者の、未知なるものへの挑戦とたゆまぬ努力を必要としました。高校の教科書では、それらの結果をきれいに並べることで精一杯で、それを研究した科学者の苦労や思考の過程に触れる余裕はほとんどありません。そのため、味気ないものとして見えてしまいます。「化学」は覚えなければならないことが多いのは事実です。しかし、断片的な知識を身につけることは、学習の単なる序章にしか過ぎません。何か解決しなければならない問題にぶつかったとき、それまでの知識を活用して解決することが化学の本質なのです。

化合物は多くの場合、元素記号とそれを結ぶ線で表します。これを構造式と呼びます。この授業では、構造式の意味を理解し、それを使いこなせるようになることが、一つの到達目標です。また、実験をみずから行い、実際の自然現象を観察することが非常に重要です。それなくして、自然科学の真の学習とはいえません。この点で、実験を重視した自然科学教育の伝統が、慶應義塾の日吉キャンパスにおいて、文系学生の自然科学教育の中に引き継がれています。そしてそれが、通信教育部の夏期における実験スクーリングの実施にもつながっています。

基礎化学クイズ

「化学」がどれほど身近なものかを知ってもらうために、クイズを用意しました。次の文章が正しければ○、間違っていれば×で答えてみてください。全部で10問です(答えは、一番最後に示しました)。

- (1) 放射線の中で、特に人体に影響を与えるものを放射能という。
- (2) ビタミン C は酸化されやすいため、食品の酸化防止剤として利用されている。
- (3) 二日酔いの原因は、エチルアルコールから生じたホルムアルデヒドのせいだ。
- (4) D-グルコースやL-グルタミン酸などの D と L の記号は、味の違いを示している。
- (5) キュービック・ジルコニア(CZ)ダイヤも炭も、構成原子は同じである。
- (6) しょう油の色もビールの色も、共通の反応の結果生じたものである。
- (7) サラダ油を原料としてセッケンが作れる。
- (8) 砂糖とパン酵母を使ってアルコールが作れる。

- (9) 光は電磁波ではあるが、それを1個、2個と数えることもできる。
 (10) 蛍が光るのは、その体内でナトリウムの炎色反応が起っているからだ。
 一通り○か×か答えられたら、この記事の最後についている解説を見て、丸付けをしてみてください。

テキストの内容紹介

第1章は、化学の基礎的な知識をまとめたものです。例えば、原子と元素の違いとか、モルとは何かを説明しています。もし、化学には自信があるという方は、第1章は読み飛ばして結構ですが、第1章の終わりにのせてある演習問題をやってみてください。答えと解説は巻末にのせてあります。

第2章は、宇宙の誕生から始まって、太陽系つまり地球の誕生、そして地球大気の変遷について述べています。宇宙の誕生は、元素の誕生でもありました。また、地球が太陽から絶妙な距離にあったために、液体の水（つまり海）が存在し、そして生命が誕生したのでした。今や、大気環境に関して、オゾン層の破壊や地球温暖化が問題となっています。それらについて、何が起っているのかを学びます。

第3章では、化学の発展の歴史を古代から現代にいたるまで、足早に振り返ります。錬金術は、古代エジプトの神官の模造技術（めっきや合金）が始まりでした。その極秘情報が世の中にもれ、形を変えて伝わり、約2千年も続くことになりました。錬金術とは、卑金属を金に変えることをいいます。それが成功したというそや、根拠のない推論を排除すべきだ、といったのは、ボイルというイギリスの物理化学者でした。これは、当時ヨーロッパで起こった科学革命の流れを受けています。科学革命の源流を作ったのは、イタリアの天文学者ガリレオ・ガリレイでした。その後、元素がどれか、そして原子の質量の相対値（つまり原子量）が求まっていった過程を追います。

第4章は量子論の導入部であり、光は波でもあり粒子でもあることを学びます。また、電子が波動性をもつため、それを狭い箱に閉じ込めると、エネルギーが飛び飛びの値しかとれないことがわかってきます。これと同じような状況が、原子中の電子にも当てはまります。

第5章では、原子中の電子がどのような空間分布で存在するか、また電子の配置が元素の物性にどう関連しているかを学びます。

第6章では、原子と原子が電子を媒介として結合する仕組み、および分子の安定性や幾何構造について学びます。これで、単独の分子についての話は完結します。

第7章では、分子の集合体としての物質の状態を取り扱います。一般に、重い分子ほど沸点が高いこと、および空気中では分子が音速のスピードで飛び交っていることがわかってきます。金属や半導体の構造についても学びます。

第8章と第9章では、有機化学を学びます。ベンゼンを発見したのは、『ろうそくの科学』で有名なファラデーでした。また、世界で最初に合成された染料は偶然に得られたものでしたが、そのようなエピソードもまじえながら、有機化合物の反応について学びます。

第10章は、化学と社会との関わりについて概観します。化学の役に立つ明るい面（アンモニアや人工繊維の合成など）と暗い面（戦争との関わりなど）をみながら、地球の環境を守るためには総合的な判断が必要であることを学びます。

レポート課題と科目試験

レポートを3通まとめて一度に提出するのは、できるだけ避けてください。なぜかという、レポートを採点してコメントを書いても、それが次に活かされないからです。よくあるパターンは、問いに対する答えだけ書いてあり、その途中の導出過程あるいは考え方をまったく説明していないケースです。これは、レポートを採点する立場からすると、本当に内容を理解してレポートを書いているのか、それとも誰かに答えだけ教えてもらって、それを書き写しているだけなのか、判断できません。レポートの提出は、皆さんが教員と直接コンタクトがとれる貴重なチャンスですので、よく理解していることがわかるような書き方をしてください。ただし、レポートは皆さんの学習ノートとは違いますので、参考書などの説明を長々と書き写すのはやめてください。

レポート課題の問題文中に、「(ただし、○○○についても述べること)」というような指示があるにもかかわらず、それに答えていないケースをよくみかけます。課題の回答にあたっては、問題文をよく見返すようにしてください。合わせて、回答が問題文に対応していることを確認してください。また、再レポートになった場合、講評に書かれているコメントの内容をよく見てください。どこが足りなかったのか、わかるはずですよ。

試験は、勉強してもらうために行うものです。ぜひ、実力をつけてから科目試験に臨んでください。そのためには、テキスト第1章の演習問題を始めとして、各章の演習問題にも取り組んでください。演習問題の解答は、テキストの最後にまとめたのせてあります。

基礎化学クイズの答と解説

先のクイズの答えは以下の通りです。

- (1) ×：放射能とは、放射線を出す性質あるいは放射線を出す物質をさします。
 (2) ○：清涼飲料水や食品の添加物としてビタミンCはよく使われています。ビタミンCは、V.C.としてラベルに記載されていますので、探してみてください。
 (3) ×：二日酔いの原因は、アセトアルデヒドです。なお、ホルムアルデヒドは、シックハウス症候群の原因

因物質です。

- (4) ×：分子には右手と左手のような鏡像体の可能性をもつものがあり、D と L はそれを区別するための記号です。
- (5) ×：CZ ダイヤは cubic zirconia といって、 ZrO_2 （二酸化ジルコニウム）を主成分とする人工宝石であり、炭素だけからなるダイヤモンドとは別物です。
- (6) ○：糖とアミン（アミノ酸など）が重合するメイラード反応によって、溶液が黄色から褐色に変化し、さらに濃くなると黒くなります。
- (7) ○：昔、肉を焼いたときの油が灰に落ちて、偶然にセッケンが見つかったといわれています。
- (8) ○：酵母が嫌気呼吸（酸素がない状態での呼吸）をすることで、砂糖が分解され、エチルアルコールができます。ただし、アルコール度はそんなにはすぐには上がりません。二酸化炭素もかなり発生します。これを利用してパンを膨らませることができます。ドライイーストとは、乾燥させた酵母のことです。ブドウジュースが発酵してワインになるのも、同じ反応です。
- (9) ○：光は波でもあります、1 個 2 個と数えられる粒子でもあります。光の粒子を光子（こうし）と呼びます。
- (10) ×：蛍の光は、小さな有機化合物の化学変化によって生じています。花火などに見られる、金属原子からの発光とは仕組みがまったく違います。なお、蛍の光はエネルギーの変換効率が非常に高く、これを超えるようなものは人工的になかなか作れません。

クイズの解答と解説は以上です。クイズの正解数が少なくても、あまり気にしないでください。問題文が意地悪だったということもあります。さて、ここまで、読んでいただければ、しめたものです。不思議だな、もっと知りたいなと思うことが化学を学ぶ出発点なのですから。

(2013年4月1日執筆)

生物学

4 単位

他に実験スクーリングによる 2 単位の修得が必要(計 6 単位)

A049-0501

◆講義要綱

近年、生命科学分野の発展はめざましいものがあります。医療や環境など、我々にとって身近な問題を考えるためにも、基礎固めとして生物学の考え方をしっかり学ぶ必要があります。この教科書は生物学の基礎からはじめ、生物学的諸問題をじっくり考えられるように作られています。テキストの内容をしっかりと読みこなし、参考書を読めば、より深い理解が得られるでしょう。現在の『生物学』テキストは慶應義塾らしさを多く盛り込んだため、基礎部分がやや手薄になってしまっています。学生のみなさんの理解を助けるために2015年度よりサブテキストを指定しています。テキストと合わせて熟読してください。

◆テキストの読み方

生物学の各分野は非常に緊密に連携しているので、課題に関連する部分を読んだだけではしっかりした理解につながりません。全体に目を通した上で、関連する分野を繰り返し熟読することで理解が深まります。参考文献では基礎的な記述が省略されている場合があるので、必ずテキストの関連する内容を確認してからレポートを作成すること。補助教材『学習のすすめ』生物学の学び方も参照すること。

◆履修上の注意

この科目は実験スクーリングの履修が必要な科目です。スクーリング前にレポートに取り組んでみるか、少なくとも教科書に一通り目を通しておきましょう。

この科目のレポートは1回の提出あたり2000字以内が基準です。大幅に超過することがないように気をつけること。参考文献やインターネット情報の「関連ありそうな部分」を抜き書きしてつないでも良いレポートにはなりません。課題で求めていることに対して直接的かつ簡潔な記載を心がけること。

科目試験は教科書の内容がしっかり理解できていることを重視します。十分な準備をして臨んでください。

◆参考文献

サブテキスト：南雲保（編）『やさしい基礎生物学 [第2版]』羊土社、2014年

第1回：佐々木裕之『エビジェネティクス入門』岩波科学ライブラリー、岩波書店、2005年

武村政春ほか『Primary 大学テキスト これだけはおさえたい生命科学』、実教出版、2010年

◆レポート作成上の注意点

第1回：まずテキスト第3章（特に3.10と3.11）およびサブテキスト『やさしい基礎生物学』の3章（特に3.3）と9章（特に9.3）をよく読んでください。その上で①から④の導入課題を指定された文字数程度（多少前後してかまいません）で論述してください。最

後のまとめは引用のつぎはぎになりやすいので、論理をきちんと再構成して作成すること。文や段落をつなぐ接続詞には特に注意を払うこと。教科書や入門書は専門家（教員）から学生に伝える形式で書かれています。そのまま書き写すのではなく、あなたの理解度を教員に報告するつもりで書き直してください。インターネット情報から着想を得るのはかまいませんが、引用や参考文献は成書や論文など根拠を明示しているものとする。

第2回：教科書や参考書（各自、探す）を用いて調査をおこなう。今回の課題については、事前知識をあまりもたない読者を想定して分かりやすく解説すること。そのため、記憶の分子生物学的メカニズムについて詳述することは必ずしも必要でない。特に、自らが理解しないままに参考文献の記述を丸写しすることは、わかりやすいレポートの作成を妨げることになるので注意すること。

参考にした文献（教科書・インターネット情報を含む）には、番号を付し、「引用文献」としてレポートの末尾にリストアップする（以下の例2を参照）。本文中、文献を参照した箇所では、その文献の番号を示すこと（以下の例1を参照）。インターネット情報の引用は必要最小限とし、文献リストに掲載する際は、URLとともに、サイトにアクセスした年月日も明記すること。

〔例1：本文中での引用〕

…〇〇は△△を活性化させると考えられており^{1)・2)}、××による最近の研究結果もその考えを支持するものである³⁾。

〔例2：レポート末尾の引用文献リスト；書籍、論文、インターネット情報の場合をそれぞれ1)～3)に示す〕

引用文献

- 1) 池谷裕二（2001）記憶力を強くする。講談社。
- 2) 長田 乾、小松 広美、渡邊 真由美（2011）記憶障害。認知神経科学13（1）：118-132。
- 3) 日本教育工学会（2009）「論文テンプレート」<http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html> 2018年12月11日アクセス

第3回：まず、生物学の7章を良く読んでください。その上で、適切な参考書を自分で探して、レポートを作成してください。なお、インターネットの引用も認めますが、本文中に引用部分分かるようにした上で、参考文献欄にURLを明示してください。

◆成績評価方法

- ①レポートの評価、②実験スクーリングの評価、③科目試験の評価による総合評価が最終評価。

◆生物学の学び方

小野裕剛（法学部准教授）

自然科学・生物学を学ぶことの意義

本書をお読みになるかたは、志を持って通信教育部にご入学された方々と拝察します。通信教育部は文学部、経済学部、法学部から成っておりますから、「早々に専門科目を勉強したい」と意気込んでいらっしゃるのではないのでしょうか。そこへ総合教育科目、特に自然科学分野の履修を義務づけられると、「こんなものは早々にやっつけて……」と思いたくなるのも無理からぬことと思います。しかし、福澤諭吉先生は『物理学之要用』（この頃の「物理学」は化学や生理学を含む論理的な科学全般のことです）の中で自然科学分野の科目に見られる論理性が、全ての学問の基礎になるとのお考えを示され、「我が慶応義塾において初学を導くにもっぱら物理学をもってして、あたかも諸課の予備となすも、けだしこれがためなり。」とお書きになっています。皆さんには、科目の内容を学んで頂くのはもちろんとして、論理的に物事を考え、主張する訓練する機会としても有効に活用して頂きたいと考えています。

福澤先生の時代には、生物学は記載中心の博物学的学問でした。しかし現代では分子レベル（遺伝子や酵素）・細胞レベル・個体レベル・生態系レベルまで、そこに参加しているさまざまな“要素”の相互関係が実験によって解明され、論理的に解釈できる学問に変貌しています。さらに、取り扱われている内容は、生物であるヒトの生涯に関係することばかりですから、皆さんが社会人として「生・老・病・死」に向き合うときや、生態系の一員としてこれからの地球のことを考えるときなどに必ず役立つと考えております。

テキストの理念と概要

はじめに、この科目で使用している教科書について説明しておきましょう。この教科書は、日吉キャンパスで、文系学生向けに生物学を開講している教員が、それぞれの得意分野を分担執筆したもので、論理的・実証的に生命現象を解説したものです。様々な実験動物が「例」として登場しますが、基本的にヒトの生涯やヒトを取り巻く環境について説明するためのものだと考えてください。さらに、この教科書は、通信教育部に学ばれる皆さんが、仕事の合間でも時間を見つけて取り組めるように、見開きで一節が完結するように作られていますから、まずは少しずつ、全体に目を通すことを心がけましょう。1回読んだからと言って安心してはいけません。先にも触れたとおり、生命は様々な階層で多数の要素が複雑に絡み合って形成されているものですから、繰り返し読むことで、相関関係がわかるようになるのです。専門用語が多いと感じるかもしれませんが、数回読むうちに、自然と用語法が頭に入ってくるでしょう。以下に、各章の概要を示しますので、履修の参考にしてください。通信教育のテキストはページ数に制限がありますので、必ずしもすべての内容を網羅できていません。補助教材としてのサブテキストも指定していますので、併せて読んでください。

第1章は「生命の特性」と題して、生物学が課題としている分野の紹介と、基本的な考え方が示されています。哲学的な内容も含まれるので、馴染みにくいと感じるかもしれませんが、ここからスタートして、全体を読み通し、再び、第1章を読み直すと生物学の根底にあるものが理解できるでしょう。

第2章は「生物学における方法と技術」と題して、生物学が論理的な学問であるために採用している、実験方法や結論の導き方が示されています。この章をしっかり理解しておくと、「あたかも効果があるように宣伝する、怪しい健康食品」などにだまされない見識を身につけることができるでしょう。さらには、専門課程で論理を展開する基礎にもなります。

第3章は「遺伝と遺伝子」について説明します。遺伝子がどのように子孫に伝えられるかのみでなく、あなたの身体の中でどのように使われているかを学びます。このことを通して、先入観から不安な気持ちになりやすい、ガンや遺伝病などについても、正しい理解ができるように記載されています。

第4章は「細胞—その機能とダイナミクス」と題し、生命の最小単位である細胞がどのように「生きているのか」、その微細構造と機能について解説します。第3章の遺伝子と合わせて、高次生命現象を理解する基本になります。

第5章は「動物の身体と発生」です。私たちヒトをはじめとする多細胞生物において、細胞がどのように組み立てられ、個体としての機能を分担しているか、また、その構造はどのように作り上げられてくるのかを解説しています。様々な生物種を取り上げますが、その中に共通して存在する「身体作りの基本とは何か」という、究極の疑問にも迫る内容になっています。

第6章は「生体における情報伝達と調節作用のしくみ」として、多細胞の生命体が、調和のとれた個体として存在し続けるために必要なしくみ（ホルモンや神経による情報伝達、免疫系における異物の排除など）について解説しています。病気になったときなど、医師の説明を理解するための基礎知識としても役立つと考えています。

第7章は「生物多様性とその危機」です。生物多様性を維持すること、地球環境に対する負荷を低減することが必要であると言われるようになってきていますが、論理的な説明を求められると困惑してしまう方も多いのではないのでしょうか。この章では生物多様性の定義から始め、これを維持するために考えなければならない事柄について解説しています。

第8章は「ヒトと地球」・「人間と科学」と題して、現代に至るまでの生物の歴史を振り返ることを基礎とし、人間社会と科学技術がどれほどの影響力を持っているのかを考えます。遺伝子解析や生殖医療は多くの恩恵をもたらしますが、倫理的な問題も引き起こしかねません。皆さんが主役となって社会的合意を醸成していく基盤に

なると考えています。

レポートの作成

生物学においても、教科書を読んでレポートを提出することが履修の基本となります。急いでこなしてしまいたい方にありがちな取り組み方が、先にレポート課題を読んでから、関係ありそうな項目を探す、と言うやり方です。少なくとも生物学では、この方法で内容のあるレポートを書き上げることはできません。生物学が取り上げる問題は様々なレベルで、互いに関係がありますから、先に説明したように、繰り返しテキストを読むことから始めてください。

次に、『テキスト科目履修要領』に記載されている参考文献を読んでみましょう。この時も、すぐレポートに引用できそうな表現を拾い読みするのではなく、「著者の言いたいことを教科書の言葉に直すとどうなるだろう？」という観点で読み進めると良い理解につながります。

実際にレポートを書く段階で考えなければならない点は、通信教育のレポートはあなた（学生）の理解度を教員に示すためのものであるということです。この点で、新たな見識を世に問うために著される卒業論文や原著論文とは性格を異にするものだと言うことをはっきり意識しなければなりません。また、一般普及書（解説書）は、たとえ話や擬人化表現を用いて読者にわかりやすく内容を伝えようとするものですから、それをそのまま引き写すことは、あなたの理解度を示すことにはならないだけでなく、採点者である教員にとって失礼であると心に留めて取り組んでください。

今まで出題されている多くのレポート課題では、私たちが直面している複合的な問題を生物学的に説明すると（教科書の言葉・論理に分解すると）どうなるかが問われています。まず、取り扱う問題を仕分けし、教科書の表現と照らし合わせながら、論理的かつ理解度をアピールするように組み立てれば、おのずと「自分の言葉で」書かれたレポートが完成するはずです。

長文のレポートを書けば、長く引用すれば、必要な項目が含まれるだろうと言うような、安易なレポートはすぐにわかります。指示された文字数を守り、必要にして十分な内容となるよう心がけてください。

引用に関しては、他所で書かれていることの繰り返しになりますが、必要最小限としてください。多少改変したとしても、引用同士の接続詞で繋いで切り貼りすることは避けてください。原文のまま引用しない時でも、どこからその情報を入手したか、参照先を明記してください。インターネット情報（ウィキペディアなど）を参照すること自体は否定しませんが、他の資料で裏付けを取る習慣をつけましょう。

実験スクーリング

生物学の単位を取得するには、夏期スクーリング二期分の実験を受講する必要があります。各期（A・B）の履修は順不同で、年度をまたいでもかまいませんが、必ず異なるクラスを履修してください。参加型の授業ですから、欠席が多いと単位認定できません。無理のない計画で臨んでください。毎回、実験の背景や手法に関するガイダンスがあります。遅刻してガイダンスを聞かずに実験をすると、内容が理解できないだけでなく、周りの受講生の迷惑になりますから、時間厳守で参加してください。その時間内で仕上げて提出する実験レポートが科されます。

自然科学科目（生物学・物理学・化学）に実験が組み合わせられているのは、実際に体験することによって、教科書の内容に対する理解を深めるためであり、慶應義塾の特色の一つになっています。実験スクーリングの受講に抽選があるためか、実験スクーリング会場で「教科書を開いたことがない」・「教科書を持参していない」という学生さんに出会うことがあります。このような状態では、教科書の学習と実験スクーリングが分断されてしまい、相乗効果を発揮できません。可能ならば、レポートに取り組んでみてから、少なくとも、教科書を一読してから実験スクーリングに参加されることを期待しています。レポート課題にふれ、考え始めておくと、スクーリング時に的確な質問ができるので、スクーリングの機会を有効に活用して頂きたいと思っています。

科目試験を迎えるに当たって

履修の最終段階として、科目試験があります。この科目の方針として、科目試験は教科書に沿った出題をすることにしています。こう書きますと、「やはり生物は暗記科目である」と早合点をなさる方がいらっしゃるかもしれませんが、そうならないように、できるだけ論理を問うような設問を心がけています。持込不可となっていますから、多少の用語は記憶しておく必要があるかもしれません。しかし、レポートと実験スクーリングに真剣に取り組んだ方であるなら、苦にならないと考えています。

（2010年4月1日執筆、2016年4月1日一部加筆修正）

英語Ⅰ

2単位

A045-0001

◆講義要綱

英文法の正確な知識を持つことは、読解においても作文においても会話においても大きな力となることは言うまでもありません。この科目では、文の構造・八品詞から始めて短い文章を文法的見地から精読し暗記することで、英文で発信された情報を正確に受信できる能力を涵養することを目的にしています。併せて、受講生諸君は多くの英文を読むことで、その知識を確かなものとして定着させてください。英語の学習には、なにより勤勉な学習態度が要求されます。テキストの「はしがき」「本書の構成」「今後の学習のために」に科目担当者の信念と方法が記されています。まずはそれを熟読してください。

◆参考文献

テキスト pp. 237-38 の「今後の学習のために」を参考にしてください。なお自習用として、次の書籍も役に立ちます。

小宮繁、小菅隼人『学びなおし English』慶應義塾大学出版会、2016年

◆レポート作成上の注意点

単に解答のみを書くのではなく、指示に従ってできるだけ詳しく説明を加えること。

全てに解答していないレポートは採点しません。文字はていねいに書いてください。判読が困難なレポートは大幅に減点します。

◆成績評価方法

科目試験による。

英語Ⅱ

2単位

A047-0101

◆講義要綱

●第Ⅰ部 文法・作文

本科目の目的は、英語を実際にコミュニケーションの道具として使っていく際に、どうしても身に付けておかなければならない英文法の基礎知識を学習することにある。

●第Ⅱ部 リスニング・スピーキング

本科目の目的は、第Ⅰ部で習得した英文法の基礎知識を、実際に、リスニングとスピーキングの中で応用する力を身に付けることにある。

◆履修上の注意

●第Ⅱ部 テキストの第Ⅰ部「文法・作文」をよく学習すること。

◆参考文献

辞書はできるだけ刊行後5年以内のものを使用すること。

◆レポート作成上の注意点

〔第1回〕〔第2回〕問題文をしっかり読んで、その通りに解答すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

英語Ⅲ

2単位

A046-0001

◆講義要綱

『英語Ⅲ』の主な目標は、時事的なトピックを扱う英字新聞や現代人の抱える諸問題に取り組む著述家の作品に触れることによって、リーディングの能力を向上させることです。記事やストーリーを楽しみながら、知らず知らずのうちに様々な英語の言い回しを学び、ボキャブラリーを増やして、英文の読解力を養うことができます。

PartⅠは、受講者に多読の習慣をつけてもらうことを目的としました。新聞記事をテキストの一部に採用することによって、英字新聞に親しんでもらえればと思います。また科目試験では、問題作成時の大きなニュースを出題する予定です。テキスト外からの応用問題となるので注意してください。

フィクションの部では娯楽性に重点をおいて選択しました。英語Ⅲのテキスト本文僅か100ページ足らずを読んで、即英語ができるようになるわけではありません。文庫本を読むような感覚で、英語のペーパーバックが読めるようになって欲しいと思います。そのための導入になるようにと編集したつもりです。

PartⅡでは、イギリス人作家1名、およびイングランド在住のアイランド人作家2名の作品を収録しています。最初の作品—ジョージ・オーウェル「象を撃つ」はルポルタージュで、歯切れのよい直截的な表現を特徴としています。次にウィリアム・トレヴァーの短編「中年の出会い」は、フラッシュバックの手法を用いながら、男女の邂逅による出来事を心理の裏に入って巧みに描写しています。そしてエドナ・オブライエンの小品「暗黒の時間のなかで」は、初めて大都市ケンブリッジを息子と共に訪れた作者が、女性特有の感性でその印象を綴っています。

客観的な情景、作中人物の意識の推移、会話の部分などが融合していることがあります。テキストの解説を参照し、ストーリーの概略を把握した上で、作品の文脈に注意しながら読んでください。

◆履修上の注意

この科目は、中学・高校時代のベーシックな英文法の輪郭を習得した学習者なら、誰でも履修できます。仮定法、関係代名詞、主語・動詞の倒置などに留意しながら、少しずつ読み進んでください。

センテンスが長いときには、意味のまとまりごとに、鉛筆で斜線を入れるなど、自分で工夫してみましょう。

◆参考文献

Wayne I. Phillips ほか著『アメリカの文化と社会』成美堂（文章構成の把握、語彙の増大に便利。）

◆レポート作成上の注意点

レポートでは、どの程度、テキストの英文を理解できているかについて試す問題が出されています。いずれも基礎的な知識を問う問題で、比較的容易に理解できるものばかりですが、作品全体を読んでいないと難しいかもしれません。和訳に関する質問では、名訳を期待しているわけではありません。語学的に正確な、日本語として分かりやすい文章を書くように心掛けてください。

- ◆成績評価方法
科目試験による。

英語Ⅶ	2 単位
A031-8901、W8976	

- ◆講義要綱
数十ページにおよぶ長い英語の文章を読んで、それを的確に理解できるようになることを目標としています。
- ◆履修上の注意
英文を読むためには、英文法の基本的な事項をひと通り習得しておくことが是非とも必要です。
- ◆参考文献
英文法が未習得の方には、参考書として『総合英語 Evergreen』（いいずな書店、2017年）を推薦します。
- ◆レポート作成上の注意点
英文和訳の設問は、翻訳の技術ではなく、英文の構造と内容の理解を試すためのものですので、その点に留意して解答を作成するように心がけてください。
- ◆成績評価方法
科目試験による。

ドイツ語第一部	2 単位
A064-1601	

- ◆講義要綱
第一部は初級文法の前半を扱います。具体的な文法事項は発音、動詞の現在人称変化、冠詞と名詞、不定冠詞類、定冠詞類、人称代名詞、前置詞、名詞の複数形、動詞の現在人称変化（特殊）、話法の助動詞、未来形、接続詞、定形後置、zu 不定詞句などです。教科書をよく読んで、基本を身につけてください。また、辞書を活用して、ドイツ語を単なる単語の羅列ではなく、意味のある文章として理解するよう心がけてください。
- 第1回レポートはテキスト1～8課、第2回レポートはテキスト9～15課を対象としています。言うまでもなく学習内容は積み重ねなので、第2回は第1回の範囲を修得していることを前提としています。
- ◆履修上の注意
テキストを熟読し練習問題により習熟を図るのはもちろんのこと、市販の文法参考書・問題集の類も適宜併用してください。また、とりわけ品詞分類や構文に留意しながら独和辞典をひく習慣をつけることが大切です。
- ◆参考文献
尾崎盛景・稲田拓『ドイツ語練習問題3000題』白水社
- ◆成績評価方法
科目試験による。

ドイツ語第二部

2 単位

A065-1601

- ◆講義要綱
第二部は初級文法の後半を扱います。
- 第1回レポートはテキスト1～7課（形容詞、数表現、分離動詞、非分離動詞、再帰表現、動詞の3要形、過去形、完了形など）、第2回レポートはテキスト8～15課（分詞、非人称表現、受動態、関係代名詞、接続法など）を対象とします。第2回は第1回の範囲を修得していることが前提です。
- ◆履修上の注意
上記の内容を理解するためには、第一部の知識が前提となります。不明な点がある場合は、必要に応じて第一部へ立ち戻り、その都度確認してください。また、辞書を活用して、ドイツ語を単なる単語の羅列ではなく、意味のある文章として理解するよう心がけてください。
- ◆成績評価方法
科目試験による。

ドイツ語第三部

2 単位

A056-0901

- ◆講義要綱
『ドイツ語第一部』および同『第二部』で学んだ基本的な文法事項に関する知識を用い、『ドイツ語第三部』ではドイツの社会や文化に関するさまざまな話題を取り上げたテキストを読みます。その際、ドイツ語の基本文法がしっかりと頭に入っていることが何よりも重要です。そのため、テキストには「文法の復習」コーナーが設けられています。また、必要に応じて『第一部』と『第二部』のテキストも読み返しながらレポート課題に取り組んでください。
- ◆テキストの読み方
各課のドイツ語のテキストを、まずは辞書をきながら独力で日本語に翻訳してみましよう。意味不明の日本語になった場合は必ず何かを間違えています。動詞の形や名詞（句）の性・数・格を確認することが大切です。文法事項でわからない点については「文法の復習」コーナーの解説を読んでください。
- ◆履修上の注意
『ドイツ語第一部』および『同第二部』レベルの文法を理解していることが履修の条件です。
- ◆参考文献
常木実『標準ドイツ語』郁文堂、1996年、2700円（税込）
（初級から中級までをカバーする参考書です）
中島悠爾・平尾浩三・朝倉巧『必携 ドイツ文法総まとめ 改訂版』白水社、2003年、1728円（税込）
（主として中級から上級レベルを対象とするドイツ語文法一覧です）
- ◆レポート作成上の注意点
文法事項に関する問題は、『ドイツ語第三部』のテキストに書かれている説明をよく読んだ上でこれに取り組んでください。

和訳問題では、出来上がった日本語の文を自分で読んでみて意味がきちんと通じるかどうかを確認してからレポートを提出してください。

独訳問題で多い誤りは、動詞定形の位置、冠詞や形容詞の語尾、前置詞の格支配など。ごく初歩的なものが多いので、常に初心にたちかえって復習を重ねましょう。

◆成績評価方法

科目試験による。

ドイツ語第四部

2単位

A028-8802、A8784

◆講義要綱

ドイツ語第四部はすでに初級、中級の段階をクリアした学生を対象にしたいちばんレベルの高い科目です。卒業論文作成のため資料蒐集のできるレベルを目標にしています。レポートにとりかかる前に初・中級の文法事項を総復習して、再提出を繰り返さないよう留意して下さい。ことに分詞構文や冠飾句、接続法を用いた文章などに慣れるように努めるとともに、文章全体の要点を把握する力をつけて下さい。

◆履修上の注意

配布テキストの文法事項は何度でも読み返し、完全に身につけて下さい。ドイツ文にしばしば使われる形容詞の名詞化、冠飾句などに慣れて下さい。

◆参考文献

岡田公夫ほか『基礎ドイツ語文法ハンドブック』三修社、2004年

中島悠爾ほか『初心者のためのトレーニングドイツ語』白水社、1994年

小栗浩『独文解釈の演習』郁文堂、1961年

岩崎英二郎『ドイツ語副詞辞典』白水社、1998年

中山豊『中級ドイツ文法』白水社、2007年

『独和大辞典』小学館

◆レポート作成上の注意点

シラバスにも書きましたが初級文法は完全にマスターしておいて下さい。これまでの添削の経験ではまだこれが充分できていない方があり、レポートの書き直しを繰り返すことは時間的にも労力の上からも不利であり、添削する側も残念です。関係代名詞や従属接続詞の及ぶ範囲、接続法の用法を無視したレポートが多いようです。丹念に辞書をひき、かつ常識を働かせることは訳文にあたって当然のことながら重要です。

◆成績評価方法

科目試験による。

フランス語第一部

2単位

A062-1501

◆講義要綱

『フランス語第一部』は、読む・書く・話す・聞くの4つの能力をバランスよく養う目的で書かれた、フランス語初学者のための教科書です。独学でフランス語を始める通信教育課程の学生に向けて、通常の文法教科書よりも解説を丁寧にし、練習問題も多くしてあ

ります。頑張って最後までやり遂げれば、フランス語の発音と語彙、文法の基礎は身につくでしょう。

学習を進めるに当たっては、次のことに注意してください。

○言語の修得には、**定期性**と**継続性**が肝要です。しかし、授業に通うのと違い、自宅での学習ではこの2点を確保することが難しいものです。例えば「週に1課ずつ進んで、ほぼ1年で全課程を終える」などの計画を立て、一定のペースで持続的に学習しましょう。

○教師につく場合と異なり、独習の場合は言語の音声的実態に触れることが疎かになりがちです。付録のCDの発音を聞き、必ず自分で**大きな声**で発音して、フランス語を身体的に修得しましょう。

○それぞれの課の冒頭で、〈例文〉あるいは〈対話〉が示されます。これらの文は学習の基本をなすものです。繰り返し読み、聞き、また書き取って、**全文を暗記**しましょう。そうすることで、単語もスムーズに覚えらるるはず

○練習問題等は、少し分量が多いですが、全て実際にやってみましょう。答え合わせをし、間違ったところを直して、それぞれの課の理解を固めてから、先に進んでください。

○この教科書は、新しい語彙が出てきたときには意味とともに示してありますので、基本的には辞書を用いなくても勉強できるようになっています。単語帳などを作成し、語彙を確実に増やしていきましょう。掲載した単語は、現在使用されているフランス語における頻出度を踏まえ、精選したものです。

○科目試験において、試験範囲に教科書の付録(p.212-217)は含まれません。

◆履修上の注意

フランス語の予備知識は必要ありませんが、教科書は高等学校修了程度の英語の知識を前提として書かれています。とくに、基本的な英文法の用語（他動詞、自動詞、目的語、関係代名詞など）を知らないと、理解が困難となる可能性があります。

◆参考文献

代表的な仏和辞典としては、
『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社
『クラウン仏和辞典第七版』三省堂
があります。

本科目ではこれらの辞書を使う機会はあまりないでしょうが、今後もフランス語を続けて学習する際には必須の文献ですので、買っておいたほうが良いでしょう。

◆レポート作成上の注意点

第1回 第1節～第8節

第1回のレポートは教科書の復習と和訳を中心とした課題です。教科書の第8節までを範囲とします。教科書の指示通り第8節までを終えてから、レポートに取り組んでください。

第2回 第9節～第15節

第2回のレポートは和訳を中心とした課題です。教科書の第9節から第15節までを範囲とします。ただし、第8節までの語彙と文法事項を修得していることも必要なので、教科書全体をよく理解してからレポートに取り組んでください。

◆成績評価方法

科目試験による。試験では、和訳に限らずフランス語の総合的な能力を問います。教科書とレポートの例文も多く出題されますので、それらを中心に学習してください。

フランス語第二部

2 単位

A036-9501

◆講義要綱

フランス語第二部の教科書は、第一部で学んだ文法の知識を実際の文章の中で確認し、また、学習者自身でも活用してフランス語で表現できるようにする事に目標が置かれています。教科書の第1章は、フランス語の文法が日常生活の表現ではどのように活用されているかを見、それに慣れる為に、多くの会話文を読む事になります。一方、第2章では、フランス語の文章を正確に読み抜く為に必須の文法事項の習得と、それらの知識を基にした読解が中心になります。この教科書で学ぶことは、フランス語第一部の教科書と併せて、今後、フランス語第三部、第四部での基礎になりますからしっかり勉強しましょう。

◆履修上の注意

「フランス語第一部」を履修し終えていること。またはそれに相応するフランス語力を有していることが、履修の条件です。

◆参考文献

新倉俊一他著『フランス語ハンドブック』白水社、1996年

朝倉季雄著、木下光一校閲『新フランス文法事典』白水社、2002年

◆レポート作成上の注意点

フランス語第一部の教科書を参照しつつ、フランス語第二部の教科書にまんべんなく目を通すことが大切です。こうする事が、レポートで合格点を得る為の近道です。急がば回れ、と云う事です。

◆成績評価方法

科目試験による。

フランス語第三部

2 単位

A057-0901

◆講義要綱

本科目は講義科目ではないのでいわゆるシラバスはありません。学習の目的についてだけ述べておきます。

第一部と第二部で習得した文法知識を基に、生きたフランス語の読解力を高めるステップです。断片的な文法知識を総合的に駆使し、読解力向上の訓練をする素材としてレポート課題を設定してあります。難しいと思われるかもしれませんが、ここでの訓練は科目試験での得点に直結します。科目試験合格の目安は、どれだけ課題レポートで頑張ったかにかかっていると言ってもいいでしょう。フランス語に限らずどの言語でもそうですが、辞書を丹念に引くことは当然ですが、書かれている内容についての知識や旺盛な想像力がないと理解できないこともあるので、一般常識の獲得を

始めとして、日頃から全方位的な知性を磨いておくことも重要です。

◆テキストの読み方

常時第一部と第二部のテキストを手元に置き、随時参照するようにしてください。第三部テキストは日常、単独で行う訓練の素材として活用してください。

◆履修上の注意

とにかく機会あるごとに基礎文法（第一部）を徹底的に復習すること。辞書を丹念に引くこと。日本語の表現力を磨くこと。第三部テキストに基づいて学習することが必要不可欠です。

◆参考文献

外国語読解力の向上の決め手は、良い辞書との出会いです。次の辞書をお薦めしておきます。小学館『小学館ロベール仏和大辞典』、旺文社『ロワイヤル仏和中辞典』、三省堂『クラウン仏和辞典』、白水社『ディコ仏和辞典』、等々。なお、最近は電子辞書が流行していますが、動詞の活用を確かめることはもとより、語彙の「全体を見渡す」ためにも、上記辞書も紙媒体版の方を1つ用意してください。最近、電子辞書のスクロール不足による出鱈目なレポートが多いので注意すること。

◆レポート作成上の注意点

まずは辞書を徹底的に引くこと。構文を正確に把握すること（特に主語と述語動詞をはっきりさせること）。いろいろな代名詞（人称代名詞・関係代名詞・指示代名詞・中性代名詞）が何を受けているかをはっきりさせること。動詞の時制に注意すること。訳文が出来上がっても自分で読み返してみて、日本語として意味が通らないうちは、正しく訳せていないということです。提出してはなりません。

◆成績評価方法

科目試験による。

フランス語第四部

2 単位

A061-1402

◆テキスト

この科目のテキストは、2018年4月に改訂されました。改訂後の新しいテキストで履修してください。改訂されたテキストの入手方法は、『塾生ガイド』を参照してください。

◆講義要綱

フランス語第四部は最も上級のレベルとなり、フランス語の総合的な運用能力習得を目指します。第四部の目標は3つです。はじめにフランス語で書かれた文書を正確に理解すること。次にフランス語の問いに的確に答えること。最後にフランス語で様々なことを伝えることです。具体的には課題文に対する質問への答えと日本文の仏訳をレポートとして期間中、2回提出してもらいます。

フランス語を正確に、そして的確に運用するには、動詞などの個々の品詞をどのように変化させるのか（形態論）、主語と動詞の関係など文の構造をどうすれば良いか（統辞法）また自分の伝えたい内容にふさわしい語はどれか（語彙）などという点を総合的に考察する必要があります。第四部のレポートでそのコツを

つかんでください。

◆履修上の注意

今まで勉強した文法事項を何度も読み返し完全に習得して下さい。さらに、言語の背景となっているフランス文化に関心を持つことが大切です。フランスの新聞、雑誌、小説等を積極的に読み、語彙、表現を学びながら、幅広く豊かな知識（歴史・現代社会・文化・文学・時事問題等）を身につけましょう。レポート作成、科目試験に役立つと思います。

◆参考文献

彌永康夫著『時事フランス語 読解と作文のテクニック』大修館書店、2011年

伊吹武彦編『フランス語解釈法』、白水社、2006年

嶋崎正樹『時事フランス語』東洋書店、2010年

原田早苗・水林章・萩原芳子・田島宏著『コレクション・フランス語〈7〉書く』、白水社、2002年

東京都立大学フランス文学研究室編『フランスを知る―新フランス学入門―』、法政大学出版局、2003年

鳥居正文・金子美都子・田島宏『コレクション・フランス語〈8〉語彙』（CD付・改訂版）、白水社、2007年

三浦信孝・西山教行編著『現代フランス社会を知るための62章』（エリア・スタディーズ84）、明石書店、2010年

◆レポート作成上の注意点

これまでフランス語で自分の考えを表現する機会は少なかったと思います。レポートを作成しながら、自分の書いた文章を何度も読み返し、出来るだけ自然なフランス語で表現してみましょう。

◆成績評価方法

科目試験による。

A053-0704

◆テキスト

この科目のテキストは、2018年に改訂されました。改訂後の新しいテキストで履修してください。改訂されたテキストの入手方法は、『塾生ガイド』を参照してください。

◆講義要綱

人生の基本は健康であり、人生80余年を健康で有意義に過ごすためには最新の医学知識を学び、いろいろな病気を予防・治療していくことが肝要です。また、親あるいは教育者となった場合には、将来を担う子供たちに正しい知識を教える必要があります。あらゆる面で情報の多い現代では、医学情報に関してもエビデンス（科学的根拠）に基づかないあやしい治療や「薬もどき」もたくさんあります。この「保健衛生」のレポートを通じ、エビデンスに基づいた正しい知識を身につけ、それを実践できるようになっていただければ幸いです。

◆テキストの読み方

項目ごとに精読し、索引などを使い関連項目も学習する。疑問点に関しては、教科書的な本と最新の文献

を調べる。

◆関連科目

「体育理論」

◆参考文献

『きょうの健康』（NHK 出版）など。

◆レポート作成上の注意点

- (1) 2000字以内とは、課題や参考文献の記載を除いた本文がスペースを含んで1800字～2000字で完成させるという意味を考えてください。スペースのあけ方は常識的に行ってください。
- (2) 参考文献は各課題についてテキスト以外に3編以上、出版年は10年以内のものとし、必ず各課題の本文の後に記載してください。「保健衛生」テキストは精読していることが前提ですので、参考文献には記載不要です。その他の参考文献もエビデンスに基づいた信頼できるものを選び、少なくとも1編以上は成書を用い、インターネット利用の場合でも成書または学術誌がPDF化されたものを優先し、出所を明らかにしてください。
- (3) 『理科系の作文技術』（木下是雄著、中公新書）などを参考に、レポートを作成してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆保健衛生の学び方

まずは正しい知識を

昨今、医学情報はあらゆる手段を用いて入手可能です。しかし、医学を専門とする我々が見ても、「これはどうなのかな？」と首をひねるような情報も散見されます。したがって、まずは基本的な正しい知識を確実に身に付ける必要があります。「保健衛生」はまさにそのために有効利用していただきたいと思います。

テキスト「保健衛生」は、できるだけ最新の情報を正しく提供すべく2018年に改訂を行いました。しかし、医学の進歩はめざましく、執筆終了時点ですでに新しい情報が出てきている場合も珍しくありません。さらにそれが本当に正しいことなのかどうかの評価には通常ある程度の時間がかかります。また一方で、我々が以前習ったことが、その後時間を経て大きく変わってしまうことも珍しくありません。例えば、「白衣高血圧（診察室などの医療環境では高血圧を示すが、家庭などの医療環境以外では正常血圧を示す）」は、当初、正常血圧とほぼ同等に予後良好とされていましたが、長期の観察データが報告されてくると、必ずしもそうとは言えず、持続性高血圧ほどではないにしろ、最近では正常血圧の方よりは脳・心血管疾患になりやすいと考えられるようになりました。このように医学の分野では、ある時点で教科書に載っていたような内容が、後に覆ることが時にあるということを理解しておく必要もあります。

最新の知識はどのように得たらよいか

皆さんは日々の生活で何気なくインターネットを利用していると思います。インターネットで得られる情報は、新しいものもあれば、古いものもあります。一方で、最新と称する情報でもまだ十分な検証がされていない情報であることもあります。こうした様々な情報を本当の意味で有効活用するには、その項目に関する最低限の正しい知識が必要です。最低限の基本的な知識を持っていれば、たとえ正反対の内容を目にしても、全く反対の考え方もあるのだという理解ができ、それ程大きな問題が起こることもないのですが、そうでない場合、誤った情報を基本的な考えと思ってしまうおそれがあります。その点では書籍に関しても同様です。まずはテキスト「保健衛生」を読んで、基本となる知識を身に付けてください。

なお、インターネット上の情報でも、国の機関が出している情報に関しては、きちんとした統計データが定期的に出されていることが多く、信頼性が高いと考えてよいと思います。しかし、それ以外では情報源、あるいはその記事の執筆者がきちんと記載された情報を選ぶべきです。情報源が明らかであれば、その機関や執筆者が他にどのような情報を出しているのか、普段どのような活動をしているのかなどがわかります。

レポートの作成にあたって

履修の第一歩は、テキスト「保健衛生」を読み、出された課題についてレポートを提出することです。内容のある良いレポートを作成するためには、出された課題で問われる内容だけではなく、まず課題に関連するより広

い範囲を学習した上で、改めて課題にそってまとめるという作業が必要です。

実際のレポート作成にあたっては、再度「レポート作成上の注意点」を確認していただきたいと思います。これまでに提出されたレポートではこれに従っていないものが数多く見られています。「レポート作成上の注意点」を守られていないレポートは、内容を評価する以前の問題として、その時点で「不合格」になってしまうものと考えてください。

また、字数に関しては、2,000字以内、1,800～2,000字でまとめるように規定しています。これは、いろいろな情報からの単なる切り貼りではなく、その情報の中で何が重要なのかを自分で考え、自分の言葉で字数内にまとめる能力を見たいからです。レポートで我々が評価しているのは、皆さんの理解度です。是非この点に十分留意してレポートを作成してください。

夏期スクーリングでは

毎年夏に行われるスクーリングでは、それぞれの専門分野を持つ複数の専任教員による、最新情報をまじえた講義を行っています。前述の通り、医学の進歩はめざましいため、この機会を有効に利用して正しい最新情報を得てください。試験は持込不可で、担当者全員の範囲から、ぜひ知っておいていただきたい内容についての重要語句や数値などを記述してもらう形で行っています。

科目試験に向けて

履修の最後のステップは、科目試験です。現在、年4回、持込不可で行っています。基本的にはテキスト「保健衛生」を読んで十分理解していればできる内容で出題しています。すなわち、細かな医学用語を覚えることは求めていませんが、一般的にも知られているような用語はある程度覚えておく必要があります。できるだけ、あるテーマについて自分で考えて記述してもらう問題を出すようにしています。

◆講義要綱

体育学は、人間の身体活動を対象とした応用科学であり、その範疇は広く人文・社会・自然科学全てに及びます。本科目は、人間の行う身体活動の意味を幅広く理解することを目的とするものです。健康で豊かな日常生活のための身体活動について、その現代的意義を考え、また運動として実践するための基礎的知識を得る、さらにスポーツ・運動が人間の社会にどのように根付いてきたか、その文化的背景などについての理解を深めていきます。

レポート課題は2題の中から1題の選択としますが、試験においては全範囲にわたって総合的な理解を求めます。

◆テキストの読み方

各章の最後にあげた参考文献を補助的に用いて、テキスト本文の理解を深めてください。「体育理論の学び方」も参考にしてください。

◆参考文献

- 玉木正之『スポーツとは何か』講談社現代新書、1999年
 安部孝・琉子友男編『これからの健康とスポーツの科学第四版』講談社、2015年
 宮下充正『トレーニングの科学的基礎（改訂版）』ブックハウスHD、2007年
 杉晴夫『筋肉はふしぎ』講談社ブルーバックス、2003年
 勝田茂『入門運動生理学第3版』杏林書院、2007年

◆レポート作成上の注意点

3000字～4000字を目安とし、参考にした文献を明記してください。引用した場合、必ず文中に注・番号を入れ、文末に文献名・引用頁を明示して対応させてください。自身の主張と文献からの引用を区別して論述を展開するように心掛けてください。本書「学習の手順」の中の「レポート作成上の注意」を確認してください。特に「参考文献の使用」を熟読願います。

◆成績評価方法

科目試験による。

◆体育理論の学び方

村山光義（体育研究所教授）

「体育理論」のテキストを見て、色々な内容が盛り込まれ大変そうだ、と感じた人がいるかもしれません。しかし、その幅の広さこそが体育学の特徴であるとともに、幅広い学問の応用によってその内容を理解することができます。従って、決して難解なものでありませんので、興味を持っていただきたいと思います。ここではそのテキストの内容を解説するとともに、学習のポイントをあげてみたいと思います。

「人間は生まれながらに動く「身体」を持っている」とは、テキストの冒頭に述べられている言葉です。体育学は幅が広いと述べましたが、この身体を持った人間を様々な角度から理解しようとするのが体育学といえます。人間（自分自身・他者・その社会）にアプローチする大切な視点が身体であり、そのために哲学、歴史、社会学、心理学、生理学、医学、工学、教育学、など様々な方法論が有効となります。言い換えれば、人文・社会・自然科学、それらの複合的科学、のそれぞれから身体を見つめることができます。そして体育は、個々の学問の単なる寄せ集めではなく、身体を通じた運動実践の場、経験の場が存在することで有機的に関係付けられています。このように、多様な学問の応用・発展によって体育理論の内容が形成されています。まず、このことを頭に置いて学習をスタートしてください。

次に、テキスト全体の章立てを見てみましょう。まず、第1章「体育学とスポーツ文化」は、体育理論の概要をまとめていますので、本説明と同様に体育学の全体像を把握する手助けとなるでしょう。次に、第2章～7章が展開されています。これらの章は、大きく3つの分野に分けて見ていくと学習しやすいでしょう。つまり、第2章と7章（①）、第3章と4章（②）、第5章と6章（③）という3つの構成です。

まず①の第2章「身体のとらえ方」は、身体にまつわる歴史的な内容や体育・スポーツの成り立ちが含まれています。これは、社会の中の「身体」に関する説明であり、第7章の「スポーツ文化論」へと発展します。次に②の第3章「身体の仕組みとはたらき」と第4章「身体の変化」では、筋肉や骨、神経などの身体を構成する組織の説明と、運動によるその変化についてまとめられています。つまり、身体そのものの解説といえます。最後に③の第5章「運動技能と学習」と第6章「身体の管理」は、②で述べた身体機能を基礎に、実際に運動やスポーツをする際の話題となります。第5章では運動がうまくなるためのトレーニングをする過程で必要な知識、第6章では健康観や健康管理、また運動やスポーツをする上で必要な知識についてまとめられています。つまり、②に示された身体の機能をトレーニングによってどのように高めるか、どのように快適にスポーツを行うのか、といった実践的内容になっています。

体育理論の試験問題は、おおよそ上記の①～③を網羅した3分野から出題されています。範囲が広いように感じるかもしれませんが、おおまかに3つの分野ごとに理解を進めるとよいでしょう。また、レポート課題もこの3つの分野から出題され、1題を選んでもらいます。従って、まず1分野はレポートの作成過程で十分に理解を進めることができます。そして、他の分野との関係を考えながら、学習の幅を広げてください。テキストには太字のキーワードも示されています。また、章末には「課題」として質問も挙げられています。これらによって各分野の要点を理解するのもよい方法でしょう。では、もう少し具体的に、3つの分野のポイントを見ていきましょう。

まず、上記で②としてまとめた、身体の構造や機能に関する第3章と4章です。この範囲はまず身体そのものを見ていますので、骨・筋・神経といった、身体運動を行う上での基本的要素の構造と機能が説明されています。

運動は骨の連結である骨格の回転などによって生じているのですが、それを実際に行っているのは筋肉です。筋が収縮することで力が発生し、関節の運動が生じたり、身体が外部に対して仕事をしたりします。筋収縮のためにはエネルギーが必要で、エネルギー供給システムには呼吸による酸素の交換や、血液の循環による代謝物質の交換なども関係しています。また、その筋収縮は脳を司令塔とした神経のシステムでコントロールされています。このシステムが人間を成長させています。幼児期までは特に脳―神経系の発達が著しく、あらゆることを吸収し、できないことができるようになる時期です。成長とともに、さらに運動の刺激が与えられることにより、多くの運動様式を獲得して動きのレパートリーが増えます。さらに、筋力や持久力などエネルギーを発揮する能力も向上します。また、成長後には加齢に伴い身体機能は低下の方向へと変化します。われわれの一生にはこうした身体の変化があり、身体への刺激として運動が深くかかわることを理解しましょう。

「体育」はその字が示すようにからだを育むことです。皆さんも体育といえば体を動かす運動やスポーツをすぐに思い浮かべることでしょう。慶應義塾の創始者である福澤諭吉先生も「まず獣身を成して後に人心を養え」とおっしゃり、人として事を成すにはその基本となる身体を鍛える必要性を強調されています。また、知育・徳育・体育と言われるように教育において体育の視点は大変重要です。このように、「身体」を育むことは人間の生活の基盤となるべきものです。では、どのように運動やスポーツを实践すべきなのでしょう？ その点が、③としてまとめた第5章、6章に説明されています。年齢や環境などの違いによる様々なライフステージに応じて、身体活動を行うことにはそれぞれに大切な役割を持ちます。運動やスポーツは、われわれを常に変容させてくれます。慶應義塾の元塾長小泉信三先生の有名な言葉にもあるように「練習は不可能を可能にする」のです。できないことができるようになる、できるように努力をすることの楽しさや面白さ、生涯にわたる生きがいや学習意欲（やる気）の創出と健康な生活の維持等々、身体を変容（維持）させる活動は「人間らしさ」の源となります。

第5章では、トレーニングによって技能を獲得する際の方法や指導上のポイントなどがまとめられています。「動機づけ」の方法なども示されています。運動の楽しさを継続するばかりでなく、やる気を持って充実した生活を送るためのヒントとなる重要な説明です。さらに、第6章では、健康な生活を送るために運動をどのように実践すべきか、という視点で説明がなされています。無理なトレーニングによって怪我をしたり、的外れな内容を繰り返してかえって逆効果となることも少なくありません。トレーニングにはどのような原理・原則があるのか、トレーニング前後にはどのような点に注意すべきか、「ストレッチング」や「応急処置・RICE」の方法等、実践的な対処法や課題を知ることが重要です。また、健康な生活につなげるためのトレーニングとはどのようなものか、健康をどのようにとらえるか、「ウェルネス」や「体力」の概念とともに読み取ってもらいたいと思います。

最後に、①としてまとめた第2章と7章の内容について見てみます。すでに述べたように、この部分は「社会の中の身体」に関する内容といえます。ここで、身体を育む「体育」に対して、社会の中に文化として存在する「スポーツ」の対比が大変重要になってきます。体育とスポーツは同一ではありません。身体活動として重なる部分、人間の社会的成長を促す部分など、類似している事柄もたくさんありますが、スポーツはもはや政治・経済のツールとしての機能を持っています。現代では、体育とスポーツの違いや相互関係を知ることが体育理論の理解を深める上で必要不可欠と考えられます。

第2章では、歴史上、身体というものがどのようにとらえられてきたかが西洋・東洋・我が国ごとにまとめられています。これは、歴史および哲学的な課題でもありますし、実は宗教的な問題とも無関係ではありません。身体と精神は別のものなのか、1つのものなのか、この命題は神への信仰と深く関わってきました。精神や魂こそが神に通ずる価値を持ち、身体は精神の宿る単なる「器」にすぎないとして軽視された時代もありました。しかし、魂と同時に身体を鍛えることが必要であることは、自明のことでありました。こうした身体観のもとに、体育やスポーツが発展してきました。この点を踏まえ、第7章でスポーツ文化の成り立ちと変化についてまとめられています。スポーツの起源と「遊び」の関係、スポーツの各国での発展、現代のスポーツの象徴でもある「オリンピック」、スポーツが抱える社会的問題など、社会とスポーツの関係について解説をしています。

さらに、第2章と7章では「身体知」というキーワードで体育とスポーツの関係について説明が加えられています。情報化社会が進む現代と未来において、バーチャルリアリティが主要になればなるほど、われわれは自らの身体を実感する必要が生じます。「身体的な活動こそが人間の基本的な存在に関わっており、生きていることの実感につながる」と言われ、実際に身体を動かし、体験することなしには理解できない「知」が存在するので。この身体知は、体育という視点を持つとき、「生物的身体」と「文化的な身体」（すなわち②・③と①）をつなぐ概念として、重要な鍵となるでしょう。（第2章・7章の内容に関しては、〈村山光義「今、スポーツをどう捉えるか」『三色旗』2009年7月号（No.736）pp.12-21〉も参考にしてください。）

以上のように、テキストを大きく3つの分野（①～③）に分けて、その内容を見てきました。②で身体そのものを基礎として、その実践上の課題を③で発展させています。そして、①の部分は、そうした身体を人文・社会的に見つめ直します。そこに「身体知」「スポーツ」「体育」といったキーワードがあるのです。是非、興味のある部分から読み始め、徐々にその幅を広げてください。きっと、身体活動を文化として持つ「人間」の面白さが伝わることでしょう。

なお、体育理論の学習に限ったことではありませんが、毎年レポートを添削する際に、基本的なまとめ方に問題のあるものが散見されます。「レポート作成上の注意」にも示されていますが、特に留意してほしい点を以下に挙げておきます。

- ・課題とされている内容について十分に説明してください。

自分の視点で関係のない事を調べて、勝手に要点を変えて論ずるケースがあります。課題をよく理解し、それに対する結論を導くために必要な構成（章立てや項目立て）を考えてください。

- ・参考文献を数多く利用し、かつ適切に本文中と文末に記してください。

参考とした文献的所見は、注や文献番号を添えて表記し、自分の意見と区別しましょう。この意味では、テキストも立派な参考文献です。さらに、必ずレポートの最後に文献リストの一覧を示してください。

- ・テキストの丸写しにならないようにしましょう。

レポートはできるだけ自分の言葉で表現しましょう。そのためには、テキスト以外の多くの参考文献に当たり、同様の内容を多くの表現で理解することが大切です。引用として抜き出すことは可能ですが、それらを総合して自分の言葉でまとめたり結論づける表現が必要です。

(2011年4月1日執筆)

文学部専門教育科目

西洋哲学史Ⅰ—古代・中世—

4単位

L064-8801、L8840

◆講義要綱

西洋哲学の流れをたどり、その源泉となった著作を自ら精読することにより、哲学の問題と方法に触れることを目的とする。指定教科書の構成は以下の通りである。

序説 哲学史の意義とその研究方法

本論 第一部 古代哲学

第一篇 ギリシア自然哲学時代

第二篇 ギリシア人文啓蒙時代

第三篇 ギリシア大系統出現の時代

第四篇 ヘレニズムの時代

第二部 中世哲学

第一篇 教父哲学

第二篇 スコラ哲学（抜粋）

参考文献 研究課題

あとがき

◆参考文献

内山勝利・中川純男編著『西洋哲学史〔古代・中世編〕—フィロソフィアの源流と伝統』ミネルヴァ書房、1996年

内山勝利・中川純男ほか編『哲学の歴史』第1巻（古代Ⅰ）、第2巻（古代Ⅱ）、第3巻（中世）、中央公論新社、2007-2008年

◆レポート作成上の注意点

- ・レポートの書き方については、河野哲也『レポート・論文の書き方入門』第4版、慶應義塾大学出版会、2018年を参考にすること。
- ・教科書や課題図書をそのまま引用するのではなく、自分のことばで考えて書くこと。
- ・課題図書の内容に言及するときは、巻、章、節など引用箇所を明記すること。とくに、欄外に付してある数字や記号（1253a、325A等）を明記することが望ましい。
- ・課題図書、教科書、参考書以外に参考にした書物があるときは、レポートの末尾に、「参考文献」としてまとめ、文中で引用する場合には出典を明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

西洋哲学史Ⅱ—近世・現代—

3単位

L007-5302、L17b

◆講義要綱

『西洋哲学史Ⅱ』では、西洋近代の主立った哲学者の思想を時代順に紹介していきます。哲学では自分で問題を立てて考えていくことが重要ですが、自分勝手

な思考に陥らないために、過去の哲学者の思想に習熟することは重要な訓練になります。この科目ではそういった基礎的な哲学的な知見の獲得を目指します。

◆テキストの読み方

難解な概念に出会ったら、哲学辞典を繙いたり、参考文献・関連文献を読みながら、基礎知識を得た上で、何度も何度も反復して内容を考えることが必要です。「分かった」というのは、映画やドラマの一シーンのように、その思想の姿を心に思い描き、それを語ることができるようになった状態です。言葉を国語辞典を使って説明したような文章は分かっているとは言えません。心に「思想を表す絵、その姿」を思い描けるようになるまでじっくり読んでください。

◆履修上の注意

教科書に記されている概念や用語を羅列したり並べ直すことで済ませるのではなく、概念と思想を自分で理解した上で、身近な事例に引き寄せて考えるようにしてください。他人の思想を「写経」しただけではいかなる御利益も得られません。

◆参考文献

伊藤博明編『哲学の歴史』第4巻（ルネサンス）、小林道夫編同第5巻（デカルト革命）、松永澄夫編同第6巻（知識・経験・啓蒙）、加藤尚武編同第7巻（理性の劇場）、須藤訓任編同第9巻（反哲学と世紀末）、野家啓一編同第10巻（危機の時代の哲学）、中央公論新社、2007～2008年

◆レポート作成上の注意点

- ・レポートの書き方については、様々な論文執筆法が出版されていますので、かならずそれらに準拠して書いてください。優れたものはたくさんありますが、ここでは戸田山和久『論文の教室』（NHK ブックス）を挙げておきます。
- ・教科書や課題図書をそのまま引用するのではなく、自分の言葉で考えて書くこと。レポート作成は「写経」ではありません。いくら立派なことが書いてあっても、写しただけであったり、自分のものとして咀嚼されていなければ、コピー機の作業と同じです。それはレポートとは言えません。
- ・課題図書の内容に言及するときは、使用したテキストを出版社、出版年を含めて、頁数を銘記すること。その際に略号を使用する場合は、論文執筆法を参考にすること。
- ・課題図書、教科書、参考書以外に参考にしたものがある場合は、レポートの末尾に、「参考文献」としてまとめること。
- ・くれぐれも申し上げますが、ただ切り貼りして写しただけのレポートはレポートとは言えません。自分の言葉でまとめた結果、間違いが出てくるとしても、写しただけのものより数段優れています。自分の心に刻まれた思想を文章にしてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

論理学(L)

2 単位

L037-7703、L7742

◆講義要綱

論理学の研究はアリストテレス以来長い歴史をもっています。私たちが何かを推理するとき不可欠の規則が論理規則と呼ばれ、それがないと考えることさえ覚束ない基本的な規則と考えられています。それを研究するのが論理学で、19世紀末のフレーゲの研究によって論理学はそれまでにない新たな発展をすることになります。数学的な思考と記号の使い方が論理学に取り入れられ、数学やコンピュータ科学と結びつきながら、様々な分野で応用され、基礎研究には欠かせない役割を演じています。

この講義では論理的な推論や真偽概念について基本的な事柄を学んだ人を対象に、それらを実際に使うことができるようにすることを目的にしています。それによって自分が論理的に考えることができるようになるだけでなく、他人の考えが正しいかどうかもしっかり判定できるようになれることを目指しています。

◆テキストの読み方

文学部の他のテキストと違って記号や数式、論理式がたくさん登場します。自然な言語ではなく、記号言語を使って文や命題を論理式に書き直し、推論が正しいかどうか調べるのが主要な内容ですから、それをしっかり肝に命じて読み進めてください。実際に問題を解く解き方が丁寧に説明されていますから、普通に読み進めれば、テキスト以外の参考文献を参照しなくても完全に理解できます。根気強く読めば、このテキスト一冊だけで論理的な推論の構成や吟味が自分で理解できるようになります。その意味で、このテキストは論理的な推論についてのマニュアルだと考えてください。

◆関連科目

論理学が生まれた経緯や歴史から哲学が強い関連をもった科目です。推論することが主要な研究方法である哲学では論理的な推論が大切な道具になっていますから、論理学の知識は哲学の問題を扱う上で役立つはずです。また、数学的な形式をもった内容ですから、数学基礎論、計算理論、コンピュータ言語等は論理学と密接に結びついています。さらに、言語学との関連も20世紀後半には強くなり、統語論、意味論等で重要な役割を果たしています。

◆参考文献

論理学のテキストはたくさんありますが、テキストの読み方で書いたように、このテキストはマニュアルですから、複数のマニュアルは必要ありません。他の論理学のテキストをまずは忘れてこのテキストだけに集中してみてください。どれも似た内容なら一冊だけ暗記するほどに読むのが一番です。

◆レポート作成上の注意

他の文献を参照する必要はありませんから、テキストの内容だけを十分に使ってレポートを作成してください。文献を検索し、巧みにそれを使うのではなく、テキストの内容を正しく理解し、それだけを使って問題を解くことに専念してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

科学哲学

4 単位

L089-0401

◆講義要綱

科学哲学は科学についての哲学で、それを概説したのがこのテキストです。テキストは第一部の総論、第二部の各論からなっており、第一部はテキストの順序通りに読んでください。第二部は順序通りでなくても構いません。

テキストでは科学的な知識がどのような特徴をもっているかが中心課題の一つになっており、それを「自然の変化」をめぐる考察する仕方でも議論が進んでいきます。実際には各論から話を始める方が具体的なのですが、まず全体像を把握してもらうために科学史、思想史から始まっています。

科学を知った上で科学哲学を研究するのが普通ですが、テキストには科学的な事柄も必要なものは入っています。ですから、科学に関心さえあれば、テキストを読み進めていけるはずです。

◆テキストの読み方

テキストをどのように読み進めるかはきわめて重要です。そこでこのテキストの読み方について説明します。このテキストは論証の部分と、歴史的経緯や状況の説明の部分とからなっています。事件や事実を叙述する場合と、その背後のからくりや原因と結果の関係を推理する場合は大きく違ってきます。叙述の代表は小説や報道記事です。何が何時どのような報告は、素直に読むだけで事の経緯がわかりますから、考えながら読む必要はありません。映画やテレビドラマが面白いのは筋の展開や心理描写にあり、それらは考えなくてもわかります。一方、論証の代表例は数学の定理の証明です。シャーロック・ホームズの推理も論証の一つです。数学の定理や名探偵の推理はしっかり考えないとわかりません。このテキストはこれら二つの異なる部分、つまり論証部分と叙述部分からなっていることに注意してください。

読んでいる部分が論証なのか、叙述なのかをまず確認してください。いずれの部分かによって読み方が違ってきます。論証部分はかつて数学のテキストを読んだときのことを思い出しながら、その時と同じように読んでみてください。時間をかけてゆっくり読まなければなりません。途中でわからなくなったら先に進むのではなく、前に戻らなければなりません。何度も前のページを見返すことが必要になります。一人で読む場合、このような読み方は一方的に辛抱強さを要求しますから、ついつい加減になったり、読み飛ばしたりしてしまいます。辛抱強く、何度も読み返す、わかるまで頑張る、といった根気が求められます。これに対して、叙述の部分は日本語さえわかれば大抵苦勞なしに理解できます。正確に理解することを心掛ければまず心配は要りません。用語や人名が不明ならそれを調べる程度で済みます。でも、自分が正しく内容を理解したかどうかの確認は叙述の部分の方が厄介で、誤解しないよういつも注意しなければなりません。論証部

分はわからない場合にはわからないという自覚が必ずあり、わからないことがはっきりわかります。

さらに、このテキストのもつ特徴は（問）があちこちにあることです。問は必ず解答してください。テキストの内容が理解できたかどうかの目安になります。テキストが二つの異なる部分をもつことを念頭に置きながら丁寧に読み進め、必ず「わかった」、「理解した」という確信がもてるまで頑張ってください。

また、テキストはページ数が多くて最初から読みたくないという気持ちになりそうですが、第二部の各章は半ば独立していますので、好きな章から読み始めて構いません。

◆履修上の注意

科学的な知識を多くもっている必要はありませんが、科学に関心・興味をもっていることが必要です。

◆関連科目

科学の哲学ですから、科学のどの科目も関連科目ということになります。しかし、伝統的に科学哲学は自然科学の哲学として研究されてきました。ですから、まずは自然科学が関連する科目であると考えてください。それらの多くは総合教育科目のはずです。社会科学や歴史の科目であっても、研究の方法や対象に関する哲学的な考察が含まれていれば、十分に関連科目と言えます。

科学に関するニュース、記事等は実に多いですから、それらに関心を寄せ、気にするようにしてください。

◆参考文献

科学に関する啓蒙書、科学雑誌、科学的なエッセイ、伝記等、科学に関するあらゆる本が参考文献になります。科学についての知見を広めるためにいろんな文献を貪欲に読んでください。

西脇与作編『入門 科学哲学』慶應義塾大学出版会、2013年

森元良太・田中泉史『生物学の哲学入門』勁草書房、2016年

◆レポート作成上の注意点

テキストや参考文献を写すのではなく、自分で推論した内容を書いてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

倫理学

2単位

L065-8902、L8958

◆講義要綱

本書では、普遍的な倫理追究の型として、次の6つを取り上げて説明します。

- 1) ユダヤ・キリスト教
- 2) アリストテレスの目的論
- 3) カントの義務論
- 4) ムーアのメタ倫理学
- 5) シェーラーの価値倫理学
- 6) 生命倫理

◆テキストの読み方

本書「学習の手順」の「テキストの学習」に従ってください。

◆参考文献

小松光彦・樽井正義・谷寿美編『倫理学案内—理論と課題』慶應義塾大学出版会、2006年

栢植尚則『ブレップ倫理学』弘文堂、2010年

◆レポート作成上の注意点

本書「学習の手順」の「レポート作成上の注意」に従ってください。

◆成績評価方法

科目試験による。

現代倫理学の諸問題

4単位

L045-7802、L7844

◆講義要綱

20世紀の倫理学をとりまく学問的状況、研究対象としている問題（実存、他者、世界、言語、宇宙における人間の位置、価値）を概観することを通して、倫理学という学問についてより深い理解を得ることを目的とします。指定教科書の構成は次の通りです。

第一部 現代における倫理学の可能性をめぐる

I 現代社会と実存主義の立場

一 危機意識 二 大衆社会 三 ニヒリズム 四 社会参加

II 状況倫理学の問題

一 状況倫理学誕生の背景と時代 の精神状況 二 状況倫理学の系譜 三 状況倫理学の主要な特徴 四 状況倫理学の諸思想 五 状況倫理学の問題点

III 今日の危機の構造と倫理学

はじめに 一 今日の危機の性格 二 今日という時代の位置 三 今日の危機の構造 四 むすび

第二部 倫理学の学問的基礎条件について

I 批判の問題

はじめに 一 批判という言葉 二 否定の構造 三 批判の構造

II 科学の問題

はじめに 一 科学を考察する方法 二 近世科学の構造 三 科学の実存論的意味

III 歴史の問題—近代進歩史観・マルクス主義・実存主義

はじめに 一 近代進歩史観 二 マルクス 三 マルクス主義の展開 四 サルトル 五 メルロー＝ポンティ 六 むすび

IV 歴史の問題—終末史観と倫理学

はじめに 一 進歩史観の構造 二 キリスト教的終末史観の本質 三 進歩史観と終末史観の倫理性の問題 四 むすび

V 倫理学のモデルの問題

はじめに 一 モデルの意味 二 今までの倫理学の科学的モデル 三 新しい科学的モデルの条件 四 新しい科学的モデルの基礎 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百 一百一十 一百一十一 一百一十二 一百一十三 一百一十四 一百一十五 一百一十六 一百一十七 一百一十八 一百一十九 一百二十 一百二十一 一百二十二 一百二十三 一百二十四 一百二十五 一百二十六 一百二十七 一百二十八 一百二十九 一百三十 一百三十一 一百三十二 一百三十三 一百三十四 一百三十五 一百三十六 一百三十七 一百三十八 一百三十九 一百四十 一百四十一 一百四十二 一百四十三 一百四十四 一百四十五 一百四十六 一百四十七 一百四十八 一百四十九 一百五十 一百五十一 一百五十二 一百五十三 一百五十四 一百五十五 一百五十六 一百五十七 一百五十八 一百五十九 一百六十 一百六十一 一百六十二 一百六十三 一百六十四 一百六十五 一百六十六 一百六十七 一百六十八 一百六十九 一百七十 一百七十一 一百七十二 一百七十三 一百七十四 一百七十五 一百七十六 一百七十七 一百七十八 一百七十九 一百八十 一百八十一 一百八十二 一百八十三 一百八十四 一百八十五 一百八十六 一百八十七 一百八十八 一百八十九 一百九十 一百九十一 一百九十二 一百九十三 一百九十四 一百九十五 一百九十六 一百九十七 一百九十八 一百九十九 二百

第三部 現代倫理学の諸問題

I 実存の問題

はじめに 一 実存という言葉 二 実存の概念 三 実存問題と時代的環境

- II 他者の問題
はじめに 一 他者という言葉 二 実存哲学の立場からの諸学説 三 現象学の立場からの見方
- III 世界の問題
はじめに 一 世界という言葉 二 世界像 三 世界観 四 世界
- IV 言語の問題
はじめに 一 分析哲学の立場 二 言語学の立場 三 現象学的実存哲学の立場 四 モノロゴスとディアロゴス むすび
- V 宇宙における人間の位置の問題
はじめに 一 自然観をめぐっての一つの誤解 二 ハイデガーの示唆 三 新約の倫理 むすび
- VI 価値の問題
はじめに 一 価値研究の歴史と今日の設問 二 事実と価値 三 価値の相対性と絶対性 四 新しい価値の創造という問題について

◆テキストの読み方

次のようなことを心掛けてください。①全体にわたって読み通しましょう。たとえ理解できない箇所があっても、とにかく読み通しましょう。②章や節というように部分に分けて、何が書いてあったか要約してみましょう。③わからない言葉や概念は事典、参考書などで調べてみましょう。その他の学習上の注意点については、本書「学習の手順」の「テキストの学習」をよく読んでください。

◆履修上の注意

とにかくテキストの全体に目を通してください。テキストを読まずに科目試験を受験しても、合格は難しいでしょう。

◆関連科目

事前に履修しておくべき科目は特にありません。

◆参考文献

- ・山内志朗『小さな倫理学入門』慶應義塾大学出版会、2015年
- ・柘植尚則『ブレップ倫理学』弘文堂、2010年
- ・柘植尚則『入門・倫理学の歴史—24人の思想家—』梓出版、2016年
- ・小松光彦・樽井正義・谷寿美編『倫理学案内—理論と課題』慶應義塾大学出版会、2006年

◆レポート作成上の注意点

『レポート課題集』の「レポート課題 現代倫理学の諸問題」の注意1～3をよく読んでください。

◆成績評価方法

科目試験による評価。

日本美術史 I

2 単位

L116-1401

◆講義要綱

日本美術史のうち、江戸時代までを扱います。日本は中国および韓国から多大な影響を受けて自国の文化を形成しました。美術についても同様であり、これら大陸の美術状況を見無視しては日本美術の歴史を語ることはできません。したがって、第一に中国や韓国のど

のような影響を受けているのか、第二にそれらの美術受容の結果日本独自のものが形成されたのかどうか、という2つの視点が必要です。そして、もし日本独自のものがあるとするれば、それはどのようなものであり、またそのような特質は何によって育まれたのか、を考えることが課題となります。これらのことを観念的ではなく、自身の目で遺品を観察し、比較検討することによって具体的な証拠を挙げて論証することが要請されます。したがって、テキストや文献を読むと同時に、自身で作品と出会い、作品を「読む」こと、つまり観ることが重要です。

◆テキストの読み方

作品を味わうことがなければ「日本美」は理解できません。テキスト(『日本美術史 I』)は縄文時代以降の日本美術を通史的に扱っていますが、どのように作品を味わうかという点に重点を置いているため、取り上げている作品に限りがあり、重要作品全てを網羅するものではありません。したがって、参考文献に挙げた図書等を利用し、できるだけ多くの作品を多角的に見る訓練を積んでください。

◆履修上の注意

美術史学は読んで理解するだけではなく、自身の目で見て会得するものです。あるいは、自身で観察した上でなければ、どのような解説書を読んでも理解できないというべきでしょうか。したがって、履修者はできれば実作品を見学するか、少なくとも写真によって観る訓練を積むことが必要です。概説を引き写しただけのレポートは評価しません。自身の観察したもので裏付けしつつ文献を読むように努めてください。

◆参考文献

- 1 『日本美術館』小学館、1997年ほか美術史概説書類
- 2 『原色図典日本美術史年表』集英社、1986年ほか美術史年表類
- 3 林温『日本美術がワカル本「女性性」の文化』慶應義塾大学三田哲学会叢書、慶應義塾大学出版会、2017年

◆レポート作成上の注意点

インターネットを利用する場合、引用するなら文責者が明示されているものに限ります。ある著書からの引用なら、原本を参照すること。大事なことは、だれの意見なのかを明示することで、参考書の内容を自身の考えのように引き写さないこと。「だれそれはこう述べているが、自分はこれこれの理由でこう考える」といった論調が好ましい。したがって、本文中に引用を行う場合は必ず註を付け、最後に参考文献を挙げること。また、レポートは感想文ではないということを忘れずに。

◆成績評価方法

科目試験による。

社会学史 I

2 単位

L081-9791

市販書採用科目

◆テキスト

那須壽編『クロニクル社会学』有斐閣アルマ、1997年

◆講義要綱

「社会学史Ⅰ」では社会学の歴史の全体を概観する。おおまかに言えば、社会学の歴史は、サン＝シモン、コント、マルクスらの第一世代とともに始まり（誕生期）、デュルケム、ウェーバー、ジンメル、ミードらの第二世代によって確立され（成立期）、パーソンズ、マンハイム、シュッツ、ブルーマーらの第三世代によって展開され（展開期）、そしてルーマン、コールマン、ハーバーマス、フーコー、ゴフマン、ガッフインケル（エスノメソドロジー）、ブルデュー、ギデンズら現代の社会学者たちへと受け継がれている。まずこの社会学の流れの全体像を把握し、そのうえでいずれかひとりの社会学者を中心に、さらに深く掘り下げて理解することがこの講義の目的である。

◆テキストの学習方法

まずテキスト（『クロニクル社会学』）を通読して社会学の歴史の全体像を把握する。そのうえでテキストで取り上げられている社会学者から、関心をもった社会学者をひとり選んで、テキストの「読書案内」にしたがって、さらにその社会学者の学説について研究を深める。

◆参考文献

わからない用語がでてきたときに自分で調べられるよう、以下の小辞典のうちいずれかを手元に置くことが望ましい。

『岩波小辞典社会学』岩波書店

『社会学小辞典』有斐閣

社会学全般に関しては、

長谷川公一・浜日出夫ほか『社会学』有斐閣

◆レポート作成上の注意点

「社会学史Ⅱ」と同一の文献を選択することはできない。

分量は4000字以内。ただし1割程度の誤差にとどめること。ワープロを使用する場合は、末尾に総字数を明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

社会学史Ⅱ

2単位

L082-9591

市販書採用科目

◆テキスト

徳永恂・厚東洋輔編『人間ウェーバー』有斐閣双書、1995年

◆講義要綱

「社会学史Ⅱ」では、社会学の歴史全体を概観した「社会学史Ⅰ」をふまえて、第二世代の代表的な社会学者のひとりであるマックス・ウェーバーをとりあげ、その社会学の特徴をさらにくわしく考察する。したがって受講者は「社会学史Ⅰ」の単位を修得済みであることが望ましい。

ウェーバーの業績は、（狭い意味の）社会学にとどまらず、宗教研究、政治論、学問論など広範な分野にまたがる。まずウェーバーの業績の全体像を概観したうえで、いずれかひとつの分野をとりあげて、その分野におけるウェーバーの仕事をさらに深く掘り下げて理解することがこの講義の目的である。

◆テキストの学習方法

まずテキスト（『人間ウェーバー』）を通読してウェーバーの業績の全体像を把握する。そのうえでテキストの「読書案内」にしたがって、関心をもった分野におけるウェーバーの著作をひとつ選び、その著作を通してさらにその分野についての研究を深める。

◆履修上の注意

「社会学史Ⅰ」の単位を修得済みであることが望ましい。

◆参考文献

「社会学史Ⅰ」と同じ。

◆レポート作成上の注意点

「社会学史Ⅰ」と同一の文献を選択することはできない。

分量は4000字以内。ただし1割程度の誤差にとどめること。ワープロを使用する場合は、末尾に総字数を明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・社会心理学

2単位

L132-1901

◆講義要綱

テキストは大きく2部構成となっている。第1部は「社会を作り、その中で暮らす」をテーマに、配偶と家族、依頼と説得、利他と協力、リスク、キャリア形成、健康といったトピックについて扱っている。第2部は「影響しあい、よりよい社会を目指す」をテーマに、社会的勢力と認知、メディア、世論調査・ランキング、普及・流行、環境配慮、防災といったトピックについて扱っている。どちらかといえば第1部は社会における個人の意識や行動を扱い、第2部は社会からの影響や社会的、課題を扱っているが、この2つは相互に関連しあっている。社会における様々な現象や課題を本テキストがすべてカバーしている訳でなく、主なトピックを選んで社会心理学的に解説したものであるが、全体を一通り読むことにより、社会現象の理解や課題の解決について社会心理学からどのようにアプローチしたらよいか学習できるようになっている。また、同じ理論が複数の章で何度も登場することがある。このことから1つの理論が様々な現象の理解に役立つことも理解できる。テキストで扱われているトピックを起点として、各自が日常生活を送る中で関心をもつ様々な現象について、同様に社会心理学の知見を用いて理解・考察することができるようになれば、このテキストは役目を果たしたことになる。

◆テキストの読み方

テキストの序文および目次を読んだ上で、全12章を一通り読んでみる。最初はあまり細部にはこだわらず、関心のある章から読んでいけばよい。一通り読んでいくと、複数の章の間で同じ理論が出てくるように、各章相互の関連性に気づけるはずである。ページをめくりながらトピック同士のつながりを意識し、社会心理学の理論で説明される様々な現象を各自の日常生活での具体例に置き換えて考えてみることである。この時点で興味をもった参考書も活用し、現実の世界

で起きている様々な出来事の原因や課題の解決方法について考察できるようにすることを目指す。

◆履修上の注意

テキスト以外に社会心理学関係の参考書を少なくとも1冊は選び、読んでみてください。概論的なものでなく興味のある分野のものでも構いません。

◆関連科目

心理学Ⅰ—基礎過程—

心理学Ⅱ—実験・測定・モデル—

◆参考文献

堀毛一也・竹村和久・小川和美（共著）『社会心理学：人と社会の相互作用の探求』培風館、2017年

池田謙一・唐沢稔・工藤恵理子・村本由紀子（共著）『社会心理学』有斐閣、2010年

山田一成・北村英哉・結城雅樹（編著）『よくわかる社会心理学』ミネルヴァ書房、2012年

北村英哉・大坪庸介（共著）『進化と感情から解き明かす社会心理学』有斐閣、2012年

スミス, J.R.・ハスラム, S.A.（編著）／樋口匡貴・藤島喜嗣（監訳）『社会心理学・再入門—ブレークスルーを生んだ12の研究』新曜社、2017年

◆レポート作成上の注意点

日常生活や社会でみられる様々な課題について、社会心理学によって説明できることを目標とします。したがって、日ごろから対人関係、集団や社会の問題について目をむけ、そうした問題がなぜ生じるのかを考えてみるようにしてください。そうした人々の行動は、とらえ方によって複数の見方ができます。複数の理論やモデル、効果で説明されるというのはある行動が多面的に捉えられるということです。レポートを作成する際は、「取り上げる事例の紹介」と「事例に関する社会心理学的解釈」は明確に区別できるようにしてください。

テキストや参考書の中には、社会心理学の理論によって説明される具体例が掲載されていることもあります。そうした例を使用する際には、必ず引用箇所を明示し、それに類似した自分が経験した事例についても理論的に説明するようにしてください。インターネットで知識を得る場合も同様です。インターネットの活用も大事なことですが、出典を明示した上で引用は最小限にとどめ、必ず自分自身のコメントをつけるなど考察の材料となるようにしてください。この課題を考えるにあたり、社会心理学以外の参考書を用いることもできますが、その場合も社会心理学的な考察を必ず加えてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

都市社会学(L)

2 単位

L127-1791

市販書採用科目

◆テキスト

松本康編『都市社会学・入門』有斐閣、2014年

◆講義要綱

本科目は、都市社会学の基本的な考え方を学ぶことをつうじて、都市社会現象を社会的に理解する力を

養うことを目的とする。

テキストにしたがい、つぎのような構成で議論をすすめてゆく。序章では「都市社会学の問い」を定式化する。第Ⅰ部「都市化とコミュニティの変容」では「都市はなにを生みだすか」という問いの軸にそって、「都市社会学の始まり」「アーバンイズム」「都市生態学と居住分化」「地域コミュニティ」「都市と社会的ネットワーク」について論じてゆく。第Ⅱ部「都市の危機と再編」では「なにが都市を生みだすか」という問いの軸にそって、「都市圏の発展段階」「情報化・グローバル化と都市再編」「インナーシティの危機と再生」「郊外のゆくえ」について論じる。第Ⅲ部「時間と空間のなかの都市」では「いかに都市とかわるか」という問いの軸にそって、「都市再生と創造都市」「文化生産とまちづくり」「アジアの都市再編と市民」「ボランティアと市民社会」「都市の防災力と復興力」について論じる。

◆テキストの読み方

テキストについては、全部の章を正確に熟読してください。コラムまで試験の範囲に入ります。

◆履修上の注意

持ち込み不可ですので、内容について自分でまとめてください。単にキーワードの暗記だけでなく、内容を論じる問題になります。

◆参考文献

各章の終わりに掲載されている文献を参考にしてください。他に次のようなテキストも参考になります。

- ・町村敏志・西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣、2000年
- ・園部雅久・和田清美編著『都市社会学入門』文化書房博文社、2004年
- ・吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣、2013年

◆レポート作成上の注意点

以下の5条件がそろわなければ合格となりませんので、注意してください。

1. テキスト以外に5点以上の参考文献を用いること。
2. 字数は3600字以上4000字以内（注を字数に含む。参考文献リストは字数に含めない）。
3. 論述は社会学的視点からなされること。
4. 注をつけること。
5. 参考文献リストを作成すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

心理学Ⅰ—基礎過程—

2 単位

L048-7902、L7960

◆講義要綱

ここでは、感覚、知覚、認知、記憶、学習、動機づけ、感情などの基礎過程に関する個体の心理について学習する。ただし個体の心理といっても、知能・性格などの個体差についてではなく、個体に共通な一般的性質をとり上げる。

テキストは行動の科学としての心理学という視点から述べられているが、心理学の諸学説を紹介するのでも、特定の学説による主張をしようとしたのでもない。

むしろ、心理学が扱ってきた基礎過程に関する事実としての研究成果を、この視点から系統づけようとしたものであり、既に得られた心理学の知識を改めてこの視点から考えてみていただきたい。(テキストまえがきより一部改変)

◆テキストの読み方

専門用語を1つずつ、参考文献を利用しながら理解していくことが重要である。

◆履修上の注意

総合教育科目で心理学を修めたこと、もしくはそれと同等の学力を有していることを前提として、テキストは書かれている。

◆参考文献

中島義明ほか編『心理学辞典』有斐閣、1999年
J. E. メイザー著『メイザーの学習と行動(日本語版第3版)』二瓶社、2008年

◆レポート作成上の注意点

1. 参考文献を明らかにしていないレポートは採点できない。
2. 他人の著作を丸写しにただで、自分の見解のないレポートは、それだけで不合格となる。
3. 内外の学術論文を事前に充分参考とすることを書きはじめる前にレポートを構成する図表や、論文の書き方をよく理解すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

心理学Ⅱ—実験・測定・モデル—

2単位

L042-7702、L7761

◆講義要綱

この科目は、基礎の心理学の重要な研究方法である実験・測定・モデルについて学ぶことにより、実証科学としての心理学の考え方を理解することを目的とする。したがって履修者は、個々の現象や実験結果の細かい点に気を取られすぎずに、どうしてそのような実験が必要となったのか、実験結果からどのようにしてどのような考察が引き出されたのか、といった研究における考え方の流れを、論理的に筋道立てて理解するよう努力してほしい。

本テキストは書かれてからかなりの年月が経過し、その間に心理学は大きな発展を遂げている。その意味からもテキストだけを勉強するのではなく、下記の参考書などを十分に活用して勉強してほしい。特に(1)『認知心理学を知る』からは、毎回かならず科目試験の問題が出題されるので、テキストとあわせて十分に勉強しておく必要がある。

◆テキストの読み方

本テキストは独学で学ぶには非常に難解で、数学や統計学の基礎知識もある程度高い水準のものが要求される。もちろんある程度の数学・統計学の知識は心理学を学ぶ上で必要なものである。しかし、本科目の履修に際しては、数式や数学的手法を完全に理解することよりも、考え方・精神を理解することに主眼を置いてほしい。

◆履修上の注意

履修者は、参考文献(1)の『認知心理学を知る』

をあわせて勉強することが要求される。科目試験では、テキストのみではなく、この文献からも問題が出題される。また、ある程度の数学・統計学の知識があることが望ましい。最低限、総合教育科目の統計学、あるいは文学部専門教育科目の心理・教育統計学を修得している必要がある。

◆関連科目

「統計学(A)(総合教育科目)」、「心理・教育統計学(文学部専門教育科目)」

◆参考文献

- (1) 市川・伊東編『認知心理学を知る 第3版』おうふう、2009年
- (2) 井上・佐藤編『日常認知の心理学』北大路書房、2002年
- (3) 仲真紀子編『認知心理学』ミネルヴァ書房、2010年

◆レポート作成上の注意点

レポートの作成に際しては、読者として「心理学Ⅱ」の授業を履修する基礎学力は持っているが、まだ履修前の学生を想定すること。実験の紹介は、目的、方法、結果、結論に分けて簡潔、かつ明瞭に記すこと。紹介する研究は、原則として専門誌などに掲載された論文に直接あたること。心理学研究、認知心理学研究、基礎心理学研究などの雑誌が読みやすいと思われる。ウェブ上でCiNii Articles、J-STAGEなどのデータベースを利用するのもよい。引用・参考文献はもらさず記す。その際、形式はテキストや参考書などに倣い、標準的な方法にして一貫性を保つこと。横書きに限る。

◆成績評価方法

科目試験による。

教育学

3単位

L073-9301、L9383

◆講義要綱

いわゆる狭義の「教育」は人間形成の過程(学び)への意図的な介入として定義づけることができます。したがって「教育学」とは、こうした「教育」という視座に立つことによって、そこで生ずる実践上の様々な問題や理論的諸問題を解決しようとして成立した「術」であり、またその反省としての学問と考えることができます。つまり教育学とは「教育問題」の科学なのです。この科目ではこうした考え方をすなわち「学問知」の成立や構造を理論的かつ歴史的に考察することが履修上の目標です。概念史的に見て「教育」という概念はいついかなる状況下で成立したのか、またその意味は何かを問うことの上で、その説明の仕方には歴史上様々のものがあり、それらはいくつかの類型に分類することができます。それらの説明の歴史と類型を踏まえて、さらに私たちは、この「教育」をどのように説明したらより適切な説明であるのか、その理論的提案を吟味します。さらに、この理解に立って、教育学上の主要問題のいくつかを分析・吟味することになります。

以上のような趣旨を十分に理解された上で、とりわけ現代の教育に思想的にも現実的にも直接の繋がりの

ある、17、18世紀に成立したいわゆる「近代教育理論」の形成と過程と理論構造の検討がこの科目の焦点となることは言うまでもありません。この世紀こそ「教育の世紀」と呼ばれるほど、子どもへの関心そして新たな教育への関心が増大し、また質的な発展を見せた時期はありません。この時期に誕生を見た近代教育学は多くの新しい示唆と観方を生み出しましたが、その一方で今日の近代教育批判にかかわる多くの問題性を潜在的に持っていました。したがってこの講義の履修を希望される方にはテキストの記述を参考に自からロックやカント、ルソーやヘルバルトさらにはデューイなどの言説を、古典的テキストを熟読吟味することを介してこうした問題性を考慮しながら批判的に考察して頂けることを期待します。

◆関連科目

「教育思想史」

◆参考文献

田中智志・今井康雄編『キーワード 現代の教育学』
東京大学出版会、2009年

中内敏夫『教育学第一歩』岩波書店、1988年

村井実『「善さ」の復興』東洋館出版社、1998年

*絶版本は図書館で借りるか、インターネットの古書サイトで入手可能。

◆レポート作成上の注意点

まず、レポート課題は何を問うているかを正確に理解すること。

次に、テキストを丹念に読み込んだ上でその正確な理解に立って課題の問いに応じた学習活動（参考文献の読み込みなど）を展開し、課題の問いに則してレポートを作成すること。レポートの冒頭にレポート課題を改めて記入することは不要。

◆成績評価方法

科目試験による。

教育心理学

2単位

L114-1301

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

教育に関わる基礎的な心理学的知見について正確に理解し、教育活動に役立てられるようになる。

〔授業の概要〕

幼児、児童及び生徒の心身の発達・学習・教育に関わるさまざまな心理学知見を、科学的な理論とエビデンスに基づき、特に重要な三つの領域「発達」「学習」「学習環境と教育実践」の視点から概説し、教育との関連を考察する。

〔授業計画〕

この科目は「教育心理学」の中心的なテーマである「発達」「学習」「学習環境と教育実践」に関わる主要な理論を、科学的エビデンスに基づいて理解し、人間の生涯にわたる「教育による学習」についての認識を深め、とりわけ幼児、児童及び生徒のためのよりよい教育的指導と教育環境の設定を行うことができるように自ら考えてもらうことが目標である。指定教科書の章立ては以下のとおりであり、全15回分の講義内容に相当する。

序章 教育心理学とは（第1回）

第I部 発達のメカニズム

intro 1 発達とは何か（第2回）

第1章 知性の発達（ヒトの知性、知性発達のみちすじ、知性の個人差の形成）（第3回）

第2章 言語獲得（言語の種固有性と領域固有性、言語の発達段階、言語獲得の論理的問題メタ言語意識の発達と教育）（第4回）

第3章 社会性の発達（社会関係、社会的認知、社会行動）（第5回）

第4章 パーソナリティ（パーソナリティの理論、パーソナリティの構成、パーソナリティへの介入）（第6回）

第II部 学習のメカニズム

intro 2 学習とは何か（第7回）

第1章 知識獲得（記憶の3段階、短期記憶、長期記憶、読解による知識獲得）（第8回）

第2章 思考（思考とは何か、問題解決、思考力を育む）（第9回）

第3章 動機づけ（動機づけとは何か、認知論的アプローチ、欲求論的アプローチ、感情論的アプローチ、教育環境と動機づけ）（第10回）

第III部 学習環境と教育実践

intro 3 教育実践とは何か（第11回）

第1章 教育方法（学習の理論と教育方法、発達過程と教育方法、授業をつくる、特別なニーズをもつ子どもへの学習支援、教育方法における今後の課題）（第12回）

第2章 学習評価（学校での学習における評価、学習評価の方法、学習を促進する評価）（第13回）

第3章 教育とカウンセリング（教師とカウンセラー、教師に求められる臨床的視点とは、アセスメント、スクールカウンセラーの専門性、スクールカウンセラーの立ち位置）（第14回）

第4章 学習環境と個性（教授学習過程と学習者の個人差、適性処遇交互作用（ATI）、学習能力の個人差、予習の効果におけるATI、個人差の問題を扱った英語の教育実践に関する研究、ATI研究に基づく個別指導の時代をめざして）（第15回）

◆テキストの読み方

テキスト本文の学習だけでなく、コラムにも関心を寄せて、具体的な事例を想定しながら理解を深めてほしい。

◆参考文献

鹿毛雅治編著『発達と学習（未来の教育を創る教職教養指針）』学文社、2018年

並木博編著『教育心理学へのいざない（第3版）』八千代出版、2008年

鹿毛雅治編『教育心理学（朝倉心理学講座）』朝倉書店、2006年

◆成績評価

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

教育史

4単位

L117-1401

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

教職を目指す者に必要とされる、教育の意義や目的、教育の理念や思想、教育の制度や組織、教育の方法と内容などの諸事項に関する基本的な理解を、日本の教育の歴史に対する考察を通して培うことを目標とする。また、これらの基本的な理解に基づいて、現在の教育の諸課題についても多角的な考察を深める。

〔授業の概要〕

日本における教育の歴史を、「習俗としての教育」「組織としての教育」「制度としての教育」という三つの視角に基づいて概説する。それを踏まえて、古代から現代に至る日本の教育の歴史的展開を、教育の意義・目的、教育の理念・思想、教育の制度・組織、教育の方法と内容などの変遷に着目しながら考察する。

〔授業計画〕

本講義では、教職を目指す者の素養として、日本の教育の歴史的進展に関する理解が必須との観点から、古代から現代に至る教育の通史的叙述を行っている。その際、各時代教育組織化の動向や教えと学びのありようを歴史内在的に理解することで、この国の教育文化の伝統に対する理解を図ることを重視している。またそうした教育文化の伝統を踏まえながら、現在および将来の教育の課題を、自ら考えられるようにすることを目的としている。指定教科書の構成は次の通りである。

はじめに一本書の前提となる諸問題

- 第1章 「組織としての教育」の胎動と進展—古代・中世
- 第2章 近世における教育組織化の諸動向
- 第3章 江戸時代の「学び」—「組織としての教育」段階での学び
- 第4章 「近代教育」の発足（その1）—「学制」制定とその教育理念
- 第5章 「近代教育」の発足（その2）—「教育令」の制定と改正
- 第6章 「近代教育」の発足（その3）—復古主義の台頭
- 第7章 「近代教育」の確立（その1）—森有礼文政期の教育改革
- 第8章 「近代教育」の確立（その2）—「教育勅語」の渙発
- 第9章 「近代教育」の確立（その3）—明治後半期の教育改革
- 第10章 「近代教育」の確立（その4）—明治期の教授理論
- 第11章 「近代教育」の見直し（その1）—大正新教育運動
- 第12章 「近代教育」の再編（その1）—大正期の教育改革
- 第13章 「近代教育」の再編（その2）—昭和戦前期の教育
- 第14章 「近代教育」の再編（その3）—戦争と教育

第15章 「近代教育」の見直し（その2）—戦後新教育の動向

第16章 「近代教育」の再興（その1）—講和・独立後の教育政策動向

第17章 「近代教育」の再興（その2）—高度経済成長と教育

第18章 「近代教育」の混迷—国家統制と市場原理むすび「制度としての教育」の次へ

◆テキストの読み方

個々の教育史の動向を、絶えずより大きな教育史の流れの中に位置づけながら理解することに心掛けてほしい。

◆履修上の注意

テキストまたはスクーリングで「教育学」を履修していることが望ましい。なお、日本史の知識については、高等学校の教科書程度があれば問題ない。

◆関連科目

教育学

◆参考文献

沖田行司『人物で見る日本の教育』ミネルヴァ書房、第二版、2015年。

海後宗臣・仲新『教科書でみる近代日本の教育』東京書籍、1979年。

佐藤秀夫『教育の文化史』全4巻、阿吽社、2004年。
『論集 現代日本の教育史』全7巻、日本図書センター、2013-14年。

◆レポート作成上の注意点

一つには、実証的な内容であることに留意すること。そのため、歴史事象の記述についてはできる限り第一次資料に基づいて出典を明記してほしい。もう一つには、教育史の流れを大局的に把握すること。そのため、時代背景を踏まえるとともに、事象が生起するに至るまでの歴史的経緯をよく理解してほしい。また、当該事象の今日的意義やその後の歴史に与えた影響を視野に含めた記述内容であることも必要である。

◆成績評価

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

教育思想史

4単位

L122-1601

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

近代西洋の教育思想史を理解し、現代の教育的思考の現在位置を確認する。

〔授業の概要〕

現代教育の理念的基盤が成立した18、19、20世紀のヨーロッパとアメリカの教育思想史および人間形成論を概観する。

〔授業計画〕

指定教科書の主な構成は以下の通りである。

はじめに 西洋教育思想史は何のために学ぶのか

第I部 西洋教育思想の伝統

第1章 古典古代の教育思想

第1節 古代ギリシアの教育思想

第2節 ヘレニズム・ローマの教育思想

第2章	中世の教育思想
第1節	キリスト教の形成
第2節	中世宗教施設・制度と教育思想
補論1	中世大学の誕生
第3章	近世の教育思想
第1節	ルネサンス期の人間形成論と教育思想
第2節	宗教改革期の人間形成論と教育思想
第4章	「教育的世界」の誕生——コメニウス教育思想
第1節	17世紀オランダの文化環境
第2節	コメニウスの教育構想
第II部	市民革命・市民社会時代の教育思想と陶冶論（人間形成論）18世紀～19世紀前半
第5章	啓蒙主義期の教育思想
第1節	イギリス啓蒙主義期の教育思想
第2節	アメリカ啓蒙主義期の教育思想
第3節	フランス啓蒙主義期の教育思想
第4節	ドイツ語圏啓蒙主義期の教育思想
第6章	古典的陶冶論（人間形成論）の誕生
第1節	「反」啓蒙主義の人間観と陶冶論（人間形成論）
第2節	シラーと美的陶冶論（人間形成論）の誕生
第3節	フンボルトの新人文主義的陶冶論（人間形成論）
第4節	ロマン主義の子ども観と陶冶論（人間形成論）
第5節	ドイツ観念論哲学と陶冶論（人間形成論）・教育思想
第7章	古典的教育学の誕生
第1節	ペスタロッチ教育学
第2節	ヘルバルト教育学
第3節	シュライアマハー教育学
第4節	フレーベル教育学
補論2	ヨーロッパエリート中等教育機関の教育思想
補論3	近代高等教育機関の教育思想
第III部	国民国家・資本主義の時代19世紀中葉～20世紀
第8章	イギリスの教育思想
第1節	初期社会主義の教育思想
第2節	古典的自由主義の教育思想
第3節	ロマン主義的社会主義の教育思想
第4節	新教育運動の教育思想
第9章	フランス語圏およびイタリアの教育思想
第1節	19世紀前半フランス社会における自由・平等と教育
第2節	デュルケーム——社会の所産・社会的事実としての教育
第3節	新教育運動の教育思想
第10章	アメリカの教育思想
第1節	進歩主義教育運動の思想
第2節	デューイの教育思想
第3節	進歩主義教育批判の諸相
補論4	アメリカ「児童研究」から教育心理学へ
第11章	ドイツの教育思想
第1節	19世紀前半の社会と教育
第2節	アードルフ・ディースターヴェークの教

育思想

第3節 19世紀後半（ドイツ帝国期）の社会と教育思想

第4節 古典的陶冶・教養への批判と文化批判

第5節 ドイツ青年運動

第6節 ドイツ新教育運動

第7節 教育学の新たな展開

補論5 実験的教育学と精神科学的教育学

補論6 ナチズムと教育思想

第12章 第二次世界大戦後の教育思想と教育学

第1節 戦後社会と教育思想

第2節 加速する近代化と教育思想・教育学

おわりに

◆テキストの読み方

全体を通読した上で、直接、課題のテーマにかかわる18世紀以降の部分を精読すること。

◆履修上の注意

教育学に関する基礎知識、西洋史の知識を学んだ上で履修するのが望ましい。

◆関連科目

教育学

◆参考文献

今井康雄編『教育思想史』（有斐閣、2009年）

◆レポート作成上の注意点

取り上げる思想家の著（翻訳書可）一冊と、その思想家についての研究書を一冊以上読了した上で、レポート作成に取り組んでほしい。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

教育社会学

2単位

L107-1091

市販書採用科目

◆テキスト

久富善之・長谷川裕編『教育社会学（教師教育テキストシリーズ）』学文社、2008年

◆講義要綱

現代日本社会における教育を主たる対象として、社会的背景と関連させて教育的事象を捉える能力を身につけること、これが本科目の目標です。社会学が対象とする教育（現象）の多様さと広がりを確認した上で、それらは一見個々別々の事象ですが、近代社会という共通土台の上に成立している社会的事象であることを理解することが重要です。

加えて、その近代社会が行き着いた先に現代社会があり、近代の完成・成熟としての現代という時代変化への着目が重要です。教育社会学は教育現象を対象とする社会学ですが、教育という社会現象から現代社会を理解する社会学でもあります。よって、制度としての学校教育に対象が限定されず、若者の生き方、就職（学校から仕事への移行）、子育て、階層の再生産、ナショナリズムなどについても教育社会学的考察の対象となるのです。

序章 教職と教育社会学

第1章 学校という制度と時間・空間

第2章 学校で「教える」とは、どのようなことか

- 第3章 教師と生徒の関係とは、どのようなものか
- 第4章 学校教師とはどのような存在か
- 第5章 若者は今をどのように生きているか
- 第6章 〈移行〉の教育社会学
- 第7章 子育て・教育をめぐる社会空間・エージェンツの歴史の変容と今日・未来
- 第8章 学校の階級・階層性と格差社会
- 第9章 国民国家・ナショナリズムと教育・学校
- 第10章 教育改革時代の学校と教師の社会学

◆テキストの読み方

社会階級・階層と学歴については、主としてテキスト第8章の中で述べられています。厳密にいうと社会階級と社会階層は異なる概念ですが、テキスト第8章での使い方に倣って、並記して使って構いません。ただし、参考文献と読み比べる際には注意が必要です。

◆履修上の注意

必修として履修しておくべき科目は指定しませんが、社会学と教育学の基礎知識があるとよい。これら2つの学問に関連する科目をそれぞれ1つ以上履修した上で、本科目を履修することを推奨する。

◆関連科目

上記の「履修上の注意」を参照。

◆参考文献

1. 荻谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井朗『新版教育の社会学』有斐閣、2010年（特にPart4「学歴社会」の変貌と「格差」）
2. 吉川徹『学歴分断社会』筑摩書房、2009年
3. 橋本健二『新・日本の階級社会』講談社、2018年
4. 竹内治彦編『グローバリゼーションの社会学（第2版）』八千代出版、2001年（特に第3章と第4章）

◆レポート作成上の注意

1. 課題は3つに分かれています。①②③が有機的に関連付けられることが求められていますので、一連の課題であると考えてください。また3つは混在させず、別個に記述してください。①で学んだ理論や概念を②においてご自身の体験に適用することを求めています。③では①および②と関連させて述べて下さい。ご自身が考える本学での学びの意味（主観的な意味付け）だけでなく、それを社会的に説明してください。
2. レポート執筆ではテキストの読解を中心に記述することが求められています。テキストを理解したうえで、さらにテキストの理解を深めるために参考文献で議論の補強を行い、また、関係するデータとの照らし合わせをしてください。テキスト各章末にある参考文献も活用してください。これらの作業の成果を含めてレポートを執筆してください。
3. レポート記述におけるテキストおよび参考文献の引用参照は、レポート本文中に注を入れて出典箇所の明示が必要です。

◆成績評価方法

科目試験による。

心理・教育統計学

3単位

L070-9201、L9262

◆講義要綱

広く行動科学の研究方法としての統計学の入門コースであるが、特に推測統計学の理論的背景を十分理解していただけるようにという願いをこめてテキストを執筆した。このテキストが使用されるようになって、レポートの質が高くなり、また科目試験の成績も良くなっているといった印象を受けることを喜んでいます。

◆参考文献

- 並木博『個性と教育環境の交互作用—教育心理学の課題』培風館、1997年
 南風原朝和著『心理統計学の基礎—統合的理解のために（有斐閣アルマ）』有斐閣、2002年
 南風原朝和・杉澤武俊・平井洋子著『心理統計学ワークブック—理解の確認と深化のために』有斐閣、2009年

◆成績評価方法

科目試験による。

法学概論(L)

2単位

L118-1501

◆講義要綱

「法学概論」は、文学部および経済学部専門教育科目として開講されるが、学習の目的とするところは、法律学の基礎的事項についての知見を掌中にあることにある。今後の日常生活で法との接点を持たなければならない状況が生じた際、そこで得た知識を生かすこと、本講義を通じて法律学への興味が芽ばえ、さらに多くの法分野への取り組みを試みる「きっかけ」となる気持ちが生ずること、新たに修得した異なる分野に関する知識を、自らが専攻する文学・経済学・商学のより深い理解のための拠りどころとすること、いずれも本講義の目指す主旨に叶うものである。そうした意味で当該学科目の位置づけは、まさに「入門講座」の一語に尽きよう。

◆テキストの読み方

さて、それがために、皆さんに提供されたテキストは、できる限り平易な文章で綴られ丁寧な説明により要点の理解が可能であるよう心掛けて執筆された。もちろん初学者にとっては、それでさえも目の前に広がる未知の世界が、得体の知れない茫漠たるものに映るのは、むしろ当然であろう。しかし、まず第一歩を踏み出さないことには、何も始まらない。そこで学習をする、つまりテキストを読み進むために二つの提案をしておきたいと思う。

まず第一は、ひとたびテキストを読み始めたら、自分のできる範囲で分量・日程の予定を組み、冒頭から末尾までなるべく連続した期間のなかで、必ず順を逐って読み切ることを勧めたい。費やす期間はあまり長くないこと、毎日とはいわないまでも前回の記憶の途切れない程度の連続性が必要である。また、読み方は、多少乱暴な表現と受け取られるかも知れないが、とにかく「読破通読」を目標に遮二無二に読む、途中いさ

さか理解に苦しむ箇所があっても、それはそれとして、決して章や一文の飛ばし読みをせず、最終ページにたどり着く姿勢が肝要である。

第二は、テキストを読み進める際に、まずその内容の国語的理解に努めること、すなわち個々の項目についての専門性を主眼とする細密な理解は二次的なものとし、そこに書かれている「日本語」の内容を正確に読み解くことに力を注いで欲しい。用いられた漢字や比喩の意味、主語・述語や文章の構造への誤りない把握は、いかなるジャンルのものであれ日本語による著作を受容する第一歩である。そこで、テキスト読了に向けて日本文の文意文脈を正しく捉えるための道具として、常に国語辞典や漢和辞典を座右に置き、手間を厭わず活用して欲しい。確かに法律学の世界に特有の専門用語の意味が正しく捉えられていないと、入門書とはいえ理解に齟齬を生じる場合もおき得るリスクは否定しないが、そうした点については、テキストの中にも解決の糸口が示されており、「読破通読」の余慶に与ることが可能である。

◆履修上の注意

なお最後に、私は、これまでの対面講義でも、法律学の学習に際し、常に現行法令集である『六法』を必携すべきとの指摘を繰り返してきた。これは本講義においても変更されるものではない。いかなる分野であれ法を対象とする学習においては、最新年度の『六法』をひも解き条文を参照する行動が必須である。その種類や選択を巡るヒントは、テキストに示されており、ここで屋上屋を架することはせず、上述の結論を述べるにとどめた。

◆関連科目

「法学（憲法を含む）」

◆参考文献

霞信彦『法学講義ノート（第6版）』慶應義塾大学出版会、2016年

◆レポート作成上の注意点

叙述の、遮二無二にテキストを読み切るという作業は、一度のみならず繰り返しおこなうことが重要であり、回を重ね、併せて他者の著作を参照するなどの労を積むなかで、次第に理解に深みが増すと思う。こうした後に、初めてレポート課題取り組みへの途が開けることとなる。最初から課題の内容のみに注目してテキストの必要箇所を限定して学習を進めるなど、冒頭に述べた本講義の主旨のいずれにも合致しない。のみならず、体系への視野をもたない断片的かつ生半可な知識は、却って「百害あって一利なし」と言わざるを得ない。また、「まずレポートありき」の典型的なものとして、テキストや参考文献の丸写し・換骨奪胎による提出物（敢えてレポートとは表記しない）が散見されるが、これまた通信教育学習に取り組む本意の「はき違え」甚だしきものと断言しておきたい。いうまでもないが、参考文献については、もれなく書名・著者・刊行年・出版社名をレポートの最後に明記することが求められる。

◆成績評価方法

科目試験による。

史学概論

2単位

L027-7403、L7470

◆講義要綱

歴史学は、実証と構想を繰り返しながら営まれる総合的な学問としての性質を有している。「史学概論」は、総合の科学としての歴史学の特性・理論・方法・分類、史料の特質、歴史観の歴史、歴史の事実認識や解釈の問題、歴史学と他の学問領域との関係、歴史補助学の種類などを学び、歴史叙述の意味と役割について考えるための概説的な科目である。それは、歴史を学ぶための入門であると同時に、歴史研究に携わる人にとって常に顧みられるべき重要な理論的諸問題を含んでいる。従って、本科目の主要な目的としては、歴史学の特徴を総合的に検討することによって、自己の歴史研究の成果を、卒業論文という形で執筆する際に必要な理論・方法・基礎概念などについて把握することが挙げられる。指定教科書の構成は次の通りである。

第一章 歴史の記述と理論

第二章 二つの歴史理論

第三章 歴史観の構造

第四章 歴史の歴史

第五章 歴史における自由と必然

第六章 歴史の理解と説明

第七章 歴史における文化の問題

あとがき

◆テキストの読み方

テキスト並びに参考図書を熟読し、何が問われているのかについてよく理解することがレポート作成に必要である。その際に難解だと感じた箇所については、歴史学に関する事典・辞書・概説書などを用いて、可能な限り理解するための努力を行ってください。さらに、それを通して知的刺激を受け、自由意志で自己の関心を広げ、それと関連した文献を調べて、より多くの書籍を講読してほしい。

◆履修上の注意

「史学概論」に関わる文献だけではなく、歴史全般に関する概説書・研究書を積極的に講読してください。

◆関連科目

文学部第2類のすべての専門教育科目

◆参考文献

- ・E. H. カー著／清水幾太郎訳『歴史とは何か』（岩波新書、2003年）。
- ・渥塚忠躬『史学概論』（東京大学出版会、2010年）。
- ・林健太郎『史学概論』（有斐閣、1970年）。
- ・増田四郎『歴史学概論』（講談社学術文庫、1994年）。
- ・マルク・ブロック著／松村剛訳『歴史のための弁明』（岩波書店、2004年）。
- ・西村貞二『ブルクハルト』（清水書院、2015年）。
- ・竹岡敬温『「アナール」学派と社会史―「新しい歴史」へ向かって』（同文館出版、1990年）。
- ・二宮宏之『マルク・ブロックを読む』（岩波書店、2005年）。
- ・ヨハン・ホイジンガ著／里見元一郎訳『文化史の課題』（東海大学出版会、1978年）。
- ・ユルゲン・コッカ著／仲内英三・土井美德訳『社会

史とは何か：その方法と軌跡』（日本経済評論社、2000年）。

- ・弓削達『歴史学入門』（東京大学出版会、1986年）。
- ・ゲオルク・G・イッガース著／中村幹雄他訳『ヨーロッパ歴史学の新潮流』（晃洋書房、1986年）。
- ・ジョナサン・ハスラム著／角田史幸・川口良・中島理暁訳『誠実という悪徳 E. H. カーク1892-1982』（現代思潮新社、2007年）。

◆レポート作成上の注意点

レポート作成の際には、単にテキストや参考文献を書き写すのではなく、自分の言葉でわかりやすく表現してください。様々な事柄を論理的に整理し、段落分けを行ってください。また、どのような文献を用いて文章を作成したのかについてわかるように、参照した文献とその頁数を注の中で明記してください。他人の説の引用と自分の考えの区別が明瞭にわかるように気をつけて、執筆してください。手書きでレポートを作成する場合には、読みやすい字で書くように常に心がけてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本史概論

2 単位

L133-1991

市販書採用科目

◆テキスト

佐々木潤之介・佐藤信・中島三千男・藤田寛・外園豊基・渡辺隆喜編『概論日本歴史』（吉川弘文館、2000年）

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

日本史全般に関する基礎的な知識を修得し、通時代的な歴史像を育むことを目標とする。

〔授業の概要〕

日本列島の人々が原始・古代から近現代にかけて様々な社会を営み、時代と共に生きてきたことを、テキストの記述に即して学び、現代的な視点から考察する。

〔授業計画〕

テキストの構成は、次の通りである。

はじめに

I 古代

- 一 古代国家の成立
- 二 律令国家の形成と展開
- 三 摂関政治と地方社会

II 中世

- 一 中世社会の成立と展開
- 二 内乱と一揆の時代
- 三 中世文化の展開

III 近世

- 一 幕藩体制の確立
- 二 幕藩体制の動揺と解体
- 三 都市と民衆の文化

IV 近代

- 一 近代国家の成立
- 二 政党政治の発展と社会運動
- 三 アジア太平洋戦争

V 現代

- 一 戦後改革
- 二 復興と高度経済成長
- 三 現代の世界と日本

◆テキストの読み方

原始・古代・中世・近世・近現代の各時代の特色に留意しつつ、幅広い視野で日本史全体の流れを把握するように努めることとする。試験では、テキストの理解が問われるが、自らの考察を展開することも望まれる。

◆関連科目

新・日本史概説 I

◆レポート作成上の注意点

レポートの作成に当たっては、テキストや参考文献の引き写しではなく、自らの言葉でまとめる必要がある。また、文献を参照・引用した場合は、書誌情報を注記しなければならない。

◆参考文献

佐藤 信編『大学の日本史 教養から考える歴史へ 1 古代』（山川出版社、2016年）

五味文彦編『大学の日本史 教養から考える歴史へ 2 中世』（同上）

杉森哲也編『大学の日本史 教養から考える歴史へ 3 近世』（同上）

小風秀雅編『大学の日本史 教養から考える歴史へ 4 近代』（同上）

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目試験によって評価する。

新・日本史概説 I

2 単位

L134-1991

市販書採用科目

◆テキスト

佐藤信編『古代史講義』（ちくま新書、2018年）

五味文彦・高橋典幸編『中世史講義』（ちくま新書、2019年）

以上の2冊を両方学んでください。

◆講義要綱

列島において領域的統合が進められ、中国の国家モデルを借りた「国」の祖型の創出と現地化（日本化）が進行したのが古代であり、武士や庶民を担い手とする地域社会が形成・確立され、政治・経済・社会・文化など様々な面で、現代に直結する要素が歴史の表面に浮かび上がってくるのが中世という時代です。近年の研究で古代・中世の歴史像は大きく書き換えられており、ただテキストを読むだけでも当該期に対するイメージが変わって面白いのではないかと思います。さらに別掲の参考書や専門書などで知識と理解を深めてください。

◆参考文献

地域の歴史にアプローチする出発点となるのは、『～県の地名』（平凡社）や『角川日本地名大辞典』です。さらに詳しく調べるには、各自治体で編纂した『～県史』『～市史』の類が有用でしょう。いずれも近隣の図書館で探してみてください。また、テキストの内容を深めるためには、講談社学術文庫『日本の歴史』

第00～15巻のような詳しい通史や、専門の研究者が個別のテーマに取り組んだ一般向けの新書・選書にあたってみましょう。

◆レポート作成上の注意点

周辺が古代・中世には何という国・郷、あるいは荘園だったのか、何という名前の貴族や武士（あるいは百姓・商人・職人など）がどのような活動をしていたのか等々、かなり具体的な地域史像を打ち出して下さい。そして同時に、単なる郷土史に終わってしまわないよう、当時の日本全体の情勢の中に、その地域の歴史を置いて論ずることが必要です。なお、海外在住者や北海道民など、現住所の古代・中世を探るのが困難な場合は、何らかの形で自分とゆかりのある土地の古代・中世史をレポートのテーマとして結構です。

また、当然のことですが、参考文献を引き写すだけではダメです。集めた情報をまとめ直した上で、自分の言葉でレポートにしてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本史特殊Ⅰ

2単位

—法と政治の日本古代史—

L123-1601

◆講義要綱

日本古代の律令国家は天皇を頂点とする中央集権的な国家機構のもとに、唐制を範とした律令諸制を採用していた。しかし、その実態は唐制と全く同じものではなく、そこには大化前代からの氏族制的な要素が残されている。日本の律令国家が律令制と氏族制の二元的な性格をもっているといわれるゆえんである。そのような国家構造は王権と氏族との複雑な政治的関係の中から生まれた。

テキストでは邪馬台国時代の国家の発生期から大化改新を経て律令制へ、さらに平安時代までの法と政治の変遷を辿っている。日本古代における国家の法や制度の成立過程を辿り、その政治的背景を理解することで日本古代国家の特色を理解することが学習の目的である。

◆テキストの読み方

テキストは自主的な学習の発展に期待する意味で最小限の事柄だけを記しています。参考書と関連させて自分自身で内容の理解を深めてください。

◆履修上の注意

法制史に限らず日本古代史に関する概説書を読んでおいてください。

◆参考文献

篠川賢『飛鳥と古代国家』日本古代の歴史2、吉川弘文館、2013年
森公章編『倭国から日本へ』日本の時代史3、吉川弘文館、2002年
吉川真司『飛鳥の都』シリーズ日本古代史③、岩波新書、2011年
『岩波講座日本歴史』古代1～5、岩波書店、2013～2015年
『岩波講座日本通史』古代1～5、岩波書店、1993～1995年

歴史学研究会・日本史研究会編『東アジアにおける国家の形成』日本史講座第1巻、東京大学出版会、2004年

◆レポート作成上の注意点

参考書の使用について：本書「学習の手順」の「レポート作成上の注意」の中に記されているように、「利用した参考書については、必ずその書名および執筆者名を記し」、参考書からの引用文については「注1」等の記号を用い、レポート本文中に注記を付して自分の文章と区別して下さい。またテキストのほかに、参考書は最低2冊以上利用してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本史特殊Ⅱ—キリシタン史—

2単位

L124-1601

◆講義要綱

ポルトガル人が初めて日本に渡来してから江戸幕府による「鎖国」至るまでの約一世紀間は、「キリシタン時代」と呼ばれる。この時代の対外関係をカトリック教会の布教事業を軸として捉えてみたい。

序章 キリシタン史料

第一章 大航海時代と日本

- 1 大航海時代の国家と教会
- 2 ザビエルのインド・東南アジア布教
- 3 ザビエルの日本布教
- 4 キリシタンと日本の政権

第二章 巡察師ヴァリニャーノと適応主義

- 1 ヴァリニャーノの布教政策
- 2 キリシタン時代の教会領長崎
- 3 秀吉のキリシタン対策
- 4 文禄の役とキリシタン宣教師

第三章 イエズス会の教育と布教

- 1 イエズス会の教育
- 2 日本人聖職者の養成問題
- 3 日本における良心問題
- 4 イエズス会の中国布教

第四章 禁教、迫害、殉教

- 1 江戸幕府の禁教政策
- 2 キリシタンの迫害と殉教
- 3 元和の大殉教
- 4 島原の乱と「鎖国」
- 5 近世日本と東アジア

終章 潜伏の時代へ

◆テキストの読み方

テキストを読むにあたっては、キリシタン史の全体像を理解することと、いくつかの個別の問題に対する理解を深めることに留意してもらいたい。

◆参考文献

松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（全15冊）同朋舎、1987～98年
河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社、1985年
アルーペ神父・井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書翰抄』（2冊）岩波文庫、1949年
ヴァリニャーノ（松田毅一他訳）『日本巡察記』平凡

社、1973年
 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館、1990年
 高瀬弘一郎『キリシタンの世紀—ザビエル渡日から「鎖国」まで—』岩波書店、1993年
 浅見雅一『フランシスコ＝ザビエル—東方布教に身をささげた宣教師—』山川出版社、2011年

◆レポート作成上の注意点

レポート作成にあたっては、「史料」と「研究」を区別してもらいたい。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本史特殊Ⅳ

2単位

L111-1191

市販書採用科目

◆テキスト

浜野潔・井奥成彦・中村宗悦ほか『日本経済史 1600—2015』慶應義塾大学出版会、2017年

※テキストは、浜野潔・井奥成彦・中村宗悦ほか『日本経済史 1600-2000』（慶應義塾大学出版会、2009年）を用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

テキストには、江戸時代から現代に至るまでの日本経済の流れが記されているが、日本の江戸時代がどのような「近代」を準備し、日本の近代はいかなる歩みをして現代に至っているのかということに留意しながら読んでほしい。

◆テキストの読み方

まずテキストを理解すること。読んでいて、難しいと感じる部分もあるかもしれないが、その場合は、日本史や経済学の辞典類を参考にしながら、できるだけ問題を解決してほしい。おおよそ理解できたら、勉強の場を関連図書類（テキスト末尾の参考文献参照）に広げ、理解を深めるとともに、関心を広げてほしい。

◆履修上の注意

高等学校レベルの日本史の知識と、経済学の基礎的な概念や理論をある程度知っておいた上で履修することが望ましい。

◆参考文献

井奥成彦『19世紀日本の商品生産と流通』日本経済評論社、2006年

井奥成彦編著『時代を超えた経営者たち』日本経済評論社、2017年

その他、テキストに掲載されている諸文献

◆レポート作成上の注意点

どこからどこまでが他人の説で、どこからどこまでが自分の説（考え）なのかをはっきりわかる書き方をすること。他人の説の引用については、必ず注を付けること。

◆成績評価方法

科目試験による。

古文書学

2単位

L052-4902、L29

◆講義要綱

古文書学とは、日本史研究の材料となる古文書について考える学問であり、日本史を学ぶ上での基盤となるものです。日本史に関する卒業論文の執筆を予定している学生は、是非とも履修してください。本テキストは文体が古風なため、読んで理解するにはいささか努力が必要かもしれませんが、古文書学の体系を要領よくまとめた名著として知られているものであり、別に示した参考書も積極的に活用しながら、学習を進めてください。

◆テキストの読み方

まず第一～三章にひととおり目を通した上で、このテキストの学習の中心となる第四・五章に進みます。第四章は古文書を主に形態学的観点から分析したもので、限られた紙数に要点がまとめられています。第五項については、佐藤進一『花押を読む』（平凡社）をあわせ読むと理解しやすいでしょう。第九項の中の「特殊用語」は、指定参考書として掲げた佐藤進一『新版古文書学入門』等に豊富に掲載された古文書の実例に即して見ると、頭に入りやすいと思います。第五章については、やはり『新版古文書学入門』の記述が詳しいので、適宜参照しながら学習を進めてください。

◆履修上の注意

日本史に関する一般常識がなくては、十分な学習が望めません。「歴史（日本史）」を既に履修していることが望ましい。

◆科目試験出題用指定参考書

佐藤進一『新版古文書学入門』（法政大学出版局、2003年）

◆参考文献

古文書の種類については、佐藤進一『新版古文書学入門』（法政大学出版局、2003年）が詳しいので、是非とも参照してください。さらに進んで最先端の古文書学について知るには、2018年に国立歴史民俗博物館で開かれた企画展示の図録『日本の中世文書—機能と形と国際比較—』が、古文書の図版も豊富でお薦めできます。古文書を読む能力を養っていく上では、同図録のほか、『演習古文書選』全8冊（吉川弘文館）などの古文書写真集や各種史料集が有用です。史料の読解に用いる国語辞典としては『日本国語大辞典』（小学館）、漢和辞典としては『大漢和辞典』（大修館書店）、日本史辞典としては『国史大辞典』（吉川弘文館）が優れているので、近隣の図書館等で利用して下さい。くずし字辞典としては『五体字類』（西東書房）、『くずし字用例辞典』『くずし字解説辞典』（東京堂出版）などがあります。

◆レポート作成上の注意点

古文書の実物は、各地の博物館に足を運んで探してみてください。東京・京都・奈良・九州（福岡県太宰府市）の各国立博物館や国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）・国立公文書館（東京都千代田区）、あるいは都道府県立の歴史博物館には常設で展示してある可能性が高いほか、市町村の博物館や寺社付設の資料館・

宝物館にも古文書を所蔵・展示しているところがあります。また、毎年秋には奈良国立博物館で正倉院展、京都府総合資料館で東寺百合文書展が開かれ、鎌倉の建長寺・円覚寺では文化の日前後の風入れ（虫干し）期間に所蔵文書が数日公開されており、そのほか古代・中世の歴史に関わる特別展があれば普通は何か出陳されています。レポートの題材に取り上げた古文書の実物をどこで見たのか、レポートに必ず明記してください。

古文書の様式については、前掲の『新版古文書学入門』を必ず参照してください。内容については、博物館等の図録だけでなく、古代・中世の歴史に関する通史（記述が詳しいものとしては講談社版『日本の歴史』や中央公論新社『日本の中世』など）や専門書、あるいは関係する地域の自治体が編纂した『～県史』『～市史』の類を探して、詳しく調べてください。

レポート・試験ともに、学問の性格上、古文と漢文の読解力が要求されます。こまめに各種の辞典（国語・漢和・日本史・古文書など）を引くことで、そうした能力を身に付けてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

東洋史概説Ⅰ

2単位

L031-7601、L7679

◆講義要綱

本科目は唐に至るまでの中国古代の歴史を扱います。この時代を理解するには、まず、『史記』や『漢書』『三国志』などの伝世史料を読むことが重要ですが、それとともに、地下から発見される考古遺跡・資料や出土文字資料も新たな事実を私たちに伝えてくれます。テキストで殷周時代から秦の始皇帝による統一、漢王朝、三国時代、そして隋唐帝国に至る過程を理解するとともに、参考文献で近年発見された各時代の考古遺跡・資料および出土資料について、自分でまとめ、分析してみましょう。

◆テキストの読み方

殷・周から唐までの通史をきちんと把握しつつ読みこみ、参考文献を参照しつつ、自分なりの分析を試みてください。

◆参考文献

小澤正人・西江清高『中国の考古学』同成社、1999年
松丸道雄『甲骨文の話（あじあブックス）』大修館、2017年
竹内康浩『中国王朝の起源を探る（世界史リブレット）』山川出版社、2010年
中国出土資料学会『地下からの贈り物—新出土資料が語るいにしへの中国』東方選書、2014年
松崎つね子『睡虎地秦簡（中国古典新書続編）』明德出版社、2000年
鶴間和幸『秦漢帝国へのアプローチ（世界史リブレット）』山川出版社、1996年
鶴間和幸『ファーストエンペラーの遺産（秦漢帝国）』講談社、2004年
鶴間和幸・恵多谷雅弘監修『宇宙と地下からのメッセ

ージ—秦始皇帝陵とその自然環境』D-CODE、2013年

富谷至『木簡・竹簡の語る中国古代 増補新版——書記の文化史』岩波書店、2014年

舩山明『漢帝国と辺境社会—長城の風景』中公新書、1999年

谷口建速『長沙走馬楼呉簡の研究』早稲田大学出版部、2016年

関尾史郎『西域文書からみた中国史』山川出版（世界史リブレット）、1998年

石見清裕『唐代の国際関係』山川出版社、2009年

鈴木靖民『日本の古代国家の形成と東アジア』吉川弘文館、2011年

山本英史『中国の歴史』河出書房新社、2010年

村松弘一『中国古代環境史の研究』汲古書院、2016年

◆レポート作成上の注意点

参考文献のなかから数冊を必ず読み、それを手がかりに、自分の意見を書くようにしてください。参考文献からの長文の引用やWebからの直接引用は認めません。

◆成績評価方法

科目試験による。

東洋史概説Ⅱ—中国史—

2単位

L086-0301

◆講義要綱

本科目では、近代中国の歴史を扱う。本年（2019年）はヴェルサイユ条約（1919年）から数えてちょうど百年目の年にあたる。この条約は第一次世界大戦の講和条約の一つであり、パリ講和会議で第一次世界大戦の戦後処理をめぐって話し合いがもたれた。中国では、この講和会議の結果に対して不満が噴出し、抗日・反帝国主義運動であった五・四運動が発生し、それが中国全土に普及することになった。このような戦後処理を原因とした問題だけでなく、第一次世界大戦は人類が初めて体験した世界規模の戦争であり、少なからず世界各地に影響を及ぼした。そのような事態は中国も例外ではなく、国内政治や社会に様々な影響を与えた。成立したばかりの中華民国による中央集権化の試みが岐路に立たされ、地方の分権化が強まることで南方政府を無視できなくなった。また日本が北京政府に21ヵ条要求を突きつけるなど国際環境も大戦勃発前と様変わりした。またこの大戦中に勃発したロシア革命も国際社会に様々な影響を及ぼした。以上のような背景や展開をふまえて、第一次世界大戦前後の時期（具体的には1910年代から20年代にかけて）の中国について、世界大戦やロシア革命などといった国際関係を視野に入れつつ、中華民国における政治と社会についての変化や第一次世界大戦の影響などに注目して分析してください。

◆テキストの読み方

指定教科書の附編「研究の手引き」及び参考文献①や②を参照しながら、指定教科書を通読して、現代にいたるまでの中国史の概観を把握してください。その上で、参考文献の③～⑥などの概説書を読み、近代中

国がどのような時代であったか、世界の動きと合せて理解し、⑦～⑪などの関連書で課題にそったテーマを掘り下げてください。その他の参考文献は、テキスト⑦～⑪を手掛かりにして自分で探してください。参考文献で紹介したもの以外も積極的に読むことが望ましい。

◆参考文献

- ①磯波護・岸本美緒・杉山正明編『中国歴史研究入門』名古屋大学出版会2006年
- ②岡本隆司・吉澤誠一郎編『近代中国研究入門』東京大学出版会2012年
- ③久保亨・土田哲夫・高田幸男・井上久士『現代中国の歴史：兩岸三地100年のあゆみ』東京大学出版会2008年
- ④吉澤誠一郎『清朝と近代世界—19世紀』（シリーズ中国近現代史①）岩波新書2010年
- ⑤川島真『近代国家への模索—1894-1925』（シリーズ中国近現代史②）岩波新書2010年
- ⑥石川禎浩『革命とナショナリズム—1925-1945』（シリーズ中国近現代史③）岩波新書2010年
- ⑦山室信一ほか編『現代の起点—第一次世界大戦』全4巻（1. 世界大戦、2. 総力戦、3. 精神の変容、4. 遺産）岩波書店2014年
- ⑧笠原十九司『第一次世界大戦期の中国民族運動：東アジア国際関係に位置づけて』汲古書院2014年
- ⑨中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』中央大学出版部1999年
- ⑩川島真『中国近代外交の形成』名古屋大学出版会2004年
- ⑪小野寺史郎『中国ナショナリズム：民族と愛国の近現代史』中公新書2017年

◆レポート作成上の注意点

参考文献を手掛かりに、出来るだけ多くの文献を読んだうえで、自分の言葉で見解をまとめてください（参考文献で紹介したもの以外の文献も積極的に参照されることが望ましい）。その際に、どこからどこまでが他人の説（参考文献などの内容やそこから得られた知識を含む）で、どこからどこまでが自分の見解（考え）なのかがはっきりわかるような書き方をしてください。一次・二次資料やWEBページを参考にした場合は、その都度、必ず註をつけて、文末に出典（著者、題名、出版社、出版年、頁数など）及び引用ページ（閲覧日時も必ず記載）を逐一示してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

東洋史特殊

2単位

L098-0601

◆講義要綱

「東洋史特殊」のテキストは、主にトルコ系諸民族の歴史を通観しながら近現代における中央アジア、アゼルバイジャン、トルコにおける民族主義、ナショナリズムの発展などについて述べたものである。ソ連邦の崩壊によってユーラシアのアジア側の部分でさまざまな民族問題が噴出している。それらの歴史的な背景をトルコ系諸民族の文化を中心に考えていこ

うというのが、このテキストの目的である。本書を通じて広大な地域に分布するアラブとは異なるトルコ系諸民族の世界に関する理解が深まるものと思われる。

◆履修上の注意

総合教育科目の「歴史（東洋史）」を履修していることが望ましい。

◆関連科目

「ロシアの政治」

◆参考文献

永田雄三編『西アジア史Ⅱ イラン・トルコ』山川出版社、2002年

◆レポート作成上の注意点

課題・参考文献の文章を引用または典拠として利用した場合には、必ずその文献名と頁数を註として明記してください。なお、註はレポートの最後にまとめて示すこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

西洋史概説Ⅰ

2単位

L119-1501

◆講義要綱

この概説は、ローマ帝国期から16世紀中頃までのヨーロッパ史を対象とします。ローマ帝国やヨーロッパ中世は、私たちが思っている以上に、いくつもの面で現代社会に影響を与えています。公正金利、国民、サイエンス、そして皆さんが通っている大学などです。本科目を取り上げるのは、ローマ帝国、その瓦解後の模索、帝国、教皇、周辺の国々、キリスト教の浸透、中世の生活、国民の出現、宗教改革、近代の芽生えなどです。

この主題についてさらに理解を深めるために、テキストの他に、堀越宏一ほか編著『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』（ミネルヴァ書房、2013年）および以下の参考文献も読んでください。

◆履修上の注意

総合教育科目「歴史（西洋史）」を履修していることが好ましい。

◆関連科目

「西洋史概説Ⅱ」「西洋史特殊Ⅱ」「西洋史特殊Ⅲ」

◆参考文献

関哲行『旅する人びと』（岩波書店、2009年）またはノルベルト・オースラー『中世の旅（新装版）』（法政大学出版局、2014年）のうち1冊を読んでください。またレーモン・ウルセル『中世の巡礼者たち一人と道と聖堂と』（みすず書房、1987年）、エリック・J. リード『旅の思想史—ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』（法政大学出版局、1993年）、宮崎揚弘編『続・ヨーロッパ世界と旅』（法政大学出版局、2001年）、ジャネット・L. アブー＝エルゴド『ヨーロッパ覇権以前—もうひとつの世界システム〈上〉〈下〉』（岩波書店、2001年）、ケネス・ポメランツ他『グローバル経済の誕生：貿易が作り変えたこの世界』（筑摩書房、2013年）なども有益です。

◆レポート作成上の注意点

レポート作成のために、必ず上記の参考文献も読ん

てください。

レポートは、単にテキストと参考文献の丸写しや抜き書きではありません。自分自身の言葉でレポート課題の問題に対応した答となるよう作成してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

西洋史概説Ⅱ

2 単位

L062-8801、L8885

◆講義要綱

この科目はおよそ16世紀から20世紀までの西洋史概説を扱います。歴史上の大きな課題や事件を、世界史全体の構造のなかで捉えることを学習の目的とします。したがって、その課題や事件の特色や性格を把握し、現代世界を含む後代への影響や意義を考えることが肝要になります。

◆テキストの読み方

テキストに書かれている内容を表面的になぞって暗記するのではなく、テキストを歴史の流れを理解するためのガイドブックとして用いながら、参考文献を読むようにしてください。テキストに簡略にまとめられている事件や概念が成立した背景と意味は、複数の文献を批判的に読むことを通じてはじめて明らかになります。

◆履修上の注意

総合教育科目「歴史（西洋史）」を履修していることが望ましい。

◆関連科目

「西洋史概説Ⅰ」「西洋史特殊Ⅲ」

◆参考文献

柴田三千雄ほか編 世界歴史体系『フランス史2、3』山川出版社、1996、95年

村岡健次ほか編 世界歴史体系『イギリス史2、3』山川出版社、1990、91年

成瀬治ほか編 世界歴史体系『ドイツ史2、3』山川出版社、1996、97年

* 以下は今年度レポート課題用参考文献

長谷川貴彦『産業革命』山川出版社：世界史リブレット116、2012年

R. C. アレン『世界史のなかの産業革命』名古屋大学出版会、2017年（英語版：ケンブリッジ大学出版会、2009年）

角山栄『生活の世界史〈10〉産業革命と民衆』河出文庫、1992年（旧版：河出書房新社、1975年）

T. S. アシュトン『産業革命』岩波文庫、1973年

◆レポート作成上の注意点

レポートは、テキストや参考文献の丸写しや抜き書きではありません。自分自身の言葉で、レポート課題の問いに対応した答えとなるように作成してください。その際、レポートの記述内容が、どの参考文献のどの部分によっているのか、きちんと註をつけて示してください。

レポート作成のために、複数の参考文献を使用してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

西洋史特殊Ⅰ—古代オリエント史— 2 単位

L022-7203

◆講義要綱

アレクサンドロスの東征によって、古代世界の中心が西アジアからヨーロッパ側に移ったことは、ヘレニズム思想の広がりをもたらし、結果的に世界のあり方を大きく変えるものとなった。しかし、アレクサンドロス自身がこの東征で何をめざしていたのかについては議論があり、彼とその周囲の人々との間にも考え方の違いがあったとされる。まず、そのような葛藤について整理してください。その際、教科書と参考書の両方を丁寧に読んでください。

また、その後生まれてきたヘレニズム国家、プトレマイオス朝やセレウコス朝は古代西アジア的な要素とギリシア的な要素をどのように反映した文化を形成したのかを記しなさい。さらには、アレクサンドロスの死後、徐々にヘレニズム国家から独立していった諸国は、どのような姿勢をとっていたのかについても考察してください。

◆参考文献

森谷谷俊『アレクサンドロスの征服と神話（興亡の世界史）』講談社、2007年

◆レポート作成上の注意

1. 参考文献もかならず活用すること。
2. 論理の流れと段落を意識して書くこと
3. 議論、意見の根拠を明確に示すこと

◆成績評価方法

科目試験による。

新・西洋史特殊Ⅱ

2 単位

—近世ヨーロッパの宗教・政治・社会—

L137-1901

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

本科目は、「近世ヨーロッパの宗教・政治・社会」について学習することをテーマとするが、以下の5つの点をその到達目標として掲げたい。

- ①宗教思想の内実よりも、むしろそれが16世紀から18世紀のヨーロッパの歴史の中で政治や社会に与えた影響や教会と国家との間の相互関係を中心に考察し、その歴史的経緯を理解する。
- ②近世におけるキリスト教の歴史や思想を知ることによって、西洋に対する異文化理解のための基礎的な認識や視野を広げる。
- ③西欧文化の宗教的根底に触れることによって、教養を深め、国際的な感覚を身に付け、異文化理解や異文化コミュニケーションのための基礎的な認識や視野を広げる。
- ④人文・社会科学的な思考に接することによって、論理性や客観性の追求のための方法論を学ぶ。
- ⑤外国の歴史を学ぶことによって、現代の日本社会やその過去の歴史と文化を相対化し、別の視角から再検討する精神思考を育成し、自分という存在を問い直す契機を提供する。

〔授業の概要〕

本科目では、16世紀から18世紀のヨーロッパにおける宗教と政治や社会の関係について考察する。この時代には、中世的な封建社会が衰退し、徐々に主権国家が形成され、普遍的な権威や権力を持っていた教皇と皇帝の地位は大幅に低下し、中世ヨーロッパに統一であった普遍的支配秩序が動揺した。近世ヨーロッパでは、旧来の身分制的な社会秩序は存続してはいたものの、宗教改革、宗教戦争、絶対主義を経て、各地で教会と政治・社会との関係は、修道院の廃止、聖職者の特権の撤廃、教会裁判権の縮小、社会福祉施設の変容などに見られるように、著しく変化したのである。また宗教改革によって宗派分裂が決定的になると、他宗派や他宗教に対する寛容と不寛容の問題が深刻化した。このように現代ヨーロッパ社会が抱える諸問題の背景や起源を理解する上でも、近世ヨーロッパ史を学ぶ意義は非常に大きい。

〔授業計画〕

指定教科書の構成は次の通りである。

はじめに

第1章 ルネサンスとその影響

第2章 宗教改革と近代社会の形成

第3章 キリスト教の戦争観と近世における宗教戦争

第4章 絶対主義の時代と主権国家の形成

第5章 ピューリタン革命と絶対主義の終焉

おわりに

◆テキストの読み方

まずテキストを複数回精読してください。さらに、それを通して知的刺激を受け、自由意志で自己の関心を広げ、それと関連した文献を調べて、より多くの書籍を講読してほしい。その際に難解だと感じた箇所については、近世ヨーロッパ史に関する事典や辞書などを用いて、可能な限り理解するための努力を行ってください。

◆履修上の注意

高等学校の世界史レベルの知識を身につけた上で、「歴史（西洋史）」を既に履修していることが望ましい。近世ヨーロッパ史全般に関する概説書・研究書を積極的に講読してください。

◆関連科目

「歴史（西洋史）」「史学概論」「西洋史概説Ⅰ」「西洋史概説Ⅱ」「西洋史特殊Ⅲ」

◆レポート作成上の注意点

レポート作成の際には、単にテキストと参考文献を書き写すのではなく、自分の言葉でわかりやすく表現してください。様々な歴史的事象を論理的に整理し、段落分けを行ってください。また、どのような文献を用いて文章を作成したのかについてわかるように、参照した文献とその頁数を注の中で明記してください。他人の説の引用と自分の考えの区別が明瞭にわかるように気をつけて、執筆してください。

◆参考文献

- ・二宮宏之『フランスアンシアン・レジーム論—社会的結合・権力秩序・叛乱—』（岩波書店、2007年）。
- ・小倉欣一編『近世ヨーロッパの東と西—共和政の理念と現実—』（山川出版社、2004年）。
- ・甚野尚志・踊共二編著『中近世ヨーロッパの宗教と

政治—キリスト教世界の統一性と多元性—』（ミネルヴァ書房、2014年）。

- ・ピーター・H. ウィルスン著／山本文彦訳『神聖ローマ帝国1495-1806』（岩波書店、2005年）。
- ・阪口修平・丸島宏太編著『近代ヨーロッパの探求⑫—軍隊—』（ミネルヴァ書房、2009年）。
- ・R.W. スクリプナー、C. スコット・ディクソン共著／森田安一訳『ドイツ宗教改革』（岩波書店、2009年）。
- ・野々瀬浩司『宗教改革と農奴制—スイスと西南ドイツの人格的支配—』（慶応義塾大学出版会、2013年）。
- ・ベルント・メラ著／森田安一他訳『帝国都市と宗教改革』（教文館、1990年）。
- ・ペーター・ブリックレ著／田中真造・増本浩子訳『ドイツの宗教改革』（教文館、1991年）。

◆成績評価方法

レポート課題と科目試験（単位修得試験）の合格により単位修得となる。

- ・レポートを評価する基準としては、①単にテキストと参考文献を書き写すのではなく、それを的確に理解し、自分の言葉でわかりやすく表現しているかどうか、②様々な歴史的事象を論理的に整理し、段落分けを行っているかどうか、③どのような文献を用いて文章を作成したのかについてわかるように、参照した文献とその頁数を注の中で適切に明記しているかどうか、④他人の説の引用と自分の考えの区別が明瞭にわかるように気をつけて執筆しているかどうか、などを考慮する。
- ・科目試験の答案の判定基準としては、歴史の流れを正しく把握し、テキストの内容を的確に理解しているかどうかを、最も重視する。

西洋史特殊Ⅲ

2単位

—近代イギリス国家の成立（中世から近世へ）—

L044-7804

◆講義要綱

本科目のテキストでは、イギリスが近代化しデモクラシーへと発展する基礎が築かれる過程が中心に論じられている。特に、他のヨーロッパ諸国と違う独自の型の近代化を推進する基礎条件が、中世にいかに関成されたかを書いたつもりである。イギリスでは、全体主義的王権や官僚組織の肥大化と硬直化といった弊害が比較的少ないのが特色だった。

イギリス史の特徴的発展の原因の一つとして、中世に一種の自主自営の「民」、即ち、ナイト、ジェントリー、スクワイヤー階層（いわゆる「独立自尊の民」の原型）が生まれ発展したことが指摘されている。また、他国と比較して、都市と農村部の有力者層の利害の調和と融合が進行したことも注目に値する。改訂版では、この点をやや具体的に述べた。

もう一つ重要な点は、イギリス中世社会においては、貨幣経済の浸透と社会全体の商業化が早くから顕著なことである。この傾向はすでに12世紀に萌芽的な形で見られ、13世紀に中間層を中心として封建的身分が主として貨幣収益を基準に再編成されていった（た

例えば「騎士強制」)。後には、さらに上級階層の分化も貨幣収益を軸に進められた。封建制度の中核的義務である。ナイト勤務も12世紀末以来、軍役代納金制度の導入により、金納化が進んだ。イギリスは保守的でありながら社会の進歩に遅れることがなかった。これは、中世以来、社会の中産層以上が、時代の進展に耐えるか主導する人々によって占められていたからである。彼ら、社会を主導する層が政治権力に寄生する度合いが比較的低く、自己の力に依存する度合いが強かったのである。

しかし、このような特色のために、逆にイギリス社会の中に激しい生存競争を生むことになった。ある意味では、これは、安定的成長の代償かも知れない。ここに歴史の真の過酷さがある。これを何らかの方法で緩和するために、社会福祉制度や弱者救済の思想が必要となり、教会の慈善の役割が大きな意味を持つことになるのである。

さらに、イギリスの国制は早い時代から社会の進展に敏感に順応した。法や制度の柔軟性は、軍務の金納化や他の封建的付帯義務の金納化にも見られる。この現象はマグナ・カルタにも顕著である。マグナ・カルタには、封建的付帯義務の規定が多いが、その時点で封建的負担はすでに貨幣負担化の傾向が見られた。また、特に、ヨーロッパの中世王制には租税制度の欠陥が一般にみられるが、イギリスではその欠陥は13世紀の混乱を経て解決され、近代的租税制度への基礎が確立された。「国家による経済的要求は「民」の合意を要する」という原則が確立され、また国王も自由保有地にはみだりに立ち入れないという形で私有財産の権利が保障された。その結果、国王は、「民」の合意なしには国政の基礎である十分な収入を確保できなくなったのである。そのため、王権の強大化が抑止されることになり、また、「民」の合意を得るには国王は「民」の意に適う国政の改革を行わねばならないため、制度の進歩・発達が保証され、制度の硬直化が阻止されたのである。立法における「民」の請願の重要性、無能あるいは腐敗役人の弾劾など裁判や行政における中間層の役割などを保証したのは、議会の財政特権だった(中世末の議会制度の発達の項参照)。この発展の過程では、多くの混乱、時には犠牲者が見られたが、何度か革命の事態は回避された。

イギリス史はヨーロッパ全体の中で理解されねばならない。多くの外国勢力がイギリスに流入し、また多数のイギリス人が海外で活躍した。この外との交流と摩擦から多くの影響を受け、イギリスは文化的経済的にも豊かとなった。近年この側面の研究に多くの関心が払われているが、本テキストでは、紙数の制限や現在のわが国の研究状況のために説明が十分ではない。

また、記述が12・13世紀に詳しくそれ以外の時代がやや簡略であるが、それは著者の研究関心と同時に本国の研究状況にもよるものである。ただ、本テキストは、現在、イギリス中世国制史に関して邦文で最も詳細なものである。昨今新聞紙上を賑わすこともある租税徴収と国民経済との関連、官僚の恣意的な自由裁量の抑制、法の近代化の問題などを考える上で、日本とイギリスを比較することは、興味深く思われるかもしれない。たしかに、このような方法は、研究の視角を決め問題を選択する時には有益であろう。しかし、

このような「比較研究」は、現実には方法的にきわめて難しいものであり、安易に行なうと単に読み物に終わる擬似的比較史に墮する可能性が高く、危険である。一にも二にも安易な比較を避け、対象とする国の史実をよく調べ、それをその時代の全状況の中に置いて考えることが重要である。歴史研究では、細かい問題を、あくまでもそれが置かれた広い状況の観点から考察するのが重要なのである。

◆履修上の注意

特に指定した科目の履修を終わっている必要はありませんが、まずイギリス中世史の基礎的な知識を身につけるために、エドモンド・キング『中世のイギリス』(慶應義塾大学出版会、2006年)を読んでください。そして、バーバラ・ハーヴェー『12・13世紀』(オックスフォード ブリテン諸島の歴史4巻)(慶應義塾大学出版会、2012年)とラルフ・グリフィス『14・15世紀』(オックスフォード ブリテン諸島の歴史5巻)(慶應義塾大学出版会、2009年)を読んでさらに知識を深め、その後、課題の内容を理解するために、朝治啓三、渡辺節夫、加藤玄編『中世英仏関係史 1066—1500年』(創元社、2012年)と城戸毅『百年戦争 —中世末期の英仏関係—』(刀水書房、2010年)を丁寧に読んでください。

◆レポート作成上の注意点

まずテキストを通読し、中世イングランド史の流れ、問題点をより大きな観点から理解してください。そして、個別のレポート課題をこの大きな流れの中に位置づけて考察してください。レポートを作成する際、それが課題の問いに対する直接の答えとなるように注意してください。また、それがテキストの抜き書き、丸写しにならないよう、自分自身の考えに基づき、自分自身の言葉で書いてください。これは、科目試験の際にも当てはまります。

◆成績評価方法

科目試験による。

世界史概論

2単位

L136-1991

市販書採用科目

◆テキスト

「世界の歴史」編集委員会編『新 もういちど読む山川世界史』(山川出版社、2017年)

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

本科目は、主に中学校社会科ならびに高等学校地理歴史科の教員免許状の取得を目指す学生を対象とする。昨今の急速なグローバル化は、中学・高校教育における世界史学習の重要性をますます高めると同時に、世界史教育を担う教員に従来の時代・地域の枠を超えた包括的な世界史認識を持つことを強く求めている。このような状況をふまえ、本科目は履修者が古代から現代に至るアジアやヨーロッパをはじめとする世界各地の歴史に関する一般的知識を通時的に学ぶと同時に、それらがもつれ合い、絡み合うことにより生み出された包括的な世界史の流れを深く理解することを到達目標とする。履修者には、受動的な知識の習得に満足することなく、学んだ知識をもとに、近い将来授業を行

う立場となることを意識することが望まれる。

〔授業の概要〕

本科目は、「文明の起源」から説き起こし、東アジア世界、イスラーム世界、ヨーロッパ世界だけでなく、アメリカやアフリカなどにもおける「古代」「中世」「近代」「現代」を包括的に概説する。履修者は、それらの時代において政治や経済、宗教や文化がどのような役割を果たし影響を与えたかを学び、さらに東西交渉・グローバリズム・ポピュリズム・領土問題など、時事問題を理解するための基礎的知識を養うことも目的とする。

〔授業計画〕

指定教科書の構成は次の通り。

序章 文明の起源

第Ⅰ部 古代

第1章 古代の世界

第Ⅱ部 中世

第2章 東アジア世界

第3章 イスラーム世界

第4章 ヨーロッパ世界

第Ⅲ部 近代

第5章 近世ヨーロッパの形成

第6章 欧米近代社会の確立

第7章 アジアの変動

第Ⅳ部 現代

第8章 帝国主義時代の始まりと第一次世界大戦

第9章 ヴェルサイユ体制と第二次世界大戦

第10章 現代の世界

◆履修上の注意

総合教育科目「歴史（東洋史）」および「歴史（西洋史）」を履修していることが好ましい。

◆関連科目

「東洋史概説Ⅰ」「東洋史概説Ⅱ」「西洋史概説Ⅰ」「西洋史概説Ⅱ」

◆レポート作成上の注意点

レポート作成のために、必ず指定の参考文献も読んでください。

レポートは、単にテキストと参考文献の丸写しや抜き書きではありません。自分自身の言葉でレポート課題の問題に対応した答となるよう作成してください。

◆参考文献

岸本美緒『中国の歴史』（ちくま学芸文庫、2015年）、佐藤次高編『西アジア史Ⅰ』（山川出版社、2002年）、永田雄三編『西アジア史Ⅱ』（山川出版社、2002年）、秀村欣二編『西洋史概説 第四版』（東京大学出版会、1988年）、山本茂・藤縄謙三・早川良弥・野口洋二・鈴木利章編『西洋の歴史 古代・中世編』（ミネルヴァ書房、1988年）、大下尚一・西川正雄・服部春彦・望田幸男編『西洋の歴史 近現代編増補版』（ミネルヴァ書房、1998年）

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

オリент考古学

2単位

L104-0991

市販書採用科目

◆指定テキスト

杉本智俊『図説 聖書考古学 旧約篇』河出書房新社、2008年

◆講義要綱

旧約聖書の背景となった古代イスラエル王国は、ダビデ、ソロモン二人の王の治世からなる統一王国によって確立されたとされる。ダビデは勇士として、ペリシテ人など周辺諸民族を制圧し、南レヴァント地域の支配を固めた。一方、ソロモンは知恵者として知られ、国内の行政組織の整備を果たし、安定した政権基盤、経済基盤を形成したとされる。

これまでこの時代に関する考古学的情報は限られていたが、近年は新たな調査によりさまざまな情報があきらかになってきている。教科書などを通して、その性格を具体的に描き出してください。研究者によっては、これらの成果を評価せず、イスラエル統一王国の存在を否定あるいは矮小化して理解する人たちも存在する。その立場を受け入れる場合は、その根拠を示し、イスラエル王国の始まりはどのようなものだったと考えるのかを記してください。

◆参考文献

山我哲雄、佐藤研『旧約新約聖書時代史』教文館、1992年

小川英雄『発掘された古代オリент』リトン、2011年

◆レポート作成上の注意

1. 参考文献もかならず活用すること。
2. 論理の流れと段落を意識して書くこと。
3. 議論、意見の根拠を明確に示すこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

考古学

2単位

L093-8891

市販書採用科目

◆テキスト

鈴木公雄『考古学入門』東京大学出版会、1988年

◆講義要綱

考古学は、人類活動により残された様々な物的証拠の分析を通じて、過去の人々の生活のあり方やその変化について考える学問です。この科目の使用テキストは、考古学の全体的な枠組みを、具体的な事例を紹介しながら、平易に解説したものです。このテキストを熟読することにより、基本的な考古学の研究法・調査方法、考古学という学問の成り立ちや、関連諸学問との関係、現代社会との関わりまでを体系的に理解することができます。

ただし、このテキストは考古学の学問としての体系を解説した「概論」ですので、具体的な事例紹介にも限界があります。参考文献に挙げた図書は、テキストの著者が、これまでの自身の研究をわかりやすくまとめたものです。考古学という学問を、豊富な具体的な事例を通して理解することができるだけでなく、テキ

ストの理解にも役立つと考えますので、併せて読むことをお勧めします。

◆テキストの読み方

まずはテキストを何度も読むことが大切です。その際、項目ごと、節ごとに、どんな内容が書かれているのかを自分の文章でまとめ、そしてそれらの間にどのような関係性があるのかを考えてみるのも有効でしょう。最初は理解できないことや誤読があるかもしれませんが、参考文献に挙げた図書を含め様々な本を読んだり、博物館などで実際の考古資料などを見たりするうちに、次第に理解が深まると思います。

◆履修上の注意

特別な注意点はありますが、強いて言えば日ごろから考古学に対する関心を強くもつことが重要です。そうすることにより考古学をめぐる報道や、考古学関連のさまざまな図書に自然と目が向くようになり、積極的に博物館・資料館、遺跡や発掘現場の見学に出かけられるようになれば、よりいいでしょう。

◆関連科目

「オリエント考古学」「西洋史特殊Ⅰ」

◆参考文献

鈴木公雄『考古学とはどんな学問か』東京大学出版会、2005年

ほかにも、考古学をめぐる様々な文献に目を通すことをお勧めします。ただし、自分が初心者だと思う方は、考古学の方法論を扱ったものよりも、具体的な研究成果を盛り込んだ概説的な本や、写真や図版を多用したものを読み、まずは考古学に対する関心を高めるのがいいでしょう。

◆レポート作成上の注意点

テキストのある科目ですので、まずはテキストや参考書を何度も読み込んで、内容を理解することが大切です。テキストの理解が足りないと判断されるレポートは、まず合格点になりません。

また、課題で何を求めているのかをじっくり考え、盛り込むべき内容をしっかり整理してからレポートを書き始めるようにして欲しいと思います。

なお、レポートは、テキストや他の文献を読んだり、実物の資料を見て理解したことを、自分の文章で表現するものです。テキストの内容の要約ではありませんので注意してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

地理学Ⅰ(L)

2単位

L103-0901

◆講義要綱

地理学Ⅰは、「トランスナショナル化」の視点から、地球規模で展開する国際的な企業行動の変化やグローバル都市に関する話題など、現在進行形の社会経済事象に対する理解が深まることを目指して構成されている。この目的を達成するには、地理的な空間軸と、歴史的な時間軸の両方からこれらの現象を捉えることが求められる。

第1章 古い神話と新しい現実

第2章 変わる世界経済地図：貿易と直接投資

第3章 高度化する国際分業：フラグメンテーション

第4章 トランスナショナル企業の台頭

第5章 デジタル化／モジュラー化／ハイパー・モビリティ

第6章 サービス投入の増大とプロフェッショナル・サービス

第7章 市場／国家／都市

終章 トランスナショナル化する世界の行方

本科目を通じて、新聞記事や、入手可能な報告書や統計データを自分で集め、自分の頭で各種の事象を分析する習慣が身につくよう期待している。

◆履修上の注意

企業の活動など、日常生活で触れる経済分野のニュースなどに興味を持った上で履修すると学習効果が高まるので注意してほしい。

◆参考文献

教科書の「引用文献・参考文献」を必要に応じて参照すること。

◆レポート作成上の注意点

テキストで取り上げた話題について、その理論的内容について理解度を測ると同時に具体的事例を用いて説明を行うように設定しているので、このことに注意してレポートに取り組んでほしい。

◆成績評価方法

科目試験による。

地理学Ⅱ(地誌学)(L)

2単位

L108-1001

◆講義要綱

地理学は、古くて新しい学問である。「古くて」というのは、太古の昔から、地理への関心は、歴史への関心と並んで、様々な文明において示されてきたことから明らかである。「新しい」というのは、世界の動きや技術の進歩につれて、地理への関心のあり方も、時代に応じて変化を遂げ、地理学の内容を変容させてきたことからわかる。地理学のなかでも、地表の事物の姿やイメージを記述する地誌は、こうした変化を鋭敏に反映してきたといえよう。

地誌学の面白さは、具体的事例を徹底的に調べ上げ、様々な知見を、地域や場所という中で「総合化」することにある。

◆参考文献

参考文献は限りなく存在するので、取舍選択が大切である。

◆レポート作成上の注意点

レポート作成にあたっては、客観的な事実やデータによって裏付けたり、新しい見方を獲得するように心がけてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・人文地理学(L)

2単位

L138-1901

◆講義要綱

人文地理学は、人間およびその生活や文化、都市、社会、経済などを対象として、その地理的分布、地域的な特色、地域間や環境との関係などを研究する地理学の一部門である。学問自体の内的要請によって進化発展するものであるばかりではなく、時代の要請によっても変化するものである。

◆参考文献

参考文献は限りなく存在するので、取捨選択が大切である。

◆レポート作成上の注意点

教科書の理解度を示す記述を期待するとともに、その内容を事例とともに説明すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本語学

2単位

L139-1991

市販書採用科目

◆テキスト

沖森卓也『日本語全史』筑摩書房（ちくま新書）、2017年

◆講義要綱

われわれは母語である日本語を本能によって自然に覚えてしまい、毎日日本語の枠組みを通してまわりの世界を認識し、日本語によってものを考え、夢さえ日本語で見ているにもかかわらず、かえってそれだからこそ、その存在を意識することがない。自分も自分の日本語という色眼鏡をかけていることに気付かず、自分のことばと世代差や地域差があると「乱れている」「古くさい」「なまっている」ときめつけがちで、それによっていわれない偏見を生み出すことさえある。コミュニケーションのためにしか用いられない外国語とは異なり、四六時中、認識や思考のためにももちいている母語だからこそ、それを絶対視しないために正確な実像を知っておく必要がある。また、日本文学は日本語をもちいる言語芸術だから、日本文学を学ぶには各時代の日本語について深く知っておくことが当然の前提である。

本科目では日本語の歴史を追う形で日本語の言語的な諸側面を概観する。日本語の諸側面について、言語学的に正確で精密な知識を身につけることが本科目の目標である。

◆テキストの読み方

本科目のテキストは

- 第1章 古代前期——奈良時代まで
- 第2章 古代後期——平安時代
- 第3章 中世前期——院政鎌倉時代
- 第4章 中世後期——室町時代
- 第5章 近世——江戸時代
- 第6章 近代——明治以降

と日本語の歴史を追いながら、各章はそれぞれ

- 1 総説

- 2 文字表記
- 3 音韻
- 4 語彙
- 5 文法

と日本語の各分野を解説してゆくかたちをとっている。日本語の歴史だけでなく、日本語学の各分野について全般的な知識を得ることができる。言語は精密な体系をなしているの、飛ばし読みをすることなく、ノートをとりつつ、正確な読解をこころがけること。

◆レポート作成上の注意点

引用は必ず「」でくくり、出典を明記すること。

◆参考文献

『日本語の歴史』全八冊 平凡社（品切 図書館を利用すること）

『日本語学研究事典』明治書院

齊藤純男『日本語音声学入門』三省堂

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

国語学

2単位

L003-4902、L1b

◆講義要綱

古代からの国語の変遷を通して、主に日本の古典文学の読解・鑑賞の質を高めること、および「ことば」に含まれる語義の多層性と汎用性をこまかに観察することにより、古典に見る日本人の心意の諸相を感知すると同時に、自身の言語の拠って立つところを洞察することを目的とする。

◆参考文献

[方言に関して]『講座方言学』『方言学概説』

[方言辞典]『標準語引き日本方言辞典』『日本方言大辞典』『現代日本語方言大辞典』

[言語地図]『日本言語地図』『方言文法全国地図』

[日本語の歴史に関して]『日本語の歴史（平凡社ライブラリー）』

[古語を多く収載する辞典]『日本国語大辞典 第2版』『角川古語大辞典』『古語大鑑』（刊行中）『時代別国語大辞典 上代編』『同 室町時代編』『近世上方語辞典』『江戸語大辞典』『江戸時代語辞典』

[良質な小型現代語辞典]『岩波国語辞典』『新明解国語辞典』『三省堂国語辞典』『明鏡国語辞典』『新選国語辞典』『新潮国語辞典』など

◆レポート作成上の注意点

引用は必ず「」でくくり、出典を明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

国語学各論——さまざまな辞書たち—— 1単位

L112-1201

◆講義要綱

国語学が対象とするものは幅が広く奥行きも深い。国語の音韻・語彙・文法はもちろん、その背後にある

歴史、民俗、文化、思想等さまざまなものを含むが、国語辞典・漢和辞典はそれらを包括し、規範となる説明を行なっているはずのものである。この各論では、現在・過去のいろいろな辞書・事典類を紹介した。但し冊子体のもののみを対象とし、電子辞書や玉石混淆のネット関係のものは除外してある。電子辞書の利便性はある程度認めるものの、紙媒体のものを電子化しただけのものや進化途上のものが多いからである。また、ネット上に氾濫している情報には、無責任で怪しげなものが多く、信頼に欠けるからである。

◆テキストの読み方

本テキストには数多くの注がつき、しかも詳細なものが多い。したがって注を読むことによって得られる知識その他は大きいと考える。また、第3章において、江戸時代の辞書・事典を取り上げているが、次々と出版された節用集や「増補大廣益會玉篇大全」、平安時代に成立し江戸時代によく参看された「倭(和)名類聚鈔(抄)」など、珍しいものではなく、普通に行なわれたものを紹介している。そして巻末の参考文献解題はただ単なる書名の羅列ではなく、参照する際に役立つようにその章立て・内容等を記し、ときに批判も加えてある。書名や編集者名を覚えるだけでなく、注や参考文献を活用し、実際に当該文献を読んで行っ

◆レポート作成上の注意点

辞書・事典は、自分で読み、自分で引くもので、他人に引いてもらうものではない。したがって、参考文献やネット検索で得た知識をそのまま写すことは厳禁。利用してみてもの実体験に基づいた報告を期待する。

◆成績評価方法

科目試験による。

国文学

4 単位

L038-7701、L7701

◆講義要綱

本科目では、『万葉集』『源氏物語』を中心に古典文学を学び、実際に読んでいく。その中で当時の人々の豊かな精神や現代とは異なる生活文化について学ぶことを目的とする。

指定教科書の構成は次の通りである。

序論 国文学研究・前言

第一部 日本文化の系図

第一章 大和時代

第二章 平安時代

第三章 鎌倉時代

第四章 室町時代

第五章 安土・桃山時代

第六章 江戸時代前期

第七章 江戸時代後期

第二部 日本文学の戸籍

第一章 万葉集

第二章 源氏物語

第三章 催馬楽

◆履修上の注意

本科目では『万葉集』や『源氏物語』の知識が前提として求められる。テキストを読むだけでは作品を理

解するのに不十分なため、必ず参考文献などにも目を通して作品の内容を把握しておくこと。(特に小学館の『万葉集』『源氏物語』は通読してほしい)

◆参考文献

『新編日本古典文学全集 万葉集①～④』小学館、1994～1996年

『新編日本古典文学全集 源氏物語①～⑥』小学館、1994年～1998年

『折口信夫全集』中央公論社

『日本文学の歴史』角川書店

池田彌三郎『万葉びとの一生』講談社現代新書、1978年

池田彌三郎『日本文学の素材』日本放送出版協会、1988年

藤原茂樹・坂本信幸『万葉から万葉へ』NHK 出版、2008年

藤原茂樹『万葉集の歩き方』NHK 出版、2013年

『源氏物語研究集成』風間書房、1998～2002年

『講座源氏物語研究』おうふう、2006～2008年

◆レポート作成上の注意点

レポート作成に際して、自分自身の考えと、参考文献の文章を明確に区別すること。

○参考とした文献の文章は「」に入れるかたちで引用して、研究書名・論文名・著者名・刊行年月・ページ数などを明記する。(提示した参考文献以外のものでも可)

○古事記・万葉集・日本書紀・続日本紀・源氏物語・歌謡などの古典文学のテキストは、新潮日本古典集成(新潮社)、新編日本古典文学全集(小学館)、日本古典文学大系・新日本古典文学大系(岩波書店)のシリーズを用いるのが好ましい。

○万葉の歌は、読み下し文でもよいが、訓読によって歌意が変化する場合などは原文表記を併記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

国文学史

3 単位

L008-5902、L51

◆講義要綱

国文学のながれを理解する科目。テキストは、現在の見地ではやや古風だが、基本をおだやかに網羅している。したがって、理解の補足のためには、参考文献として示したものが必要にもなる。しかし、それよりも第一に、テキストに引用されている様々の古典作品の具体にふれることが大事だ。『新 日本古典文学大系』(岩波書店)、『新編日本古典文学全集』(小学館)、『新潮日本古典集成』(新潮社)等の古典校注・訳注叢書を活用して欲しい。科目試験・レポートのために役だっただけでなく、自分たちの文化の理解にもつながるはずだ。

◆参考文献

『日本文学全史』学燈社

『岩波講座・日本文学史』岩波書店

『日本文学史 古代・中世編』ミネルヴァ書房

小西甚一『日本文藝史』講談社(絶版)

加藤周一『日本文学史序説』筑摩書房

◆レポート作成上の注意点

自分自身で作品を読んだ上で、実感に即しつつ、しかも論理的にまとめる必要がある。使用した校訂本文、注釈書、参考書などは著者（校訂者）・書名・刊行者（出版社）・刊行年を明記すること。また、作品は必ず原文（原典の本文）で読むこと。現代語訳を読んだだけでは、学力は身に付かない。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・近代日本文学

3単位

L140-1901

◆講義要綱

近代日本文学に関する研究方法の基礎を学びます。具体的な作品に即した読解のしかたと、資料の探し方・使い方を中心とします。個別の作品を分析するためのツールとして、今や欠かせない、語り分析（ナラトロジー）についても知っておきましょう。参考文献は、自分で作品を選ぶ際の指針ともなりますので、併せて読むことをお勧めします。

◆参考文献

安藤宏『日本近代小説史』2015年、中央公論新社
三好行雄編『近代日本文学史』1975年、有斐閣
松本和也『テキスト分析入門』2016年、ひつじ書房
河野達也編『大学生のための文学トレーニング近代編』2011年、三省堂

◆レポート作成上の注意点

必ずレポートの書き方に関する文献を一読してください。どこにどの文献を参照したのかが明確にわかるように、どこからが自分の意見なのかはつきりわかるように書いてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

国文学古典研究Ⅰ

1単位

—御伽草子の世界—

L088-0401

◆講義要綱

御伽草子は、室町時代から江戸時代前期にかけて制作された短編の物語群の総称である。現在、約四百編の作品が存在している。この御伽草子の各作品について、テーマ毎に分類し、その特徴を学習する。

◆参考文献

日本古典文学大系・新日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集・新編日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成（新潮社）のうち、御伽草子・室町物語関係書。

◆成績評価方法

科目試験による。

国文学古典研究Ⅱ—1

1単位

—近世前期小説の展開—

L013-6501、L52b、L6507a

◆講義要綱

日本の近代文芸にも大きな影響を与えた江戸時代の文芸のうち、仮名草子、西鶴を中心とする浮世草子、それに談義本の流れを辿るもので、それらのジャンルの様々な作品を読む際の基礎知識を得る。

◆参考文献

日本古典文学大系・新日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集・新編日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成（新潮社）のうち、仮名草子、浮世草子関係書。

◆レポート作成上の注意点

レポート作成にあたっては、テキストを精読し理解するのは勿論であるが、それだけでは十分とは言えない。まず、自身で図書や雑誌に掲載された論考を参照し、様々な学説を理解することに努めてほしい。最新のものを中心に複数の考え方を知ることによって、自ずと論述すべき問題の所在は明らかとなるはずである。次に、必ず個別の作品を読み、その本文を自ら分析してほしい。この講義では、作品本文を読解した形跡のないレポートには、合格を与えていない。

なお、レポートは、参考文献の文章と、自分自身の考えをはっきり区別して書くこと。参考文献は、著者名・書名・論文名・掲載書名もしくは雑誌名・巻数・刊行年及び当該ページなどを明記のこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

国文学古典研究Ⅱ—2

1単位

—近世後期小説の展開—

L016-6901、L6907b

◆講義要綱

洒落本・人情本・滑稽本それに読本といった近世後期小説の展開を学び、黄表紙や合巻等の草双紙を含め、様々なジャンルの作品を実際に読んでいく。

◆参考文献

日本古典文学大系・新日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集・新編日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成（新潮社）のうち、江戸後期小説関係書。

◆レポート作成上の注意点

レポート作成にあたっては、テキストを精読し理解するのは勿論であるが、それだけでは十分とは言えない。まず、自身で図書や雑誌に掲載された論考を参照し、様々な学説を理解することに努めてほしい。最新のものを中心に複数の考え方を知ることによって、自ずと論述すべき問題の所在は明らかとなるはずである。次に、必ず個別の作品を読み、その本文を自ら分析してほしい。この講義では、作品本文を読解した形跡のないレポートには、合格を与えていない。

なお、レポートは、参考文献の文章と、自分自身の考えをはっきり区別して書くこと。参考文献は、著者

名・書名・論文名・掲載書名もしくは雑誌名・巻数・刊行年及び当該ページなどを明記のこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

国文学古典研究Ⅲ

1 単位

—源氏物語と平安時代文学—

L129-1701

◆講義要綱

本科目では、日本の代表的な古典文学作品、『源氏物語』を扱い、他の文学作品と比較しつつその特色について学ぶ。先行の諸作品をいかに吸収して『源氏物語』という作品が生みだされたか、またこの物語が後続の文学作品にどれほど多大な影響を与えたかについて見ていく。

指定教科書の構成は次の通りである。

はじめに

- 一 桐壺巻と『更級日記』
- 二 帚木巻と『落窪物語』
- 三 夕顔巻と『江談抄』『宇治拾遺物語』
- 四 若紫巻と『紫式部日記』
- 五 末摘花巻と『古本説話集』
- 六 紅葉賀巻と『建礼門院右京大夫集』
- 七 花宴巻と『六百番歌合』
- 八 葵巻と『蜻蛉日記』
- 九 賢木巻と『枕草子』
- 十 須磨巻と『栄花物語』
- 十一 明石巻と『うつほ物語』
- 十二 湊標巻と『源順集』『本朝文粹』
- 十三 絵合巻と『竹取物語』
- 十四 薄雲巻と『今昔物語集』
- 十五 少女巻と『伊勢物語』
- 十六 玉鬘巻と『土佐日記』
- 十七 胡蝶巻と『狭衣物語』
- 十八 真木柱巻と『大鏡』
- 十九 梅枝巻と『古今和歌集』
- 二十 藤裏葉巻と『夜の寝覚』

◆履修上の注意

本科目では『源氏物語』の知識が前提として求められる。テキストを読むだけでは作品を理解するのに不十分なため、必ず参考文献などにも目を通して作品の内容を把握しておくこと。(特に小学館の新編日本古典文学全集『源氏物語①～⑥』(1994～1996年)は通読してほしい)

◆参考文献

新潮日本古典集成(新潮社)、日本古典文学全集(小学館、新編を含む)、日本古典文学大系(岩波書店、新を含む)のうち、平安時代文学関係。

『講座源氏物語の世界』(有斐閣)など『源氏物語』の講座類。

◆レポート作成上の注意点

参考にした論文などの文章と、自分自身の考えをはっきり区別して書くこと。参考論文は、「」に引用をする形で明示する。(著者名・書名・論文名・掲載書名もしくは雑誌名・巻数・刊行年及び当該ページ数など明記のこと。)

◆成績評価方法

科目試験による。

国文学古典研究Ⅳ

1 単位

—平安和歌研究—

L074-9401、L9409

◆講義要綱

この科目は、日本文学で最も正統的なジャンルとみなされていた和歌について、基礎的な知識を身につけるためのものです。かつ平安時代と八代集を中心として、現在に至るまで一般に「古典和歌」として知られる歌風がいかに形成されていったのか、歴史的な変遷を理解することをも目的としています。

◆テキストの読み方

各時期ごとの歌風の特徴を理解し、勅撰和歌集や主要歌人の業績をそうした歌風を体現するものととらえて、熟読してください。

◆履修上の注意

参考文献は数多くありますが、それを丸写しするだけでは評価の対象となりません。実際に歌集を繙き、作品に接して、自身が共感したり反撥したりしながら、理解を深めるようにしてください。

◆関連科目

国語国文学古典研究Ⅴ—中世和歌研究—

◆参考文献

平安時代の勅撰集、主な私撰集・私家集は新日本古典文学大系(岩波書店)・和歌文学大系(明治書院)などの叢書に収録されています。詳しくはテキストの「参考文献」を参照してください(平成27年1月増補)。

◆レポート作成上の注意点

辞典類の記述を調査の入り口とすることは構いませんが、必ず用例は八代集などの歌集に当たって収集し、自分で分析するよう心がけてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

国語国文学古典研究Ⅴ

2 単位

—中世和歌研究—

L120-1591

市販書採用科目

◆テキスト

小川剛生『武士はなぜ歌を詠むか—鎌倉将軍から戦国大名まで—』(角川選書) KADOKAWA、2016年

※上記のテキストは、小川剛生『武士はなぜ歌を詠むか—鎌倉将軍から戦国大名まで—』(角川学芸出版、2008年)と同内容です。どちらを用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

中世、鎌倉時代から戦国時代までの和歌史を対象とします。中世和歌の特徴はいくつかありますが、新たな統治者となった武家が和歌を好んだ点は見逃せません。作歌人口が増大し、地方にも歌壇が形成されるなどして、和歌は中世文化の基盤としても機能していま

す。作品は彫大に残存しており、一見個性に乏しいものの、丁寧に読めばその歌人の特色のみならず、文学史・文化史にさまざまな新見をもたらすことができます。テキストでは各時期の有名歌人を取り上げて、その業績と歌風を解説する形で記述しました。まずは時代の雰囲気を理解した上で、参考文献を活用し、実際に歌集や詠草を繙いて、中世和歌の奥深さに触れてください。

◆テキストの読み方

人名・地名・作品名がやや多く出て来ますので、文学史・日本史の辞典を参照しつつ読み進めてください。

◆履修上の注意

文学史はもちろんですが、日本中世史についても一通りの知識を持って履修してください。

◆関連科目

国文学古典研究Ⅳ—平安和歌研究—

◆参考文献

作品本文は新編国歌大観（角川書店）・私家集大成（明治書院）などに収録されています。注釈書のある作品はまだ少ないですが、いくつかは新日本古典文学大系（岩波書店）・私家集全釈叢書（風間書房）・新注和歌文学叢書（青簡舎）・和歌文学大系（明治書院）などの叢書に収められています。

◆レポート作成上の注意点

辞典類の記述を入口とすることは構いませんが、参考文献を丸写しするものは評価の対象となりません。必ず作品に触れた上で記述してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

書道

2単位

L040-7701、L9112

◆講義要綱

漢字の歴史は中国殷代の甲骨文字に遡ることができます。そこから時の政権とともに字体も変化してきました。即ち甲骨文・金文・篆書・隸書・草書・行書・楷書というように通行書体の変遷がありました。テキストでは時代を越えて遺った名跡の数々を取り上げており、それぞれ理解を深めて欲しいと思います。日本においては中国の書の模倣から始まりやがて日本独自の和様の書が完成しました。

この科目は書道史とともに実技が課せられています。提出にあたり十分な練習をすること。

◆参考文献

『中国書道文化辞典』西林昭一著 柳原出版
『中国法書ガイド』全60冊 二玄社
『中国法書選』全60冊 二玄社
『日本名筆選』全40冊 二玄社

上記二玄社刊は1冊単位で入手できる。

◆レポート作成上の注意点

作品提出の際、漢字作品は半紙に4文字を大きく書くこと。かな作品は口絵写真のとおり実物大で書くこと。これらは「臨書」という学書方法で、手本の筆づかいや字形を忠実に再現することが目的である。

◆成績評価方法

科目試験による。

中国文学史

2単位

L057-8502

◆講義要綱

この科目は中国文学の全体像を通史的に学び、その歴史的展開の諸相と特質を理解することを目的とする。文学や文化が、政治・経済・社会との関わりのなかで成立している点に留意しつつ、時代・分野・受容層の観点から多角的に考察する。

◆テキストの読み方

学習者はまずテキストを精読することによって、中国文学史について概括的な知識を得ること。その上で各自の関心に従って問題を設定し、その解明のために作品や先行研究を広く読んで欲しい。

◆履修上の注意

「漢文学Ⅰ」「漢文学Ⅱ」「漢文学Ⅲ」を履修する場合は、その前に当科目を履修することが望ましい。

◆関連科目

「漢文学Ⅰ」「漢文学Ⅱ」「漢文学Ⅲ」

◆参考文献

九州大学中国文学会編『わかりやすくおもしろい中国文学講義』中国書店、2002年
前野直彬編『中国文学史』東京大学出版会、1975年
興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』世界思想社、1991年
奥野信太郎著・村松暎編『中国文学十二話』NHKブックス、1968年
『中国古典文学案内』日外アソシエーツ、2004年

◆レポート作成上の注意点

参考文献等のまとめや引用と、自分の考察とを明確に区別して書くこと。レポート本文中で原文や参考文献を引用する場合は、出典を明記すること。とくに参考文献の場合は、それに加えて必ず引用ページも明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

漢文学Ⅰ

2単位

L075-9601

◆講義要綱

当科目は中国文学の概説および作品選読である。「漢文学」という名称の通り、対象は中国の古典文学に限定し、近現代のものは含まない。中国で伝統的に「文学」と言う場合、言語によって表現される文芸・学問全般を指す。当科目では、その中の詩文・思想・歴史の三つの領域を扱う。

◆テキストの読み方

まず、テキスト第一部の「漢文学概説」を熟読すること。概説は各ジャンルの最も重要と思われる項目のみを簡略に紹介しているので、巻末の参考文献などによって不足の点を補ってほしい。

中国古典文学の全体的な流れが把握できた段階で、次の第二部「漢文学選読」に進むこと。テキストは原文に訓読と注釈を付しただけであるので、全文の解釈および作品の背景については各自で辞書・参考書を使

って詳しく調べてほしい。

◆履修上の注意

「中国文学史」を履修済みであることが望ましい。

◆関連科目

「中国文学史」「漢文学Ⅱ」「漢文学Ⅲ」

◆参考文献

塩谷温『中国文学概論』講談社学術文庫、1983年

黎波『中国文学館』大修館書店、1984年

荘司格一ほか『中国文学入門』白帝社、1987年

九州大学中国文学会編『わかりやすくおもしろい中国文学講義』中国書店、2002年

松原朗ほか『教養のための中国古典文学史』研文出版、2009年

◆レポート作成上の注意点

参考文献を必ず明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

漢文学Ⅱ—論語—

1 単位

L011-6201、L60b

◆講義要綱

『論語』は孔子の言行録であり、儒教の最も基本的な經典である。徳治主義、尚古主義、身分主義といった特徴を持つとされるその思想は、中国のみならず日本、韓国、ベトナム等の東アジア諸国に大きな影響を与えた。まず『論語』の原典を通読し、数多くある参考書を参照しつつ、孔子の思想と儒教の特色の優れた点と限界について考察する。

◆履修上の注意

当科目を履修する前に、「中国文学史」を履修していることが望ましい。

◆関連科目

「中国文学史」「漢文学Ⅰ」「漢文学Ⅲ」

◆参考文献

吉田賢抗『論語』新釈漢文大系、明治書院、1960年

平岡武夫『論語』全釈漢文大系、集英社、1980年

金谷治『論語』岩波文庫、1999年

加地伸行『論語 増補版』講談社学術文庫、2009年

吉川幸次郎『論語（上・下）』朝日出版社（朝日選書）、1996年

土田健次郎『論語集注 1～4』、平凡社東洋文庫、2013年～2015年

金谷治『孔子』講談社学術文庫、1990年

白川静『孔子伝』中公文庫、1991年

江連隆『論語と孔子の事典』大修館書店、1996年

◆レポート作成上の注意点

『論語』や孔子に関する参考書は数多く、それぞれの解釈には大きな違いがある場合も多いので、必ず複数を参照して考察すること。なお、原典や参考文献を引用したり使用する場合、必ず自分の文章と区別できるようにし、出典や書誌情報、引用ページを明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

漢文学Ⅲ—孟子—

1 単位

L009-6002、L60c

◆講義要綱

漢文に親しみ、中国古代の思想史を理解するために、『孟子』を題材にとり学習する。訓読（書き下し文）を通して解釈の方法を身につけると同時に、儒家としての孟子の「王道政治」「性善説」「易姓革命」等の思想の特色についての理解を深める。

◆テキストの読み方

『孟子』に関する参考書は『論語』と同様に数多く、それぞれの解釈には大きな違いがある場合も多いので、複数を参照して考察すること。

◆参考文献

島森哲男・浅野裕一『孟子・墨子』鑑賞中国の古典③ 角川書店

内野熊一郎『孟子』新釈漢文大系 4 明治書院

宇野精一『孟子』全釈漢文大系 2 集英社

大島晃『孟子』中国の古典 4 学習研究社

貝塚茂樹『孟子』講談社学術文庫

小林勝人『孟子（上・下）』岩波文庫

浅野裕一『諸子百家』講談社学術文庫

◆レポート作成上の注意点

引用文は自分の文章と区別できるようにし、出典と引用箇所を明記すること。また、レポート本文中で参考文献を引用する場合は、参考文献の書誌情報に加え、必ずその引用ページも明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・現代英語学

3 単位

L131-1801

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

英語の音声、文法、歴史的変遷、国際語としての特質を踏まえて、英語の諸側面を理解する。

〔授業の概要〕

英語の音声、文法、歴史的変遷、国際語としての特質を踏まえて、英語の諸側面を論ずる。

〔授業計画〕

指定教科書の構成は次の通り。

はじめに

序章

第1章 世界から見た英語

第2章 英語と社会のネットワーク

第3章 英語の「文化」

第4章 社会の変化と英語の変化

第5章 言語とテクノロジー

第6章 グローバルコンテキストにおける英語

第7章 英語と日本語ディスコースの比較と接触

第8章 日本の英語教育の社会言語学

第9章 英語の未来

参考文献

おわりに

◆テキストの読み方

熟読すること。

◆関連科目

「英語学概論」「英語音声学」

◆参考文献

井上逸兵（編）『社会言語学』朝倉書店、2017年
唐須教光（編）『開放系言語学への招待』慶應義塾大学出版会、2008年
井上逸兵『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』南雲堂、1999年
池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚』NHK ブックス、2006年
池上嘉彦『〈英文法〉を考える』ちくま学芸文庫、1995年
井上逸兵『バカに見えるビジネス語』青春新書インテリジェンス、2013年

◆レポート作成上の注意点

自分で事例を探すこと（言語学の文献などの例の2次利用は不可）。

ワープロで書くことが望ましい。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

英語学概論

3単位

L121-1501

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

英語の音声、文法、歴史的変遷、国際語としての特質を踏まえて、英語の諸側面を理解する。

〔授業の概要〕

英語の音声、文法、歴史的変遷、国際語としての特質を踏まえて、英語の諸側面を論ずる。

〔授業計画〕

指定教科書の構成は次の通り。括弧内は各節のタイトルとなっている。

はじめに

第1章：英語と英語学の背景

(1-1 2つの「英語学」、1-2 本書の特徴、1-3 「説明の学問」としての英語学、言語学、1-4 本書の概要)

第2章：英語の変遷

(2-1 インド・ヨーロッパ祖語の「発見」と英語の歴史区分、2-2 古英語、2-3 中英語、2-4 近代英語、2-5 初期近代英語、2-6 後期近代英語、2-7 現代英語)

第3章：英語の多様化とグローバル化——世界の英語、国際語としての英語、グローバル英語、そして日本の英語

(3-1 世界の英語、世界の英語事情、3-2 国際語としての英語、3-3 グローバル英語（グローバル・テキスト）、3-4 日本における英語)

第4章：現代英語学・言語学の潮流

(4-1 20世紀の言語学大三角形、4-2 2つの恣意性、4-3 「チョムスキー革命」——生成文法、4-4 認知言語学の誕生、4-5 20世紀の言語学大

三角形の点と辺、4-6 言語学大三角形からの展開)

第5章：英語の音声

(5-1 音声言語の利点、5-2 英語音声学と音韻論、5-3 音韻論)

第6章：英語の語彙（形態論）

(6-1 形態論とは何か、6-2 形態素の分類、6-3 形態素による語形成、6-4 形態素による語の分類、6-5 形態素の生産性と語形成)

第7章：英語の文法（統語論）

(7-1 統語論とは、7-2 文の構造、7-3 文法カテゴリー)

第8章：英語の意味（意味論）

(8-1 「意味」とは何か、8-2 「意味」の種類)

第9章：指示の語用論

(9-1 ダイクシスとは、9-2 ダイクシスと「人」、9-3 2人称代名詞の言語と文化)

第10章：コミュニケーションの語用論

(10-1 会話の含意——協調の原理、10-2 言語行為論、10-3 グローバル・コミュニケーションから見た語用論の問題)

第11章：ポライトネス

(11-1 ポライトネス研究とは、11-2 ブラウンとレヴィンソンの面目モデル)

第12章：相互行為の社会言語学

(12-1 コンテキスト化の合図、12-2 コンテキスト観の革新、12-3 解釈的アプローチ、12-4 コミュニケーションの多層性、12-5 非指示的指標性、12-6 相互行為の社会言語学からグローバル・コミュニケーションの言語学へ)

第13章：談話分析

(13-1 談話分析の2つの流れ、13-2 会話分析)

第14章：社会言語学

(14-1 ソシユールのパラドクス、14-2 ミクロ社会言語学、14-3 グローバルとローカルな英語の多様性、14-4 そのほかの社会言語学的諸事象)

◆テキストの読み方

熟読すること。

◆関連科目

「現代英語学」、「英語音声学」

◆参考文献

西光義弘・金水敏・影山太郎『日英語対照による英語学概論』くろしお出版、1999年
唐須教光（編）『開放系言語学への招待』慶應義塾大学出版会、2008年
井上逸兵『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』南雲堂、1999年
井上逸兵『ことばの生態系——コミュニケーションは何でできているか』慶應義塾大学出版会、2005年
安井稔『英語学概論』開拓社、1987年

◆レポート作成上の注意点

自分で例をさがすこと（言語学の文献などの2次利用は不可）。

ワープロで書くことが望ましい。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

英語音声学

2 単位

L115-1301

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

英語の音声について、音声学、音韻論の観点から理解する。

〔授業の概要〕

英語の音声について、音声学、音韻論の観点から論ずる。

〔授業計画〕

指定教科書の構成は次の通り。括弧内は各節のタイトルとなっている。

まえがき

国際音声字母

第1章：概論

(音声学とは何か、音韻論と音声学、調音音声学、英語の発音と地域差について、音声表記法について)

第2章：母音

(母音の分類、母音四角形 (vowel quadrilateral)、第一次基本母音 (primary cardinal vowel)、第二次基本母音 (secondary cardinal vowel)、基本母音以外の母音、二重母音 (diphthong)、三重母音 (triphthong))

第3章：子音

(子音の分類、破裂音 (plosive)、破擦音 (affricate)、摩擦音 (fricative)、接近音 (approximant)、鼻音 (nasal)、子音連結 (consonant cluster))

第4章：プロソディー・超分節の特徴

(音節 (syllable)、語強勢 (word stress)、文強勢 (sentence stress)、縮約形・弱形・連結・同化・脱落、リズム (rhythm)、イントネーション (intonation))

第5章：音響音声学

(音声波形、基本周波数、音源フィルター理論 (source-filter theory)、フォルマント周波数 (formant frequency)、スペクトログラム (spectrogram)、母音の音響特性、子音の音響特性)

第6章：聴覚音声学

(聴覚器官 (auditory system)、音声知覚の研究)

第7章：音声学の応用—音声学と社会言語学・語用論・談話分析—

(はじめに、音声学と社会言語学、音声学と語用論、音声学と談話分析、おわりに)

◆テキストの読み方

熟読すること。

◆履修上の注意

文献・レポート等による学習だが、実際に自分で発音しながら学習してほしい。

◆関連科目

「英語学概論」「現代英語学」

◆参考文献

窪蘭晴夫・西光義弘『音声学・音韻論』くろしお出版、1998年

佐藤寧・佐藤努『現代の英語音声学』金星堂、1996年

川越いつえ『英語の音声を科学する』大修館書店、2007年

服部義弘〔編〕『朝倉日英対照言語学シリーズ2 音声学』朝倉書店、2012年

◆レポート作成上の注意点

- ・必ず、参考文献を参照すること（テキストだけでは不十分）。文献を引用した場合は、出典を必ず明記すること。
- ・自分の言葉で書くこと（丸写しはダメ）。具体例はテキスト記載のものをそのまま使用せず、自分で考えたものにすること。
- ・内容だけでなく、体裁にも気を配ること。
- ・ワープロによる作成が望ましい。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

英語史

2 単位

L047-7903

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

英語という言語の特徴を理解するためには、それがたどってきた歴史を学ぶことが不可欠である。英語の起源はどこにあるのか、英語に見られる不規則性は何に由来するのか、英語は将来どうなっていくのか、などの現代的な問題に歴史的・通時的な視点からアプローチすることで、多面的な英語観を形成することが、本授業の目標である。

〔授業の概要〕

指定テキストに沿って英語の通史を学習する。具体的には、前史から古英語期、中英語期、近代英語期を経て現代英語に至るまでの発音、語彙、綴字、文法などの変化を学び、各時代の英語を読めるようにするとともに、現代英語の諸問題の歴史的背景を理解することを目指す。

〔授業計画〕

指定テキストの構成に「はじめに」と「おわりに」を付した授業の構成は以下の通りである。

はじめに 英語史とはどのような分野か

第1章 序論

第2章 発音と綴字の変遷

第3章 語形態の変遷

第4章 統語法の変遷

第5章 語彙の変遷

第6章 英語の地方言

おわりに 英語の未来

◆履修上の注意

現代英語がなぜ今あるような言語となったのかを知ることが本科目の重要な目的の一つですから、高等学校までに学んだ現代英語に関する語学的な知識をきちんと整理しておいてください。レポート執筆のために、指定テキストのみならず、参考文献に挙げた他の複数の英語史概説書を読んでおいてください。

◆関連科目

「現代英語学」「英語学概論」「英語音声学」

◆参考文献

堀田隆一『英語史で解きほぐす英語の誤解——納得して英語を学ぶために』中央大学出版部、2011年。
堀田隆一『英語の「なぜ?」に答えるはじめての英語史』研究社、2016年。

◆レポート作成上の注意点

文章中には具体的な専門用語、固有名詞、単語や例文などなるべく多く含めるようにしてください。また、ワープロでレポートを作成の場合、ワープロで印字できない特殊な文字は手書きで記してください。とくに発音記号などは、ほかの文字で代用しないようお願いいたします。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

ACADEMIC WRITING I 2単位

—英語論文作成法—

L113-1201

◆講義要綱

[授業の到達目標及びテーマ]

本科目は、英語を学術的に書くことにおいて必要となる様々な知識とスキルを習得することを目的としています。

[授業の概要]

「アカデミック・ライティング」と一般的に呼ばれている作文技術が単なる「英作文」と異なっているのは、前者が「英語で書く」ということに加えて「学術的に書く」必要があるという点です。つまり、文法的・構文的に正確な文を作成するだけでなく、アカデミックな研究の性質や作法を十分に理解した上で論理的議論を構築し、それに応じた論文作成を行う能力が必要となります。本科目の使用テキストは、「パラグラフ」、「topic sentence」、「thesis statement」、「アウトライン」、「論証」、「引用」、「剽窃」などいくつかの重要なテーマに焦点を当てることで、受講者の皆さんがこれらの技術を学び、レポート課題と科目試験で実践することを目指しています。

[授業計画]

学術的な論文を書くための基本的な知識と技術の一つ一つ身につけてもらうことを目的として、まずはアカデミック・ライティングとは何であるかについて概観したのち、論文の最小単位と言えるパラグラフ（段落）を書く技術を習得し、徐々に長い文章が書けるように誘導します。その過程で、長い文章の構造を俯瞰的に眺める視点も導入し、また、アカデミック・ライティングにおいて避けては通れない文献の引用の仕方や剽窃を避ける方法についても扱います。

指定教科書の構成は以下の通りです。（括弧内はsectionのタイトルです。）履修者は、各章に記載された例文（英語）を読み込むとともに、練習問題を解きながら学習を進めます。

Chapter 1: アカデミック・ライティングとは
（アカデミック・ライティングの特色、剽窃、ア

カデミック・スタイル、書式の一貫性、英語で書くために）

Chapter 2: パラグラフとは

（パラグラフと Main Idea、パラグラフの構造、Topic Sentence、Supporting Sentences、Concluding Sentence、Unity と Coherence、Review Exercise）

Chapter 3: エッセイの構造 (1)

（エッセイの3大要素、パラグラフとエッセイの関係、エッセイの Unity と Coherence、モデル・エッセイを読もう）

Chapter 4: エッセイの枠組みを構想する

（問いを立てる、なぜ「調べる」ことが必要なのか、エッセイの骨組みを作成する）

Chapter 5: 文献資料の扱い方

（文献資料について、文献資料を集める、文献資料の情報管理、引用、出典の示し方）

Chapter 6: エッセイの構造 (2)

（Introduction、Body Paragraphs、Conclusion、Review Exercise）

Chapter 7: 完成に向けて

（書式、推敲、チェックリスト、モデル・エッセイ）

APPENDIX

（エッセイ作成のスケジュール、ブレインストーミングのサンプル、エッセイの構想を練る、アウトライン、文献資料記録ページ、チェックリスト、解答）

◆テキストの読み方

テキストは、受講者の皆さんに学術的な論文を書くための基本的な知識を技術の一つ一つ身につけてもらうことを目的として執筆されています。まずはアカデミック・ライティングとは何であるかについて概観したのち（Chapter 1）、論文の最小単位と言えるパラグラフ（段落）を書く技術を習得し（Chapter 2）、徐々に長い文章が書けるように誘導します（Chapters 4、7）。その過程で、長い文章の構造を俯瞰的に眺める視点も導入し（Chapters 3、6）、また、アカデミック・ライティングにおいて避けては通れない文献の引用の仕方や剽窃を避ける方法についても時間を割く予定です（Chapter 5）。

◆履修上の注意

本科目は、英語で言いたいことを辞書を使いながら表現できる学習者を対象としています。したがって、英文法の知識がおぼつかない方や辞書を使って一般読者向けの英文が読めない方は、事前に市販の書籍で最低限の知識と英語力を身につけてから履修するようにしてください。

◆参考文献

〈アカデミック・スキルズ解説書〉

- ・佐藤望編『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門（第2版）』慶應義塾大学出版会、2012年（論文作成だけでなく、大学での学び全般に役に立つスキルや知識習得を目指した入門書。）

〈アカデミック・ライティング学習書〉

- ・アンドルー・アーマー、河内恵子、松田隆美、ウィリアム・スネル『アカデミック・ライティング応用編—文学・文化研究の英語論文作成法』慶應義塾大学出版会、1999年

- ・上村妙子、大井恭子『英語論文・レポートの書き方』研究社、2004年
- ・佐渡島沙織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』ひつじ書房、2008年（英語ライティングに特化したものではないが、大学で研究を行い、その研究成果を効果的かつ正確に著すのに必要な作法や手順が丁寧に説明されている。）
- ・崎村耕二『英語論文によく使う表現』創元社、1991年
- ・ポール・ロシター、東京大学教養学部英語部会編 *First Moves: An Introduction to Academic Writing in English*、東京大学出版会、2004年（8章構成。各章で短い学術的テキストを土台に、アカデミック・ライティングの諸要素（英語表現の詳細も含む）を学ぶことができる構成になっている。練習問題と解答例あり。）
- ・Robyn Najar and Lesley Riley (2004). *Developing Academic Writing Skills*. Tokyo: Macmillan Language House. (15ユニットから成る大学生向け入門書。英語で書かれているが、文字が大きく、図表も多いので読みやすい。)
- ・Alice Oshima and Ann Hogue (2006). *Introduction to Academic Writing* (3rd edn). New York: Longman. (アカデミック・ライティング執筆に不可欠な知識、作法や手順が網羅されている。)
- ・Dorothy E. Zemach and Lisa A. Rumisek (2005). *Academic Writing: From Paragraph to Essay*. Oxford: Macmillan. 〈MLA スタイルの解説書〉
- ・Modern Language Association of America (2009). *MLA Handbook for Writers of Research Papers* (7th edn). New York: Modern Language Association of America.
- ・『MLA 英語論文の手引第6版』北星堂書店、2004年（MLA Handbook 第6版の翻訳版。上記の第7版と異なる事項があるので注意すること。）
- ・Charles Lipson (2011). *Cite Right: A Quick Guide to Citation Styles-MLA, APA, Chicago, the Sciences, Professions, and More* (2nd edn). Chicago: University of Chicago Press. (様々な論文スタイルのガイド。)
- ・‘MLA Formatting and Style Guide’. <http://owl.english.purdue.edu/owl/resource/747/01/>（下記サイトの MLA スタイル解説のページ。）
〈アカデミック・ライティング学習のためのウェブサイト〉
- ・<http://owl.english.purdue.edu/>（アメリカ Purdue 大学で運営されているサイト。ライティングにおける重要事項を具体的、丁寧に解説。専攻分野ごとの説明もある。英語学習者むけ情報、練習問題も豊富。)
- ・<http://www.uefap.com/>（‘Using English for Academic Purposes: A Guide for Students in Higher Education’. イギリスの英語教育コンサルタントが運営するサイト。分野ごとに練習問題が豊

富に掲載されている。オンラインで取り組むことができ、ほとんどの問題に解答がついているので、自習に最適。)

◆レポート作成上の注意点

教科書のチェックリストは、レポート課題に多く見られる問題点と本科目の学習事項をもとに作成されています。各項目と照合しながら、最低二回は論文を読み直してください。

特に、以下の問題のあるレポートが多いので注意してください。

- ・英語の誤り（主語と動詞の一致、冠詞、品詞、構文、時制等において）が目立つ
- ・議論の構成（論文の thesis が曖昧、論理的一貫性不足、客観的な立証不足）
- ・論文の構成（パラグラフの構造、イントロダクションの役割と構造）
- ・書式、引用方法、文献リストの不備

◆成績評価

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

ACADEMIC WRITING II — 英米文学・文化研究における英語論文作成法 — 4単位

L080-9901

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

統合的な英語運用能力を身につけることを目標として、英語で学習レポートや論文を書くためのリサーチの手法とアカデミックな英語を学ぶ。

〔授業の概要〕

英語圏の文学や言語文化を対象として学習レポートや卒業論文等を作成するために必要な、様々なジャンルの英文を分析的に読解するための技術、自分の議論を客観的に展開するための英作文の能力、さらには、聞き取り調査や学習成果のプレゼンテーションに必要な英語のヒアリングおよび口頭発表技術を身につけて、それらを実際にアカデミックな小論文を作成することで統合的に活用する。

〔授業計画〕

アカデミックな英語運用能力を身につけるには、具体的な課題を設定して、それに取り組むことで4技能を体得することが有効である。本科目では、英語圏の文学や言語文化を対象として小論文を作成することを通じて、さまざまなジャンルの英語による文献資料の読解力およびAV資料の聞き取り力、アカデミックな英語の慣習にもとづいた客観的な作文、論述力、さらには成果の口頭でのプレゼンテーションに必要な発表技術やメディア・リテラシーを身につけることを目的としている。指定教科書（『ACADEMIC WRITING II — 英米文学・文化研究における英語論文作成法』）の構成は次の通りで、レポートや論文を書くための文献調査、英語文献の調査法、分析的な読解、論文の形式などについて具体的に教えるとともに、論文英語の実践や執筆のためのメディアの活用について、練習問題とともに演習できる内容となっている。

第1部 「Researching the Academic Paper

(アカデミック・ペーパーのためのリサーチの方法)」(日本語)

第2部 「English for Academic Writing: A Stylistic Overview」(英語)

第3部 「Mastering the Medium: A Guide to Advanced Word Processing」(英語)

第4部 「Appendix (補遺)」(日本語)

◆履修上の注意

上記指定教科書を熟読のうえで取り組むこと。

◆関連科目

ACADEMIC WRITING I—英語論文作成法—

◆参考文献

「ACADEMIC WRITING I—英語論文作成法—」

の参考文献を参照。

なお、和英辞典だけでは十分ではない(指定教科書27頁を以下は補足)。

1) Collocation Dictionary (英語活用辞典: ある語がどの語と組み合わせられて用いられるかを調べる辞書) 例 (e.g.): <http://www.freecollocation.com/>

2) Thesaurus (シソーラス: 同じ語を繰り返して用いないために用いる類語辞典) 例 (e.g.): <http://www.thesaurus.com/> 網羅的なものではないが、最所フミ『英語類義語活用辞典』ちくま学芸文庫は日本語で読めるものとして非常に有益である。

1) と 2) の両方とも英語らしい英語を書くのには必須である。いずれの種類もいろいろなものがあるので、見やすく使い易いものを探すこと。

◆レポート作成上の注意点

This essay must conform to the style(s) and format explained in the textbook and should be typed using a computer or word processor. It is expected that the works and critical studies referred to are for the most part in English, although the use of Japanese books, journals, etc. is not discouraged.

上記のとおり、ワープロで体裁および形式を調べて論文を提出すること。形式については可能なかぎりMHRAに準拠することを推奨する(<http://www.mhra.org.uk/style> から無料でオンライン版を参照、あるいはPDFを入手可能); 日本語文献については佐藤望編『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門(第2版)』(慶應義塾大学出版会、2012年)巻末を参照すること。エッセイで論じる作品については、レポートで引用する際には英語の原文を用いること(いうまでもなく、最初から日本語で書かれている著作や雑誌論文については、これは当てはまらない)。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

現代英文学

2単位

L125-1601

◆講義要綱

[授業の到達目標及びテーマ]

20世紀以降のイギリス小説のありかたを理解する。具体的には以下の3点を軸とする。

1. 年表にしたがって20世紀初頭から現代のイギリスの諸相を理解する。
2. 第一次世界大戦、モダニズム、第二次世界大戦、1950年代、1960年代、20世紀後半、21世紀と時代を区切りそれぞれの時代の小説の流れを概観し、代表的な作家と作品を考察することができる。
3. きわめて重要な小説論を読みながら、20世紀から現代までの小説史をまとめることができる。

[授業の概要]

20世紀から現代までのイギリスの社会情勢を理解し、代表的な小説が時代をどのように描いているか、考察する。

[授業計画]

指定教科書の構成は次の通り。

まえがき

I 小説家たち Novelists

- 1 終わりと始まりと 1901-1919年
- 2 戦後から戦後へ 1920-1954年
- 3 再びの始まり 1955-1979年
- 4 1980年以降のイギリス小説 1980年-

II 年表 Chronology

III 作品一覧 Works

IV 小説論 Novelists on Novels

Modern Fiction—Virginia Woolf

A Room of One's Own—Virginia Woolf

Professions for Women—Virginia Woolf

The Novel—D. H. Lawrence

Why the Novel Matters—D. H. Lawrence

The Novel and the Feelings—D. H. Lawrence

Thus to Revisit—Ford Madox Ford

用語解説 Glossary

主要参考文献

◆履修上の注意

テキストの情報を参考に、少しでも多くの作品に実際にふれることが重要である。イギリス小説の多様性を理解してほしい。

◆参考文献

Alexander, Michael. *A History of English Literature*. Basingstoke: Palsgrave Macmillan, 2007.

Day, Gary, ed. *Literature and Culture in Modern Britain, Volume Two: 1930-1955*. London: Longman, 2000.

石塚久郎編『イギリス文学入門』三修社、2014年。

河内恵子編『現代イギリス小説の「今」—記憶と歴史』彩流社、2018年

◆レポート作成上の注意点

引用文の情報を明記すること。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

英文学特殊

2 単位

L071-9201、L9239

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

17世紀から20世紀までの英文学の歴史を表現・言論の自由とキリスト教信仰という二つの大きな問題意識で分析し、イギリス文学の独自な歴史についての知見を得ることを目指す。

〔授業の概要〕

議会演説や戯曲の抜粋、あるいは有名小説の名場面の引用からなる指定教科書の多種多様な英文を読解しながら、言論と信仰という一見するとつながりのない、しかし熟考すればともに人間生活の根源的な問題として共通に理解されうる二大問題に対するイギリス文人のさまざまな異なった態度と実行の有り様を、受講生が独自の視点で分析する。

〔授業計画〕

本授業では、ひとつには主に17世紀から20世紀までのイギリス作家の足跡を各作家の表現・言論の自由に対する意識という観点で分析すること、もうひとつには19世紀と20世紀のイギリスを代表する三人の巨大な小説家—エリオット、ロレンス、そしてグリーン—の作品及び作家の人生において、キリスト教信仰がどのような姿で影を投げかけているかを考察すること、これら二つのテーマを追究する。具体的には、前者についてはチェスターフィールドの有名な議会テキストを読解したり、あるいは演劇やジャーナリズムでの言論統制の実態についての様々な事例について知識を深める。そして後者については、エリオットからロレンスを経てグリーンに至る過程の中で、作家と登場人物の信仰心が懐疑から放棄、そして復活へと言う道筋をたどるさまを、小説の緻密な読解で明らかにする。指定教科書の構成は次の通り。

序章：人間と言論、そして信仰心

第1章 表現の自由とイギリスの文人たち

第2章 表現の自由と20世紀のイギリス

第3章 出版と演劇の検閲をめぐって

第4章 Chesterfield の演説

第5章 演劇検閲令の廃止

第6章 年表とともに振り返る近代のイギリス文学

第7章 人の愛と神と、その三代の流れ

第8章 エリオット小説とヒューマニズム

第9章 ロレンス小説とヒューマニズム

第10章 グリーン小説と神の復権

第11章 年譜で学ぶ近現代のイギリス小説家

第12章 言論と信仰という大問題から見たイギリス小説の流れ

◆テキストの読み方

まずは、テキストを精読し、第1部で述べられている海保師の見解、第2部で述べられている上村師の作品論、それぞれについて正確に理解することが必要である。その上で、レポート課題などに応じて、参考文

献を自分で探し、増やしながら、自分独自の意見を持つことが必要。

◆履修上の注意

テキストもさることながら、小説などの原典をじっくりと読むことが何より大事である。しかし、レポートの執筆においては、単なるテキストの要約や作品の紹介ではなく、研究対象についての自分独自の視点を強く打ち出すことが求められる。その意味で、参考文献を貪欲に読破することが大事。その上で、ただの要約や紹介ではなくて「論」を展開させるように、努力してください。

◆参考文献

海保眞男著『文人たちのイギリス十八世紀』慶應義塾大学出版会、2001年

◆レポート作成上の注意点

レポート課題を熟読し、その趣旨をよく理解した上で、テキストおよび小説作品をまずはじっくりと読むことが大事である。そのうえで、課題に沿った、自分独自の視点から、論考を深めてゆくことが望まれる。レポートの執筆においては、単なるテキストの要約や作品の紹介ではなく、研究課題についての自分独自の意見をはっきりと述べる必要がある。その意味で、様々な参考文献を貪欲に読破し、謙虚かつ個性的に学習を深めることを期待する。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

中世英文学史

2 単位

L035-7601、L7622

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

中世イギリス文学の代表作を英文学の歴史的流れのなかに位置づけることで、その特徴およびそのなかで描かれている英語圏文化の特性について理解し、作品中の多様な英語表現を具体的に理解する。

〔授業の概要〕

教科書により中世英文学の歴史的展開と文化的背景を知ると共に、参考文献として指示された作品を読んでその主題及び英語表現の特徴を理解する。主要作品の歴史的位置づけ及び主題について論じるレポート課題を提出して教員からコメントを得ることでさらに理解を深める。

〔授業計画〕

英文学の起源となる中世の文学の歴史的展開を知ること、英語および英語文化の理解にとって重要である。本科目では、中世英文学の思潮、主要作品の特徴、文化的背景を学ぶことで、英文学および文化の多様性を具体的に理解することを目的としている。指定教科書の構成は以下の通りである。

第1篇 中世前期

古英語期全体の特徴を概観する「第1章 序論」に続いて、「第2章 アルフレッド以前の詩」と「第3章 アルフレッド時代よりノルマン征服（1066年）に至る間の文学」の2つに時代区分により、それぞれの時期の主要な韻文、散文作品について学ぶ。

第2篇 中世後期

1066年の「ノルマン征服」以降15世紀末までの中世後期（中英語期）についてはむしろジャンルによって区分し、中英語期全体の特徴を概観する「第1章 序論」に続いて、それぞれ抒情詩、ロマンス、滑稽譚、話集、論争の文学、宗教文学（説教、聖者伝、神秘主義文学）のジャンルについてその展開と代表作について学ぶ（第2～7章）。続けて、中英語期を代表する作家チョーサー（「第8章 チョーサーとその時代」と中世期の終わりとなる15世紀の文学については独立した章（「第9章 15世紀の時代」）で学ぶ。また、履修者は、教科書の学習と並行して、巻末の参考文献リストを活用して、主要作品を自ら現代英語訳や日本語訳を活用して講読する。

◆テキストの読み方

テキストは中世英文学の大きな流れを、なるべく多くの作品に触れつつ概説しています。流れを理解するために最も重要なことは、文学上の専門用語の意味を理解し、個々の作品をなるべく多く読んでみることで。自ら年表を作成して、個々の作品が制作された時期にはどのような歴史的事件があったかを対照してみることにも理解に役立ちます。

◆履修上の注意

テキスト末尾の「参考文献」にあげられている研究書へと読み進めてさらに理解を深めるとともに、何よりも中世英文学の作品をひとつでも多く読むように心がけてください。また、英文学関連の他の専門科目、英語史、西洋史の科目もあわせて履修することが望まれます。

◆関連科目

「近世英文学史」、「英語史」、「歴史（西洋史）」、「ACADEMIC WRITING II」

◆参考文献

レポート課題とともに指示する。

◆レポート作成上の注意点

レポートの作成にあたっては、他の文献から引用した箇所、他の文献の記述を自分なりにパラフレーズして使用した箇所には、正確に注をつけること。また、レポートの末尾に、使用した文献を一次資料（引用した作品そのものやその他の原典資料）と二次資料（研究書、研究論文など）に分けて列挙すること。注や参考文献の書式は「学習の手引き」などを参考に正確に記すこと。また、「ACADEMIC WRITING II」のテキスト（通信教材）には、注の付け方や書式について、詳しい解説が含まれている。注、参考文献が不正確なレポートは再提出となり、他の文献に記されている内容をあたかも自分の見解のように用いることは論文盗用と見なされ、処分の対象となる。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

近世英文学史

2単位

L036-7701、L7723

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

16世紀から19世紀のイギリス文学の代表作を歴史的流れのなかに位置づけることで、その特徴およびそのなかで描かれている英語圏文化の特性について理解し、作品中の多様な英語表現を具体的に理解する。

〔授業の概要〕

指定テキストの熟読により、イギリス文学の各ジャンルが同時代の社会といかなる関係を結んでいるかを理解しつつ、実際の作品を読み込んだうえで解答する論述レポートを作成することで、枠組みと実際とを結びつけて考える。また定期試験ではテキストで扱われている思潮や作家・思想家に関する記述問題を出題し、テキストの理解が定着しているかを確認する。

〔授業計画〕

指定教科書の構成は次の通り。

I. 16世紀前半

I. ルネサンス概説 II. 英国の古典学者の思想 III. 宗教制度改革と聖書翻訳 IV. 詩歌の傾向 V. SATIRE の文学流行 VI. 散文作品 VII. 一般大衆文学 VIII. 劇文学 IX. ルネサンスの思想回想

II. エリザベス時代

I. 一般情勢 II. EDMUND SPENSER III. WILLIAM SHAKESPEARE と劇文学 IV. 詩歌 V. 散文文学 VI. エリザベス朝の文学回想

III. 17世紀

I. 一般情勢 II. JAMES I 世時代 III. CHARLES I 世及び COMMONWEALTH 時代 IV. JOHN MILTON V. RESTORATION 時代 VI. JOHN DRYDEN VII. 清教徒派の文学 VIII. 演劇 IX. 散文 X. 詩文 XI. 17世紀回想 (1) XII. 17世紀回想 (2) XIII. 17世紀回想 (3)

IV. 18世紀

I. 一般情勢 II. 詩文 III. 散文 IV. 演劇 V. 旅行記 VI. 後半期の一般情勢 VII. SAMUEL JOHNSON VIII. 散文 IX. 小説の発達 X. ロマン派の詩文 XI. 18世紀回想 (1) XII. 18世紀回想 (2)

V. 19世紀 (1)

I. 一般情勢 II. ロマン主義文学 III. 小説、随筆、批評 IV. 19世紀回想 (1)

VI. 19世紀 (2)

V. ヴィクトリア時代一般情勢 VI. 実利主義と自由主義 VII. 一般風潮に反対した批評家 VIII. MATTHEW ARNOLD IX. 新しい宗教運動 X. 文芸批評 XI. 論説その他 XII. 詩文 XIII. 小説 XIV. 世紀末文学 XV. 劇文学 XVI. 19世紀回想 (2)

◆テキストの読み方

「近世英文学史」のテキストは、16世紀から19世紀末までのイギリス文学の流れを、時代を追ってジャンル別に概説している。本書で指摘されている各時代の背景や作家の特徴は、一国の文学の伝統を理解するために本質的なものばかりである。より専門的な学習・

研究のためには文学史の知識は不可欠であり、細部までテキストを熟読し、自らの手でも系統的に整理することを薦める。また、下記の参考文献も併せて参照しつつ、可能な限り言及されている作品を実際に読んでみることで、知識を空疎なものにしないために重要である。

◆関連科目

「イギリス文学研究Ⅰ～Ⅲ」「英文学特殊」「シェイクスピア研究」「ACADEMIC WRITING II」

◆参考文献

斎藤勇『イギリス文学史』（研究社、1974年）
 神山妙子編著『初めて学ぶイギリス文学史』（ミネルヴァ書房、1989年）
 パット・ロジャーズ『図説イギリス文学史』青木健ほか訳（大修館書店、1990年）
 橋口稔編著『コンパクトイギリス文学史』増補版（荒竹出版、1991年）
 三ツ星堅三『イギリス文学史概説 社会と文学』（創元社、1993年）
 関裕三郎『作品が語るイギリス文学史』（開拓社、2000年）
 白井義昭『読んで愉しむイギリス文学史入門』（横浜市立大学学術研究会、2013年）
 石塚久郎編『イギリス文学入門』（三修社、2014年）

◆レポート作成上の注意点

レポートの作成にあたっては、他の文献から引用した箇所、他の文献の記述を自分なりにパラフレーズして使用した箇所には、正確に注をつけること。また、レポートの末尾に、使用した文献を一次資料（引用した作品そのものやその他の原典資料）と二次資料（研究書、研究論文など）に分けて列挙すること。注や参考文献の書式は本書「学習の手順」などを参考に正確に記すこと。また、「ACADEMIC WRITING II」のテキスト（通信教材）には、注の付け方や書式についての解説が含まれている。注、参考文献が不正確なレポートは再提出となる。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

イギリス文学研究Ⅰ—散文— 2単位

L109-1101

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

第一次世界大戦とイギリス小説を多角的に考察する。具体的には以下の3点を軸とする。

1. 第一次世界大戦とはいかなる戦いであったのか、歴史的事実を踏まえながら考察することができる。
2. 第一次世界大戦中の女性たちの立場をさまざまな角度から考えることができる。
3. 第一次世界大戦を経験し、その経験を小説に表現した女性作家たちの作品世界を理解する。戦争が強い生を切り取る作品を読み、その世界を知ること、歴史と文学の有機的な関係を知る。

〔授業の概要〕

20世紀の最大の歴史的事件である第一次世界大戦

は21世紀の現代でもさまざまな作品の重要なテーマとなっている。歴史と文学を戦争を軸に考察したい。とりわけ、戦争における女性たちの立ち位置を明確にしたい。

〔授業計画〕

指定教科書の構成は次の通り。（テキストに章番号はふられていないが、以下、便宜上章番号を付す。）

- 第1章 はじめに戦争ありき 河内恵子
- 第2章 戦争の影を求めて
—『歯科記録』からドロシー・リチャードソンの『遍歴』を読む
- 第3章 女たちの戦争
—レベッカ・ウェストの『兵士の帰還』を読む
- 第4章 もう一人のジェイコブ
—ヴァージニア・ウルフの『ジェイコブの部屋』と戦争
- 第5章 不在の戦争、あるいは享楽の反復
—キャサリン・マンスフィールドの「至福」を読む
- 第6章 心に開いた生の傷
—メイ・シンクレアの『ロマンティック』を読む
- 第7章 「戦争は私の信念を裏切り、私の愛を嘲った」
—ヴェラ・ブリテンの『青春の遺言書』と『暗い満ち潮』を中心に
- 第8章 中間地帯（ノーマンズランド）という居場所
—ラドクリフ・ホールの『孤独の泉』を読む
- 第9章 母と娘が紡ぐ残酷物語
—ヘレン・ゼナ・スミス『西部戦線異状あり—戦争の継子たち』を読む
- 第10章 戦争という歴史／物語
—21世紀の今、第一次世界大戦文学は？

◆テキストの読み方

通読して、文学史と文化史を把握してもらいたい。

◆履修上の注意

参考にした文献の情報は明確に伝えること。

◆参考文献

Baldick, Chris. *The Oxford English Literary History: The Modern Movement, 1910-1940*. Oxford: Oxford UP, 2005.

清水一嘉・鈴木俊次編『第一次世界大戦とイギリス文学—ヒロイズムの喪失』世界思想社、2006年。

◆レポート作成上の注意点

問題（2）においては、作品からの引用文を適切に用いて具体的な論を展開すること。なお、引用文の情報を明記すること。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

イギリス文学研究Ⅱ—詩—

2単位

L033-7603、L7628

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

イギリスの詩作品を深く理解し、文学史の中に位置づけること。

〔授業の概要〕

レポートの添削指導を通して、詩の的確な理解を導き、レポートの作成法についても指導を行う。

〔授業計画〕

ミルトン、シェイクスピア、キーツ、エリオットなど、16世紀末から20世紀にかけてのイギリスの代表的詩人の作品を読む。散文とは異なる言葉の世界が展開する詩作品を、英語という言語の特徴を捉えながら理解していく。指定教科書の構成は次の通り。

序文 英語の韻律の解説

第1章 スペンサー

第2章 シェイクスピア

第3章 ダン

第4章 ミルトン

第5章 マーヴェル

第6章 ドライデン

第7章 ポープ

第8章 グレイ

第9章 ゴールドスミス

第10章 ブレイク

第11章 バーンズ

第12章 ワーズワース

第13章 コウルリッジ

第14章 バイロン

第15章 シェリー

第16章 キーツ

第17章 テニソン

第18章 ブラウニング

第19章 アーノルド

第20章 ロセッティ

第21章 スウィンバーン

第22章 ハーディー

第23章 イェイツ

第24章 T・S・エリオット

◆テキストの読み方

英詩の特徴と味わい方は、テキスト序文に尽くされているので、熟読されたい。様々な韻律法が紹介されているが、それを丸暗記する必要はない。しかしそこで強調されているように、詩の真髄は言葉のリズムにあるので、どの作品も単語の意味を調べるばかりではなく、是非声に出して読み、口で賞味して頂きたい。詩のリズムは、わらべうたのように、意味の把握以前に音楽的な調子をもって言葉に息吹を吹き込んでいるからである。その上で、言葉の意味から全体の構成、作者の伝記的背景、時代状況に至るまでの要素がない交ぜとなつて、作品の鑑賞に奥行きが与えられるであろう。

◆レポート作成上の注意点

広く参考文献にあたり、使用部分には注を施して出典を明記すること。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

イギリス文学研究Ⅲ—演劇—

2単位

L050-7902

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

イギリス演劇の歴史の変遷と全体像を把握し、それぞれの時代の名作を原語で講読し、作品のみならずイギリスの文化や歴史を深く理解できるようになることが到達目標である。

〔授業の概要〕

本科目の受講生は以下のようなプロセスで学習を進め、レポート作成へと至ってほしい。

1 教科書を通読し、イギリス演劇の歴史の変遷や文化的な文脈、各作家の劇作品について、バランス良く基礎知識を習得する。特に教科書の第一部「イギリス演劇小史」をしっかりと読んでそれぞれの時代や作家の特徴を理解してほしい。

2 教科書を参考にイギリス演劇の劇作品を複数選び、分析的に精読する。教科書の第二部に収録された作品の原文（抄）、あるいはその他の興味がある作品については註や解説が豊富な学術的校訂版を入手し、翻訳などを活用しつつ、原文と意識的に対照させながら読む。また、各時代からそれぞれ一編ずつ読むのが望ましい。

3 イギリス演劇を実際にどのように分析するのか、それを知り、自分の解釈を客観的に提示するための参考とするために、近年の研究書の中から定評あるものを複数読んでみる（教科書第三部の参考文献集を利用する）。

〔授業計画〕

教科書を通読について

本科目の教科書『イギリス文学研究Ⅲ—演劇—』は、イギリス演劇全体を把握し、理解するために必要な作家や作品の中心に、その演劇的・文化的背景に目配りをしつつ記述されている。教科書をしっかりと何度も通読し、頭に入れることで、それぞれの作品や作家だけでなく、イギリスの演劇や文化全体を理解する基本的知識を身につける。その上で、各自の興味に従ってそれぞれの時代の劇作品を数点選び、じっくりと読み込んでほしい。学ぶ内容は以下の通りである。

第一章 中世宗教劇からエリザベス朝演劇へ

第二章 シェイクスピアの時代

第三章 ペン・ジョンソンから劇場閉鎖まで

第四章 王政復古期の演劇

第五章 十八世紀から十九世紀末まで

第六章 二十世紀の演劇

◆テキストの読み方

個々の作品世界に入り込むことが重要である。その鍵を握るのが登場人物の台詞であろう。台詞は言葉の集積である。それ故に、一語一語の意味を解き明かし、登場人物の心理や思想、行動様式や生き方などを理解する作業が不可欠である。行間を読む（read between the lines）という作業に挑むことこそが何よ

りも求められているということを、自覚してほしい。

◆履修上の注意

参考資料への過度の依存は避けるべきである。参考文献からの引用などは具体的引用箇所を明らかにすべきであり、断りなく書き写してはならない (cf. plagiarism)。稚拙な文章であると思われても、自分自身の頭で書き連ねる努力が大切である。行間に滲み出るものが、偽らざる自分自身の姿であり形であってほしいからである。

◆関連科目

「イギリス文学研究Ⅰ—散文—」、「イギリス文学研究Ⅱ—詩—」、「シェイクスピア研究」等の科目と有機的に関連していることは、理解できよう。

◆参考文献

教科書の第三部参考文献集を利用すること。

◆レポート作成上の注意点

レポートの作成にあたっては、他の文献から引用した箇所、他の文献の記述を自分なりにパラフレーズして使用した箇所には、正確な註をつけること。それをしない場合には剽窃とみなされる。また、レポートの末尾に、使用した文献を一次資料（引用した作品そのものやその他の原典資料）と二次資料（研究書、研究論文など）に分けて列挙すること。註や参考文献の書式は『塾生ガイド』（または『教職課程履修案内』）に掲載の「レポート作成上の注意」、そして『MLA 英語論文の手引き』などを参考に正確に記すこと。また「ACADEMIC WRITING II」のテキスト（通信教材）には、註の付け方や書式について、詳しい解説が含まれている。註、参考文献が不正確なレポートは再提出となる。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

アメリカ文学

2 単位

L105-1001

市販書採用科目※

◆テキスト

巽孝之『アメリカ文学史—駆動する物語の時空間』慶應義塾大学出版会、2003年

※「アメリカ文学」は上記市販書と、配本テキストのアンソロジー『アメリカ文学』の2冊が指定テキストとなります。

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

17世紀から21世紀へ至る具体的な作品を総覧することで、アメリカ英語の独特な表現はもとより土壌となる文化への理解、それらが生み出した時代ごとの文学的名作を通しアメリカ文明史そのものへの理解を深めることを到達目標とする。

〔授業の概要〕

アメリカ文学に親しむには、植民地時代以来、アメリカ文学史において長く培われたアメリカン・ナラティブの形成と発展に注目することが不可欠である。コロニアリズムからポスト・アメリカニズムへおよぶ射程の中で、文学はいったいどのように歴史と連動したのか、あるいは歴史はいかに文学を創造したのか、ア

メリカ文学思想史の可能性を探る。

その学習過程では、17世紀から21世紀へ至るアメリカ英語表現はもとより土壌となる文化、それらが生み出した時代ごとの文学的名作を通したアメリカ文明への理解を深めていくことになる。

〔授業計画〕

指定教科書の主な構成は、次のとおりである。

- (1) 巽孝之『アメリカ文学史—駆動する物語の時空間』（慶應義塾大学出版会、2003年）
はじめに——「アメリカ文学史」とは何か
第1章 アメリカ文学史序説——ロード・ナラティブの千年紀
第2章 神権制下の文学——ピューリタニズム
第3章 独立革命の文学——リバブリカニズム
第4章 膨張主義の文学——トランセンデンタリズム
第5章 進化思想の文学——ダーウィニズム
第6章 荒地以後の文学——コスモポリタニズム
第7章 冷戦危機の文学——ポスト・アメリカニズム
第8章 アメリカ文学の正典を読む

- (2) 巽孝之『アメリカ文学』（慶應義塾大学教材 通信教育課程テキスト、2010年）

CHAPTER ONE

John Winthrop, “A Model of Christian Charity” (1630)

著者と作品、英文、解説

CHAPTER TWO

Benjamin Franklyn, “The Speech of Miss Polly Baker” (1747)

著者と作品、英文、解説

CHAPTER THREE

Thomas Jefferson, “The Declaration of Independence” (1776)

著者と作品、英文、解説

CHAPTER FOUR

Edgar Allan Poe, “Hop-Frog” (1849)

著者と作品、英文、解説

CHAPTER FIVE

Ambrose Bierce, “An Occurrence at Owl Creek Bridge” (1890)

著者と作品、英文、解説

CHAPTER SIX

Mark Twain, “The War-Prayer” (1904-05)

著者と作品、英文、解説

CHAPTER SEVEN

F. Scott Fitzgerald, “The Swimmers” (1929)

著者と作品、英文、解説

CHAPTER EIGHT

Thomas Pynchon, “Entropy” (1960)

著者と作品、英文、解説

CHAPTER NINE

Karen Tei Yamashita, “Siamese Twins and Mongoloids” (1999)

著者と作品、英文、解説

◆参考文献

Peter High, *An Outline of American Literature*.
New York: Longman, 1986.

巽孝之『ニュー・アメリカニズム—米文学思想史の物語学』増補新版、青土社、2005年

◆レポート作成上の注意点

教科書を熟読した上で、その方法論を活かしつつ、代表的作品群を読み解くことが、このレポート課題の学生諸君に要求するところである。したがって、明らかに下記の三点に違反するものは不合格とする。

- (1) アンソロジー収録作品原典を必ず読み、そのことがはっきりわかるように原文からの引用と、できれば自身による試訳も含むこと。
- (2) 教科書で扱われているアンソロジー収録以外の作品の場合、教科書をふまえながらも、できるだけ別の見解を編み出すこと。
- (3) 教科書で扱われていない作品の場合、その作家に関する他作品及び二次資料をも、図書館できちんと調査・収集してから分析すること。なお、レポートにはときとして教科書の記述を丸写しにして恥じないものが少なくない。そういう姿勢が露呈した場合、自動的に不合格となるので覚悟されたい。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

アメリカ文学研究Ⅰ

2単位

L030-7602、L7626

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

アメリカ文学の特徴をなす19世紀文学の特徴を学び、英語力の向上とともに、アメリカ国家形成期の文学的想像力への理解を深める。

〔授業の概要〕

指定された教科書に掲載されている歴史的背景を通読した後、収録された作品を精読し、英語で書かれた文学作品を読み通すことによる英語力の向上とともに、アメリカが国家として形成される時代に醸し出された文学的想像力について考察する。

〔授業計画〕

指定教科書の主な内容構成は次の通り。

1. アメリカン・ルネサンス（歴史的背景）
2. ラルフ・ウォルドー・エマソン “Nature”
3. ヘンリー・デイヴィッド・ソロー “Where I Lived, and What I Lived for”
4. ウォルト・ホイットマン “Crossing Brooklyn Ferry”
5. エドガー・アラン・ポー “The Raven”
6. ナサニエル・ホーソーン “Young Goodman Brown”
7. ハーマン・メルヴィル “The Sermon”

以上の作品読後、このうち一作品を選び、指定教科書内に記載されている参考文献などをリサーチした上でレポートを作成する。その後、定期試験受験の準備へと入る。

8. 参考文献のリサーチ

9. レポートの作成

10. 定期試験準備

◆テキストの読み方

冒頭の “American Renaissance” の解説をよく読んでから、テキストの精読に取りかかられたい。もちろん英語で執筆された文学作品を読み通すことは容易なことではない。急いで読み飛ばしてしまうようなことはせず、時間をかけて理解されたい。またその際、翻訳を補助的に使用してもよいが、原文から伝わるニュアンスを読み取る努力を大切にすることを念頭においてもらいたい。

◆履修上の注意

基本的な英語文法を習得していることが必要となる。またレポート作成にあたっては、作品や作家についてのリサーチが必要となるため、図書館でのリサーチや、データベースを用いた基礎的な資料調査方法を習得していることが望ましい。

◆関連科目

「アメリカ文学」「アメリカ文学研究Ⅱ」

◆参考文献

上記テキスト内に掲載されている。

◆レポート作成上の注意点

テキストを読みながら、印象に残った部分や疑問に思ったところなどに印をつけながら読むとよい。また、レポートの書き方については、事前に論文の書き方に関する文献を少なくとも一冊通読し、構成や引用の方法などを確認しておくこと。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

アメリカ文学研究Ⅱ

2単位

L017-6901、L7931

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

二十世紀アメリカ文学の古典的作品を原文で読み、二十世紀アメリカ文学を論じる上で必要な研究手法を理解する。

〔授業の概要〕

本科目では、二十世紀アメリカ文学の作品をどのように分析するのか、実際にいくつかの事例研究を行い、作品の内容、形式、意義、影響などを、一次資料と二次資料を関連づけてどのように論じたらよいのかを学ぶ。登場人物の性格描写や物語設定、表現上の特質など、原文に即して作品中の具体的な証拠を集め、それらを作品外の様々な事象と関連づけ、文学研究の論文を書くための技術を体得する。

〔授業計画〕

実際の作品を丹念に読むことなしに文学研究は成立しない。本科目では、二十世紀アメリカ文学の中から、異なる背景を持つ著者による短編、中編作品を取り上げ、作品解釈の技術を向上させつつ、二十世紀アメリカ文学がどのような主題や技法を重視してきたのかを検討し、他のアメリカ文学の作品を研究する上での土台を作る。指定教科書の構成は以下の通りである。

- 第一章 Sherwood Anderson, “The Egg”
 第二章 Albert Maltz, “The Happiest Man on Earth”
 第三章 Flannery O’Connor, “Everything That Rises Must Converge”
 第四章 Saul Bellow, Seize the Day

◆履修上の注意

英語で書かれた作品の解釈を行うのであるから、英語の必要単位が全て取得済であることは、当科目の履修の条件として当然のことである。まとまった量の英語の読解に自信のない者には履修を勧めない。

◆参考文献

多数あるので、テキストに掲載された参考文献リストを参照のこと。

◆レポート作成上の注意点

文学作品を「論じる」という行為は、構成・技法・形式上の特質、登場人物の性格描写や人物造形、主題、文学史的価値などについて、作中の具体的な証拠（舞台設定や表現など）に基づいて論理的に説明し、自らの解釈を展開することである。作者は何を訴えようとしたのか、そのためにどのような工夫をしているのかを分析すること。これらの点について言及されておらず、あらすじ紹介や感想文に終始しているレポートは、「論じる」という次元に達していないものとして、全て不合格とする。また、作品の理解には、歴史的背景や文学史的知識が有効であることはいままでもないが、この科目は、それらの知識の有無を直接問うことが目的ではない。それらの知識を参考にして、実際の作品の価値をどう解釈するかがあくまで重要なのであるから、歴史的背景や文学史的知識を羅列しただけのレポートも不合格とする。したがって、当科目のレポートを作成するに当たっては、テキストの原文を丹念に読むことはもちろん、作品の書かれた時代背景や作者の文学史的位置、作者が書いた他の作品や他の作家との比較等、幅広い知識を活用して、実際の作品を具体的な証拠からどう意味づけるか論理的に説明できなければならない。作品を一つ読めばレポートが書けるわけではなく、アメリカ文学の流れや個々の作家に関する相当な勉強量が求められていることを認識した上でレポート作成に取りかかること。なお、科目試験の受験に当たっては、このレポート作成に求められるのと同様の勉強をテキストに掲載された他の全ての作品についても行った上で臨むこと。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

シェイクスピア研究

2 単位

L039-7702、L7730

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

シェイクスピアの有名な作品を原語で講読し、作品のみならずイギリス初期近代の文化を深く理解できるようになることが到達目標である。

〔授業の概要〕

シェイクスピアの劇作品は、16世紀以来、演出を

変えて繰り返し上演されただけでなく、映画、絵画、オペラなど、異なったメディアでも扱われ続けてきた。そのようにテキストを受け止める文化的文脈が変化しても、変わらずに人気を保ち続けることは、シェイクスピア作品がまさに古典であることの証しである。そうした永続的な魅力を一読者として知り、それを客観的に言語化できるためには、シェイクスピア解釈における様々な批評的立場を知り、それらを自らの解釈の確立に活用するとともに、何よりもテキスト本文の厳密な読みを心がける必要がある。それは16世紀の英語を語学的に正確に読むということにとどまらず、作品中における特定の概念の意識的な主題化、イメージの連鎖、プロットの展開、登場人物の類型などに関して、分析的にテキストを読むことである。この点を踏まえて、本科目の受講生は以下のようなプロセスで学習を進め、レポート作成へと至ってほしい。

- 1 教科書を通読し、エリザベス朝時代の上演の背景やシェイクスピアの劇作品について、バランス良く基礎知識を習得する。シェイクスピアの英語（第7章）については、文法的特徴を現代英語との対比において理解する。
- 2 教科書を参考にシェイクスピアの劇作品を複数選び、分析的に精読する。翻訳を活用して読み進めて良いが、定評ある学術的校訂版（The New Cambridge Shakespeare, The Oxford Shakespeare, The Arden Shakespeare などのシリーズが註や解説とともに豊富である）を入手し、原文と意識的に対照させながら読むことが望ましい。また、各ジャンル（悲劇、喜劇、歴史劇、ロマンス劇）について、それぞれ一編ずつ読むことが望ましい。
- 3 シェイクスピア劇を実際にどのように分析するのか、それを知り、自分の解釈を客観的に提示するための参考とするために、近年のシェイクスピア劇の研究書の中から定評あるものを複数読んでみる（以下の参考書リストを利用すること）。

〔授業計画〕

教科書を通読について

本科目の教科書『シェイクスピア研究』は、シェイクスピアを研究するために有益な、シェイクスピアに関する伝記的事実、作品の制作状況、エリザベス朝の世界観や上演形態に関する基礎知識を中心的に記述している。教科書をしっかりと何度も通読し、頭に入れることで、作品を読み理解するための基本を理解してほしい。その上で、各自の興味に従ってシェイクスピアの劇作品を数点選び、じっくりと読み込んでほしい。学ぶ内容は以下の通りである。

- 第一章 シェイクスピア時代の概観
 第二章 エリザベス一世時代の劇場と劇団
 第三章 歴史劇
 第四章 喜劇
 第五章 悲劇
 第六章 ローマ劇とロマンス劇
 第七章 シェイクスピアのテキストと英語

◆テキストの読み方

本科目のテキストは、シェイクスピアを批評するために有益な、シェイクスピアに関する伝記的事実、作品の制作状況、エリザベス朝の世界観や上演形態に関

する基礎知識を中心的に記述している。テキストを通読することで作品を読むための文化的文脈を理解してほしい。その上で、各自の興味に従ってシェイクスピアの劇作品を数点選び、じっくりと読み込んでほしい。

◆関連科目

「近世英文学史」「イギリス文学研究Ⅲ—演劇—」
「ACADEMIC WRITING II」

◆参考文献

シェイクスピア研究には多量の研究書が存在しているので、良書のみを選び出して利用する必要がある。以下には日本語で読めるものに限って、テーマごとに厳選して列挙した。勿論以下に示し得なかった研究書の中にも重要なものは数多いが、このリストの書目を出発点として、さらに自分の興味にあった近年の最先端研究（専ら洋書になるだろう）を探して読み進めてほしい。シェイクスピアをはじめ16～17世紀イギリス文学に関する重要な参考文献については、英米文学専攻のウェブサイトでも紹介しているので参照のこと。

(0) シェイクスピアについての入門書

- ・大場建治、『シェイクスピアへの招待』（東京書籍・東書選書）
- ・尾崎寄春、『リヴァサイドのシェイクスピア—原文で読む楽しさ』（英宝社）
- ・高田康成他編、『シェイクスピアへの架け橋』（東京大学出版会）
- ・小田島雄志、『シェイクスピアの人間学』・『シェイクスピアの恋愛学』（新日本出版社）
- ・松岡和子、『深読みシェイクスピア』（新潮選書）
- ・日本シェイクスピア協会編、『新編・シェイクスピア案内』（研究社）
- ・今西雅章他編、『シェイクスピアを学ぶ人のために』（世界思想社）

(1) シェイクスピアの伝記

- ・サミュエル・シェーンボウム、『シェイクスピアの生涯』（紀伊国屋書店）
- ・スティーヴン・グリーンブラット、『シェイクスピアの驚異の成功物語』（白水社）
- ・ピーター・アクロイド、『シェイクスピア伝』（白水社）
- ・小津次郎、『シェイクスピア伝説』（岩波書店・岩波セミナーブックス）

(2) シェイクスピアとエリザベス朝の劇場

- ・アンドリュー・ガー、『演劇の都、ロンドン：シェイクスピア時代を生きる』（北星堂）
- ・フランセス・A・イエイツ、『世界劇場』（晶文社）
- ・玉泉八州男、『女王陛下の興行師たち』（芸立出版）
- ・アン・バートン、『イリュージョンの力：シェイクスピアと演劇の理念』（朝日出版社）
- ・河合祥一郎、『ハムレットは太っていた？』（白水社）
- ・C・ウォルター・ホッジズ、『絵で見るシェイクスピアの舞台』（研究社）
- ・——、『シェイクスピアの劇場：グローブ座の歴史』（筑摩書房）

(3) 上演・演出の視点から

- ・喜志哲雄、『劇場のシェイクスピア』（早川書房）

- ・マイケル・ボグダノフ、『シェイクスピア：ディレクターズ・カット』（研究社）
- ・ピーター・ブルック、『なにもない空間』（晶文社・晶文選書）
- ・——、『殻を破る—演劇的探究の40年』（晶文社）
- ・大場建治、『英国俳優物語：エドモンド・キーン伝』（晶文社）
- ・笹山隆、『ドラマと観客—観客反応の構造と戯曲の意味』（研究社）
- ・今西雅章、『シェイクスピア劇と図像学—舞台構図・場面構成・言語表象の視点から』（彩流社）
- ・ハーリー・グランヴィル・バーカー、『ハムレット：シェイクスピア劇への序文』（早稲田大学出版部）

(4) 王権と宮廷について知りたい

- ・クリストファー・ヒバート、『女王エリザベス』（原書店）
- ・フランセス・A・イエイツ、『星の処女神エリザベス女王』（東海大学出版会）
- ・デイヴィッド デュラント、『ハードウィック館のベス—シェイクスピア時代のある女性像』（松伯社）
- ・リットン・ストレイチー、『エリザベスとエセックス—王冠と恋』（中央公論社）
- ・山田明廣、『イギリスの宮廷仮面劇』（英宝社）
- ・ロイ・ストロング、『ルネサンスの祝祭：王権と芸術』（平凡社）
- ・有路雍子・舟木茂子・成沢和子、『宮廷の文人たち—イギリス・ルネサンスのパトロン制度』（リベラル出版）
- ・ガイ・フィッチ・ライトル&スティーヴン・オーゲル編、『ルネサンスのパトロン制度』（松柏社）
- ・J・E・ニール、『エリザベス女王』（みすず書房）
- ・太田一昭、『英国ルネサンス演劇統制史：検閲と庇護』（九州大学出版会）
- ・櫻井正一郎、『女王陛下は海賊だった：私掠で戦ったイギリス』（ミネルヴァ書房）

(5) イギリス・ルネサンス期のジェンダーについて知りたい

- ・ジュリエット・デュッシンベリー、『シェイクスピアの女性像』（紀伊国屋書店）
- ・浜名恵美、『ジェンダーの驚き』（日本図書センター）
- ・アラン・ブレイ、『同性愛の社会史—イギリス・ルネサンス—』（彩流社）
- ・リン・ハント、『ポルノグラフィの発明：猥褻と近代の起源、1500年から1800年へ』（ありな書房）
- ・楠明子、『英国ルネサンスの女たち』（みすず書房）
- ・中村裕英、『様々な結婚のディスコースと女性主体：シェイクスピア、エリザベス・ケアリ、ミドルトン』（溪水社）
- ・スティーヴン・オーゲル、『性を装う：シェイクスピア・異性装・ジェンダー』（名古屋大学出版会）
- ・楠明子・原英一編、『ゴルディオスの絆：結婚のディスコースとイギリス・ルネサンス演劇』（松

- 柏社)
- ・ロレンス・ストーン、『〈家族・性・結婚〉の社会史』(勁草書房)
 - ・スーザン・W・ハル、『女は男に従うもの? : 近世イギリス女性の日常生活』(刀水歴史全書66、刀水書房)
 - ・イヴ・K・セジウィック、『男同士の絆: イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(名古屋大学出版会)
 - ・朱雀成子、『愛と性の政治学—シェイクスピアをジェンダーで読む』(九州大学出版会)
 - ・小林かおり、『じゃじゃ馬たちの文化史—シェイクスピア上演と女の表象』(南雲堂、2007年)
- (6) イギリス・ルネサンス期の文化一般について知りたい
- ・ヨハン・ホイジンガ、『中世の秋』(中公文庫)
 - ・ロイ・ストロング、『イングランドのルネサンス庭園』(ありな書房)
 - ・川崎寿彦、『庭のイングランド: 風景の記号学と英国近代史』(名古屋大学出版会)
 - ・フィリップ・アリエス、『子供の誕生』(みすず書房)
 - ・フィリップ・アリエス、『死を前にした人間』(みすず書房)
 - ・アラン・マクファーレン、『資本主義の文化—歴史人類学的考察』(岩波書店)
 - ・E.M.W. ティリヤード、『エリザベス朝の世界像』(筑摩書房)
 - ・川北稔、『洒落者たちのイギリス史—騎士の国から紳士の国へ』(平凡社)
 - ・中央大学人文科学研究部編、『イギリス・ルネサンスの諸相: 演劇・文化・思想の展開』(中央大学出版部)
 - ・末廣幹編、『国家身体はアンドロイドの夢を見るか: 初期近代イギリス表象文化アーカイヴ1』(ありな書房)
 - ・佐々木和貴編、『演劇都市はパンドラの匣を開けるか: 初期近代イギリス表象文化アーカイヴ2』(ありな書房)
 - ・日本シェイクスピア協会編、『シェイクスピアとその時代を読む』(研究社)
- (7) シェイクスピアを精神的に読みたい
- ・アーネスト・ジョーンズ、『ハムレットとオイディプス』(大修館書店)
 - ・バーバラ・ロジャーズ＝ガードナー、『ユングとシェイクスピア』(みすず書房)
 - ・関谷武史、『シェイクスピア: 心の深層を読む』(旺史社)
- (8) シェイクスピアを民衆文化の視点から読みたい
- ・ナタリー・Z・デーヴィス、『愚者の王国・異端の都市: 近代初期フランスの民衆文化』(平凡社)
 - ・ロバート・W・アーカムソン、『英国社会の民衆娯楽』(平凡社)
 - ・ピーター・ストリブラス&アロン・ホワイト、『境界侵犯—その詩学と政治学』(ありな書房)
 - ・ピーター・バーク、『ヨーロッパの民衆文化』(人文書院)
 - ・ロナルド・ノウルズ編、『シェイクスピアとカーニヴァル—バフチン以後』(法政大学出版局)
 - ・上野美子、『ロビン・フッド伝説』(研究社)
 - ・青山誠子、『シェイクスピアの民衆世界』(研究社)
 - ・ミハイール・バフチン、『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』(せりか書房)
- (9) シェイクスピアを書物史的に考察したい
- ・E.L. アイゼンステイン、『印刷革命』(みすず書房)
 - ・山田昭廣、『本とシェイクスピア時代』(東京大学出版会)
 - ・太田一昭編、『エリザベス朝演劇と検閲』(英宝社)
 - ・ロジェ・シャルチエ、『読書の文化史』(新曜社)
 - ・ピーター・バーク、『近世ヨーロッパの言語と社会—印刷の発明からフランス革命まで』(岩波書店)
 - ・香内三郎、『「読者」の誕生: 活字文化はどのようにして定着したか』(晶文社)
 - ・ジョン・フェザー、『イギリス出版史』(玉川大学出版部)
 - ・宮下志朗、『本の都市リヨン』(晶文社)
- (10) 絵画・芸術とシェイクスピアの関係について考察したい
- ・蒲池美鶴、『シェイクスピアのアナモルフォーズ』(研究社)
 - ・岩崎宗治、『シェイクスピアの文化史—社会・演劇・イコノロジー』(名古屋大学出版会)
 - ・——、『シェイクスピアのイコノロジー』(三省堂)
 - ・M. コーベット、R.W. ライトバウン、『寓意の扉: マニエリスム装飾表題頁の図像学』(平凡社)
 - ・ワイリー・サイファー、『ルネサンス様式の四段階: 1400年~1700年における文学・美術の変貌』(河出書房新社)
 - ・レイモンド・クリバンスキー他、『土星とメランコリー: 自然哲学・宗教・芸術の歴史における研究』(晶文社)
 - ・川崎寿彦、『鏡のマニエリスム: ルネッサンス想像力の側面』(研究社)
 - ・エドガー・ウィント、『ルネサンスの異教秘儀』(晶文社)
 - ・松田美作子、『シェイクスピアとエンブレム』(慶應義塾大学出版会)
- (11) 宗教改革と文化について考察したい
- ・キース・トマス、『宗教と魔術の衰退』(法政大学出版会)
 - ・山本信太郎、『イングランド宗教改革の社会史—ミッド・テューダー期の教区教会』(立教大学出版会)
 - ・クリストファー・ヒル、『17世紀イギリスの急進主義と文学』(法政大学出版局)
 - ・常行敏夫、『市民革命前夜のイギリス社会』(岩波書店)
 - ・八代崇、『イギリス宗教改革史研究』(創文社)
 - ・G・R・エルトン著、越智武臣訳『宗教改革の時

- 代 1517-1559』(みすず書房、1973年)
- (12) ルネサンスの魔術と文化について
- ・アレン・ディーバス、『ルネサンスの自然観』(サイエンス社)
 - ・バーバラ・トレイスラー、『ルネサンスの魔術師』(晶文社)
 - ・ピーター・フレンチ、『ジョン・ディー：エリザベス朝の魔術師』(平凡社)
 - ・ウェイン・シュメイカー、『ルネサンスのオカルト学』(平凡社)
 - ・フランセス・A・イエイツ、『記憶術』(水声社)
 - ・——、『ジョルダナーノ・ブルーノとヘルメス教の伝統』(工作舎)
 - ・D・P・ウォーカー、『ルネサンスの魔術思想：フィッチーノからカンパネッラへ』(平凡社)
 - ・——、『古代神学：15-18世紀のキリスト教プラトン主義研究』(平凡社)
 - ・ロバート・J・W・エヴァンズ、『魔術の帝国：ルドルフ二世とその帝国』(ちくま学芸文庫)
- (13) 妖精
- ・キャサリン・ブリッグズ、『妖精の時代』(筑摩書房)
 - ・井村君江、『妖精学大全』(東京書籍)
 - ・井村君江、『妖精の系譜』(新書館)
 - ・石原孝哉、『シェイクスピアと超自然』(南雲堂)
- (14) イギリス・ルネサンス期の社会について知りたい
- ・A・L・バイアー、『浮浪者たちの世界—シェイクスピア時代の貧民問題』(同文館出版)
 - ・G・サルガードー、『エリザベス朝の裏社会』(刀水書房)
 - ・ジャン＝クリストフ・アグニュー、『市場と劇場：資本主義・文化・表象の危機1550-1750』(平凡社)
 - ・エイザ・ブリッグズ、『イングランド社会史』(筑摩書房)
 - ・キース・ライトソン、『イギリス社会史1580-1680』(リプロポート)
 - ・アラン・マクファーレン、『イギリス個人主義の起源：家族・財産・社会変化』(リプロポート)
 - ・ピーター・ラスレット他、『家族と人口の歴史社会学』(リプロポート)
 - ・ピーター・ラスレット、『われら失いし世界』(三嶺書房)
- (15) スパイ活動・ジャーナリズム・外交政策について知りたい
- ・村上直之、『近代ジャーナリズムの誕生：イギリス犯罪報道の社会史から』(岩波書店)
 - ・ジョン・ボッシー、『ジョルダナーノ・ブルーノと大使館のミステリー』(影書房)
 - ・テリー・クラウドディ、『スパイの歴史』(東洋書林)
 - ・C・ヴェロニカ・ウェッジウッド、『オラニエ公ウィレム：オランダ独立の父』(文理閣)
 - ・ミルヤ・ファン・ティールホフ、『近世貿易の誕生：オランダの「母なる貿易」』(知泉書館)
 - ・木村俊道、『文明の作法—初期近代イングランドにおける政治と社交』(ミネルヴァ書房)

- ・櫻井正一郎、『サー・ウォルター・ローリー—植民と黄金』(人文書院)
 - ・——、『最後のウォルター・ローリー—イギリスそのとき』(みすず書房)
 - ・フランセス・A・イエイツ、『ジョン・フロリオ—シェイクスピア時代のイングランドにおけるイタリア人の生涯—』(中央公論新社)
- (16) シェイクスピアの喜劇
- (a) ロマンティック・コメディ
- ・アレグザンダー・レガット、『シェイクスピア、愛の喜劇』(透土社)
 - ・中野春夫、『恋のメランコリー シェイクスピア喜劇世界のシミュレーション』(研究社)
 - ・ノースロップ・フライ、『シェイクスピア喜劇とロマンスの発展』(ありえす書房)
 - ・C・S・ルイス、『愛とアレゴリー』(筑摩書房)
- (b) ロマンズ劇
- ・日本シェイクスピア協会編、『シェイクスピアの喜劇』(研究社)
 - ・フランセス・A・イエイツ、『シェイクスピア最後の夢』(晶文社)
 - ・徳見道夫、『シェイクスピアのロマンス劇：家父長制のドラマトウルギー』(音羽書房鶴見書店)
 - ・正木恒夫、『植民地幻想：イギリス文学と非ヨーロッパの詳細』(みすず書房)
 - ・青山誠子、『シェイクスピアにおける悲劇と変容：『リア王』から『あらし』へ』開文社出版
- (c) 祝祭喜劇
- ・エドワード・ベリー、『シェイクスピアの人類学：喜劇と通過儀礼』(名古屋大学出版会)
 - ・フランソワ・ラロック、『シェイクスピアの祝祭の時空：エリザベス朝の無礼講と迷信』(柘風舎)
 - ・C・L・バーバー、『シェイクスピアの祝祭喜劇』(白水社)
- (17) シェイクスピアの悲劇
- ・日本シェイクスピア協会編、『シェイクスピアの悲劇』(研究社)
 - ・G・W・ナイト、『煉獄の火輪：シェイクスピア悲劇の解釈』(オセアニア出版)
 - ・E・A・J・ホニグマン、『シェイクスピアの七つの悲劇：劇作家による観客反応の操作』(透土社)
 - ・加藤行夫、『悲劇とは何か』(研究社)
- (18) シェイクスピアの歴史劇
- ・日本シェイクスピア協会編、『シェイクスピアの歴史劇』(研究社)
 - ・青木啓治、『シェイクスピアの歴史劇：問題と追究』(山口書店)
 - ・李春美、『エリザベス朝最後の十年間』(英宝社)
- (19) シェイクスピアの種本
- ・ロバート・グリーン、『パンドスト王・いかさま案内他』北星堂イギリス古典選書(北星堂)
 - ・トマス・デカー、『しゃれ者いろは帳』北星堂イギリス古典選書(北星堂)
 - ・アーサー・ブルック、『ロウミアスとジュリエット』北星堂イギリス古典選書(北星堂)
 - ・トマス・ナッシュ、『文なしピアスが悪魔への嘆願』北星堂イギリス古典選書(北星堂)

- ・『リア王年代記』北星堂イギリス古典選書（北星堂）
- ・トマス・ロッジ、『ロザリンド』北星堂イギリス古典選書（北星堂）
- ・トマス・ナッシュ、『悲運の旅人』北星堂イギリス古典選書（北星堂）
- ・斎藤衛、『シェイクスピアと聖なる次元：材源からのアプローチ』（北星堂）
- ・野島秀勝、『ロマンス・悲劇・道化の死：近代文学の虚実』（南雲堂）
- ・英米文化学会編、『シェイクスピアの変容力：先行作と改作』（彩流社）
- (20) シェイクスピア翻訳・アダプテーション（→映画の項も参照）
 - ・安西徹雄編、『日本のシェイクスピア100年』（荒竹出版）
 - ・河竹登志夫、『日本のハムレット』（南窓社）
 - ・木下順二、『シェイクスピアの世界』（岩波書店）
 - ・野谷士・玉木意志太牢、『漱石のシェイクスピア』（朝日出版社）
 - ・米谷郁子編、『今を生きるシェイクスピア：アダプテーションと文化理解からの入門』（研究社）
 - ・冬木ひろみ、本山哲人編、『シェイクスピアの広がる世界：時代・媒体を超えて「見る」テキスト』（彩流社）
 - ・常山菜穂子、『アメリカン・シェイクスピア：初期アメリカ演劇の文化史』（国書刊行会）
 - ・百瀬泉監修、『シェイクスピアは世界をめぐる：各国における出会いと再創造』（中央大学出版部）
- (21) 新歴史主義批評とその後
 - ・ステイーヴン・グリーンブラット、『シェイクスピアにおける交渉』（法政大学出版局）
 - ・——、『驚異と占有：新世界の驚き』（みすず書房）
 - ・——、『悪口を習う：近代初期の文化論集』（法政大学出版局）
 - ・——編、『寓意と表象・再現』（法政大学出版局）
 - ・——、『ルネサンスの自己成型』（みすず書房）
 - ・イーヴォ・カンパス、『唯物論シェイクスピア』（法政大学出版局）
 - ・テリー・イーグルトン、『シェイクスピア：言語・欲望・貨幣』（平凡社）
 - ・川口喬一編、『文学の文化研究』（研究社）
 - ・青山誠子・川地美子編、『シェイクスピア批評の現在』（研究社）
 - ・リン・ハント、『文化の新しい歴史学』（岩波書店）
 - ・日本シェイクスピア協会編、『シェイクスピア：世紀を超えて』
 - ・パトリシア・ファマトン、『文化の美学：ルネサンス文学と社会的装飾の実践』（松柏社、1996年）
- (22) シェイクスピアと言葉
 - ・梅田倍男、『シェイクスピアのことば遊び』（英宝社）
 - ・梅田倍男、『シェイクスピアのレトリック』（英宝社）
 - ・佐々木充、『シェイクスピア劇の中層的隠喩構造』（多賀出版）
- ・ノーマン・ブレイク、『シェイクスピアの言語を考える』（紀伊国屋書店）
- ・マンフレッド・シーラー、『シェイクスピアの英語：言葉から入るシェイクスピア』（英潮社新社）
- ・岡村俊明、『シェイクスピアの新語、新語義の研究』（溪水社）
- ・G.L. ブルック著、三輪伸春他訳『シェイクスピアの英語』（松柏社、1998年）
- (23) 道化
 - ・イーニッド・ウェルズフォード、『道化』（晶文社）
 - ・ウィリアム・ウィルフォード、『道化と笏杖』（晶文社）
 - ・サンドラ・ビリングトン、『道化の社会史』（平凡社）
 - ・ニール・ローズ、『エリザベス朝のグロテスク』（平凡社）
 - ・高橋康成、『道化の文学：ルネサンスの栄光』（中公新書）
- (24) シェイクスピアと映画
 - ・森祐希子、『映画で読むシェイクスピア』（紀伊国屋書店）
 - ・狩野良規、『シェイクスピア・オン・スクリーン』（三修社）
 - ・ラッセル・ジャクソン編、『シェイクスピア映画論』（開文社）
- (25) シェイクスピアの同時代劇作家たち
 - ・玉泉八州男編、『エリザベス演劇の誕生』（水声社）
 - ・玉泉八州男編、『ベン・ジョンソン』（英宝社）
 - ・楠明子、『メアリ・シドニー・ロウス：シェイクスピアに挑んだ女性』（みすず書房）
 - ・シーザー・L・バーバー、『エリザベス朝悲劇の創造：マーロウとキッドの演劇』（而立書房）
 - ・村上淑郎編、『エリザベス朝演劇』（英宝社）
 - ・中央大学人文科学研究所編、『英国ルネサンスの演劇と文化』（中央大学出版部）
 - ・エリザベス朝喜劇10選（Ⅰ期及びⅡ期）（早稲田大学出版会）
 - ・エリザベス朝演劇集（筑摩書房）
- (26) ソネットと詩
 - ・高松雄一他、『シェイクスピア「恋人の嘆き」とその周辺』（英宝社）
 - ・キャサリン・ダンカン＝ジョーンズ、『廷臣詩人サー・フィリップ・シドニー』（九州大学出版）
 - ・大塚定徳、村里好俊訳、『新訳シェイクスピア詩集』（大阪教育図書）
 - ・岩崎宗治訳、『サミュエル・ダニエル詩集』（国文社）
 - ・岩永弘人『ペトラルキズムのありか：エリザベス朝恋愛ソネット論』（音羽書房鶴見書店、2010年）
 - ・大塚定徳、『愛の探求：シドニーからシェイクスピアへ』（研究社選書、1983年）
- (27) イギリス・ルネサンス期の教育思想と文学
 - ・上智大学中世思想研究所編、『ルネサンスの教育思想』（東洋館出版社）

- ・ロレンス・ストーン、『エリート攻防：イギリス教育革命史』（御茶の水書房）
- ・クリストファー・ヒル、『イギリス革命の思想的先駆者たち』（岩波書店）

(28) イギリス・ルネサンス期の政治思想と歴史叙述

- ・アライダ・アスマン、『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』（水声社）
- ・ピーター・バーク編、『ニュー・ヒストリーの現在：歴史叙述の新しい展望』（人文書院）
- ・アンソニー・D・スミス、『ネイションとエスニシティ：歴史社会学的考察』（名古屋大学出版会）
- ・J・G・A・ポークック、『マキャヴェリアン・モーメント：フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』（名古屋大学出版会）
- ・エルンスト・ハルトヴィッヒ・カントーロヴィッチ、『王の二つの身体：中世政治神学研究』（ちくま学芸文庫）
- ・木村俊道、『顧問官の政治学—フランシス・ペイコンとルネサンス期イングランド』（木鐸社）
- ・クリストファー・モリス、『宗教改革時代のイギリス政治思想』（刀水書房）
- ・越智武臣、『近代英国の起源』（ミネルヴァ書房）
- ・渡辺昇一、『イギリス国学史』（研究社）

(29) 中世からシェイクスピアへ

- ・野島秀勝、『近代文学の虚実：ロマンス・悲劇・道化の死』（南雲堂）
- ・松田隆美他、『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』（慶應義塾大学出版会）
- ・玉泉八州男、『シェイクスピアとイギリス民衆演劇の成立』（研究社）
- ・ロベルト・ヴァイマン、『シェイクスピアと民衆演劇の伝統：劇の形態・機能の社会的次元の研究』（宝島社）
- ・宮川朝子、『イギリス中世演劇の変容：道徳劇・インタルード研究』（英宝社）

(30) ロンドンと都市文化

- ・イギリス都市・農村共同体研究会編、『巨大都市ロンドンの勃興』（刀水書房、1999年）
- ・ピーター・クラーク&ポール・スラック、『変貌するイングランド都市1500-1700年』（三嶺書房）
- ・河内恵子・松田隆美編、『ロンドン物語』（慶應義塾大学出版会）

◆レポート作成上の注意点

レポートの作成にあたっては、他の文献から引用した箇所、他の文献の記述を自分なりにパラフレーズして使用した箇所には、正確な註をつけること。それをしない場合には剽窃とみなされる。また、レポートの末尾に、使用した文献を一次資料（引用した作品そのものやその他の原典資料）と二次資料（研究書、研究論文など）に分けて列挙すること。註や参考文献の書式は『塾生ガイド』（または『教職課程履修案内』）に掲載の「レポート作成上の注意」、そして『MLA 英語論文の手引き』などを参考に正確に記すこと。また「ACADEMIC WRITING II」のテキスト（通信教材）には、註の付け方や書式について、詳しい解説が含まれている。註、参考文献が不正確なレポートは再

提出となる。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

日米比較文化論（総論）

2単位

L102-0891

市販書採用科目

◆指定テキスト

川澄哲夫『黒船異聞—日本を開国したのは捕鯨船だ』有隣堂、2004年

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

本科目では、日米関係の文化的側面について、とりわけ19世紀後半から20世紀半ばの最初の重要な変動期に注目し、日本とアメリカのあいだの異文化理解はいかにして始まったのか、その歴史的経緯を学びます。同時に、習得した背景知識に基づいて、日米文化交流のダイナミズムを多角的に考察する力を養います。

〔授業の概要〕

南北戦争後のアメリカは、国内においては急速な工業化がすすみ、国外においては南アメリカや太平洋への進出を図っていました。この領土拡張の気運のうちにペリーによる日本遠征はありました。一方の日本は、江戸幕府鎖国政策の下ながら、海外情勢への関心も高まりつつあり、アメリカの日本遠征は、政治外交においても社会経済においても、そして文化活動の面でも大きなインパクトを持つものでした。変動する両国がどのようにして出会ったのか、日本遠征・開国にはどのような背景があるのかを、指定テキスト『黒船異聞—日本を開国したのは捕鯨船だ』に沿って理解します。そして、指定参考書『グレート・ウェイヴ—日本とアメリカの求めたもの』を参考にしながら、日本とアメリカはどのように互いの文化を理解あるいは誤解し、体験していたのかを、さまざまな具体的な事例や作品に即して考察します。過去の事例研究から得た知見はさらに、現代の日米文化交流を検討するとともに、身近な異文化交流体験を咀嚼する土台となるでしょう。

〔授業計画〕

19世紀後半から20世紀半ばにかけての日米文化交流についての歴史事実を確認すること、ならびに、その文化交流において、日本とアメリカがどのようにして相対したのか、異文化交流をとおしていかにして「日本らしさ」や「アメリカらしさ」は形成されたかについて考えることが重要です。日米文化交流を多層的に分析する指定テキストと指定参考書を丁寧に読み解くとともに、言及されている人物や事例および文献についても調べ、日米文化交流について複合的に考察する力を磨きます。指定テキストは以下のように構成されています。

序曲 日本開国の原点

第1章 たった一人の日本遠征——ジョン万次郎の決意

第2章 ペリー、日本遠征の途に

第3章 久里浜上陸

第4章 応接村は横浜村に

第5章 雛祭りの出来事——神奈川条約締結
 第6章 ペリーの横浜村散策
 第7章 下田村——日米異文化体験
 第8章 黒船艦隊、箱館へ向かう
 終曲 一発の砲弾を放つこともなく
 また、指定参考書『グレイト・ウェイヴ——日本とアメリカの求めたもの』の構成は次の通りです。

序章 地図

- 第1章 太平洋上の二人の漂流者——ハーマン・メルヴィルとジョン万次郎
 第2章 貝殻コレクター——エドワード・シルヴェスター・モース
 第3章 天心の“ボストン茶会事件”——岡倉覚三とイザベラ・ガードナー
 第4章 涅槃の季節——ヘンリー・アダムズとジョン・ラファージ (1)
 第5章 日光の滝——ヘンリー・アダムズとジョン・ラファージ (2)
 第6章 火星からのメッセージ——パーシヴァル・ローウェルとメイベル・トッド
 第7章 しゃれこうべの山——ラフカディオ・ハーンとアーネスト・フェノロサ
 第8章 大統領の柔道部屋——セオドア・ルーズヴェルトとスタージス・ビゲロウ
 終章 一九一三年——ひとつの時代の終焉

その他、以上の指定テキストと指定参考書を十分に理解した上で、レポート課題に取り組んでいただきます。レポート課題では、19世紀から20世紀の文学作品や随想を分析するとともに、歴史から学んだ知見を活かして、授業外で行った実際の異文化交流体験について考察を行ないます。

◆テキストの読み方

指定テキストおよび課題指定参考書は、日米の多様な文化的・文学的交錯を多層的に考察するものです。学習の際には、まず基本的な歴史事実を確認するようにしましょう。そのうえで、日米関係のなかで日本とアメリカはどのように相対したか、それぞれの「日本らしさ」や「アメリカらしさ」はどのように形成されたか、という二点にとくに留意して考察を深めてください。

◆履修上の注意

テキストや参考書を読むだけでなく、言及されている人物や事例について調べたり、原著やほかの関連文献にも触れたりするように心がけてください。

◆関連科目・分野

アメリカ文学、日本文学、比較文学、地域研究

◆参考文献

Christopher Benfey. *The Great Wave: Gilded Age Misfits, Japanese Eccentrics, and the Opening of the Old Japan*. Random House, 2004. 大橋悦子訳『グレイト・ウェイヴ——日本とアメリカの求めたもの』(小学館、2007年)

◆レポート作成上の注意点

テキストや参考書から学んだことがらと、ご自身が考えたことがらを、きちんと分けて書いてください。文献を参照・引用した場合には、ご自身の文章と引用文とをきちんと区別して書き(引用部にはかぎっこを付し、出典頁を明記する)、レポートの最後には参

考文献表を付けましょう。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

近代ドイツ小説

2単位

L054-8302

◆講義要綱

教科書『近代ドイツ小説』では主に小説ジャンルに特化して、ドイツ文学史を語っています。(韻文でなく) 散文による物語である「小説」は、元来は「叙事詩」「抒情詩」「戯曲」という古典的ジャンルより低くみられていました。しかし、小説は近代以降次第に文芸の中心的なジャンルになってゆきます。それは、近代以降の人間や社会の多面性と複雑さを表現する上で、小説がもつ自由度の高さが大きな利点となったためです。教科書を読むさいは、「小説が何を表現しようとしているか」に着目しながら、近代以降の小説の運命を辿ってみてください。

履修に際しては何をおいても教科書を熟読し、内容をしっかりと理解するようつとめてください(レポート課題や科目試験は基本的に、この教科書の範囲内から出題されます)。くりかえし教科書を読むうちに、ここで紹介された作品に興味をわいてくるはずです。翻訳で手に入るものも多いので、ぜひできるだけ多くの作品に触れてみてください。そうすることで、教科書の記述がストンと腑に落ちるはずです。興味があれば、小説以外のドイツ文学について知るために、何種類も出ているドイツ文学史をひもとくのもいいでしょう。また、ドイツ文化史やドイツ(語圏)の歴史に関する参考書を読むことでさらに教科書の記述が立体的につかめるようになるでしょう。ドイツ文学やドイツ語圏の文化・歴史を深く知るための大きな足がかりが得られることを願っています。

◆テキストの読み方

教科書を3回は通読してみましょう。最初は聞いたことのない固有名詞や作品名の羅列に思えても、何度も読むうちにドイツ近代小説の歴史全体がいくつものうねりを持ち、数々のドラマに彩られた大きな流れとして捉えられるようになるはずです。その上で、関心を持った作品を実際に読んでみてください。そしてそのあとで、関心に応じて参考文献に当たり、徐々に知識を増加させてください。

◆履修上の注意

現代においてインターネットは有力な情報源です。ドイツ小説に関しても、作家や作品についてネットで得られる有効な情報は多々ありますから大いに利用してください。ただしレポート作成に際し、ウィキペディアなどネット情報の「コピペ」は厳禁です。

◆関連科目

文学はすべてに関連していますが、特に、哲学、美術史学、音楽などにも関心をもってください。余力があれば、さらに社会学、歴史学、科学史などにも進んでください。

◆参考文献

藤本ほか著『ドイツ文学史(第2版)』(東京大学出

版会、1995年)、佐藤晃一『ドイツ文学史』(明治書院、2002年)、岡田ほか著『ドイツ文学案内(増補新版)』(朝日出版社、2000年)、柴田翔編著『はじめて学ぶドイツ文学史』(ミネルヴァ書房、2003年)、保坂一夫『ドイツ文学(放送大学教材)』(放送大学教育振興会、2003年)、阿部謹也『物語ドイツの歴史』(中公新書、1998年)。

◆レポート作成上の注意点

レポート執筆の際は教科書や参考文献の引き写しにならないよう気をつけてください。教科書や参考文献を読んで理解したことを自分の言葉で自分の友人に語って聞かせるつもりで書いてください。参考文献からの引用にはかならず出典を(通常は注として)明記してください。('論文の書き方'等の本で論文の構成や注の付け方を確認してください)。

◆成績評価方法

科目試験によって評価します。

近代ドイツ演劇

2単位

L023-7303

◆講義要綱

ドイツ演劇は18世紀の啓蒙主義の時代から著しく発展し始め、古代ギリシア悲劇やシェイクスピア演劇などの伝統を継承したり復活させたりしつつ、新たな様式やジャンルを開拓し確立していった。その後19世紀後半の自然主義演劇まで続くこの発展は近代演劇の歴史そのものといえる。20世紀に入りいわゆる現代演劇の時代になると、劇作家たちは近代演劇のありようを刷新したり、見直したりすることでアクチュアルな戯曲を創造し続け、今日に至っている。また、ドイツ演劇はドイツだけでなく、オーストリアやスイスの演劇も含み、この双方の国々からも重要な劇作家が輩出され、独自の演劇ジャンルや歴史が確立している。

◆テキストの読み方

テキスト全体を通読した上で、課題に関する記述を確認し、該当箇所を入念に読み直してください。

◆履修上の注意

テキストを通読した上で、関心のある戯曲を実際に読んでみるといいでしょう。また、ドイツ演劇は社会の近代化とともに著しく発展し、近代化のプロセスで生じた社会的問題を批判的に描くことで歴史的展開を経てきました。したがって近代ドイツ演劇の足跡をたどる際に、時代の社会的状況とその変遷もたどることが望ましいでしょう。

◆参考文献

平田栄一朗『ドラマトゥルク——舞台芸術を進化／深化させる者』(第1・2章) 三元社、2010年

◆レポート作成上の注意点

テキスト「ドイツ近代演劇」に述べられている20世紀の演劇の特徴を導き出してください。その際18世紀と19世紀に関する記述もよく読んでおくと、20世紀の特徴がより明確に理解できるはずです。

◆成績評価方法

科目試験による。

フランス文学概説

3単位

L106-1001

◆講義要綱

2010年度新設のこの科目は、フランス文学研究に役立つさまざまなテーマ系の発展の過程をたどりながら、作品解釈を進めるための方法論を学ぶことを目的としています。また、フランス語学史、作品伝播の手段の歴史、文学教育の歴史、(フランス本国ではなく)フランス語圏の文学についても多くの紙面を割いて紹介している点において、この科目で使用する教科書は、市販のフランス文学史の教科書とは一線を画しています。したがって、フランス文学にかんする卒業論文を執筆したいと考えているかたがたのみならず、さまざまな文学アプローチの可能性に関心を持たれているかたがたにとっても示唆に富んだものであると言えるでしょう。

◆テキストの読み方

まず目次に目を通し、興味を持った章を通読することからはじめてください。その中で特に関心をもった作品、作家にかんする項目について、他の章ではどのように扱われているか、さらに調べてみるようにしてみてください。その際、巻末のインデックスを活用してください。

◆履修上の注意

基礎的なフランス語の知識があることが望まれます。また、以下に挙げる関連科目と併せて履修すると、より理解が深まると思われます。

◆関連科目

「フランス文学史Ⅰ」、「フランス文学史Ⅱ」

◆参考文献

教科書に紹介されている作品のうち、興味を持ったものについては、ぜひとも自分で一読されることをお勧めします。また、各章末に挙げた参考文献を参照することによって、いつそう確実に知識を固めることができるでしょう。

◆レポート作成上の注意点

まず、教科書と分析対象として選んだ文学作品を熟読することからはじめてください。そして、テーマが絞られた時点で、関連する参考文献を探してみてください。

教科書や参考文献をただひきうつしたり、その内容をまとめたりしただけのレポートは評価の対象とはなりません。分析対象とする作品からは必ず引用をして、教科書の解説を参考にしながら、自分なりの分析をほどこすようにしてください。参考文献は、自分の見解を支えるために活用すべきではありますが、大部分が引用で成り立つものは受け付けられません。自分の分析が主となっているようなレポートを作成するよう、心がけてください。

また、文学作品や参考文献からの引用については、必ず脚注、あるいは文末注に、著者、タイトル、出版社、出版年、ページなどの情報を明記してください。レポートの末尾にかならず総字数を明記してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

フランス文学史Ⅰ

4 単位

L130-1701

◆講義要綱

中世から18世紀までのフランス文学の歴史を概観します。それぞれの時代におけるジャンルの全体像をとらえつつ、主要な作家あるいはその作品の位置付けについて検討していきます。各世紀の執筆者は担当する世紀の時代背景の解説からはじまり、主要作品へのアプローチの仕方まで独習でもわかりやすいように解説をほどこしました。履修者のみなさんにとって、大学における文学作品の解釈方法について学ぶと同時に、卒業論文の題材を探すきっかけとなれば幸いです。

◆テキストの読み方

第Ⅰ部は中世、第Ⅱ部は16世紀、第Ⅲ部は17世紀、第Ⅳ部は18世紀と分かれています。最初から最後までまず簡単に目を通した上で、アンシャン・レژیーム期の詩学、美学の変遷を大まかに捉えてみましょう。

◆履修上の注意

基礎的なフランス語の知識を有することが望ましい（もちろん同時進行で語学の勉強を進めるのも可）。

◆関連科目

「フランス文学概説」、「フランス文学史Ⅱ」、「文学」

◆参考文献

饗庭孝男（他編）『新装フランス文学史』白水社、1992年
横山安由美（他編）『はじめて学ぶフランス文学史』ミネルヴァ書房、2002年
岩根久（他編）『フランス文学小事典』朝日出版社、2007年

◆レポート作成上の注意点

- 1) 対象とする作品を精読して、全体像を把握する。
- 2) レポートの課題にしたがって、作品の個々のテーマについて分析する。
- 3) 参考文献を精読し、焦点を絞り込む。
- 4) 自分の論が主となるよう、引用あるいは作品の要約ばかりのレポートとならないよう、気をつける。

フランス文学史Ⅱ

4 単位

L126-1601

◆講義要綱

19世紀から現代までのフランス文学の歴史を概観します。それぞれの時代における詩、小説、演劇、批評、思想の全体像を把握しながら、個々の作家や作品の位置づけについて考えていきます。文学作品が生み出された歴史的背景や各時代の文学的争点を知ることにはもちろん大切なことです。しかし、そうした知識をただ吸収することがこの講義の目的ではありません。それを出発点として作品をより深く味わい読み解くことが大学でフランス文学を学ぶ意義だといえるでしょう。

◆テキストの読み方

第Ⅰ部は19世紀の、第Ⅱ部は20世紀から現代までの文学・思想を紹介しています。第Ⅰ部・第Ⅱ部のそれぞれで、詩、演劇、小説、批評、思想というジャンルごとに一章が設けられています。一度最初から最後

まで読み通して、その上でジャンルごとにどのような変遷があったのか見直してみましょう。

◆履修上の注意

基礎的なフランス語の知識を有することが望ましい。

◆関連科目

「フランス文学概説」

◆参考文献

饗庭孝男（他編）『新版フランス文学史』白水社、1992年
横山安由美（他編）『はじめて学ぶフランス文学史』ミネルヴァ書房、2002年
岩根久（他編）『フランス文学小事典』朝日出版社、2007年
小倉孝誠（編）『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社、2014年

◆レポート作成上の注意点

- 1) 対象とする作品を精読して、全体像を把握する。
- 2) レポートの課題にしたがって、作品の個々のテーマについて考察する。
- 3) 参考文献を参照し、論点を絞り込む。
- 4) 導入から結論に至る文章のアウトラインを考える。
- 5) 作品の引用を効果的に織り込みながら、自分の考えを展開する。
- 6) 引用文には出典と引用頁数を必ず明記する。

◆成績評価方法

科目試験による。

ロシア文学

2 単位

L101-0701

◆講義要綱

ロシア文学は19世紀中葉に世界の最高峰にまで登りつめた文学で、その伝統は今でも生きています。トルストイやドストエフスキーやチェーホフなど、ぜひ人類の遺産とも言うべきロシア文学に、一度触れてみませんか。

当テキストは、ロシア文学を実際に手にとって味読してもらうための手引書であり、中世から19世紀、20世紀を経て現代に至るまでのロシア文学の彩り豊かな世界へと誘うものです。ゴーゴリやドストエフスキー、ブルガーコフ、パステルナーク、ソルジェニーツィン、ナボコフ、そしてベレーヴィンらの魂を揺さぶるような、あるいは読者の世界観までも変えてしまうようなエネルギーを感じてほしいと思います。また、ロシア文学を今日の視点から読み直し、私たちにも通ずる普遍的でアクトエアルな問題を考察するために、ジェンダーやポスト・コロニアリズムなど小説を読み解く視座を呈示するとともに、小説の普遍的テーマがオペラやバレエ、演劇、映画など他の芸術ジャンルによって表現されたケースについても紹介しています。ロシア文学の作品世界を多様な芸術言語で横断的に楽しむ案内として役立ててください。

なお、レポートの作成の際には、このテキストだけでなく参考書や他の参考文献も併用してください。科目試験では、テキストの中から重要と思われるテーマを選んで出題します。

◆テキストの読み方

1 回目は個々の具体的な作品や作家の具体的な人間像を追って、イメージしながら読む。続いて2回目は、ロシアの時代の流れを通して、文学の主義や思想などを読み込む。そして3回目は、その他の細かい部分にも注意して読む。都合3回読むことで、テキストの内容が頭に入ってくると思います。

◆参考文献

水野忠夫編著『ロシア文学 名作と主人公』自由国民社、2009年
藤沼貴・水野忠夫・井桁貞義編著『はじめて学ぶロシア文学史』ミネルヴァ書房、2003年
藤沼貴・小野理子・安岡治子『新版 ロシア文学案内』岩波文庫別冊、2000年
川端香男里『ロシア文学史』東京大学出版会、1996年

◆レポート作成上の注意点

ロシア文学全体の流れをつかんだ上で、対象作品を精読してください。論述に際しては、課題で何が求められているのかを把握した上で、レポート全体の構成を考えてから執筆に取り組むようにしてください。引用・援用部分には必ず註を付けて典拠を明示してください。対象作品は何を用いたか、明記してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

ラテン文学

1単位

L056-8402、L8452

◆講義要綱

本科目では、古典ラテン語で書かれたラテン文学（古代ローマ文学。狭い意味での文学だけでなく、歴史や哲学をも含みます）の主要な作家および作品について、基礎的な知識を学ぶと共に、翻訳を通じて作品に実際に触れることを目的とします。指定教科書の構成は次の通りです。

はじめに

第一章 ラテン文学発生期

第二章 黄金時代前期・キケロー時代

第三章 黄金時代後期・アウグストゥス時代

第四章 銀時代・初期帝政時代

◆テキストの読み方

人物名・作品名がたくさん出てくるので、繰り返し何度も読むことを勧めます。また、テキスト内に書かれた邦訳の情報は古いので、後述する参考文献の項を合わせて参照してください。

◆履修上の注意

テキストを読んで、単にそれを暗記するのではなく、興味を持った作品には翻訳を通じてできるだけ多く触れてください。また、文学作品に限らず、古代ローマの歴史や文化、美術などに関する本や映像資料などを広く参照することで、理解が深まります。

◆参考文献

指定教科書が執筆された時代とは異なり、現在ではラテン文学に関する日本語文献も大幅に増えており、図書館を利用するなどして活用することを勧めます。

〈ラテン文学史〉

松本仁助・岡道男・中務哲郎編『ラテン文学を学ぶ人のために』（世界思想社、1992）

高橋宏幸編著『はじめて学ぶラテン文学史』（ミネルヴァ書房、2008）

〈邦訳〉

多くの作品が京都大学学術出版会の西洋古典叢書に収められています。岩波書店もキケローやカエサル、セネカの作品集を出版しています。文庫本では特に岩波文庫（赤・青）と講談社学術文庫に多くの邦訳があります。また、日本語で書かれた古代ローマに関する書籍も岩波新書や中公新書、講談社学術文庫を中心に数え切れないほど出版されているので、適宜参照して知識を深めてください。

◆レポート作成上の注意点

ラテン文学作品を翻訳で読み、本文を具体的に引用しながら、自分自身の考えをまとめるようにしてください。他の書籍や資料も参照・引用した場合には、必ず註や参考文献表をつけて典拠を示してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

経済学部専門教育科目

経済原論(ミクロ経済学)(E) 2単位

E080-1801

◆講義要綱

経済学全般についての総論と、ミクロ経済学・マクロ経済学からなる経済理論のなかの、ミクロ経済学に対応する基礎理論を学習する科目である。マクロ経済学が国民総生産・失業率・物価水準といった経済全体の集計量を考察するのに対し、ミクロ経済学は家計や企業といった個々の経済主体の経済活動を分析対象とし、市場機構の効率性やその限界についても考察する。この科目は他の多くの経済学の分野に応用されるような、経済学の基礎理論を学ぶことを目的とする。

なお、テキストの学習範囲・試験範囲は以下のとおりとする。

「経済原論(ミクロ経済学)」の学習範囲・試験範囲：第1章～第5章

◆テキストの読み方

図や式の意味をよく理解するようにしてください。

◆履修上の注意

ある程度の数学的知識と論理的思考力を前提とします。

◆参考文献

塩澤修平『経済学・入門(第3版)』有斐閣、2013年
塩澤修平『基礎コース・経済学(第2版)』新世社、2011年

◆レポート作成上の注意点

記述のうえで、それが仮定あるいは前提であるのか、論理的展開であるのか、論理的帰結であるのか、といった区別を明確にしてください。

科目試験の受験については、『塾生ガイド』を参照のこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

経済原論(マクロ経済学)(E) 2単位

E080-1801

◆講義要綱

本講義では、マクロ経済学の基本事項を解説する。レポートおよび科目試験の範囲は教科書の第1章、および第6章から第9章である。第6章では、まず日本のマクロ経済を概観し、国民経済計算システムについて説明する。有効需要の原理による所得決定の基本モデルとして45度線モデルを解説する。第7章では貨幣について説明し、貨幣市場の均衡について解説する。そして財市場の均衡と貨幣市場の均衡を同時に満たすIS-LMモデルを解説する。第8章では長期のマクロ経済モデルを解説する。まず労働市場の均衡と潜在産出量を説明し、IS-LMモデルと統合することで財市

場、貨幣市場、労働市場の一般均衡状態で長期の総生産、雇用、実質利子率が決まることを解説する。さらに長期の総生産の成長を説明する枠組みについても解説する。第9章では景気循環を理解するために短期のマクロ経済モデルを解説する。IS-LMモデルに代わり、金融政策ルールを明示化した総需要曲線を説明する。そして価格粘着性を取り入れた総供給曲線を説明する。この総需要総供給モデルによって生産ギャップ、インフレ率、失業率の関係や財政政策や金融政策の効果についての考え方を説明する。

◆テキストの読み方

用語を丁寧に理解するようにしてください。マクロ経済についての事実を理解してください。

そして、その事実を説明するためのモデルではどのような変数がどういう理由で決定されるかを理解するようにしてください。またそれらのモデルが前提(仮定)していることを理解するようにしてください。

◆履修上の注意

微分、偏微分、差分方程式など、ある程度の数学の知識が必要です。またミクロ経済学の知識も必要です。

◆関連科目

「経済原論(ミクロ経済学)」「数学(微分・積分)」

◆参考文献

クルーグマン & ウェルズ『クルーグマン マクロ経済学』東洋経済新報社、2009年
ジョーンズ『ジョーンズ マクロ経済学Ⅰ(長期成長編)』および『マクロ経済学Ⅱ(短期変動編)』東洋経済新報社、2011年
宮尾龍蔵『コア・テキスト マクロ経済学 第2版』新世社、2017年

◆レポート作成上の注意点

何を説明しようとしているのか記述の目的をはっきりさせてください。用語は正確にそして何らかの主張をする場合にはその根拠または論理的な理由を明確にしてください。記号を使う場合には(教科書に出た記号であっても)その記号の定義を記述してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・経済史

4単位

E081-1891

市販書採用科目

◆テキスト

中西聡編『経済社会の歴史——生活からの経済史入門』名古屋大学出版会、2017年

◆講義要綱

本講義では、経済史という学問領域の基本的な要素を理解し、経済史的視点から歴史および現代社会を考察します。その場合、身近な視点から世界全体を見通す力を養うために生活に着目します。

◆テキストの読み方

テキストはテーマ別に章立てしており、各テーマごとにどのような歴史的視点から現代社会を見通すことができるかを考えさせるようになっています。その点に注意してバランスよく読んでください。

◆履修上の注意

本科目では、原則としてテキストに基づいて試験問題を出題していますが、レポートなどではテキスト以外の参考文献も活用して受講者が関心をもったテーマについて深められるように指導しています。テキストはもちろんのこと、参考文献も読み込んだ上で、科目試験やレポート作成にのぞんでください。

◆関連科目

世界経済史、日本経済史

◆参考文献

- ・中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館、2018年
- ・ペネロピ・フランク／ジャネット・ハンター編（中村尚史・谷本雅之監訳）『歴史のなかの消費者』法政大学出版局、2016年
- ・中西聡『旅文化と物流』日本経済評論社、2016年
- ・満園勇『日本型大衆消費社会への胎動』東京大学出版会、2014年

◆レポート作成上の注意点

レポートは、テキストとともに参考文献も利用することになっているので、テキストおよび参考文献の利用箇所を、レポートの文章中に注をつけて、参照したページ数も含めて明記してください。そして課題に対応したレポートを作成してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

経済政策学(E)

2単位

E059-0801

◆講義要綱

市場機構は万能ではないため、政府が直接・間接に市場に介入し、市場の失敗の是正をはかっています。

経済政策学は、このような政府の活動の現状を明らかにすると同時に、望ましいあり方を提示することを目的とする学問です。

本講義では、まず、必要な基本概念と経済理論を身につけ、その上で、直面する今日の政策課題を見極め、解決の方向を探ります。

◆履修上の注意

ミクロ経済学およびマクロ経済学に関する知識をもっていることが望ましいです。

◆関連科目

「経済原論（ミクロ経済学）」「経済原論（マクロ経済学）」「国民所得論」

◆参考文献

藤田康範『経済・金融のための数学』（シグマベイスキャピタル）2009年

◆レポート作成上の注意点

教科書を熟読するのみならず、巻末の参考文献や新聞・雑誌の経済記事・論文を読み、進んだ知識を積極的に取り入れるよう努力してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・財政論(E)

2単位

E082-1891

市販書採用科目

◆テキスト

土居丈朗『入門財政学』日本評論社、2017年

◆講義要綱

この講義は、わが国の財政制度の基本を学ぶとともに、財政に関連した経済学の理論に基づく考え方を講義する。政府債務が累増している財政の現状とともに、国の予算制度、税制（所得税・法人税・消費税など）、社会保障制度（医療・介護・年金など）、地方財政制度などを取り上げる。

◆参考文献

土居丈朗『入門公共経済学（第2版）』日本評論社、2018年

土居丈朗『日本の税をどう見直すか』日本経済新聞社、2010年

井堀利宏・小西秀樹『政治経済学で読み解く政府の行動』木鐸社、2016年

◆レポート作成上の注意点

この講義で取り上げる内容について、現行制度と経済理論をバランスよく理解することが重要である。現行制度だけでなく、財政に関連した経済学の理論にも関心を持ち、関連する政策について各省庁や政府の会議等で公表された資料も活用するとよい。

◆成績評価方法

科目試験による。ただし、テキストの第10章と第11章は対象としない。

金融論(E)

2単位

E071-1302

◆テキスト

この科目は2017年4月に改訂されました。今年度から学習を開始する場合には、改訂後の新しいテキストによって履修することを勧めます。改訂されたテキストの入手方法は、『塾生ガイド』を参照してください。

◆講義要綱

第1章 資金循環と資金の過不足

1-1 経済と金融の関係—資金循環勘定

1-2 政府の資金不足の調整

1-3 企業の資金過不足の調整（I-S バランス）

第2章 企業の資金調達と投資

2-1 日本企業の資金調達と投資

2-2 利子率と投資の関係

2-3 トービンの q と企業の投資

第3章 金融商品のリスク制御と価格計算

3-1 家計のポートフォリオとリスク制御

3-2 債券市場・株式市場

3-3 新しい金融商品と価格計算

第4章 金融機関の仲介機能と証券市場

4-1 日本の金融機関の構成

4-2	銀行・協同組織金融機関、貸金業
4-3	証券会社と証券市場
4-4	生命保険会社・損害保険会社
4-5	機関投資家
第5章	金融行政と金融政策
5-1	金融システムの安定とバーゼル自己資本比率規制
5-2	証券化とオフバランスシート
5-3	金融政策と短期金融市場の金利調節
5-4	インフレ・ターゲットとテイラー・ルール
第6章	財政と財政投融资
6-1	国債の発行増と金融機関の国債保有増
6-2	財政投融资制度と財政投融资改革
6-3	郵便貯金
第7章	貿易・資本移動と外国為替
7-1	国際収支
7-2	外国為替決定理論
7-3	国際資本移動と国際金融のトリレンマ
7-4	ユーロの危機
第8章	金融のミクロ理論
8-1	家計の金融行動
8-2	企業の金融行動
8-3	銀行の金融行動
第9章	金融のマクロ理論
9-1	ワルラスの法則とIS-LM分析
9-2	所得と利子率の決定—IS-LMモデル
9-3	物価の決定—総需要—総供給モデル
9-4	合理的期待形成と金融政策
9-5	IS-LM-BPモデル（オープン・マクロモデル）
◆成績評価方法	
	科目試験による。

経営学(E)	3単位
E072-1491	市販書採用科目

◆テキスト

岡本大輔・古川靖洋・佐藤和・馬場杉夫『深化する日本の経営』千倉書房、2012年

◆講義要綱

経営学は、企業経営、企業組織、経営者行動など、組織と経営現象に関する幅広いテーマを対象とした学際的な学問です。本科目では、その中でも、コア領域である、経営戦略論、経営管理論の分野を主な対象としています。これらを通じて、企業はどのように戦略的な意思決定を行うのか、組織運営の原理・原則は何か、成功する企業と失敗する企業の違いを説明することはできるのか、について学んでいただき、社会・経済の中で不可欠な存在である企業と組織に関する理解を深め、新しい視点から物事を観察し、解釈できる目を養っていただければと思います。

◆参考文献

谷本寛治『責任ある競争力』NTT出版、2013年
清水龍瑩『社長のための経営学』千倉書房、1999年
浅羽茂・牛島辰男『経営戦略をつかむ』有斐閣、2010年
桑田耕太郎、田尾雅夫『組織論〔補訂版〕』有斐閣、

2010年
八代充史『人的資源管理論』中央経済社、2009年

◆レポート作成上の注意点

設問の意図を正確に理解し、レポートの構成を考えてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

経済変動論	2単位
E042-9501	

◆講義要綱

現実の経済は常に循環・成長しており、様々な経済変動にさらされている。この科目の目的は、こうした経済の変動のようすを理論的に探究し、変動の原因・理由を解明することにある。したがって分析対象は、必然的に経済の動態的な側面となる。たとえば国民所得や雇用（失業）の循環的変動や成長は、本科目の主要な関心事である。経済変動論は、景気循環理論と経済成長理論の2つの部分からなる。

◆テキストの読み方

予備知識として「経済原論」もしくは2018年度新設の「経済原論（ミクロ経済学）」および「経済原論（マクロ経済学）」の内容が必要となる。これらの科目を履修、できれば単位を取得していることが望ましい。

◆参考文献

齊藤誠・岩本康志・太田聰一・柴田章久（著）『マクロ経済学 新版』有斐閣、2016年

◆レポート作成上の注意点

論理的な筋道をよく考えながら作成してほしい。

◆成績評価方法

科目試験による。

国民所得論	2単位
E060-0801	

◆講義要綱

東京オリンピックが近づき、希望が見えてきた日本ですが、国際競争力の低下、財政赤字の累積等、日本の諸問題が東京オリンピックによって全て解決されるわけではありませんし、「景気が良くなったために構造改革が遅れ、その後に長期停滞がおとずれる」ということもバブル崩壊後の「失われた20年」で経験済みです。

一方、「時代が新しくなる局面では、経済が成長しながら格差が広がる」という傾向が1971年のノーベル経済学賞受賞者・クズネッツ氏（Simon Smith Kuznets, 1901-1985）によって見出されており、実際、人工知能等の発展による産業構造の変化に伴って「現在の小学生の65%は、現在存在していない職につく」という主張の現実性が高まっています。

本講義では、このようにピンチとチャンスに満ちた経済を理解するための基礎理論、すなわち「国民所得論」について、その考え方を分かりやすく、しかも詳しく解説します。国民経済計算、短期の国民所得の決定の理論、中期・長期の国民所得の変動に関する理論、

財政・金融政策の有効性・無効性などが主な項目です。

◆テキストの読み方

経済学は積み重ねの上に成り立っていますので、用語を正確に把握して読み進めて下さい。特に数式については、その意味を十分に理解することが必要です。わからなくなったら前に戻って用語や数式を再確認するよう心がけてください。

◆履修上の注意

J. M. ケインズが述べているように、経済学を学ぶ際には、出来合いの特効薬についての知識を詰め込むより、その発想や考え方を学ぶ方がはるかに大切です。マクロ経済理論的な発想や考え方を学び、それに基づいて現実の経済を観察し、新たな認識の構造を築いていただけたらと希望しています。

◆関連科目

「経済原論」もしくは2018年度新設の「経済原論（ミクロ経済学）」および「経済原論（マクロ経済学）」を履修済みであることが望まれます。

◆参考文献

藤田康範『ビギナーズマクロ経済学』（ミネルヴァ書房）2009年

藤田康範『経済・金融のための数学』（シグマベイスキャピタル）2009年

◆レポート作成上の注意点

課題が求めていることを十分に読み取ってから着手し、全体の構成をよく考えて、結論に至る論理の道筋を整理してまとめてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

計量経済学

2単位

E069-1192

市販書採用科目

◆テキスト

秋山裕『Rによる計量経済学 第2版』オーム社、2018年

◆講義要綱

現代の経済分析では、計量的手法は欠かせない存在になっています。「計量経済学」は、経済理論を用いて実際の経済を統計学的に研究する学問です。非常に応用範囲が広く、学ぶべき項目も数多くあります。そのため、計量経済学を効率的に学ぶにはきちんとした段階を踏む必要があります。最初に（1）分析方法の基礎、（2）経済分析において生じやすい分析上の問題とその解決方法を学んだ上で、（3）各自の持つ研究課題への応用という実践の段階に進むことが可能となります。

この科目では、計量経済学の基礎である上記（1）、（2）について、近年、利用が広まっている統計分析フリーソフトウェアである「R」を用いながら学びます。この科目で学んだことを卒業論文などで現実の問題を研究するにあたって活用することにより、実践での力もついていくでしょう。

◆テキストの読み方

第1、2章では、計量経済学の考え方、実証分析の進め方について、第3、4章では、統計学で学んだ単純回帰の復習をしながら、「R」の基本操作について

学びます。そして、第5章以降では、「R」の機能を活用しながら計量経済学の基本を学んでいきます。各章に例題があり、「R」による分析のしかたが説明されていますので、「R」を用いて結果を再現しながら読み進めていくとよいでしょう。また、章末問題は、実際の分析例を検討しながら各章で学んだことの復習を行えるようになっていきます。科目試験ではこのようなタイプの問題が出題され、計量経済学に関する理解が問われます。（科目試験では、解答に計算を伴う問題は出題されませんが、レポートで行ったRによる推定や検定の結果について正しく読み取ることができるかに関する問題は出題されます。）

実際に「R」を操作して計算することが理解への正道であるだけでなく、皆さんが卒業論文などで実証的分析を行う際に役に立つでしょう。

◆履修上の注意

「経済原論」もしくは2018年度新設の「経済原論（ミクロ経済学）」「経済原論（マクロ経済学）」、および「統計学」を事前に学習しておいてください。これは、「計量経済学」が、経済理論を用いて実際の経済を統計学的に研究する学問であるためです。また、数学については微分の知識が必要となりますが、そのレベルは「経済原論」もしくは2018年度新設の「経済原論（ミクロ経済学）」「経済原論（マクロ経済学）」で用いる程度をきちんと理解していれば問題はありません。

◆関連科目

「経済原論（E）」もしくは2018年度新設の「経済原論（ミクロ経済学）（E）」+「経済原論（マクロ経済学）（E）」、および「統計学（A）」の学習を終えていること。

◆参考文献

福地純一郎・伊藤有希『Rによる計量経済分析』朝倉書店、2011年

赤間世紀『Rで学ぶ計量経済学』工学社、2009年

山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎『Rによるやさしい統計学』オーム社、2008年

蓑谷千風彦『計量経済学（第2版）』多賀出版、2003年

◆レポート作成上の注意点

計量経済学は計算結果を求め、図も描く科目ですので、特に分量に制約を設けません。添字、分数などの数式の表記が正確に出来る者のみワープロで提出することができます。

これらの表記が不明瞭であった場合は採点の対象とはなりません。

また、計量経済学のレポートではテキストで取り上げられるデータ分析の実践に重点が置かれるため、論述形式のレポートのような参考文献の使用は必要ありません。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本経済史

2 単位

E075-1691

市販書採用科目

◆テキスト

中西聡編『日本経済の歴史—列島経済史入門—』名古屋大学出版会、2013年

◆講義要綱

本講義では、日本経済の変化を歴史的に概説しますが、講義の目標は過去を知ることによって将来を見通す力を養うことです。そして人間の経済活動の積み重ねとして経済史を捉えますので、テキストは古代から現代までを扱っています。受講者はテキストの学習を中心としながら、それ以外にも視野を広げて関心のあるテーマについて参考文献などで学習してください。

◆テキストの読み方

テキストは時期別に章立てされ、各章が対外関係・政策・生産・流通・生活（環境）のテーマ別の各節から構成されています。その点に、注意してバランスよく読んでください。

◆履修上の注意

本科目では、原則としてテキストにもとづいて試験問題を出題していますが、レポートなどではテキスト以外の参考文献も活用して、受講者が関心をもったテーマについて深められるように指導しています。テキストはもちろんのこと、参考文献も読み込んだ上で、科目試験やレポート作成にのぞんでください。

◆関連科目

新・経済史、世界経済史

◆参考文献

中岡哲郎・鈴木淳・堤一郎・宮地正人編『新体系日本史11 産業技術史』山川出版社、2001年
桜井英治・中西聡編『新体系日本史12 流通経済史』山川出版社、2002年

◆レポート作成上の注意点

レポートは、テキストとともに参考文献も利用することになっているので、テキストおよび参考文献の利用箇所をレポートの文章中に注をつけて、参照したページ数も含めて明記してください。そして、課題に対応したレポートを作成してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

世界経済史

4 単位

E077-1791

市販書採用科目

◆テキスト

金井雄一・中西聡・福澤直樹編『世界経済の歴史—グローバル経済史入門—』名古屋大学出版会、2010年

◆講義要綱

本講義では、世界経済の変化を歴史的に概説しますが、講義の目標は過去を知ることによって将来を見通す力を養うことです。さらに、世界を知ることによって日本の将来を考える手がかりを得ることも目標とします。受講者は、テキストの学習を中心としながら、それ以外にも視野を広げて関心のあるテーマについて参考文献な

どで学習してください。

◆テキストの読み方

テキストは、時期別に章立てして全体的流れを概説した第Ⅰ部とその内容をテーマ別に深めた第Ⅱ部からなります。第Ⅰ部は、アジアと欧米を対比できるような構成になっており、地域間のバランスを考えて世界全体を見通せるように工夫していますので、その点に注意して読んでください。

◆履修上の注意

本科目では、原則としてテキストにもとづいて試験問題を出題していますが、レポートなどでは、テキスト以外の参考文献も活用して、受講者が関心をもったテーマについて深められるように指導しています。特に、レポート作成には、参考文献も読み込んだ上で、のぞんでください。

◆関連科目

新・経済史、日本経済史

◆参考文献

樺山紘一・礪波護・山内昌之編『世界の歴史』全30巻、中央公論社、1996～99年のなかの関連する巻

山川出版社編集部編他『世界各国史 [新版]』全28巻、山川出版社、1998～2009年のなかの関連する巻

◆レポート作成上の注意点

レポートは、テキストとともに参考文献も利用することになっているので、テキストおよび参考文献の利用箇所をレポートの文章中に注をつけて、参照したページ数も含めて明記してください。そして、課題に対応したレポートを作成してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

社会思想史

4 単位

E073-1591

市販書採用科目

◆テキスト

坂本達哉『社会思想の歴史—マキアヴェリからロールズまで—』名古屋大学出版会、2014年

◆講義要綱

本科目では、近現代の社会思想の歴史的展開を、「自由と公共の相克」という視点から統一的に概観する。グローバル資本主義・格差拡大・ポピュリズムといった現代の諸問題は、近代社会の原理から生じてきたものであり、その背後には、マキアヴェリからロールズにいたる西欧社会思想500年の展開と、その根底をつらぬく「自由と公共の相克」という中心的論点が存在している。ここで重要な点は、近代の思想家たちが、現代の細分化された社会科学分野を前提にすることなく、各自が生きた時代と社会を、哲学的視点（人間本性の探求）と、社会科学的視点（政治・経済システムの探求）という二つの眼で探求してきたということである。同時に、彼らの思考は、すべて過去から受け継いだ思想伝統を継承しつつ、それを新たな時代のなかで大胆に革新することによって生まれたものである。この伝統と革新の絡まり合いを、「自由と公共の相克」という論点の下に跡づけることが本科目の狙いである。指定教科書の構成は次の通りである。

序章	「社会思想」とは何か
第1章	マキアヴェリの社会思想
第2章	宗教改革の社会思想
第3章	古典的「社会契約」思想の展開
第4章	啓蒙思想と文明社会論の展開
第5章	ルソーの文明批判と人民主権論
第6章	スミスにおける経済学の成立
第7章	「哲学的急進主義」の社会思想－「保守」から「改革」へ
第8章	近代自由主義の批判と継承－後進国における「自由」
第9章	マルクスの資本主義批判
第10章	ミルにおける文明社会論の再建
第11章	西欧文明の危機とヴェーバー
第12章	「全体主義」批判の社会思想－フランクフルト学派とケインズ、ハイエク
第13章	現代「リベラリズム」の諸潮流
終章	社会思想の歴史から何を学ぶか

◆テキストの読み方

履修者には、テキストを一章ずつ読み進めていく中で、過去の思想家との学問的対話を楽しみ、現代社会における「自由と公共の相克」という論点を自分なりに考え直すことが期待されている。テキストと参考文献を読破し、レポート課題と試験をパスするには、何よりも履修者自身の積極的な問題関心が不可欠である。自分が生きる時代と社会の問題を見つめながら、そのヒントを偉大な思想家たちの言説に見いだそうとする主体的な問題意識が要求される。

◆履修上の注意

本科目は経済学部専門科目としては対象とする範囲が幅広い。狭義の経済学はもちろん、哲学、思想、歴史、文化、芸術など、関連諸分野への幅広い関心が必要とされる。

◆関連科目

総合教育科目では、哲学、歴史（西洋史）、政治学、社会学などが関連深く、経済学部専門科目では、経済原論（ミクロ経済学）、経済原論（マクロ経済学）、経済史、西洋経済史（近世）などが重要であるが、いずれも本科目の履修条件というわけではない。これらの科目を本科目と平行して学ぶことにより、本科目の理解は大いに助けられるであろう。

◆参考文献

本テキストは類書のなかでも参考文献の充実を特徴のひとつとしている。履修者は各章ごとに示された数多くの文献から、自分の関心に近いものを選び、慶應義塾図書館をフル活用しながら、できる限り眼を通すことが望ましい。テキストの全体像を理解する上で購入するに値する類書としては、次のものがある。水田洋『新稿 社会思想小史』ミネルヴァ書房、2006年。R・L・ハイルブローナー『入門経済思想史 世俗の思想家たち』筑摩学芸文庫、2001年。川出良枝・山岡龍一『西洋政治思想史』岩波書店、2012年。

◆レポート作成上の注意点

レポート作成の技術的側面については補助教材に示された基本的内容や参考文献を十分に踏まえること。単にテキストの内容を要約しただけのレポートは評価されない。課された「問題」の意味を自分がどのように理解したかを示した上で、論述内容に自分自身の問

題関心や思考の跡が分かるような内容が望まれる。テキスト以外にレポート作成上とくに参考とした文献があれば、それ（ら）を明示すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

社会政策(E)

2単位

E068-1192

市販書採用科目

◆テキスト

駒村康平編・上村一樹・渡辺久里子『新・福祉の総合政策』創成社、2018年

◆講義要綱

本講義の目的は、急速な少子高齢化の中、社会政策の中で比重を増した社会保障制度の理解と社会経済システムとの整合について検討し、望ましい政策を自ら考えられるようにすることを目的としている。具体的政策としては、社会保障制度の中心領域である年金、医療、福祉以外に、関連領域である人口、家族、財政、労働等についてもカバーしている。

1. 成熟化社会、少子・高齢化社会における社会保障
2. 社会保障制度の機能と歴史
3. 社会保障費の動向
4. 社会保険（年金・医療・介護・雇用・労災保険）と労働政策（最低賃金、障害者就労）
5. 児童・高齢者・障害者のための福祉政策
6. 生活困窮者。低所得者に対する社会保障（生活保護、生活困窮者自立支援制度）
7. 福祉サービスの改革

◆テキストの読み方

まず第1、2章で、現行の社会保障制度を取り巻く変化を理解したうえで、第3章で社会保障制度の機能、第4章で社会保障の歴史、第5章で社会保障費の動向を学んでください。第6～15章は関心をもった各制度を中心に学んでください。第16章は、限られた資源の制約の中、どのように効率性・公平性を高め、より充実した福祉サービスを提供できるか、理論的背景とともに学んでください。テキスト全体を通じ、将来の社会保障のあるべき姿について主体的に考えられるようになってください。

◆履修上の注意

経済学的な考え方を中心とした解説となっていますので、経済学の基本的な知識があった方が理解しやすいでしょう。また下記関連科目を併せて履修すれば、一層理解が深まるでしょう。

◆関連科目

「財政論」「人口論」「産業社会学」「労働法」

◆参考文献

厚生労働省『労働経済白書』、『厚生労働白書』各年版
厚生労働省サイト (<http://www.mhlw.go.jp/>)

◆レポート作成上の注意点

執筆する前にまず本書「学習の手順」の「レポート作成上の注意」をお読みください。

課題1・2共に、引用・参考箇所（指定テキストを引用・参照する場合も含む）はレポート本文中に「」等の記号を用い、またどこからの引用・参照なのか著者姓、出版年、該当のページ数まで明示したう

え、対応する参考文献リストをレポートの末尾に掲載してください（引用・参考箇所を示すのに脚注や後注は用いないでください）。たとえば本文中で「認知機能の低下とともに（中略）リスク資産のウェイトを引き下げる必要」があり、「高齢者の資産をどのように積極的に活用するのかが重要」とされる（駒村 2018, pp. 38-39）。」などのように示してください。

また節ごとに小見出しを付け、内容的な区切りを明示してください。

課題2については、政策に関するレポートですので、指定テキスト以外の複数の専門書籍・学術論文を参考文献として用い、何らかの政策提言を行ってください。その際には、その政策提言の論拠を最新データに基づき明確に示してください。データはテキスト掲載以外のデータも併せて使用してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

国際貿易論

4 単位

E063-0991

市販書採用科目

◆テキスト

木村福成『国際経済学入門』日本評論社、2000年

◆講義要綱

国際貿易論は、貿易パターンの決定メカニズムを分析する国際分業論と政策効果や社会的厚生の変化を分析する貿易政策論という2つの部分から成る。本講義ではその両者を学ぶ。それらを踏まえ、企業活動のグローバル化が進み、国際取引チャンネルの多様化が進行する国際経済の実態を理解するための経済学的・政治経済学的アプローチを考察し、さらに世界貿易機関（WTO）や自由貿易協定（FTA）等を通じた国際政策規律の意味するところを検討する。

◆履修上の注意

「経済原論」もしくは2018年度新設の「経済原論（ミクロ経済学）」および「経済原論（マクロ経済学）」を履修済みであること。

◆参考文献

遠藤環、伊藤亜聖、大泉啓一郎、後藤健太編『現代アジア経済論：「アジアの世紀」を学ぶ』有斐閣、2018年

◆レポート作成上の注意点

レポート作成にかかる前に、題意をよく理解し、参考書を丁寧に読みこなしてもらいたい。執筆にあたっては、論旨が明確に伝わるように全体の構想を立て、その中でひとつひとつの文章、段落を練り上げていくことが望ましい。参考書を丸写しにせず、引用する場合は必ず注をつけること。

◆成績評価方法

科目試験による。

人文地理学(E)

2 単位

E083-1901

◆講義要綱

人文地理学は、人間およびその生活や文化、都市、

社会、経済などを対象として、その地理的分布、地域的な特色、地域間や環境との関係などを研究する地理学の一部門である。学問自体の内的要請によって進化発展するものであるばかりではなく、時代の要請によっても変化するものである。

◆参考文献

参考文献は限りなく存在するので、取捨選択が大切である。

◆レポート作成上の注意点

教科書の理解度を示す記述を期待するとともに、その内容を事例とともに説明すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

地理学 I (E)

2 単位

E061-0901

◆講義要綱

地理学 I は、「トランスナショナル化」の視点から、地球規模で展開する国際的な企業行動の変化やグローバル都市に関する話題など、現在進行形の社会経済事象に対する理解が深まることを目指して構成されている。この目的を達成するには、地理的な空間軸と、歴史的な時間軸の両方からこれらの現象を捉えることが求められる。

第1章 古い神話と新しい現実

第2章 変わる世界経済地図：貿易と直接投資

第3章 高度化する国際分業：フラグメンテーション

第4章 トランスナショナル企業の台頭

第5章 デジタル化／モジュラー化／ハイパー・モビリティ

第6章 サービス投入の増大とプロフェッショナル・サービス

第7章 市場／国家／都市

終章 トランスナショナル化する世界の行方

本科目を通じて、新聞記事や、入手可能な報告書や統計データを自分で集め、自分の頭で各種の事象を分析する習慣が身につくよう期待している。

◆履修上の注意

企業の活動など、日常生活で触れる経済分野のニュースなどに興味を持った上で履修すると学習効果が高まるので注意してほしい。

◆参考文献

教科書の「引用文献・参考文献」を必要に応じて参照すること。

◆レポート作成上の注意点

テキストで取り上げた話題について、その理論的内容について理解度を測ると同時に具体的事例を用いて説明を行うように設定しているので、このことに注意してレポートに取り組んでほしい。

◆成績評価方法

科目試験による。

地理学Ⅱ(地誌学)(E)

2単位

E066-1001

◆講義要綱

地理学は、古くて新しい学問である。「古くて」というのは、太古の昔から、地理への関心は、歴史への関心と並んで、様々な文明において示されてきたことから明らかである。「新しい」というのは、世界の動きや技術の進歩につれて、地理への関心のあり方も、時代に応じて変化を遂げ、地理学の内容を変容させてきたことからわかる。地理学のなかでも、地表の事物の姿やイメージを記述する地誌は、こうした変化を鋭敏に反映してきたといえよう。

地誌学の面白さは、具体的事例を徹底的に調べ上げ、様々な知見を、地域や場所という中で「総合化」することにある。

◆参考文献

参考文献は限りなく存在するので、取捨選択が大切である。

◆レポート作成上の注意点

レポート作成にあたっては、客観的な事実やデータによって裏付けたり、新しい見方を獲得するように心がけてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

都市社会学(E)

2単位

E078-1791

市販書採用科目

◆テキスト

松本康編『都市社会学・入門』有斐閣、2014年

◆講義要綱

本科目は、都市社会学の基本的な考え方を学ぶことをつうじて、都市社会現象を社会学的に理解する力を養うことを目的とする。

テキストにしたがい、つぎのような構成で議論をすすめてゆく。序章では「都市社会学の問い」を定式化する。第Ⅰ部「都市化とコミュニティの変容」では「都市はなにを生みだすか」という問いの軸にそって、「都市社会学の始まり」「アーバンイズム」「都市生態学と居住分化」「地域コミュニティ」「都市と社会的ネットワーク」について論じてゆく。第Ⅱ部「都市の危機と再編」では「なにが都市を生みだすか」という問いの軸にそって、「都市圏の発展段階」「情報化・グローバル化と都市再編」「インナーシティの危機と再生」「郊外のゆくえ」について論じる。第Ⅲ部「時間と空間のなかの都市」では「いかに都市とかわるか」という問いの軸にそって、「都市再生と創造都市」「文化生産とまちづくり」「アジアの都市再編と市民」「ボランティアと市民社会」「都市の防災力と復興力」について論じる。

◆テキストの読み方

テキストについては、全部の章を正確に熟読してください。コラムまで試験の範囲に入ります。

◆履修上の注意

持ち込み不可ですので、内容について自分でまとめ

てください。単にキーワードの暗記だけでなく、内容を論じる問題になります。

◆参考文献

各章の終わりに掲載されている文献を参考にしてください。他に次のようなテキストも参考になります。

- ・町村敬志・西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣、2000年
- ・園部雅久・和田清美編著『都市社会学入門』文化書房博文社、2004年
- ・吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣、2013年

◆レポート作成上の注意点

以下の5つの条件がそろわなければ合格となりませんので、注意してください。

1. テキスト以外に5点以上の参考文献を用いること。
2. 字数は3600字以上4000字以内（注を字数に含む。参考文献リストは字数に含めない）。
3. 論述は社会学的視点からなされること。
4. 注をつけること。
5. 参考文献リストを作成すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

経営分析論

2単位

E030-7803、E9183

◆講義要綱

- ① 企業を評価するにあたり、評価とは何か、評価要因としてどのようなものがあるのか、それぞれの要因をいかにして加工し、総合的な判断を行うのか等の基本的な概念を学習する。
- ② 経営分析で用いられる具体的な指標のそれぞれの意味を理解する。
- ③ いくつかの指標を組み合わせた総合評価法について学ぶ。

◆テキストの読み方

テキストでは、ある程度の簿記や簡単な財務指標の知識がある事を前提に、それらを用いてどの様に企業を評価していくのかについて詳しく述べられています。そうした予備知識の無い学生は、下に挙げたような科目を同時に履修したり、参考文献等を活用するなどして学習してください。

◆履修上の注意

「会計学」、「簿記論」を併せて受講されることをお勧めします。

◆関連科目

「会計学」、「簿記論」、「経営学」、「経営数学」、「統計学」

◆参考文献

- 通商産業省産業政策局企業行動課編『総合経営力指標（製造業編、小売業編）』大蔵省印刷局
あずさ監査法人編『有価証券報告書の見方・読み方（第9版）』清文社、2015年
K・G・パレブ他、斎藤静樹監訳『企業分析入門（第2版）』東京大学出版会、2001年

◆レポート作成上の注意点

全ての課題に解答してください。テキスト等を抜書

きするのではなく、自分の言葉を使って出来るだけ詳細に論述してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

経営数学

2 単位

E027-7603、E7681

◆講義要綱

経営計画を策定する際、多くの手法が用いられる。そのほとんどはパソコンのソフトウェアによって自動的に実行される。したがって多くの場合、結果のアウトプットだけが示され途中の考え方、プロセスは示されない。重要なことはアウトプットの数字をどう解釈するかであるが、プロセスを理解していないと間違った判断を下す恐れが大きくなる。「経営数学」では現代企業が利用している数学的・統計的手法を使いこなすため、それら手法のプロセス理解を目的としている。

◆テキストの読み方

皆さんの中には、数学なんて真っ平ごめんだ、という方も多いと思いますが、それは今まで何のために数学を勉強するのか、という目的がはっきりしなかったからではないでしょうか。

経営数学のテキストは現代企業が経営計画を設定する上で欠かせない基礎的な手法を多く扱っています。それらを分かりやすく説明するために、あるパン屋さんを想定し、市場調査をしてニーズを調べたり、それに見合った設備投資をしたり、工場を建設する手順を考えたりしながら、それぞれに必要な手法を勉強していく、という構成になっています。なるほど、この手法はこんな時にこんな具合に使えるのか、ということが分かります。

何事も目的をもった勉強をすると効率もヤル気も飛躍的にアップする、ということを実感していただければ、と思っています。

◆参考文献

石村貞夫・石村光資郎『入門はじめての多変量解析』東京図書、2007年。

石村貞夫・石村光資郎『入門はじめての分散分析と多重比較』東京図書、2008年。

◆レポート作成上の注意点

課題はテキスト章末の練習問題ですから、テキスト本文をよく読んでから、問題を解いてください。他科目のレポートと異なり、参考文献を読む必要は特にありません。テキストを読んで、概念等が明確に理解できないときのみ、参考文献を使用してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

商業学

2 単位

E052-0191

市販書採用科目

◆テキスト

田村正紀『流通原理』千倉書房、2001年

◆講義要綱

製造業者によって生産された製品が、消費者によ

て消費されるまでの間には、所有、空間、時間、情報などに関して懸隔がある。これらのさまざまな懸隔を架橋するのが流通過程であり、それは、(1) 流通される製品、(2) 交換、物流、情報伝達、危険負担といった流通機能、および (3) 製造業者、卸売業者、小売業者などに代表される流通機関によって構成されている。そして、この流通過程は、全体的に見て、1つのシステムとして構造化・制度化されている。これが流通システムであり、それは市場経済が円滑に機能するうえで、きわめて重要な役割を果たしている。

さらに、流通システムの性質や役割は、生産技術や流通技術の進展、消費市場の変化、製造業者や流通業者の革新的なマーケティング活動などによって、動的に変化する。例えば、現在では、情報・通信技術の発展、市場の範囲のさらなる拡大、製品や組織間関係のモジュール化の進展が、流通システムに大きな変化をもたらしている。

本講座は、市場経済において重要な役割を果たしている流通システムの基本的な仕組み、また経済発展に伴う流通システムの変化傾向とその影響要因について理解することを目的としている。

◆テキストの読み方

- ・テキストの各章の最後にある要約を参考に（それに付け加える形で）、各章の内容をまとめたノートを作ること。
- ・ある現象がなぜ生じているのかを理解すべく、その現象の背後にある原理（いくつかの重要な概念とそれらの間の関係）を押さえること。

◆参考文献

矢作敏行『現代流通：理論とケースで学ぶ』有斐閣アルマ、1996年

渡辺達朗・原頼利・遠藤明子・田村晃二『流通論をつかむ』有斐閣、2008年

◆レポート作成上の注意点

テキストと参考文献それぞれの課題に関連する部分をよく読んだうえで、解答すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

保険学

3 単位

E043-9501

◆講義要綱

保険制度は、社会に存在する多種多様なリスクに備えて経済的保障を提供する経済制度として、既に私たちの生活に深く浸透しています。私たちの安定した生活は、多くの人々との関わりの中で、さまざまな保険制度に支えられています。保険学は、保険制度が、現実社会の中でいかなる仕組みや原理に基づいて、社会的あるいは経済的機能を果たしているのかを理解することを目的とします。その対象も、生命保険や損害保険に限らず、公的年金や医療保険などの社会保険の分野をも含んでいます。しかも、諸制度と相互関連を深めていることから、社会制度全体の理解が必要とされます。そして常に、現代社会における保険制度のあり方を意識することで、社会問題の本質を保険学の立場で理解することが最終的な目的となります。

◆履修上の注意

レポートの成績評価基準は、以下のとおりである。

①テーマに対して的確に論述されているか、②参考文献を十分に読解したうえで論述されているか、③独自の見解を提示しているか、④規定字数を満たしているか、などの採点基準を設けて、総合的に評価する。

◆参考文献

堀田一吉『現代リスクと保険理論』東洋経済新報社、2014年
堀田一吉『保険理論と保険政策—原理と機能—』東洋経済新報社、2003年
堀田一吉・山野嘉朗編著『高齢者の交通事故と補償問題』慶應義塾大学出版会、2015年
堀田一吉編著『民間医療保険の戦略と課題』勁草書房、2006年
堀田一吉ほか編著『保険進化と保険事業』慶應義塾大学出版会、2006年
近見正彦・堀田一吉・江澤雅彦編著『保険学（補訂版）』有斐閣、2016年
田畑康人・岡村国和編著『人口減少時代の保険業』慶應義塾大学出版会、2011年
真屋尚生『保険の知識（第2版）』日本経済新聞社、2004年
下和田功編『はじめて学ぶリスクと保険（改訂版）』有斐閣、2007年

◆レポート作成上の注意点

- まずは、できるだけ多くの教科書や参考書を一通り読んでから、課題を選択し、レポート作成に取りかかってください。一部分だけを読んで、無理にまとめようとすると、学習効果はほとんどありません。
- 保険をめぐる現実社会で起こっている諸現象についても十分に関心をもってください。現実社会と照らし合わせることによって、レポート作成の意義が大きく高まります。
- 自分なりのまとめ方を工夫してみてください。参考書にとらわれすぎずに、自分がどのように理解したかが伝わるような記述を心がけてください。
- 引用文献あるいは参考書については、必ず明記してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

会計学(E)

3単位

E062-0901

◆講義要綱

会計学、主として財務会計論の基礎を学習する。科目試験の出題範囲はテキストの内容に限るが、レポートの作成についてはより広範な学習にもとづくことを期待する。

◆参考文献

友岡賛『歴史にふれる会計学』有斐閣、1996年
友岡賛『会計学原理』税務経理協会、2012年
友岡賛（訳）『歴史に学ぶ会計の「なぜ？」』税務経理協会、2015年
友岡賛『会計学の基本問題』慶應義塾大学出版会、2016年

友岡賛『会計と会計学のレーゾン・デートル』慶應義塾大学出版会、2018年

友岡賛『会計の歴史（改訂版）』税務経理協会、2018年

友岡賛『日本会計史』慶應義塾大学出版会、2018年

友岡賛『会計学の考え方』泉文堂、2018年

◆レポート作成上の注意点

できる限り、自分の言葉をもって述べ、また、参考文献は明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

簿記論

2単位

E021-7602、E7622

◆講義要綱

「簿記論」では、企業の経済活動を秩序正しく組織的に記録・計算・整理し、経営成績ならびに財政状態を明らかにするための記帳技術である複式簿記を学習する。複式簿記は他の会計科目を学ぶ上で不可欠のものであり、経営分析（財務分析）を行う際にも必要となる知識である。それゆえ複式簿記の基礎はできるだけ早めに習得することが望ましい。「簿記論」の学習にあたっては、単にテキストを読むだけでなく、練習問題を繰り返し解いてみるのが大切である。また、我が国ではここ数年、会計制度の変革が急速に進められているため、必ず最新版の参考書を利用して変更点等を確認しながら学習してもらいたい。テキストの構成は次のとおりである。

- 第1章 企業の計算制度と複式簿記
- 第2章 複式簿記の構造
- 第3章 勘定科目の説明（Ⅰ）
- 第4章 帳簿および帳簿組織
- 第5章 取引の記帳
- 第6章 決算の手続
- 第7章 決算にともなう勘定修正
- 第8章 勘定科目の説明（Ⅱ）

◆科目試験出題用指定参考書

渡部裕巨・片山覚・北村敬子編著『検定簿記講義 3級商業簿記』中央経済社

◆参考文献

『検定簿記講義 3級商業簿記』中央経済社・『検定簿記講義 2級商業簿記』中央経済社など、日商簿記検定用の商業簿記 3級・2級のテキストおよび問題集。
*必ず「何年版」かを確認の上、最新のものを購入すること。

◆レポート作成上の注意点

- ①参考書も利用して必ず全問解答してから提出すること。
- ②解答に赤インクペンは使用しないこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

原価計算

2 単位

E067-1191

市販書採用科目

◆テキスト

園田智昭・横田絵理『原価・管理会計入門』中央経済社、2010年

◆講義要綱

原価計算は、特に原価情報の収集、伝達を目的に展開される企業会計の一分野である。原価計算を行うのは、一方で、その基礎数値を提供して企業外部に報告する財務諸表の作成を行うためであり、他方で、経営管理に役立つ情報を提供して企業経営の効率性・効果性の向上に資するためである。本講義は、原価計算の理論と計算方法の概要について学習することを目的とする。

概ね以下の項目を学習する。(1) 原価計算の意義と目的、(2) 原価要素の分類、(3) 費目別計算、(4) 部門別計算、(5) 製品別計算、(6) 標準原価計算、(7) 利益管理のための原価計算、(8) その他。

◆テキストの読み方

学習に際してのテキストの使用にあたっては、次の点に注意すること。

- ①原価集計の流れ及び学習項目の位置づけを把握し、自分が現在学習しているのはどこの部分なのかを意識しながら学習すること。
- ②面倒でも、原価の集計プロセスを、数字を跡づけながら学習すること。
- ③原価計算は計算が中心であるから、読むだけでなく実際に計算をしながら学習していくこと。
- ④まず、理解すること。理解したら、理解したことをスムーズに計算できるように練習すること。

◆履修上の注意

会計学、経営学に関する基礎的な学習が済んでいることが望ましい。

◆参考文献

小林啓孝『現代原価計算講義（第2版）』中央経済社、1997年

岡本清『原価計算（6訂版）』国元書房、2000年

◆レポート作成上の注意点

学習にあたっては、原価計算の大きな流れを理解し、個別の学習項目がそのどこに当たるのかを常に意識すること。原価計算は、文字通り計算が中心であるので、理論的学習と計算練習を常に連動させること。理論を理解するための計算の練習であり、計算を練習するための理論の理解である。レポート作成にあたっては、テキストの内容をよく理解した上で、自分の言葉で簡潔に説明すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

会計監査

2 単位

E065-1091

市販書採用科目

◆テキスト

鳥羽至英ほか『財務諸表監査』国元書房、2015年
※上記のテキストは、鳥羽至英『財務諸表監査 理論

と制度【基礎篇】』（国元書房、2009年）の姉妹版です。どちらを用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

監査論の基礎を学習する。科目試験の出題範囲はテキストの内容に限るが、レポートの作成についてはより広範な学習にもとづくことを期待する。

◆参考文献

友岡賛『歴史にふれる会計学』有斐閣、1996年

友岡賛『会計プロフェッションの発展』有斐閣、2005年

友岡賛『会計士の誕生』税務経理協会、2010年

友岡賛『会計学原理』税務経理協会、2012年

友岡賛『会計学の基本問題』慶應義塾大学出版会、2016年

友岡賛『会計と会計学のレーゾン・デートル』慶應義塾大学出版会、2018年

友岡賛『会計の歴史（改訂版）』税務経理協会、2018年

◆レポート作成上の注意点

できる限り、自分の言葉をもって述べ、また、参考文献は明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

法学概論(E)

2 単位

E074-1501

◆講義要綱

「法学概論」は、文学部および経済学部の専門教育科目として開講されるが、学習の目的とするところは、法律学の基礎的事項についての知見を掌中にすることにある。今後の日常生活で法との接点を持たなければならない状況が生じた際、そこで得た知識を生かすこと、本講義を通じて法律学への興味が芽ばえ、さらに多くの法分野への取り組みを試みる「きっかけ」となる気持ちが生ずること、新たに修得した異なる分野に関する知識を、自らが専攻する文学・経済学・商学のより深い理解のための拠りどころとすること、いずれも本講義の目指す主旨に叶うものである。そうした意味で当該学科目の位置づけは、まさに「入門講座」の一語に尽きよう。

◆テキストの読み方

さて、それがために、皆さんに提供されたテキストは、できる限り平易な文章で綴られ丁寧な説明により要点の理解が可能であるよう心掛けて執筆された。もちろん初学者にとっては、それでさえも目の前に広がる未知の世界が、得体の知れない茫漠たるものに映るのは、むしろ当然であろう。しかし、まず第一歩を踏み出さないことには、何も始まらない。そこで学習をする、つまりテキストを読み進むために二つの提案をしておきたいと思う。

まず第一は、ひとたびテキストを読み始めたら、自分のできる範囲で分量・日程の予定を組み、冒頭から末尾までなるべく連続した期間のなかで、必ず順を逐って読み切ることを勧めたい。費やす期間はあまり長くないこと、毎日とはいわないまでも前回の記憶の途切れない程度の連続性が必要である。また、読み方は、

多少乱暴な表現と受け取られるかも知れないが、とにかく「読破通読」を目標に遮二無二に読む、途中いささか理解に苦しむ箇所があっても、それはそれとして、決して章や一文の飛ばし読みをせず、最終ページにたどり着く姿勢が肝要である。

第二は、テキストを読み進める際に、まずその内容の国語的理解に努めること、すなわち個々の項目についての専門性を主眼とする細密な理解は二次的なものとし、そこに書かれている「日本語」の内容を正確に読み解くことに力を注いで欲しい。用いられた漢字や比喩の意味、主語・述語や文章の構造への誤りない把握は、いかなるジャンルのものであれ日本語による著作を受容する第一歩である。そこで、テキスト読了に向けて日本文の文意文脈を正しく捉えるための道具として、常に国語辞典や漢和辞典を座右に置き、手間を厭わず活用して欲しい。確かに法律学の世界に特有の専門用語の意味が正しく捉えられていないと、入門書とはいえ理解に齟齬を生じる場合もおき得るリスクは否定しないが、そうした点については、テキストの中にも解決の糸口が示されており、「読破通読」の余慶に与ることが可能である。

◆履修上の注意

なお最後に、私は、これまでの対面講義でも、法律学の学習に際し、常に現行法令集である『六法』を必携すべきとの指摘を繰り返してきた。これは本講義においても変更されるものではない。いかなる分野であれ法を対象とする学習においては、最新年度の『六法』をひも解き条文を参照する行動が必須である。その種類や選択を巡るヒントは、テキストに示されており、ここで屋上屋を架することはせず、上述の結論を述べるにとどめた。

◆関連科目

「法学（憲法を含む）」

◆参考文献

霞信彦『法学講義ノート（第6版）』慶應義塾大学出版会、2016年

◆レポート作成上の注意点

叙述の、遮二無二にテキストを読み切るという作業は、一度のみならず繰り返しおこなうことが重要であり、回を重ね、併せて他者の著作を参照するなどの労を積むなかで、次第に理解に深みが増すと思う。こうした後に、初めてレポート課題取り組みへの途が開けることとなる。最初から課題の内容のみに注目してテキストの必要箇所を限定して学習を進めるなど、冒頭に述べた本講義の主旨のいずれにも合致しない。のみならず、体系への視野をもたない断片的かつ生半可な知識は、却って「百害あって一利なし」と言わざるを得ない。また、「まずレポートありき」の典型的なものとして、テキストや参考文献の丸写し・換骨奪胎による提出物（敢えてレポートとは表記しない）が散見されるが、これまた通信教育学習に取り組む本意の「はき違え」甚だしきものと断言しておきたい。いうまでもないが、参考文献については、もれなく書名・著者・刊行年・出版社名をレポートの最後に明記することが求められる。

◆成績評価方法

科目試験による。

憲法(E)

2単位

E076-1691

市販書採用科目

◆テキスト

駒村圭吾編『プレス・テップ憲法〔第2版〕』弘文堂、2018年

※テキストは、極力第2版を使用すること。

◆講義要綱

講学上、憲法は、統治の仕組みを対象とする「統治機構論」と、憲法上の人権を対象とする「人権論」とに大別される。本講義は、その両方を対象に、「法律」ではなく「憲法」で人権を保障するとはどういう意味を持つのか、憲法が保障する人権は誰に対してどの程度まで保障されるのかといった、憲法上の人権にかかわる抽象的な問題（人権総論）から、具体的に憲法により保障される個別の人権をめぐる解釈、判例、実践の問題（人権各論）、そして国家統治の仕組みとして憲法はどのような制度を構想しており、そこにはいかなる論点が伏在しているのか（統治機構論）など、憲法の全体像を把握したうえで、具体的な問題を自分で考える力を養うことを目的とする。

◆テキストの読み方

憲法に関する知識は、すでに小中高校でも学んでいるだろう。しかし、専門科目・法学としての憲法の場合、従来の知識がむしろ理解を妨げることもありうる。その場合、先入観を捨てて、テキストの説明を素直に読み、場合によっては法律用語辞典などを参考にしながら、理解に努めてほしい。

また、よくわからなかった部分については、別の教科書の記述をしてみるなどすると、理解が進むこともある。指定したテキストの末尾（166頁）に、定評のある教科書などが挙げられているので、それを参考にすること。

◆関連科目

「国際法」、「行政法」、「刑事訴訟法」など

◆参考文献

憲法に限らず、法学の学習において判例を参照する機会が多い。直接原文に当たることが必要な場合もあるが、本講義の場合、事実関係、判旨を整理したうえで、解説をしている判例集を参考にすればよいだろう。定評のある判例集としては、次のものがある。

- ・高橋和之編『新・判例ハンドブック【憲法】』日本評論社、2012年
- ・長谷部恭男・石川健治・矢戸常寿『憲法判例百選Ⅰ、Ⅱ』有斐閣、2013年
- ・戸松秀典・初宿正典『憲法判例〔第7版〕』有斐閣、2014年
- ・憲法判例研究会『判例プラクティス憲法〔増補版〕』信山社、2014年
- ・木下昌彦編集代表『精読憲法判例』弘文堂、2018年

その他、指定テキストの末尾（166頁）の文献案内も参考のこと。

◆レポート作成上の注意点

- ① まず、問われている課題を十分に理解し、論点を整理することが必要である。そして、そのためには、テキストや参考文献をよく読むことが求められる。

- ② 当該論点については、すでに、関連する判例、学説などが存在しているはずである。それらをきちんと読み、判例はどのような立場なのか、学説は何を巡って対立しているのか、といった問題状況を把握することが求められる。
- ③ そのような問題状況に対して、レポート作成者はどのように考えるのか、そしてそのように考えた理由は何かを明らかにし、自分の考えを説得的に「レポート」する必要がある。
- ④ このようにレポートを作成するとなれば、必ず、先行業績を参考にしなければならないことに気づくだろう。参考にした先行業績は、必ず引用すること。他者の考えたこと、まとめたことを、あたかも自分が初めて考えたことのようにレポート作成する行為は、不正行為である。

◆成績評価方法

科目試験による。

民法

4 単位

E050-9793

市販書採用科目

◆テキスト

池田真朗『民法への招待〔第5版〕』税務経理協会、2018年

※本書〔第3版補訂版〕や〔第4版〕で学習を進めている者はそれでもよい。

◆講義要綱

民法は、法律科目の中で最も身近でかつ最大の単位を配当されている、私法分野の基本法である。契約や債権等、経済学部生にも必要な知識が含まれるばかりか、家族、相続等の分野も民法の範囲である。また、商法等の学習のためにも、民法の学習を先行させるのが望ましい（商法などの法律は、民法の特別法という位置づけになるので、基本法である民法の一般的な考え方を先に学習しておくのが適切である）。本科目は、民法の財産法分野と家族法分野の全体にわたる基礎的な知識を身につけることを目的として配置されているものであるが、テキストは特に経済学や商学を学んでいる学生向けに書かれている。保証、債権回収、消費者契約等、今日の社会で問題になっているものも、この民法で学ぶことができる。なお、本テキストは2005年4月1日施行の現代語化新民法典に対応しており、公益法人関係など、この新民法典がさらに変わった部分（2008年12月施行）についても、2008年の第3版補訂版で記述を修正した。なお、2010年に横書きの第4版が出版されたため、現在のテキストはこの第4版であるが、第3版補訂版を使用して学習してもよいものとする。

◆履修上の注意

特になし。経済・商学関係の専門を学ぶ諸君が誰でも、私法の基本法たる民法をわかりやすく学べることを目的としている科目である。小型の六法（科目試験に持ち込めるもの）を1冊購入して、学習の際は常に条文を参照すること。六法は、最もコンパクトな『法学六法』（信山社）でもよい。

◆参考文献

池田真朗『新標準講義民法債権総論』慶應義塾大学出版会、2009年

池田真朗『新標準講義民法債権各論』慶應義塾大学出版会、2010年

池田真朗『スタートライン民法総論』日本評論社、2006年

池田真朗『スタートライン債権法〔第5版〕』日本評論社、2010年

山田卓生ほか『民法Ⅰ〔第3版補訂〕』有斐閣Sシリーズ、2007年

淡路剛久ほか『民法Ⅱ〔第3版補訂〕』有斐閣Sシリーズ、2010年

野村豊弘ほか『民法Ⅲ〔第3版〕』有斐閣Sシリーズ、2005年

藤岡康宏ほか『民法Ⅳ〔第3版補訂〕』有斐閣Sシリーズ、2009年

池田真朗編『新しい民法』有斐閣ジュリストブックス、2005年

◆レポート作成上の注意点

まずテキスト全体を十分に学習して理解してから、レポート課題の問うている範囲を確認し、上掲の参考文献に当たってレポート作成を始めること。六法は、最もコンパクトな『法学六法』（信山社）でもよい。

◆成績評価方法

科目試験による。

労働法(E)

2 単位

E064-1091

市販書採用科目

◆テキスト

神尾真知子・増田幸弘・内藤恵『フロンティア労働法〔第2版〕』法律文化社、2014年

なお、指定テキストは2019年4月に第3版を刊行予定です。学習にあたっては、第2版、第3版いずれを使用しても構いません。

◆講義要綱

労働法とは、賃金を得て生活する者（労働者）と使用者との関係を規律する様々な法律の総称です。大別すると、以下の4つの領域として理解されます。

①、雇用関係に入る際の求人と求職に関わる法制度と政策を学ぶ、労働市場法。その中心的なテーマは、求職・求人に関する行政的支援・職業能力開発・雇用安定等で、昨今問題とされることの多い労働者派遣などもこの中で学びます。②、労働契約締結からその終了に至るまでの法律問題を考察するのが、個別的労働関係法です。ここでは、労働者と使用者の二者間の契約に基づく様々な労働条件、およびその変更が中心的テーマとなります。③、労働者・使用者に加えて労働組合という第3の主体が加わり、憲法28条の労働基本権を三者の間で具体化する領域が、集团的労使関係法です。労働組合・団体交渉・労働協約・争議行為、等を議論します。④、最後に現代社会では、労使間の紛争をいかに処理するかも重要な課題です。このような労働紛争の解決にかかる様々な法制度にも目を配る必要があります。

テキストは、現代的視点も含め、以上の領域全てを学べるようになっています。

◆テキストの読み方

伝統的な労働法の論点は、上記の②と③の領域にあります。②は、民法の雇用契約を発展させた領域ですが、現在では労働契約法も施行され、労働法独自の体系が整ってきています。③の領域は、憲法第28条の趣旨を如何に具現化するかを重視しております。但し興味深い論点のいくつかは、個別法と集団法の2つの法理が交錯する部分に生じます。

また労働法学は、現実社会の紛争から切り離すことの出来ない領域です。労働法学の学習には、総合的かつ体系的な理論を学習することに加えて、具体的な裁判例を学ぶことが必須です。学習に際しては労働法判例百選なども利用し、当該テーマにかかる学説が、具体的にはどのような事案として生じているかを学んで下さい。

最後に労働法学は、研究者のスタンスが分かれやすい領域でもあります。1冊のテキストに偏ることなく、複数の参考書を読み、相互に比較検討することをお願いします。かつまた現代社会では雇用の流動化が進み、労働市場にも目を配る必要があります。

◆履修上の注意

法律学を学ぶ際には、まず一般法の知識を得た上で、特別法による修正法理を学ぶ方が効果的です。労働法を学習するには、まず憲法、民法総則、債権各論を学習した後に履修することをお願いします。労働法学は法解釈学であり、労働関係を対象としております。社会政策学や労働経済学の隣接領域ですが、それらを主として学ぶわけではありません。あくまでも法律学の1科目です。

◆関連科目・分野

上述したように法律学としての労働法は、憲法、民法総則、債権各論を基礎としています。

さらに社会保障法とは、相互補完的な関係にあります。他学部の科目としては、社会政策学や労働経済学とも関連します。

◆参考文献

注意：労働法は改正が頻繁に行われる領域です。参考文献は、常に最新版を使用して下さい。（下記には、当該シラバス原稿作成時における情報を入れておきます。）

まず最初にテキストを用いて、当該テーマの全体像をつかみます。次にテーマに関連する専門書、あるいは法律専門誌や大学紀要に掲載されている専門的論文、さらには裁判例の原本に当たって考察を深めて下さい。

- 1) 指定テキストの他に、入手し易い初学者向けの参考書として、
 - ・中窪・野田『労働法の世界』（第12版）有斐閣、2017年
 - ・安枝・西村『労働法』（第12版）有斐閣プリマ・シリーズ、2014年
- 2) 裁判例の概略を学ぶために
 - ・別冊ジュリスト・労働判例百選（第9版）有斐閣、2016年
 - ・唐津博・和田肇・矢野昌浩編『新版・労働法重要判例を読む1 総論・労働組合法関係』、『同・2 労働基準法・労働契約法関係』日本評論社、2013年
- 3) さらに専門的に学ぶための概説書

・菅野和夫『労働法』（第11版補正版）弘文堂、2017年

・荒木尚志『労働法』（第3版）有斐閣、2016年

◆レポート作成上の注意点

レポートを作成する前に、まずテキストを通読して下さい。次にレポートの構成を考える際には、当該テーマに関する専門書・専門論文・判例等を収集し、読み比べ、論点を整理した上で取り組んで下さい。レポートの末尾に必ず参考文献一覧を明記すること。

時に、単なるテキストの要約を提出する学生がいます。これは評価できないのでご注意ください。なお他の文献から直接引用する場合には、必ずその出典を明示して下さい。その際は、文献や判例の引用方法を確認すること。インターネットの情報を引用する場合には、作成者が明らかにされているもののみを補助的に用い、URLに加えて当該HPの作成者とそのHPの名称を明示して下さい。

◆成績評価方法

科目試験による。

経済法(E)

2単位

E079-1791

市販書採用科目

◆テキスト

土田和博、栗田誠、東條吉純、武田邦宣『条文から学ぶ独占禁止法』有斐閣、2014年

◆講義要綱

本講義は、経済法の中核をなし、その基本的秩序を形成する「独占禁止法」の法構造とその最新の論点を学習することを目的としている。独占禁止法は競争法とも呼ばれており、市場経済の中核をなす法律である。また独占禁止法は、企業法務においても、非常に重要な法分野となっている。カルテル・談合規制のみならず、再販売価格維持行為、優越的地位の濫用規制など日々のビジネスに密接に関係する法規制が多く、きわめて実務に直結した法分野である。他方、経済法（競争法）は、グローバルな色彩が強く、比較法的な視点からの分析が盛んであり、経済法を学ぶことによって、実務の現状を理解することもできる。この経済法に関して、その中核をなす競争法の法原理・法構造の理論的な解説とともに、判例・審決を中心とするケーススタディを通じて、応用可能な知識の習得を目指す。なお適宜、比較法的な観点から米国、欧州そして中国の競争法規制にも言及することがある。

◆テキストの読み方

テキストを読む際には、理論的な説明とともに、事例について出来るだけ原文を参照するなどして、事例から考えることを意識してほしい。事例については、公正取引委員会のホームページで閲覧できる。また図書館で審決集や判例集を調べるという作業も併せて行ってほしい。

◆履修上の注意

履修に際し、他の特定の科目を事前に履修している必要はない。なお経済法は、ミクロ経済学、産業組織論との関連性が深いので、講義において適宜、言及する場合がある。

◆関連科目・分野

経済法・独占禁止法は、取引を扱うため、民法、商法、会社法とも関わりがある。経済活動に対する公的な規制という観点もあるので、憲法や行政法との関係も深い。他方、各種事業法との関係も深い。また経済法の理論的前提のなかには、ミクロ経済学、産業組織論、最近ではゲーム理論の影響も見られる。このような法学分野以外の隣接領域も関連分野となる。

◆参考文献

- 『独占禁止法 第3版』白石忠志著 有斐閣 2016年 ISBN: 978-4641144934
『独占禁止法〔第3版〕』菅久修一 商事法務 2018年 ISBN: 978-4785726331
『産業組織とビジネスの経済学（有斐閣ストウディア）』花 蘭 誠 著 有斐閣 2018年 ISBN: 978-4641150591
『経済法判例・審決百選 第2版（別冊 Jurist）』金井 貴 嗣 編集 有斐閣 2017年 ISBN: 978-4641115347

◆レポート作成上の注意点

レポート作成に際しては、次の3点に注意して調査・執筆することを求める。第一に、課題の内容を十分に理解し、課題に対し適切な解答となるレポートを作成する必要がある。この点、レポートのなかには、課題と無関係な記載になっていて不合格となる場合がある。第二に、課題は、教科書を読むだけでは執筆できない。調査が必要であり、参考文献や論文そして判例や審決について十分な調査を行っていないとレポートとして評価対象とならない。第三に、引用のルールを厳守である。教科書や概説書をそのまま引用している場合や、判例の引用なのか、個人の意見なのか、混同している例が多く、疑わしい場合は、評価対象とならないだけでなく、不正なレポートと判断される可能性がある。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・会社法(E)

4単位

E084-1991

市販書採用科目

◆テキスト

山本爲三郎『会社法の考え方（第10版）』八千代出版、2017年

※テキストは、最新版の使用が望ましい。やむをえず古い版を使用する場合には、少なくとも平成26年会社法改正を反映した版を使用すること。

◆講義要綱

会社の経営者、従業員、会社と取引する相手方、株主などにとって、会社がどのような法制度によって規制され、どのように行動するべきかを正しく理解することは、大変重要である。

平成17年に制定された会社法は、平成26年に改正を受け、改正法は平成27年5月から施行された。これにより、平成26年改正前に用いられていた委員会設置会社の名称が指名委員会等設置会社に変更されたほか、コーポレート・ガバナンスの改善のため、監査等委員会設置会社の新設、社外役員の要件の見直し、

公開会社における支配権移動を伴う募集株式発行等についての特別規制、親子会社の法規制の見直しのため、多重株主代表訴訟（特定責任追及訴訟）の導入、特別支配株主による株式等売渡制度の新設、企業再編行為の差止請求権の許容、許害の会社分割が行われた場合の債権者保護規制の整備など、多くの点で改正がされた。さらに、平成29年民法改正に伴い、会社法も一部改正があったほか、会社法の解釈にも影響があった。テキストは、平成29年民法改正をも踏まえて改訂されたものである。

◆テキストの読み方

会社法全体に対して理解できるようになるためには、時間と根気が必要である。細部にこだわるよりも、まず、テキスト全体を通読して全体像を把握する、あるいは、株式・機関の辺りを熟読してそれを理解したのちに、他の部分を読むなど、工夫して学習を進めてほしい。なお、科目試験範囲はテキスト第26章株式会社の資金調達までとする。

◆関連科目

商法総則・商行為法、手形法、保険法

◆参考文献

- 田中亘『会社法（第2版）』東京大学出版会、2018年
江頭憲治郎『株式会社法（第7版）』有斐閣、2017年
鈴木千佳子『入門講義会社法（第2版）』慶應義塾大学出版会、2017年
宮島司『新会社法エッセンス（第4版補正版）』弘文堂、2015年

◆レポート作成上の注意点

テキストを丸写しすることなく、他にも参考書を読むなどして、問題点を多角的に分析し、再構成することを心がけてほしい。また、会社に関する法制度は頻繁に改正を受けているため、参考文献を用いる際は、どの時点で執筆された文献かをよく見極め、常に最新の規定との整合性を検討しなくてはならない。

◆成績評価方法

科目試験による。

法学部専門教育科目

憲法(J)

4単位

J110-1691

市販書採用科目

◆テキスト

駒村圭吾編『プレステップ憲法〔第2版〕』弘文堂、2018年

※テキストは、極力第2版を使用すること。

◆講義要綱

講学上、憲法は、統治の仕組みを対象とする「統治機構論」と、憲法上の人権を対象とする「人権論」とに大別される。本講義は、その両方を対象に、「法律」ではなく「憲法」で人権を保障するとはどういう意味を持つのか、憲法が保障する人権は誰に対してどの程度まで保障されるのかといった、憲法上の人権にかかわる抽象的な問題（人権総論）から、具体的に憲法により保障される個別の人権をめぐる解釈、判例、実践の問題（人権各論）、そして国家統治の仕組みとして憲法はどのような制度を構想しており、そこにはいかなる論点が伏在しているのか（統治機構論）など、憲法の全体像を把握したうえで、具体的な問題を自分で考える力を養うことを目的とする。

◆テキストの読み方

憲法に関する知識は、すでに小中高校でも学んでいるだろう。しかし、専門科目・法学としての憲法の場合、従来の知識がむしろ理解を妨げることもありうる。その場合、先入観を捨てて、テキストの説明を素直に読み、場合によっては法律用語辞典などを参考にしながら、理解に努めてほしい。

また、よくわからなかった部分については、別の教科書の記述を見ってみるなどすると、理解が進むこともある。指定したテキストの末尾（166頁）に、定評のある教科書などが挙げられているので、それを参考にすること。

◆関連科目

「国際法」、「行政法」、「刑事訴訟法」など

◆参考文献

憲法に限らず、法学の学習において判例を参照する機会が多い。直接原文に当たることが必要な場合もあるが、本講義の場合、事実関係、判旨を整理したうえで、解説をしている判例集を参考にすればよいだろう。定評のある判例集としては、次のものがある。

- ・高橋和之編『新・判例ハンドブック【憲法】』日本評論社、2012年
- ・長谷部恭男・石川健治・穴戸常寿『憲法判例百選Ⅰ、Ⅱ』有斐閣、2013年
- ・戸松秀典・初宿正典『憲法判例〔第7版〕』有斐閣、2014年
- ・憲法判例研究会『判例プラクティス憲法〔増補版〕』信山社、2014年
- ・木下昌彦編集代表『精読憲法判例』弘文堂、2018年

その他、指定テキストの末尾（166頁）の文献案内も参考のこと。

◆レポート作成上の注意点

- ① まず、問われている課題を十分に理解し、論点を整理することが必要である。そして、そのためには、テキストや参考文献をよく読むことが求められる。
- ② 当該論点については、すでに、関連する判例、学説などが存在しているはずである。それらをきちんと読み、判例はどのような立場なのか、学説は何を巡って対立しているのか、といった問題状況を把握することが求められる。
- ③ そのような問題状況に対して、レポート作成者はどのように考えるのか、そしてそのように考えた理由は何かを明らかにし、自分の考えを説得的に「レポート」する必要がある。
- ④ このようにレポートを作成するとなれば、必ず、先行業績を参考にしなければならないことに気づくだろう。参考にした先行業績は、必ず引用すること。他者の考えたこと、まとめたことを、あたかも自分が初めて考えたことのようにレポート作成する行為は、不正行為である。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・民法総論

3単位

J119-1891

市販書採用科目

◆テキスト

平野裕之『コア・テキスト民法Ⅰ 民法総則（第2版）』新世社、2017年

◆講義要綱

民法は、私達が共に幸福な社会生活を営むために不可欠な、基本ルール（社会規範）の一つです。すなわち、私達が共に幸福な社会生活を営むためには、自分が望む権利移転の効果をどのように求めるのか。自分の財産をどのように守るのか。私達が利己的になり他人の生命や財産を侵害しないようにするにはどうすればよいのか等々の基本ルールが必要ですし、それらは社会生活上とても大切なものの一つなのです。したがって、社会の構成員として皆さん一人一人に、民法を学問として学んでいただきたいと思っています。

また、本講義でとりあげる「新・民法総論」は、民法典を理解する上での基本原則を内容とする民法総則編を領域としますが、民法典制定以来の大改正といわれる今回の債権法改正は、本領域にも及びますので、本講義では、2年後に施行が予定されます改正部分についても言及されている教科書に刷新して、民法の基本だけではなく、債権法改正が求められた社会的背景や理由等についても学んでいただきたいと考えます。

第1部 自然人及び法人

第2部 法律行為

- 第3部 代理制度
- 第4部 条件及び期限
- 第5部 時効制度
- 第6部 物
- 第7部 民法の通則

◆テキストの読み方

本講義で採用する『コア・テキスト民法Ⅰ 民法総論（第2版）』は、筆者が、学説・判例の引用を省き、一般的な民法の入門書より少し深い内容を記述した講義テキストです。各争点について十分な内容で記述されていますので、同テキストの内容をしっかりと読み込んでいただき、科目試験等にのぞんでいただきたいと思います。

なお、前述のように、民法は私達の市民生活の基本ルールであり、しかも私達の生活の最も身近な問題を対象とし、立場や価値観の異なる人々の間に生じる利害の牴触と法的解決をとりあげる、親しみやすくて解りやすい学問領域です。しかし、残念ながら、いざ民法を学ぼうとすると、法律用語や法文書の表現が固苦しく専門的なために、とても難解で取り組みにくいような印象を与えがちですが、同テキストは、具体例や図を多く用いながら、民法の基本体系や各規定内容の相互関係を明確にし、さらに民法改正の論点についても非常に詳しく説明されていますので、繰り返し読んで、私法学習の第一歩を踏み出していただきたいと思います。

◆履修上の注意

- 1 法律用語を正確に理解して使えることは重要です。法律用語辞典等を手許において、解らない用語はすぐに調べるようにしましょう。
- 2 各制度の制度趣旨や他の制度との相違等を考え、整理できることも大切です。新しく学んだことは、常に既に知っていることと、どのように関連するのか、或いは異なるのかを考えるようにしましょう。
- 3 教科書を読む前に必ず、単元の範囲の一連の条文に目を通して、各規定がどのような事例を想定しているのかのイメージをもってから、教科書を読むようにして下さい。理解が深まります。
- 4 独りで教科書を読む繰返しに終らせないで、必ず講義に参加して、独学では想像できなかった事例や解説等を聞き、講義内容をじっくりと考え、友人達と議論を交したり、担当教員へ質問する等の作業を通して、実践的かつ有機的な民法学の理解へと繋げて下さい。
- 5 なお、科目試験はテキスト全領域から、テキストの内容の理解を問われているものです。指定テキストの記述内容から離れたような自分の思いや感想、経験の記述については、一切、成績評価の対象とはなりませんので、くれぐれも指示通りの作業を終えて受験をお願いします。

◆参考文献

潮見佳男、道垣内弘人編『判例百選民法Ⅰ（第7版）』（別冊ジュリスト No. 223）、有斐閣、2015年、定価2,268円（本体2,100円）ISBN978-641-11523-1

その他、判例解説の市販書等の利用。

◆レポート作成上の注意点

- 1 テキストや参考文献、法務省ホームページでの審

議録等でそのアウトラインをよく把握してからレポートの作成をはじめて下さい。

- 2 単なる引き写しではなく、自己の頭で整理して十分に問題点を理解した上で、できるだけ自己の言葉で説明して下さい。
- 3 読み手の立場に立った気持ちで、丁寧にレポートすることが大事です（レポートは文章です。図版等を利用した箇条書のレジュメではありませんので、章立て、各段落、接続語に意味を持たせて、流れのある内容で書いて下さい）。

◆成績評価方法

科目試験による。

刑法総論

3単位

J089-0992

市販書採用科目

◆テキスト

井田良『講義刑法学・総論』有斐閣、第2版、2018年

◆講義要綱

本科目では、主として犯罪論、すなわち、因果関係、故意・過失、未遂、共犯といった、あらゆる犯罪に共通する犯罪の一般的な成立要件に関する議論に関して学びます。判例を参照しつつ、自らの力で事例問題を解決する力を身に着けることを目的とします。

- 第1章 刑法の存在理由と機能
- 第2章 刑法の基本原則
- 第3章 刑法、刑法典、刑罰法規
- 第4章 犯罪論の基礎理論
- 第5章 構成要件
- 第6章 結果と因果関係
- 第7章 不作為犯
- 第8章 故意
- 第9章 錯誤論
- 第10章 過失犯
- 第11章 結果的加重犯
- 第12章 違法性と違法性阻却事由
- 第13章 正当行為
- 第14章 正当防衛
- 第15章 緊急避難およびその他の緊急行為
- 第16章 自己決定に基づく違法性阻却事由
- 第17章 過失犯と違法性阻却事由
- 第18章 違法性阻却事由の錯誤
- 第19章 責任論の基礎
- 第20章 責任要素
- 第21章 未遂犯と実行の着手
- 第22章 不能犯
- 第23章 中止犯
- 第24章 正犯と共犯
- 第25章 共同正犯
- 第26章 教唆犯と幫助犯
- 第27章 共犯（広義）をめぐる諸問題
- 第28章 犯罪の個数および競合
- 第29章 刑罰とその種類
- 第30章 刑罰の適用および刑罰の執行

◆テキストの読み方

刑法総論は高度に体系的な学問であるため、全体像

が理解できないと教科書の最初の方に書いてあることも十分に理解できないということが起こります。そのため、少なくとも、第20章までは石にかじりつく気持ちで通読してください。テキストを読んで難しすぎると感じた場合、下記の参考書を一度通読した後に再びチャレンジしてください。

◆履修上の注意

刑法総論と各論は密接な関連性を有しますから、レポート課題を解くにあたっては、刑法各論の知識も不可欠となります。

◆関連科目

刑法各論、刑事訴訟法、刑事政策学

◆参考文献

井田良『入門刑法学・総論』（有斐閣、第2版、2018年）

成瀬幸典・安田拓人編『判例プラクティス刑法Ⅰ 総論』（信山社、第2版、2019年）

◆レポート作成上の注意点

事例問題を解くにあたっては、まず課題のストーリーを読み、六法をめくりながら、刑法典の条文に該当しそうな事実を抽出しなくてはなりません。これにより、何罪の成否が問題となるかを明らかにします（刑法総論のレポート課題の場合、この作業はあまり難しくはありません）。

次に、その罪の成否との関係でどのような法的論点が生じるのかを示します。課題には、刑法総論上の論点が複数隠れています。

続いて、論点ごとに判例・学説を調査してその内容を要約し、それらのうちのどの考え方を支持するかを提示します。その際、当然、論拠を示すことが必要になります。

最後に、自分の見解を課題の事例にあてはめ、何罪が成立するのかを明らかにします（まったく犯罪が成立しないケースもあるかもしれません）。

以上のことを簡単にまとめると以下ようになります。

第1のステップ：事実の抽出

第2のステップ：問題提起

第3のステップ：既存の判例・学説の要約

第4のステップ：私見の提示・あてはめ

（以上の作業を論点ごとに行い、最終結論を出す）なお、刑法のレポート作成の際の文章作法については、井田良ほか『法を学ぶ人のための文章作法』（有斐閣、2016年）187頁以下が参考になります。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・法哲学

2単位

J116-1801

◆講義要綱

法哲学は、法および法学をめぐる現象について、哲学の手法を活用しながら理論的に解明することを目的とする分野です。しかしその具体的内容については論者ごとに大きな違いがあり、現代アメリカの正義論やドイツの法解釈理論、場合によっては東洋法思想なども含まれます。実定法のように対象となる領域と必要

となる知識が決まっているような分野とは異なり、法が実際にどのように動作しているのか・それはなぜなのかを哲学的見地から問題にし続ける観点（とそれを支える理論知）が法哲学なのだと考えるべきでしょう。

この分野は大きく、以下の三つの領域に分かれると理解されています。第一に、法やそのなかで使われるさまざまな概念（自由・権利・解釈など）はどういうもので何を本当は意味しているのかを解明することを目的とする法概念論。第二に、法を通じてその構築・実現が目指される「あるべき社会」の姿とその正当化理由について探求する正義論。第三に、これらの問題についてこれまでのさまざまな論者がどのように考えてきたのか・それはなぜなのかを考える法思想史。これらの分野をバランスよく学修することによって、法の本質について考える自分なりの観点を構築することが最終的には求められますが、テキストではこのうち正義論を中心に扱っています。

法学部の他の科目と比較すると抽象的・理論的と位置付けられることの多い法哲学ですが、他方でそれは、現実の法現象をどのように理解することができるか、どのように改善することができるかという実践的関心に裏付けられたものでもあります。その意味で、現実の法に関する認識を中心とした実定法学の知識が当然に必要となる一方で、「あるべき法」について考え現実の法を批判するための足場を持つために、法以外の実践や政治学・経済学などの理論、文学や芸術などを通じた社会認識も必要になってきます。それらについては必ずしもテキストで扱えるわけではありませんので、各自が視野を広げて知見を得るように努めてください。

◆テキストの読み方

この分野では特に1970年代以降に英米を中心とした法解釈理論と正義論の発展があり、現在ではそのウェイトが大きく増しています。新しいテキストはその内容を反映した構成になっています。参考文献に挙げたより新しい教科書を併読し、知識・関心の幅を広げるようにしてください。概ね2000年以前の教科書・文献を参照する場合には、このような論点の変化があったことを踏まえて理解するよう、注意してください。

理論的な見解は必ず実践的な関心や意義に裏付けられています。実践的な側面との関係については、具体的な問題を中心に構成している瀧川『問いかける法哲学』のほか、やはり参考文献に挙げた近時の議論などを参照してください。

テキストや上記の教科書類を読み進めるなかで、自分にとって気になる思想家や理論——それは肯定的に「この考え方が腑に落ちる」という場合もあれば、否定的に「とにかくどこかが気に入らない」ということもあります——が見つかるでしょう。それはなぜなのか、そこに自分は引っ掛かりを覚えたのかを自覚的に分析することによって、自分の視点が定まってきます。気になった議論については、テキスト・教科書類から進んでさまざまな解説書・専門書、さらに本人の書いた著作へと探求を進めていくことによって、より理解が進むことになると思います。特に専門書・原書を読むのには相当の時間・努力が必要になりますが、そのような機会をできるだけ持ってもらいたいと考えます。

◆履修上の注意

法哲学の論点を理解するためには、実定法学の理解だけでなく、社会・文化に対する広い関心が必要になります。憲法・民法・刑法など基本的な法律科目を学修するとともに、政治学・経済学・哲学・論理学など関連する分野の履修を広く行なうことを勧めます。

◆関連科目

特に政治思想・経済思想・社会思想などの分野と強い関連があります。

◆参考文献

- 《最近の教科書》
瀧川・宇佐美・大屋『法哲学』有斐閣、2014年。現在のスタンダードである英米の問題意識・研究水準を反映したもの。
青井秀夫『法理学概説』有斐閣、2007年。ドイツ系の法解釈理論に強い力点をおいたもの。
田中成明他『法思想史』有斐閣、1997年。共著による法思想史のスタンダード。
中山竜一『二十世紀の法思想』岩波書店、2000年。法理論の20世紀の展開に重点を置いたもの。
深田・濱編『よくわかる法哲学・法思想〔第2版〕』ミネルヴァ書房、2015年。広い領域をカバーしたわかりやすいもの。
瀧川裕英編『問いかける法哲学』法律文化社、2016年。
《近時の議論》
マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をしよう』早川書房、2011年。
井上達夫『リベラルのことは嫌いでも、リベラリズムは嫌いにならないでください』毎日新聞出版、2015年。
大屋雄裕『自由か、さもなくば幸福か?』筑摩書房、2014年。

◆レポート作成上の注意点

課題について、何が問題になっているかという論点を明確にし、それに対する関係論者の見解を整理したうえで、自身の主張を展開してください。単に抽象的に記述するのではなく、具体的な例や事案などを参照することによって主張を裏付ける努力を怠らないことが必要です。教科書・参考書を単に書き写す結果に終わらないよう、十分注意してください。文献を参照した場合には注で明記し、著者名・著書名・出版社名・出版年・ページ数など、適切な出典情報を明記してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本法制史Ⅰ—古代—

2単位

J044-8603

◆テキスト

この科目のテキストは、2018年4月に補訂されました。改訂後の新しいテキストで履修してください。同テキストの入手方法は、『塾生ガイド』を参照してください。

◆講義要綱

まず、テキスト巻頭に示されている著者の「日本法

制史」という学問に対する考えを熟読して欲しい。つまり、現代の法典や司法制度との関連を考えつつ、必ずテキストの全体を読み通し、理解を深めることが必要である。

◆履修上の注意

テキストは、紙数の関係から、多くの歴史的事実を省略している。従って受講者は、高等学校の日本史教科書などをまず一読し、基礎知識を涵養してもらいたいと思う。

◆参考文献

- 霞信彦・原禎嗣・神野潔・兒玉圭司・三田奈穂『日本法制史講義ノート〔第2版〕』慶應義塾大学出版会、2012年
浅古弘・植田信廣・神保文夫・伊藤孝夫『日本法制史』青林書院、2010年

◆レポート作成上の注意点

テキスト・参考書の丸写しにならないように留意することが必要である。併せてそれらの参照文献を換骨奪胎してレポートを作成することも、評価の対象とならない。参照文献は、もれなく書名・著者・出版社・刊行年を明示し、レポートの最後に記載することが求められる。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本法制史Ⅱ—中世・近世・近代— 4単位

J099-1201

◆講義要綱

本科目は、歴史的な法や制度のうち、日本の中世・近世・近代の法制について学習します。具体的には、武家政権による封建的前近代的な法制から、西洋法を継受し近代的な法典へと変ぼうを遂げる明治時代までの法制について、焦点をあてています。

現代社会において国民は、法や裁判について理解し、責任感をもって自律的に生活することが求められています。過去の法を単なる歴史としてとらえるのではなく、現代とどのように異なるのかを考えながら学習をすすめてください。現代法の「ルーツ」に関する知見を深めるのが、本科目の目的です。その際、必ずテキストの全体を読み通し理解を深めることが大切です。

序章

第1章 中世

- 1 中世法の基本的構造
- 2 鎌倉幕府の統治機構
- 3 御成敗式目と鎌倉幕府の裁判
- 4 室町幕府法
- 5 戦国期・織豊期の法

第2章 近世

- 1 江戸時代の法に関する基礎知識
- 2 公事方御定書
- 3 江戸の行刑
- 4 民事法

第3章 近代

- 1 国家機構の変遷
- 2 刑法・刑事手続法の近代化
- 3 刑罰と処遇

4 憲法の近代化

5 法典論争

別編 明治初期近代軍司法制度の形成

◆履修上の注意

本科目では、歴史に関する知識が理解の助けとなります。定評のある日本史の文献として近年復刊された中公文庫の「日本の歴史」(中央公論新社)がありますが、高等学校の日本史教科書など手近なもの一覧してからテキストを読み進めてみるのも良いでしょう。

◆関連科目

本科目の履修条件というわけではありませんが、日本法制史を通史として理解するために「日本法制史Ⅰ—古代—」をあわせて履修することが望ましいです。

◆参考文献

浅古弘・植田信廣・神保文夫・伊藤孝夫『日本法制史』青林書院、2010年
出口雄一・神野潔・十川陽一・山本英貴『概説日本法制史』弘文堂、2018年

また、テキスト巻末の参考文献も参照してください。

◆レポート作成上の注意点

本年度のレポート課題は、近代から出題されています。テキスト・参考書の丸写しにならないよう、自分の言葉でまとめてください。また、複数の文献を参照してレポートを作成することが好ましく、参考文献は書名・著者・刊行年・出版社名をレポートの最後に必ず明記してください。

専門用語には誤字が無いよう、見直しを徹底してください。

◆成績評価方法

科目試験により評価します。

国際法Ⅰ

4単位

J111-1791

市販書採用科目

◆テキスト

大森正仁編著『よくわかる国際法〔第2版〕』ミネルヴァ書房、2014年

◆講義要綱

経済活動や環境問題を考えると私たちが生きている社会は様々な部分で国際的になってきています。また、難民問題は大きな関心事項です。その国際社会において生じている状況に対応するために、国際法は多様な規則を提供してきました。国内社会の一員であると同時に国際社会の一員である私たちがそこで起きている出来事に敏感であることが求められています。国際社会の理解を法という視点から行うための力を養うこと、これが「国際法Ⅰ」の目標です。この学習を通じて国際社会を身近に感じてほしいと願っています。

「国際法Ⅰ」は、国際法の主体、法源、責任を対象とし、指定教科書の構成は次のとおりです。

第1部 総論

I 主体

- 1 国
- 2 国家承認・政府承認
- 3 国際機構
- 4 裁判権免除
- 5 個人

6 NGO

II 法源

- 1 条約
- 2 留保
- 3 強行規範
- 4 慣習法
- 5 国際機構の決議
- 6 国際法の国内的実施

III 責任

- 1 国際責任の発生要件
- 2 国際責任の法的結果(賠償)
- 3 国際責任の履行

◆テキストの読み方

条約集を手元に置いて、該当する条約の規定を参照しながらテキストを読んでください。また、判例集の活用も有効です。

テキスト第2部各論(V空間と国際法、VI環境と国際法、VIII個人と国際法)についても、第1部総論とのつながりで読み進めてください。

◆履修上の注意

法学の基本的な知識を修得しておくことが必要ですが、何よりも国際社会で生じている出来事に強い関心を持って問題を考えることが重要です。

◆参考文献

岩沢雄司編『国際条約集』(有斐閣、2019年)
位田隆一・最上敏樹編『コンサイス条約集』(三省堂、第2版、2015年)
小寺彰他編『国際法判例百選』(有斐閣、第2版、2011年)

◆レポート作成上の注意点

課題は国際法の基本概念である主体と法源について問うものです。テキストの内容を理解した上で自分の言葉でそれを表現してください。

作成にあたっては参考文献(学術雑誌掲載論文を含む)を検索して利用するように努めてください。文献引用はレポートの一部ですので正確に行うことが必要です。どこまでが他の人の意見で、どこからが自分の意見であるのか明確にしてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

国際法Ⅱ

2単位

J112-1791

市販書採用科目

◆テキスト

大森正仁編著『よくわかる国際法〔第2版〕』ミネルヴァ書房、2014年

◆講義要綱

国連憲章は加盟国に紛争の平和的解決義務を課しています。しかし、国際社会で起きている紛争は依然として多数にのぼる状況です。これまで国際法は武力紛争に適用するための多様な規則を発達させてきました。なお限界は存在しますが、それをどのように乗り越えていこうとしているのかを学ぶこと、これが「国際法Ⅱ」の目標です。この学習を通じて国際社会で起きている紛争に国際法がどのように対応しているのかを理解してほしいと願っています。

「国際法Ⅱ」は紛争解決、武力紛争法（国際人道法）を対象とし、指定教科書の構成は次のとおりです。

第1部 総論

Ⅳ 紛争解決

紛争の平和的解決手続とは

- 1 非裁判手続
- 2 仲裁裁判
- 3 国際司法裁判所（ICJ）
- 4 国際海洋法裁判所（ITLOS）
- 5 人権裁判所
- 6 国際刑事裁判所（ICC）

第2部 各論

X 戦争と国際法

- 1 戦争の禁止
- 2 平和に対する罪
- 3 人道に対する罪
- 4 戦争犯罪
- 5 集団安全保障
- 6 自衛権
- 7 日米安保
- 8 国際人道法
- 9 捕虜
- 10 文化財の保護
- 11 化学兵器の禁止
- 12 核兵器
- 13 軍縮

◆テキストの読み方

条約集を手元に置いて、該当する条約の規定を参照しながらテキストを読んでください。また、判例集の活用も有効です。

◆履修上の注意

法学の基本的な知識を修得しておくことが必要ですが、何よりも国際社会で生じている出来事に強い関心を持って問題を考えることが重要です。

◆関連科目

国際法Ⅰ

◆参考文献

岩沢雄司編『国際条約集』（有斐閣、2019年）

位田隆一・最上敏樹編『コンサイス条約集』（三省堂、第2版、2015年）

小寺彰他編『国際法判例百選』（有斐閣、第2版、2011年）

◆レポート作成上の注意点

根拠となる条約の規定を参照し、テキストの内容を理解した上で、自分の言葉でそれを表現してください。

作成にあたっては参考文献（学術雑誌掲載論文を含む）を検索して利用するように努めてください。文献引用はレポートの一部ですので正確に行うことが必要です。どこまでが他の人の意見で、どこからが自分の意見であるのか明確にしてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

行政法

4単位

J106-1591

市販書採用科目

◆テキスト

櫻井敬子・橋本博之『行政法〔第5版〕』弘文堂、2016年

※テキストは、最新版の使用が望ましい。

◆講義要綱

行政法は、国や地方公共団体という行政活動の主体が当事者として登場する法律問題を考察対象とする。私たちの日常生活を見渡せば、実に多種多様な行政活動が関わっていることが容易にわかるだろう。各種の公的手続に必要な住民票は、市町村が管理している。自動車を運転するには、都道府県の公安委員会が発行する免許が必要である。普段利用する鉄道の運賃は、国（国土交通大臣）の認可を受けたものである。このように行政法は国や地方公共団体が広く、深く関わる社会システムの存在理由、構造と機能を法的な視点から議論し、国民と行政の関係を考えるのである。

この科目を通じて、行政法について特に学ぶべきエッセンスとして、次の3つの観点を挙げておこう。第一に、行政活動には具体的にどのようなものがあり、その法的な仕組み、特徴はなにか。第二に、それらの行政活動は、いかなる場合に違法となるか。第三に、行政活動によって権利が侵害されたり、財産上の損害をこうむった国民は、どのような手続を通じて自己の権利や利益を回復することができるか。

現代社会において、行政活動は、実に多くの場面で活発に行われ、かつ役割も重要である。そこでは、既存の法律や、これまでに積み上げられてきた判例・学説によって解決可能な問題ばかりではなく、新たに政策形成を試み、制度の構築を図る必要に迫られる問題もあるだろう。また、行政手続法や情報公開法の立法、行政事件訴訟法や行政不服審査法の改正などの法整備は言うに及ばず、規制改革・行政改革の波は、行政活動を取り巻く環境を着実に変化させている。現実の問題を前にしたとき、主権者たる国民にとって最善の解決策は何かということを常に考えながら、行政法の意義を学んでほしい。

指定教科書の構成は次のとおりである。

- 第1章 行政法の基本構造
- 第2章 法律による行政の原理
- 第3章 行政法の一般原則
- 第4章 行政上の法律関係
- 第5章 行政組織法
- 第6章 行政基準
- 第7章 行政行為
- 第8章 行政裁量
- 第9章 行政契約
- 第10章 行政指導
- 第11章 行政計画
- 第12章 行政調査
- 第13章 行政上の義務履行確保
- 第14章 行政罰
- 第15章 行政手続
- 第16章 情報公開・個人情報保護
- 第17章 行政上の救済手続

- 第18章 行政事件訴訟法概観
- 第19章 取消訴訟（その1）——訴訟要件
- 第20章 取消訴訟（その2）——審理・判決・執行停止・教示
- 第21章 取消訴訟以外の抗告訴訟
- 第22章 当事者訴訟・争点訴訟
- 第23章 国家賠償
- 第24章 損失補償

◆テキストの読み方

行政法の体系は、行政組織法、行政作用法、行政救済法から構成される。テキストに指定した櫻井敬子・橋本博之『行政法』は、このような行政法の体系全体をコンパクトに一冊にまとめたものである。参考文献に挙げた教科書・基本書には、同様に行政法の体系全体を一冊にまとめた稲葉ほか『行政法』もあれば、行政作用法（行政組織法の概略を含む）と行政救済法を分冊する大橋『行政法Ⅰ現代行政過程論』『行政法Ⅱ現代行政救済論』もある。いずれの場合も、とりわけ行政作用法と行政救済法が相互に連係することを意識しながら、読み進めるとよい。

◆履修上の注意

「憲法」及び「民法」の基礎を学んだうえで、履修すること。

◆参考文献

＊教科書・基本書

稲葉馨・人見剛・村上裕章・前田雅子『行政法』有斐閣、第4版、2018年

大橋洋一『行政法Ⅰ現代行政過程論』有斐閣、第3版、2016年

大橋洋一『行政法Ⅱ現代行政救済論』有斐閣、第3版、2018年

＊学習用判例解説集

『判例百選』シリーズ

『重要判例解説』シリーズ

◆レポート作成上の注意点

- (1) 設問をよく読むこと。例年、設問の趣旨を無視し、「行政法とは何か」などを書いてくるレポートが散見される。
- (2) 法学の基礎知識を確認すること。根拠条文の引用方法、裁判判決の出典の表記方法など、基本的な約束事が守られていない場合が多い。
- (3) 構成を練ること。文章を書き連ねるだけでは、読み手に訴える説得力に乏しい。小見出しを付ける、（一部に）箇条書きのスタイルを取り入れる等の工夫を試みてほしい。『法学教室』、『法学セミナー』等の法律雑誌に掲載された論文等に接することも、書きかたを学ぶためには有益である。

◆成績評価方法

科目試験による。

物権法

3単位

J101-1391

市販書採用科目

◆テキスト

石田剛・武川幸嗣・占部洋之・田高寛貴・秋山靖浩『民法Ⅱ 物権〔第2版〕』（リーガルクエスト）有斐閣、2017年

※テキストは最新版の使用が望ましいが、2010年版を用いて学習しても構いません。

斎藤和夫『レーアブーフ民法Ⅱ【物権法】』中央経済社、2009年

※『レーアブーフ民法Ⅱ【物権法】』は、出版社品切れのため大学を通しての購入申し込みはできません。入手困難な場合は、『民法Ⅱ 物権〔第2版〕』（リーガルクエスト）のみを用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

民法第二編・物権編において規定されている諸制度を総称して、講学上「物権法」とよんでいます。物権は債権と並ぶ主要な財産権ですが、それでは、物権とはどのような権利なのか。いかなる種類・内容の権利があつて、それらが取引社会においてどういう役割を果たしているのか。さらに、どのような場面において、いかなる形で物権をめぐる利害が対立し、それらについてどのように調整すべきなのか。こうしたことについて規律するルールが物権法なのです。本科目では、その全容について学びます。

◆テキストの読み方

物権法は私たちの財産および経済活動に関する基本的なルールですので、確かな理解と納得を一つ一つ丁寧に積み上げていくことを心がけてください。

◆履修上の注意

本科目を履修するに先立って、「民法総論」を履修することが望めます。また、本科目と並行または前後して、「債権各論」および「債権総論」を履修することを推奨します。

◆関連科目

「債権各論」、「債権総論」

◆参考文献

『民法判例百選Ⅰ〔第7版〕』（有斐閣、別冊ジュリスト）

『民法の争点』（有斐閣、別冊ジュリスト）

◆レポート作成上の注意点

テキストを精読し、しっかり理解した上で、課題が何に関するどのような理解を問うているのかについて正確に把握し、必要に応じて参考文献を活用しながら作成に着手してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

債権総論

3単位

J055-9903

◆講義要綱・テキストの読み方

本テキストの各章の冒頭に四角囲みで各章の概要を提示しているので、それをもって講義要綱（シラバス）に代替する。また本テキストは、学習方法のアドバイス等についても記述しているので（特に第8章「学習ガイダンス」）、適宜参照されたい。

なお、平成29年6月2日に、「民法の一部を改正する法律（平成29年法律第44号）」が公布されているが（それによって改正された民法を「平成29年改正民法」という）、同法の施行は2020年4月であるため、2019年度の本講義においては、現行法である「改正前民法」に準拠して行うこととする。もちろん、「平

成29年改正民法」を自らすすんで学習することは推奨されるべきものであり、同改正民法をもふまえてレポートを作成したり、試験の解答をした者が不利益とならないように配慮をする。

◆履修上の注意

本科目の履修を開始する前に、「民法総論」を履修していることが望ましい。本科目と前後して、「債権各論」を履修することを推奨する。

◆関連科目

民法総論、物権法、債権各論

◆参考文献

中田裕康『債権総論〔第3版〕』岩波書店、2013年
池田真朗編『民法 Visual Materials〔第2版〕』有斐閣、2017年

(以下は平成29年民法改正に対応したものである)

潮見佳男『民法(債権関係)改正法の概要』金融財政事情研究会、2017年

潮見佳男『プラクティス民法・債権総論〔第5版〕』信山社、2018年

平野裕之『債権総論』日本評論社、2017年

石田剛ほか『債権総論(日評ベーシック・シリーズ)』日本評論社、2018年

田高寛貴ほか『民法③債権総論 判例30!(START UP シリーズ)』有斐閣、2017年

窪田充見・森田宏樹編『民法判例百選Ⅱ〔第8版〕(別冊ジュリスト238号)』有斐閣、2018年

◆レポート作成上の注意

まずは、テキストを十分に理解してから、課題が何を要求しているかをじっくりと検討し、必要に応じて参考文献の該当箇所をも参照しつつ、レポート作成に着手するように心掛けたい。

◆成績評価方法

科目試験による。

債権各論

3 単位

J090-1001

◆講義要綱・テキストの読み方

債権各論は、民法上の財産権である物権と債権のうち、債権の発生原因を扱う分野である。債権は、契約、事務管理、不当利得及び不法行為の四つの発生原因に基づいて発生する権利であるが、とりわけ、これらの発生原因の中で、契約と不法行為が重要である。契約については、民法521条以下、696条まで170箇条以上の条文があり、その内容を丹念に理解することが必要であるのに対して、不法行為については、709条から724条まで僅か16箇条しかなく、条文の細かな解釈というよりも、判例法の分野であるから、判例の丹念な勉強が必要となる。テキストは、契約に関して比較的丁寧な解説が付されているが、不法行為については、基本的な解説が付されているにすぎないため、不法行為の勉強に当たっては、たとえば、近江幸治『民法講義Ⅵ事務管理・不当利得・不法行為〔第2版〕』(成文堂)といった他の不法行為等を扱う詳しい教科書を参照することも心がけて欲しい。いずれにせよ、教科書や参考文献を読む際には、それを暗記するのではなく、一つ一つの制度の趣旨やその意義、その要件と効果を

良く理解して、具体的にどのような場面で当該制度がどのように機能するのかをイメージしながら、勉強を進めて欲しい。

なお、2020年4月より改正債権法が施行される予定であるが、今年度は改正前の民法を対象とする。ただし、改正債権法を学習した者については、不利益とならないよう配慮する。

◆履修上の注意

債権各論は、民法財産法の一分野であるから、民法総則の理解は当然の前提として、関連が深い債権総論の勉強と関連づけて勉強をして欲しい。とりわけ、債権総論の債権の目的、債権の効果、分けても債務不履行の分野、債権の消滅の中でも弁済や弁済の提供、相殺といった分野の理解は、債権各論を理解するうえで必ず必要になるため、そうした分野との関連を必ず意識して欲しい。

◆関連科目・分野

民法総則、債権総論

◆参考文献

参考書：内田貴『民法Ⅱ〔第2版〕』(東京大学出版会、2007年)、近江幸治『民法講義Ⅵ事務管理・不当利得・不法行為〔第2版〕』(成文堂、2007年)等の定評のある一般的な教科書

判例解説：『民法判例百選Ⅱ〔第8版〕』(有斐閣、別冊ジュリスト)、松本恒雄・潮見佳男編『判例プラクティス・民法Ⅱ債権』(信山社、2010年)等の判例の解説書。

なお、レポート作成に際して最新の判例を参照する必要が生じる場合があるが、その際には、裁判所のWeb ページや、『平成〇〇年度重要判例解説』(有斐閣、ジュリスト臨時増刊)などの判例解説なども適宜参照されたい。

改正債権法については以下の文献を挙げておく。

潮見佳男『基本講義債権各論Ⅰ〔第3版〕』(新世社、2017年)

◆成績評価方法

科目試験による。

親族法

1 単位

J104-1391

市販書採用科目

◆テキスト

高橋＝床谷＝棚村『民法7 親族・相続(第5版)』有斐閣、2017年

◆講義要綱

民法・親族編を対象としています。法が家族に関してどのような規律を行っているのか、法の基本的考え方を踏まえて理解しましょう。まず、夫婦とは何か、婚姻の成立及び効果を学び、次に婚姻の解消＝離婚の手続及び効果について理解します。第2に、親子関係について、法的親子(実親子、養親子)関係の発生や、親権制度について理解します。最後に、それ以外の親族関係について生じる扶養や後見制度について学習します。

◆テキストの読み方

参考文献①を熟読することにより、テキストの概説の理解を補ってください。

最近の判例の動向は②を参照してください。

◆履修上の注意

「民法総論」を履修済みであること。

◆関連科目

「相続法」

◆参考文献

①犬伏＝石井＝常岡＝松尾『親族・相続法（第2版）』弘文堂、2016年

②水野紀子ほか『民法判例百選Ⅲ（第2版）』有斐閣、2018年

◆レポート作成上の注意点

基礎知識をふまえて論点を整理すること。教科書・参考書の丸写しはしないこと。参考文献①は基本的な親族法の考え方を丁寧に解説したもので、必読である。

◆成績評価方法

科目試験による。

相続法

1単位

J108-1691

市販書採用科目

◆テキスト

高橋＝床谷＝棚村『民法7 親族・相続（第5版）』有斐閣、2017年

◆講義要綱

民法・相続編を対象とします。ある人が死亡し、権利能力を失った結果、その者（被相続人）の財産について生じる権利義務の承継に関してどのようなルールが定められているかを理解します。法定相続のルール、遺言事項にかかわるルールを理解し、法定相続人の地位、相続人間の平等、遺言制度の意義について理解します。

なお、2018年7月13日法律第72号により相続法が改正されました（2019年版六法にはすでに改正後の条文も掲載されております）。しかし、相続法（民法相続編）改正の施行日は3段階に分かれており、主たる改正部分は2019年7月1日から施行となりますが、相続法改正全体が施行の運びとなるのは2020年4月1日となります。そこで、2019年度の履修におきましては、改正前の民法相続編の内容を中心に、レポート課題・定期試験の出題を致します。

ただし、改正後の相続法についても履修を進めて頂く事は、今後の相続法の理解にとって重要となる事は言うまでもありません。

◆テキストの読み方

全体像の把握に努め、理解できない部分は、参考文献で必ず確認し、理解を深めること。条文を理解すること。

◆履修上の注意

民法一財産法及び親族法の知識が不可欠です。これらの分野について理解していることが必要です。

◆関連科目

「親族法」

◆参考文献

①犬伏＝石井＝常岡＝松尾『親族・相続法（第2版）』弘文堂、2016年

②水野紀子ほか『民法判例百選Ⅲ（第2版）』有斐閣、2018年

◆レポート作成上の注意点

基礎知識をふまえて論点を整理すること。教科書・参考書の丸写しはしないこと。参考文献①は相続法に関する基本的考え方について詳細な説明があり、必読である。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・会社法(J)

4単位

J120-1991

市販書採用科目

◆テキスト

山本爲三郎『会社法の考え方（第10版）』八千代出版、2017年

※テキストは、最新版の使用が望ましい。やむをえず古い版を使用する場合には、少なくとも平成26年会社法改正を反映した版を使用すること。

◆講義要綱

会社の経営者、従業員、会社と取引する相手方、株主などにとって、会社がどのような法制度によって規制され、どのように行動するべきかを正しく理解することは、大変重要である。

平成17年に制定された会社法は、平成26年に改正を受け、改正法は平成27年5月から施行された。これにより、平成26年改正前に用いられていた委員会設置会社の名称が指名委員会等設置会社に変更されたほか、コーポレート・ガバナンスの改善のため、監査等委員会設置会社の新設、社外役員の要件の見直し、公開会社における支配権移動を伴う募集株式発行等についての特別規制、親子会社の法規制の見直しのため、多重株主代表訴訟（特定責任追及訴訟）の導入、特別支配株主による株式等売渡制度の新設、企業再編行為の差止請求権の許容、許害的会社分割が行われた場合の債権者保護規制の整備など、多くの点で改正がされた。さらに、平成29年民法改正に伴い、会社法も一部改正があったほか、会社法の解釈にも影響があった。テキストは、平成29年民法改正をも踏まえて改訂されたものである。

◆テキストの読み方

会社法全体に対して理解できるようになるためには、時間と根気が必要である。細部にこだわるよりも、まず、テキスト全体を通読して全体像を把握する、あるいは、株式・機関の辺りを熟読してそれを理解したのちに、他の部分を読むなど、工夫して学習を進めてほしい。なお、科目試験範囲はテキスト第26章株式会社の資金調達までとする。

◆関連科目

商法総則・商行為法、手形法、保険法

◆参考文献

田中亘『会社法（第2版）』東京大学出版会、2018年
江頭憲治郎『株式会社法（第7版）』有斐閣、2017年
鈴木千佳子『入門講義会社法（第2版）』慶應義塾大学出版会、2017年

宮島司『新会社法エッセンス（第4版補正版）』弘文堂、2015年

◆レポート作成上の注意点

テキストを丸写しすることなく、他にも参考書を読

むなどして、問題点を多角的に分析し、再構成することを心がけてほしい。また、会社に関する法制度は頻繁に改正を受けているため、参考文献を用いる際は、どの時点で執筆された文献かをよく見極め、常に最新の規定との整合性を検討しなくてはならない。

◆成績評価方法

科目試験による。

商法総則・商行為法

2 単位

J080-0792

市販書採用科目

◆テキスト

落合誠一・大塚龍児・山下友信『商法 I ―総則・商行為〔第 6 版〕』有斐閣、2019 年。

※これまで第 3 版（2006 年）以降の版を利用してきた者は、引き続きこれらを利用しても構わないが、当該科目で学習する商法の内容は、段階的に改正されていくため、どのように学習するべきかについては、以下の講義要綱をよく読んで、注意事項を順守してほしい。

◆講義要綱

商法とは企業に関する法である。商法は、企業と企業取引に関する特別な規定を置いており、これらの規定を理解することは、私法の一般法である民法の理解をさらに深めることに役立ち、また、この他の企業法の分野に属する会社法や手形法・小切手法、保険法、海商法などを学ぶ橋渡しともなるであろう。

平成 29 年 5 月に民法改正法が成立したのと同時に、その民法改正による商法その他の関係法律の整備を行うために「民法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」が成立して、これらは平成 32 年 4 月 1 日から施行されることとなり、また、平成 30 年 5 月には「商法および国際海上物品法の一部を改正する法律」が成立し、平成 31 年 4 月 1 日から施行される。これによって、商法総則・商行為法の内容は大きく変容することとなる。

本年度採用するテキストに関しては、改正法を踏まえて全面的に改訂されたものであるため問題はないが、引き続き最新版以外のテキストを利用する者も、改正内容を踏まえての学習をすることが将来有用となるため、図書館などで第 6 版の内容を確認し、参考書などを通じて改正法についても勉強してほしい。しかし、本年度はこのような移行期にあたるため、1 年限りの優遇措置として、レポート・定期試験では、改正前商法を前提とした定期試験・レポートの作成を認める（この場合は、レポート・答案の最初に、「優遇措置適用」の旨を明らかにすること）。

◆テキストの読み方

わからない部分はそのままにしないで、ゆっくり内容を確認しながら読むとよいであろう。特に、商人と商行為の概念ならびにこれらの相互の関係は重要なので、かならず理解するようにしてほしい。なお、テキストの第 3 編の 9 章保険取引は、当該科目のレポート、科目試験の出題範囲から除くものとする。

◆履修上の注意

民法総則は履修済であること。他の民法の科目（債権総論、債権各論など）についても履修していること

が望ましい。

◆関連科目

民法関連科目全般、会社法、手形法、保険法・海商法。

◆参考文献

北居功＝高田晴仁編著『民法とつながる商法総則・商行為法（第 2 版）』商事法務、2018 年（民法・商法改正の内容を踏まえて改訂済）

弥永真生『リーガルマインド商法総則・商行為法（第 3 版）』有斐閣、2019 年 3 月下旬刊行予定（民法・商法改正の内容を踏まえて改訂済み）

◆レポート作成上の注意点

テキストを丸写しせずに、問題点を検討し、自らの力で問題点を書き表すように努力して欲しい。

◆成績評価方法

科目試験による。

保険法・海商法

3 単位

J086-0892

市販書採用科目

◆テキスト

山野嘉朗編著『現代保険・海商法 30 講〔第 9 版〕』中央経済社、2013 年

◆講義要綱

〔保険法〕

人は常にいろいろな危険（偶然な事故により経済的損失を被る可能性）に対峙しているので、多くの人は保険に加入しています。保険とは、同種の危険にさらされている者が集団（保険団体）を形成した上で、各人がその危険率に応じた資金（保険料）を拠出することにより共同的備蓄（保険基金）を形成し、特定の者に一定の事故（保険事故）が発生した場合に、その者が保険基金から所定の金額（保険金）の支払いを受ける制度です。保険法はこのような保険の法的構造を理解することを目的とした科目です——保険商品の紹介や比較を行うわけではありません。近時の商事判例の中では保険契約に関する裁判例が多く、また、企業再編の流れの中で保険相互会社の株式会社への組織変更が急速に進みました。さらに、規制緩和は、金融業の中の保険業、金融商品としての保険という位置づけを求めるでしょう。ますます重要性が増大する保険法ですが、前提知識を欠くと理解が困難です。民法（財産法：民法総則、債権総論、債権各論）および会社法の基礎を理解した上での履修を薦めます。なお、「保険法」は平成 20 年に制定された比較的新しい法律です（保険法施行前は、実質的意義における保険法は商法典中の商行為編の保険の章で規定されていました）。また、平成 26 年には会社法が、平成 29 年には民法が大きく改正されています。以上に注意してください。

〔海商法〕

海商法（海上企業法）は、①海上企業の組織、②海上企業の活動、および③海上損害に関する規定から構成されます。①は人的組織として企業主体（船舶の所有者、賃借人、共有者）と企業補助者（船員）、物的組織として船舶、そして船舶金融（船舶債権者）、②は海上の、つまり船舶による物品運送と旅客運送、③は航海に伴う危険は特殊性が強いので、その損害に関

して、積極的対策（共同海損、海難救助）と消極的対策（船舶衝突、海上保険）、これらをそれぞれ対象としています。海商法は古い時代から発達してきており、いわば商法の起源ともいえる領域ですが、特殊性を有するので、民法（財産法：民法総則、物権法、債権法）、商法（商法総則、商行為法）、および有価証券法（海商法には船荷証券をめぐる諸問題があります）の基礎を理解した上での履修を薦めます。なお、海商法（商法の一部および国際海上物品運送法）は平成30年に改正されています。注意して下さい。

◆関連科目

上記講義要綱参照。

◆参考文献

〔保険法〕

山下典孝編『スタンダード商法Ⅲ保険法』（法律文化社、2019年）

山下友信『保険法(上)』（有斐閣、2018年）

甘利公人＝福田弥夫『ポイントレクチャー保険法〔第2版〕』（有斐閣、2017年）

岡田豊基『現代保険法〔第2版〕』（中央経済社、2017年）

山下友信＝竹濱修＝洲崎博史＝山本哲生『有斐閣アルマ保険法・第3版補訂版』（有斐閣、2015年）

細田浩史『保険業法』（弘文堂、2018年）

山下友信＝永沢徹編『論点体系保険法1・2』（第一法規、2014年）

山下友信＝洲崎博史編『保険法判例百選』（有斐閣、2010年）

甘利公人＝山本哲生編『保険法の論点と展望』（商事法務、2009年）

〔海商法〕

箱井崇史『現代海商法〔第3版〕』（成文堂、2018年）

中村眞澄＝箱井崇史『海商法・第2版』（成文堂、2013年）

重田晴生＝中元啓司＝志津田一彦＝伊藤敦司『海商法』（青林書院、1994年）

落合誠一＝江頭憲治郎編集代表『海法大系』（商事法務、2003年）

◆レポート作成上の注意点

複数の文献を読み、参考にした文献を明示してください。

丸写しレポートに対しては、課題を理解していないと判断します。引用部分には、例えば、（甘利公人＝福田弥夫『ポイントレクチャー保険法〔第2版〕』★頁）のように引用元文献を括弧書きしてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

手形法

2単位

J063-9892

市販書採用科目

◆テキスト

宮島司『やさしい手形法・小切手法〔第2版〕』法学書院、2003年

◆講義要綱

権利の行使や移転を合理化する有価証券は企業社会において広範に利用されています。特に、典型的な有

価証券である手形および小切手は企業（特に製造業）の経済生活において重要な地位を占めてきました。現在では、支払決済手段の多様化に伴い、手形・小切手の利用は減少していますが、その仕組みや理論は他の支払決済制度に大きな影響を与えています。手形法・小切手法の知識は応用範囲が広いわけです。ただし、高度な技術的性質が強いので、その勉強によって論理的な面白さを感じるとは思いますが、前提知識を要します。そこで、民法（財産法：民法総則、債権総論、債権各論）、商法（商法総則、商行為法）、および会社法の基礎を理解した上での履修を薦めます。なお、平成29年に民法が改正され、同法第3編第1章第7節に有価証券の通則的規定が定められました。注意して下さい。

◆関連科目

上記講義要綱参照。

◆参考文献

大塚龍児＝林靖＝福瀧博之『有斐閣Sシリーズ商法Ⅲ—手形・小切手〔第5版〕』（有斐閣、2018年）

弥永真生『リーガルマインド手形法・小切手法〔第3版〕』（有斐閣、2018年）

川村正幸『手形・小切手法 第4版』（新世社、2018年）

小塚莊一郎＝森田果『支払決済法〔第3版〕』（商事法務、2018年）

神田秀樹＝神作裕之編『手形小切手判例百選〔第7版〕』（有斐閣、2014年）

三枝一雄＝坂口光男＝南保勝美編『論点整理手形・小切手法』（法律文化社、2003年）

◆レポート作成上の注意点

複数の文献を読み、参考にした文献を明示してください。

丸写しレポートに対しては、課題を理解していないと判断します。引用部分には、例えば、（神田秀樹＝神作裕之編『手形小切手判例百選〔第7版〕』★頁（宮島司））のように引用元文献を括弧書きしてください（上記の例では、★頁を執筆しているのが宮島司先生）。

◆成績評価方法

科目試験による。

刑事政策学

2単位

J085-0891

市販書採用科目

◆テキスト

守山正・安部哲夫編著『ビギナーズ刑事政策〔第3版〕』成文堂、2017年

◆講義要綱

本科目は、刑事政策における基本的な諸論点について学習するものです。刑事政策の概念や歴史といった理念を学ぶ部分から始まり、刑罰論（総論的部分及び死刑・自由刑・財産刑といった各刑罰について）、犯罪者処遇論（総論的部分と施設内処遇、社会内処遇について）へと進めてもらいます。また、被害者学に関する諸問題についても学びます。最後に、各論的問題として、薬物犯罪・性犯罪・家庭内犯罪・少年犯罪などの個別犯罪についてその対策を学ぶということにな

ります。

本科目は、単に刑事政策に関する制度を覚えるということを目的とはしていません。現代社会に生起するさまざまな犯罪に対する法的対応の検討を通じて、政策論的手法と思考能力を養っていただきたいと考えています。

指定教科書の構成は次の通りです。

- 第1講 刑事政策の概念
- 第2講 刑事政策の歴史
- 第3講 刑事政策の動向
- 第4講 犯罪予防
- 第5講 刑事制裁（刑罰と処分）
- 第6講 刑事司法・少年司法機関の役割
- 第7講 犯罪被害者の支援と法的地位
- 第8講 死刑
- 第9講 自由刑
- 第10講 財産刑
- 第11講 保安処分をめぐる問題
- 第12講 犯罪者の処遇
- 第13講 施設内処遇
- 第14講 社会内処遇
- 第15講 わが国の犯罪情勢
- 第16講 個別犯罪と対策

◆履修上の注意

刑事政策は、刑法、刑事訴訟法など刑事法の知識が前提となる学問領域です。したがってこれら関連分野への基本的知識を有していることが望ましいです。

◆関連科目

刑事政策を学ぶにあたっては、刑法、刑事訴訟法の知識が必要となります。したがって、法学部専門科目では、刑法総論、刑法各論、刑事訴訟法などを併せて履修することが望ましいです。

◆参考文献

被害者が創る条例研究会『すべてのまちに被害者条例を』（2017）

警察庁『犯罪被害者白書』（<https://www.npa.go.jp/hanzaihigai/kohyo/whitepaper/whitepaper.html>）

警察庁「地方公共団体における犯罪被害者等施策に関する基礎資料」（<https://www.npa.go.jp/hanzaihigai/local/toukei/toukei.html>）

太田達也「地方公共団体による被害者支援の意義と課題：犯罪被害者支援条例の分析を中心として」法学新報112巻1・2号（2005）759-792頁

太田達也「被害者の自立支援——地方自治体の取組みと課題」被害者学研究19号（2009）119-129頁

◆レポート作成上の注意点

テキストや参考文献の内容をまとめるだけではなく、そこにどのような問題があり、それに対してあなたがどのように考えるのかを参考文献を根拠として引用し、論じることが重要です。また、あなたと異なる見解がある場合には、その見解を無視して論じてはいけません。あなたがなぜその見解をとらないのかということも含めて論じる必要があります。

その他レポート作成上の一般的な注意事項は、塾生ガイドにしっかりと従ってください。不正行為や論文の盗用があった場合には、成績評価がつかないだけでなく処分の対象となりますので、くれぐれも注意して

ください。

◆成績評価方法

科目試験による。

刑法各論

4単位

J072-0291

市販書採用科目

◆テキスト

井田良＝佐藤拓磨『新・論点講義シリーズ2 刑法各論〔第3版〕』弘文堂、2017年

※第2版を購入済みであっても、図書館などで第3版の内容を確認しておくことを強く勧める。

◆講義要綱

刑法各論では、刑法典「第2章 罪」に列挙されている個々の犯罪の成立要件をめぐる議論について学びます。判例を参照しつつ、自らの力で事例問題を解決する力を身に着けることを目的とします。

- 第1章 イントロダクション
- 第2章 刑法における生命の保護
- 第3章 身体に対する罪
- 第4章 生命・身体に対する危険犯
- 第5章 自由に対する罪
- 第6章 個人の私的領域を侵す罪
- 第7章 社会的存在としての人の保護
- 第8章 財産の刑法的保護
- 第9章 窃盗罪と器物損壊罪
- 第10章 強盗罪
- 第11章 詐欺罪と恐喝罪
- 第12章 横領罪と背任罪
- 第13章 盗品等に関する罪
- 第14章 公共危険罪
- 第15章 文書偽造罪
- 第16章 その他の偽造罪
- 第17章 風俗に対する罪（風俗犯）
- 第18章 公務執行妨害
- 第19章 司法手続の保護
- 第20章 職権濫用の罪
- 第21章 賄賂の罪

◆テキストの読み方

各論上の論点を理解する上で、刑法総論や民法の知識が不可欠になることがあります。そのような場合、億劫がらずにそれらの科目のテキストを見返して知識を確認してください。テキストが難しいと感じたら、参考文献欄に掲げた入門書を読んでください。

◆履修上の注意

各論では、総論とは対照的に、条文の文言をめぐる精緻な解釈論が展開されます。したがって、学習の際には常に六法を手元に置き、条文のどの文言に関する議論を学んでいるのかを常に確認してください。また、総論と比較して議論が具体的であるため、判例学習の重要性が増します。判例教材を活用しながら学習を進めてください。

◆関連科目

刑法総論、刑事訴訟法、刑事政策学

◆参考文献

井田良『入門刑法学・各論』（有斐閣、第2版、2018年）

成瀬幸典・安田拓人・島田聡一郎編『判例プラクティス刑法Ⅱ 各論』（信山社、2012年）

◆レポート作成上の注意点

事例問題を解くにあたっては、まず課題のストーリーを読み、六法をめくりながら、刑法典の条文に該当しそうな事実を抽出しなくてはなりません。これにより、何罪の成否が問題となるかを明らかにします。

次に、その罪の成否との関係でどのような法的論点が生じるのかを示します。課題には、複数の論点が隠れています。

続いて、論点ごとに判例・学説を調査してその内容を要約し、それらのうちのどの考え方を支持するかを提示します。その際、当然、論拠を示すことが必要になります。

最後に、自分の見解を課題の事例にあてはめ、何罪が成立するのかを明らかにします（まったく犯罪が成立しないケースもあるかもしれません）。

以上のことを簡単にまとめると以下ようになります。

第1のステップ：事実の抽出

第2のステップ：問題提起

第3のステップ：既存の判例・学説の要約

第4のステップ：私見の提示・あてはめ

（以上の作業を論点ごとに行い、最終結論を出す）

なお、刑法のレポート作成の際の文章作法については、井田良ほか『法を学ぶ人のための文章作法』（有斐閣、2016年）187頁以下が参考になります。

◆成績評価方法

科目試験による。

民事訴訟法

4単位

J065-9892

市販書採用科目

◆テキスト

池田辰夫編『新現代民事訴訟法入門』 法律文化社、2005年

◆講義要綱

民事訴訟は、広い意味では、民事紛争（私人間の生活に関する紛争）を解決するための手続を指します。けれども、普通、民事訴訟とは、「判決」という慎重な形式の裁判によって、権利の存否を確定することにより、民事紛争を解決する手続のことで、「判決手続」ともいいます。この科目は、判決手続を対象とするものです。そのなかでも、とくに第一審の手続（訴えから第一審判決に至るまでの手続）を中心に扱います。

◆テキストの読み方

現在のテキストは、やや古く、刊行後の法改正を織り込んでいないため、近い将来に変更することを予定しています。なお、現在のテキストについては、実質的な改訂版として、池田辰夫編『アクチュアル民事訴訟法』（法律文化社、2012年）があります。

現在のテキストを読む場合には、条文や参考文献にあたる等して、近年の法改正に十分に注意を払うことが必要です。

◆履修上の注意

民法総論・物権法・債権総論・債権各論・会社法などの民法・商法の基本科目について学習していること

が望まれます。

◆関連科目

破産法（破産法を履修する場合は、民事訴訟法について学習を終えていることが必要でしょう）

◆参考文献

(1) 体系書

三木浩一ほか『民事訴訟法（第3版）』（リーガルクエスト）（有斐閣、2018年）

伊藤眞『民事訴訟法（第6版）』（有斐閣、2018年）

新堂幸司『新民事訴訟法（第5版）』（弘文堂、2011年）

高橋宏志『重点講義民事訴訟法（第2版補訂版）（上）（下）』（有斐閣、（上）（下）2014年）

松本博之＝上野泰男『民事訴訟法（第8版）』（弘文堂、2015年）

(2) 判例

伊藤眞ほか編『民事訴訟法判例百選（第5版）』（有斐閣、2015年）

(3) コンメンタール（注釈書）

兼子一原著松浦馨ほか著『条解民事訴訟法（第2版）』（有斐閣、2011年）

菊井維大＝村松俊夫原著・秋山幹男ほか著『コンメンタール民事訴訟法Ⅰ～Ⅶ』（巻により版が異なる）（日本評論社、2006年～）

高田裕成ほか編『注釈民事訴訟法』（有斐閣、2015年～刊行中）

加藤新太郎＝松下淳一編『新基本法コンメンタール民事訴訟法Ⅰ・Ⅱ』（日本評論社、2017年～2018年）

◆レポート作成上の注意点

民事訴訟法の第一審手続の全般を理解した上で、レポートに取り組むようにしましょう。課題は、基本的な問題です。しかし、問題点を正確に把握して、論じるようにしてください。参考文献も必ず表記するようにしてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

破産法

2単位

J077-0591

市販書採用科目

◆テキスト

加藤哲夫『破産法』（弘文堂、第6版、2012年）

※第5版（2009年）で学習を進めても構いません。

◆講義要綱

倒産法は、倒産状態にある債務者につき、総債権者の公平を確保しつつ、債務者の財産の清算または債務者の再建・再生を図る手続を規律する。「倒産法」という法典はわが国には存在せず、倒産手続を規定する代表的な法律としては破産法、民事再生法、会社更生法および会社法第2編第9章第2節（特別清算）がある。中でも破産法は、債務者の事業を終了させた上で、総財産を換価し債権者に平等に分配する「清算型」の手続であり、対象とする債務者の資格に制限はない。破産法以外の3法は、多少の差はあれ破産法を基礎としているため、倒産法全体を理解するには、まずは破産法からということになる。指定教科書の構成（抜

料)は次の通りである。

- 序章 社会現象としての「倒産」と法制度の対応
- 第1章 破産者
- 第2章 破産裁判所
- 第3章 破産手続上の機関
- 第4章 破産手続開始の原因と破産手続開始の申立て
- 第5章 破産手続開始の決定
- 第6章 破産財団と自由財産
- 第7章 破産と利害関係人 (1) 破産債権者
- 第8章 破産と利害関係人 (2) 担保権者
- 第9章 破産と利害関係人 (3) 取戻権者
- 第10章 破産と利害関係人 (4) 相殺権を行使する者
- 第11章 破産と利害関係人 (5) 契約の当事者
- 第12章 破産と利害関係人 (6) 訴訟などの当事者
- 第13章 破産と利害関係人 (7) 財団債権者
- 第14章 破産と利害関係人 (8) 全部義務を負う者と債権者
- 第15章 破産財団の維持と増殖—否認権
- 第16章 破産財団の換価と配当
- 第17章 破産手続の終了
- 第18章 破産者の更生を助ける制度—免責・復権

◆テキストの読み方

破産手続は、裁判所、破産管財人、破産債権者など様々な主体の行為が積み重なって進行する。そこで、学習の初期の段階では細部に拘泥せず、手続の基本構造や、手続開始から終結までの大まかな流れを把握することが推奨される(下記の参考文献で「入門書」として紹介されている文献を通読してもよい)。その上で、個別の制度や議論が手続のどの段階で問題になるのかを意識しながら、必要に応じて参考文献も併用しさらに深く読み込むのが効率的である。

また、「履修上の注意」でも述べているとおり、倒産法は、民法、民事訴訟法、民事執行法のいわば応用編であり、必要に応じこれらの復習も厭うべきではない。

◆履修上の注意

民法(財産法)および民事訴訟法を履修済みであることが望ましい。民事執行法は科目として設けられていないが、その基本的知識を有する方が破産法の理解が容易になる。

◆関連科目

民法、民事訴訟法、会社法、商法総則・商行為法、手形法

◆参考文献

- (1) 入門書
- 山本和彦『倒産処理法入門』(有斐閣、第5版、2018年)
- 中島弘雅=佐藤鉄男『現代倒産手続法』(有斐閣、2013年)
- 徳田和幸『プレッブ破産法』(弘文堂、第7版、2019年)
- 倉部真由美=高田賢治=上江洲純子『倒産法』(有斐閣、2018年)
- 小原将照=濱田芳貴=工藤敏隆『事例で学ぶ倒産法』(法律文化社、2013年)
- (2) 体系書

山本克己ほか『破産法・民事再生法概論』(商事法務、第2版、2012年)

伊藤眞『破産法・民事再生法』(有斐閣、第4版、2018年)

山本和彦ほか『倒産法概説』(弘文堂、第2版補訂版、2015年)

三上威彦『倒産法』(信山社、2017年)

(3) 判例集

伊藤眞=松下淳一編『倒産判例百選』(有斐閣、第5版、2013年)

瀬戸英雄=山本和彦編『倒産判例インデックス』(商事法務、第3版、2014年)

(4) コメントール

山本克己=小久保孝雄編『新基本法コメントール破産法』(日本評論社、2014年)

伊藤眞ほか『条解破産法』(弘文堂、第2版、2014年)

◆レポート作成上の注意点

事例問題では、①事案の分析・論点の抽出、②判例・裁判例や学説の議論の紹介、③自説の論証、④事案へのあてはめの順序で論じるのが定石である。一般的傾向として①や④がおろそかになり易く、時に事例に直接関係しない基本原則や制度を長々と論じる例が見受けられるので注意されたい。また、「判例」や「通説」はあくまで一つの考え方であり、直ちに「正解」となるものではない。それらを自説とすることは構わないが、対立する見解からの批判を克服する論証を③において行う必要がある。

なお、参考文献に、司法試験予備校のテキストや、一般向けの安価なマニュアル本の類を用いるのは適切ではない。

◆成績評価方法

科目試験による。

刑事訴訟法

4単位

J107-1502

◆テキスト

この科目は2017年4月に改訂されました。今年度から学習を開始する場合には、改訂後の新しいテキストによって履修することを勧めます。改訂されたテキストの入手方法は、『塾生ガイド』を参照してください。

◆講義要綱

刑事訴訟法では、捜査から判決までの一連の手続きの流れを学ぶとともに、事実認定の資料となる証拠法に関しても学びます。刑事訴訟法では、ある「犯罪」という出来事について、捜査、公訴、公判・証拠、裁判と様々な場面で論点が密接な関連をもっていますので、ある局面だけで考えるのではなく、例えば、捜査段階での違法が認められる場合、公訴提起できるのか、公判ではどのような争点が生じるのか、証拠法では何が争点となるのか、結果的に有罪判決を言い渡せるのか、を検討する必要があります。

なお、テキストの目次を参照して、どのような論点があるのかをつかんでください。

◆テキストの読み方

テキストでは多くの判例をとりあげています。刑事訴訟法の理論が実際に判例でどのようにあてはめられているのかを学んでください。なお、テキストを読むときには必ず該当条文を参照してください。

◆履修上の注意

刑事訴訟法を履修するにあたって、「法学」の基礎知識と「刑法」についても勉強しておいてください。

◆関連科目

憲法・刑法

◆参考文献

安富潔『刑事訴訟法〔第2版〕』三省堂、2013年
亀井源太郎『ロースクール演習刑事訴訟法〔第2版〕』法学書院、2014年

亀井源太郎ほか『プロセス講義刑事訴訟法』信山社、2016年
井上正仁ほか編『刑事訴訟法判例百選〔第10版〕』有斐閣、2017年

◆レポート作成上の注意点

1. 法学では、正確な概念の理解が不可欠です。しっかりテキストを読んでからレポートを書いてください。
2. 課題では何が論点なのかよく考えてください。
3. きちんと条文を参照しながら文章を作成してください。なお、法律改正に留意して最新の『六法』を用意してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

国際私法

2単位

J097-1191

市販書採用科目

◆テキスト

櫻田嘉章『国際私法〔第6版〕』有斐閣（有斐閣Sシリーズ）、2012年

※第5版（2006年）を用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

国際私法とは、渉外的な私法関係（外国的な要素を何らかの形で含んでいる民商法に関連する事実関係）に、適用すべき法を指定する規則のことです。

例えば、「婚姻の身分的な効力」、「不法行為債権の成立」、「物権変動」など予め典型的に分類された法律関係（単位法律関係）ごとに、もっとも密接に関連する事項（連結点）を定めておき、この事項が存在する国の法が指定されます。

具体的には、A国航空会社の飛行機が、B国内で墜落し乗客が死亡した場合には、「不法行為の成立」が単位法律関係とされますが、この連結点は「結果発生地」と定められていますから、B国の民法が指定されることになります。このB国の民法を、準拠法（準拠実質法）といいます。

学習は、予め分類されている単位法律関係ごとに、その連結点と準拠法を確認してゆくという作業によって行います。加えて、その分類の妥当性、連結点の設定の仕方の妥当性（制定法の正当性）をも、検討する必要があります。

◆テキストの読み方

財産関係については、参考文献も参照すること。

◆履修上の注意

国際私法は、民法、商法、民事訴訟法の基礎知識があることが前提とされています。不安のある方は、少なくとも「民法総論」の教科書を復習しておく必要があると思います。

◆関連科目

民法、商法、民事訴訟法など

◆参考文献

澤木敬郎・道垣内正人著『国際私法入門〔第8版〕』有斐閣（有斐閣双書）2018年
横山潤著『国際私法』三省堂、2012年

◆レポート作成上の注意点

国際私法の基本的な法源である「法例」は、2006年12月31日をもって廃止され、翌2007年1月1日からは、名称が変更されて、「法の適用に関する通則法」として施行されました。財産関係を中心に大きな改正がなされたため、古い教科書では、内容上対応できません。したがって、前掲の参考文献を必ず使用してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

労働法(J)

2単位

J092-1091

市販書採用科目

◆テキスト

神尾真知子・増田幸弘・内藤恵『フロンティア労働法〔第2版〕』法律文化社、2014年

なお、指定テキストは2019年4月に第3版を刊行予定です。学習にあたっては、第2版、第3版いずれを使用しても構いません。

◆講義要綱

労働法とは、賃金を得て生活する者（労働者）と使用者との関係を規律する様々な法律の総称です。大別すると、以下の4つの領域として理解されます。

①、雇用関係に入る際の求人と求職に関わる法制度と政策を学ぶ、労働市場法。その中心的なテーマは、求職・求人に関する行政的支援・職業能力開発・雇用安定等で、昨今問題とされることの多い労働者派遣などもこの中で学びます。②、労働契約締結からその終了に至るまでの法律問題を考察するのが、個別的労働関係法です。ここでは、労働者と使用者の二者間の契約に基づく様々な労働条件、およびその変更が中心的テーマとなります。③、労働者・使用者に加えて労働組合という第3の主体が加わり、憲法28条の労働基本権を三者の間で具体化する領域が、集团的労使関係法です。労働組合・団体交渉・労働協約・争議行為、等を議論します。④、最後に現代社会では、労使間の紛争をいかに処理するかも重要な課題です。このような労働紛争の解決にかかる様々な法制度にも目を配る必要があります。

テキストは、現代的視点も含め、以上の領域全てを学べるようになっています。

◆テキストの読み方

伝統的な労働法の論点は、上記の②と③の領域にあ

ります。②は、民法の雇用契約を発展させた領域ですが、現在では労働契約法も施行され、労働法独自の体系が整ってきています。③の領域は、憲法第28条の趣旨を如何に具現化するかを重視しております。但し興味深い論点のいくつかは、個別法と集団法の2つの法理が交錯する部分に生じます。

また労働法学は、現実社会の紛争から切り離すことの出来ない領域です。労働法学の学習には、総合的かつ体系的な理論を学習することに加えて、具体的な裁判例を学ぶことが必須です。学習に際しては労働法判例百選なども利用し、当該テーマにかかる学説が、具体的にはどのような事案として生じているかを学んで下さい。

最後に労働法学は、研究者のスタンスが分かれやすい領域でもあります。1冊のテキストに偏ることなく、複数の参考書を読み、相互に比較検討することをお願いします。かつまた現代社会では雇用の流動化が進み、労働市場にも目を配る必要があります。

◆履修上の注意

法律学を学ぶ際には、まず一般法の知識を得た上で、特別法による修正法理を学ぶ方が効果的です。労働法を学習するには、まず憲法、民法総則、債権各論を学習した後に履修することをお願いします。労働法学は法解釈学であり、労働関係を対象としております。社会政策学や労働経済学の隣接領域ですが、それらを主として学ぶわけではありません。あくまでも法律学の1科目です。

◆関連科目・分野

上述したように法律学としての労働法は、憲法、民法総則、債権各論を基礎としています。

さらに社会保障法とは、相互補完的な関係にあります。他学部の科目としては、社会政策学や労働経済学とも関連します。

◆参考文献

注意：労働法は改正が頻繁に行われる領域です。参考文献は、常に最新版を使用して下さい。(下記には、当該シラバス原稿作成時における情報を入れておきます。)

まず最初にテキストを用いて、当該テーマの全体像をつかみます。次にテーマに関連する専門書、あるいは法律専門誌や大学紀要に掲載されている専門的論文、さらには裁判例の原本に当たって考察を深めて下さい。

- 1) 指定テキストの他に、入手し易い初学者向けの参考書として、
 - ・中窪・野田『労働法の世界』(第12版)有斐閣、2017年
 - ・安枝・西村『労働法』(第12版)有斐閣プリマ・シリーズ、2014年
- 2) 裁判例の概略を学ぶために
 - ・別冊ジュリスト・労働判例百選(第9版)有斐閣、2016年
 - ・唐津博・和田肇・矢野昌浩編『新版・労働法重要判例を読む1 総論・労働組合法関係』、『同・2 労働基準法・労働契約法関係』日本評論社、2013年
- 3) さらに専門的に学ぶための概説書
 - ・菅野和夫『労働法』(第11版補正版)弘文堂、2017年

・荒木尚志『労働法』(第3版)有斐閣、2016年

◆レポート作成上の注意点

レポートを作成する前に、まずテキストを通読して下さい。次にレポートの構成を考える際には、当該テーマに関する専門書・専門論文・判例等を収集し、読み比べ、論点を整理した上で取り組んで下さい。レポートの末尾に必ず参考文献一覧を明記すること。

時に、単なるテキストの要約を提出する学生がいます。これは評価できないのでご注意ください。なお他の文献から直接引用する場合には、必ずその出典を明示して下さい。その際は、文献や判例の引用方法を確認すること。インターネットの情報を引用する場合には、作成者が明らかにされているもののみを補助的に用い、URLに加えて当該HPの作成者とそのHPの名称を明示して下さい。

◆成績評価方法

科目試験による。

経済法(J)

2単位

J114-1791

市販書採用科目

◆テキスト

土田和博、栗田誠、東條吉純、武田邦宣『条文から学ぶ独占禁止法』有斐閣、2014年

◆講義要綱

本講義は、経済法の中核をなし、その基本的秩序を形成する「独占禁止法」の法構造とその最新の論点を学習することを目的としている。独占禁止法は競争法とも呼ばれており、市場経済の中核をなす法律である。また独占禁止法は、企業法務においても、非常に重要な法分野となっている。カルテル・談合規制のみならず、再販売価格維持行為、優越的地位の濫用規制など日々のビジネスに密接に関係する法規制が多く、きわめて実務に直結した法分野である。他方、経済法(競争法)は、グローバルな色彩が強く、比較法的な視点からの分析が盛んであり、経済法を学ぶことによって、実務の現状を理解することもできる。この経済法に関して、その中核をなす競争法の法原理・法構造の理論的な解説とともに、判例・審決を中心とするケーススタディを通じて、応用可能な知識の習得を目指す。なお適宜、比較法的な観点から米国、欧州そして中国の競争法規制にも言及することがある。

◆テキストの読み方

テキストを読む際には、理論的な説明とともに、事例について出来るだけ原文を参照するなどして、事例から考えることを意識してほしい。事例については、公正取引委員会のホームページで閲覧できる。また図書館で審決集や判例集を調べるという作業も併せて行ってほしい。

◆履修上の注意

履修に際し、他の特定の科目を事前に履修している必要はない。なお経済法は、ミクロ経済学、産業組織論との関連性が深いので、講義において適宜、言及する場合がある。

◆関連科目・分野

経済法・独占禁止法は、取引を扱うため、民法、商法、会社法とも関わりがある。経済活動に対する公的

な規制という観点からすれば、憲法や行政法との関係も深い。他方、各種事業法との関係も深い。また経済法の理論的前提のなかには、ミクロ経済学、産業組織論、最近ではゲーム理論の影響も見られる。このような法学分野以外の隣接領域も関連分野となる。

◆参考文献

『独占禁止法 第3版』白石忠志著 有斐閣 2016年 ISBN: 978-4641144934

『独占禁止法〔第3版〕』菅久修一 商事法務 2018年 ISBN: 978-4785726331

『産業組織とビジネスの経済学 (有斐閣ストゥディア)』花 蘭 誠 著 有斐閣 2018年 ISBN: 978-4641150591

『経済法判例・審決百選 第2版 (別冊 Jurist)』金井 貴 嗣 編集 有斐閣 2017年 ISBN: 978-4641115347

◆レポート作成上の注意点

レポート作成に際しては、次の3点に注意して調査・執筆することを求める。第一に、課題の内容を十分に理解し、課題に対し適切な解答となるレポートを作成する必要がある。この点、レポートのなかには、課題と無関係な記載になっていて不合格となる場合がある。第二に、課題は、教科書を読むだけでは執筆できない。調査が必要であり、参考文献や論文そして判例や審決について十分な調査を行っていないとレポートとして評価対象とならない。第三に、引用のルールの厳守である。教科書や概説書をそのまま引用している場合や、判例の引用なのか、個人の意見なのか、混同している例が多く、疑わしい場合は、評価対象とならないだけでなく、不正なレポートと判断される可能性がある。

◆成績評価方法

科目試験による。

英米法

2単位

J039-7902、J7932

◆講義要綱

この科目の学習目的は、大陸法とは対極にある法体系としての英米法、即ち、コモンロー体系について理解することにある。

何故、大陸法系の法制度を持つ日本の法律を学ぶものが英米法を学ぶか。それは法の本質、法と民主主義、正義のあり方、裁判所の役割等につき、より深く正しく理解し、我が国の法及びそれを取りまく制度につき、批判的に理解するためである。

それゆえ、この科目においてはコモンローの特徴である判例法主義、陪審制、また、連邦制及び、それを形成する基盤たるアメリカ合衆国憲法、マグナカルタ等が、歴史的にどのように出現し、現在、それがどのような制度として確立されているかを知り、理解すべく、学習研究を行わなければならない。

◆履修上の注意

「法学 (憲法を含む)」、「刑法各論」、「憲法」、「債権総論」、「債権各論」、「民法総論」、「商法」、訴訟法1つ (「民事訴訟法」か「刑事訴訟法」か)、「国際私法」、以上の科目を履修済みであることが望ましい。

◆参考文献

『英米法判例百選』(ジュリスト) 有斐閣

『アメリカ法判例百選』(ジュリスト) 有斐閣

伊藤正己・木下毅『アメリカ法入門〔第3版〕』日本評論社、2000年

田中英夫『英米法概説〔再訂版〕』有斐閣、1981年

『英米法』(現代法学全集48) 筑摩書房、1985年

樋口範雄『はじめてのアメリカ法 補訂版』有斐閣、2013年

その他。

◆レポート作成上の注意点

- ・テキストをしっかりと通読すること：異なる法体系について学ぶのだから、その法体系の特徴、性質をしっかりと理解してからレポートに取り組む必要があります。
- ・何が問われているかをよく考えること：論点は何かをしっかりと把握し、それに沿ったレポートの構成を考えて自分の言葉で議論をすすめる必要があります。参考書をつぎはぎにしたような表現はしないこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

政治学(J)

6単位

J022-7201、J7251

◆講義要綱

以下を修得することを目標とする。

1. 政治過程に関する知識

私達の将来を決める政治的決定は、決定を決める決定 (制度、ルール)、様々な状況などから生まれてくる。こうした決定に関わるすべてを政治過程と呼んでもよい。選挙などを通して私たちはこの決定に関わっている。

2. 政治におけるものの見方

民主主義とは何か? どこまで平等を達成すべきなのか? こうした問いに自然科学的意味での「正解」はない。知識を蓄積するだけではなく、それをどう見るかという様々な「ものの見方」について学ぶ必要がある。

3. 理論と現実

理論として合理的であっても、現実がそれに一致しない場合もある。理論から現実を曲げるのではなく、その相違が意味することを考える必要がある。

◆テキストの読み方

意味のわからない語をそのままにせず、辞書やインターネットで調べる習慣をつけられたい。

テキストに書いてあることをその通りに受容するだけが勉強ではない。時にはその意味を疑い、自分で調べ考える必要もある。

◆履修上の注意

すべての学問はそうであるがとりわけ政治学は、幅広い知識とそれを統合する現実的感覚が必要である。日本政治、国際政治はもちろんであるが、社会、歴史、経済、文化等にも目配りが必要である。その上で移り変わる現象だけでなく、不変なもの、普遍なものは何かを見抜く眼を養われたい。

◆関連科目・分野

「憲法」、「法学」、「経済学」、「社会学」、「歴史学」、「心理学」

◆参考文献

堀江湛編『政治学・行政学の基礎知識 第3版』一藝社、2014年

◆レポート作成上の注意点

- ・論文・レポートの書き方には一定のルールがあり、それを踏まえた方が、よりよい文章となる。論としての構成の作り方など基本的事項をまず身に付けられたい。
- ・参考文献は一冊では十分ではないので必ず複数あたること。また事典、辞典の類も概念把握には役立つ。注意して使用すればホームページなども参考になる。
- ・テキストを丸写しすることは、必ずしもよいとは限らない。

◆成績評価方法

科目試験による。

政治哲学

2 単位

J093-1091

市販書採用科目

◆テキスト

デイヴィッド・ミラー『政治哲学（一冊でわかるシリーズ）』岩波書店、2005年

◆講義要綱

今日「国家」と呼ばれているのは、近代国民国家(nation-state)のことであるが、それは西洋世界でもたかだか四～五百年の歴史を持つものにすぎない。それ以前の政治共同体をそもそも「国家」と呼んでいるのかすら怪しいのである。国民国家とは、本来絶対主義が作り上げた領域的権力機構としてのstateを外枠とし、その内容を、人的共同体という古典古代に由来する国家概念の近代版として見いだされたnationという観念によって充たすことによって成立したものに他ならない。この国民国家は、様々な問題にうまく対処できた時期もあったが、地域統合やグローバル化が加速的に進展するなかで、二十世紀には国民国家の没落が語られるようになって久しい。それはその歴史的使命を終えたのだろうか。

また、通常は特定の文明間を横断して語られることのない「正義」は一国内部でドメステックに構想されることが多い。しかし本来的に正義の観念は普遍的なものでなければならないはずである。今日、それは「人権」、すなわち、すべての人間が生まれながらに有している最も基本的な権利を前提にせざるをえないからである。

近代政治の最大の問題点は、本来普遍的なものである人権を個別的な国民国家によって、「国民の権利」として保護してきたことから生じたといっても過言ではない。自国民の生命と財産を保護してくれるはずであった国家が、逆に自国民に牙を向けるという事態が生じたのが二十世紀という「戦争と革命の世紀」だった。

そこでまず、「国民国家」の概念と「正義」の概念、特に「国際正義」の概念を正しく理解するところから議論をはじめ、両者の関係を通時的に考察して欲しい。

概念はひとつの分析道具である。その概念という分析道具をいかに上手く使いこなして自分が説明したい現象を明確に論じられるかがレポートのポイントとなるであろう。

◆テキストの読み方

意味のよくわからない専門用語などはそのつど辞書や事典、ウェブなどで調べてください。分からないまま、勝手な理解で読み進めていては勉強になりません。またテキストに書いてあることをそのまま受け入れ、覚えようとするのではなく、おかしいと思うところは自分でさらに調べ、自分の頭で理解し、自分の言葉で表現する癖をつけてください。

◆履修上の注意

政治学、近代政治思想史、法学、法哲学の基礎知識が必要です。

◆参考文献

デイヴィッド・ミラー『国際正義とは何か——グローバル化とネーションとしての責任』風行社、2011年

デイヴィッド・ミラー『ナショナリティについて』風行社、2007年

マイケル・ウォルツァー『政治的に考える——マイケル・ウォルツァー論集』風行社、2012年

アイリス・マリオン・ヤング『正義への責任』岩波書店、2014年

押村高『国際正義の論理』講談社現代新書、2008年

井上達夫『世界正義論』筑摩選書、2012年

西川長夫『〔増補〕国境の越え方』平凡社ライブラリー、2001年

◆レポート作成上の注意点

講義要綱に示したように、様々な「概念」は分析道具であり、実際にその道具をつかってどれだけうまく現実が説明できるかが重要である。そのためにはテキストはもちろんのこと、いくつか挙げておいた参考文献に可能な限り多く目を通し、自分なりに既存の「概念」を正しく理解して（あるいは必要ならば作り直しを行い）、このテーマに関してどのようなことが問題とされ、どのような議論がなされているのかをまず把握して欲しい。その上で、自分の考えを自分の言葉で表現するよう努めること。コピー＆ペーストなど論外であるが、「写経」に近いようなレポートも評価しない。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本政治史Ⅰ—古代—

2 単位

J034-7702、J7740

◆講義要綱

古代日本の国家形成・発展について、王権と大豪族の観点から考察する。

◆参考文献

笠原英彦『新・皇室論』芦書房、2013年

倉本一宏『蘇我氏』中公新書、2015年

◆成績評価方法

科目試験による。

日本政治史Ⅱ ―中世―

2単位

J042-8502、J8571

◆講義要綱

公武関係を相互補完的に捉えつつ、中世国家像を再構築する。

◆参考文献

上横手雅敬、他『日本の中世八 院政と平氏、鎌倉政権』中央公論新社、2002年

◆成績評価方法

科目試験による。

日本政治史

2単位

J024-7202、J7254

◆講義要綱

日中戦争以降、いかなる戦時体制が構築されたのか、テキストによりしっかり学んでください。

その上で、かかる時局は国民の対外問題をめぐる意識にいかなる影響を与えたと考えられるか、政府によるプロパガンダをも視野に入れ冷静（印象論や情緒に流されず）に分析してください。

◆テキストの読み方

日中戦争から敗戦までの戦局の推移とそれに伴う政治体制の変容を、きちんとテキストで学んでください。

◆履修上の注意

戦時体制といっても、戦局の推移に伴い変化し、その変化は国民の意識にも反映されていきます。「戦争の時代」を一様に捉えず、丁寧に見ていくことが必要です。

◆参考文献

玉井清編著『写真週報とその時代・下・戦時日本の国防・対外意識』（慶應義塾大学出版会、2017）。

◆レポート作成上の注意点

上記の参考文献以外の文献を参照しても構いませんが、取り上げられている事柄がいつの時期（「戦時」と言ってもさまざまです）のものかきちんと意識して考察することが必要です。

◆成績評価方法

科目試験による。

ヨーロッパ政治史

1単位

J023-7201、J7256

◆講義要綱

20世紀のヨーロッパ政治の歴史を、ヨーロッパ統合を中心として各国政治の発展と結びつけながら学習します。ヨーロッパ主要国の歴史と、ヨーロッパ統合の歴史、そして冷戦や国際環境の変化などを総合的に把握してください。

◆参考文献

遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』名古屋大学出版会、2008年。

◆成績評価方法

科目試験による。

アメリカ政治史

4単位

J095-1091

市販書採用科目

◆テキスト

紀平英作編『新版世界各国史24 アメリカ史』山川出版社、1999年

◆講義要綱

アメリカ合衆国の政治史の概説。植民地時代から現代までをバランスよく学ぶ。アメリカ政治の特徴についての歴史的なアプローチであるといつてよいであろう。いわゆる文学部西洋史学科の歴史科目よりは政治学的あるいは理論的な分析視角が入っているものの、基本的に歴史であることには変わりがない。

本科目においては、アメリカの国内政治の展開だけでなく、外交政策の展開も重視されている。日本にとってもっとも重要な国であるアメリカ合衆国の内政および外交について、とくに歴史的背景を重視して学びたいものに薦めたい。

◆テキストの読み方

テキストだけでもかなり詳細に解説されているものの、併せて以下の本とともに読みすすめればより高度な理解が可能になるであろう。

大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編『史料が語るアメリカ：1584—1988』（有斐閣、1989年）

歴史的に重要な資料を訳出した簡便な資料集。テキストと並行して読みすすめることを強く薦めたい。

有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎編『アメリカ史研究入門』（山川出版社、2009年）

基本的な歴史の流れをおさえた読者向けに、最新の研究動向を時期別・テーマ別に平易に紹介しており、文献調査の方法も示されている。テキストを読んだうえで是非読み進んでほしい。

久保文明編『アメリカの政治』（弘文堂、2013年）

アメリカ政治の初歩をわかりやすく解説。

有賀貞『アメリカ・ヒストリカルガイド』（改訂新版）（山川出版社、2012年）

政治を中心にアメリカ史をコンパクトに解説。

有賀貞・大下尚一・志邨晃佑・平野孝ほか『アメリカ史1・2』（山川出版社、1993、94年）

細かい事実を調査するのに便利。必要に応じて適宜参照されたい。

アメリカ学会訳編『原典アメリカ史1—9』（岩波書店）

歴史的展開の概説と資料の訳出およびその解説からなるきわめて有益な参考書。くわしく知りたいテーマについて学習する際に非常に便利である。

アメリカ学会編『アメリカ文化事典』（丸善出版、2018年）

荒このみ他編『アメリカを知る事典』新版（平凡社、2012年）

上2点は、アメリカの歴史や社会の重要な事項について日本における第一人者が執筆した項目からなる、信頼のおける事典である。調べ物の入り口として大変有用である。

◆研究課題

以下に、自主学習の目安として、練習問題を記す。
(基本的に解答は本文のなかに存在するか、少なくとも示唆されている。)

第1章 北米イギリス植民地の建設と発展

問題一 18世紀後半にイギリスから独立する13植民地は、どのような政治社会的特徴を持っていたのか、地域間の比較をしつつまとめてみよう。

問題二 13植民地は、イギリス帝国内部、さらにはヨーロッパやアフリカを含めた大西洋世界においてどのような政治経済的な位置づけに置かれていたのだろうか。時期の違いにも留意しながらまとめてみよう。

第2章 独立から建国の時代

問題一 独立に至り、さらにアメリカ合衆国成立へと帰着する経緯を、反対派の存在にも注目して、他の文献も参照してまとめてみよう。これらの経緯はどの程度「必然的」であったといえるのであろうか。

問題二 建国初期の政治的対立のあり方は、現代のそれとどのように異なると考えられるだろうか。政党政治に着目してまとめてみよう。

第3章 共和国の成長と民主制の登場

問題一 19世紀初頭のアメリカにおいて、南部や西部といった地域的まとまりはいかなる政治的意義をもったのだろうか。具体的な争点の展開にも注目しつつ、まとめてみよう。

問題二 「ジャクソニアン・デモクラシー」はどの程度「革命的」であったか。変化と継続の両面に注意を払いながら、他の文献も参照して考えてみよう。

第4章 「明白な運命」と南北対立の激化

問題一 黒人奴隷制の存続の是非をめぐるのは、賛否両面から様々な議論が展開されたが、前章の記述も併せて整理してみよう。

問題二 領土の拡大に起因する出来事を中心に、奴隷制をめぐる南北対立の展開を整理してみよう。後の南北戦争は、歴史的必然だったのか、それとも別の解決がありえたのだろうか？

第5章 南北戦争と再建の時代

問題一 これまでのアメリカ史上最大の死者数を出した南北戦争は、その後のアメリカ史にどのような影響や記憶を残しているだろうか。他の文献にもあたってまとめてみよう。

問題二 戦後の再建はいかなる成果を生み、そこにはどのような限界があったのか、それぞれの原因を考えながらまとめてみよう。

第6章 爆発的工業化と激動の世紀末

問題一 南北戦争後の数十年を、戦前と20世紀の橋渡しをした時期と考え、この間に現代につながるいかなる変化が生じたと考えられるか、政治を中心にまとめてみよう。

問題二 アメリカの労働運動、社会主義運動、そして農民運動の特徴は何か。他の文献も参照して調べてみよう。

問題三 婦人参政権運動、禁酒運動、移民制限運動など、19世紀半ばから1920年代にかけて登場

した運動について、その勢力伸長の理由と運動の成果、支持した人びと、指導者などの側面に分け、他の文献も参照して調べてみよう。

問題四

第7章 革新主義と世界大国アメリカ

問題一 革新主義運動はどのような形をとったのか、整理したうえで、それが後世にどのような影響を与えたのかまとめてみよう。

問題二 セオドア・ローズヴェルト、タフト、ウィルソンの革新主義との関わりを整理してみよう。

問題三 米西戦争を契機にアメリカの対外政策はどのように変化したといえるだろうか。また、それはどの程度、いかなる意味で「帝国主義的」だったといえるだろうか。まとめてみよう。

問題四 アメリカの第一次世界大戦との関わりは、どのようなものだったか、アメリカの国内社会への影響にも注意しながらまとめてみよう。この戦争は、その後のアメリカ史にとってどのような意味をもったのだろうか。

第8章 繁栄と大恐慌

問題一 国際連盟加盟に反対した共和党の外交政策は1921年から1933年までどのように展開されたであろうか。それを孤立主義と断定することはどの程度妥当であろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題二 大恐慌に対するフーヴァー、フランクリン・ローズヴェルト両政権の対策を比較すると、そこにはいかなる共通点と違いがあるだろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題三 ニューディール政策は大きく二次に分けられ、その後行き詰まりへと変遷するが、それはアメリカの政治や国家機構のあり方をどのように変えたのだろうか。またそこにはいかなる限界があったといえるか、まとめてみよう。

問題四 アメリカの第二次世界大戦への参戦の過程と理由を、第一次世界大戦への参戦の過程と理由と比較しながら、他の文献も参照して検討してみよう。また、国内の政治状況、少数集団や戦争への批判者に対する対応ではどのような異同があったのであろうか。併せて調べてみよう。

問題五 「ニューディール連合」とは何か。その安定性の理由はどこに求められるか。それ以前の多数派連合とどのように違うか。また内部の対立要因ないし矛盾はどこにあったか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題六 1930年代の南部の政治は、いかなる点で他の地域の政治と異なっていたか。またそれはニューディールの展開や戦争政策の展開に対して何らかの影響を及ぼしていたのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題七 真珠湾攻撃にいたるまでの日米交渉では何が焦点であったか。戦争を避ける可能性はあったのだろうか。他の文献も参照して調べてみ

よう。

第9章 第二次世界大戦から冷戦へ

- 問題一 第二次世界大戦中のアメリカとイギリス、そしてソ連は、それぞれ何を目的としていたのだろうか。またローズヴェルト大統領の外交にはどのような特徴があったであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題二 大戦中に策定されていたアメリカの戦後構想はどのような性格を持っていただろうか。またそれはどの程度実現し、いかなる限界を持っていたのだろうか。
- 問題三 大戦を通じて、アメリカの社会はどのような変化を経験しただろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題四 ソ連に対するローズヴェルト、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、そしてジョンソン各政権の政策を比較検討し、ソ連との対立がどのように激化し、また緩和したかについて、他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題五 ニューディール期に成立したアメリカの福祉国家はその後、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソンの各政権の下でどのように変化したであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題六 マッカーシズムはアメリカにおいて例外的現象であろうか、それともアメリカ本来の体質から直接的に発したものであろうか。他の文献も参照して考えてみよう。

第10章 バクス・アメリカナとその陰りの始まり

- 問題一 南北戦争後の再建から1964年の市民権法成立まで約一世紀かかっているが、なぜ黒人の地位向上はこれほどの時間を要したのか、他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題二 ジョン・F・ケネディは今日でもアメリカで国民の人気を誇るが、それはなぜか、他の文献も参照して調べてみよう。またケネディ政権の内政と外交はどう評価できるだろうか。
- 問題三 「偉大な社会」計画による改革とニューディール期の改革を、その担い手、課題、目標、政治的支持集団などの点から、他の文献も参照しながら比較検討しなさい。
- 問題四 アメリカがベトナム戦争に深入りしたのは特定の政権の責任であろうか。それともアメリカの外交政策が本来的にもっていた体質の故であろうか。他の文献も参照して、自分の考えをまとめてみよう。
- 問題五 対抗文化やフェミニズムに代表される、それまでの社会のあり方に対する異議申し立ては、中長期的にみていかなる政治的な影響をもったと考えられるだろうか。
- 問題六 ニクソン＝キッシンジャー外交はアメリカ外交史においてどのような特徴をもっているか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題七 20世紀を通じて、「帝王的大統領制」はいかにして生み出されたと考えられるだろうか。

第11章 ふたたび変貌するアメリカ

- 問題一 共和党はレーガンを当選させるにあたって、どのようなそれまでと違う新規の政策を用意

したのであろうか。アメリカの保守主義はどのような過程を経て、いかなる理由で復活したのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

- 問題二 レーガン外交の特徴はどこにみられるであろうか。同じ共和党のニクソン＝キッシンジャー外交とどのように異なっていたのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題三 ニューディール連合はいかなる過程を経て、いかなる理由で解体したと考えられるであろうか。またこんにち、民主党と共和党はどのような集団から支持されているのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題四 クリントンは自らを「ニュー・デモクラット」（新しい民主党員）と定義しているが、彼はどのような点でそれまでの民主党政治家と異なり、どの部分で同じなのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題五 1994年中間選挙で勝利して翌年から成立した共和党多数議会は、それまで40年間の議会と、内政、外交、あるいは大統領との関係などにおいて、どのように異なっていたであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題六 民主党が1992年と1996年の大統領選挙で連続して勝利を収めた要因は何であろうか。また、中間選挙としては例外的に1998年に民主党が議席を増やした原因は何であろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題七 冷戦の終結によって、アメリカの対外政策の課題はどのように変化したと考えられるだろうか。ブッシュ（父）、クリントン両政権の対応を比較しつつ考えてみよう。

◆参考文献

- 秋元英一『アメリカ経済の歴史 1492-1993』（東京大学出版会、1995年）
同 『世界大恐慌—1929年に何がおこったか』（講談社学術文庫、2009年）
スティーヴン・S・コーエン、J・ブラッドフォード・デロング（上原裕美子訳）『米国経済政策入門—建国から現在まで』
谷口昭丈、須藤功編『現代アメリカ経済史—「問題大国」の出現』（有斐閣、2017年）
中島釀『アメリカ国家像の再構成—ニューディール・リベラル派とロバート・ワグナーの国家構想』（勁草書房、2014年）
野村達朗『アメリカ労働民衆の歴史—働く人びとの物語』（ミネルヴァ書房、2013年）

◆レポート作成上の注意点

さまざまな参考文献を読み足した上で、必ず参照した文献について適切な形式で注をつけて作成すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

ロシアの政治

2 単位

J075-0502

◆テキスト

この科目は2016年4月に改訂されました。改訂後の新しいテキストによって履修してください。改訂されたテキストの入手方法は、『塾生ガイド2019』を参照してください。

◆講義要綱

現在のロシアは、国力から見て、もはやソ連時代のような超大国ではありません。それでも国際政治に大きな影響を与える国家として、世界の多くの国に関心を持たれています。その一方で、ロシアは隣国でありながら、昔から日本と経済的関係も文化的関係もそれほど密接ではないので、なかなか理解が難しい国であることは確かです。ロシアの政治を客観的に理解するためには、感情的に好きか嫌いかで判断するのではなく、どこがどのように変わってきたのか、あるいはどこが歴史的に見てあまり変化していないと言えるのか、具体的に見ていく必要があります。特にこの講義では、欧米諸国の政治制度をモデルにすることを意識的に避けるようになった2000年以降（プーチン登場以降）に注目し、以上のような変化の問題を考えたいと思います。指定教科書の構成は次の通りです。

歴史編

- 1 自然環境と国土
- 2 宗教と民族
- 3 ツァーリ（皇帝）の支配
- 4 被支配者としてのナロード（民衆）
- 5 近代化
- 6 革命
- 7 スターリン時代
- 8 フルシチョフとブレジネフ
- 9 ゴルバチョフの改革
- 10 ソ連の崩壊

政治編

- 1 市民生活の傾向
- 2 経済改革から新政治体制へ
- 3 一九九三年憲法体制
- 4 連邦制
- 5 選挙と政党
- 6 大統領と立法過程
- 7 マスメディア
- 8 地方自治体レベルの政治
- 9 司法と保安機関
- 10 プーチン時代の内政

対外政策編

- 1 地理的要因
- 2 対外的イデオロギー
- 3 対外政策の決定システム
- 4 外務省
- 5 軍部と国防省
- 6 対外経済関係
- 7 世論
- 8 政治文化
- 9 プーチン時代の対外政策

◆テキストの読み方

まず全体を読み通して、ロシアについてイメージを描いてください。現状を理解するには、ソ連時代の政治はもちろん、その前の時代の政治について知識を持つことが必要です。次にもう一度、今度は日本の政治とはどこが違うのか考えながら読んでください。理解が深まるはずです。

◆履修上の注意

特にありませんが、地域研究の一部門ですから、「地域研究基礎」もしくは「政治学基礎」を予め学習しておく、内容がよくわかると思います。関連する本や教科書を読んでください。

◆関連科目・分野

「歴史学」「政治学」「東洋史概説」「西洋史概説」「ロシア文学」

◆参考文献

比較的新しい政治の概説書は、横手慎二編『ロシアの政治と外交』放送大学出版会、2015年。歴史の概説として、田中陽児、倉持俊一、和田春樹編『世界歴史体系：ロシア史』1—3巻、山川出版、1994—1997年と和田春樹編『ロシア史』（世界各国史22）山川出版社、2002年。なお、現代に関しては、新聞、インターネットなどを通して政治、経済に関する情報を収集し、得られたものを相互に比較しつつ、利用してください（新聞やインターネットによる情報は、しばしば異なる解釈が付されているので、複数の新聞や情報源を利用してください）。

◆レポート作成上の注意点

レポートはたんなる感想文ではないので、論点を整理して論じるよう心がけてください。予め論点を箇条書きにしておくなど、書くべきポイントをきちんと整理してから書いてください。これは努力すれば、誰でもかなり身につくものです。ワープロを利用するときは、変換ミスのないように注意してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

現代中国論

2 単位

J102-1391

市販書採用科目

◆テキスト

毛里和子『現代中国政治〔第3版〕—グローバル・パワーの肖像—』名古屋大学出版会、2012年

◆講義要綱

「台頭する中国」への関心が日本のみならず国際社会で高まっている。それは、一つには過去20年以上にわたって、中国が急速な経済成長を実現し、「世界の工場」、「世界の市場」として世界経済を牽引する力と認識されてきたからである。いま一つには、その経済力を背景に国際政治における発言力が高まり、「大国」として認知されてきたからである。しかし、「台頭」だけが中国の真の姿ではない。一方において中国は多くの深刻な問題に直面しており、「台頭」とは異なる側面にも留意しなければならない。

こうした多面性を持つ中国の現状を理解する上で不可欠であるのが、歴史的背景への理解である。すなわち、現在、中国が直面する問題を理解するためには、

その歴史的背景に踏み込む必要がある。そうすることによって、中国の政治・外交の今後の展望を知る手がかりを得られるはずである。以上の問題意識に基づき、本講義では、「歴史的連続性」の視点を踏まえて、中国の政治・外交の問題を扱う。本講義の中心は1949年以降の中華人民共和国期であるが、無論、それ以前の中華民国期への理解も必要とされる。こうして、現代中国に生じたさまざまな事象の中から、中国の政治・外交の全体像を理解する上で有意義な個別のテーマを選び、学習を進めてゆく。

中国は日本と地理的にも文化的にも近接した存在であるがゆえに、理解が比較的容易であると思われがちである。しかし、いったん学習を始めるとその奥深さと複雑さに困惑するに違いないが、それこそが中国研究の醍醐味と言えよう。

◆テキストの読み方

本レポート課題に取り組むためには、当然のことながら、近年の中国政治に関する理解だけでは不十分である。

現在、中国において生起している様々な事象の背景を理解するためには、少なくとも、中華人民共和国建国以降の中国政治全体に関する理解が必要である。そのために課題提出者は、まず中華人民共和国の政治を通史的に理解しなければならない。差し当たり、テキストとともに下記の参考文献を読むことをおすすめする。それぞれの著者が、様々な視点から中華人民共和国の歴史を整理していることが理解できるはずである。これらを比較し、批判的に検証しながら、自分自身の力で中華人民共和国史を整理し直す作業を踏まえて、本レポート課題に取り組んで欲しい。

◆履修上の注意

平素より、中国の動向に関心を持ち、中国に関する報道や情報に注意を傾け、一定の基礎的な理解があることが望ましい。

◆参考文献

- 安田淳他編『台湾をめぐる安全保障』慶應義塾大学出版会、2016年
- 高橋伸夫編著『現代中国政治研究ハンドブック』慶應義塾大学出版会、2015年
- 西村成雄・小此木政夫『現代東アジアの政治と社会』放送大学教育振興会、2010年
- 国分良成編著『現代東アジア—朝鮮半島・中国・台湾・モンゴル—』慶應義塾大学出版会、2009年
- 西村成雄・国分良成『党と国家—政治体制の軌跡—』岩波書店、2009年
- 山田辰雄『中国近代政治史』放送大学教育振興会、2007年
- 阿部純一他編『中国をめぐる安全保障』ミネルヴァ書房、2007年
- 国分良成編『中国の統治能力』慶應義塾大学出版会、2006年
- 家近亮子ほか編『5分野から読み解く現代中国』晃洋書房、2005年
- 国分良成編『中国政治と東アジア』慶應義塾大学出版会、2004年
- 天児慧『中国の歴史11 巨龍の胎動』講談社、2004年
- 天児慧『中華人民共和国史』岩波新書、1999年

小島朋之『中国現代史』中公新書、1999年

◆レポート作成上の注意点

レポート課題に関しては、上記の参考文献以外にも、膨大な書籍と論文がある。課題提出者は、それらをできるだけ系統的かつ批判的に読みこなすことが要求される。なお、言うまでもないが、課題に関する書籍や論文を単純に丸写ししたり、或いは部分的に切り取ったりしたものを要約しただけでは、合格点には達しない。課題提出者自身が本課題に真摯に取り組み、たとえ未熟ではあっても、自らの言葉で記述することが要求される点に留意されたい。

◆成績評価方法

科目試験による。

日本外交史Ⅰ

4単位

J025-7301、J7359

◆講義要綱

日本の開国以降第二次世界大戦終結までの（いわゆる戦前の）日本外交に関して、日本の指導者がみた主観的世界像および自国像と欧米およびアジアの国際政治の現実の間の関係・相互作用に留意して、理解を深めたい。

◆参考文献

入江昭『日本の外交—明治維新から現代まで』中公新書、1966年

◆レポート作成上の注意点

レポート課題に対するいわゆる「正解」は存在しない。また、単なる事実関係の羅列に終わらないように留意したい。分析視角（事実関係に一定の意義付けを与える一貫した視点）に一定のセンスや論理性があり、全体の考察に分析的なまとまりがあることが重要である。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・日本外交史Ⅱ

4単位

J121-1901

◆講義要綱

第二次世界大戦後の日本外交は、今日に至るまで、戦後処理としての戦後憲法（特に第九条）と冷戦の産物としての日米安保条約を二本柱とする枠組み（「九条・安保体制」）に支えられている。その間言論界や政治の世界で改憲論や対米依存への違和感が繰り返し示されてきたにもかかわらず、その構図は今も（「戦後レジーム」からの脱却を唱える安倍政権下においても）基本的に変わっていない。その戦後のプロセスを実証的に理解し、なぜそうなのかを深く考えたい。

◆参考文献

添谷芳秀『日本の外交—「戦後」を読みとく』ちくま学芸文庫、2017年

◆レポート作成上の注意点

レポート課題に対するいわゆる「正解」は存在しない。また、単なる事実関係の羅列に終わらないように留意したい。分析視角（事実関係に一定の意義付けを

与える一貫した視点)に一定のセンスや論理性があり、全体の考察に分析的なまとまりがあることが重要である。

◆成績評価方法

科目試験による。

西洋外交史

4単位

J033-7702

◆講義要綱

第一次世界大戦から現在に至るまでの西洋外交史を対象にしています。外交の変容を中心として、大きな歴史の流れを理解していただきたいと思います。

◆参考文献

細谷雄一『外交—多文明時代の対話と交渉』有斐閣、2007年

◆レポート作成上の注意点

- (1) 参考文献を読んでください。
- (2) 著者の文章と自分の文章を区別して、論文形式で執筆してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

政治思想史

4単位

J109-1601

◆講義要綱

本講義では、「コスモス」・「運命」・「時間」・「法」などのカテゴリーを中心に西洋政治思想の特徴と歴史的展開を概観します。その際、ホメロス、悲劇詩人、トゥキディデス、プラトン、アリストテレス、マキアヴェリ、ホッブス、ロック、ルソーらの古典的著作に注目し、それらにまつわる多様な解釈やアイロニカルな政治的作用にも着目します。指定教科書の構成は以下の通りである。

序 論

第1章 主題と方法

第2章 古代ギリシアの思想状況

第3章 プラトン

第4章 アリストテレス

第5章 ワープ!

第6章 マキアヴェリ

第7章 ホッブス

第8章 ロック

第9章 ルソー

第10章 その後

◆テキストの読み方

テキストの記述を鵜呑みにするのではなく、批判的に吟味してください。つまり、解釈の多様性を意識しつつ、どの解釈が妥当か、また別の解釈もありうるかを自分で考え、可能であればテキストの議論を踏まえた上で(いわばテキストと対話をする形で)持論を展開してください。その際、注はヒントとなるでしょう。ただ、注をすべて読む必要はありません。必要に応じて参照していただくということで構いません。

◆履修上の注意

「ヨーロッパ中世政治思想」と「政治哲学」をあわせて履修されることをおすすめします。

◆関連科目

「ヨーロッパ中世政治思想」、「政治哲学」、「法哲学」

◆参考文献

クエンティン・スキナー『近代政治思想の基礎』門間都喜郎訳、春風社、2009年

川出良枝・山岡龍一『西洋政治思想史』岩波書店、2012年

◆レポート作成上の注意点

重要なのは基礎知識を押さえた上で批判的に思考することです。ですので、テキストの内容を素材として、思考のプロセスを反映してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

ヨーロッパ中世政治思想

2単位

J052-9801

◆講義要綱

ヨーロッパの政治思想が中世と呼ばれる時期(テキストではそれを9世紀から15世紀までの約700年間に設定しています)において遂げた展開を講義します。その際、「普遍」と「特殊」との関係ならびにその変遷過程が重要なテーマとなります。

◆テキストの読み方

古典古代の哲学や宗教(キリスト教)といった多様な要因が、ヨーロッパ人の政治理解に大きな影響を与えていく、その消息に関心を払ってください。またテキスト執筆者にはメタレベルでの問題意識があります。それは、近代以降の日本人にとってヨーロッパ文化が第二の自我になっているということ、したがって日本人にとってヨーロッパ文化がもっている意義の把握は今日においても極めて重要だ、ということです。これらの点を意識しつつ、テキストを読まれることを強く願います。

◆履修上の注意

「政治思想史」をあわせて履修されることをお勧めします。

◆関連科目

「政治思想史」、「西洋哲学史Ⅰ—古代・中世—」、「歴史(西洋史)」

◆参考文献

鷲見誠一『ヨーロッパ文化の原型』南窓社、1996年
パコー著、坂口昂吉・鷲見誠一訳『テオクラシー』創文社、1985年

ティアニー著、鷲見誠一訳『立憲思想』慶應義塾大学出版会、1986年

モラル著、柴田平三郎訳『中世の政治思想』平凡社ライブラリー、2002年

佐々木毅著『宗教と権力の政治』講談社学術文庫、2012年

将基面貴己著『ヨーロッパ政治思想の誕生』名古屋大学出版会、2013年

田上雅徳著『入門講義 キリスト教と政治』慶應義塾大学出版会、2015年

◆レポート作成上の注意点

どの科目のレポートもそうなのでしょうが、論理的な流れのはっきりしたレポートを作成してください。当該科目のように歴史的な科目のレポートでは、往々にして「〇〇年に××ということが起こった。次いで△△年には□□という事件が生じた」といった事実の羅列を記しただけのものが見受けられます。これは年表ではあってもレポートではありません。〇〇年の××を受けて△△年に□□が起こったとして、そこに一体いかなる因果関係が認められるのか。その点を意識した記述を心がけてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

コミュニケーション論

4単位

J079-0603

◆テキスト

この科目は2016年4月に改訂されました。改訂後の新しいテキストによって履修してください。改訂されたテキストの入手方法は、『塾生ガイド』を参照してください。

◆講義要綱

この科目の主たる目的は、「コミュニケーション」概念を軸としつつ多様な学問領域の成果を用いて思考することの面白さを理解してもらうところにある。もともと「コミュニケーション」論は学際的な学問領域であり、政治学、社会学、心理学、社会心理学などの隣接分野との関わりが深いため学習範囲が広い。テキストや参考書だけでなく、関連する社会科学の文献なるべく多く読むことが望まれる。今回のテキスト改訂により、ソーシャル・メディアのデータが一層充実した。その点に留意されたい。

◆テキストの読み方

テキストの内容で分からない箇所がある場合は、テキストの文章が参照している参考文献にまでさかのぼって、自分の理解を深めることが望ましい。

◆履修上の注意

事前に履修すべき科目や、あらかじめ学んでおくべき知識は特にない。しかし、学習にあたってはテキストだけでなく他の複数の文献を読んで幅広く勉強することが必要である。参考文献で悩む場合、テキストの中で数多くの文献が紹介されているので、これらの文献を実際に自分の眼で読んでみるのが最も参考になる。

◆関連科目

「政治学」、「社会学」、「社会心理学」

◆参考文献

- 大石裕『政治コミュニケーション』勁草書房、1998年
大石裕『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房、2005年
大石裕編『ジャーナリズムと権力』世界思想社、2006年
大石裕編『戦後日本のメディアと市民意識』ミネルヴァ書房、2012年
大石裕『メディアの中の政治』勁草書房、2014年

池上彰ほか『ジャーナリズムは甦るか』慶應義塾大学出版会、2015年
大石裕『批判する／批判されるジャーナリズム』慶應義塾大学出版会、2017年

◆レポート作成上の注意点

レポートのタイトルを自分で考え、冒頭に明記すること。

レポート作成を行う際に参照した文献、論文、資料などを明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

都市社会学(J)

2単位

J115-1791

市販書採用科目

◆テキスト

松本康編『都市社会学・入門』有斐閣、2014年

◆講義要綱

本科目は、都市社会学の基本的な考え方を学ぶことをつうじて、都市社会現象を社会的に理解する力を養うことを目的とする。

テキストにしたがい、つぎのような構成で議論をすすめてゆく。序章では「都市社会学の問い」を定式化する。第Ⅰ部「都市化とコミュニティの変容」では「都市はなにを生みだすか」という問いの軸にそって、「都市社会学の始まり」「アーバンイズム」「都市生態学と居住分化」「地域コミュニティ」「都市と社会的ネットワーク」について論じてゆく。第Ⅱ部「都市の危機と再編」では「なにが都市を生みだすか」という問いの軸にそって、「都市圏の発展段階」「情報化・グローバル化と都市再編」「インナーシティの危機と再生」「郊外のゆくえ」について論じる。第Ⅲ部「時間と空間のなかの都市」では「いかに都市とかかわるか」という問いの軸にそって、「都市再生と創造都市」「文化生産とまちづくり」「アジアの都市再編と市民」「ボランティアと市民社会」「都市の防災力と復興力」について論じる。

◆テキストの読み方

テキストについては、全部の章を正確に熟読してください。コラムまで試験の範囲に入ります。

◆履修上の注意

持ち込み不可ですので、内容について自分でまとめてください。単にキーワードの暗記だけでなく、内容を論じる問題になります。

◆参考文献

- 各章の終わりに掲載されている文献を参考にしてください。他に次のようなテキストも参考になります。
- ・町村敬志・西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣、2000年
 - ・園部雅久・和田清美編著『都市社会学入門』文化書房博文社、2004年
 - ・吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣、2013年

◆レポート作成上の注意点

以下の5つの条件がそろわなければ合格となりませんので、注意してください。

1. テキスト以外に5点以上の参考文献を用いること。

2. 字数は3600字以上4000字以内（注を字数に含む。参考文献リストは字数に含めない）。
3. 論述は社会学的視点からなされること。
4. 注をつけること。
5. 参考文献リストを作成すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

人文地理学 (J)

2 単位

J122-1901

◆講義要綱

人文地理学は、人間およびその生活や文化、都市、社会、経済などを対象として、その地理的分布、地域的な特色、地域間や環境との関係などを研究する地理学の一部門である。学問自体の内的要請によって進化発展するものであるばかりではなく、時代の要請によっても変化するものである。

◆参考文献

参考文献は限りなく存在するので、取捨選択が大切である。

◆レポート作成上の注意点

教科書の理解度を示す記述を期待するとともに、その内容を事例とともに説明すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

地理学 I (J)

2 単位

J123-1901

◆講義要綱

地理学 I は、「トランスナショナル化」の視点から、地球規模で展開する国際的な企業行動の変化やグローバル都市に関する話題など、現在進行形の社会経済事象に対する理解が深まることを目指して構成されている。この目的を達成するには、地理的な空間軸と、歴史的な時間軸の両方からこれらの現象を捉えることが求められる。

第 1 章 古い神話と新しい現実

第 2 章 変わる世界経済地図：貿易と直接投資

第 3 章 高度化する国際分業：フラグメンテーション

第 4 章 トランスナショナル企業の台頭

第 5 章 デジタル化／モジュラー化／ハイパー・モビリティ

第 6 章 サービス投入の増大とプロフェッショナル・サービス

第 7 章 市場／国家／都市

終 章 トランスナショナル化する世界の行方

本科目を通じて、新聞記事や、入手可能な報告書や統計データを自分で集め、自分の頭で各種の事象を分析する習慣が身につくよう期待している。

◆履修上の注意

企業の活動など、日常生活で触れる経済分野のニュースなどに興味を持った上で履修すると学習効果が高まるので注意してほしい。

◆参考文献

教科書の「引用文献・参考文献」を必要に応じて参照すること。

◆レポート作成上の注意点

テキストで取り上げた話題について、その理論的内容について理解度を測ると同時に具体的事例を用いて説明を行うように設定しているので、このことに注意してレポートに取り組んでほしい。

◆成績評価方法

科目試験による。

地理学 II (地誌学) (J)

2 単位

J124-1901

◆講義要綱

地理学は、古くて新しい学問である。「古くて」というのは、太古の昔から、地理への関心は、歴史への関心と並んで、様々な文明において示されてきたことから明らかである。「新しい」というのは、世界の動きや技術の進歩につれて、地理への関心のあり方も、時代に応じて変化を遂げ、地理学の内容を変容させてきたことからわかる。地理学のなかでも、地表の事物の姿やイメージを記述する地誌は、こうした変化を鋭敏に反映してきたといえよう。

地誌学の面白さは、具体的事例を徹底的に調べ上げ、様々な知見を、地域や場所という中で「総合化」することにある。

◆参考文献

参考文献は限りなく存在するので、取捨選択が大切である。

◆レポート作成上の注意点

レポート作成にあたっては、客観的な事実やデータによって裏付けたり、新しい見方を獲得するように心がけてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

経済原論 (ミクロ経済学) (J)

2 単位

J117-1801

◆講義要綱

経済学全般についての総論と、ミクロ経済学・マクロ経済学からなる経済理論のなかの、ミクロ経済学に対応する基礎理論を学習する科目である。マクロ経済学が国民総生産・失業率・物価水準といった経済全体の集計量を考察するのに対し、ミクロ経済学は家計や企業といった個々の経済主体の経済活動を分析対象とし、市場機構の効率性やその限界についても考察する。この科目は他の多くの経済学の分野に応用されるような、経済学の基礎理論を学ぶことを目的とする。

なお、テキストの学習範囲・試験範囲は以下のとおりとする。

「経済原論 (ミクロ経済学)」の学習範囲・試験範囲：第 1 章～第 5 章

◆テキストの読み方

図や式の意味をよく理解するようにしてください。

◆履修上の注意

ある程度の数学的知識と論理的思考力を前提とします。

◆参考文献

塩澤修平『経済学・入門（第3版）』有斐閣、2013年
塩澤修平『基礎コース・経済学（第2版）』新世社、2011年

◆レポート作成上の注意点

記述のうえで、それが仮定あるいは前提であるのか、論理的展開であるのか、論理的帰結であるのか、といった区別を明確にしてください。

科目試験の受験については、『塾生ガイド』を参照のこと。

◆成績評価方法

科目試験による。

経済原論(マクロ経済学)(J) 2単位

J117-1801

◆講義要綱

本講義では、マクロ経済学の基本事項を解説する。レポートおよび科目試験の範囲は教科書の第1章、および第6章から第9章である。第6章では、まず日本のマクロ経済を概観し、国民経済計算システムについて説明する。有効需要の原理による所得決定の基本モデルとして45度線モデルを解説する。第7章では貨幣について説明し、貨幣市場の均衡について解説する。そして財市場の均衡と貨幣市場の均衡を同時に満たすIS-LMモデルを解説する。第8章では長期のマクロ経済モデルを解説する。まず労働市場の均衡と潜在生産量を説明し、IS-LMモデルと統合することで財市場、貨幣市場、労働市場の一般均衡状態で長期の総生産、雇用、実質利率が決まることを解説する。さらに長期の総生産の成長を説明する枠組みについても解説する。第9章では景気循環を理解するために短期のマクロ経済モデルを解説する。IS-LMモデルに代わり、金融政策ルールを明示化した総需要曲線を説明する。そして価格粘着性を取り入れた総供給曲線を説明する。この総需要総供給モデルによって生産ギャップ、インフレ率、失業率の関係や財政政策や金融政策の効果についての考え方を説明する。

◆テキストの読み方

用語を丁寧に理解するようにしてください。マクロ経済についての事実を理解してください。

そして、その事実を説明するためのモデルではどのような変数がどういう理由で決定されるかを理解するようにしてください。またそれらのモデルが前提（仮定）していることを理解するようにしてください。

◆履修上の注意

微分、偏微分、差分方程式など、ある程度の数学の知識が必要です。またミクロ経済学の知識も必要です。

◆関連科目

「経済原論（ミクロ経済学）」「数学（微分・積分）」

◆参考文献

クルーグマン&ウエルズ『クルーグマン マクロ経済学』東洋経済新報社、2009年

ジョーンズ『ジョーンズ マクロ経済学Ⅰ（長期成長

編）』および『マクロ経済学Ⅱ（短期変動編）』東洋経済新報社、2011年

宮尾龍蔵『コア・テキスト マクロ経済学 第2版』新世社、2017年

◆レポート作成上の注意点

何を説明しようとしているのか記述の目的をはっきりさせてください。用語は正確にそして何らかの主張をする場合にはその根拠または論理的な理由を明確にしてください。記号を使う場合には（教科書に出た記号であっても）その記号の定義を記述してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・財政論(J)

2単位

J118-1891

市販書採用科目

◆テキスト

土居丈朗『入門財政学』日本評論社、2017年

◆講義要綱

この講義は、わが国の財政制度の基本を学ぶとともに、財政に関連した経済学の理論に基づく考え方を講義する。政府債務が累増している財政の現状とともに、国の予算制度、税制（所得税・法人税・消費税など）、社会保障制度（医療・介護・年金など）、地方財政制度などを取り上げる。

◆参考文献

土居丈朗『入門公共経済学（第2版）』日本評論社、2018年

土居丈朗『日本の税をどう見直すか』日本経済新聞社、2010年

井堀利宏・小西秀樹『政治経済学で読み解く政府の行動』木鐸社、2016年

◆レポート作成上の注意点

この講義で取り上げる内容について、現行制度と経済理論をバランスよく理解することが重要である。現行制度だけでなく、財政に関連した経済学の理論にも関心を持ち、関連する政策について各省庁や政府の会議等で公表された資料も活用するとよい。

◆成績評価方法

科目試験による。ただし、テキストの第10章と第11章は対象としない。

金融論(J)

2単位

J103-1302

◆テキスト

この科目は2017年4月に改訂されました。今年度から学習を開始する場合には、改訂後の新しいテキストによって履修することを勧めます。改訂されたテキストの入手方法は、『塾生ガイド』を参照してください。

◆講義要綱

第1章 資金循環と資金の過不足

1-1 経済と金融の関係—資金循環勘定

1-2 政府の資金不足の調整

1-3 企業の資金過不足の調整（I-S バランス）

第2章 企業の資金調達と投資
2-1 日本企業の資金調達と投資
2-2 利子率と投資の関係
2-3 トービンのqと企業の投資
第3章 金融商品のリスク制御と価格計算
3-1 家計のポートフォリオとリスク制御
3-2 債券市場・株式市場
3-3 新しい金融商品と価格計算
第4章 金融機関の仲介機能と証券市場
4-1 日本の金融機関の構成
4-2 銀行・協同組織金融機関、貸金業
4-3 証券会社と証券市場
4-4 生命保険会社・損害保険会社
4-5 機関投資家
第5章 金融行政と金融政策
5-1 金融システムの安定とバーゼル自己資本比率規制
5-2 証券化とオフバランスシート
5-3 金融政策と短期金融市場の金利調節
5-4 インフレ・ターゲティングとテイラー・ルール
第6章 財政と財政投融资
6-1 国債の発行増と金融機関の国債保有増
6-2 財政投融资制度と財政投融资改革
6-3 郵便貯金
第7章 貿易・資本移動と外国為替
7-1 国際収支
7-2 外国為替決定理論
7-3 際資本移動と国際金融のトリレンマ
7-4 ユーロの危機
第8章 金融のミクロ理論
8-1 家計の金融行動
8-2 企業の金融行動
8-3 銀行の金融行動
第9章 金融のマクロ理論
9-1 ワルラスの法則とIS-LM分析
9-2 所得と利子率の決定—IS-LMモデル
9-3 物価の決定—総需要—総供給モデル
9-4 合理的期待形成と金融政策
9-5 IS-LM-BPモデル（オープン・マクロモデル）
◆成績評価方法
科目試験による。

経済政策学(J)	2単位
J087-0801	

◆講義要綱

市場機構は万能ではないため、政府が直接・間接に市場に介入し、市場の失敗の是正をはかっています。経済政策学は、このような政府の活動の現状を明らかにすると同時に、望ましいあり方を提示することを目的とする学問です。

本講義では、まず、必要な基本概念と経済理論を身につけ、その上で、直面する今日の政策課題を見極め、解決の方向を探ります。

◆履修上の注意

ミクロ経済学およびマクロ経済学に関する知識をも

っていることが望ましいです。

◆関連科目

「経済原論（ミクロ経済学）」「経済原論（マクロ経済学）」「国民所得論」

◆参考文献

藤田康範『経済・金融のための数学』（シグマベイスキャピタル）2009年

◆レポート作成上の注意点

教科書を熟読するのみならず、巻末の参考文献や新聞・雑誌の経済記事・論文を読み、進んだ知識を積極的に取り入れるよう努力してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

社会政策(J)

2単位

J098-1192

市販書採用科目

◆テキスト

駒村康平編・上村一樹・渡辺久里子『新・福祉の総合政策』創成社、2018年

◆講義要綱

本講義の目的は、急速な少子高齢化の中、社会政策の中で比重を増した社会保障制度の理解と社会経済システムとの整合について検討し、望ましい政策を自ら考えられるようにすることを目的としている。具体的政策としては、社会保障制度の中心領域である年金、医療、福祉以外に、関連領域である人口、家族、財政、労働等についてもカバーしている。

1. 成熟化社会、少子・高齢化社会における社会保障
2. 社会保障制度の機能と歴史
3. 社会保障費の動向
4. 社会保険（年金・医療・介護・雇用・労災保険）と労働政策（最低賃金、障害者就労）
5. 児童・高齢者・障害者のための福祉政策
6. 生活困窮者。低所得者に対する社会保障（生活保護、生活困窮者自立支援制度）
7. 福祉サービスの改革

◆テキストの読み方

まず第1、2章で、現行の社会保障制度を取り巻く変化を理解したうえで、第3章で社会保障制度の機能、第4章で社会保障の歴史、第5章で社会保障費の動向を学んでください。第6～15章は関心をもった各制度を中心に学んでください。第16章は、限られた資源の制約の中、どのように効率性・公平性を高め、より充実した福祉サービスを提供できるか、理論的背景とともに学んでください。テキスト全体を通じ、将来の社会保障のあるべき姿について主体的に考えられるようになってください。

◆履修上の注意

経済学的な考え方を中心とした解説となっていますので、経済学の基本的な知識があった方が理解しやすいでしょう。また下記関連科目を併せて履修すれば、一層理解が深まるでしょう。

◆関連科目

「財政論」「人口論」「産業社会学」「労働法」

◆参考文献

厚生労働省『労働経済白書』、『厚生労働白書』各年版厚生労働省サイト (<http://www.mhlw.go.jp/>)

◆レポート作成上の注意点

執筆する前にまず本書「学習の手順」の「レポート作成上の注意」をお読みください。

課題1・2共に、引用・参考箇所（指定テキストを引用・参照する場合も含む）はレポート本文中に「」等の記号を用い、またどこからの引用・参照なのか著者姓、出版年、該当のページ数まで明示したうえで、対応する参考文献リストをレポートの末尾に掲載してください（引用・参考箇所を示すのに脚注や後注は用いないでください）。たとえば本文中で「認知機能の低下とともに（中略）リスク資産のウェイトを引き上げる必要」があり、「高齢者の資産をどのように積極的に活用するのが重要」とされる（駒村 2018, pp. 38-39）。」などのように示してください。

また節ごとに小見出しを付け、内容的な区切りを明示してください。

課題2については、政策に関するレポートですので、指定テキスト以外の複数の専門書籍・学術論文を参考文献として用い、何らかの政策提言を行ってください。その際には、その政策提言の論拠を最新データに基づき明確に示してください。データはテキスト掲載以外のデータも併せて使用してください。

◆成績評価方法

科目試験による。

経営学(J)

3単位

J105-1391

市販書採用科目

◆テキスト

岡本大輔・古川靖洋・佐藤和・馬場杉夫『深化する日本の経営』千倉書房、2012年

◆講義要綱

経営学は、企業経営、企業組織、経営者行動など、組織と経営現象に関する幅広いテーマを対象とした学際的な学問です。本科目では、その中でも、コア領域である、経営戦略論、経営管理論の分野を主な対象としています。これらを通じて、企業はどのように戦略的な意思決定を行うのか、組織運営の原理・原則は何か、成功する企業と失敗する企業の違いを説明することはできるのか、について学んでいただき、社会・経済の中で不可欠な存在である企業と組織に関する理解を深め、新しい視点から物事を観察し、解釈できる目を養っていただければと思います。

◆参考文献

谷本寛治『責任ある競争力』NTT出版、2013年
清水龍瑩『社長のための経営学』千倉書房、1999年
浅羽茂・牛島辰男『経営戦略をつかむ』有斐閣、2010年
桑田耕太郎・田尾雅夫『組織論〔補訂版〕』有斐閣、2010年
八代充史『人的資源管理論』中央経済社、2009年

◆レポート作成上の注意点

設問の意図を正確に理解し、レポートの構成を考えてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

会計学(J)

3単位

J088-0901

◆講義要綱

会計学、主として財務会計論の基礎を学習する。科目試験の出題範囲はテキストの内容に限るが、レポートの作成についてはより広範な学習にもとづくことを期待する。

◆参考文献

友岡賛『歴史にふれる会計学』有斐閣、1996年
友岡賛『会計学原理』税務経理協会、2012年
友岡賛（訳）『歴史に学ぶ会計の「なぜ？」』税務経理協会、2015年
友岡賛『会計学の基本問題』慶應義塾大学出版会、2016年
友岡賛『会計と会計学のレーゾン・デートル』慶應義塾大学出版会、2018年
友岡賛『会計の歴史（改訂版）』税務経理協会、2018年
友岡賛『日本会計史』慶應義塾大学出版会、2018年
友岡賛『会計学の考え方』泉文堂、2018年

◆レポート作成上の注意点

できる限り、自分の言葉、をもって述べ、また、参考文献は明記すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

教職課程専門教育科目

教育基礎論

2 単位

P035-1191

市販書採用科目

◆テキスト

沼野・松本・田中・白石・米山『教育の原理〔第4版〕』学文社、2010年

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

教師になるためには、教育とは何か、学校とは何かという本質的な問題に答えられなければならない。この授業では、教育がどのように考えられてきたのかを歴史的に理解ができ、学校の歴史的展開を踏まえて、子どもたちの安全を確保しながら、学校を地域などに開いていく今日の学校の課題を理解できるようになることを目標とする。

〔授業の概要〕

教育の定義がこれまでどのようにされてきたのかをテキスト、参考書によって理解し、「教育とは子どもを善くしようとする働きかけ」という共通理解の下、「子どもを善くする」ことに関わる教育モデルの展開、新しい教育モデルの探究を行う。また、教育モデルとの関わりで学校の歴史を理解するとともに、公教育としての学校の意義と課題を検討する。

〔授業計画〕

教科書（主として科目試験を受けるのに必要）と参考書（主としてレポートの添削を受けるのに必要）に即して学修を指導する。各書の構成は以下の通りである。

教科書『教育の原理』第4版

序章 本書の特徴と構成

第1章 「教育」とは何か

- 1 「教育」という言葉
- 2 教育の前提としての人間
- 3 人間教育の原理—教育のパラドックス
- 4 「教育」と「宗教」「政治」

第2章 文化と教育のかかわり

- 1 文化と教育
- 2 文化・教科・カリキュラム
- 3 文化と教育のかかわり

第3章 学校式教育と人間教育

- 1 学校式教育の原理的性格
- 2 近代学校の成立と展開
- 3 国家と教育
- 4 現代における学校の役割

第4章 何を教えるか

- 1 教えることと学ぶこと
- 2 教える内容と社会
- 3 何を教えてきたのかの歴史とその背景の理論
- 4 最近の学習指導要領

第5章 いかに教えるか

- 1 よい目的とよい方法

2 教授活動の技能

3 教授活動の評価

第6章 職業としての教師

- 1 広義の教師・狭義の教師
- 2 教員制度からみた教師像
- 3 さまざまな教師観
- 4 現代教師の課題

終章 教育の「ふるさと」からの見直し

参考書『よくわかる教育学原論』

I 教育の本質

II 教育の歴史

- 1 古代ギリシアの教育
- 2 近代市民社会と公教育制度
- 3 新教育運動
- 4 ポストモダンと教育思想
- 5 日本の江戸時代の教育
- 6 日本における公教育制度の成立
- 7 大正自由教育
- 8 第二次世界大戦後のわが国の教育の展開

III 教育の理念

- 1 西洋における教育思想の潮流
- 2 日本における教育思想の潮流
- 3 ソクラテス、プラトン
- 4 ロック、ルソー
- 5 ペスタロッチ
- 6 ヘルバルト
- 7 デューイ
- 8 フレーベル、モンテッソーリ
- 9 シュタイナー、フレネ、ニール

IV 教育の制度

XIII 教育に関する行政と財政

XIV 教育に関する法規

XV 子どもの成長・発達とその問題

XVI 子どもの生活をめぐる諸問題

- 5 子どもの安全教育と危機予測能力
- 6 安全教育カリキュラムと指導

XVII 家庭教育・地域の教育・生涯教育

◆テキストの読み方

テキストは複数の執筆者が書いている。執筆者によって、微妙に教育原理の理解に違いがある可能性がある。テキストを理解するとともに、批判的に検討することも必要である。

◆履修上の注意

「現代教師論」や「教育学」を履修していることが望ましいが、必須ではない。

◆関連科目

「現代教師論」、「教育学」

◆参考文献

安彦忠彦ほか編著『よくわかる教育原論』初版第5刷、ミネルヴァ書房、2016年

◆レポート作成上の注意点

しっかりとテキストを読み、テキストを踏まえて、課題が何を要求しているかをよく理解した上で、レポートを作成すること。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

青年の心理

1 単位

P028-0091

市販書採用科目

◆テキスト

遠藤由美『青年の心理』サイエンス社、2000年

◆講義要綱

青年期におけるさまざまな身体的・心理的・社会的変化について理解すると同時に、そうした青年期の成長に関わる教師として、どのような関わり方が求められるかについて考える機会にしてほしいと思います。その際、いろいろな文献に当たると同時に、現代社会で展開されている社会問題・教育問題にも関心を広げてほしいと思います。

◆履修上の注意

基本的な専門用語を理解するようにしてください。また、自らの青年時代を振り返りつつ、現代社会における青年たちの現状について関心を持つように心がけてください。

◆参考文献

加藤隆勝・高木秀明『青年心理学概論』誠信書房、1997年
落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一『青年の心理学 改訂版』有斐閣、2002年
落合良行・楠見孝『自己への問い直し—青年期』金子書房、1995年
伊藤美奈子『思春期の心さがしと学びの現場』北樹出版、2000年
伊藤美奈子編『思春期・青年期臨床心理学』朝倉書店、2006年

◆レポート作成上の注意点

テキストをはじめ、文献等を参考にしながら、青年期の本質に迫ると同時に、その青年たちに関わる立場に身を置いて考えることを求めます。

またその際、自分の考えと、引用した文献等とを区別し、後者については引用文献として明記するようにしてください。

◆成績評価方法

科目試験による。

新・学校カリキュラム論

2 単位

P041-1991

市販書採用科目

◆テキスト

細尾萌子・田中耕治（編著）（2018）『教育課程・教育評価（新しい教職教育講座 教職教育編〈6〉）』ミネルヴァ書房

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

学習指導要領をもとに各学校・各教室において教師がその専門性を発揮しながらカリキュラムをデザインしていくための諸概念や方法を歴史的・現代的に学び、さらにはカリキュラム・マネジメントを行うための枠組みも理解する。

〔授業の概要〕

まずはカリキュラム改革の歴史を内外に学びながら、日本において学習指導要領などが果たしてきた教育課程編成の諸機能を概説するとともに、カリキュラム編成のための基本的な枠組みを多角的に解説する。ついで、教科の再編や教科間の横断、発達に応じたカリキュラムの縦断的編成、さらには総合的な学習の時間や特別活動など教科学習と有機的な関連を持たせようとするカリキュラムなどを多様に紹介し、その知見を共有する。「計画としてのカリキュラム」と「実施・経験されたカリキュラム」へとその見方を拡張させ、子どもの学びへの着目と教師の専門的な学びに関する新たなカリキュラム論を検討しながら、カリキュラム・マネジメントや教師たちによる授業研究実践の試みにその意義を見出していく。

テキストは以下の構成になっている。

第1章 教育課程とは

- 1 教育課程（カリキュラム）とは何か
- 2 教育課程編成をめぐる論点
- 3 学習指導要領の基本構造
- 4 教育課程と社会システム

第2章 教科の教育課程

- 1 国が計画する教育課程
- 2 教師が設計する教育課程
- 3 児童と教科のカリキュラム

第3章 総合学習の教育課程

- 1 戦後初期総合学習の登場と教育課程改造（1950年代）
- 2 教育課程に総合学習は必要か（1970年代）
- 3 総合学習で育まれる「学力」とは（1990年代）
- 4 教育課程における総合学習の役割

第4章 特別活動の教育課程

- 1 学校教育における特別活動の位置づけ
- 2 自主性を育む学校行事のあり方
- 3 これからの特別活動の展望

第5章 戦後の教育課程の変遷

- 1 学力問題と学習指導要領の変遷
- 2 経験主義の教育課程の特徴と論点
- 3 教科主義（系統主義）の教育課程の特徴と論点
- 4 ゆとり教育政策の特徴と批判
- 5 PISA 問題と資質・能力の重視へ

第6章 2008年以降の教育課程の枠組み

- 1 2008年の学習指導要領改訂
- 2 2015年の学習指導要領一部修正
- 3 2017年の学習指導要領改訂
- 4 小学校の教育課程の実践例

第7章 資質・能力の育成と教育課程

- 1 戦後日本における学力論の展開
- 2 諸外国における資質・能力論
- 3 日本における資質・能力論と教育課程
- 4 質の高い学びをもたらす教育課程実践

第8章 主権者を育てる教育課程

- 1 主権者を育てる教育とは何か

- 2 学習指導要領における主権者教育
 - 3 指導事例の検討
 - 4 主権者教育を進める際の留意点
 - 5 充実した実践に向けて
- 第9章 言語能力を育む教育課程
- 1 PISA ショック以降の言語に関する提言の動向
 - 2 2017年改訂学習指導要領における言語に関する提言
 - 3 思考と言語の関係——言語が果たす役割
 - 4 経験と言語の関係——言語が果たせない役割
 - 5 教育課程全体で言語能力を育てる
- 第10章 教育評価とは何か——学力評価を中心に
- 1 教育評価の目的
 - 2 教育評価の立場の違い
 - 3 「目標に準拠した評価」の充実に向けた動き
 - 4 指導要録のもとでの学力評価の工夫
 - 5 学力評価をめぐる論点
- 第11章 資質・能力の形成を支える評価
- 1 「真正の評価」論への注目
 - 2 パフォーマンス評価
 - 3 ポートフォリオ評価
 - 4 実践上の課題
- 第12章 カリキュラム評価と学校評価
- 1 カリキュラム評価とは何か
 - 2 カリキュラム評価のアプローチ
 - 3 学校評価とは何か
 - 4 京都市立高倉小学校におけるカリキュラム評価と学校評価
- 第13章 カリキュラム・マネジメント
- 1 学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメント
 - 2 マネジメントの主体——教職員は何をすべきか
 - 3 カリキュラム・マネジメントの実践に向けて
- 第14章 学校種間の接続と入試
- 1 学校種間の接続に関わる諸問題
 - 2 入試に関わる諸問題
 - 3 接続の現代的課題と大学入試改革
 - 4 国際バカロレア

◆テキストの読み方

学習指導要領を中心とした学校におけるカリキュラム編成のための基礎概念のみならず、背景にあるカリキュラム研究の知見をたえず意識しながら読むことが望まれる。また、テキストの内容は正確におさえながら、教育課程改革がすすむ現在の動向ともたえず連動させた視点をもって読み進めることにも努めてほしい。

◆参考文献

- ・現行及び次期学習指導要領とその解説（とりわけ総則）
- ・各種審議会や教育委員会のとりまとめた報告書等
- ・教育雑誌での学習指導要領関連の特集論文
- ・田中耕治編著（2016）『グローバル化時代の教育評価改革—日本・アジア・欧米を結ぶ』日本標準
- ・鹿毛雅治・藤本和久編著（2017）『「授業研究」を創る—教師が学びあう学校を実現するために』教育出版

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

国語科教育法

3 単位

P006-7901、P9408

◆講義要綱

国語の教師となるにあたって、どのような知識が必要かということだけでなく、教師になってからどのような姿勢を保ち続けられるかということを意識したい。さらに、知識・理解だけではなく、生身の人間同士による対話から学びが作られていくことを忘れてはならない。

テキストのみではなく、広く現代の生徒像をイメージしてもらいたいため、参考文献を以下に示した。

◆テキストの読み方

物語の読み取りだけが国語の力ではない、評論や古典、さらには表現など幅広く生徒に力をつけさせるよう指導をしていくことを念頭におきたい。テキストを出発点として、さらに幅広く教材や研究書に向かうこと。

◆履修上の注意

一つの教材に対して正しい一つの授業があるとは思えない。そこにはまず生徒の人数規模や性格、そして学校の特色、教師の性質など、様々な要素を含んだうえで一つの授業を教室で実践している。教材研究の深さはもちろん大前提として必要だが、授業のスタイルはその時その時に最適なものを常に考えてほしい。したがって、世の中に存在する先行研究、実践例、指導案などを丸写しに行動する姿勢では良き教師たりえない。本講義の試験やレポートにおいても同様である。

◆参考文献

- 新学習指導要領（平成29年3月公示）※文部科学省のホームページよりダウンロードできる
「文部科学省検定済教科書中学校国語または高等学校国語」各出版社
町田守弘『実践国語科教育法——「楽しく、力のつく」授業の創造（第三版）』2019 学文社
中原國明大熊徹編『国語科授業用語の手引き第二版』2009.1 教育出版
堀裕嗣『教室ファシリテーション10のアイテム・100のステップ』2012.3 学事出版

◆レポート作成上の注意点

履修上の注意でも述べた通り、先行研究を鵜呑みにするのではなく、教材を確実に自分のものとした上で成果をまとめてほしい。

◆成績評価方法

科目試験による。

国語科教育法 I

2 単位

P042-1991

市販書採用科目

◆テキスト

町田守弘（編著）『実践国語科教育法—「楽しく、力のつく」授業の創造（第三版）』学文社、2019年

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

国語科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解する。

学習指導要領に示された国語科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深める。

様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。

〔授業の概要〕

以下に示すテキストや、実際に教室で取り扱われている学習材を熟読し、国語の教員としての基本的な知識を身につけ、国語教育観を育みたい。まず、国語教員としての知識である国語に関する知識および国語の授業を展開するための知識を習得していく。そして、我が国の国語教育の歴史や伝統によって成り立つ普遍性と、学習者と教授者とが現代を生きるための資質や能力を発見し構築していく新しさがバランスをとって成り立たつ国語教育観をじっくりと育てていく。

〔授業計画〕

自らの国語学習体験を思い出すことから始める。学習者である自分は国語の授業に何を求めていたのか、教室にただ居合わせていただけなのか、先生やクラスメイトにどのようにかわりあっていったのか、国語の授業を教室にいる者すべてで担い合ってつくりだしていたのか、それらの具体的な体験を起点として、自ら国語の授業のあるべき姿について考え、身につけた知識と、育まれた国語教育観によって、学習者の顔を思い浮かべながら、学習指導案を作成できることを目的としている。指定教科書の構成は次の通りである。

序章 「国語科教育法」で何を学ぶか

1章 国語科の制度—学習指導要領と教科書

2章 発問・指示

3章 板書・ノート指導・ワークシート

4章 「話すこと・聞くこと」の授業

5章 「書くこと」の授業

6章 「読むこと」の授業

7章 言葉を育む詩歌の授業

8章 古典の授業—「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の扱い方と言語活動

9章 日中漢字文化を生かした漢字・語彙指導

10章 教室での豊かな交流活動—グループ学習の進め方

11章 国語科の評価

12章 指導計画・学習指導案の作成

13章 授業を研究して育つ教師—教えながら学び育つ教師

14章 国語教育におけるメディア・リテラシー

15章 国語科教育の課題と展望

終章 効果的な教育実習のために

◆テキストの読み方

テキスト各章に設けてある〔課題〕に自分の言葉で記述してみることが肝要であり、上述の「レポート課題」には必ずその成果が現れてこよう。生徒が自ずと楽になる授業を組織化するには、言うまでもなく、生徒以上に教員自らが、先人の解釈や創造的な授業開発に心動かされていなくてはならない。テキストを通して得られた期待感が、後々、模擬授業や教育実習において居合わす生徒に感染するのである。

◆履修上の注意

言葉の教育において、学習者は言葉によって他者との関係性を深めていく。テキスト科目は、テキストを読み課題に答えるという一見すると単調な学習になり

がちであるが、深い自己内対話がそこには生じる。テキストに触発された瞬間からそれ以前の自己は他者として自分から切り離されていく。そういう自己更新(更深)のサイクルを感じ取って学習を進めてほしい。

◆参考文献

- ・『中学校学習指導要領解説「国語編」』および『高等学校学習指導要領解説「国語編」』文部科学省(文部科学省のホームページからもダウンロードできる)
- ・文部科学省検定済教科書「中学校国語」「高等学校国語総合」(出版社は問わない)

◆レポート作成上の注意点

教材研究と授業計画とは別々に進められるものではない。この課題レポートを書き進めていけば、自ずとその二者がどのような過程で有機的に統合していくのかの記録になる。まずは読者として教材に向き合った経験の記録、その読者体験を生徒に強制する正当性はあるのかという葛藤の記録、その教材を教員として生徒に教えるという行為はどうあるべきかという熟慮の記録というように、ある教材(『羅生門』)の授業が組織化されていく過程を記述してほしい。また6つのテーマについても、教材の内容的価値から引き出される多様なテーマとして提示してほしい。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

国語科教育法特殊 I

2単位

P043-1991

市販書採用科目

◆テキスト

中原國明・大熊徹編『国語科授業用語の手引き 第二版』(2011.1 教育出版)

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

学習指導要領を意識しながら学び合いを取り入れた授業作りができる。

子供の認識・思考、学力等の実態を視野に入れた授業設計の重要性を理解している。

学習指導案の構成を理解し、具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案を作成することができる。

〔授業の概要〕

国語の教師となるにあたって、どのような知識が必要かということだけでなく、教師になってからどのような姿勢を保ち続けられるかということ意識したい。さらに、知識・理解だけではなく、生身の人間同士による対話から学びが作られていくことを忘れてはならない。

単に適切に指導案を作成して滞りなく教師主導型の授業が出来れば良いのではなく、生徒同士や時には生徒と教員で意見をぶつかり合わせるような躍動感のある授業を形成できるようにしたい。そのやりとりの中でより深い学びが形成されていくのである。よって以下に示した参考文献にも目を通し、学び合いの技法も取り込んだ授業計画を立ててほしい。その他、様々な文献に目を通したうえで指導案の作成に活かしてほしい。

〔授業計画〕

基本的には学習者をまず第一に考えながら教材と指導事項について考えることが重要である。具体的には生徒観については各学校によってさまざまな事情がからんでくるので、通信教育課程ではその設定をしっかりとすることが肝要になる。自分なりに設定した校種とその学年のイメージに齟齬がないように指導案の作成等に取り組みたい。ここを踏まえて学習者にとって一番効果の高い教育について考えることが目的である。指定教科書の構成に即した授業計画は次のとおりである。

学習項目1：国語の授業の構想 学習指導要領や教科書の内容を理解しつつ指導計画や指導案作りに生かす（テキスト P7～32）

学習項目2：国語の授業の工夫 実践の場において必要となる考え方や態度、発問や板書などの技能を学ぶ（テキスト P33～58）

学習項目3：話すこと・聞くことの授業 話すこと・聞くことの指導法とスピーチやディベートなどの実践について学ぶ（テキスト P59～72）

学習項目4：書くことの授業 書くことの指導法と作文や創作などの実践について学ぶ（テキスト P73～88）

学習項目5：読むことの授業 読むことの指導法と文学的文章や説明文の読み、調べ読みや比べ読みなどの実践について学ぶ（テキスト P89～112）

学習項目6：伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の指導 古典や仮名遣い、言葉のきまりなどの指導法や実践について学ぶ（テキスト P113～140）

学習項目7：国語科の評価 書くこと読むこと伝統的な言語文化などの評価と相対評価・絶対評価について、指導と評価の一体化などについて学ぶ（テキスト P141～178）

◆履修上の注意

参考文献にあげたようなもののなかから学び合いの方法についてを事前に理解していることが求められる。

◆関連科目

特になし。

◆レポート作成上の注意点

学び合いの時間については無理のない時間を設定すること。板書案には生徒から出るであろうと仮定したものを記入してよい。

◆参考文献

- ・新学習指導要領（平成29年3月公示）※文部科学省のホームページよりダウンロードできる。
- ・「文部科学省検定済教科書 中学校国語 または高等学校国語」出版社不問
- ・堀裕嗣『教室ファシリテーション10のアイテム100のステップ』（2012.3 学事出版）
- ・堀裕嗣『国語科授業づくり10の原理100の言語技術』（2016.3 明治図書出版）
- ・本谷宇一『子どもが「発問」する学びの教室—「学習材」で変わる国語の授業』（2011.4 一光社）
- ・町田守弘『実践国語科教育法——「楽しく、力のつく」授業の創造』（2012.9 学文社）

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって

評価する。

社会科・地理歴史科教育法

3 単位

P021-9992

市販書採用科目

◆テキスト

白井嘉一・柴田義松編著『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』学文社、2009年

小池俊夫・古屋野素材『「新しい社会科」を創る（修正版）』学芸図書、2000年

※『「新しい社会科」を創る（修正版）』は、絶版のため大学を通しての購入申込はできません。入手困難な場合は、『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』のみを用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

現行教育制度がスタートした昭和22年から、小学校、中学校、高等学校における教科目として社会科が学ばれるようになった。この教科はその後、平成元年の学習指導要領改定から高等学校では地理歴史科と公民科へ移行したことにより、中等教育の教員免許取得においては、中学校教諭においては「社会」、高等学校においては「地理歴史」と「公民」の三免許体制となった（国語や数学その他は二免許）。そのことはとりもなおさずこの教科の特殊性であり、社会科の成立やその後の変化、どういった教育が行われようとしたのかを理解する必要がある。

この理解の上に立って、では中高生に社会認識を深めさせていく教育とはいかなるものが考えられるのか。そのひとつが「地理歴史」を通じて、地理的な空間認識を学ぶことと歴史的な時間（歴史）認識を学ぶことであり、こうしたことは事実として具体化させたものでしか教育的効果は期待できないのではないだろうか。社会科・地理歴史科教育法を学ぶにあたって自らのどのような教育が行えるか模索してもらいたい。

◆参考文献

日本社会科教育学会編『社会科教育事典（新版）』ぎょうせい、2012年

全国社会科教育学会編『社会科教育実践ハンドブック』明治図書、2011年

以上2点は書店で手に入るもの。以下2点は絶版のもの。

勝田守一『戦後教育と社会科』（勝田守一著作集1）国土社

上田薫『問題解決学習の本質』（社会科教育著作集1）明治図書

テキストとしてあげたもの以外に上記の文献が参考となる。図書館などで閲覧してもらいたい。

また、教育実習などで実際に授業を行う際や教員採用試験の勉強のために『中学校学習指導要領解説—社会—』『高等学校学習指導要領解説—地理歴史編—』を購入し、現在の社会科及び地理歴史科の教科の目的や目標、指導上の留意点なども理解を深めてほしい。

◆レポート作成上の注意点

1 について：社会科教育における問題解決型学習と系統学習は、一大論争を巻き起こしたものである。参考文献にあるもののほか、『梅根悟教育著作選集』（全8巻、明治図書、1977年）の中から、勝田守一との

社会科論争をとりあげ、検討してみるのがよい。

2について：学習指導案の作成については、明確な基準といったものはなく、皆さんが教育実習に参加される学校や教育委員会ごとに作成の様式が異なっているといえるだろう。ここでは、テキスト本の中にある事例の中から最も授業を表現しやすいものを選んで作成してもらいたい。例えば、テキスト『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』の167頁から170頁を参考とすれば、課題の構成でいう①は（4単元名、5単元目標）、②は（7本時の内容と教材解釈、留意点）、③は（9授業展開）、④は（8準備する資料教材、参考文献・資料）となる。学習指導案は、実際に授業に臨まなくともこういった授業であったか復元することが可能となるものであり、なによりも生徒の学習する内容を明確にし授業前に構想したものと授業後の反省を可能とするものである。そうしたことから、作成においては、十分な説明を加えた文章にしてほしい。なお、国の基準である学習指導要領も参考にしてほしい。

◆成績評価方法

科目試験による。

社会科・地理歴史科教育法 I 2単位

P044-1991

市販書採用科目

◆テキスト

日本社会科教育学会編『新版 社会科教育事典』ぎょうせい、2012年。

文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』。

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』。

※『学習指導要領解説』は、廉価で市販されているが、文部科学省ホームページからダウンロードもできる。

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

本授業科目テーマは、社会科とはどういった科目であるのかを、教科の特徴と教科教育法についての具体的な内容から学修するものである。

〔到達目標〕

- ①社会科の成立から地歴科・公民科導入及びその後の教科の特質を理解する。
- ②社会科教育に関する代表的な論争について理解し、社会科授業の構想に生かせる。
- ③社会科及び地理歴史科教育の授業科目に関する学習指導案を作成できる。

〔授業の概要〕

本授業は、社会科の成立からその解体（小学校低学年、高等学校）、そして今日に至るまでの社会科に関する論争を中心に社会科の特質について考察する。特に、勝田・梅根論争などから問題解決学習と系統学習に関する理解を深めることによって、受講者自らが社会科の授業を構想し、学習指導案を作成できるようになることを目指す。

〔授業計画〕

社会科教育を考えるうえで、教科の特質を理解することが重要である。特に、社会科に関しては、「社会」という総合科目として理解する立場と地歴と公民といった系統性、専門性に分ける立場があり、それが指導

法にも影響を与え、多様な教育法が展開されてきた。これらを整理したうえで、自らが社会科教育において、多様な学習内容に対して適切な教育法を考えられるようになることを目的としている。指定教科書の構成は下記のとおりである。なお、現行学習指導要領の確認も行う。

第1部 社会科の基礎論

第1章 社会科の性格

第2章 社会科の成立と展開

第3章 地理教育論

第4章 歴史教育論

第5章 公民教育論

第2部 社会科の実践論

第1章 社会科の授業論

第2章 社会科の実践

第3部 現代社会からの発信

第1章 新しい時代の学校像と社会科

第2章 諸外国の社会科の動向

第3章 社会科と関連諸科学

◆テキストの読み方

テキストは、『新版 社会科教育辞典』と文部科学省の『学習指導要領解説』（中、高）である。

『新版 社会科教育辞典』は、社会科に関する主要な項目を網羅的に取り上げ、見開き頁で学べるようになっている。また、社会科の基礎論と実践論を1部、2部に分かれて記述されているので、章ごとに学んでいくと理解しやすい。レポートの作成に関連して言えば、例えば授業に関することは、基礎論、実践論共に述べられているので関係すると思われるところをつなげて読むと理解しやすい。

『学習指導要領解説』（中、高）は、国の法規である学習指導要領の原文が枠内に記載され、それについての解説が続けて述べられたものとなっている。本講義において利用するのは、中学校学習指導要領のみとし、さらに公民的分野は除くものとする。

◆レポート作成上の注意点

1について：系統学習と問題解決学習とは社会科教育における最大のテーマであるといえる。これに関して、勝田守一および梅根悟がどういった立場であったのか。すなわち一方の社会科論の立場なのか、どちらの立場も否定しないのかなど、よく理解してほしい。より内容を深めるには、参考文献にある勝田や梅根の著作集などを図書館で調べるとよい。

2について：学習指導案の作成については、明確な基準といったものはなく、皆さんが教育実習に参加される学校や教育委員会ごとに作成の様式が異なっている。そこでインターネットなどで学習指導案の例を調べて参考にしてください。

本レポートでは、「調べ学習」や「見学・観察」を行う授業を求めているので、一般的な50分授業にこだわらずともよい。

◆参考文献

勝田守一『勝田守一著作集』第1巻～第7巻、国土社。梅根悟『梅根悟著作選集』第1巻～第8巻、明治図書出版。

上田薫『上田薫社会科教育著作集』第1巻～第5巻、明治図書出版。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

社会科・公民科教育法

3 単位

P023-9992

市販書採用科目

◆テキスト

白井嘉一・柴田義松編著『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』学文社、2009年

小池俊夫・古屋野素材『「新しい社会科」を創る（修正版）』学芸図書、2000年

※『「新しい社会科」を創る（修正版）』は、絶版のため大学を通しての購入申込はできません。入手困難な場合は、『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』のみを用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

〔目標およびテーマ〕

直接的には、高等学校公民科（現代社会・政治経済・倫理）一種免許にかかわる科目であるが、中学校社会科とも関連させながら、中等教育全体における社会科教育（学習）のあり方について幅広い考察をめざしたい。

〔概要〕

選挙権を行使して国政へ参加する主権者として、また、一経済主体である消費者として、子どもたちは、公民の授業を通して、さまざまな社会問題への関心を深めていくであろう。学生にとっても、積極的に社会に参加し、果たすべき役割を考える機会となることを期待する。

〔計画〕

指定教科書の構成は、以下のとおりである。まずは、興味のある箇所から目を通してみるのでかまわないが、いずれは通読してもらいたい。

まえがき

第1章 中等社会・地歴・公民科教育の歴史

第2章 中等社会科カリキュラムの内容と構造

第3章 中等社会科・地歴・公民科の授業づくりと方法

第4章 中等社会科教育の課題

巻末資料

◆参考文献

指定したテキストのほかに、どの会社のものでもよいので、高校教科書の「現代社会」「政治経済」「倫理」が手元で参照できる状態であることがのぞましい。教科書の購入は、各居住地域の「教科書取次店」で入手できる（参考までに、東京地区では、千代田区神田駿河台の三省堂書店本店が便利である）。各教科書の価格は書店で確認してほしい。

また、今回のレポートの作成にあたっては、地域の図書館等を利用し、それぞれのテーマに関連して、各省庁から出ている白書類（『経済財政白書』『防衛白書』等）や、全国紙の縮刷版、時事用語事典類（『現代用語の基礎知識』『知恵蔵』等）を参照することも重要である。できるかぎり新しい資料の活用に努めること。

なお、公民科としての学習領域とその内容を把握す

るために『高等学校学習指導要領解説—公民編—』（文部科学省）を手元に用意しておくことがのぞましい。

◆レポート作成上の注意点

(1) について：1000字は、写真などをのぞくと、高等学校の標準的な教科書の2ページ程度のボリュームである。したがって、できるかぎり要点を絞って書くことがのぞまれる。いずれのテーマも、できるかぎり多角的なアプローチで考察してほしい。

(2) について：かならずしも学習指導案の形式をとる必要はないが、第三者からみて、授業の流れとそのようなすがわかるような構成となるように工夫すること。板書案は、黒板の形の長方形を描き、分割や文字の配置などがわかるように記述する。また、授業の基本は、教師側からの問題提起（発問）とそれに対する生徒の応答である。つねに生徒が積極的に授業に参加できるような仕掛けを盛り込んでほしい。全体の授業時間（基本は1コマ50分）の配分も念頭において計画すること。

なお、インターネットで検索した資料を利用することは差し支えないが、参照したホームページのURLと、アクセスした日付を明記することがルールであるのは言うまでもない。

◆成績評価方法

科目試験による。

社会科・公民科教育法Ⅰ

2 単位

P045-1991

市販書採用科目

◆テキスト

唐木清志編著『「公民的資質」とは何か—社会科の過去・現在・未来を探る—』東洋館出版社、2016年

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

学習指導要領に示された中学校社会科、高等学校公民科の目標および内容を理解する。

〔授業の概要〕

中等社会科・公民科の変遷とその理論・実践研究を基礎としながら、生徒の実態をふまえた上でいかなる授業を構想することが可能か。背景となる学問領域と関連させながら教科書分析を初めとする教材研究を深め、講義や討論、班活動、発表、機器の使用などの授業形態を選択し、生徒の多様な学習のあり方を「評価」することが本講義の最終的な目標である。

〔授業計画〕

指定テキストの構成は以下のとおりである。

第1章 公民的資質の〈過去〉

第1節 社会科の目標としての「公民的資質」

第2節 学習指導要領の変遷にみる「公民的資質」

第Ⅱ章 公民的資質の〈現在〉

第1節 小学校社会科における法的リテラシーの育成を目指す授業の構想

第2節 未来を創る子どもたちと社会科授業

第3節 暮らしの中にある問題を発見し、よりよい暮らしを求めて考え合う

- 第4節 暫定的ながらも創造的な市民としての基礎
- 第5節 地域をともにつくる学びによる公民的資質の追求
- 第6節 社会的レリバンスを高める地理授業をデザインする
- 第7節 多文化社会を形成する市民の育成
- 第8節 民主主義社会の主体的な担い手を育てる
- 第9節 学習者の多様性をふまえた市民性教育の実現
- 第10節 社会科における社会参加を踏まえた公民的資質の育成
- 第11節 東アジアに生きる市民の育成
- 第12節 「社会」とつながるための公民的資質の育成

第Ⅲ章 公民的資質の〈未来〉

- 第1節 社会科教育改革と公民的資質
- 第2節 社会科の未来と公民的資質の役割

◆テキストの読み方

内容をうのみにせず、批判的に検討すること。

◆履修上の注意

テキストだけで学習は成立しない。参考文献にも積極的に目を通すこと。

◆関連科目

履修者自身が関連すると考え得るすべての科目。

◆レポート作成上の注意点

履修者の経験則のみをもとにした根拠なき議論は認めない。

◆参考文献

- ・白井嘉一・柴田義松編著『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』学文社、2009年
 - ・中学校社会科「公民的分野」の教科書（各地の「教科書取次店」で入手可能。）
 - ・文部科学省『中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』
- （学習指導要領およびその解説は文部科学省のホームページからダウンロード可能。）

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

社会科・地理歴史科教育法特論Ⅱ 2単位

P022-9992

市販書採用科目

◆テキスト

- 白井嘉一・柴田義松編著『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』学文社、2009年
- 小池俊夫・古屋野素材『「新しい社会科」を創る（修正版）』学芸図書、2000年
- ※『「新しい社会科」を創る（修正版）』は、絶版のため大学を通しての購入申込はできません。入手困難な場合は、『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』のみを用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

社会科教育はその成立した当初から、初等教育（小学校）と中等教育（中学校及び高等学校）の間で教育方法や取り扱う内容などに関して異なった考え方が存

在していた。これは当時の文部省にあって担当した調査官の相違などによるところも大きい。しかしながら、小学校から高校までの教育で児童・生徒に社会をどう認識させるかといった共通した理解の下に、社会科ではどういった内容をいかに学ばせるかを検討してきた歴史がある。ところが平成元年版の学習指導要領改定からは、小学校低学年（一年・二年）では生活に変更され、高等学校では地理歴史科と公民科に解体されることとなったのである。

本科目「社会科・地理歴史科教育特論Ⅱ」では、地理歴史科という解体された対象である地理と歴史に焦点をあて、特に歴史教育について検討してもらいたい。それは現在でも政治問題となるのが常に歴史教育に関することであるようにもっとも社会から注目されるものであるからである。

もちろん地理歴史科という教科はその関係性を重視して教育することが求められており、すなわち空間的把握の地理と時系列的把握の歴史の連関する視点から社会認識を深めようとしているものである。

本科目指定のテキストと参考書を参照するときには、こういった観点を意識して学んでもらいたい。

◆参考文献

歴史教育に関して問題意識を深めるためには、家永三郎の著作を読んでほしい。『一歴史学者の歩み』は比較的手に入れやすいので必読である。

- ・家永三郎『一歴史学者の歩み』岩波現代文庫、2003年。
- ・家永三郎『家永三郎集』第1巻～第16巻、岩波書店、1997年～1999年。

また、学習指導要領は学校教育における国の教育内容の基準であるので必ず目を通しておくこと。下記した学習指導要領解説とは文部科学省が法規の一種である学習指導要領の内容を理解してもらうために項目ごとに解説したものであり運用するときの参考となるものである。

- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』（平成20年9月）、日本文教出版。
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（平成22年6月）、教育出版。

◆レポート作成上の注意点

1 について：社会科教育としての歴史教育とは、どのようなものだろうか。家永三郎は参考に上げた著作以外に『検定不合格日本史』（三一書房）を出版（絶版）した。これは、教科書検定で不合格になった教科書を一般出版物として刊行したものであるが、元々教科書であるため、そこには学び方などが記載されている。こうしたものも参考として家永三郎の考え方を整理するとよい。また、レポート記載に当たっては、現在の歴史教育に関する政治家の発言なども取り入れながらあなたの考えをまとめてもらいたい。歴史観については、どのような立場（価値観）であつてもそれを評価の観点にしないので自由に記載してもらいたい。

2 について：学習指導案作成に関しては、指定テキストの中にあるものを参考として工夫してほしい。インターネットで調べると教育委員会などで作成したものも見られるのでいろいろな書き方があることも学べるだろう。

今回のレポートについては、学習指導要領の指定の

内容の部分は教科書で見ると多様な問題を分けて記述しているのがわかると思う。こういったテーマでもかまわないが、世界と日本といった観点と現代史としての授業は守ること。また授業については、資料として写真その他を使用するほか、博物館見学や施設見学を含めた授業構成でもかまわない。

◆成績評価方法

科目試験による。

社会科・公民科教育法特論Ⅱ 2単位

P024-9992

市販書採用科目

◆テキスト

白井嘉一・柴田義松編著『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』学文社、2009年

小池俊夫・古屋野素材『「新しい社会科」を創る（修正版）』学芸図書、2000年

※『「新しい社会科」を創る（修正版）』は、絶版のため大学を通しての購入申込はできません。入手困難な場合は、『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』のみを用いて学習しても構いません。

◆講義要綱

戦後新たに誕生した社会科をめぐるのは、いわゆる「問題解決学習」と「系統学習」や、「教育と生活の結合」と「教育と科学の結合」との間で議論が戦わされた。それぞれの主張にはともに戦前の学校教育への反省や当時の社会構造把握が背景としてあり、とうてい単純な二項対立図式で説明しきれものではない。しかし安易に両者の「統合」「止揚」を試みると、問題が教育方法の好みに矮小化され、「子ども」や「人間」理解までも射程に入れたこれまでの議論の蓄積や優れた実践の到達点を台無しにしかねない。

そこで本講義では、教育方法の流行り廃りに惑わされず社会科の授業づくりを構造的に捉える第一歩として、「教師のねらいの明確化＝教科内容研究」と、「子どもたちの論理の明確化＝現代の子ども研究」の在り方を考えるものである。その成果をどのように「統合」「止揚」するかは、受講生各位の努力に期待したい。

なお、指定テキストの構成は以下のとおりである。

第1章 中等社会・地歴・公民科教育の歴史

第2章 中等社会科カリキュラムの内容と構造

第3章 中等社会科・地歴・公民科の授業づくりと方法

第4章 中等社会科教育の課題

◆参考文献

①石田雄『社会科学再考―敗戦から半世紀の同時代史―』東京大学出版会、1995

②井ノ口貴史、子安潤、山田綾編『授業づくりで変える高校の教室1 社会』明石書店、2005

③上田薫『学力と授業』黎明書房、1982

④谷川彰英『戦後社会科教育論争に学ぶ』明治図書、1988

⑤東井義雄『村を育てる学力』明治図書出版、1957

⑥中西新太郎『人が人のなかで生きてゆくこと―社会をひらく「ケア」の視点から―』はるか書房、2015

⑦マックス・ウェーバー『職業としての学問』尾高邦雄訳、岩波書店、1999

◆レポート作成上の注意点

参考文献のうち、⑥、⑦は必読。

◆成績評価方法

科目試験による。

英語科教育法

3単位

P040-1791

市販書採用科目

◆テキスト

石田・小泉・古家『新しい英語科授業の実践』金星堂、2013年

◆講義要綱

英語科の教員として必要となる英語教育学の理論と実践について教科書および参考書を通して学ぶ。特に、日本の学校英語教育における目的論、カリキュラム論、教材論、学習者論、教授法、評価方法、4スキル・文法等の指導実践に関する各論を研究する。また、教育実習に備え、教案（英語版）の作成方法も学習して欲しい。

◆テキストの読み方

常に実践を意識しながら、しっかりと読んで「基本」を学んでほしい。なお、講義要綱に記載の分野（目的論・カリキュラム論・教材論・学習者論・教授法・評価・指導実践各論）については、複数の参考書を使い、その理解を深めてほしい。

◆履修上の注意

履修上の条件は特に無いが、教職に関する科目（特に教育心理学・教育方法論・学校カリキュラム論等に関連する科目）や、教科に関する科目（特に英語学・言語学・英米文学・比較文学などに関連する科目）等と同時にしはその履修後にとりかかえることを勧める。

◆関連科目

上記（「履修上の注意」）参照。

◆参考文献

文部科学省『小学校学習指導要領』

文部科学省『中学校学習指導要領』

文部科学省『高等学校学習指導要領』

文部科学省『中学校学習指導要領解説―外国語編―』

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』

（なお、これらの学習指導要領については、最新のものを入手するか文部科学省のホームページから最新のものをダウンロードすることもできる）

浅羽亮一他著『わかりやすい英語教育法〔改訂版〕小中高での実践的指導』三修社、2013年

石田雅近他編『英語教師の成長：求められる専門性』大修館書店、2011年

JACET 教育問題研究会編『新しい時代の英語科教育の基礎と実践』三修社、2012年

JACET SLA 研究会編著『第二言語習得と英語科教育法』開拓社、2013年

木村松雄編『新版英語科教育法：小中高の連携―EGPからESPへ』学文社、2011年

三浦省五・深沢清治編『新しい学びを拓く英語科：授業の理論と実際』ミネルヴァ書房、2009年

望月昭彦編『改訂版新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店、2010年

村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年

村野井仁『統合的英語科教育法』成美堂、2012年

高橋一幸『成長する英語教師』大修館書店、2011年
土屋澄男編著『新編英語科教育法入門』研究社、2011年

(以上の参考書については、改訂されている場合は、新学習指導要領に基づくものを利用すること。)

◆レポート作成上の注意点

課題1は英語で書くこと。教育実習生の英語力の低下が現場では問題となっているので、英語の辞書や英語そのものに関する参考書を使い、英語の教員としてふさわしい完璧な英語で作成して欲しい。また、教案は人に見てもらえることが多いので、第三者がみても分かり易いフォーマットで作成すること。

◆成績評価方法

科目試験による。

英語科教育法 I

2単位

P046-1991

市販書採用科目

◆テキスト

岡田圭子他(編著)(2015)『基礎から学ぶ英語科教育法』松柏社

◆講義要綱

[授業の到達目標及びテーマ]

将来、英語教育に携わろうと思うものを対象に、中学校及び高等学校における外国語(英語)の学習・指導に関する知識と授業指導及び学習評価の基礎を身に付けさせることを授業目標とする。大枠としては、受講者が、カリキュラム・シラバスに関するもの、生徒の資質・能力を高める指導にかんするもの、授業づくりに関するもの、学習評価に関するもの、及び第二言語習得に関するものを学習し、理解し、そして実際の授業指導に生かすことができるような力を養うことが本授業の到達目標である。

[授業の概要]

内容的には、英語科教育法の理論的側面(目的論、カリキュラム論、教材論、学習者論、教授法論、評価方法論など)や、英語科教育法の実践的側面(教育実習への準備を目的として、学習指導案の書き方、4技能(スピーキング、リスニング、リーディング、ライティング)・文法・語彙・実践的コミュニケーション能力の指導法、ITの活用)を扱う。

[授業計画]

指定教科書の構成は以下の通りである。

第1章 英語教育の目的 Purposes of English Education

- 1 グローバル社会と英語
- 2 日本の英語教育史
- 3 現在の英語教育政策

第2章 英語教師論 Becoming a Good Language Teacher

- 1 求められる資質・能力

2 授業実践上の課題

3 教師の成長

第3章 学習者論 Becoming a Successful Learner

1 学習者要因

2 学習ストラテジー

3 学びのトレーニングの必要性

第4章 言語習得と言語教育 Language

Acquisition and Language Teaching

1 第一言語習得

2 第二言語習得

3 第一言語習得と第二言語習得を比較する…外国語教育の視点から

4 英語教育のここを疑ってみよう

第5章 教授法 Ways of Teaching

1 教授法に関する言葉の定義

2 意識的な文法理解

3 無意識に使えるまで繰り返す

4 コミュニケーションによる第二言語習得

5 学習者をリラックスさせよ

6 学習の焦点はどこにあるのか

第6章 学習指導要領 The Courses of Study

1 学習指導要領とは何か?

2 現行学習指導要領の要点

3 何を教えればよいのか?

第7章 リスニング指導 Teaching Listening

1 リスニングとは何か?

2 リスニング指導の目標

3 リスニングの指導過程

4 リスニング指導のアクティビティ

5 上手な聞き手とは

第8章 スピーキング指導 Teaching Speaking

1 スピーキングとは何か

2 スピーキング指導の目標

3 教室でのスピーキングのタイプ

4 スピーキング指導の具体例

5 上手な話し手とは

第9章 リーディング指導 Teaching Reading

1 リーディングとは何か?

2 リーディング指導の目標

3 リーディングの指導過程

4 リーディング指導のアクティビティ

5 上手な読み手とは

第10章 ライティング指導 Teaching Writing

1 ライティングとは何か?

2 ライティング指導の目標

3 文字と単語

4 英文を書く

5 パラグラフを書く

6 上手な書き手とは

第11章 4技能と音声・語彙・文法指導

Teaching the Sounds, Words, and Grammar for the Four Skills

1 コミュニケーション能力

2 4技能のための音声指導

3 4技能のための語彙指導

4 4技能のための文法指導

5 定型表現とやりとりの仕方の指導

第12章 教材研究 Materials Development

- 1 教材内容の研究
- 2 指導方法の研究
- 3 教材の評価

第13章 指導案 Lesson Plans

- 1 2種類の指導案
- 2 指導案に書くべきこと
- 3 指導案作成で心がけるべきこと

第14章 ティーム・ティーチング

Team Teaching

- 1 Team Teaching の基礎知識ときまり
- 2 JTL と ALT の役割
- 3 ALT との人間関係
- 4 TT の授業の実際
- 5 TT の 3Rs (Rules, Roles, and Relationships) と教師の成長

第15章 評価とテスト

Assessment and Testing

- 1 評価に関する用語の定義
- 2 さまざまな評価とテスト
- 3 テスト作成の条件
- 4 4技能の評価
- 5 筆記テスト以外の評価

第16章 教育実習 Teaching Practicum

- 1 教育実習の意義と目的
- 2 教育実習ですべきこと
- 3 教育実習の心構え

第17章 今後への展望 Outlook on English

Education in Japan

- 1 英語教育の今後への展望
- 2 英語教師に求められる資質能力とは何か？

◆テキストの読み方

常に実践を意識しながら、しっかりと読んで「基本」を学んでほしい。なお、講義要綱に記載の分野（目的論・カリキュラム論・教材論・学習者論・教授法・評価・指導実践各論）については、複数の参考書を使い、その理解を深めてほしい。

◆履修上の注意

履修上の条件は特に無いが、教職に関する科目（特に教育心理学・教育方法論・学校カリキュラム論等に関連する科目）や、教科に関する科目（特に英語学・言語学・英米文学・比較文学などに関連する科目）等と同時に履修後にとりかかることを勧める。

◆関連科目

上記（「履修上の注意」）参照。

◆レポート作成上の注意点

課題1は英語で書くこと。教育実習生の英語力の低下が現場では問題となっているので、英語の辞書や英語そのものに関する参考書を使い、英語の教員としてふさわしい完璧な英語で作成して欲しい。また、教案は人に見てもらおうことが多いので、第三者がみても分かり易いフォーマットで作成すること。

◆参考文献

文部科学省（2017）『小学校学習指導要領』
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領』
文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって

評価する。

英語科教育法特殊 I

2 単位

P047-1991

市販書採用科目

◆テキスト

鈴木渉（編）（2017）『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

英語科教育法で学んだ学習項目のうち、「第二言語習得研究」の知見をもとに、「生徒の資質・能力を高める指導」、「評価」について、理論に基づく実践を学び、授業指導に生かすことを学ぶ。

〔授業の概要〕

本テキスト科目の教科書・参考書を使い、第二言語習得のプロセスについて、授業実践への活用を念頭に、文法指導、リーディング指導、リスニング指導、ライティング指導、スピーキング指導、協同学習、音声指導、語彙指導、語用論指導、個人差に対応した指導、評価、複数の領域を統合した言語活動の指導等について研究し、レポートや指導案の作成を通じて、実際の授業指導に生かすことを学ぶ。

〔授業計画〕

指定教科書の構成は次の通り。

第1章 文法指導はどのように変わってきたか

第2章 目標項目を目立たせよう——インプット強化

第3章 目標項目の処理を手助けしよう——処理指導

第4章 話す活動と文法指導——フィードバック

第5章 ライティングのフィードバックの効果

第6章 タスクを効果的に用いよう

第7章 ペア・グループワークの潜在力を引き出そう

第8章 発音指導

第9章 語彙指導

第10章 語用論指導

第11章 個人差とコンテキスト

第12章 指導の評価——スキル学習理論の観点から

第13章 まとめ——フォーカス・オン・フォームの指導

◆テキストの読み方

まずはテキスト全体を読み、大まかな内容を理解してから、レポート課題に取り組むこと。レポート課題は、基本、教科書の複数の章に関連する出題となっている。該当の章については、教科書に加え、下記参考書や必要な関連文献を参照し、深く学んだうえで、レポートを作成して欲しい。

◆履修上の注意

本講座は、旧課程の英語科教育法（テキスト科目またはスクーリング科目）ないしは新課程の英語科教育法 I（テキスト科目）の内容を学習したことを前提とした科目であり、これらの科目を履修した後に履修することが望ましい（レポートの課題内容も、これらの科目の学習内容を踏まえた出題となる）。

◆関連科目

旧課程：英語科教育法
新課程：英語科教育法 I

◆参考文献

中学校及び高等学校課程英語科検定教科書
文部科学省（2017）『小学校学習指導要領』
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領』
文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

◆レポート作成上の注意点

論文・レポートの書き方をしっかり学び、自分のオリジナルな見解と参考・引用した部分を明確にして作成すること。

新・道徳教育論

2 単位

P051-1991

市販書採用科目

◆テキスト

松下良平『道徳教育はホントに道徳的か？―「生きづらさ」の背景を探る』日本図書センター、2011年。

平成27年度3月改定版中学校学習指導要領第3章「特別の教科道徳」、および中学校学習指導要領解説特別の教科道徳篇（いずれも文科省ホームページからPDFファイルをダウンロードして入手できる。）

◆講義要綱

本科目は、中学校教育職員免許状取得を念頭に、学校の教育活動全体を通じて行うものとされる道徳教育について多角的に考察することを目的とする。

古来より哲学・倫理学が問うてきた道徳教育に関するいくつかの問題は、客観的かつ一義的な回答が得られる類の問題ではない。道徳教育を実施するに当たっては、そのような問いに対して各教師が自覚的になったうえで教育目標や方法を設定する必要があると考えられる。そのためには、各自が学習指導要領を批判的に読み、その問題点を明らかにしなければならない。それはつまるところ、自分が現に生きている「道徳」を一旦自分自身から引き離して俯瞰視する作業を欠くことができない、ということでもある。したがって、本科目の受講にあたっては多量の読書と多量の考察が避けられないことを記しておく。

◆参考文献

宇佐美寛『「道徳」授業に何ができるか（教育新書）』明治図書、1989年
パオロ・マッツァリーノ『みんなの道徳解体新書』ちくまプリマー新書、2016年
堀越英美『不道徳お母さん講座 私たちはなぜ母性と自己犠牲に感動するのか』河出書房新社、2018年
越野章史『市民のための道徳教育―民主主義を支える道徳の探求―』部落問題研究所、2016年
藤川大祐『道徳教育はいじめをなくせるのか 教師が明日からできること』NHK出版、2018年
藤川大祐『道徳授業の迷宮～ゲーミフィケーションで

脱出せよ～』学事出版、2018年

木野正一郎『新発想！道徳のアクティブ・ラーニング型授業はこれだ』みくに出版、2016年
宮澤弘道、池田賢市『「特別の教科 道徳」ってなんだ？』現代書館、2018年

生田武志、北村年子『子どもに「ホームレス」をどう伝えるか いじめ・襲撃をなくすために』太郎次郎社エディタス、2013年

大森直樹『道徳教育と愛国心』岩波書店、2018年
浪本勝年ほか編『史料 道徳教育を考える（4改訂版）』北樹出版 2017年等

◆レポート作成上の注意点

テキスト、学習指導要領とその解説編に加え、その他参考文献に挙げた書籍を少なくとも2冊以上じっくり読み込んで、学習指導要領に対して自らの意見を持ったと自覚できた時点で書き始めること。

当方が参考文献に指定していない書籍を加えて読むことは一向にかまわないが、いわゆる道徳教育の「教科書」として書かれた書物は読むだけ無駄なものも多い。できれば道徳教育に関する概説的な書物を選び、特定のテーマについて論じた書物を選ぶとよい。

◆成績評価方法

科目試験による。

特別活動論

2 単位

P031-0492

市販書採用科目

◆テキスト

高旗正人・倉田侃司編著『新しい特別活動指導論〔第2版〕』ミネルヴァ書房、2011年。

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

本科目では、特別活動の教育的意義や役割について考察し、教員としての基礎的な力量を養うことをねらう。特別活動の教育課程上の位置づけや内容・指導方法、評価などの特質から、教育的意義や役割について考えていく。到達目標は次の通りである。

○特別活動の意義をとらえ、この目標と内容を理解することができる。

○特別活動における各活動・学校行事の特質をとらえ、指導法を理解することができる。

〔授業の概要〕

本科目では、特別活動の教育課程上の位置づけや内容、指導方法、評価などの特質から、人間形成における特別活動の意義や役割について概観する。

〔授業計画〕

学年の違いによる活動の変化や他教科との関連、「チーム学校」としての家庭・地域との連携という観点からも特別活動の特質について学ぶ。本科目では、特別活動の教育的意義や役割について考察することを通して、各活動・学校行事の特質やそれぞれの指導法を理解し、教員としての基礎的な力量を養うことを目的としている。指定教科書の構成は次の通りである。

序 章

第1部 特別活動の考え方・進め方

第1章 特別活動の目標

第2章 学級活動（ホームルーム活動）

第3章	児童会・生徒会活動
第4章	学校行事
第5章	クラブ活動と部活動
第2部	新しい学校と特別活動の課題
第6章	特別活動の今日的課題
第7章	「総合的な学習の時間」と特別活動
第8章	教科指導と特別活動の関連
第3部	特別活動を考えるための基礎
第9章	学級・学校集団の理論
第10章	特別活動の歴史
終章	

◆履修上の注意

各教科、「特別の教科 道德」、総合的な学習の時間の指導法など、関連諸分野への幅広い関心が求められる。

◆参考文献・Web サイト

文部科学省『中学校学習指導要領』東山書房、2018年。

文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別活動編』東山書房、2018年。

文部科学省『高等学校学習指導要領』（www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf）

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407196_22.pdf）

◆レポート作成上の注意点

文部科学省ホームページ、参考文献を参照し、新学習指導要領（中学校：平成29年告示、高等学校：平成30年告示）の内容と比較・考察しながら、テキストを読み進めてください。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

特別支援教育論

2 単位

P048-1991

市販書採用科目

◆テキスト

山本淳一・池田聡子（2005）『応用行動分析で特別支援教育が変わる：子どもへの指導方略を見つける方程式』図書文化社

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

特別な教育支援を必要とする幼児、児童、生徒の特性を把握し、自分のことばで論述できるようにする。同時に、学習、生活、対人関係が難しくなる要因を理解し、その困難を解消するための教育方法を習得し、自分のことばで論述できるようにする。このような学習を通して、系統的な対応方法を計画し、論理的な文章で提案できるようにする。さらに、通常学級はじめ、様々な学校、学級に在籍している発達障害や知的障害のある幼児、児童、生徒が達成感を持ちながら授業に参加し、学んでいくことができる教育環境について、論理的な文章で提案できるようにする。また、その他

の様々な障害、環境要因による教育的ニーズのある幼児、児童、生徒の実情と教育方法を、論理的な文章で提案できるようにする。全体を通じて、他の教員、関係機関、保護者と連携しながら組織的に対応する具体的な方法を、論理的な文章と概念図で提案できるようにする。

〔授業の概要〕

テキストを読み込むことで、以下の観点から、全ての学習項目を確実に習得していく。特別支援教育の理念と仕組みについて学ぶ。発達障害、知的障害について、その特性、困難さを、具体的な授業や学校場面で正確に把握するための方法と、教育支援方法を習得する。その他の様々な障害、環境要因による教育的ニーズのある幼児、児童、生徒について考察を深める。個別指導計画・個別教育支援計画の作成方法を学ぶ。他の教員、関係機関、保護者と連携する方法について、具体的に理解する。

〔授業計画〕

特別支援教育には、以下の点の理解と習得が必須である。幼児、児童、生徒の特性。学校での学習、生活、対人関係のあり方の把握とアセスメント方法。実際の場面での具体的な教育支援方法。他の教員、関係機関、保護者との連携方法。本授業では、その基本を習得し、様々な場面で応用、活用できるように学習を深める。常に具体的な例を思い浮かべながら自分のことばで論述できるようにする。そのため、指定教科書を、詳細にわたって読み込み、理解すると同時に、その内容を自分のことばに置き換えてまとめる学習が必要である。指定教科書には、「学校生活チェック表」「気になる子どもシート」など、学校で活用するためのシートが掲載されている。テキストに書かれている事例などを参考にして、実際の学校場面を想定し、書き入れる練習を繰り返す。指定教科書で扱う本授業の学習項目は、次のとおりである。学習項目の記載順序は、コアカリキュラムの到達目標の記載順序に準じている。（ ）内は各学習項目を扱う指定教科書の節、指定教科書収録のシートの名称である。

1. 特別支援教育・インクルーシブ教育の理念
（特別支援教育の現状と応用行動分析）
2. 特別支援教育・インクルーシブ教育の仕組み
（支援を支えるシステム）
3. 発達障害の理解
（個人と環境の相互作用をみる、通常学級における特別な教育ニーズの理解：「学校生活チェック表」の活用）
4. 様々な障害の理解
（個人と環境の相互作用をみる：「学校生活チェック表」の活用）
5. 特別支援教育の教育課程と支援方法
（特別支援教育の流れ：「学習評価シート」の活用、「学校生活チェック表」の活用）
6. 特別支援教育（学習）の支援方法
（授業における学習の評価と支援、ABC 教育技法、よい行動を伸ばす教育支援技法：「学習評価シート」の活用）
7. 特別支援教育（生活・対人関係）の支援方法
（生活・対人関係についての支援、ABC 教育技法、よい行動を伸ばす教育支援技法：「学校

生活チェック表」の活用)

8. 様々な指導形態：「通級による指導」と「自立活動」
(支援を支えるシステム、支援を支える人々との連携)
9. 個別指導計画・個別教育支援計画の作成の意義
(個別指導計画の作成とモデル：「個別の指導計画シート」、「個別の教育支援計画シート」の活用)
10. 個別指導計画・個別教育支援計画の作成の方法
(個別指導計画の作成とモデル：「個別の指導計画シート」、「個別の教育支援計画シート」の活用)
11. 特別支援教育コーディネーターとの連携
(特別支援教育コーディネーターの役割と実際の活動)
12. 関係機関・家族との連携
(支援を支える人々との連携：「気になる子どもシート」、「校内用子どもの基礎情報シート」、「保護者との個別相談表」、「家庭生活チェック表」)
13. 様々な教育ニーズへの支援の実際：障害のある幼児・児童・生徒への支援
(ABC 教育技法、よい行動を伸ばす教育支援技法：「気になる子どもシート」、「校内用子どもの基礎情報シート」)
14. 様々な教育ニーズへの支援の実際：障害以外の教育的ニーズのある幼児・児童・生徒への支援
(ABC 教育技法、よい行動を伸ばす教育支援技法：「気になる子どもシート」、「校内用子どもの基礎情報シート」)
15. 様々な教育ニーズへの支援の実際：問題解決の技法
(問題行動への対応と支援：「問題行動分析シート」、「問題行動解決シート」)

注) 視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱など、および環境要因による教育ニーズ、ならびにインクルーシブ教育に関しては、基本的な教育支援方法はテキストの内容と共通であり、その内容を理解することで習得できるが、上記の各障害特性のアセスメント、各障害に対応した支援方法、最新の知見については、下記にあげる参考書やその他の本を参考に学習をすすめていただきたい。

◆テキストの読み方

テキストに出てくる専門用語を自在に使えるようにしましょう。

◆レポート作成上の注意点

具体的な学校の様子を思い描きながら、作成してください。

◆参考文献

柘植雅義(編)(2017)『特別支援教育の到達点と可能性—2001～2016年：学術研究からの論考』金剛出版

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

教育方法論

2単位

P039-1691

市販書採用科目

◆テキスト

岩川直樹編『教育の方法・技術』学文社、2014年
メディア教育開発センター『教師の力量アップをめざして ICT 編』(DVD 教材)放送大学教育振興会、2005年

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

教育の方法や技術、教材活用についての基礎的理論と、さまざまな実践例を理解する。

〔授業の概要〕

主体的・対話的で深い学びの実現にむけて、さまざまな教育方法や技術が生み出されてきた歴史や現在の日本各地の実践例を学び、自分で学習指導案を作成して模擬授業をおこなえるようにする。

〔授業計画〕

第1回：教育方法とは(テキスト第1章)

第2回：教育方法の基礎的理論(同第1章3・4節)

第3回：カリキュラム論からみた教育方法(第3章1・2節)

第4回：学習形態からみた教育方法(第3章3・4節)

第5回：教育方法の実践例—ICTの活用からみた教育方法(同第4章)

第6回：教育方法の実践例—ジェンダーの観点からみた教育方法(同第5章)

第7回：学習評価の考え方(同第6章)

第8回：省察的思考による教育方法(同第7章)

第9回：教育方法の歴史と改善(同第8章) 学習指導案を作成しよう—導入と展開の工夫

第10回：形成的評価を実現する個別学習の事例—DVD 教材チャプター1

第11回：情報機器を活用した教育方法の事例—DVD 教材チャプター2

第12回：情報機器を活用した教材開発の事例—DVD 教材チャプター3

◆テキストの読み方

冒頭の第1章と、最後の第8章が、総論となっています。教育の方法を探究するとはいったいどういうことでしょうか。教育方法観そのものが多様であること、一つ一つの教育方法が各時代の政治・経済・文化と深く結びついていることを、まず理解してください。

第2章から第7章は、教育の方法を、特定の角度から具体的に考察した内容になっています。子どもの学びをどのように観察し、どう子どもにフィードバックするか、子どもに向き合う教師自身の考え方や価値観をどう振り返るかなど、各論の内容をそれぞれよく理解してください。

各論の内容を具体的に理解するためには、以下に示す具体的な教育実践に関する参考書をあわせて読むと参考になります。

そのうえで、もう一度、冒頭の1章と、最後の8章を読みましょう。二回目に読むと、総論がどのようなことか、認識が深まることでしょう。

◆履修上の注意

教材はテキストとDVDです。両者を十分に活用してください。DVD教材については、すべて視聴すること。

◆参考文献

稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店、1996年

金森俊朗『希望の教室—金森学級からのメッセージ』角川書店、2005年

金森俊朗『町にとびだせ探偵団—お米と水をさぐる』ゆい書房、1994年

小林光彦『格差を越える中学校—荒れの克服と学力向上』解放出版社、2008年

志水宏吉『公立学校の底力』ちくま新書、2008年

仁藤夢乃『難民高校生』英治出版、2013年

青砥恭『ドキュメント高校中退』ちくま新書、2009年

◆レポート作成上の注意点

また、レポートおよび試験については、具体的な実践例を文献等で調べてから臨み、必ず実践例を引用しながら論じてください。

具体的な実践例とは、例えば〇〇学校の〇〇教諭による〇年生〇〇科の〇〇という授業または△△という取り組み、あるいは〇〇氏によるルポルタージュによる△△の事例、といった具合の具体さを求めます。実践例としては、まず以下に列挙した参考文献を手がかりにしてください。

レポート文中の引用に際しては、文献を最後に記すだけでなく、必ず記述ごとに脚注をつけ、その記述内容がどの文献を根拠にしているのかをはっきりわかるようにしてください。脚注およびレファレンスが不十分なレポートは不合格になりますのでご注意ください。

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。

生活指導論

2単位

P037-1192

市販書採用科目

◆テキスト

折出健二編『教師教育テキストシリーズ13——生活指導 生き方についての生徒指導・進路指導とともに』改訂版、学文社、2014年

◆講義要綱

個々の生徒の「問題行動」の背後には、しばしば、深刻で多様な矛盾を含む社会の現実がある。この事実は、今日、いかなる具体的様相を呈しているか。また、それらの諸矛盾の克服が課題として提起されるように生徒たちの学習を共同化しようとするとき、教師たちはどのような手だてを講じるべきか。こうした問題に答えを出すべく、生活指導、進路指導、教育相談の理論と方法を学びながら、子どもたちのあいだに関わり合いとしての集団が組織されることの重要性について、理解を深めよう。

◆テキストの読み方

テキストの内容を十分に理解するには、少なくとも、すべての章（巻末の実践編を含む）について、その章

の内容を的確に要約するようなノートを作るべきである。印象に残りやすかったところだけを断片的に書き留めるのではなく、章の表題や小見出しも手掛かりにして、各節の内容や複数のキーワードが互いにどう関わっているのかというところまで、しっかり考えるようにするのがよい。また、満足なレポートを書くためには、参考文献を読むことによってテキストの内容に関する理解を補うことも欠かせない。

◆参考文献

岩川直樹・伊田広行編著『未来への学力と日本の教育 8——貧困と学力』明石書店、2007年

照本祥敬・加納昌美編著『シリーズ教師のしごと 3——生活指導と学級集団づくり 中学校』高文研、2015年

◆レポート作成上の注意点

『塾生ガイド』を読んで所定の字数制限を踏まえるように。講義要綱は、レポートを書き上げたときにも、読み返してみるとよい。

◆成績評価方法

科目試験による。

生徒指導論（進路指導を含む）²単位

P037-1992

市販書採用科目

◆テキスト

折出健二編『教師教育テキストシリーズ13——生活指導 生き方についての生徒指導・進路指導とともに』改訂版、学文社、2014年

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

学際的な生活指導の研究成果に学びながら、学校における生徒指導、進路指導及びキャリア教育の理論と方法に関する知識を修得する。市民的自立と職業的自立の両方を含んで子どもの人格の完成を指導するには、どうしたらよいか。そのような指導を進めるために学校内外の連携を構築し、教育活動全体の改善を行うにはどうしたらよいか。これらの問題について、学校と社会の接続に焦点をあて、自ら考えを展開できるようになることを目標とする。

〔授業の概要〕

個々の生徒の「問題行動」の背後には、しばしば、深刻で多様な矛盾を含む社会の現実がある。この事実は、今日、いかなる具体的様相を呈しているか。また、それらの諸矛盾の克服が課題として提起されるように生徒たちの学習を共同化しようとするとき、教師たちはどのような手だてを講じるべきか。こうした問題に答えを出すべく、学際的な生活指導の研究に視野を広げ、生徒指導・進路指導及びキャリア教育の理論と方法を学びながら、子どもたちのあいだに関わり合いとしての集団が組織されることの意味を検討する。

〔授業計画〕

テキスト（主として科目試験を受けるのに必要）と参考書（主としてレポートの添削を受けるのに必要）に即して学修を指導する。各書の構成は以下のとおり。〈テキスト〉

第1章 現代の生活指導と子ども観

第2章 子どもの権利と生活指導

補 論	懲戒・体罰、出席停止、ゼロトレランス
第3章	今日の学級の意義と生活指導—生活集団と学習集団
第4章	学びの共同性と生活指導
第5章	発達障害児の理解と生活指導
第6章	子ども虐待と生活指導
第7章	子どもの生き方と進路指導
第8章	家庭・地域の問題と教育相談
第9章	市民的自立の課題と教師の指導性
第10章	いじめ問題と生活指導
実践編1	子どもたちとの出会いと生活指導
実践編2	思春期の課題とクラスづくり
実践編3	暴力と非行に取り組む
〈参考書 (1)〉	
第1章	生活指導の原理
第3章	生活指導の展開
第11章	進路指導・キャリア教育と生活指導
〈参考書 (2)〉	
プロローグ	
第1章	子どもと若者の進路をめぐる状況
第2章	なぜキャリア教育が求められるのか
第3章	日本におけるキャリア教育政策の展開
第4章	「政策としてのキャリア教育」の批判的検討
第5章	「権利としてのキャリア教育」の創造へ
エピローグ	
〈参考書 (3)〉	
第1章	生徒指導の意義と原理
第2章	教育課程と生徒指導
第3章	児童生徒の心理と児童生徒理解
第4章	学校における生徒指導体制
第5章	教育相談
第6章	生徒指導の進め方
第7章	生徒指導に関する法制度等
第8章	学校と家庭・地域・関係機関との連携
〈参考書 (4)〉	
第1章	キャリア教育とは何か
第2章	高等学校におけるキャリア教育の推進のために
第3章	高等学校におけるキャリア教育の実践

◆テキストの読み方

「テキスト」の内容を十分に理解するには、少なくとも、すべての章（巻末の実践編を含む）について、その章の内容を的確に要約するようなノートを作るべきである。印象に残りやすかったところだけを断片的に書き留めるのではなく、章の表題や小見出しも手掛かりにして、各節の内容や複数のキーワードが互いに関わっているのかということまで、しっかり考えるようにするのがよい。また、「参考書・参考資料等」を併せて読む際には、生活指導の原理に照らして生徒指導の限界を考えるようにするとよいだろう。

◆レポート作成上の注意点

『塾生ガイド』を読んで所定の字数制限を踏まえるように。本要領の〔授業の概要〕はレポートを書き上げたときにも読み返してみるとよい。なお、レポート課題に答えるには、本要領に掲載されている「テキスト」「参考書・参考資料等」以外にも重要な参考文献があると思って自分で調べるくらいのことが最低限必要である。

◆参考書・参考資料等

- (1) 山本敏郎・藤井啓之・高橋英児・福田敦志『新しい時代の生活指導』有斐閣、2014年。
- (2) 児美川孝一郎『権利としてのキャリア教育』明石書店、2007年。
- (3) 文部科学省『生徒指導提要』教育図書、2010年。
- (4) 文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版、2012年。

◆成績評価方法

レポートの合格を要件として科目試験の成績によって評定する。

教育臨床論

2単位

P038-1591

市販書採用科目

◆テキスト

伊藤直樹編『教育臨床論—教師をめざす人のために—』批評社、2009年

◆講義要綱

教師に必要とされる教育臨床的な視点を理解し、その視点から学校教育で生起している諸現象について考えることができるようになることが目標です。また、その学習過程において基本的な専門用語を知識として身に付けることが求められます。

◆履修上の注意

テキストの内容を単に理解するだけではなく、テキストの論述についてクリティカルに考えることも求められます。

◆関連科目・分野

「青年心理学」、「教育心理学」、「生徒指導論」、「学校カウンセリング」

◆参考文献

伊藤美奈子『スクールカウンセラーの仕事』岩波アクティブ新書、2002年

伊藤美奈子編『思春期・青年期臨床心理学』朝倉書店、2006年

◆レポート作成上の注意点

テキスト、参考文献のほか、関連文献について広く目を通したうえで自分なりの考え方や言葉を大事に論じて頂きたい。教師として学校現場に立った自分を想定し、その目を通して考えて頂きたい。

◆成績評価方法

科目試験による。

教育相談論

1単位

P050-1991

市販書採用科目

◆テキスト

藤田哲也監修『絶対役に立つ教育相談—学校現場の今に向き合う』ミネルヴァ書房、2017年

参考書：テキストの各章に紹介されているので、それらを参考にすること。

◆講義要綱

本科目では、教師による子どもへの援助の在り方や、

不登校・いじめ・学級崩壊など、教育現場の抱える課題、さらには「教育相談」という視点から概観していく。

〔授業の到達目標及びテーマ〕

- (1) 学校における教育相談の意義と理論を理解する。
 - 1) 学校における教育相談の意義と課題を理解している。
 - 2) 教育相談に関わる心理学の基礎理論・概念を理解している。
- (2) 教育相談を進める際に必要な基礎知識（カウンセリングに関する基礎的事柄を含む）を理解する。
 - 1) 幼児、児童および生徒の不適応や問題行動の意味並びに幼児、児童および生徒の発するシグナルに気づき把握する方法を理解している。
 - 2) 学校におけるカウンセリングマインドの必要性を理解している。
 - 3) 受容・傾聴・共感的理解等のカウンセリングの基礎的な姿勢や技法を理解している。
- (3) 教育相談の具体的な進め方やそのポイント、組織的な取り組みや連携の必要性を理解している。
 - 1) 職種や校務分掌に応じて、幼児、児童および生徒並びに保護者に対する教育相談を行う際の目標の立て方や進め方を例示することができる。
 - 2) いじめ、不登校・不登園、虐待、非行等の課題に対する、幼児、児童および生徒の発達段階や発達課題に応じた教育相談の進め方を理解している。
 - 3) 教育相談の計画の作成や必要な校内体制の整備など、組織的な取り組みの必要性を理解している。
 - 4) 地域の医療・福祉・心理等の専門機関との連携の意義や必要性を理解している。

〔授業の概要〕

教育相談は、幼児、児童および生徒が自己理解を深めたり好ましい人間関係を築いたりしながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性の伸張や人格の成長を支援する教育活動である。幼児、児童および生徒の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援するために必要な基礎知識（カウンセリングの意義、理論や技法）を身につけることを目指す。

〔授業計画〕

日々様々な出来事が起こる学校現場で児童・生徒が直面する諸問題に適切に対処するには、心理学と発達の観点から児童・生徒の置かれた状況を的確にとらえ、理論的理解に基づいたより効果的な対応について考えることが重要となる。具体的には幼児、児童および生徒、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、理論的理解に基づいた教育相談を行い支援していくことである。本科目では、教育相談の意義と理論、教育相談の方法、教育相談の展開について総合的に検討し、自らが有効な教育相談のあり方について考えられるようにすることを目標に授業を進めていく。指定教科書の構成は以下の通りである。

序 章：はじめに—教育相談を学ぶ意味—

第1章：生徒理解のための心理学—理論と実践の双方向からの多面的理解—

第2章：アセスメント—多面的に子どもを理解する視点と方法

第3章：カウンセリング—信頼関係を築き、子どもを援助する方法—

第4章：コンサルテーション—より良い指導・援助のための協働—

第5章：ソーシャルスキル教育—人間関係を広げ、深める援助の方法

第6章：ストレスマネジメント教育—様々なストレスに対応する力の醸成

第7章：キャリア教育—自分らしい生き方を作り上げるために

第8章：不登校・中途退学—子どもたちの登校を支える工夫

第9章：いじめ—適切な実態把握と予防・対応に向けて

第10章：発達障害—子どもの発達特性を踏まえた理解と援助

第11章：学校の危機管理—子どもの安全を守る予防と対応

第12章：学級経営による子どもの援助—問題行動と学級崩壊を予防する

◆テキストの読み方

各項目を精読し、教育相談に関するキーワードを自分のものすること。各章の練習問題やアクティヴ・ラーニングに取り組み、章末の解説を参考に理解を深めること。各章で紹介する関連分野の文献も読みすすめること。

◆履修上の注意

自分自身が教師として子どもに接し、実際に教育相談を行う場面を想定しながら学習を進めて欲しい。特に子ども達が学校生活の中で直面する問題や、教育関連分野への幅広い興味関心を持って履修することが大切である。

◆関連科目

本科目の履修条件というわけではないが、生活指導論、生徒指導論や教育臨床論との関連が深いことから、あわせて履修することが望ましい。

◆レポート作成上の注意点

教科書や参考書の内容をまとめるだけ、あるいは文献の切り貼りだけのレポートにならないようにすること。教科書や参考書で理解したこと、自分のものとして十分に咀嚼した上で、それについて自分の考えを必ず入れること。また自分の考えを述べる際には、なぜそう考えるのかという理由や根拠も必ず挙げる。参考文献は、教科書の各章において紹介されている。それらを参考にすればだけでなく、それ以外の文献を参考にしても構わない。文献を引用する場合は、出版社、出版年を含めて、引用したページを銘記し、レポートの末尾に、「参考文献」としてまとめること。ただし「参考文献」は文字数にはカウントしません。

◆成績評価方法

レポートの合格を要件として科目試験の成績によって評定する。

「総合的な学習の時間」教育法 1単位

P049-1991

市販書採用科目

◆テキスト

田村学・原田信之（編著）（2009）『リニューアル総合的な学習の時間』北大路書房

◆講義要綱

〔授業の到達目標及びテーマ〕

「総合的な学習の時間」の意義について考察を深めるとともに、教師として実践できる能力の基礎を身につける。

〔授業の概要〕

テキストの理解と関連する諸問題に対する考察について、レポートを課し、試験を行う。

〔授業計画〕

序章 総合的な学習の時間で育てる力

1 章 新学習指導要領における改訂のポイント

1 節 学習指導要領改訂の趣旨

2 節 総合的な学習の時間の創設と改訂の経緯

3 節 総合的な学習の時間の改訂のポイント

4 節 総合的な学習の時間の改訂の具体像

5 節 自校のカリキュラムの作成

6 節 探究的な学習が行われる授業

7 節 総合的な学習の時間が育成する国際標準の学力

2 章 総合的な学習の時間をリニューアルする

3 章 総合的な学習の時間の指導計画作成の工夫

1 節 はじめに

2 節 全体計画および年間指導計画の作成のポイント

3 節 指導計画作成の実際

4 章 総合的な学習の時間における学習の成立

1 節 学習の質を高める教師の指導力

2 節 体験活動から学びを創る

3 節 学習を深める評価の工夫改善

5 章 総合を支える校内組織の改善と校内研修の進め方

1 節 小学校における校内組織の改善と校内研修の進め方

2 節 中学校における校内組織の改善と校内研修の進め方

◆テキストの読み方

テキストには小学校の事例の紹介も多く、中等教育に該当する記述ばかりではありません。しかし、校種の別にこだわらず、「総合的な学習」に関する本質を理解するように努めてください。

◆履修上の注意

理念的に理解するだけでなく、常に具体的な教育実践をイメージするように心がけてください。

◆関連科目

学校カリキュラム論

◆レポート作成上の注意点

「総合的な学習」については、学習指導要領に「総合的な学習の時間」が位置づけられる以前から歴史的に多くの教育実践の取り組みがあります。したがって、下記の参考文献以外にも関連する文献についてなるべく多く参照してレポートを作成するようにしてください。

い。例えば、「総合的な学習」の考え方については、『総合学習の理論』（高浦勝義編著、黎明書房）、『総合学習の理論・実践・評価』（高浦勝義著、黎明書房）などが挙げられます。

◆参考文献

文部科学省『中学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）』

文部科学省『高等学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）』

◆成績評価方法

レポートの合格を前提として科目修得試験によって評価する。